静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第155集

瀬名川遺跡 II

平成13～16年度（都）北街道線緊急地方道路整備事業（街路Ｂ）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００４

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第155集

瀬名川遺跡Ⅱ

平成13～16年度（都）北街道線緊急地方道路整備事業（街路Ｂ）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

２００４

財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所

1．瀬名川遺跡調査区周辺写真①（南東から）

2．瀬名川遺跡調査区周辺写真②（南西から）

序

今回報告する瀬名川遺跡は、北街道関連事業に伴い、平成13年度から平成15年度まで現地調査を行い、平成16年度は資料整理と報告書刊行を実施して来た。この遺跡は、静清平野の北東部に位置し、付近の地質は長尾川の河川堆積物に由来する砂礫・粘土層を基調としている。また、当該地域が「瀬名自噴帯」と呼ばれることから理解できるように、腐食しやすい木製の遺物が良好な状態で出土することがかねてから知られている。

当研究所は、平成９・10年度に中吉田瀬名線関連事業で当該遺跡の調査を実施した。この調査で弥生時代中期から後期の集落域・水田域を確認し農具などの木製品や壷・甕などの土器、加えて銅釧や全国的にも出土例が少ない骨製の簪（かんざし）が出土した。また、鎌倉時代の掘立柱建物跡や、かわらけ・山茶椀・輸入陶磁器、銅銭、漆器などの当時の生活を彷彿させる遺構・遺物が検出され、中世東海道の「瀬名川宿」の姿を想像させた。かくのごとき前回の調査成果は、当該地域の深遠たる歴史を叙述し、かつ地域に根付いた歴史的意識の覚醒に結びつくことが出来たものと確信している。

今回の平成13年度から平成16年度までの一連の調査の結果、弥生時代中期から古墳時代前期の集落域・水田域の一端を明らかにすることができた。特に、中期中葉の土器が多く散見されたことにより、かねてより判然としなかった該期の集落域の特定へ一歩前進したのである。また、前回の調査に増して出土した農具・建築材に代表される木製品の数々は、長尾川流域でも肥沃で作物の豊穣が期待されたこの瀬名川地区への人々の安住を物語るものである。さらに多くの木材加工用の石斧や動物遺体の出土は水田経営のみならず、各生業とのバランスがとれた当時の人々の生活実態を理解することが出来る。今回の調査では奈良時代以降の水田域もあわせて確認した。これらの水田は、律令期に施行された土地政策である条里制に伴うものと推定される。これは弥生時代以降脈々と行われた水田耕作が人々の生活基盤として確立していった様子を窺うことができるのである。

当該地域は、昭和前半期までは水田風景が広がっていたが、後半期になり北街道沿いに都市化が進み今や静岡・清水市街地との中間的な位置にあることから、自治・流通政策においても極めて重要な地域であると聞く。これまでの遺跡の調査によって、この瀬名川の地が弥生時代において水田が開かれて人々の安住の地となり、鎌倉時代から室町時代には中世東海道筋に位置することになった結果、この地が農業のみならず政治・情報・流通が通う特別な地域として変化したことがわかっている。当遺跡の調査を行った現地は、今後当該地域のみならず政令都市静岡の動脈道路として整備されつつある。地域の活性化に繋がるこの道路の開通は未来の静岡へと続く繁栄の証であるが、その源は、この瀬名川地域に根ざした弥生時代から現在に至るまでこの地域に住まいする人々の、弛まぬ農地開発と過去の事績を顕彰していく郷土に対する想いにあると言えるのである。

最後に、現地調査と資料整理に並々ならぬ御援助、御協力を頂いた静岡県教育委員会、静岡県静岡土木事務所、静岡市教育委員会をはじめとする関係諸機関、また現地調査に御理解頂いた瀬名川地域住民の皆様に感謝申し上げたい。また高温多湿の最中の現地調査や、夥しい量の遺物の整理作業に参加した作業員の労苦をねぎらいたい。

平成16年12月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　斎　藤　　忠

例　　言

1．本書は、静岡県静岡市南瀬名町から瀬名川１丁目にかけて所在する瀬名川遺跡の発掘調査報告書である。

2．調査は北街道バイパス関連事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として静岡県静岡土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会文化課の指導のもとに、財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成13年７月～平成15年１月、平成15年５月～７月、10月に実施した。基礎資料整理は平成13年７月～平成15年１月、５月～７月、10月、報告書作成のための資料整理は平成15年２月～４月、８月～９月、11月～平成16年12月まで実施した。

3．調査体制は次の通りである。

	平成13年度	平成14年度	平成15年度	平成16年度
所長	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠	斎藤　忠
副所長	山下　晃	飯田　英夫	飯田　英夫	飯田　英夫
総務部				
常務理事兼部長	粂田　徳幸	粂田　徳幸	粂田　徳幸	平松　公夫
次長兼総務課長	—	—	鎌田　英巳	鎌田　英巳
総務課長	本杉　昭一	本杉　昭一	—	—
会計係長	大橋　薫	大橋　薫	野島　尚紀	野島　尚紀
調査研究部				
部長	佐藤　達雄	山本　昇平	山本　昇平	山本　昇平
次長兼資料課長	栗野　克己	栗野　克己	栗野　克己	栗野　克己
次長兼調査研究二課長	—	佐野五十三	佐野五十三	佐野五十三
調査研究三課長	飯塚　晴夫	—	—	—
調査研究員	青木　修 田中　淳	三井　文洋＊ 勝又　直人	三井　文洋＊ 勝又　直人	勝又　直人

＊～平成15年１月　＊５～７・10・11月

4．現地での基準点測量、景観写真撮影、写真測量は㈱イビソクに委託した。資料整理における石器の実測の一部・トレース、遺構のトレースの一部は㈱フジヤマに委託した。

5．木製品・金属製品の保存処理は当研究所保存処理室（室長　西尾太加二）が実施した。

6．獣骨の鑑定は独立行政法人奈良文化財研究所埋蔵文化財センター遺物調査技術研究室長の松井章氏に、石器の石材鑑定は静岡大学名誉教授伊藤通玄氏に依頼した。

7．本書の遺物写真撮影は当研究所写真室担当者が実施した。

8．発掘調査資料は全て静岡県教育委員会が保管している。

9．本書の執筆・編集は第５章第３節の木製品についての記述は中川律子（相良町教育委員会：静岡県教育委員会派遣）が、第５章第２節・第６章第３節の石器についての記述、及び石器写真図版については新家和彦（当研究所技術作業員）が、それ以外については勝又直人（当研究所調査研究員）が担当した。

10．本書の編集は財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所が行った。

凡　　例

本書の記述は以下の基準に従い、統一をはかった。

1．本書で使用した方位はすべて国土座標（平面直角座標・系）の方位である。

2．本書で使用した遺構・遺物の表記は次の通りである。

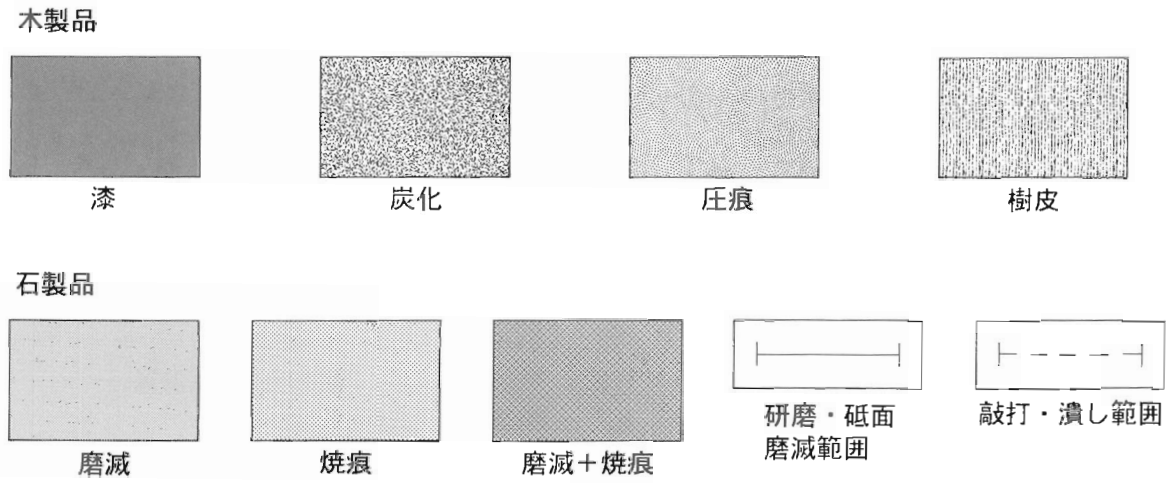
遺構

SA	杭列	SB	竪穴住居跡	SD	溝状遺構	SF	土坑
SH	建物跡	SK	畦畔	SP	柱穴	SR	自然流路
ST	水田	SX	不明遺構				

遺物

P　土器　　S　石製品　　M　金属製品　　W　木製品

3．木製品・石器実測図中のスクリーントーンは次の通りである。



4．土器・土層の色調の記述は農林水産技術会議事務局監修『新版標準土色帳』を使用した。

5．出土土器一覧表中の計測値における（　）内の数値は復原実測による推定値である。

目　　次

序
例言
凡例
目次
第１章　調査に至る経緯 …… 1
第２章　遺跡周辺の環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2
第３章　調査の概要 …… 8
　第１節　基本土層 …… 8
　第２節　調査の方法 …… 8
　第３節　調査の経過 …… 12
　第４節　資料整理の方法 …… 13
第４章　検出遺構 …… 16
　第１節　１区 …… 16
　第２節　２区 …… 36
　第３節　３区 …… 50
　第４節　４区・５－１区・５－２区・６区 … 64
第５章　出土遺物 …… 71
　第１節　土器 …… 71
　第２節　石器 …… 125
　第３節　木製品 …… 162
　第４節　金属製品・その他 …… 180
第６章　まとめ …… 183
　第１節　検出遺構 …… 183
　第２節　弥生時代中期の土器 …… 185
　第３節　弥生時代の石器 …… 188
　第４節　弥生時代の金属器 …… 191

挿図目次

第１図　遺跡位置図 …… 3
第２図　周辺遺跡分布図 …… 4
第３図　基本土層図 …… 7
第４図　試掘坑位置図 …… 9
第５図　調査区・グリット設定図 …… 10
第６図　瀬名遺跡・瀬名川遺跡調査区位置図 … 11
第７図　１区１・２面全体図 …… 15
第８図　１区２面SK103土層断面図 …… 17
第９図　１区３・４面全体図 …… 19
第10図　１区３面SD105土層断面図 …… 20
第11図　１区４面SX106土層断面図 …… 20
第12図　１区５面上層SF107遺構図 …… 20
第13図　１区５・６・７面全体図 …… 21
第14図　１区５面上層遺構図 …… 22
第15図　１区５面遺構図① …… 23
第16図　１区５面遺構図② …… 24
第17図　１区５面建物跡① …… 25
第18図　１区５面建物跡② …… 27
第19図　１区５面SD121・152遺構図 …… 28
第20図　１区５面SD122遺構図 …… 29
第21図　１区５面SD124・127遺構図 …… 30
第22図　１区５面土坑図 …… 31
第23図　１区５面杭位置図 …… 33
第24図　１区６面遺物出土状況図 …… 33
第25図　１区７面SD162・163遺構図 …… 34
第26図　１区７面SX165・166遺構図 …… 35
第27図　２区１面SK201土層断面図 …… 36
第28図　２区１面SR201土層断面図 …… 36
第29図　２区１・２面全体図 …… 37
第30図　２区３・４・５面全体図 …… 39
第31図　２区３面SK212・213遺構図 …… 41
第32図　２区３面南壁土層断面図 …… 42
第33図　２区４面遺構図① …… 43
第34図　２区４面遺構図② …… 45
第35図　２区４面SX201・202遺構図 …… 46
第36図　２区４面遺構図③ …… 47
第37図　２区５面遺物出土状況図 …… 48
第38図　３区全体図 …… 49
第39図　３区２面SK305・306遺構図 …… 51
第40図　３区２面SK316・305遺構図 …… 52
第41図　３区３面全体図 …… 53
第42図　３区３面SD301遺構図 …… 54
第43図　３区３面SD303・304遺構図 …… 55
第44図　３区３面SR301遺構図 …… 56
第45図　３区３面SP301～307遺構図 …… 57
第46図　３区３面下層遺構・遺物出土状況図 … 58
第47図　３区３～４面包含層遺物出土状況図 … 59
第48図　３区４面全体図 …… 61
第49図　３区４面SD305・307遺構図 …… 62
第50図　５－１区全体図 …… 63
第51図　５－１区遺構図 …… 65
第52図　５－２区１・２面全体図 …… 67
第53図　５－２区３・４・５面全体図 …… 69
第54図　５－２区５面遺構図 …… 70
第55図　１区出土土器① …… 72
第56図　１区出土土器② …… 73
第57図　１区出土土器③ …… 74
第58図　１区出土土器④ …… 76

第 59 図　１区出土土器⑤ …… 77
第 60 図　１区出土土器⑥ …… 79
第 61 図　２区出土土器① …… 81
第 62 図　２区出土土器② …… 82
第 63 図　２区出土土器③ …… 83
第 64 図　２区出土土器④ …… 84
第 65 図　２区出土土器⑤ …… 85
第 66 図　２区出土土器⑥ …… 86
第 67 図　２区出土土器⑦ …… 88
第 68 図　２区出土土器⑧ …… 89
第 69 図　２区出土土器⑨ …… 90
第 70 図　２区出土土器⑩ …… 91
第 71 図　２区出土土器⑪ …… 92
第 72 図　２区出土土器⑫ …… 93
第 73 図　２区出土土器⑬ …… 94
第 74 図　３区出土土器① …… 96
第 75 図　３区出土土器② …… 97
第 76 図　３区出土土器③ …… 98
第 77 図　３区出土土器④ …… 100
第 78 図　３区出土土器⑤ …… 101
第 79 図　３区出土土器⑥ …… 102
第 80 図　３区出土土器⑦ …… 103
第 81 図　３区出土土器⑧ …… 104
第 82 図　３区出土土器⑨ …… 105
第 83 図　３区出土土器⑩ …… 107
第 84 図　３区出土土器⑪ …… 108
第 85 図　３区出土土器⑫ …… 109
第 86 図　３区出土土器⑬ …… 111
第 87 図　３区出土土器⑭ …… 112
第 88 図　３区出土土器⑮ …… 114
第 89 図　３区出土土器⑯ …… 115
第 90 図　５－１区出土土器① …… 117
第 91 図　５－１区出土土器② …… 118
第 92 図　５－１区出土土器③ …… 119
第 93 図　５－１区出土土器④ …… 120
第 94 図　５－１区出土土器⑤ …… 121
第 95 図　５－２区出土土器① …… 123
第 96 図　５－２区出土土器② …… 124
第 97 図　主要石器石材比率 …… 125
第 98 図　片刃石斧計測値分布図① …… 126
第 99 図　片刃石斧計測値分布図② …… 127
第100図　敲打石重量計測図 …… 128
第101図　打製石斧・打製刃器 …… 132
第102図　両刃石斧(転用) …… 133
第103図　両刃石斧(未製品) …… 134
第104図　片刃石斧① …… 135
第105図　片刃石斧② …… 136
第106図　片刃石斧③・片刃石斧未製品① …… 137
第107図　片刃石斧未製品② …… 138
第108図　片刃石斧未製品③ …… 139
第109図　片刃石斧未製品④・磨製石鏃 …… 140
第110図　敲打石① …… 141
第111図　敲打石② …… 142
第112図　敲打石③ …… 143
第113図　敲打石④ …… 144
第114図　敲打石⑤ …… 145
第115図　敲打石⑥ …… 146
第116図　敲打石⑦ …… 147
第117図　敲打石⑧ …… 148
第118図　敲打石⑨ …… 149
第119図　磨石 …… 150
第120図　石皿・台石① …… 151
第121図　台石② …… 152
第122図　砥石① …… 153
第123図　砥石② …… 154
第124図　砥石③ …… 155
第125図　砥石④ …… 156
第126図　砥石⑤ …… 157
第127図　砥石⑥ …… 158
第128図　砥石⑦ …… 159
第129図　砥石⑧ …… 160
第130図　石錘・その他の石器 …… 161
第131図　木製品① …… 163
第132図　木製品② …… 165
第133図　木製品③ …… 167
第134図　木製品④ …… 169
第135図　木製品⑤ …… 171
第136図　木製品⑥ …… 173
第137図　木製品⑦ …… 175
第138図　木製品⑧ …… 177
第139図　木製品⑨ …… 179
第140図　金属製品・その他 …… 181
第141図　獣　　骨 …… 182
第142図　表層条理地割・検出遺構関係図 …… 184
第143図　駿河・伊豆・相模の磨消線文甕 …… 187
第144図　有東・川合・瀬名川遺跡の石器組成188
第145図　器種別出土分布図 …… 189
第146図　銅鏃関連図 …… 192

挿表目次

第１表　周辺遺跡一覧表 …… 5
第２表　調査工程表 …… 14
第３表　１区２面水田一覧表 …… 17
第４表　調査区別出土石器一覧表 …… 125
第５表　片刃石斧未製品分類別点数表 …… 128
第６表　敲打石分類別点数表 …… 128
第７表　出土獣骨一覧表 …… 182
第８表　出土土器一覧表 …… 194
第９表　出土石器一覧表 …… 217
第10表　出土木製品一覧表 …… 223

写真図版目次

巻頭カラー図版
１．瀬名川遺跡調査区周辺写真①
２．瀬名川遺跡調査区周辺写真②
図版１
１．１区１面全景
２．１区１面SK101検出状況（南東から）
３．１区１面SK102検出状況（南東から）
図版２
１．１区２面全景
２．１区SK103・104検出状況（南から）
３．１区SK103検出状況（南西から）
図版３
１．１区２面全景（南西から）
２．１区２面（北東から）
３．１区３面SD105完掘状況（南西から）
４．１区４面SX106完掘状況（西から）
図版４
１．１区５面上層SF107検出状況（南から）
２．１区５面上層SF107完掘状況（南から）
３．１区５面上層SP114検出状況（東から）
４．１区５面上層SF108完掘状況（北西から）
５．１区５面上層SB110完掘状況（南東から）
図版５
１．１区５面全景
２．１区５面SP群検出状況（東から）
図版６
１．１区５面SD121・122完掘状況（南東から）
２．１区５面SD152炭化物検出状況（南東から）
３．１区５面SD122遺物出土状況（南東から）
図版７
１．１区５面SD124・127完掘状況（南東から）
２．１区５面SD124遺物出土状況（南東から）
図版８
１区５面柱穴（SP）礎板検出状況
１．SP129（北東から）
２．SP132（SH101.北から）
３．SP137（北東から）
４．SP138（SH101.西から）
５．SP140（北東から）
６．SP142（東から）
７．SP144（西から）　８．SP150（北東から）
図版９
１．１区６面土器43出土状況（東から）
２．１区６面SX161完掘状況（北から）
３．１区７面全景（北東から）
図版10
１．２区１面SK201検出状況（南西から）
２．２区１面SK201検出状況（北東から）
３．２区１面SK202検出状況（北東から）
４．２区１面SR201検出状況（南東から）
５．２区２面全景（北東から）
図版11
１．２区３面西半部検出状況（北東から）
２．２区３面SR202管玉出土状況（南東から）
３．２区３面SK212検出状況（北西から）
４．２区３面SK213検出状況（北西から）
５．２区３面東半部SK検出状況（南西から）
６．２区３面SK217検出状況（北東から）
図版12
１．２区４面SH201礎板検出状況（南東から）
２．２区４面SD201遺物出土状況（南西から）
３．２区４面SK220検出状況（北から）
図版13
１．２区４面SA201検出状況（南西から）
２．２区４面SA201解体状況（南西から）
図版14
１．２区４面SA201・微高地検出状況①（北東から）
２．２区４面SX201検出状況（南西から）
３．２区４面土器80出土状況（南から）
４．２区４面木製品20出土状況（北西から）
５．２区４面木製品26出土状況（西から）
図版15
１．２区４面SA201・微高地検出状況②（北から）
２．２区４面SK219検出状況（南西から）

３．２区４面SD202完掘状況(北東から)
図版16
２区４・５面遺物出土状況
１．土器40(南から)
２．土器41(南西から)
３．土器77(西から)
４．鹿肩甲骨(北から)
５．木製品34(南から)
６．木製品79(南東から)
７．土器101(南東から)
８．土器97(南から)
図版17
１．２区５面土器103出土状況(南から)
２．２区５面犬下顎骨出土状況(南から)
３．２区調査終了状況(北東から)
図版18
１．３区１面全景(南西から)
２．３区１面SK304検出状況(北東から)
３．３区１面木製品３出土状況(北西から)
図版19
１．３区２面全景
２．３区２面SK検出状況(北東から)
図版20
１．３区２面SK305・306検出状況
２．３区２面SK306杭列検出状況(西から)
３．３区２面SK306解体状況(北東から)
図版21
１．３区２面SK305検出状況(北東から)
２．３区２面SK305解体状況①(西から)
３．３区２面SK305解体状況②(北西から)
図版22
１．３区３面SP群検出状況(北から)
２．３区３面SP305礎板検出状況(南西から)
３．３区３面SP301半截状況(北から)
４．３区３面SP301礎板検出状況(東から)
５．３区３面SR301遺物出土状況(南西から)
６．３区３面SD301遺物出土状況(北西から)
７．３区３面SD304検出状況(北東から)
８．３区４面SD307遺物出土状況(北東から)
図版23
１．３区11層土器54出土状況(南東から)
２．３区９～10層土器38出土状況(西から)
３．３区12層土器102出土状況(南から)
４．３区12層土器95出土状況(北から)
５．３区３面石器13出土状況(南東から)
６．３区４面石器20出土状況(南西から)
７．３区４面木製品28出土状況(西から)
８．３区４面木製品31出土状況(北西から)
図版24
１．５－１区SB501検出状況(東から)
２．５－１区SP501・502
礎板検出状況(南東から)
３．５－１区SP503礎板検出状況(南東から)
４．５－１区SD502土層堆積状況(東から)
図版25
１．５－１区SD502杭列検出状況①(西から)
２．５－１区SD502杭列検出状況②(南西から)
３．５－１区SD502土器63出土状況(南東から)
図版26
１．５－２区１面全景(北西から)
２．５－２区３面全景(北西から)
３．５－２区土器16出土状況(北西から)
図版27
１．４区作業風景(西から)
２．４区作業風景(東から)
３．瀬名川遺跡調査終了後風景(北東から)
図版28
１区SD121・122・124・19層出土土器
図版29
１区SX161・23層出土土器
図版30
１区20・21・23・24層出土土器
図版31
２区15層・17～19層出土土器
図版32
２区17～19層・SD203出土土器
図版33
２区SD201・護岸杭列(SA201)出土土器
図版32
２区土手状遺構ａ・ｄ層出土土器
図版35
２区SR204・微高地出土土器
図版36
２区中期層・排水溝出土土器
図版37
２区22層上面出土土器
図版38
２区排水溝・20層・中期層出土土器
図版39
３区SK306・７～10層出土土器

図版40
　3区9～10層・SD301出土土器
図版41
　3区SD304・11層出土土器
図版42
　3区12層出土土器①
図版43
　3区12層出土土器②
図版44
　3区12層出土土器③
図版45
　3区遺物集中箇所1・2出土土器
図版46
　3区遺物集中箇所1・2・SD307直上層出土土器
図版47
　3区13～14層・SD305・306出土土器
図版48
　3区SD307出土土器①
図版49
　3区SD307出土土器②
図版50
　3区SD307出土土器③
図版51
　5－1区砂利層・15～17層出土土器
図版52
　5－1区17層上層・下層出土土器
図版53
　5－1区SD501・502・SP501出土土器
図版54
　5－2区出土土器
図版55
　打製石斧・打製刃器
図版56
　両刃石斧・磨製石鏃
図版57
　片刃石斧
図版58
　片刃石斧(未製品①)
図版59
　片刃石斧(未製品②)
図版60
　敲打石①
図版61
　敲打石②
図版62
　敲打石③
図版63
　敲打石④
図版64
　磨石
図版65
　石皿・台石・置砥石
図版66
　持ち砥石
図版67
　軽石製砥石・石錘
図版68
　剥片・石核
図版69
　律令期以降木製品
図版70
　弥生時代～古墳時代木製品　農具①
図版71
　弥生時代～古墳時代木製品　農具②
図版72
　弥生時代～古墳時代木製品　容器他
図版73
　弥生時代～古墳時代木製品　ネズミ返し・梯子
図版74
　弥生時代～古墳時代木製品　扉①
図版75
　弥生時代～古墳時代木製品　扉②
図版76
　弥生時代～古墳時代木製品　用途不明①
図版77
　弥生時代～古墳時代木製品　用途不明②
図版78
　弥生時代～古墳時代木製品　用途不明③他
図版79
　獣骨・金属製品

第１章　調査に至る経緯

本書で報告する瀬名川遺跡は北街道バイパス建設事業に伴い、発掘調査を実施した遺跡である。この瀬名川遺跡が位置する場所は静岡市街地から東北、清水市街地から西北の方向、長尾川左岸から巴川合流点一帯の区域を占める。この区域は周知の通り住宅地・商業地区として発展しており、静岡・清水の中間地点として経済的にも政治的にも重要な地位を占めている。

この静岡市南瀬名町・瀬名川区域には「北街道」とも呼ばれる県道67号静岡清水線が東西方向に貫通している。「北街道」とは第２章でも触れるが、清水秋吉町、秋葉神社前から延びる古くから開けた道を指している。清水の市街地と静岡の市街地を直通するこの67号線はJR東海道線清水駅前の清水江尻台町から清水高橋方向へ西北へ進み、清水天王町付近で「北街道」と合流する。この合流点より緩やかに南西方向へカーブを描いて清水大内、清水鳥坂へと続く。瀬名川付近から直線的に川合・古庄・沓谷と続き、駿府城外堀、北東隅にあたる水落町交差点へ向かう。交差点手前からは商店街へと姿が変わり、JR東海道線静岡駅前の江川町交差点に至る。このように静岡県中部の経済的な動脈と言える「北街道」は日本国の経済発展とともにその交通量を増してきた。特に昭和30年以降、周囲が水田地帯だった当地域の景観と土地利用は住宅地・商業地へと変化した。平成になり静清バイパスが全線開通し瀬名川地区の北側には静清バイパス瀬名IC、東には鳥坂ICが設けられ、さらに瀬名ICから中吉田瀬名線が部分開通し、北街道線に流入する交通量も極めて増加したことにより、この路線の交通渋滞も慢性化する状況に至ったのである。かかる事態において地域住民を中心として渋滞解消を求める声が高まり、静岡県静岡土木事務所によりかねてから計画されていた４車線の北街道線の整備が実行されたのである。

この北街道線は川合地区の長尾川右岸、巴川を渡り、沓谷の蓮永寺門前の沓谷２丁目までの間は既に事業が終了・供用開始していた。しかし瀬名川１丁目から長尾川にかけての一帯は周知の埋蔵文化財包蔵地である瀬名川遺跡に隣接しており、路線予定地がその西端にかかることになり、そのため路線内の買収済みの箇所において、試掘調査を実施して路線予定地に遺跡の有無の確認をする必要性が生じた。平成13年２月から３月にかけて静岡市教育委員会が静岡県教育委員会文化課担当者の協力を得て試掘調査を実施した。試掘地点は３箇所（No.55、No.59、No.65）設置して、そのいずれの地点からも弥生時代の遺構・遺物を確認し、路線予定地の地下に遺跡が存在することが確認された。一方で瀬名川付近を流れる継川の改修工事に伴う立会において、従来知られるところの瀬名川遺跡の範囲よりも離れた箇所において土器の出土が市教育委員会により認められていた。以上の経緯から平成13年６月27日付静教教社第230号で、市教委より埋蔵文化財包蔵地範囲変更について協議がなされ、同年７月５日付教文第245号で県教委により、瀬名川遺跡がこれまでの倍の広さを有する埋蔵文化財包蔵地として新たに登録されるに至ったのである。

この路線用地内における遺跡の存在を明らかにした試掘調査以降、県教育委員会文化課と県静岡土木事務所は早急に現地の発掘調査へと調整を開始し、平成13年４月27日・５月７日・５月29日に県静岡土木事務所都市計画課・県教育委員会文化課・財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所の三者で協議を行った。６月８日には北街道バイパス促進期成同盟役員会において埋蔵文化財の調査について説明を行っている。また地元住民に対する事前説明会を６月19日に静岡市南瀬名会館において開催した。さらに７月２日付で瀬名川遺跡の発掘調査に伴う御協力をお願いする旨の文書を町内会を通じて回覧板を配布し、地域住民に埋蔵文化財調査の周知をはかった。

第２章　遺跡周辺の環境

第１節　地理的環境

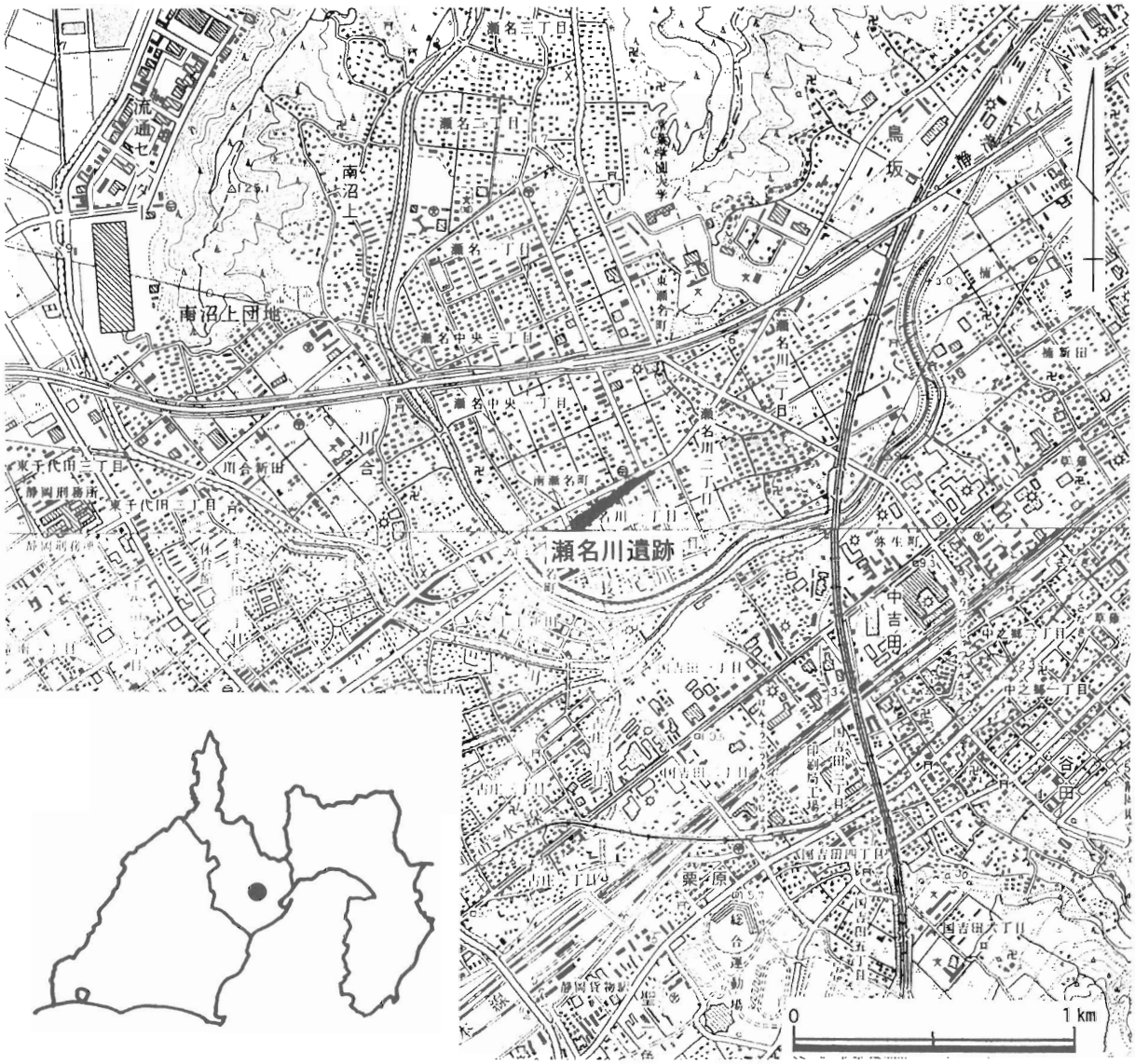
瀬名川遺跡は静岡県静岡市南瀬名町・瀬名川１丁目・２丁目に所在する。この遺跡が位置する地域一帯は静清平野とも呼ばれる清水・静岡両市街地が展開する平野でも北東部に位置する。そもそもこの静清平野を構成するのは主に安倍川により形成された扇状地・氾濫源であるが、その安倍川は静岡県と山梨県との県境の八紘嶺や安倍峠付近に源を発し、温泉で著名な梅ヶ島や平野・郷島、そして牛妻を抜け、田町付近において支流である藁科川と合流し、やがてその下流域は直線的となり駿河湾へと注ぐ。この下流から河口部にかけての流路は江戸幕府による治水政策の成功に起因するもので、各藩に命じて築造された土手が現在も随所に残り、人間と水との壮絶な格闘の痕跡を窺い知ることができる。

一方、安倍峠・地蔵峠・青笹山・真富士山・竜爪山へと延びる山地が存在し、これらは静岡市北半部を地形的に構成する山地である。そのうち竜爪山は俗称で「薬師ヶ岳」及び「文殊ヶ岳」が正式な名称である。この薬師ヶ岳の東麓には糸魚川―静岡構造線（フォッサマグナ）が貫通している。この竜爪山に源を発するのが「長尾川」と呼ばれる土砂運搬力の激しい東海型河川が流れ、また安倍川とは賤機山丘陵を挟んで東側に広がる麻機沼からは「巴川」が流れ、静岡市瀬名川・中吉田付近でこれら長尾川・巴川が集束し、現在では清水鳥坂付近で合流している。その巴川の一支流である長尾川は流長8.87km、流域面積13.4kmをはかる。「暴れ川」の異名を持つ長尾川は台風・集中豪雨により度々堤防が決壊している。昭和33（1958）年７月の台風11号、昭和49（1974）年７月の集中豪雨には甚大な被害がもたらされ、特に後者は「七夕豪雨」と呼ばれ、農作物・農業施設等が一切流出、道路が寸断されるなど、地域社会に深刻な痛手を残している。この長尾川は、沼上丘陵地と瀬名丘陵地の間の狭長な区域、旧瀬名村北端部（現在の瀬名６丁目）付近から扇状地の形成を開始し、現在の瀬名川１～２丁目南付近、すなわち巴川と長尾川の旧乱流地帯まで形成され、自然堤防や川合・瀬名の各後背低地が広がっている。このような成因から地下水が豊富で、一帯は「瀬名自噴帯」と呼ばれ、湧水が認められる土地である。また現在の瀬名川の集落から平山方面（竜爪山）に延びる竜爪街道はこの自然堤防上に位置しており、古来より南北の流通の道として機能している。

瀬名川遺跡の範囲はこの長尾川扇状地上に位置し、東は竜爪街道付近、西～南にかけては長尾川の一支流である継川付近まで広がる。戦前までは竜爪街道沿いに町並みが並ぶのみで、遺跡一帯は水田として利用されていたが、昭和30年代から宅地化が進み、現在は殆ど住宅地として利用されている。

第２節　歴史的環境

瀬名川遺跡周辺部はかねてから弥生時代以降の遺物の出土が多く確認されている地域である。前節で触れたように当遺跡が位置している平地部一帯は本来的に長尾川・巴川水系が運搬した粘土・砂礫を基調とする洪積地であり、弥生時代中期になって初めてこの低湿地を水田として利用・活用できる技術を有した人々が出現し現在に至った訳である。従って狩猟・採集経済に専従していた旧石器時代においてはこの地域における生活の痕跡を窺うのは極めて困難な作業である。縄文時代に至ると僅かに低湿地部においても縄文時代の遺物が散見されるようになる。埋文研による静清バイパスの調査でも数例であるが縄文土器の出土が報告されている。しかし、これらの資料は決して縄文時代における低湿地部での定住集落の存在を示すものではなかった。一方この低湿地部を離れ、丘陵部もしくはその縁辺部での縄文



第１図　遺跡位置図

時代の遺物の出土が知られるのは、南沼上丘陵西縁部に位置する長崎鼻遺跡（10）や賤機山丘陵東縁部に位置する時ヶ谷遺跡(3)である。両遺跡とも麻機一帯に存在した沼沢地に面していた。また瀬名川遺跡南に臨む有度丘陵には縄文時代の遺跡が多く点在しているのは周知の如くである。生活基盤の違いが遺跡の立地に如実に現れていると言える。

瀬名川遺跡付近において人々の生活の痕跡が多く出現するようになるのは、弥生時代に入ってからである。弥生時代でも古い時期の資料は瀬名遺跡（13）６区23ａ層でⅡ－３様式の資料が出土している。静清バイパス建設の際に調査された池ヶ谷遺跡(6)、上土遺跡(9)、川合遺跡（12）では集落跡・水田跡等がまた瀬名遺跡では方形周溝墓群も検出されている。これらの遺跡では言うまでもなく付近の土壌自体に水分を多く含み、地質が粘土質であることから農耕具・木工具等の木質遺物が遺存する好条件が揃っており、大量の木製品が出土している。また石器についても瀬名遺跡において弥生時代中期の打製石斧が多数出土し、畑作の可能性も推定され、また川合遺跡でも後期には石器製作を行っており、製作技法について精緻な分析が報告書で開陳されている。今回報告する瀬名川遺跡(1)でも当研究所が県道中吉田瀬名線関連で平成９・10年度に現地調査を実施している。弥生時代中期・後期の水田・集落跡が検出され、既にその成果は報告書で公になっている。

第２図　周辺遺跡分布図

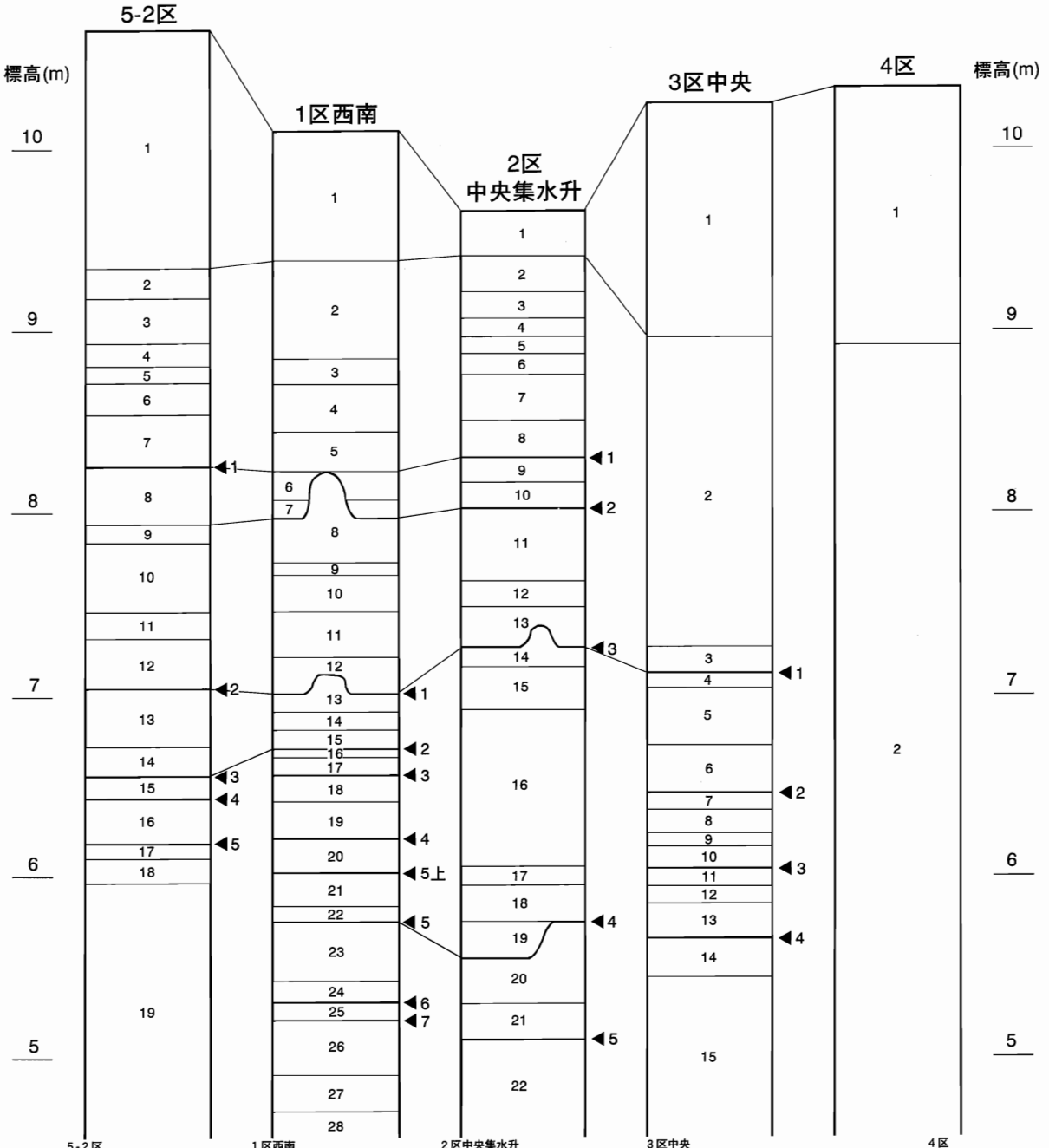
第１表　周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代	遺構・遺物	番号	遺跡名	時代	遺構・遺物
1	瀬名川遺跡	弥生～中世	集落跡、水田跡、弥生土器・木製品・石器	48	南消防署内遺跡	弥生、古墳	水田跡、土器片・田下駄・矢板
2	マルゾッコウ遺跡	古墳	横穴式石室	49	八幡５丁目遺跡	古墳	土師器・板材
3	時ヶ谷遺跡	縄文(早)、弥生	縄文土器・石錘・打製石斧・石鏃	50	女子商校遺跡	弥生(後)	畦畔、弥生土器
4	唐瀬古墳群	古墳(後)	横穴式石室、玉類・須恵器	51	有東砦跡	中世	塁段・土塁・曲輪
5	池ヶ谷古墳	古墳(後)	横穴式石室	52	有明遺跡	弥生(後)	弥生土器
6	池ヶ谷遺跡	弥生(後)～近世	水田跡	53	有東遺跡	弥生(中・後)、中世	住居跡・水田跡・方形周溝墓
7	岳美遺跡	平安	水田跡、旧流路	54	鷹ノ道遺跡	弥生(中・後)、古墳	方形周溝墓・水田跡・集落跡
8	城北永ヶ島遺跡	弥生、平安	水田跡	55	登呂遺跡	弥生(後)、古墳	住居跡・水田跡・高床倉庫跡、弥生土器
9	上土遺跡	弥生～近世	水田跡	56	天神森遺跡	古墳	土師器
10	長崎鼻遺跡	縄文(中)	縄文土器	57	水洗遺跡	古墳(前)	土師器・砥石
11	南沼上古墳群	古墳	土師器	58	汐入遺跡	弥生、古墳、中世	住居跡・高床倉庫跡、弥生土器
12	川合遺跡	弥生～近世	住居跡・水田跡・周溝墓・官衙	59	元宮川神明原遺跡	縄文～平安	住居跡・高床倉庫跡、祭祀遺物
13	瀬名遺跡	弥生(中)～近世	水田跡・方形周溝墓	60	大谷横井之坪居館跡	中世	堀
14	東下遺跡	古墳	土師器・須恵器	61	蛭田遺跡	縄文、古墳(前)	縄文土器・土師器
15	下タ村遺跡	古墳	住居跡、土師器・須恵器	62	上ノ山古墳群	古墳(後)	横穴式石室、須恵器・太刀・勾玉
16	瀬名古墳群	古墳	前方後円墳・円墳・木炭槨、太刀	63	上ノ山遺跡	縄文～古墳	高床倉庫跡・周溝墓・住居跡
17	石井館	中世		64	東大谷古墳群	古墳(後)	横穴式石室
18	千代田遺跡	弥生(後)	弥生土器	65	井庄段遺跡	縄文、弥生	住居跡、磨製石斧、縄文土器
19	西千代田遺跡	弥生(後)	弥生土器・矢板等・木製品	66	井庄段古墳群	古墳(後)	横穴式石室、埴輪・須恵器・勾玉
20	静岡高校校地内遺跡	弥生	弥生土器	67	伊庄谷横穴群(南谷)	古墳(後)	丸玉・鉄鏃・須恵器・土師器・轡
21	東草深遺跡	弥生～近世	水田跡、集落	68	伊庄谷横穴群(北谷)	古墳(後)	須恵器・土師器・金環・太刀
22	駿府城跡・駿府城内遺跡	弥生～近世	住居跡・溝・弥生土器、石垣、堰、陶磁器、土師器	69	片山横穴群	古墳(後)	須恵器
23	谷津山古墳群	古墳(前・中・後)	前方後円墳・竪穴式石室・円墳	70	清泉寺窪遺跡	縄文	縄文土器・磨製石斧・石錘
24	仕舞海道坪遺跡	弥生(中)	弥生土器	71	清泉寺窪瓦窯跡	古代	カ窯・平窯、瓦
25	柚木瓦窯跡(本郷坪地点)	平安	平瓦	72	宮川(小段)遺跡	旧石器～古代、近世	土坑・円形周溝墓、ナイフ形石器
26	柚木瓦窯跡(仕舞海道地点)	平安	窯跡２基？平瓦・丸瓦	73	宮川古墳群	古墳(後)	横穴式石室、家形、組合箱形石棺
27	愛宕山城跡	中世	曲輪跡・土塁・堀・塁段	74	片山遺跡	弥生(後)、古墳、近世	溝、弥生土器、石錘・土師器
28	沓谷四丁目遺跡	古墳(前)	古式土師器	75	片山廃寺跡	古代	金堂・講堂・僧房、瓦・須恵器
29	茶臼山古墳	古墳(後)	太刀・玉類・須恵器	76	静岡大学構内古墳群	古墳	横穴式石室、組合箱形石棺
30	吉ノ口坪遺跡	弥生	弥生土器	77	大段Ⅱ遺跡	縄文(中)	縄文土器・石槍・石鏃・石匙
31	道下遺跡	弥生	弥生土器・磨製石斧	78	大段Ⅰ遺跡	旧石器	ブレード
32	栗原遺跡	弥生	弥生土器	79	大段Ⅲ遺跡	縄文	縄文土器・石鏃
33	棚田遺跡	中近世	ピット、溝	80	さそく段古墳	古墳(後)	大刀・須恵器
34	長沼遺跡	弥生(後)～古墳	水田跡	81	石原窪古墳群	古墳(後)	須恵器
35	曲金北遺跡	弥生(中)～古代	水田跡・古代東海道	82	奥大谷遺跡・古墳群	縄文(前)、古墳(末)	縄文土器・黒曜石フレイク、横穴式石室
36	曲金Ａ遺跡	弥生、古墳	弥生土器・土師器	83	堀ノ内山遺跡	弥生	弥生土器・石器
37	曲金Ｂ遺跡	古墳、古代	住居跡・井戸跡、土師器・須恵器	84	小鹿古墳群	古墳(後)	横穴式石室
38	小鹿杉本堀合坪遺跡	平安	井戸跡・水田跡	85	堀ノ内Ｂ遺跡	弥生	弥生土器
39	小鹿蟹田堀合坪遺跡	平安～中世	水田跡	86	堀ノ内Ａ遺跡	縄文(中)	石錘・石斧・縄文土器・石槍
40	三菱工場内遺跡	古墳、古代	土師器・須恵器	87	本覚寺裏遺跡	縄文	縄文土器・打製石斧・石鏃
41	豊田遺跡	弥生、古墳	住居跡、溝、弥生土器・土師器	88	池田山古墳群	古墳	横穴式石室・馬具
42	小黒遺跡	弥生(末)、古墳(初)	住居跡、高床倉庫跡、弥生土器	89	五輪平遺跡	縄文	縄文土器・打製石斧・石匙
43	八幡山城跡	中世	曲輪跡・堀・土塁・塁段・堀切	90	寺ノ久保遺跡	弥生、古墳、中世	住居跡・溝・掘立柱、弥生土器
44	八幡山古墳群	古墳(後)	横穴式石室	91	桃源寺前遺跡	弥生(後)	弥生土器
45	八幡３丁目遺跡	古墳	水田跡	92	谷田古墳群	古墳	横穴式石室、石棺・耳環・須恵器
46	稲川遺跡	古代	土師器・須恵器・灰釉陶器	93	宮ノ後遺跡	縄文	縄文土器
47	ケイセイ遺跡	古代	礎石建物跡、須恵器・土師器	94	大和製罐南遺跡	弥生	弥生土器・土師器

古墳時代には南沼上丘陵上・瀬名丘陵に古墳群（11・16）が展開し、丘陵縁辺、長尾川上流部には東下遺跡（14）、下タ村遺跡（15）で、平野部に至ると川合遺跡で集落遺跡が検出されている。特に川合遺跡で周堤・周溝を有する住居跡が検出されているのは注目される。

奈良時代～平安時代にかけての遺構・遺物が多く確認されたのが、静清バイパス建設に伴って調査された遺跡群で、瀬名川遺跡の北側に位置する瀬名遺跡、長尾川西岸の川合遺跡内の内荒・宮下地区等があげられる。瀬名遺跡１区SR12001からは「五百原」「西奈」と墨書された木簡が出土している。前者は「廬原（いほはら）」すなわち庵原郡、後者は『和名類聚抄』で見られる廬原郡の郷名で、当該地域が「旧駿河國廬原郡西奈郷」であった蓋然性が強い。川合遺跡内荒地区は駿河国安倍郡衙関連の施設と推定された建物群が検出され、隣接する宮下地区共々豊富な土器資料が得られているのは周知の如くである。加えて静清平野では条理型地割が各所に残存しているが、静清バイパス建設に伴う発掘調査の結果、該期に施行された条理水田に由来するということが証明された。瀬名川遺跡から南南西の位置に所在する曲金北遺跡（35）では側溝を備えた道路遺構が調査されている。この遺構は古代の駅路として考えられ、側溝内からは土器や瓦をはじめ「常陸國鹿嶋郡」と記された木簡が出土している。曲金Ｂ遺跡（37）は曲金北遺跡で検出された道路遺構の延長線上にあり、布目瓦が出土していることから、駿河國横太駅家、もしくは有度郡関連施設が存在した可能性が指摘されている。有度丘陵西麓には駿河国分僧寺に比定された片山廃寺（75）が位置し、静岡駅の南に位置するケイセイ遺跡（47）では古代の礎石建物跡が検出されており、特に注目されている。

中世（鎌倉～室町時代）の瀬名川の地には東海道が貫通し、当時はあらゆる情報・物資の流通がなされたことに起因して、古文献の中にその名が多く残るようになる。瀬名川遺跡の平成９・10年の調査で該期の建物跡が検出されているが、現代に遺された古文献によれば、弘長２（1262）年に西大寺僧叡尊が関東下向の際に記した『関東往環記』において「瀬無河宿」とあり、『実暁記』には「瀬無河」と記載されている。このため検出された遺構群が「瀬無河宿」との関連性が想起されている。また当地域にはかねてより梶原景時に係る史蹟がある。正治２（1200）年に失脚、一族と共に西国に向かう途中、国人の入江氏・吉川氏らに討たれているが、その際の戦いの場所が「矢射タム橋」、景時自身が自害した山が遺跡北方に位置する「梶原山」と伝えられている。加えて瀬名には戦国期に竜王丸（今川氏親）の後見役として、遠江今川氏の堀越一秀が瀬名に入封しており、瀬名氏を名乗ることとなる。瀬名氏三代氏俊の弟、関口刑部親永の娘が松平元康（後の徳川家康）に正室（瀬名姫・築山御前）として嫁いでいる。遺跡周辺における該期の遺跡としては駿府城跡（22）が知られ、今川氏館以降の政治の中枢が所在した場所である。慶長年間に駿府城修築の際に長尾川上流部各所に石丁場が随所に設けられ、大量の石垣用の切石が搬出されている。



5-2区

1		表土
2	5GY4/1	暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色粘質ｼﾙﾄ
3	7.5GY4/1	暗緑灰色ｼﾙﾄ
4	5GY5/1	ｵﾘｰﾌﾞ灰色砂質ｼﾙﾄ
5	2.5GY4/1	暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色粘土
6	2.5GY4/1	暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色粘質ｼﾙﾄ
7	2.5GY4/1	暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色砂
8	2.5GY3/1	暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色ｼﾙﾄ
9	2.5GY4/1	暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色粘土
10	10GY4/1	暗緑灰色粘土
11	7.5Y3/2	ｵﾘｰﾌﾞ黒色粘土
12	7.5Y3/2	ｵﾘｰﾌﾞ黒色粘土
13	5BG5/1	青灰色粘土
14	5GY3/1	暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色粘土
15	2.5GY2/1	黒色粘土
16	7.5GY3/1	暗緑灰色粘土
17	2.5GY3/1	暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色粘土
18	2.5GY3/1	暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色ｼﾙﾄ
19		砂利層

1区西南

1		表土
2	7.5YR4/2	灰ｵﾘｰﾌﾞ色ｼﾙﾄ
3	10Y4/1	灰色ｼﾙﾄ
4	5BG4/1	暗青灰色ｼﾙﾄ
5	5BG4.5/1	暗青灰色粘土
6	10G3.5/1	暗緑灰色ｼﾙﾄ
7	5PG4/1	暗青灰色粘土
8	5PG4/1	暗青灰色粘土
9	5B4/1	暗青灰色粘土
10	10BG4.5/1	青灰色粘土
11	10GY5/1	緑灰色粘土
12	10Y3/1	ｵﾘｰﾌﾞ黒色ｼﾙﾄ質粘土
13	5BG4/1	暗青灰色ｼﾙﾄ質粘土
14	5BG4/1	青灰色粘土
15	10GY4.5/1	緑灰色ｼﾙﾄ質粘土
16	10BG3/1	青灰色粘土
17	5B3/1	暗青灰色粘土
18	5BG4/1	暗青灰色粘土
19	5BG3.5/1	暗青灰色粘土
20	5G4/1	暗緑灰色粘土
21	10GY3.5/1	暗緑灰色粘土
22	5G3.5/1	暗緑灰色粘土
23	5G4/1	暗緑灰色粘土
24	5GY2/1	ｵﾘｰﾌﾞ黒色ｼﾙﾄ
25	5GY2/1	ｵﾘｰﾌﾞ黒色ｼﾙﾄ質粘土
26	10GY4/1	暗緑灰色ｼﾙﾄ
27	5PB2/1	青黒色粘土
28	N3/1	暗灰色粘土

2区中央集水升

1		表土
2	5GY3/1	暗緑灰色ｼﾙﾄ
3	10G3/1	暗緑灰色粘土
4	10GY4/1	暗緑灰色ｼﾙﾄ
5	7.5GY4/1	暗緑灰色粘土
6	10Y4/1	灰色ｼﾙﾄ
7	5BG4/1	暗青灰色粘土
8	10G4/1	暗緑灰色粘土
9	10GY3/1	暗緑灰色粘土
10	5GY3/1	暗緑灰色ｼﾙﾄ
11	5BG3/1	暗青灰色粘土
12	5Y4/1	暗緑灰色粘土
13	5G~10G4/1	暗緑灰色ｼﾙﾄ
14	5GY4/1	暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色粘土
15	10GY4/1	灰色粘土
16	10BG3/1	暗青灰色砂層
17	10Y4/1	灰色ｼﾙﾄ
18	5GY4/1	暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色粘土
19	7.5GY4/1	暗緑灰色ｼﾙﾄ質粘土
20	5GY3/1	ｵﾘｰﾌﾞ灰色粘土
21	5GY4/1	暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色ｼﾙﾄ質粘土
22	7.5GY4/1	暗緑灰色砂層

3区中央

1		表土
2		砂利層
3	10Y3/1	ｵﾘｰﾌﾞ黒色ｼﾙﾄ
4	7.5Y3/1	ｵﾘｰﾌﾞ黒色粘土
5	7.5GY5/1	ｵﾘｰﾌﾞ灰色砂・ｼﾙﾄ交互層
6	7.5Y4/1	灰色ｼﾙﾄ質粘土
7	7.5Y4/1	灰色ｼﾙﾄ質粘土
8	7.5Y3/2	ｵﾘｰﾌﾞ黒色粘質ｼﾙﾄ
9	2.5GY3/1	暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色砂質ｼﾙﾄ
10	5GY4/1~7.5GY4/1	暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色~暗緑灰色粘質ｼﾙﾄ
11	2.5GY4/1	暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色粘質ｼﾙﾄ
12	N3/	暗灰色粘土
13	N3/	暗灰色ｼﾙﾄ
14	N3/	暗灰色砂層
15		砂利層

4区

1	表土
2	砂利層

第３図　基本土層図

第３章　調査の概要

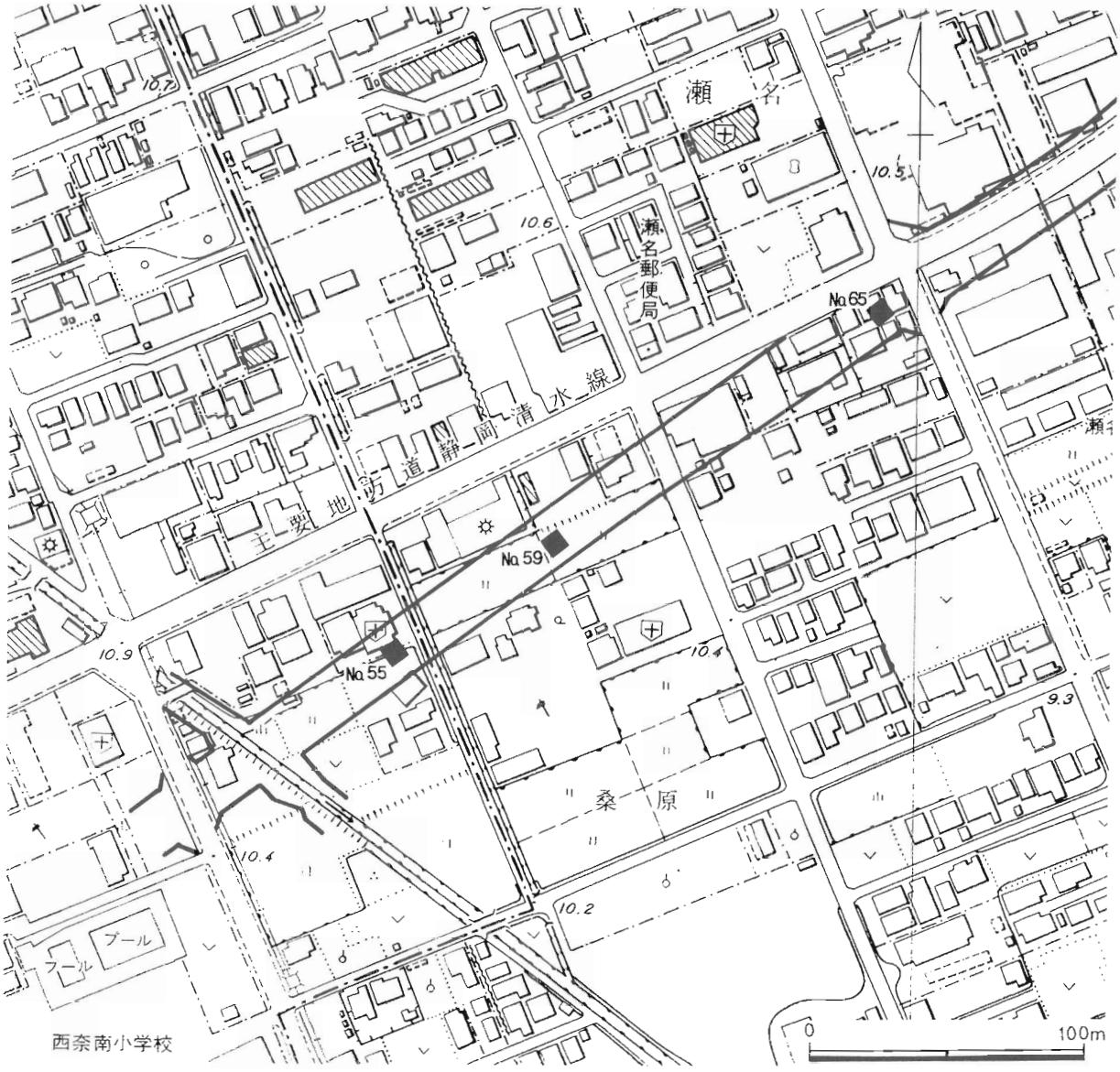
第１節　基本土層

瀬名川遺跡周辺の地質については第２章でも触れたところであるが、粘土・シルト・砂層を基調とした土層堆積を示している。ただし静清バイパスの際とは異なり、立地場所がさらに長尾川下流域にあることにより、氾濫・洪水等の影響を受けやすく、多くの細かい自然流路が当該区域を横断することになり、多様な土層堆積状況を示すこととなった。このことは各調査区毎に共通の基準土層を見いだすことを困難にしており、各調査区の遺構面の相互関係の把握が専ら遺物・標高値に頼らざるを得ない状況であった。よって本書は１～５－２区共通の基準土層ではなく、各区毎の基準土層を第３図に提示し、各区の層位との関連を若干提示するにとどめ、下記の通りその概要を示しておく。

各調査区面の標高値はほぼ10m台である。１層目は昭和30年代以降水田が宅地化されるに伴い、造成された盛土層である。しかし３区～４区については盛土直下から自然流路に起因する礫層が厚く堆積し、特に４区については遺物を多く含んでいた層位を浸食していた。５－２区で検出した１面は８層（暗オリーブ灰色シルト）は１区では未検出だが、おそらく２区１面９層（暗緑灰色粘土）に相当するものと推定される。５－２区９層（暗オリーブ灰色粘土）は１区８層（暗青灰色粘土）、２区11層（暗青灰色粘土）に相当するのだろう。後述するが条理水田とおぼしき層位は、５－２区２面13層（青灰色粘土）、１区１面13層（暗青灰色シルト質粘土）、２区３面14層（暗オリーブ灰色粘土）、３区１面４層（オリーブ黒色粘土）であり概ね標高値は７m付近である。２区については３面条理水田以下は砂礫層が入り、１区で検出した細かな遺構面を検出することは不可能であった。第４章で扱う集落域を検出した１区５面23層（暗緑灰色粘土）は２区４面第20層（オリーブ灰色粘土）に相当するものと考えられる。この５－１区では周溝を持つ建物跡が検出され、１区の建物跡群と合わせて層位的にも検討していく必要があるだろう。また１区では弥生中期の層位が標高5.5mより下位に広がるものの、２区の東半部では後期後半の土器が出土した22層（暗緑灰色砂層）が広がるため、該期に流路化したものと考えられる。

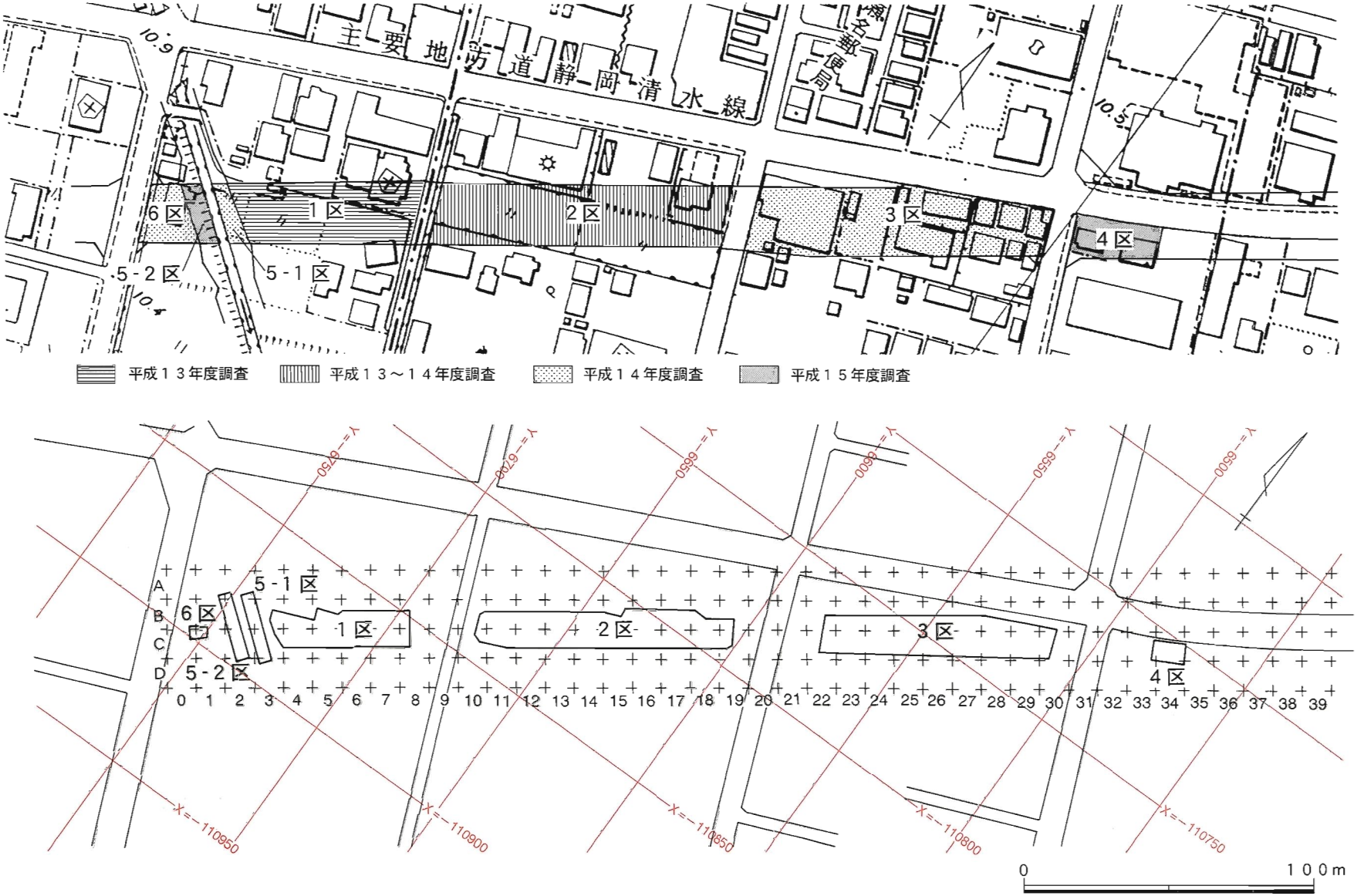
第２節　調査の方法

今回、報告する瀬名川遺跡は１～４区、５－１区、５－２区、６区、以上７つの調査区に分割して、現地調査を実施している。調査対象区域は東西に約350m、南北約21mと極めて狭長で、南北方向に生活道路が縦断し、周囲は住宅地と交通が激しい北街道という環境であった。また前章で説明したように、付近の地質は長尾川に由来する粘土・砂質層が基調をなし、加えて付近が瀬名自噴帯にもあたり極めて激しい地下水の噴出も想像されるなど、現地調査の実施にあたっては最悪の環境であった。よって静岡土木・県教委の指導のもと発掘調査は極めて慎重な掘削作業を行った。地表面標高値は11～10mで、最終掘削標高値が４m台となる予定であった。掘削は基本的にオープンカット工法を採用し、隣接する民地等の制約からシートパイル（鋼矢板）を打設している。事前に静岡土木の地質調査により法面の傾斜角度は１割勾配（45°）とし、掘削計画は静岡土木が設計した。しかし平成13年８月、１区調査中に法面の一部が崩壊するに至り、２区の調査以降は法面傾斜角度を1.5割勾配（約33°）と緩くして掘削作業を行っている。４区・５－１区・５－２区については調査範囲が狭長であり、５区については継川に掛かる橋の橋台部の設置箇所にあたり、調査区の一部が継川にはみ出るため、四辺全てシートパイルを打設し、腹起し・切梁・火打ちを設け崩落を防止している。表土等を掘削するための重機（ユンボ）はBF0.7

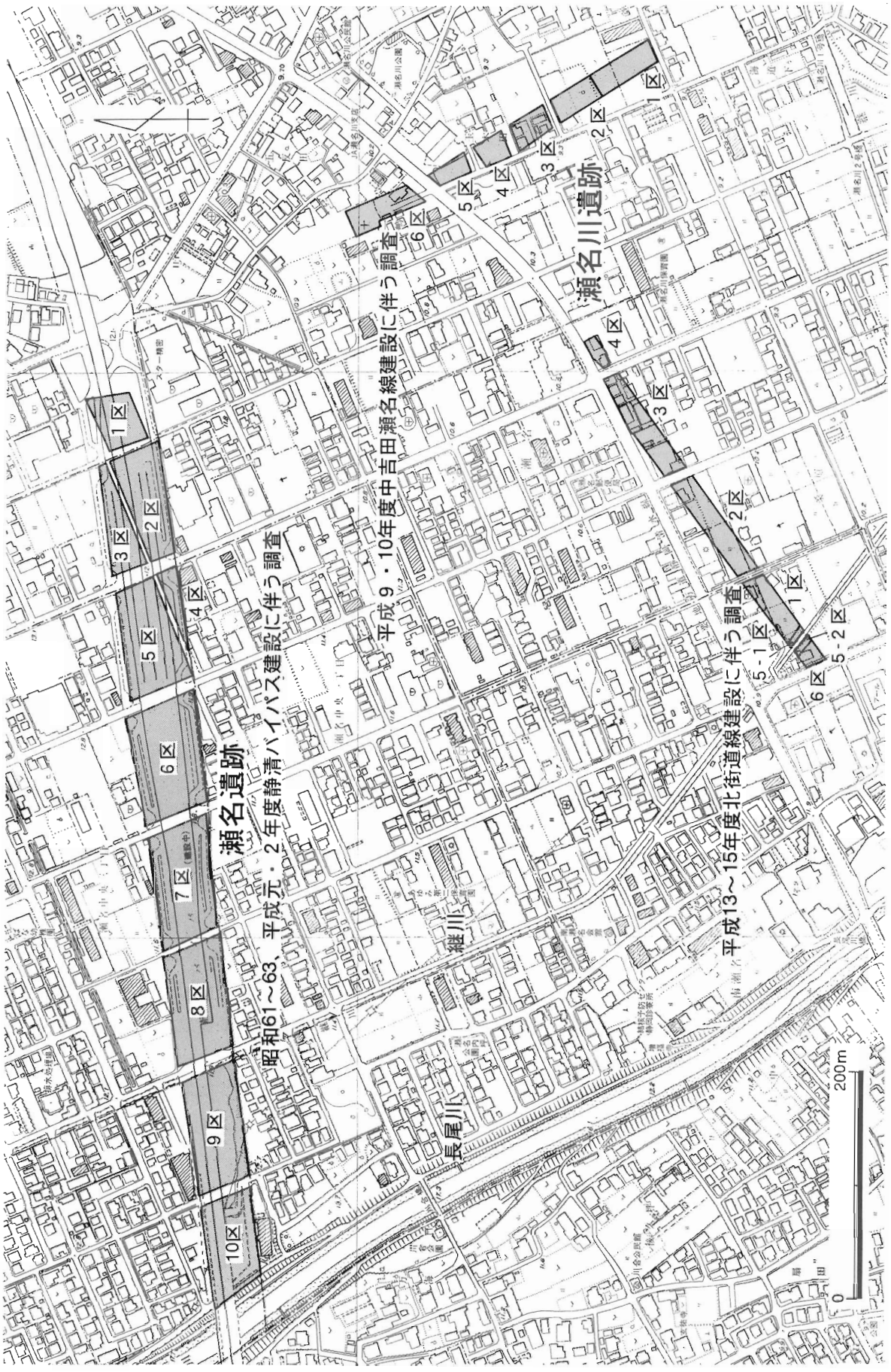


第４図　試掘坑位置図

を使用し、掘削した土砂は10ｔダンプで足久保山排土処理場へ搬入した。その際、周辺が住宅地であり、静岡市立西奈南小学校の通学路があること、交通量の多い現北街道を通らざるを得ない点からも、業者に対しては交通安全の徹底を指示、交通安全監視員を配置し十二分に注意を払った。調査区の法面には随時、ブルーシートで被膜し、雨水等の浸食及び乾燥により生ずるクラックに雨水が浸透して崩壊することを防いでいる。掘削面周囲には湧水を排出するために排水溝を設け、調査区内に２～３箇所設けた集水升に排水を集め、100Ｖ（２インチ）・200Ｖ（３インチ）ポンプで調査区周辺に流れる小河川もしくは道路側溝へ強制排水を行った。掘削については遺構面・遺物を傷つけないために基本的には作業員により鋤簾・移植ごて等で丁寧に行っている。また遺構面の上位を礫層等が覆い、人力の掘削では困難であると判断された場合は、小型のバックフォーで掘削し、生じた排土を小型のクローラーダンプを用いて場外搬出している。作業員による掘削作業で生じた排土については、調査区内に７ｍベルトコンベアを設置して調査区外へ排出し、パワーショベル、もしくは２ｔダンプを用いて、排土仮置き場に移送した。また４区、５―１区、５―２区については前述したように四辺をシートパイルで囲繞し、且つ４～５ｍもの深さを直掘りするため、ベルトコンベアを使用して排土の場外搬出は不可能であった。これらの調査区ではミニクレーンやクローラークレーン等を使用し、土が入った一輪車もしくは排土容器を吊



第５図　調査区・グリット設定図



第６図　瀬名遺跡・瀬名川遺跡調査区位置図

り上げて、場外搬出を行っている。以上のように通常の遺跡以上に現地調査に困難な面があり、現地を担当する調査研究員のみでは調査工程上に生ずる問題点に対処できないために、安全管理業務を外部委託した。委託先からは１名、安全管理員として派遣され、現地作業を安全管理の面から指導・監督を行っている。

実際の調査にあたっては、実測図・写真撮影という手段で記録保存を行っている。当遺跡では国土座標・系で10ｍグリットを設定した。またトータルステーションを使用し、遺物の位置・標高、遺構の平面形状、検出遺構面のコンター（等高線）等の測量を行った。全体図等も一部、外部委託による写真測量を実施しているが、大部分は研究所調査担当及び作業員が測量を行っている。検出された遺構、出土した遺物はその状況を１/100～１/20の精度で図化している。また写真による記録は中型（６×７）小型（35㎜）カメラを使用し、カラースライド・モノクロフイルムを使用して撮影している。調査区全景の写真撮影についてはタワーや高所作業車を使用しての撮影、もしくは外部委託でラジコンヘリコプターによる空中からの垂直・俯瞰撮影を行っている。

第３節　調査の経過

今回、報告する瀬名川遺跡は試掘調査を含め、現地調査で27ヶ月、報告書刊行に向けての整理作業に21ヶ月を費やしている（工程表)。第１章で述べたが平成13年２月から試掘調査を実施しており、本調査を開始したのは平成13年７月からである。準備工としてプレハブで現地事務所を設け、作業員雇用、資材調達、未買収地境界線にはシートパイルの打設を行い、ようやく１区の表土除去を開始したのは７月第２週からである。第３遺構面調査中の８月第３週に集中豪雨による被害があり、１区の西南法面が崩落した。これ以上の崩落を防ぐためにシートパイルの打設作業や法面の再精査作業のために工程が１ヶ月程度延びている。１区の調査が終了したのは平成14年３月末になってからである。

２区は平成13年12月中旬から準備工を開始し、年開け平成14年１月から表土除去を開始した。２区も未買収地に隣接しているため、民地との境界線にシートパイルを打設している。２区は８月末で調査が終了した。３区は６月から準備工を開始した。部分的な鋼矢板の打設、及び調査区の周囲にネットフェンスを囲繞する作業を６月中に全て終了させた後に、７月第２週には表土除去を開始し、調査を開始したのは８月第３週からである。調査終了は12月末である。６区は９月第４週に鋼矢板を打設し、重機を投入しながら掘削を行い、10月中旬で調査が終了している。５―１区は11月初旬から準備工を開始した。調査区周囲をフェンスで囲繞した後、11月第２週から表土除去を開始し、第５週から人力掘削を開始した。途中中間層を重機で掘削し、下位遺構面の調査を行い全ての調査を終えたのは平成15年の１月末である。２月からは現地事務所内で基礎整理作業を実施し、土器の接合・写真基礎整理作業を行った。３月には地元にて瀬名川遺跡の調査成果を発表する機会を持っている。

４月も現地において基礎整理作業を実施し、５月から５―２区の現地調査を実施した。鋼矢板打設後に切梁・腹起取り付け作業も含めた表土除去作業を行い、５月第４週から人力掘削を開始している。６月初旬に中間層を重機で除去、精査を再開した後、７月末に調査を終了している。８～９月には基礎整理作業を現地事務所で、一部本部で接合・実測作業を行っている。４区の準備工は９月から開始。鋼矢板・配電設備等を行い、10月第１週より表土除去を開始した。しかし当初予想された遺構面は全て砂利層により削平・消失していたため、静岡土木・文化課・当研究所と現地で三者協議を行い、４区調査を終了することに決定。10月末日に現地事務所等も合わせて撤収した。11月から本部にて報告書刊行に向けた本格的な資料整理を開始。平成16年12月まで整理作業を行っている。

第４節　資料整理の方法

出土した土器・石器・木製品等の遺物は取り上げた後、現地事務所にて水洗を行った。土器は水洗し付着した泥・砂等をしっかり除去した後に乾燥させる。土器片には出土した地区・層位・日時等を記号化し、番号を注記する。瀬名川遺跡の略号は「駿河瀬名川遺跡第２次調査」を略した「SSNGⅡ」とした。土器は現地事務所で出土した各層位・各グリット毎・遺構毎、また器種・部位・胎土等で分類され、接合できる資料を捜索した。その後、当研究所本部において接着剤等で接合可能な土器片を復原し、部位によっては石膏を充填し補強・復原を行った。この後に石膏による復原された土器や細かい破片資料でも該期の歴史を物語るには欠かせない資料として判断された土器は、方眼用紙上に等倍の大きさで図化作業を行っている。破片資料については拓本を取り細かい文様の記録に努めている。また土器については報告書掲載や資料公開に備えて写真撮影を行った。復原土器では石膏充填部分に着色作業している。本部写真室で撮影作業を行ったが主に中型カメラ（６×７）で白黒、小型カメラ（35㎜）でカラー（リバーサル）、また特別な資料については大判カメラ（４×５）を用いている。

石器については水洗、台帳に記録した後、土器と同様注記を行っている。その後、各個体を分類し実測作業及びトレース作業を行った。なお一部の石器は作業の効率化を図るために実測作業・トレース作業を外部委託としている。その後、版組を行い、観察表作成作業を行った。なお石器の石材の産出地については静岡大学名誉教授伊藤通玄氏に依頼している。

木製品については水洗、台帳に記録した後、シーラパックを行った。その後、当研究所の保存処理施設内（清水整理事務所：静岡市清水江尻台町）へ移送し、実測・写真撮影の後、本格的な保存処理としてPEG（ポリエチレングリコールの含浸）処理を行った。また使用されている木材の樹種を同定するためにサンプルを取りだし、プレパラートを作成している。これにより弥生時代の木製品がスギやアカガシなどが使用され、その木製品の用途別に樹種が選定されていることを確認した。

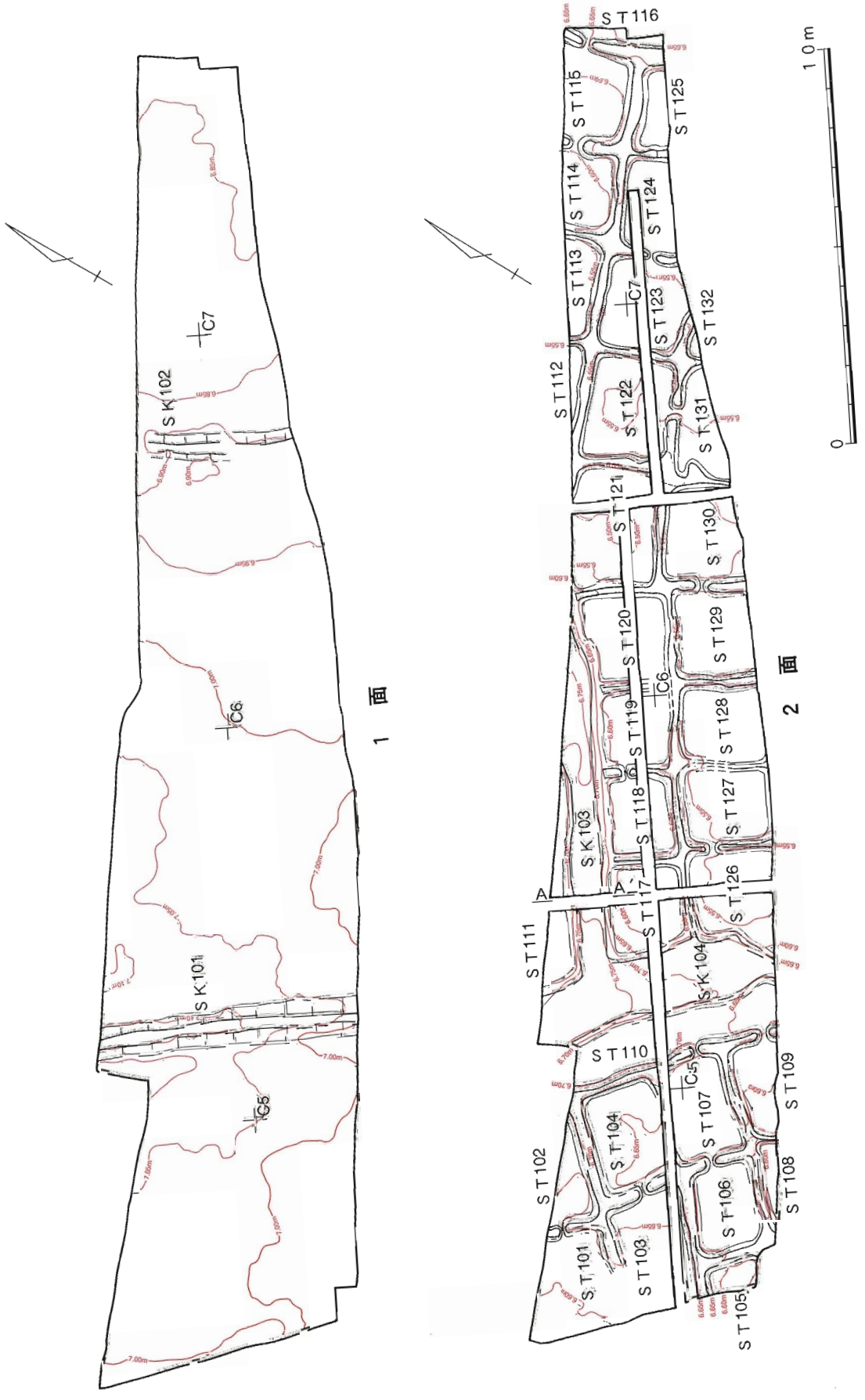
骨等の自然遺物はかなり脆弱であるため、遺物が入っている土ごと取り上げ、木製品と同様、保存処理施設へ移送し、保存処理を最初に施している。なお獣骨の鑑定は独立行政法人奈良文化財研究所の松井章遺物調査技術研究室長に依頼している。

数年にわたる瀬名川遺跡の調査成果を総括するべく、報告書の編集作業は本部を中心に行われた。各遺物図版作成・写真図版作成の後、観察表、目次や本文原稿の執筆にかかり、12月末に報告書は刊行された。この刊行された報告書は国立国会図書館をはじめ各都道府県教育委員会・埋蔵文化財センター、また静岡県内の市町村立図書館・教育委員会、そして県各施設へ配布され、瀬名川遺跡の調査成果を一堂のもとに披露することが可能となっている。また出土遺物は静岡県教育委員会の管理のもと、展示等を通して静岡県民に公開し、郷土文化や歴史学習等に活用されていく予定である。

第２表　調査工程表

	平成13年												平成14年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
試掘調査																								
1区																								
2区																								
3区																								
4区																								
5－1区																								
5－2区																								
6区																								
基礎整理																								
資料整理																								

	平成15年												平成16年											
	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
試掘調査																								
1区																								
2区																								
3区																								
4区																								
5－1区																								
5－2区																								
6区																								
基礎整理																								
資料整理																								



第７図　１区１・２面全体図

第４章　検出遺構

第１節　１　区

１区は平成13年７月～14年３月まで調査を実施した。調査対象面積は988㎡で、検出した遺構面は８面を数える。遺構の時期は弥生時代中期から古墳時代初頭と推定される。各面毎に事実説明を行いたい。

１面（第７図　写真図版１）

畦畔（SK：第７図　写真図版１）

１面は水田面である。13層上面を遺構面として捉えた。標高値は調査区西端部で7.0m、東端部で6.85mをはかり、南東方向に向かって少しずつ傾斜している地形である。この面では畦畔は２条検出している。SK101はB5・C5グリットで検出された。N36°Wの方向へ延びる。木材等の構築材は使用されておらず、上端幅約0.29m、下端幅約0.97m、高さ約７cmの小規模な盛土畦畔である。南東方向に延びるにしたがい下端幅は広がる。SK102はB6・C6グリットで検出された。N33.5°Wの方向へ延びる。木材等の構築材は使用されておらず、上端幅約0.25m、下端幅約0.68m、高さ約２cm程度の小規模な盛土畦畔である。遺存状態は極めて悪い。SK101・102両者とも12層土を基調としており、下層のラミナ層が攪拌されていない状況が観察されている点から、１面を覆う12層土が耕作土で、検出畦畔は疑似畦畔Ｂと判断される。２条の畦畔の距離は約15mをはかる。この遺構面の時期は奈良時代以降か。

２面（第７・８図　写真図版２～３）

畦畔（SK：第７・８図　写真図版２～３）

２面は水田面である。16層上面を遺構面として捉えた。ラミナ層である14層を除去した後、畦畔を面的に検出した後に15層を除去している。一面に小規模な盛土畦畔によって細かく区画された水田（小区画水田）が展開する。その水田群は大畦畔２条（SK103・104）によりその方向を規制されている。

SK103は上端幅約0.5～0.8m、下端幅約1.1～1.3m、高さ約17cmの盛土畦畔である。N53.5°Ｅの方向へ直線的に延び、調査区北壁B6付近で調査区外へ延びる。北壁付近ではややその方向を北へ傾けている。西端はB5付近でSK104と交わり、貫通していない。第８図で理解できるように本来的にはSK103は２段階にわたって構築されたことがわかる。面的に検出したのは第１段階、当初の盛土部である。なおその内部より土器片（第55図１）が出土している。

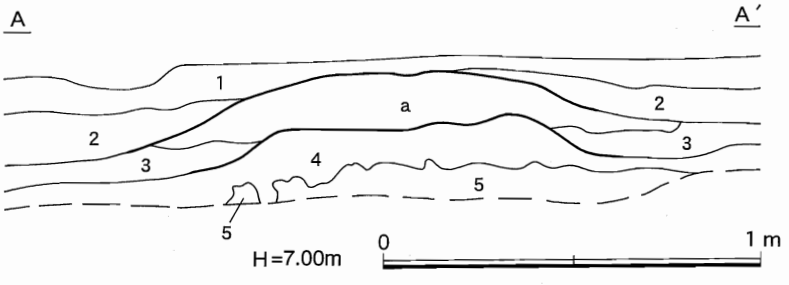
SK104は上端幅約1.5m、下端幅約1.8m、高さ約20cmの大規模な盛土畦畔である。調査区南壁C5付近からN48.5°Wの方向へ直線的に延びる。南壁付近は極端に細くなっている。上端面は比較的平坦であるが、SK103と交わる部分はやや盛り上がり、最高標高値は6.79mをはかる。なお畦畔解体時にSK103との合流点付近～北壁側にかけての盛土内部より土器片がまとまって出土している。

水田（ST：第７図　写真図版２～３　第３表）

小畦畔により区画された小区画水田は32面検出されている。第７図・第３表からも理解できるように、面積の平均値が3.88㎡、一辺が約２m程度の小規模な水田群である。その殆どが平面形が方形を呈している。SK104から西側のST101～110はその構築方向をSK104により規制されている。従って東西方向の小畦畔もSK104に直交する方向に延ばされている。ST110はＳK104西側に沿って設けられているが、南北に区切る畦畔も検出されておらず、狭長な水田が形作られている。ST101～110の田面の平均標高値は6.61m

第３表　１区２面水田一覧表

水田No. ST	位　置	形状	面　積 ㎡	標高値 m	最大幅 m	最小幅 m	備　考
ST101	B4	—	—	6.62	—	—	一部調査区外
ST102	B4	—	—	6.63	—	—	大部分調査区外
ST103	B4	—	—	6.62	—	1.62	一部調査区外
ST104	B4	長方形	4.20	6.64	2.43	1.82	
ST105	C4	—	—	6.59	—	—	大部分調査区外
ST106	C4	長方形	2.98	6.60	2.03	1.40	
ST107	B4～5・C4～5	長方形	3.60	6.61	2.45	1.46	
ST108	C4	—	—	6.59	—	—	大部分調査区外
ST109	C4～5	—	—	6.58	2.31	—	一部調査区外
ST110	B5・C5	長方形	—	6.63	—	0.82	一部調査区外
ST111	B5	—	—	6.65	—	—	大部分調査区外
ST112	B6	—	—	6.53	—	—	大部分調査区外
ST113	B6～7	—	—	6.53	—	2.30	大部分調査区外
ST114	B7	—	—	6.53	—	1.75	一部調査区外
ST115	B7・C7	—	—	6.57	—	1.91	一部調査区外
ST116	B7・C7	—	—	6.64	—	—	大部分調査区外
ST117	B5・C5	台　形	3.67	6.58	2.20	1.76	
ST118	B5・C5	長方形	2.72	6.55	1.81	1.46	
ST119	B5～6・C5～6	長方形	3.01	6.56	1.83	1.57	
ST120	B6・C6	長方形	3.98	6.53	2.11	1.60	やや変形
ST121	B6・C6	長方形	5.87	6.48	2.98	1.97	やや変形・一部調査区外
ST122	B6・C6	長方形	4.74	6.53	2.43	1.91	
ST123	B6～7・C6～7	正方形	4.44	6.51	2.13	2.11	一部調査区外
ST124	C7	—	—	6.54	2.28	—	一部調査区外
ST125	C7	—	—	6.55	—	1.86	大部分調査区外
ST126	C5	—	—	6.52	—	1.96	変形・一部調査区外
ST127	C5	長方形	3.60	6.51	2.10	1.72	
ST128	C5～6	—	3.80	6.51	2.21	1.76	一部調査区外
ST129	C6	—	—	6.52	—	1.96	一部調査区外
ST130	C6	—	—	6.53	—	2.20	一部調査区外
ST131	C6	—	—	6.52	—	—	やや変形・一部調査区外
ST132	C6	—	—	6.53	—	—	大部分調査区外



a．10BG3.5/1　暗青灰色シルト質粘土（炭化物、青灰色粘土粒を多く含む）　第２段階
1．5BG4/1　青灰色粘土（１区基本土層１４）
2．10GY4.5/1　緑灰色シルト質粘土（１区基本土層１５）
3．10BG3/1　暗青灰色粘土（１区基本土層１６）
4．5B3/1　暗青灰色粘土（１区基本土層１７）　第１段階
5．5BG4/1　暗青灰色粘土（１区基本土層１８）

第８図　１区２面SK103土層断面図

である。

SK103以北のST111は東西に区切る小畦畔が検出されず、全体像は不明である。水田面の標高値は6.65mであり、SK104を挟んで西側のST110と比較して僅かに高い。

SK103より南、SK104より東側に展開するST112～132もこれらの大畦畔の延びる方向に規制されている。ST117～120・126～129については整然とSK103に規制されて南北方向N35.5°Wの方向に構築されているが、ST112～116・122～125・131～132はN22°Wとやや北寄りに方向を傾けている。調査区北側へと展開するSK103の方向に規制されているものと思われる。水田面の標高値はSK104以西、SK103以北の水田面から次第に低くなる傾向があり、ST121においては最低標高値が6.50mをはかる。ただしST125へ向けて再び標高値は上昇する。従って、互いに異なる水田構築方位の焦点であるST121が一番低い標高値を有していることになる。水田の所属時期は古墳時代か。

水口（第７図　写真図版２～３　第３表）

２面の水田面においては水口が12箇所確認される。そのうち東西方向の畦畔に設けられた水口は1ヶ所に過ぎず、他の水口は全て南北方向の畦畔に設けられている。

SK104以西では田面の標高値から推測して、ST110からST107・109、ST102からST101へ配水したものと思われる。ST110はSK104に沿って構築された水田であり、各小区画水田に水まわしを行う役割を果たしていた可能性がある。ST103・104間、ST106・107間については標高値が殆ど同じ数値を示しており、判然としない。SK103以南の配水方向については、標高値が殆ど同じ数値を示しており判然としない。

３面（第９・10図　写真図版３）

溝状遺構（SD：第９・10図　写真図版３）

第18層上面を３面として捉えた。地形は平坦であるがB5グリット南西付近が最も標高値が高く、東に向かうに従い低くなる。遺構は溝状遺構のみである。

SD105は調査区のほぼ中央、C5、B・C6グリットに位置する。溝状遺構はN32°Eの方向へ直線的に延びている。上端幅は約1.6～1.8m、下端幅約0.3～0.4mと南に向かって僅かに広がる。深さは平均33cmで、底面の高低差は殆ど無く水平である。覆土は５枚に分層され、１層と２層の層界が乱れているのを確認した。いずれの層にも植物遺体を多く含み。底面がほぼ水平という点から、恒常的に水が流れていたのではなく、帯水していた状況が考えられる。

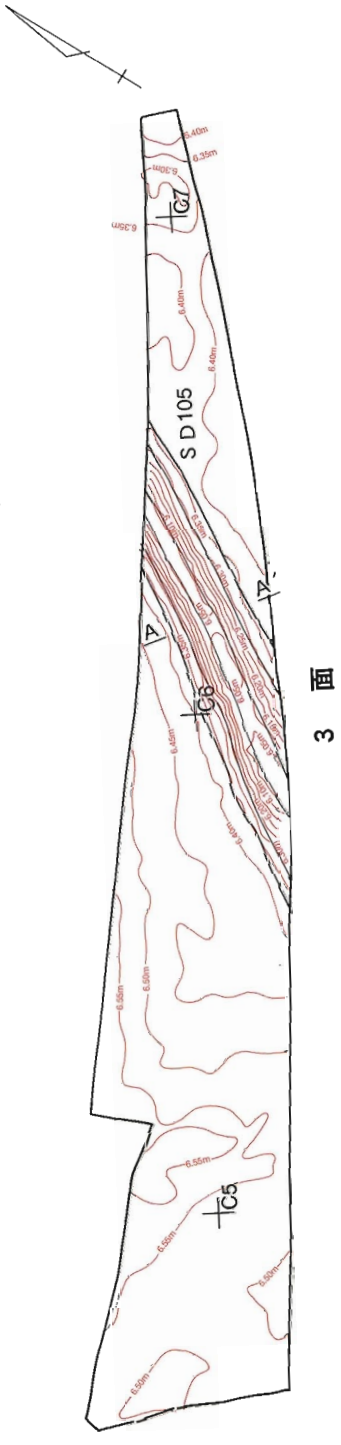
４面（第９・11図　写真図版３）

不明遺構（SX：第９・11図　写真図版３）

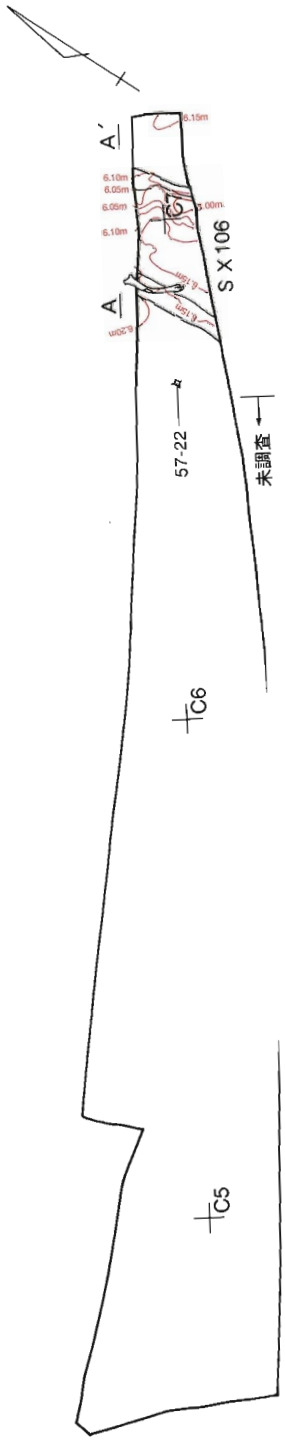
溝状遺構を調査した３面調査時にC7グリット付近から調査区東壁付近にかけてトレンチを設定・掘削した結果、細砂を覆土とする自然流路跡と思しき遺構を確認したものの、遺構は明確な立ち上がりを検出することができず、これをSX106として調査にあたった。遺構はC7グリット杭付近で検出された。自然木等の木質遺物が遺構の西岸で検出されている。深さは約５cm程度である。覆土は暗緑色砂を基調にしている。土器（第55図２）が１点出土している。遺構の所属時期は弥生時代末か。

５面上層（第12～14図　写真図版４）

当初、確認調査等で予想されていた５面の検出作業中に21層上面で、いくつかの遺構を検出した。これらの深度・覆土等は後述する５面の遺構群とは異なるため、５面上層として調査を行っている。この面の平均的な標高値は約6.1mで調査区西端部でのみ確認した。４面で検出しえなかった遺構群である可

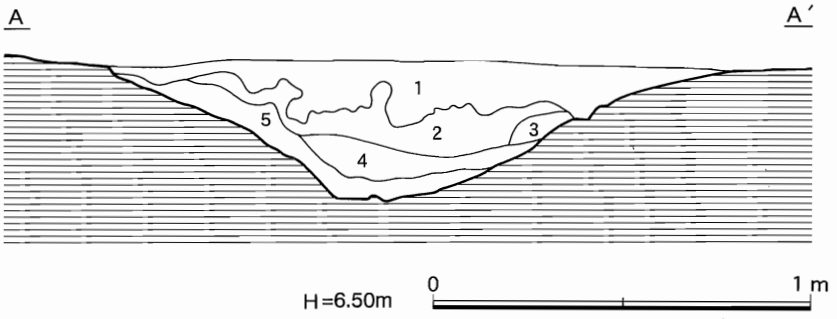


３　面



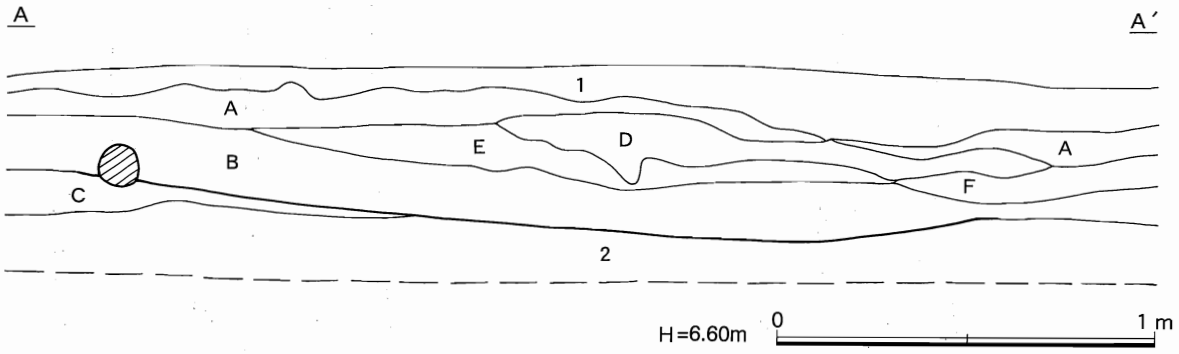
４　面

第９図　１区３・４面全体図



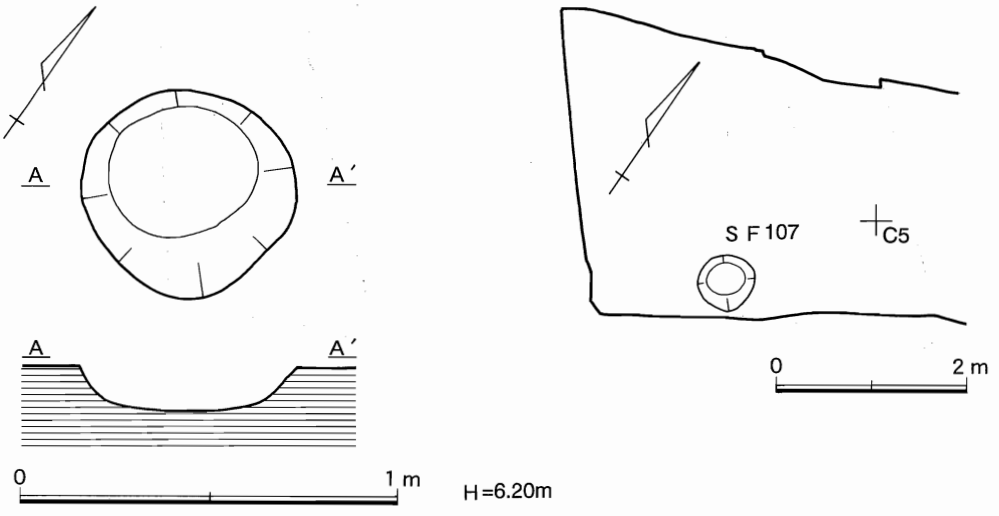
1．10YR3/1　黒褐色粘土（青灰色粘土ブロック、白色粒子、炭化物、植物遺体を含む）
2．10YR2/1　黒色シルト質粘土（植物遺体を多く含む）
3．5BG3.5/1　暗青灰色シルト
4．7.5Y3/1　オリーブ黒色シルト質粘土（ラミナ層。植物遺体を含む）
5．10Y3/1　オリーブ黒色シルト質粘土（直径φ２㎝の淡黄色粘土ブロック、植物遺体を含む）

第10図　１区３面SD105土層断面図

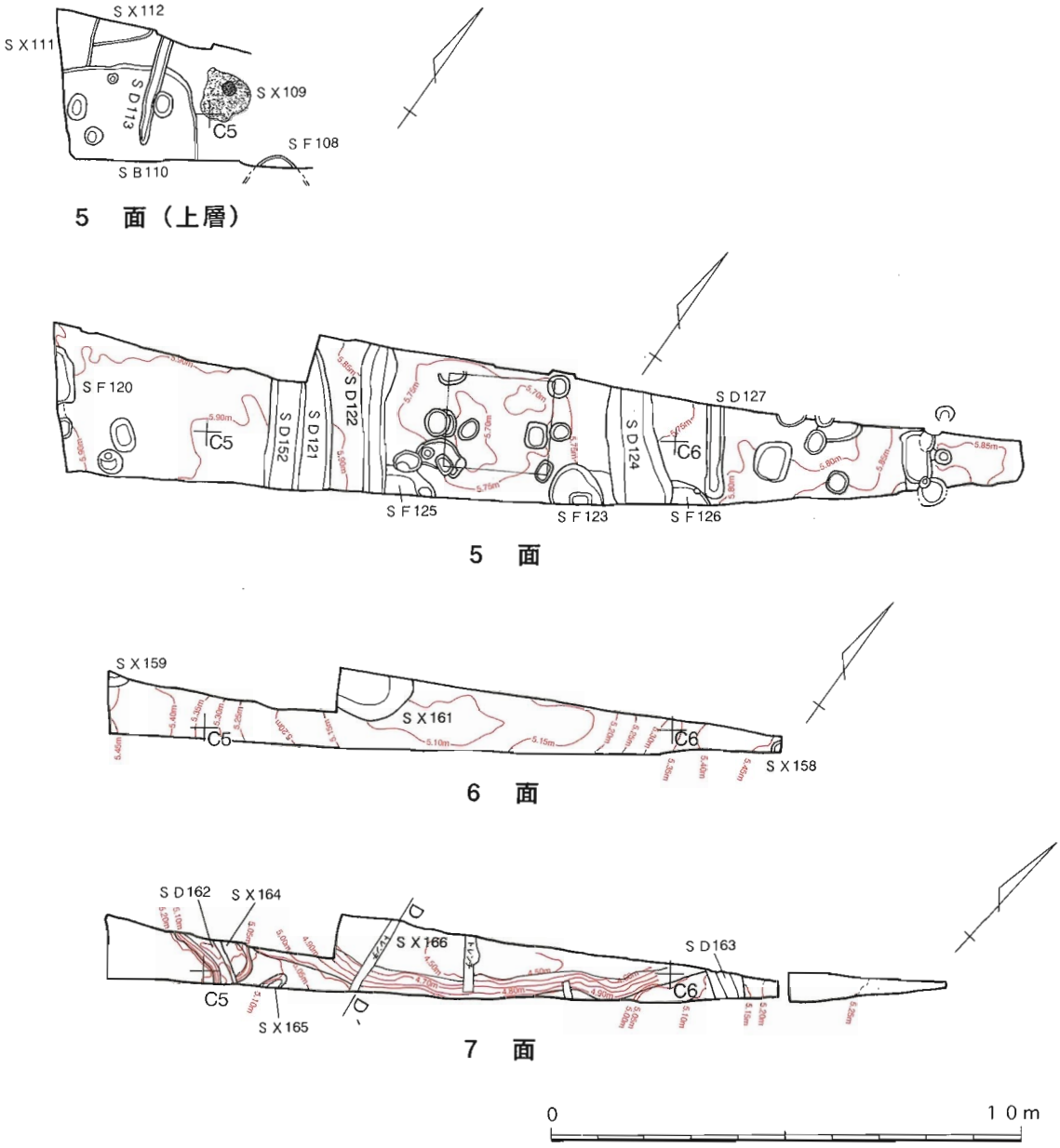


1．10BG3/1　暗青灰色粘土（１区基本土層１６）
2．5B3/1・5BG4/1　暗青灰色粘土（１区基本土層１７・１８）
A．5G4/1　暗緑灰色シルト（φ３㎜の炭化物を含む）
B．5G4/1　暗緑灰色砂（植物遺体・炭化物が縞状に堆積）
C．5Y3.5/1　灰色シルト質粘土（φ１０㎜以下の炭化物・植物遺体を多く含む）
D．10BG3/1　暗青灰色砂～礫
E．10Y3/1　オリーブ黒色シルト質粘土
F．10Y3/1　オリーブ黒色シルト

第11図　１区４面SX106土層断面図



第12図　１区５面上層SF107遺構図

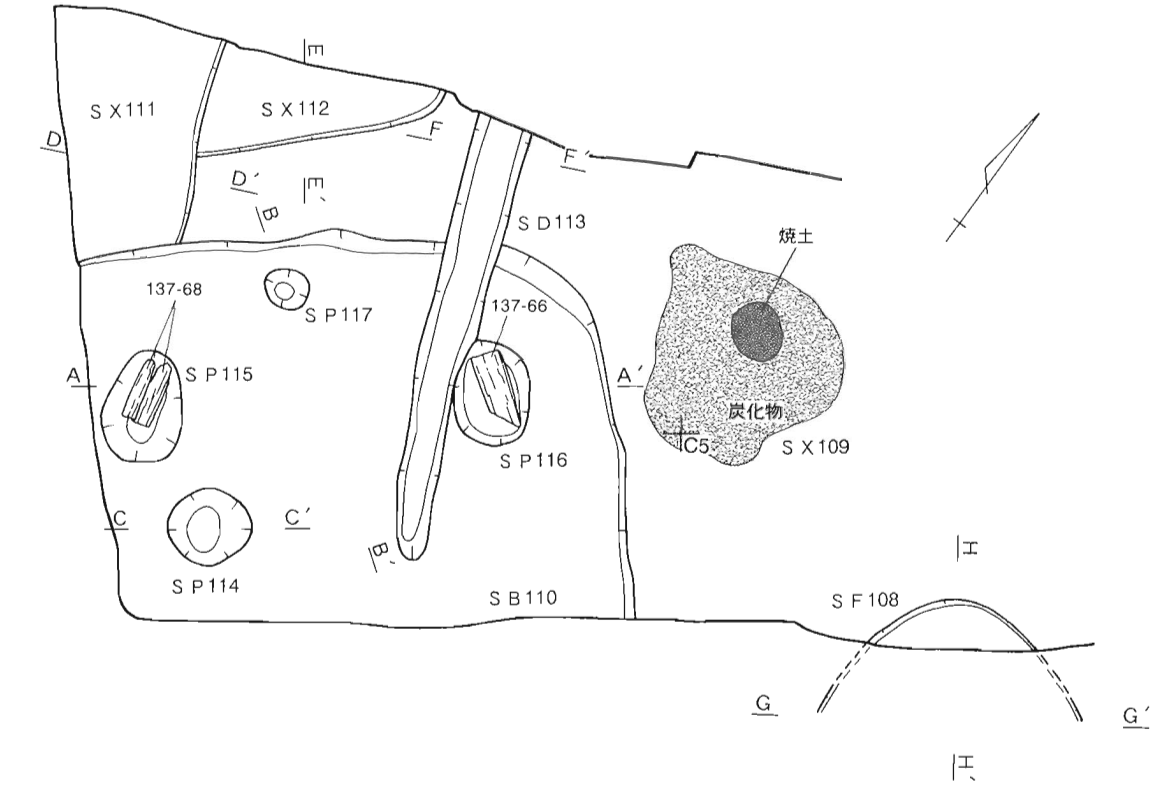


第13図　１区５・６・７面全体図

能性もある。この遺構面の所属時期は弥生時代後期後半～末であろう。

竪穴状遺構（SB：第14図　写真図版４）

竪穴状遺構は１基確認している。SB110は調査区の西端、B・C4グリットに位置する。大部分は調査区外に広がる。平面形態は方形を呈していたものと考えられる。平均的な深さは約５cm程度で平坦である。覆土は暗オリーブ灰色シルトで青灰色土ブロック、炭化物を多く含む。埋め戻された可能性を持つ。覆土除去後に底面に柱穴（SP114～119）を確認した。SB110周囲には柱穴群が確認されないため、柱穴はSB110に伴う可能性がある。本遺構は検出時の状況から後述するSD113・SX111よりも時期的に新しいと考えられる。

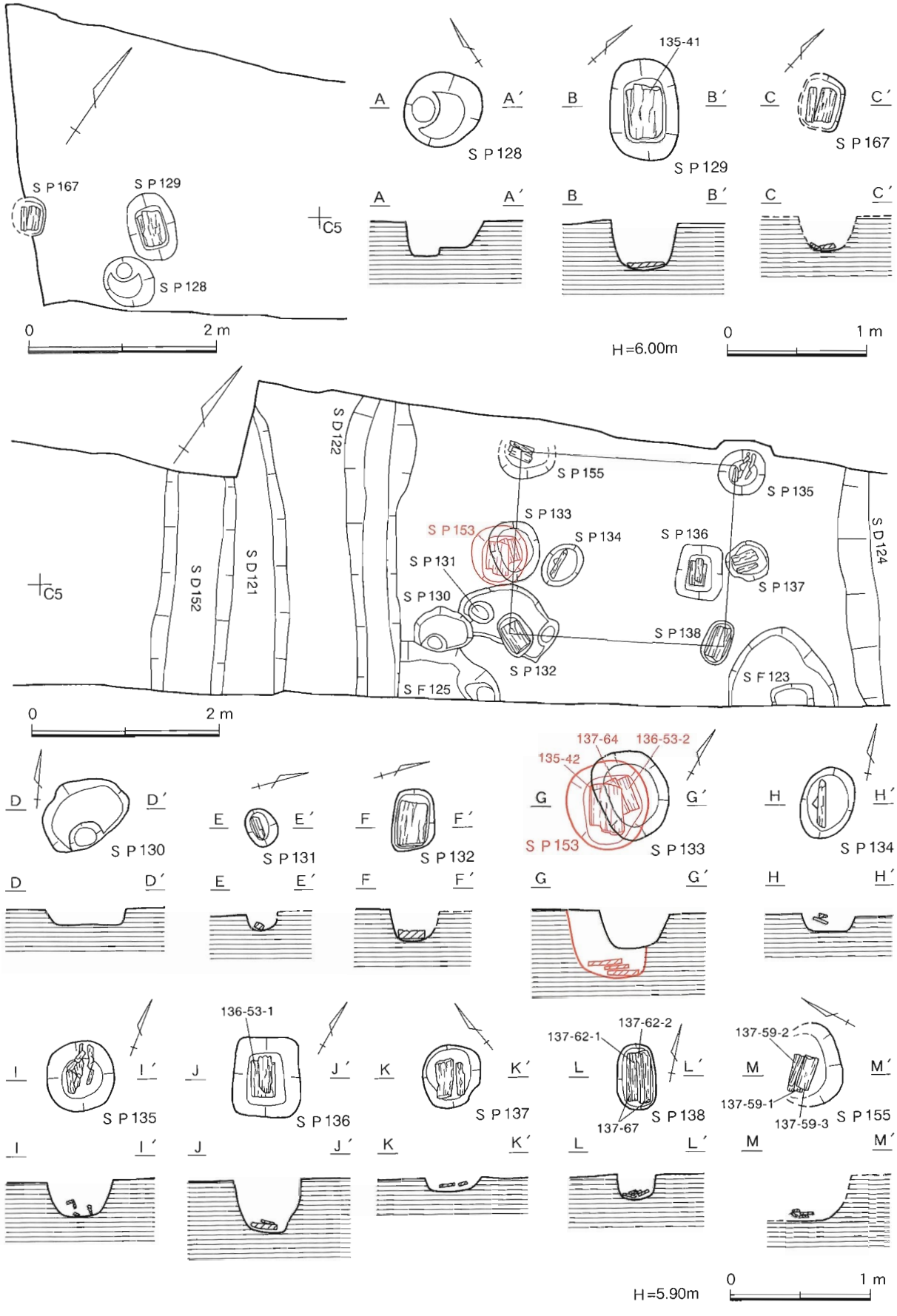


1．5GY3/1　暗オリーブ灰色粘質シルト
（青灰色粘土ブロック、炭化物、白色粒子礫を含む）
2．5GY4/1　暗緑灰色粘土
（暗灰褐色粘土を含む）

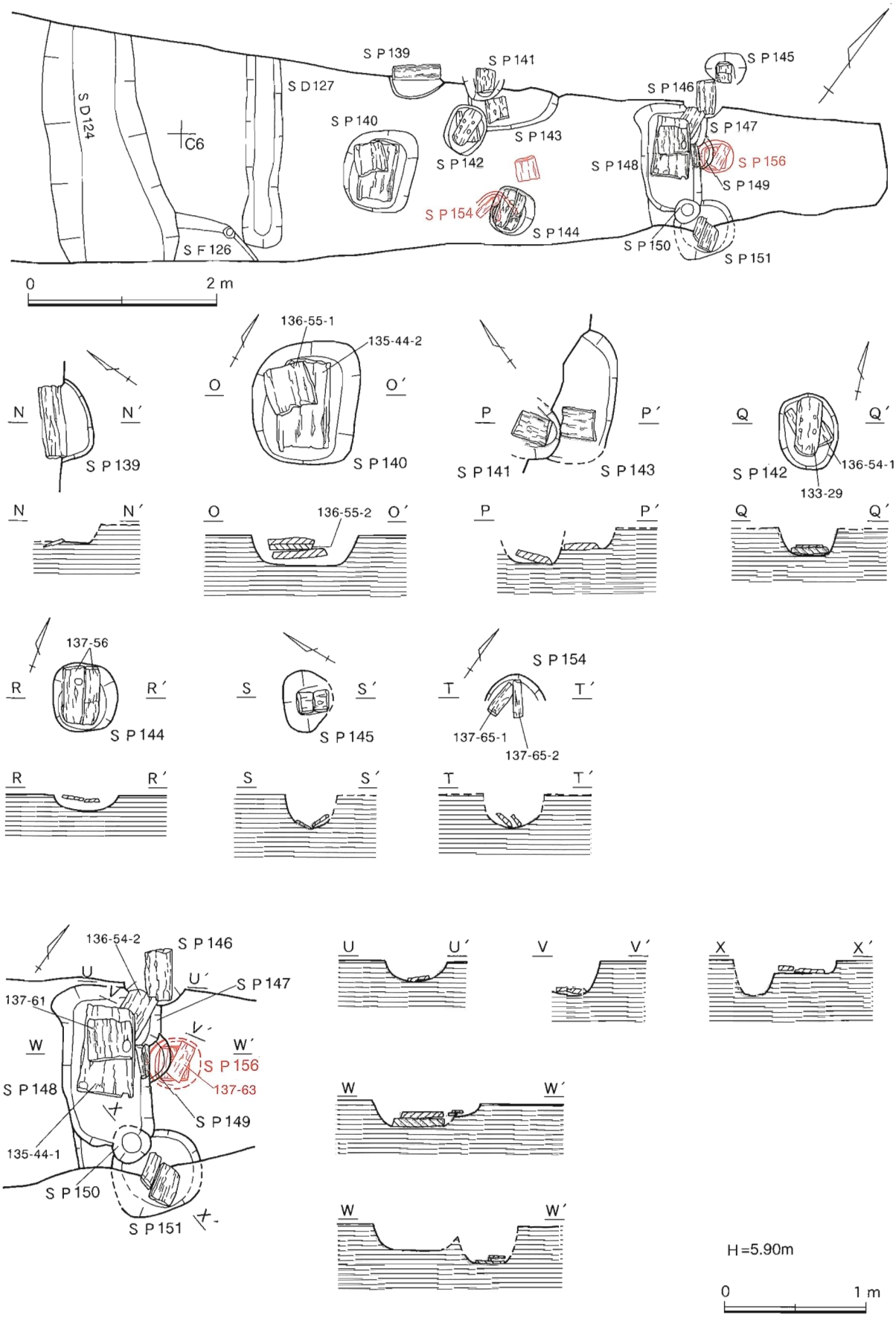
1．5GY4/1　暗緑灰色粘土
（暗灰色粘土ブロック、炭化物、土器片を含む）

H=6.20m　0　2m

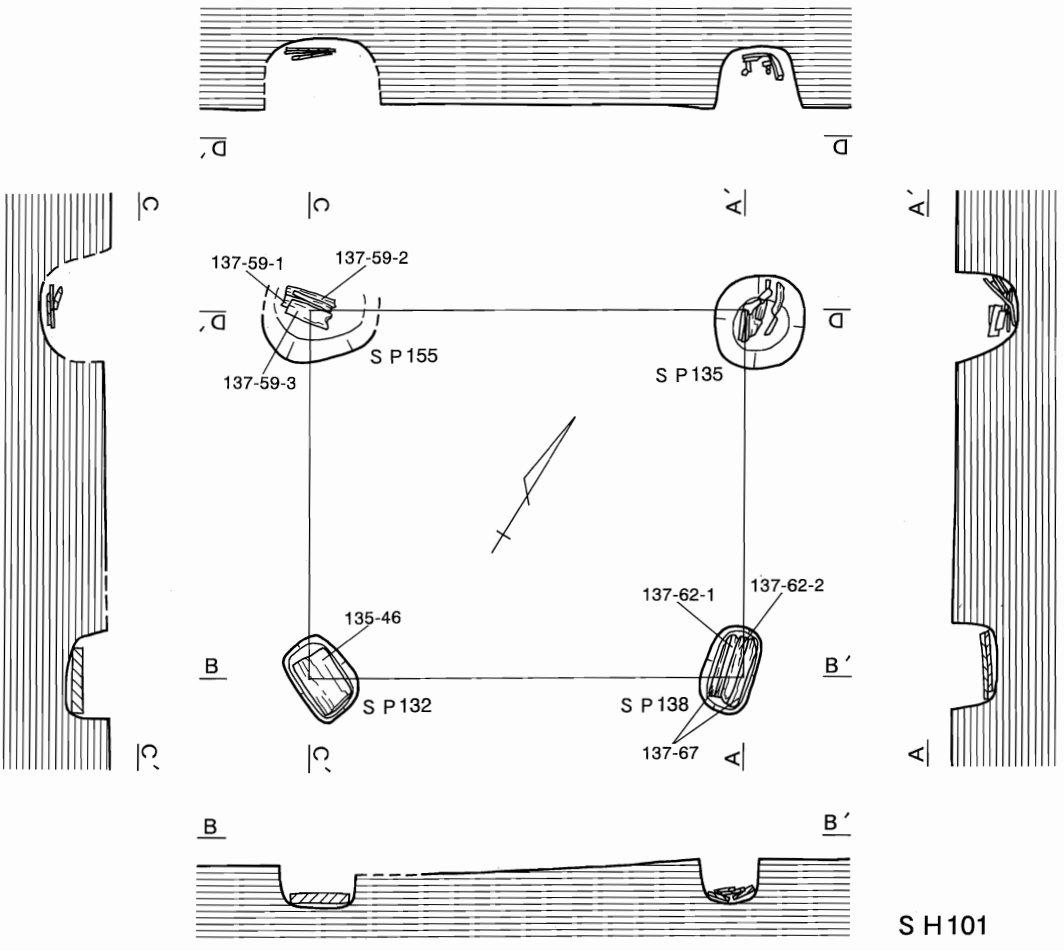
第14図　１区５面上層遺構図



第15図　１区５面遺構図①



第16図　１区５面遺構図②



第17図　１区５面建物跡①

土坑（ＳＦ：第12・14図　写真図版４）

土坑は２基確認した。SF107はC4グリットに位置する。前記のSB110の確認面より約10cm程度上層でその存在を確認した。径55cm、深さ12.8cmをはかる。平面形は円形を呈している。底面はほぼ平坦で柱を据えた痕跡は確認されなかった。覆土は砂利で土器等の遺物は含まれなかった。本遺構は本来的に４面に属する可能性が強い。SF108はC5グリットの調査区南壁際で検出された。遺構の大部分は調査区外に広がる。平面形態は方形を呈していたものと考えられる。平均的な深さは12.5cmで、ほぼ平坦であるが、遺構中心部に向かって僅かに低くなる。底面には炭化物が薄く堆積し、かつ被熱した痕跡がある。覆土は暗緑灰色粘土で青灰色粘土ブロックを多く含み、埋め戻された可能性を持つ。

溝状遺構（SD：第14図　写真図版４）

溝状遺構は１基確認した。SD113はＢ・C4グリットに位置している。この遺構はSB110内からN22°Wの方向へ直線的に延びる。遺構の検出状況からSB110に時期的に先行する遺構と考えられる。上端幅は0.28m、平均的な深さは14.8cmである。底面は平坦で計測された標高値を見てもほぼ水平である。下端幅は最大0.19mで、南に行くに従い狭くなる。断面形は逆台形で覆土は暗オリーブ灰色シルトでSB110の覆土と同一であるが、青灰色土ブロック・炭化物の含有が少ない。

その他の遺構、不明遺構（SX：第14図）

SX109は炉跡である。B5グリットを中心に位置し、SB110の北側に隣接する。被熱部位は長径0.32m、短径0.25mで、楕円形を呈する。その周囲には炭化物層が広がる。土器・炉石等は検出されなかった。周囲には柱穴等が検出されておらず、屋外炉の可能性が強い。

SX111はSB110と重複する遺構である。検出状況からSB110に時期的に先行するものと考えられる。B4グリットに位置し、大部分が調査区外に広がるものと考えられる。底面は平坦である。覆土はSB110と同一であるが、比較的、青灰色土ブロックの混入が少ない。後述するSX112が埋没した後に掘削されている。

SX112はSX111よりも時期的に先行する遺構である。B4グリットに位置し、調査区北西隅で検出されたため、全体像は不明である。

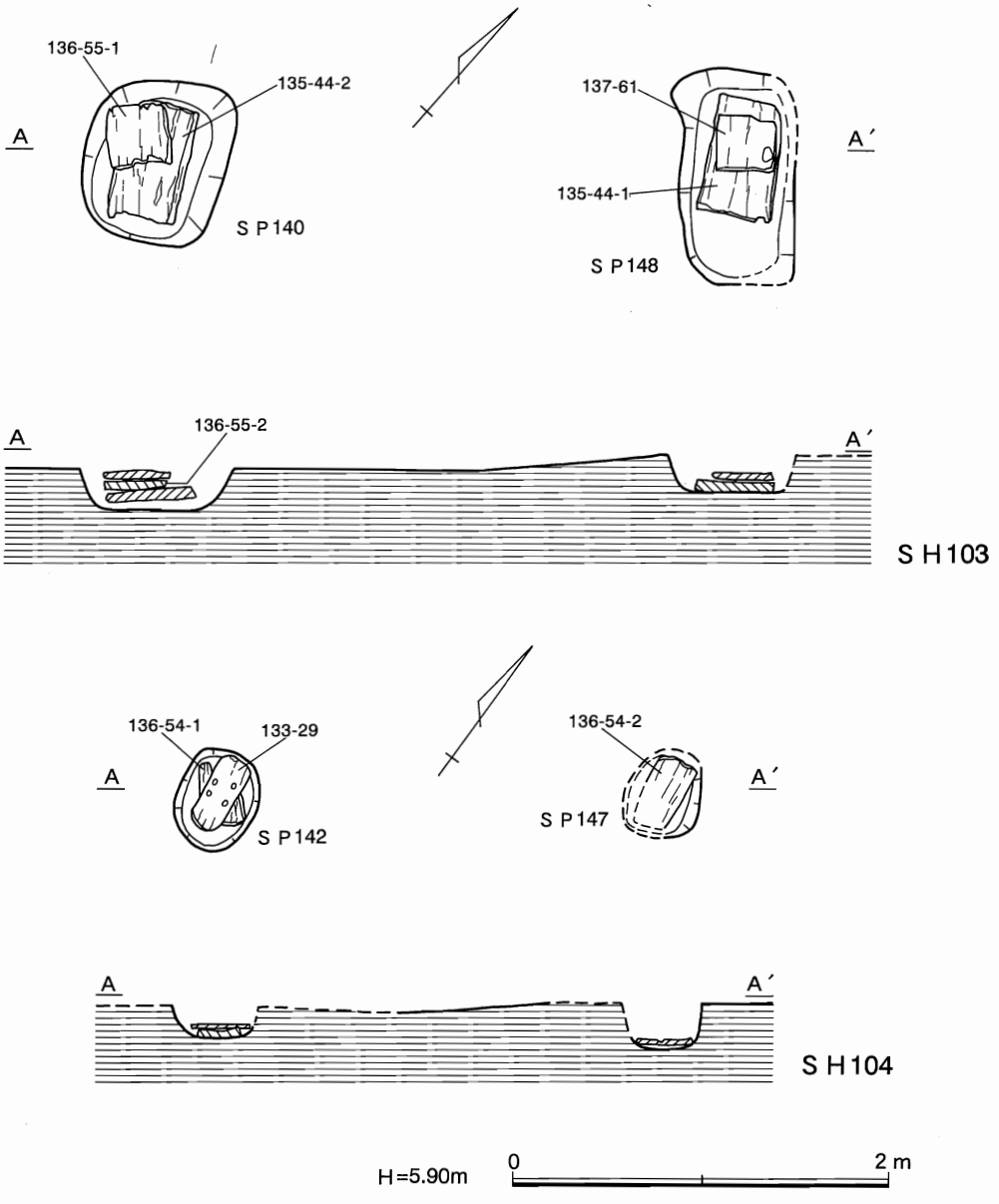
５面（第13・15～23図　写真図版５～８）

５面は集落面である。23層上面を遺構面として捉えている。検出した遺構はいずれも浅く、当初の生活面は４層付近であった可能性がある。５面の標高値は調査区西端部で5.97m、東端部で5.88mをはかる。この面では多くの柱穴(SP)を検出した。調査時には判然としなかったものの、礎板の接合状況から同一の建物跡を構成していたであろう柱穴を特定することができた。なおこれらの建物跡の周囲に溝状遺構が確認され、相互の関連は不明であるが、本来的にその溝状遺構が建物跡に伴う周溝の可能性がある。

建物跡（SH：第17・18図　写真図版８）

SH101は調査区のほぼ中央、Ｂ・C5グリットに位置する。この遺構はSP155・135・132・138で構成されている。１間×１間の建物跡である。SP155・135及びSP132・138の距離は約2.3m、SP155・132及びSP135・138の距離は1.96mをはかる。この点から本来的な建物跡の主軸方向はW31°Sであろう。各柱穴の平面形は円形～楕円形を呈し、底面には礎板が残る。本遺構の周囲にはSD121・122・124の溝状遺構が検出されているが、それらの遺構との関係は不明である。

SH102は調査区のほぼ中央、Ｂ・C5グリット境界部に位置する。建物跡を構成するSP153・136以外の柱穴は調査区外に展開するものと思われる。この柱穴の距離は約2.26mをはかり、方向もW31°Sで、本

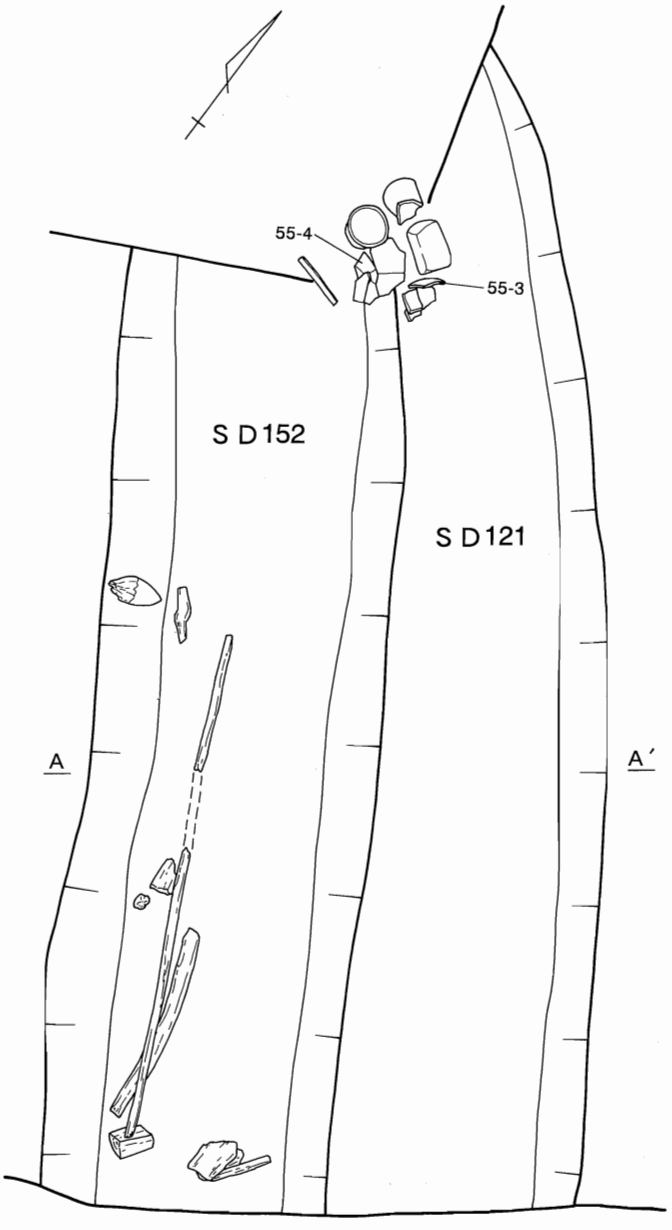


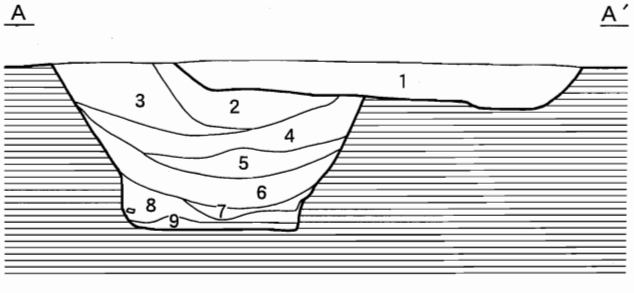
第18図　１区５面建物跡②

遺構と重複するSH101の柱穴距離・主軸方向が一致する。SH102と101の時期的な前後関係は不明であるものの、同規模の建物を建て替えた結果の遺構と考えられる。柱穴の平面形は楕円形～方形を呈し、底面には礎板が残る。これらの礎板は接合関係にある。また本遺構の周囲にはSD121・122・124の溝状遺構が検出されているが、それらの遺構との関係は不明である。

SH103は調査区東側、Ｂ・C6グリット境界部に位置する。建物跡を構成するSP140・148以外の柱穴は調査区外に展開するものと思われる。この柱穴の距離は約3.21ｍをはかる。その方向はW41°Sである。柱穴の平面形は方形を呈し、底面には礎板が残る。礎板は建物の扉材の転用であり、SP140・148両遺構から出土した礎板は接合関係にある。SP148の北側にSP147が重複する。SP147の礎板がSP148の礎板の下に位置するため、SP147はSP148よりも古い時期の遺構である。よって本遺構、SH103はSP147が構成するSH104よりも新しい時期の遺構である。なお建物跡西側でSD124・127の溝状遺構を検出しているが、それらの遺構との関係は不明である。

SH104は調査区東側、Ｂ・C6グリット境界部に位置する。建物跡を構成するSP142・147以外の柱穴は



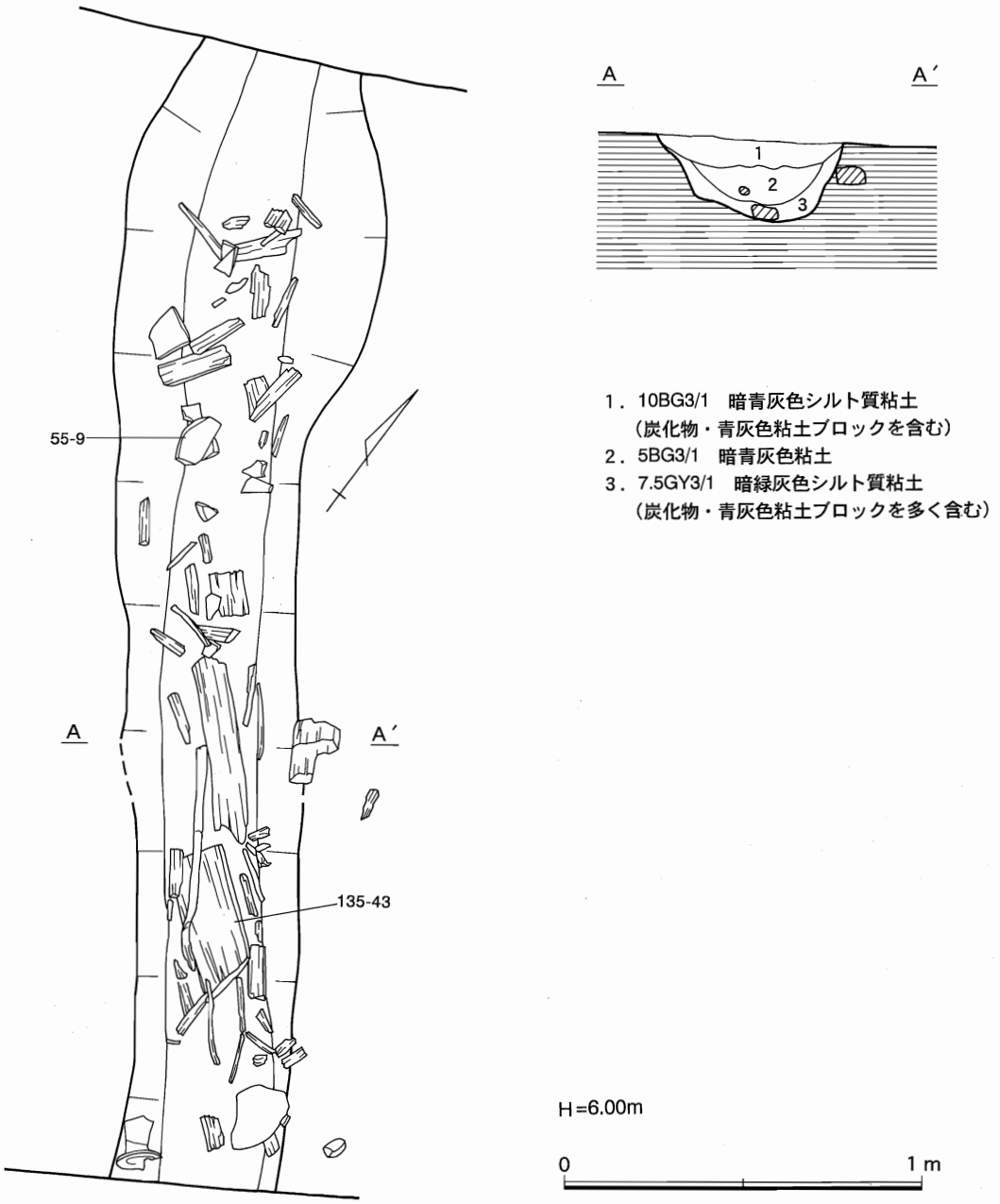


ＳＤ１２１覆土
1．10Y3/1　オリーブ黒色シルト質粘土
（炭化物、青灰色粘土ブロック、白色粒子を含む）

ＳＤ１５２覆土
2．5BG4/1　暗青灰色粘土
3．5BG3.5/1　暗青灰色粘土
（暗灰色粘土ブロック・白色粒子を多く含む）
4．5B3/1　暗青灰色粘土
（暗灰色粘土・暗青灰色粘土ブロック、炭化物、
植物遺体を多く含む）
5．腐植土層
6．5BG4.5/1　青灰色粘土
7．炭化物集積層
8．5G4/1　暗緑灰色粘土
（炭化物、植物遺体、白色粒子を含む）
9．炭化物集積層

H=6.00m　0　1 m

第19図　１区５面SD121・152遺構図



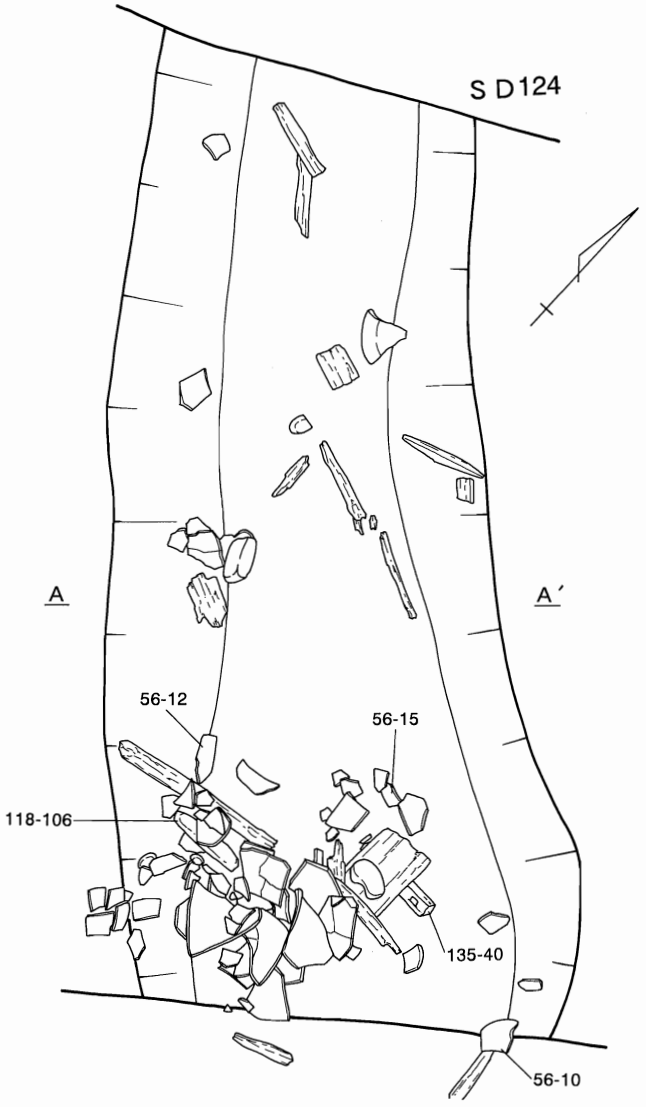
第20図　１区５面SD122遺構図

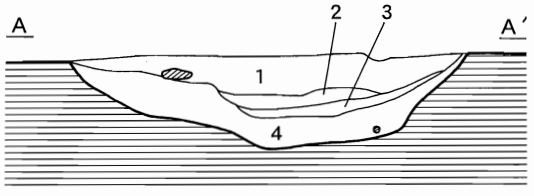
調査区外に展開するものと思われる。この柱穴の距離は約2.38mをはかる。その方向はW36°Sである。柱穴の平面形は楕円形を呈し、底面には礎板が残る。SP142の礎板は田下駄を転用したものである。また前述したように本遺構はSH103よりも時期的に古いものの、柱穴間距離数値がかなり異なるため、建物の建て替えではなく、全く別個の建物跡と推定される。なお建物跡西側でSD124・127の溝状遺構を検出しているが、それらの遺構との関係は不明である。

溝状遺構（SD：第19～21・23図　写真図版６・７）

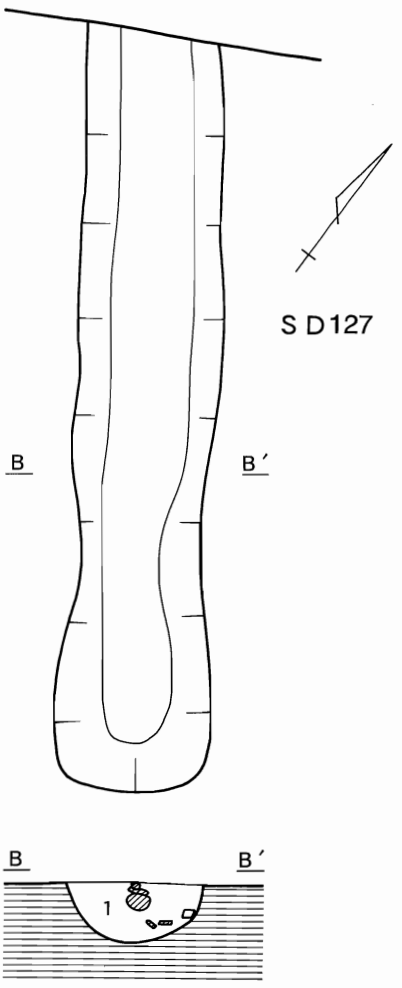
５面からは５条の溝状遺構を検出している。これら集落域内で検出された溝状遺構であり、可能性として前述した建物跡（SH）に付随する周溝であることも想起される。今後の検討課題として提示しておきたい。

SD121・152は調査区中央部からやや西よりの位置、B・C5グリットに位置する。この遺構は当初、１





1．5G3/1　暗緑灰色粘土
（炭化物、植物遺体を多く含む）
2．5G3/1　暗緑灰色粘土
（青灰色粘土ブロックを多く含む）
3．腐食土層
4．5BG4/1　暗青灰色粘土
（炭化物、植物遺体、青灰色粘土ブロックを含む）

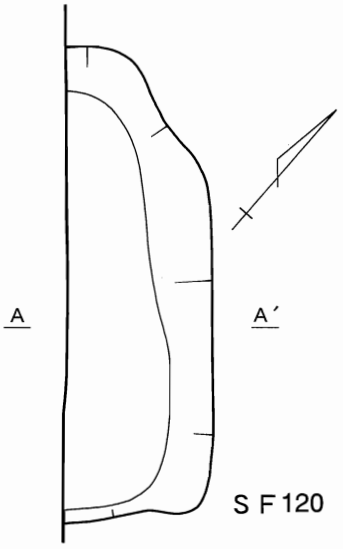


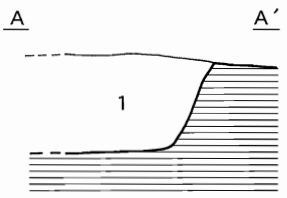
1．5GY3/1　暗オリーブ灰色シルト質粘土
（植物遺体、炭化物、青灰色粘土ブロック
を多く含む）

H=5.80m

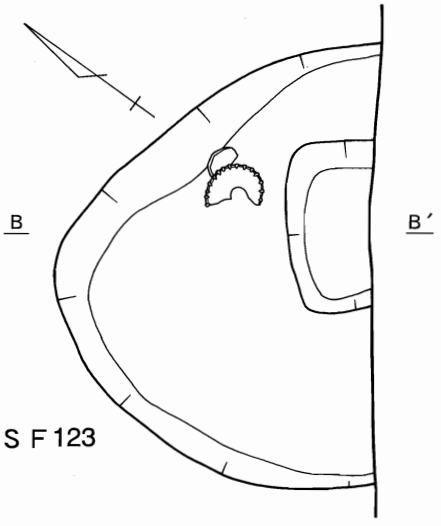
0　1m

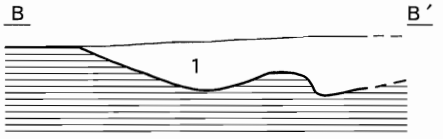
第21図　1区5面SD124・127遺構図



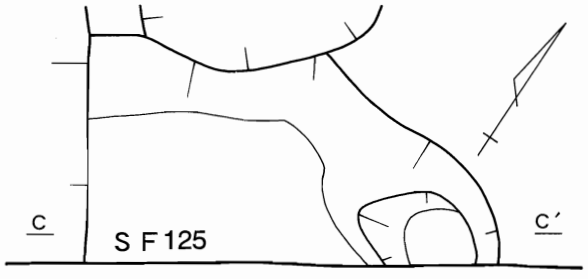


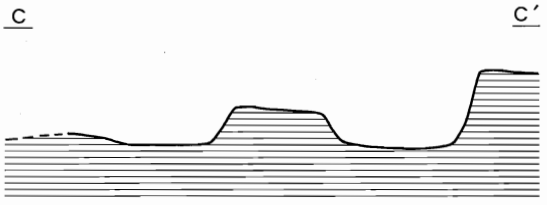
1．5GY2/1　オリーブ黒色シルト質粘土
（青灰色粘土ブロックを含む）

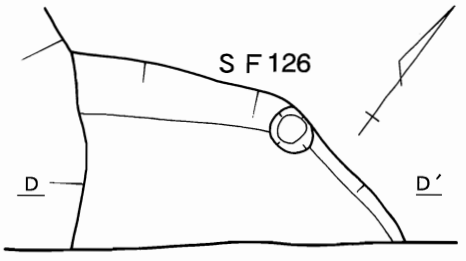


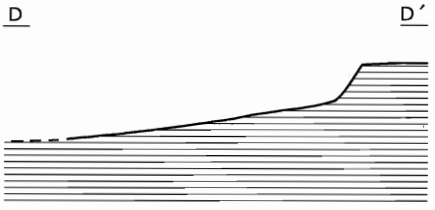


1．2.5GY3/1　暗オリーブ灰色粘土
（炭化物、青灰色粘土ブロック、植物遺体を多く含む）

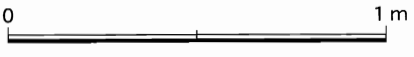








ＡＡ′：H=6.00m
ＢＢ′～ＤＤ′：H=5.90m



第22図　１区５面土坑図

条の溝と考え掘削を開始したが、形状・土層堆積状況から２条の溝状遺構であることが判明した。SD121・152共に直線的に延びるが、SD121については調査区北壁付近でわずかに西側へ方向が傾く。SD121の規模は土層堆積状況から上端幅約1.1m、下端幅約0.9mと推定される。深さは平均15cmで、浅い溝状遺構である。断面形は幅広い逆台形状を呈する。覆土は単層で、調査区壁際で土器が集中的に投棄された状態で出土している。SD152はN31°Wの方向へ延び、下端幅は約0.45～0.50mをはかる。深さは平均29cmで、SD121と比べて深い溝状遺構である。底面の高低差は６cmで北に向かって僅かに下がる。断面形は逆台形で、覆土は炭化物層を挟んでいる。最下層では木質遺物が投棄された状態で出土している。時期的にはSD152がSD121よりも古いと考えられる。なおこの溝状遺構の周囲に７本の木杭が検出されている。その位置から溝状遺構と同時期と考えられる。同様の木杭はSD124付近にも散見された（第23図）。

SD122は調査区中央部からやや西寄りの位置、Ｂ・C5グリットに位置する。この溝状遺構はW31.5°Wの方向にやや直線的に延び、調査区外へと続く。上端幅は0.46～0.73m、下端幅は0.18～0.29mをはかる。深さは平均27cmで、底面の標高値差は南北で７cmあり、僅かに南に向かって深くなる。溝状遺構の断面形は逆台形を呈し、覆土は３枚に分層され、３層は青灰色ブロックを多く含む。また２～３層にかけて多くの土器・木質遺物を含む。投棄されたものであろう。

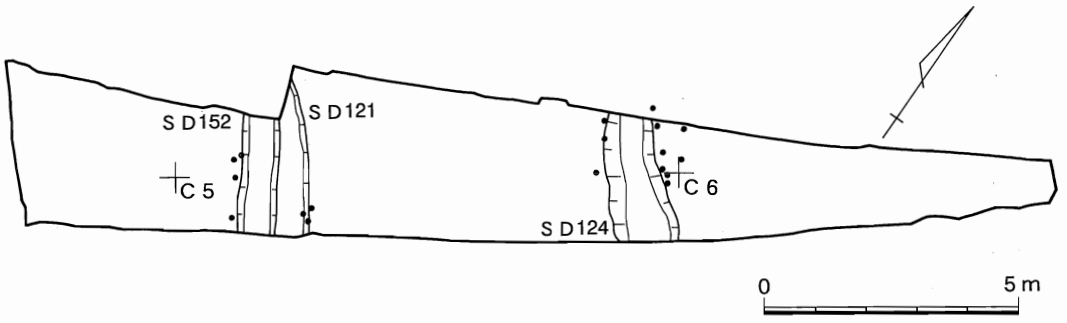
SD124は調査区中央部からやや東寄りの位置、Ｂ・C5グリットに位置する。この溝状遺構はN44°Wの方向に延び、調査区外へと続く。上端幅は0.89～1.25m、下端幅は0.44～0.84mと南東に向かって広がる。深さは平均27cmで、底面の標高値差は南北で５cmあり、南東に向かって僅かに高くなる。溝状遺構の断面形は丸底である。覆土は４層に分層される。溝内からは土器・木質遺物が大量に出土したが、それらは４層上面～下面で集中的に出土している。投棄されたものであろう。なおSD121・152同様にこの溝状遺構周囲に打設された木杭が11本検出されている。溝状遺構と同時期であろう。

SD127は調査区東半部、Ｂ・C6グリットに位置する。この溝状遺構はN36°Wの方向へ直線的に延び、調査区外へ続く。ただしこの遺構はSF126付近で途切れている。上端幅は0.31～0.41m、下端幅は0.14～0.2mをはかる。深さは平均11cmで、底面標高値差は南北で７cmあり溝の途切れる南端部に向かって徐々に上がっていく。溝状遺構の断面形はU字形を呈し、覆土中に礫・土器片等を含んでいた。これらの遺物は流れ込みによるものか。

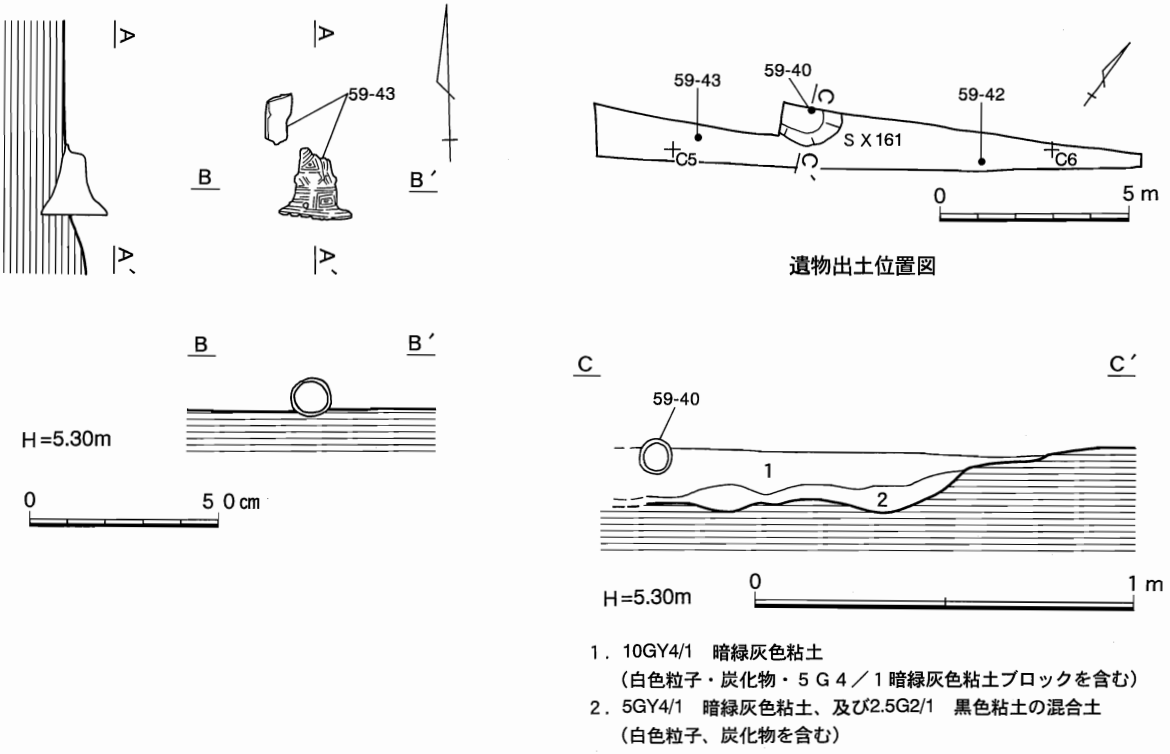
土坑（SF：第22図）

１区５面からは土坑が４基検出されているが、いずれの土坑も全体を検出できたものではなく、平面形は不明である。遺構面は集落域であり、本来的に該期の建物に付属していたものかは不明である。

SF120はB4グリット、調査区西壁沿いに位置し、遺構の半分以上は調査区外に展開しているものと思われる。長さは1.27m、深さは28cmをはかる。SF123は調査区のほぼ中央部、C5グリットに位置する。南半部は調査区外に延びている。東西軸の長さは1.18mをはかる。底部付近には植物遺存体が薄く堆積していた。壷の口縁部が出土している。SF125は調査区中央部からやや西寄り、C5グリットに位置する。土坑の西側はSD122と、北側はSP130と重複している。SF126は調査区中央部から東寄りのC5・６グリットに位置する。西側はSD124と重複している。南半部は調査区外に延びている。南に向かって深くなっている。



第23図　１区５面杭位置図



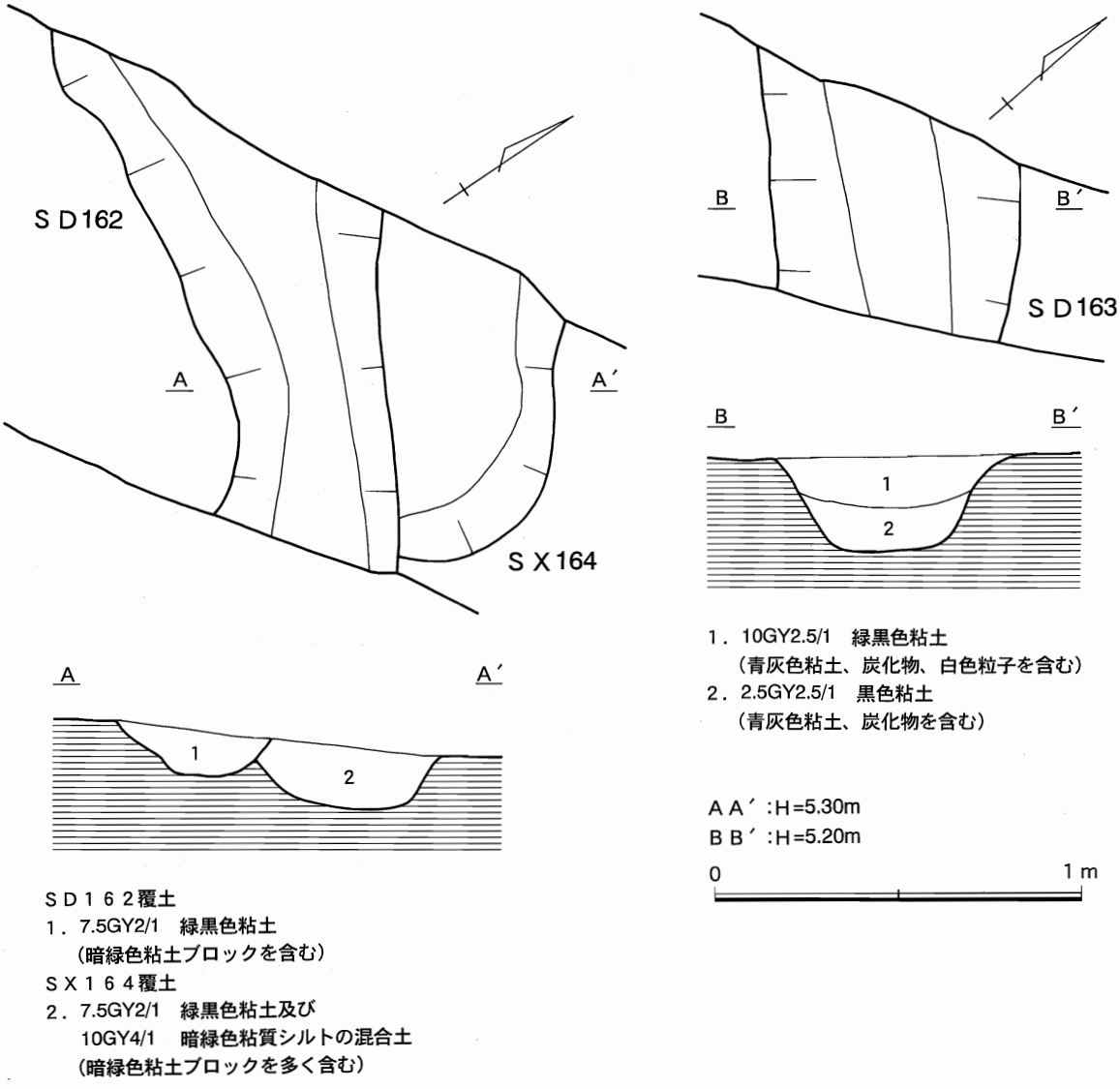
第24図　１区６面遺物出土状況図

６面（第13・24図　写真図版９）

性格不明遺構（SX：第24図　写真図版９）

第25層上面を６面として捉えた。地形は調査区中央部、Ｂ・C5グリット付近で標高値が低くなるが、概して平坦な面である。遺構面を覆う23～24層からは中期の土器が出土している。遺構は性格の判然としない遺構（SX）が３基検出されたが、下記のSX161を中心に記しておく。

SX161は調査区中央部、B5グリットに位置する。調査区北壁に接し、遺構の大部分は調査区外へ大きく展開するものと思われる。遺構は緩やかに落ち込み、その深さは約11cmをはかる。凹地状の自然地形の可能性もある。その覆土は暗緑灰色粘土を基調とする。覆土中より土器は２点出土しているが、そのうち土器40は覆土１層からの出土である。また当遺構から約２m南西の位置で土器43が、北東に5.5mの位置に土器42が出土している。共に弥生時代中期代の土器である。42・43ともにその出土状況から遺構に伴う可能性があったが、検出することは出来なかった。



第25図　１区７面SD162・163遺構図

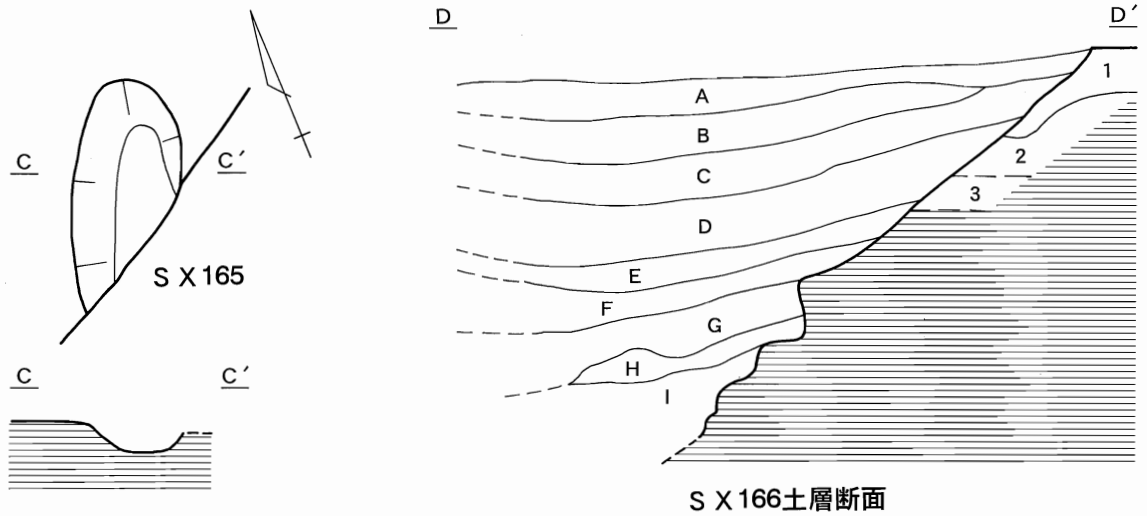
７面（第13・25・26図　写真図版９）

第26層上面を７面として捉えた。この面の標高値は約5.2mで平坦な地形である。この面からいくつかの遺構を検出した。いずれの遺構も調査区外へ広がるもので、ここで示した遺構の種類はあくまでも推定である。溝状遺構と推定された遺構は２基を数える。なお遺構面よりもさらに下位には遺構が存在する可能性もあったが、調査可能な範囲が極めて狭長で危険と判断して掘削調査を終了した。

溝状遺構（SD：第25図）

SD162は調査区西端からやや東寄りの位置、B4グリットからC5グリットにかけて位置する。この溝状遺構は検出状況から西北の方向へ湾曲して延びる遺構であろう。上端幅は0.42～0.58m、下端幅は0.15～0.31m、深さは約20cmをはかる。断面形は逆台形である。北側でSX164と重複する。SX164の方が時期的に先行する可能性がある。遺物は出土していない。

SD163はC6グリットで検出できた遺構である。上端幅は約0.7m、下端幅は約0.25m、深さは25cmをはかる。断面は逆台形である。覆土は２層に分層される。遺物は出土していない。SD162とともにほぼ同一方向へ延びるものと推定される。



S X166土層断面

1．10GY4/1　暗緑灰色シルト（１区基本土層２６）
2．5PB2/1　青黒色粘土（１区基本土層２７）
3．N3/1　暗灰色粘土（１区基本土層２８）
ＳＸ１６６覆土
A．2.5GY2.5/1　黒色粘土
（白色粒子、炭化物、暗緑色砂を含む）
B．10GY2/1　緑黒色粘土
（ラミナ層。炭化物が縞状に堆積。青灰色粘土ブロック、炭化物を含む）
C．5GY5/1　オリーブ灰色粘土
（ラミナ層。炭化物、緑黒色粘土が縞状に堆積）
D．2.5Y3/1　黒褐色粘質シルト
（ラミナ層。炭化物、植物遺体が縞状に堆積、
青灰色粘土ブロック・淡黄褐色粘土ブロックを含む）
E．5GY2/1　オリーブ黒色シルト
（炭化物、植物遺体が縞状に堆積。青灰色粘土ブロックを含む）
F．5G3.5/1　暗緑灰色砂
（植物、暗灰色粘土ブロックを含む）
G．5G4/1　暗緑灰色シルト
（黒色粘土ブロック、植物遺体を多く含む）
H．2.5GY2/1　黒色粘土
（青灰色粘土ブロック、植物遺体を含む）
I．5G3.5/1　暗緑灰色シルト質砂
（植物遺体、木片を多く含む）

ＣＣ′：H=5.20m
ＤＤ′：H=5.00m

0　1 m

第26図　１区７面SX165・166遺構図

性格不明遺構（SX：第26図　写真図版９）

SX166は調査区の中央に位置し、長さ約9.8mをはかる。平面形は不明で、調査区外に大部分が展開する。掘削の結果、覆土は９層に分層された。Ｂ～Ｄ層ではラミナ層が発達し、Ｆ層は細砂層である。またＧ層付近では遺構が人為的に段状に掘り込まれていた。当該遺構はＩ層以下については未調査であるが、土層の堆積状況から推定するならば、さらに深い位置に底面があるものと推定される。この遺構にかつて流水があったことはラミナ層の存在で理解されるものの、当初から人間の手で掘削された水路なのか、自然流路に人工的に手を加えたものなのかは判然としない。

第2節　2　区

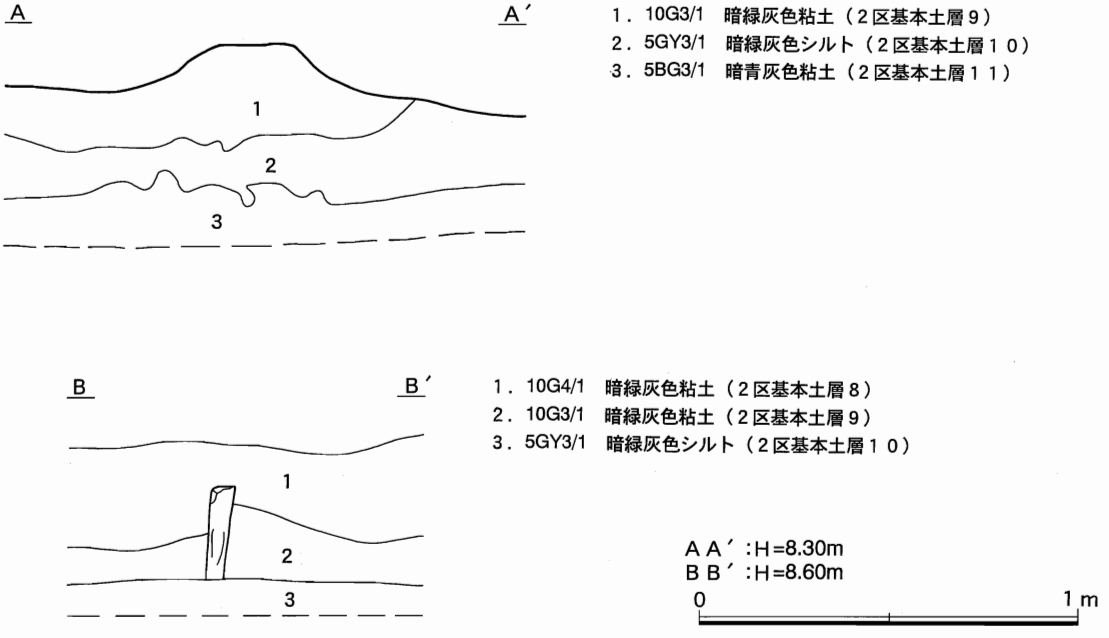
２区は平成13年12月～平成14年８月まで調査を実施した。調査対象面積は1,040㎡で、検出した遺構面は５面を数える。遺構の時期は弥生時代中期から中世と推定される。各面毎に事実説明を行いたい。

１面（第27～29図　写真図版10）

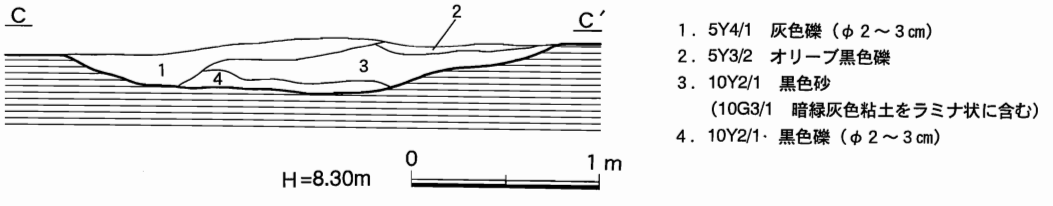
１面は水田面である。９層上面を遺構面として捉えた。標高値は調査区西端で8.15m、C14・C15グリット境界線付近で8.20m、調査区東端で8.30mをはかり、地形としては平坦であるがわずかに南西方向に傾斜する地形である。

畦畔（SK：第27・29図　写真図版10）

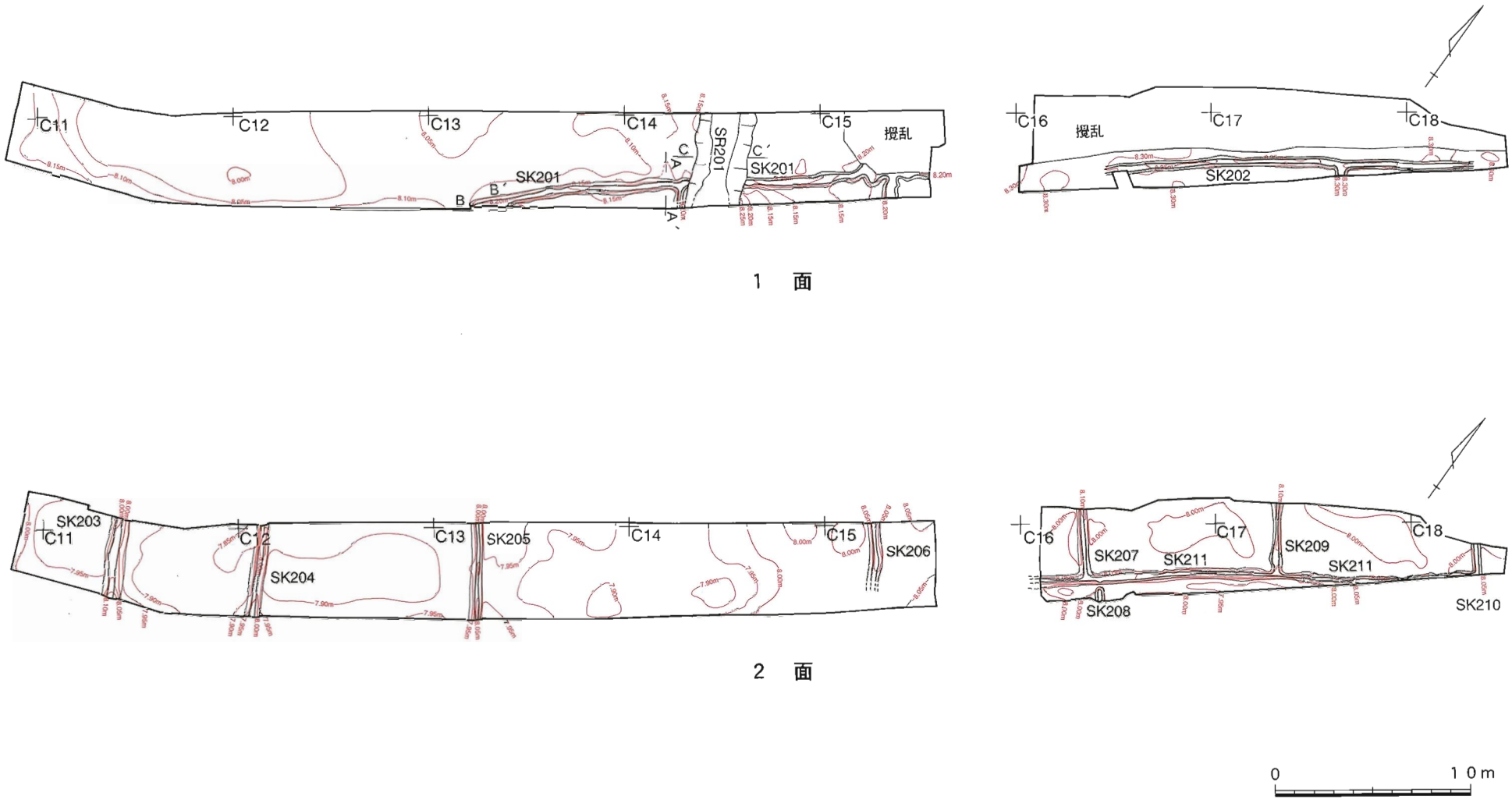
SK201・202はC13グリットからC18グリットにかけて検出した。C15～C16グリットにかけて検出出来なかったが、本来は同一の畦畔であろう。検出された畦畔の方向はN54.5°E、総長は51.8m、上端幅約0.2～0.3m、下端幅約0.4～0.5mをはかる。木材等の構築材を使用していない盛土畦畔である。畦畔の高さはC14グリットのSR201東側で10cm程度遺存していたが、１cm程度しか検出できなかった部分もあり、全体的に遺存状態は良好ではない。またC14・15・17グリットで南東方向へ派生する畦畔が認められる。C13グリットの調査区南壁際では杭が打設されていたが、１本のみであり護岸機能は期待されない。これらの遺構の所属時期は判然としない。



第27図　２区１面SK201土層断面図



第28図　２区１面SR201土層断面図



第29図　２区１・２面全体図

自然流路（SR：第28図　写真図版10）

自然流路はSR201のみ確認した。C14グリットの中央部をS28.5°Eの方向へ延びている。上端幅は約2.5～2.9m、下端幅約0.8～1.7m、深さは約22cmである。底面は平坦で調査区北壁際の標高値は7.967m、南壁では7.945mをはかりわずかに南へ傾斜する。立ち上がりは緩やかで覆土の主体は砂礫である。このSR201はSK201を破壊して南流しており、時期的に畦畔より新しい。遺物は出土していない。

２面（第29図　写真図版10）

２面も１面同様水田面である。11層上面を遺構面として捉えた。標高値は調査区西端で7.843m、調査区中央部C14グリット付近で7.900m、調査区東端で8.032mをはかる。地形としては平坦であるが、南西方向に傾斜する地形である。この遺構面の所属時期は古代から中世か。

畦畔（SK：第29図　写真図版10）

畦畔は南北方向に延びる畦畔を８条、東西方向に延びる畦畔を１条、計９条の畦畔を検出した。No.は西側から付与している。なおこれらの畦畔は木材等の構築材は使用されていない盛土畦畔である。

SK203はC11グリットのほぼ中央部で検出した。N26.5°Wの方向へ延びる。上端幅約0.25～0.40m、下端幅約0.8～1.0m、高さ約７～13cmをはかる盛土畦畔である。総長4.1mである。

SK204はC12グリットの西端で検出した。N27.5°Wの方向に延びる。SK203とほぼ並行である。上端幅約0.15～0.25m、下端幅約0.7～0.8m、高さ約８～16.5cmをはかる盛土畦畔である。総長4.8mである。

SK205はC13グリットの西よりの位置で検出した。この畦畔の延びる方向はN35°Wで、SK203・204よりやや西側に傾く。上端幅約0.10～0.15m、下端幅約0.5～0.6m、高さ約7.8～13.0cmをはかる盛土畦畔である。総長は4.95mである。

SK206はC15グリットでも西寄りの位置で検出した。畦畔の延びる方向はSK205と同じN35°Wである。上端幅約0.25～0.30m、下端幅約0.6～0.65m、高さ約3.8～9.6cmをはかる盛土畦畔である。総長3.0mで、南半部は消失している。

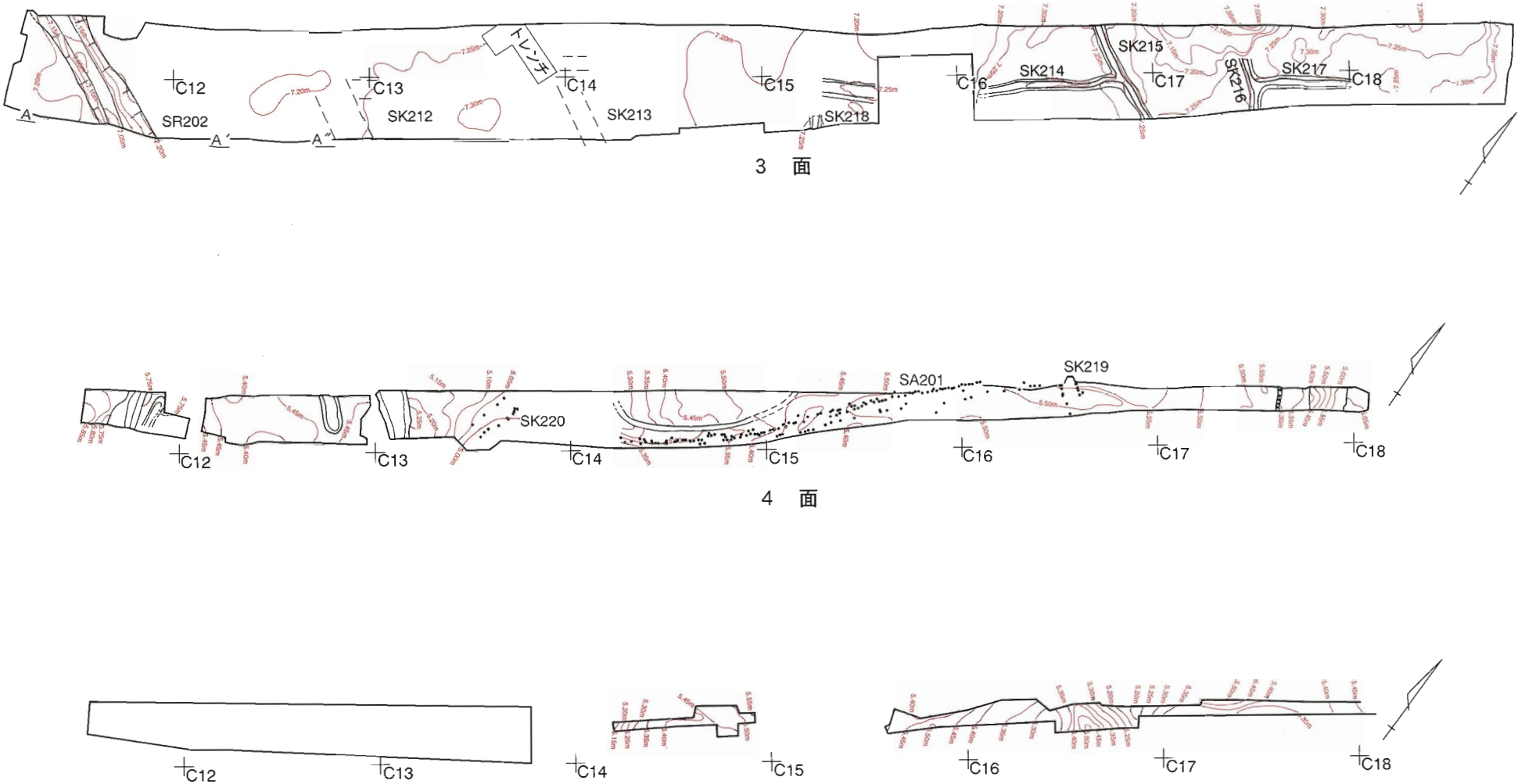
SK207はC16グリットの中央部からやや西よりの位置で検出した。畦畔の延びる方向はN37.5°WでSK205・206が延びる方向より僅かに西へ傾く。この畦畔の南端はSK211に接続する。上端幅約0.2m、下端幅約0.5～0.55m、高さ約８cmをはかる盛土畦畔である。総長3.2mである。

SK208はC16グリットのほぼ中央部、調査区南壁際で検出した。この畦畔の延びる方向はN37.5°Wである。上端幅0.18m、下端幅0.45m、高さ約４cmをはかる小規模な盛土畦畔である。総長0.85mである。北端は東西方向に延びるSK211とは接続せず、水口としている。

SK209はC17グリット中央部からやや西寄りの位置で検出した。この畦畔の延びる方向はN35°Wで、南端はSK211に接続する。上端幅約0.12～0.32m、下端幅約0.35～0.63m、高さ6.8～11.4cmをはかる小規模な盛土畦畔である。総長3.55mである。SK211との接続部でやや下端幅が減少する。

SK210はC18グリットの中央部よりもやや西寄りの位置で検出した。この畦畔の延びる方向はN40.5°Wで、他の南北方向で延びる畦畔よりも西に傾いた方向である。上端幅約0.20m、下端幅約0.45m、高さ４～６cmをはかる小規模な盛土畦畔で、総長は1.5mである。南端はSK211と合流する。

SK211はこの遺構面で唯一東西方向の畦畔である。C16～C18にかけて検出された。総長23.8mをはかる。畦畔の延びる方向はN54°Eで１面で検出されたSK201・202と同一の位置・規模・方向であることから、畦畔の高まりを検出出来なかったC15グリットより西の区域にも、本来は存在していたものと推定される。上端幅は0.08～0.32m、下端幅は0.28～0.65m、高さは3.9～13.9cmをはかる狭長な盛土畦畔である。このSK211はSK207・209・210と合流する。またSK208と近接する水口付近では南側上端部を張り出



第30図　２区３・４・５面全体図

すように作られている。

これらの以上11条の畦畔のうちSK206～210の方向は酷似し、畦畔間隔も11.0m、10.2m、10.4mと近似値である。またSK205とSK206の距離が20.5mと上記の畦畔間隔の約２倍の数値である。従って本来的にはこれらの畦畔間中央部に１条南北方向に延びる畦畔が存在していた可能性がある。

３面（第30～32図　写真図版11）

３面は１・２面同様、水田面である。14層上面を遺構面として捉えた。標高値は調査区西端部で7.213m、C15グリット杭付近で7.198m、調査区東端部付近で7.40mをはかる。この面では７条の畦畔と自然流路を１条検出した。この遺構面の所属時期は奈良時代以降か。

畦畔（SK：第30・31図　写真図版11）

SK212はC12・13グリットで検出した。調査時には畦畔の盛土部は検出できず、第31図で理解されるように畦畔よりも下位に位置していた構築材とおぼしき流木・礫の集積を検出した。検出面は16層上面であり本来的な遺構面である14層上面ではない。

SK213はC14グリットで検出した。調査時には畦畔の盛土部は検出できず、第31図で理解されるように畦畔よりも下位に位置していた構築材とおぼしき流木・礫の集積を検出した。検出面は15層上面であり本来的な遺構面である14層上面ではない。

SK214はC15・16グリットで検出した。N56°Eの方向へ延びる。C15グリット東半部においては平成13年に実施した試掘坑と重複する。総長は15.2mをはかる。上端幅約0.12～0.63m、下端幅約0.49～0.99m、高さ１～6.6cmをはかる小規模な盛土畦畔である。この畦畔はC15グリット西半部を除き、遺存状態は不良であった。このSK214は東端でSK215と合流し、西はC14グリット杭の方向、すなわちSK213方向へ延びていたものと推定される。

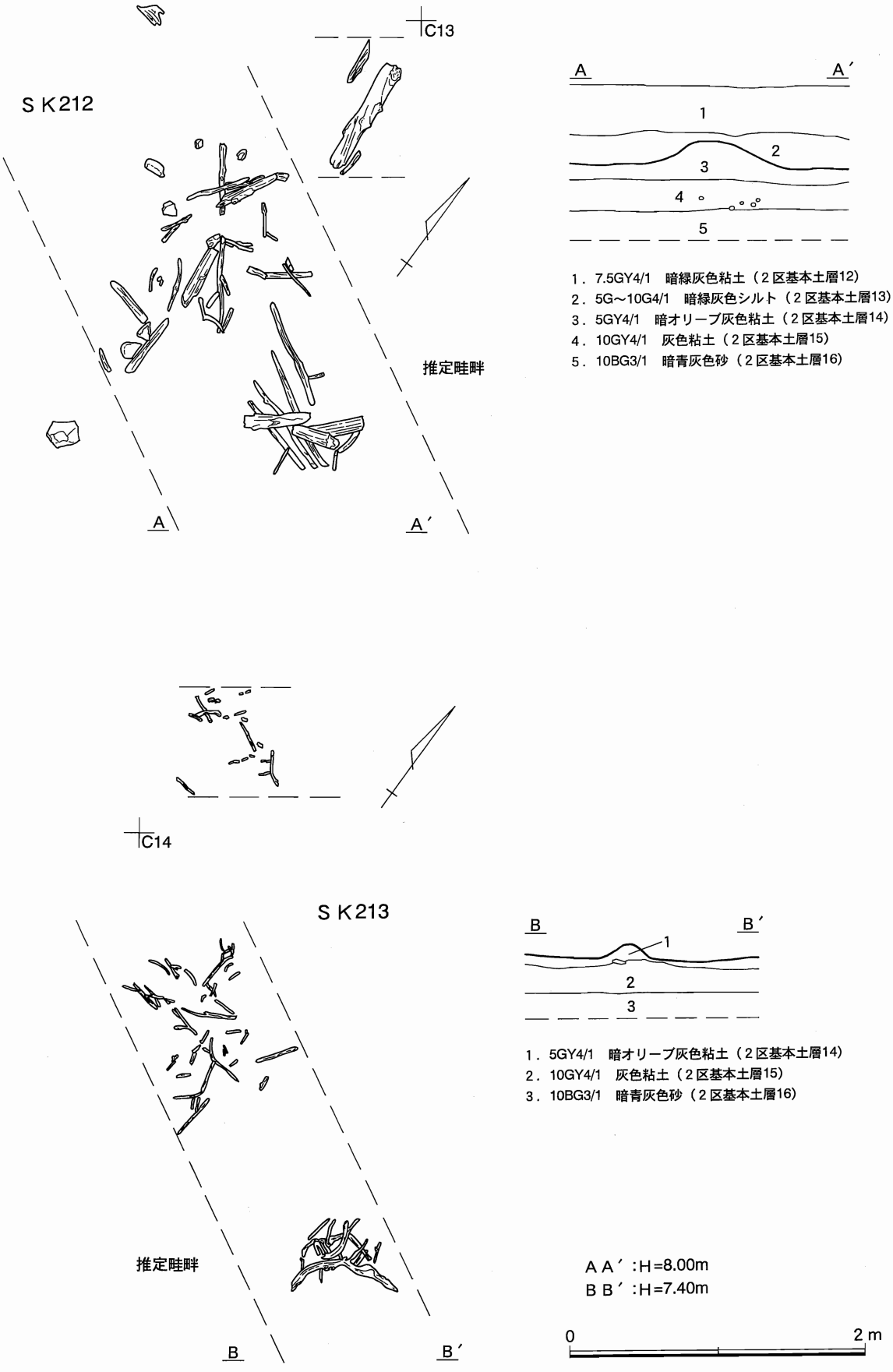
SK215はB・C16グリットの東端部に位置する。N62°Wの方向へ延び、他の調査区や遺構面で検出された南北方向の畦畔でも傾きが著しい。上端幅約0.18～0.32m、下端幅約0.49～0.75m、高さ約１～９cmをはかる小規模な盛土畦畔である。総長は約5.40mである。

SK216はB・C17グリット中央部に位置する。ＳＫ215と同様、N62°Wの方向へ延びる。上端幅約0.16～0.28m、下端幅約0.46～0.63m、高さ約２～７cmをはかる小規模な盛土畦畔である。B17グリットでは等高線の乱れからも理解されるように何らかの原因で攪乱を受けており、その際に畦畔も消失したものと思われる。総長は約2.6mである。

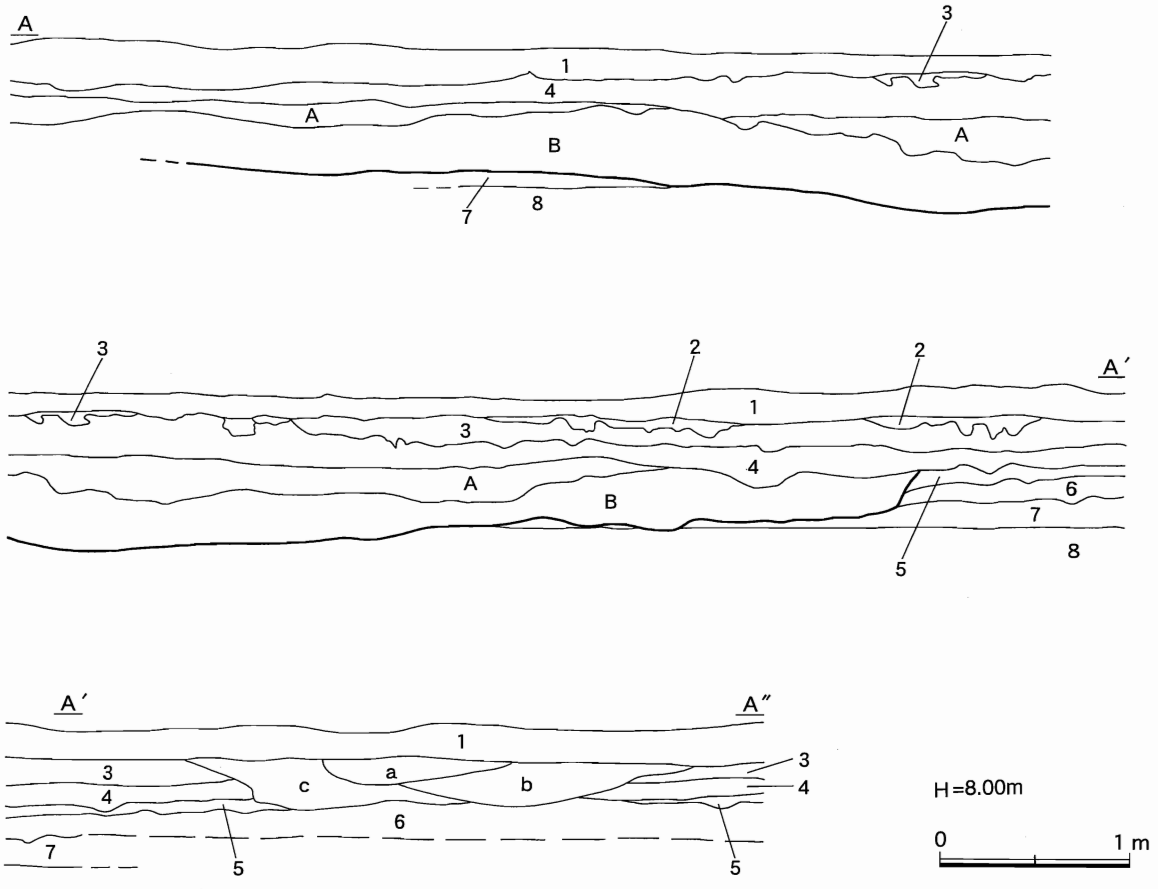
SK217はC17グリット北縁に位置する。その延びる方向はN54°Wで、この畦畔の西側に位置するSK214の方向と近似値である。上端幅約0.19～0.39m、下端幅約0.53～0.71m、高さは２～７cmをはかる小規模な盛土畦畔である。この畦畔はC18グリットとの境界部で消失するが、その原因はB18グリットで見られる等高線の乱れでも理解されるように攪乱の影響と思われる。

SK218はC15グリットでも調査区南壁際で検出された畦畔である。排水溝を掘削しているため、ごく一部を検出できたに過ぎない。残存状況からN34°Wの方向に延び、SK214と合流していた可能性が高い。上端幅は約0.22～0.30m、下端幅約0.6m、高さ約８cmをはかる小規模な盛土畦畔であったと推定される。

なおSK212・213で検出した構築材らしき木材の集積は他の畦畔の下位では検出することが出来なかった。木道の可能性もあり特殊な事例として今後検討したい。



第31図　２区３面SK212・213遺構図



1．5BG3/1　暗青灰色粘土（２区基本土層１１）
2．7.5GY2/1　緑黒色粘土（２区基本土層１１′）
3．7.5GY4/1　暗緑灰色粘土（２区基本土層１２）
4．10BG4/1　暗青灰色粘土（１区基本土層１０）
5．5G～10G4/1　暗緑灰色シルト（２区基本土層１３）
6．5GY4/1　暗オリーブ灰色粘土（２区基本土層１４）
7．10Y4/1　灰色粘土（２区基本土層１５）
8．7.5Y3/1　オリーブ黒色粘土（２区基本土層１５′）

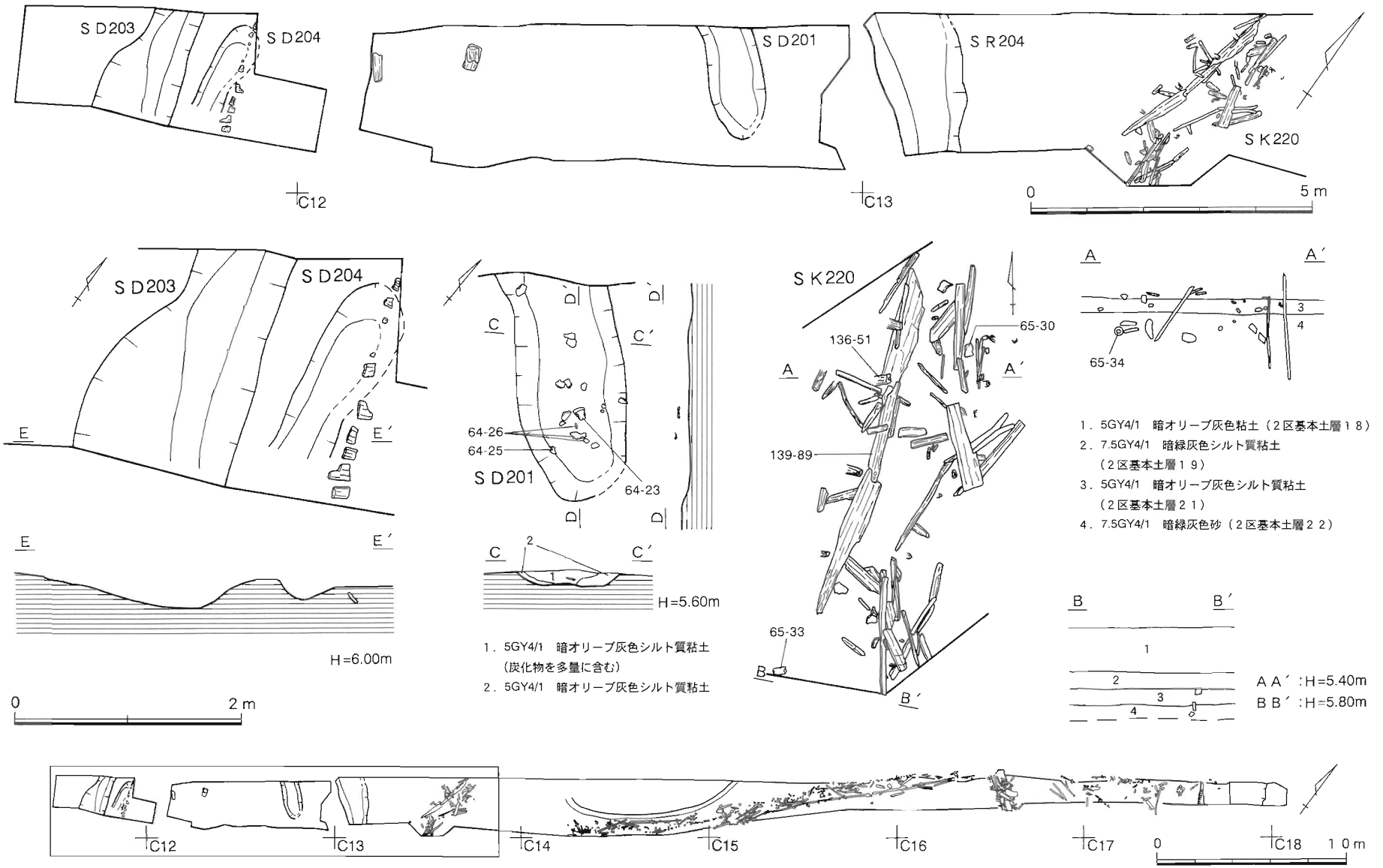
ＳＲ202
A．10GY4/1　暗緑灰色シルト質粘土
（下位に植物遺体の堆積あり）
B．10GY4/1　暗緑灰色粘土＋砂（ラミナ層）
ＳＲか？
a．7.5Y3/1　オリーブ黒色粘土
b．7.5Y3/1　オリーブ黒色粘土
（３・４層をブロック状に含む）
c．7.5Y3/1　オリーブ黒色粘土
（３・４層をブロック状に含む）

第32図　２区３面南壁土層断面図

自然流路（SR：第30・32図　写真図版11）

SR202は調査区西端、Ｂ・C11グリットで検出された。第32図の土層図でも理解できるように本来的には基本土層13層上面で確認できた遺構であるが、２～３面間の中間層除去の際には遺構と認識することが出来なかった。このSR202はE26.5°Sの方向へ直線的に流れ、検出面上での計測値では上端幅約1.75～2.20m、下端幅約0.59～0.84mをはかる。底面で管玉が１点出土した他に遺物の確認できなかった。覆土は２層に分かれ上層は暗緑灰色シルト質粘土で下面に植物遺体の堆積が認められた。また下層はラミナ層である。この自然流路は１区基本土層10層の暗青灰色粘土により被覆されていが、この土層は２区中央部では検出されていない。

一方、第32図の下段に示したように２区基本土層11層直下、12層を切り込む自然流路もしくは溝状遺構らしき断面が観察された。覆土はオリーブ黒色粘土を主体としている。このように調査区西端部壁に現れた土層の観察からは、当時の生活面であるかどうかはともかく、２～３面間に遺構面が数面存在することが理解された。



第33図　２区４面遺構図①

４面（第30・33～36図　写真図版12～16）

４面は集落域の縁辺部である。20層上面を遺構面として捉えている。３面をなす14層の下位には自然流路に起因する礫層である16層が調査区全面にわたって確認された、区域によっては特にB13・14グリット付近は20層以下まで大きく削平されている。16層に削平されながらも残置された18層（暗オリーブ灰色粘土層）は特にB14グリットから東に堆積が確認されている。この層位を掘削中に焼土を伴う遺構（SX201・202）が検出された。一応４面上層の遺構として取り扱いたい。遺物等が多く出土したのはSA201を被覆する19層で、遺物の大半は18層・19層からの出土である。４面の標高値は調査区西端部は約5.58m、東端部で約5.638mをはかる。遺構面の所属時期は弥生時代後期か。

杭列（SA：第30・34図　写真図版13～16）

SA201はB14～B16グリットにかけ、全長約21mもの長さで検出された。B14グリットには微高地が検出されている。その縁辺をめぐるように検出された。土層断面図でも理解されるように低地部に杭を打設した後、微高地と杭列との間に様々な木材を投棄している。護岸杭列と理解される。調査時にはB15グリット付近の微高地の存在が判然としなかった。このB15グリット区域からの杭列は２条になり、南側の杭列のみに横板を咬ませている。第34図の側面図では0.5～1.0m程度の杭をランダムに打ち込んでいるのがわかる。本来的に杭打畦畔ならば北側・南側共に同程度の横板を咬ませていたであろう。この杭列は東側に展開するSK219の方向へ延びることから、SK219と連結するものと思われる。またSK219と土手状遺構の間に杭が僅かに打設されているのが確認されるため、SD202の方向まで延びていたのであろう。杭列内部から土器・木製品が出土している。杭列の北側に展開する微高地上では土器80が出土している。また後述する４面上層遺構であるSX201・202の下位にあたる。また銅鏃の出土位置もこの付近である。

畦畔（SK：第33・34・36図　写真図版12・15）

畦畔は２条検出した。SK219は杭等の構築材を使用した杭打畦畔である。B16グリットのほぼ中央部で検出された。N56°Wの方向へ直線的に延びている。縦杭を打設したのち横木で土留めを施し、内部に木片等を大量に配置している。

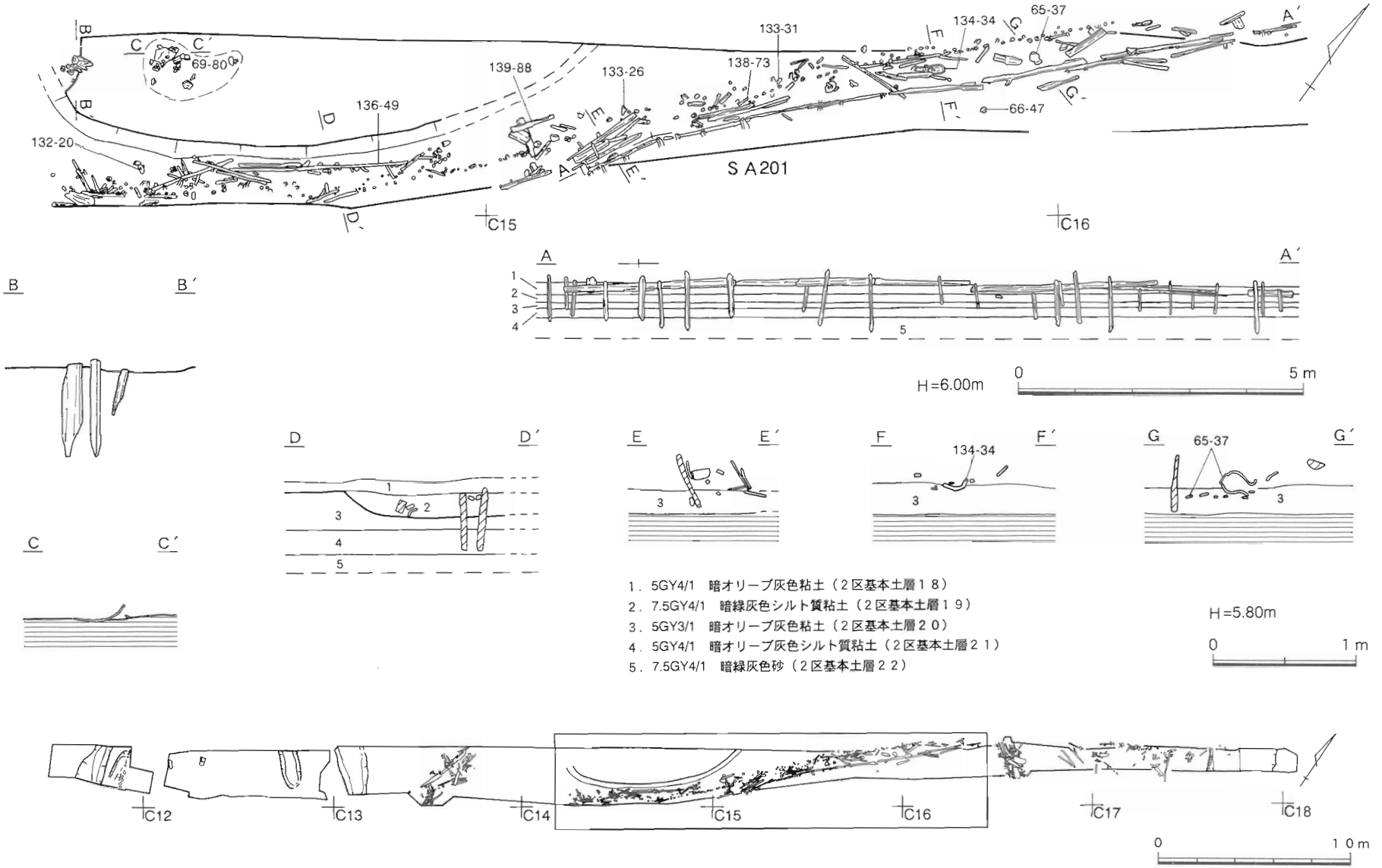
SK220も杭等の構築材を使用した杭打畦畔である。B13グリットのほぼ中央部で検出された。N16°Eの方向へ直線的に延びている。平面図、２箇所の土層堆積状況図で理解されるように、盛土及び構築材が流出して埋没したと推定される。ただ削平のため微高地との関係が不明である。

溝状遺構（SD：第33・36図　写真図版12・15）

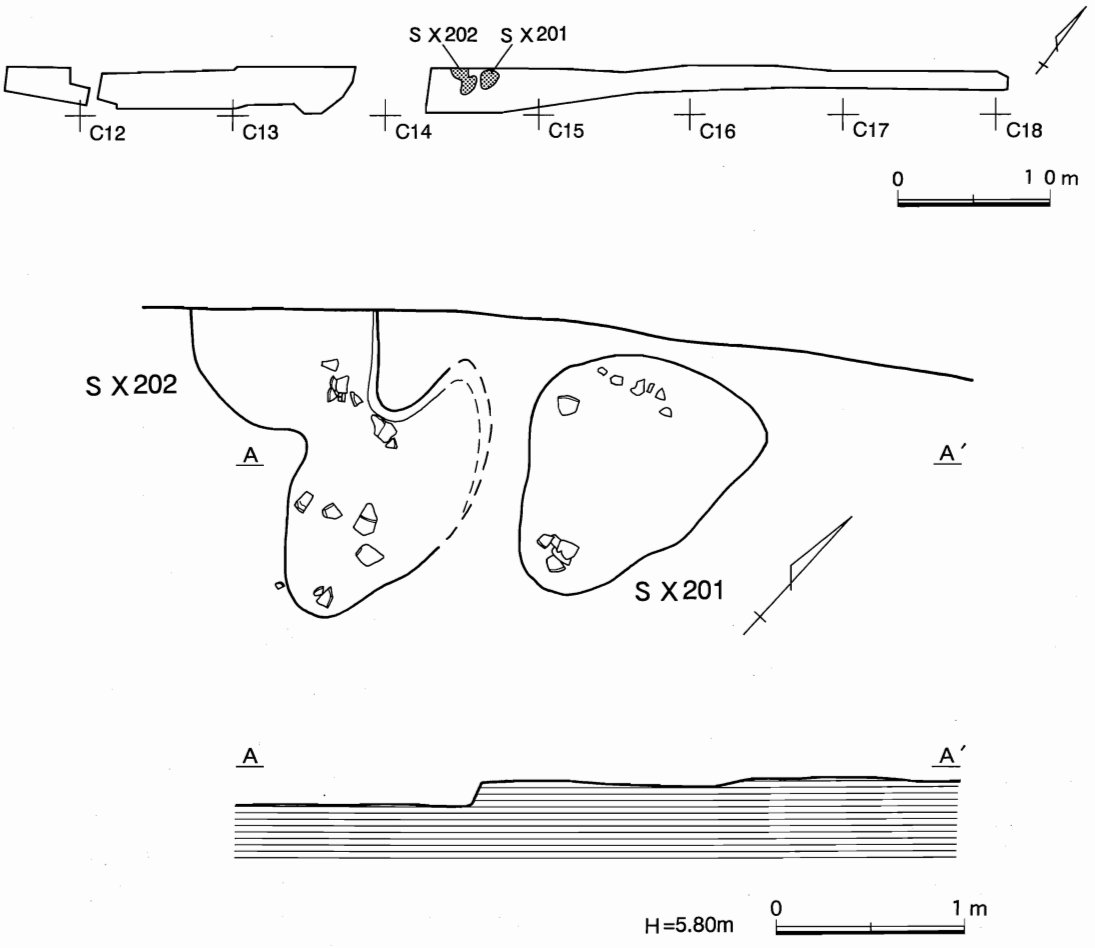
溝状遺構は４条検出した。いずれの溝状遺構も完全に検出しえたものは無く、部分的な検出で終わっている。なおこれらの溝状遺構は建物跡に付随する周溝の可能性がある。

SD201はB12グリットでもやや東寄りに位置する。この溝状遺構はN46°Wの方向へ直線的に延びている。上端幅は0.88m、下端幅は約0.56m、深さは14.4cmをはかる。底面は平坦で覆土は２層に分層され、１層下位から底面にかけて土器片が多く出土した。

SD202はB17グリットでもやや東寄りに位置している。この溝状遺構は約1.1m程度検出されているにすぎない。検出状況ではN36°Wの方向へ延びている。上端幅は3.51m、下端幅は1.58m、深さは43cmをはかる。底面は平坦である。東側は４°という傾斜角でかなり緩やかに立ち上がる。西側は土手状を呈し、細い杭を約５～20cm間隔で打ち込まれた護岸がなされている。これを**土手状遺構**としておく。SD202の覆土は３層に分層され、下位には泥炭質土と暗オリーブ灰色シルト質粘土がややラミナ状に堆積しており、該期の水流がさほど激しくなかった可能性がある。前述した土手状遺構の上面のａ～ｃ層は小礫があた



第34図　２区４面遺構図②



第35図　２区４面SX201・202遺構図

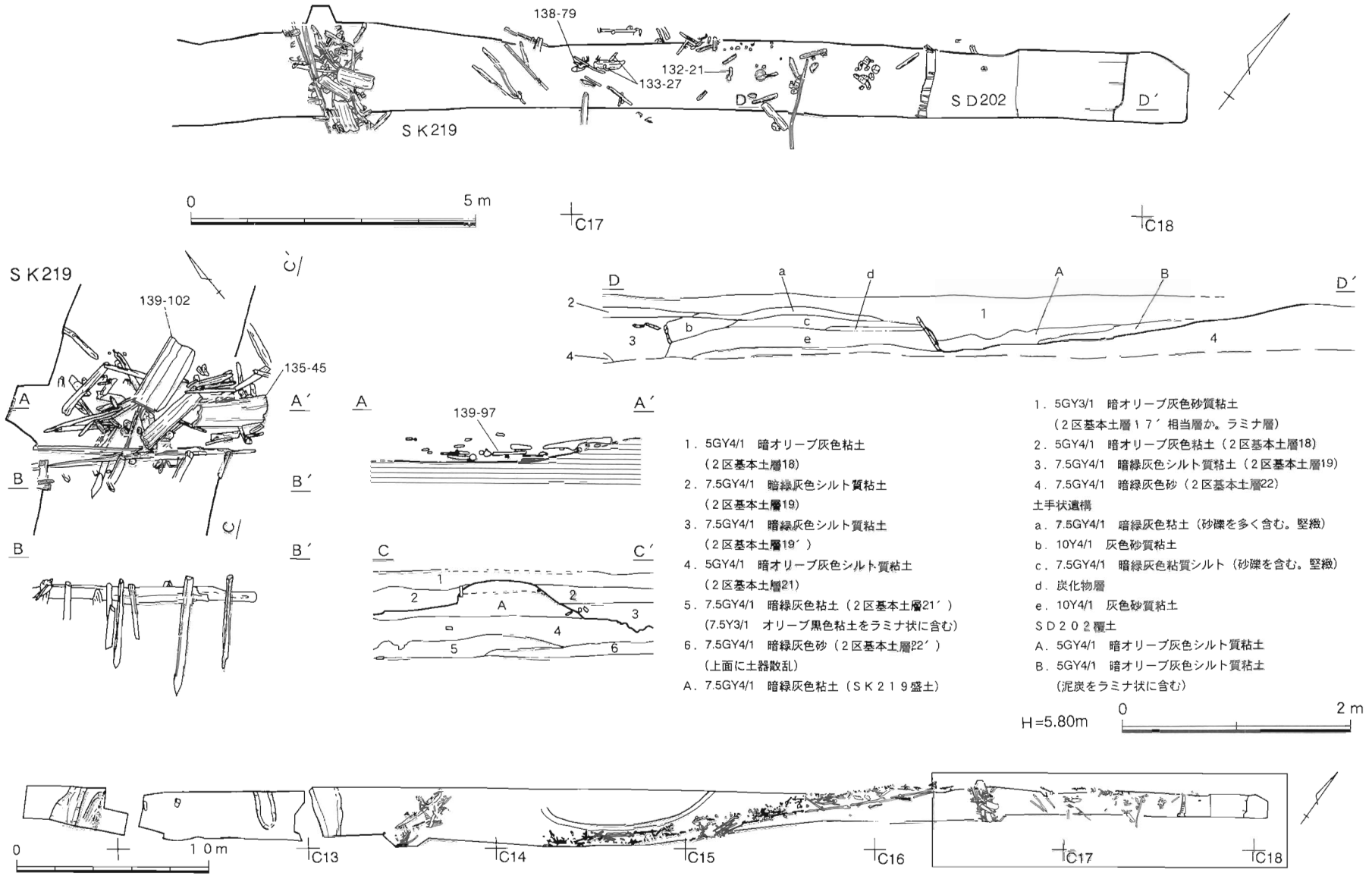
かも踏み固められたように締まりがあり、土器片も多く出土した。土手状遺構の西側は薄い木板により簡単な土留めが施されている。土手状遺構と畦畔SK219との間は水田として機能した可能性があるものの、調査時には判断できなかった。多くの木製品が出土している。

SD203・SD204は共に２区現地調査の最終段階で検出した溝状遺構である。B11グリットに位置している。SD203はN17°Wに延びる。上端幅は0.84～1.38mで、調査区南壁で西側上端部が膨らむため、平面は撥形を呈する。下端幅は0.42～0.25mをはかる。深さは20～25cmである。SD204はN6°Wの方向に延びる。調査時に設置した集水升に接し、その検出状況から集水升付近でこの溝状遺構は収束するものと見られる。上端幅は約0.5m程度で、下端幅は約0.25mである。このSD204が埋没後にSD203に並行するように薄い木板が列状に検出された。隣接して礎板と思しき板が２枚検出されたことから、SD204と木板列と礎板は１軒の建物跡を構成していた可能性もある。

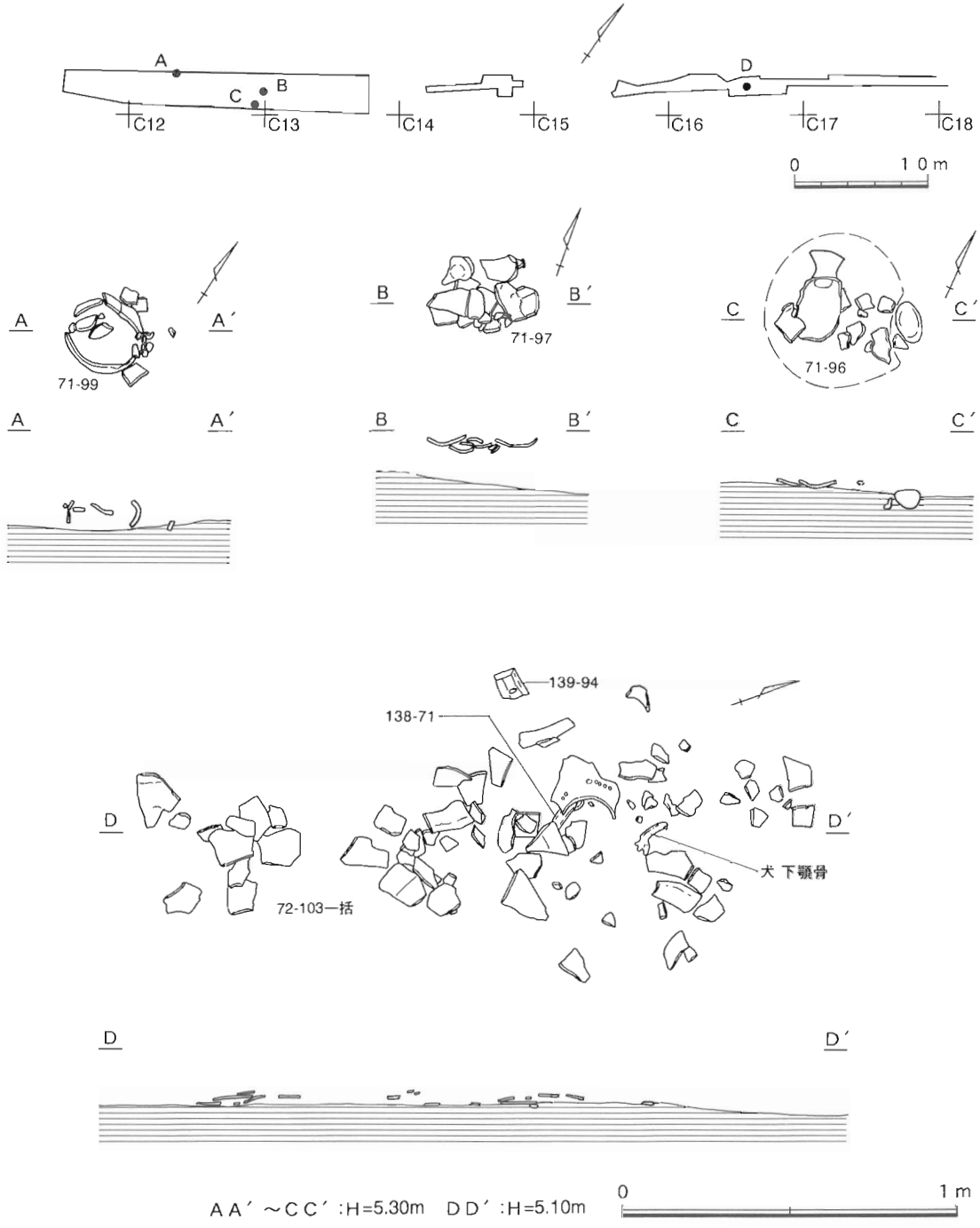
不明遺構（SX：第35図　写真図版14）

SX201・202共にB14グリットで18層を掘削中に検出された遺構である。この遺構は本来的に４面より上層の遺構であろう。SX201の平面形は1.31m×1.08mのいびつな楕円形を呈する。焼土・炭化物及び土器片を含む灰色粘土を覆土となす。深さは約２～３cm程度で、底面は僅かだが被熱していた。

SX202はSX201の西側に接し、本来は焼土・土器片を含んだ暗オリーブ灰色粘土を覆土とする２基の土坑であったものと思われる。検出状況からSX201よりも時期的に先行するものであろう。



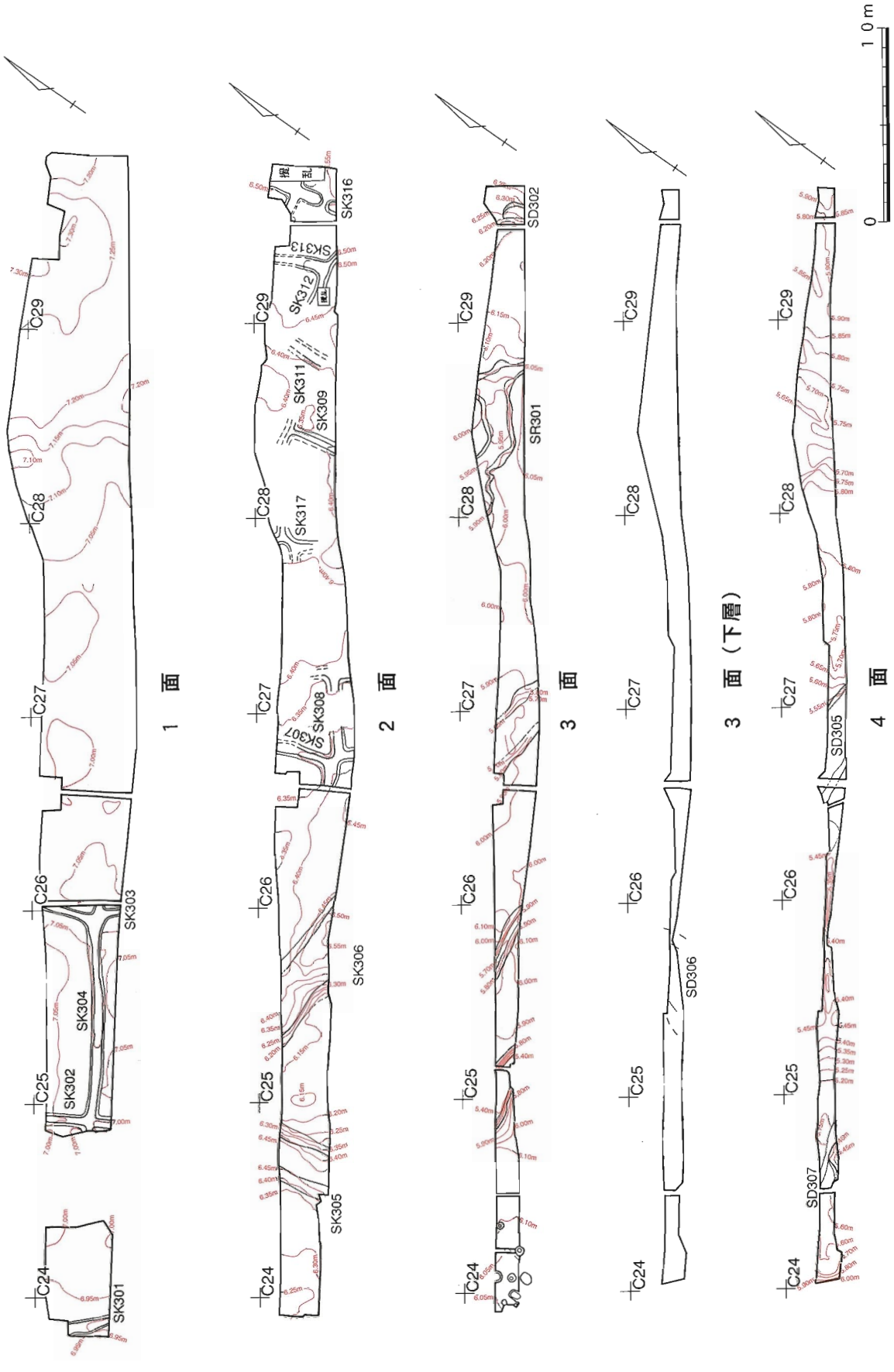
第36図　２区４面遺構図③



第37図　２区５面遺物出土状況図

５面（第30・37図　写真図版16・17）

４面調査終了時には既に現地は狭長であり、調査出来る範囲が限定されていた。SK219の下位を掘削時に弥生時代末の大型壷（土器103）が22層（暗緑灰色砂層）上面で、イヌの下顎骨１点と共に出土している。時期的に弥生時代後期後葉以降の時期と推定され、４面で出土した土器群と比較しても時期差はあまり見いだせない。また砂層が検出されたことで自然流路面である可能性が強まった。４面で水田域と推定されるB13グリット以東が本来的には自然流路跡である可能性が湧出するが極めて狭長な調査域であり断定は出来ない。一方調査区西半部、B12グリットで弥生時代中期代の壷（土器96・97・99）が３点出土している。該期の遺構は見いだせなかった。４面では礎板が検出されていることから中期代から比較的安定した区域であったことを推定させる。


1 面
2 面
3 面
3 面（下層）
4 面
C24
C25
C26
C27
C28
C29
SK301
SK302
SK303
SK304
SK305
SK306
SK307
SK308
SK309
SK311
SK312
SK313
SK316
SK317
SD302
SR301
SD305
SD306
1 0 m
0

第38図　３区全体図

第3節　3　区

3区は平成14年7月～12月まで調査を実施した。調査対象面積は1395㎡で、検出した遺構面は5面を数える。遺構の時期は弥生時代中期から平安時代と推定される。各面毎に事実説明を行いたい。

1面（第38図　写真図版18）

1面は水田面である。4層（オリーブ黒色粘土層）上面を遺構面としてとらえた。標高値は調査区西端で6.95m、C26・27グリット境界部で7.00m、調査区東端で7.20mをはかる。地形としては平坦であるが、西側へ向かって緩やかに傾斜する遺構面である。畦畔は調査区の西半部で検出され、東側では検出することが出来なかった。ただC28グリット付近で地形の変化が著しく、本来的にこの付近に北東から南東に向かって畦畔が設けられていた可能性はある。この遺構面は3層（オリーブ黒色シルト）で被覆され、作業員による精査作業により検出した。3層はC24グリット付近で上層の砂礫層により削られた箇所があるものの、ほぼ全面にわたって浸食されることなく4面を被覆していた。1面の検出された畦畔は疑似畦畔Bと考えられる。なお1面から遺物としては泥除け具（木製品3）が出土しているに過ぎない。C26グリットの調査区南壁よりの位置で出土している。形態から奈良時代～平安時代と推定される。従って当該遺構面も泥除け具と同じ奈良時代～平安時代に該当しよう。

畦畔（SK：第38図　写真図版18）

本遺構面では4条の畦畔を検出している。いずれの畦畔も遺存状態は不良である。SK301は調査区の西端、C23グリットで検出された。検出できた長さは2.15mに過ぎない。N44°Wの方向へ延びる。この畦畔は木材等の構築材は使用されておらず、上端幅0.31～0.55m、下端幅0.47～0.72m、高さ3.7㎝程度の小規模な盛土畦畔である。畦畔中程でやや膨らむ。

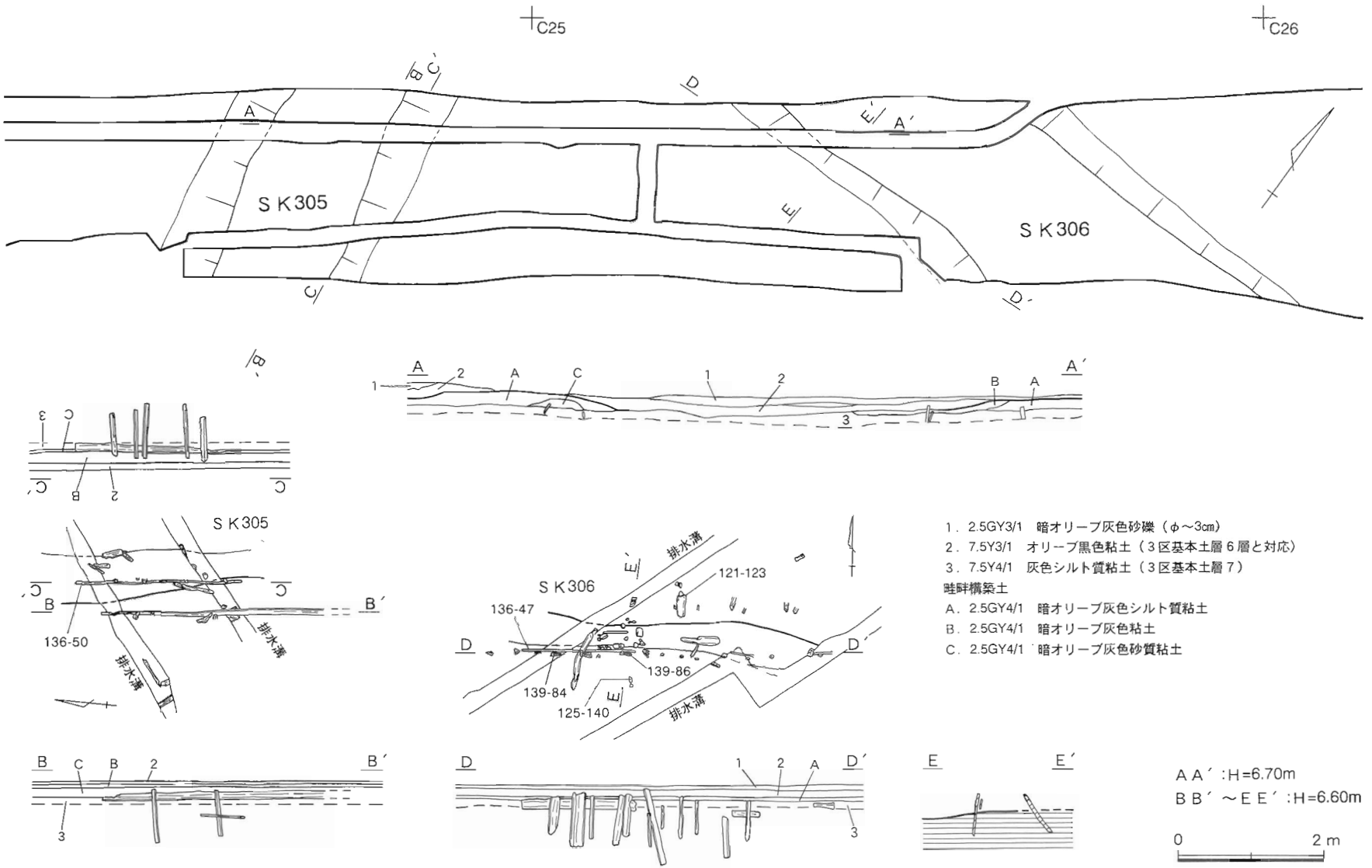
SK302はC24グリットの東際で検出された。検出できた長さは3.31mに過ぎない。N30°Wの方向へ直線的に延びる。この畦畔は木材等の構築材は使用されておらず、上端幅0.28～0.45m、下端幅0.57～0.71m、高さは5.8㎝程度の小規模な盛土畦畔である。この畦畔は調査区南壁寄りの位置でSK304と直交する。

SK303はC25・26グリット境界部に位置する。SK302と同様で北東から南西に延びるSK304と直交している。SK304を境に北側はN18°Wの方向へ延び、概ねSK302と並行する。この畦畔は木材等の構築材は使用されておらず、上端幅0.32～0.50m、下端幅0.44～0.75m、高さ3.0㎝程度の小規模な盛土畦畔である。遺存状態は不良である。

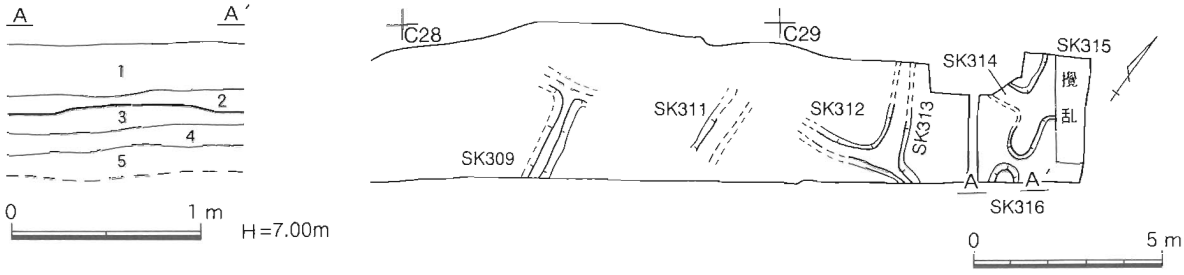
SK304はC24グリットからC25グリットにかけて検出された。検出できた畦畔の長さは約12.5mをはかる。西側は2層（砂礫層）による浸食を受けており、またSK301との直交部は残念ながら検出されなかった。検出された畦畔は直線的に延びており、その方向はN55°Eである。この畦畔は木材等の構築材は使用されておらず、上端幅0.35～0.67m、下端幅0.54～0.70m、高さ3.8㎝程度の小規模な盛土畦畔である。

2面（第38～40図　写真図版19～21）

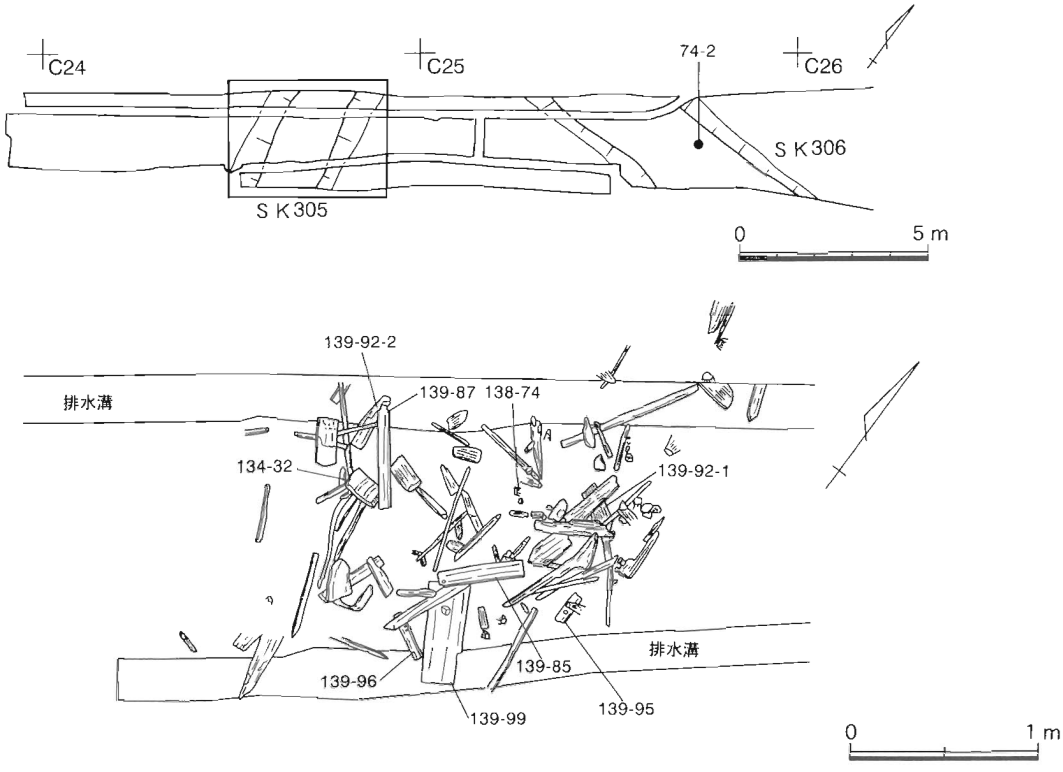
2面は水田面である。7層上面を遺構面としてとらえた。標高値は調査区西端部は6.25m、C26・27グリット境界部は6.33m、調査区東端部は6.55mをはかり、南東方向に向かって緩やかに傾斜している地形である。この面では畦畔が12条検出している。調査区東半部の畦畔については遺存状態が極めて悪く判然としない。この遺構面を水田面とした根拠は後述するSK305・306の存在にある。この遺構面の時期は弥生時代後期後半と推定される。



第39図　3区2面SK305・306遺構図



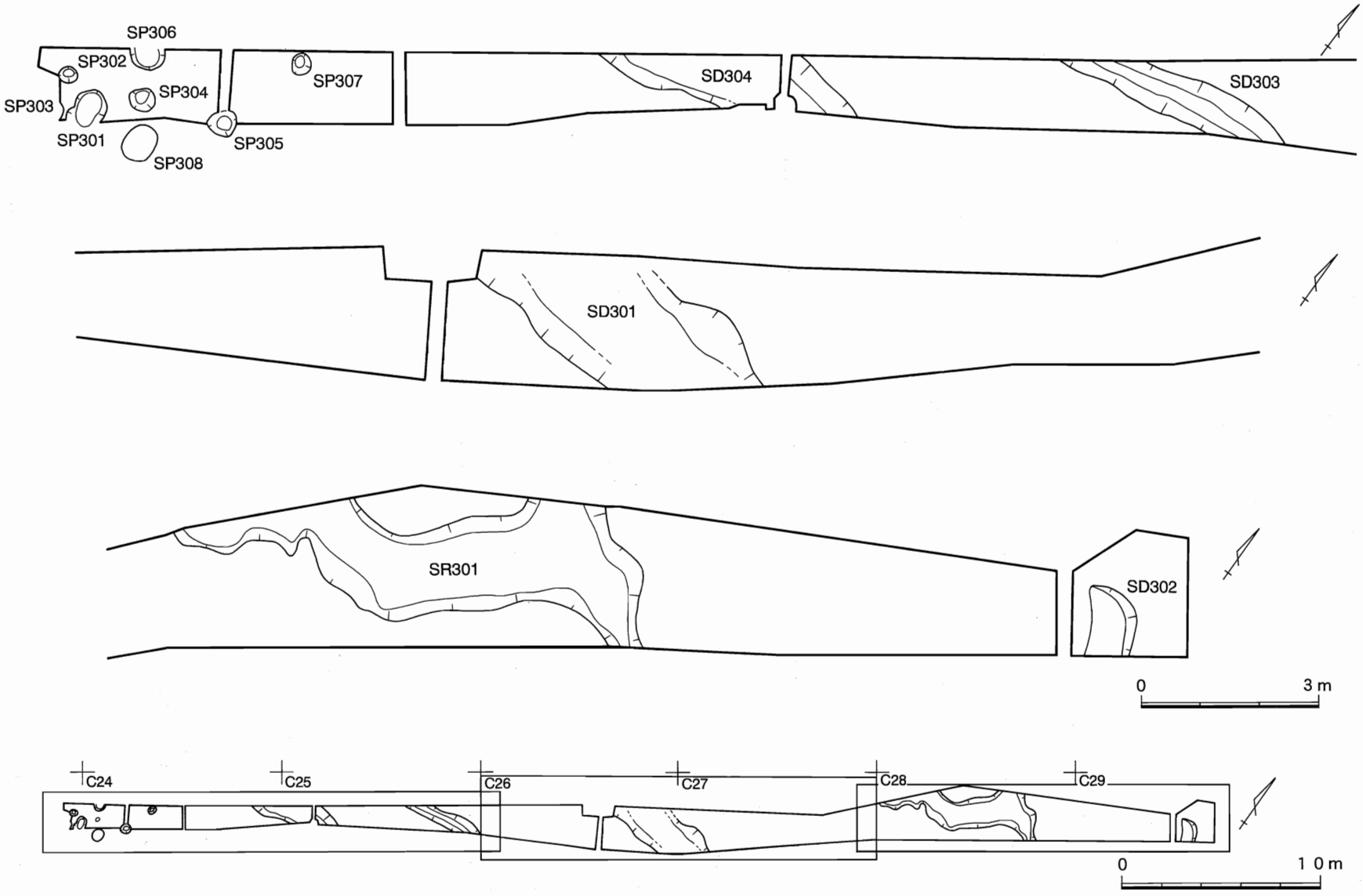
1．7.5GY5/1　緑灰色砂・シルト（３区基本土層５　ラミナ層）
2．7.5Y4/1　灰色シルト質粘土（３区基本土層６　砂粒多く含む）
3．7.5Y4/1　灰色シルト質粘土（３区基本土層７）
4．7.5Y3/2　オリーブ黒色粘質シルト（３区基本土層８）
5．5GY4/1～7.5GY4/1　暗オリーブ灰色～暗緑灰色粘質シルト（３区基本土層１０）



第40図　３区２面SK316・305遺構図

畦畔（SK：第38～40図　写真図版19～21）

本遺構面では12条の畦畔が検出されている。本節では遺存状態の良好であった畦畔２条について報告する。SK305はC24グリットで検出した。検出できたのはわずか2.72m程度に過ぎない。検出状況から構築時期には数段階あったものと推定される。新しい段階から観察すると、A層（暗オリーブ灰色シルト質粘土）で大きく広く盛土された段階、小規模であるがC層（暗オリーブ灰色粘土）を盛土とする杭打畦畔の段階、さらに下層に木材等の構築材を多く用いた段階の以上３段階に分けられる。この畦畔はN7°Wの方向へ延びており、最も新しい段階の盛土は上端幅は1.44～1.55m、下端幅2.67m、高さ９～15cmをはかる大規模な畦畔である。C層の段階になると長さ58～75cm、径５～７cm程度の杭を打ち込み、横板を押さえている。この横板の間隔は約40cmで並行して設置されている。第40図で示した畦畔構築の最初の段階では盛土は判然としなかったが木材・土器が集積しており、構築材として畦畔内に投入されたも

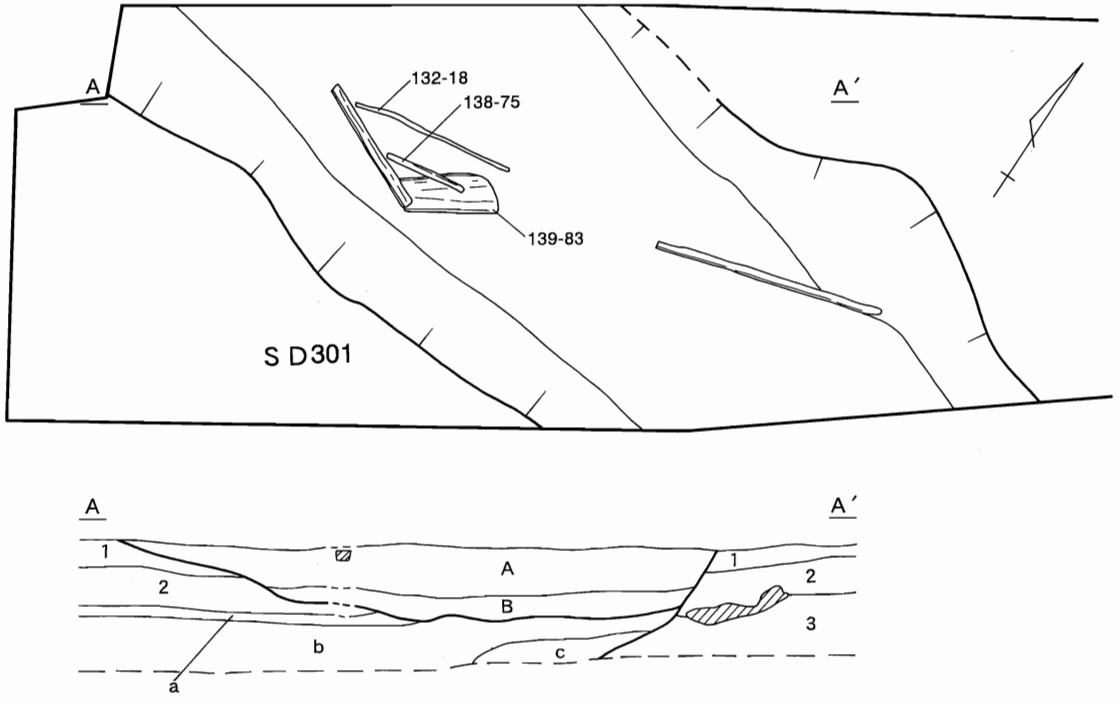


第41図　３区３面全体図

のと推定される。

SK306はC25・C26グリットにかけて検出した。検出できた長さは7.89mである。検出状況から構築時期は２段階あったものと推定される。新しい段階から観察するとＡ層（暗オリーブ灰色粘土）・Ｂ層で大きく広く盛土された段階、小規模な杭打畦畔の段階の以上２段階に分けられる。この畦畔はW3°Nの方向へ延びており、最も新しい段階の盛土は上端幅は約1.80m、下端幅は約2.9m、高さは３～12cmをはかる大規模な畦畔である。その前の段階になると長さ34～107cm程度の杭及び板材を打ち込んでいる。横板は一部に認められる。畦畔両側縁の杭相互の間隔は概ね0.7～0.8mで、ややSK305より広い。この段階での盛土は土層の観察でも認められないため、広く盛土を行った新しい段階で、盛土は流出していた可能性がある。横板がSK305と比べてSK306には少ないという状況からも、その可能性を補強する。

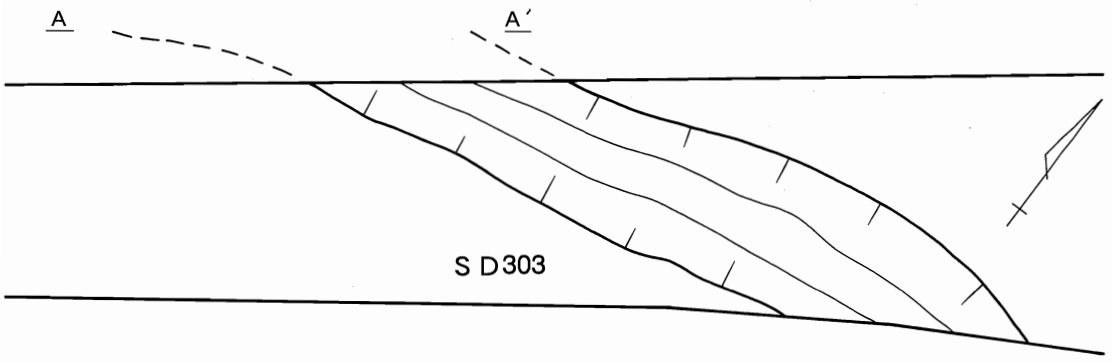
これらの二つの畦畔は直線的に延び、調査区外北側で直交しているものと思われる。平面図・土層断面図（第39図）で観察すると、SK305の西側、SK306の東側の水田面の標高値は、両畦畔間の面に比べ、比高差が20～30cmと低く、最終状況が低地状を呈していたようである。またSK305の西側、SK306の東側の標高値は畦畔とそう大差がなく、これだけ長い調査区にもかかわらず、３区の他の区域では杭打畦畔が検出されていないことを勘案すれば、当該畦畔の重要性が理解できるものと思われる。

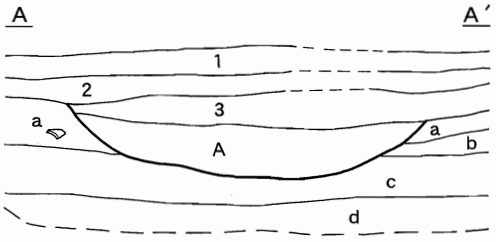


1．2.5GY4/1　暗オリーブ灰色粘質シルト（３区基本土層11）
2．N3/　暗灰色粘土（３区基本土層12）
3．N3/　暗灰色シルト（3区基本土層13）
S D301覆土
A．7.5Y3/2　オリーブ黒色砂
B．10G2/1　緑黒色砂
S D305覆土
a．5Y5/1　灰色粘土
b．N2/　黒色粘質シルト
c．N3/　暗灰色シルト

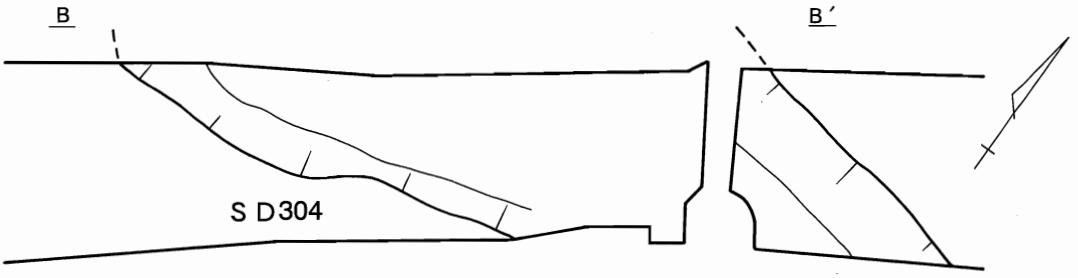
H=6.00m　0　1 m

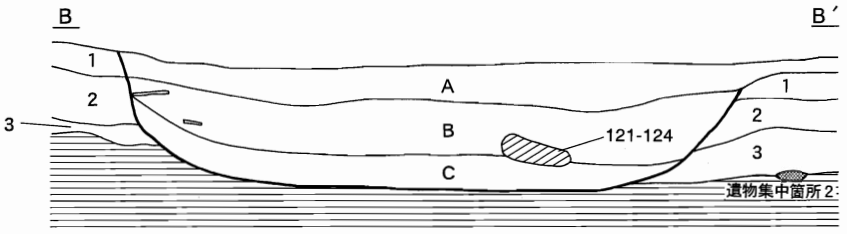
第42図　３区３面SD301遺構図





1．7.5Y4/1　灰色シルト質粘土（３区基本土層７）
2．7.5Y3/2　オリーブ黒色粘質シルト（３区基本土層８）
3．5GY4/1～7.5GY4/1　暗オリーブ灰色～暗緑灰色粘質シルト
（３区基本土層10）
S D303覆土
A．2.5Y4/1　泥炭質黄灰色シルト
（炭化物粒・木質遺物多く含む。中位に木質遺物集中域有り）
S D306覆土
a．2.5GY4/1　暗オリーブ灰色粘土（３区基本土層９）
b．7.5GY5/1　緑灰色シルト
c．7.5GY5/1　緑灰色シルト（泥炭をラミナ状に含む）
d．5GY4/1　暗オリーブ灰色砂質シルト+泥炭（ラミナ層）





1．5GY4/1　暗オリーブ灰色粘土
2．10Y4/1　灰色粘土
3．5G3/1　暗緑灰色砂質粘土
（２層土をブロック状に含む）
4．N2/　黒色シルト+7.5GY2/1　緑黒色シルト
（ラミナ層）

S D304覆土
A．10Y4/1　灰色粘質シルト
B．2.5GY4/1　暗オリーブ灰色粘土
（泥炭・炭化物粒多量に含む）
C．2.5GY4/1　暗オリーブ灰色砂
（B層土をブロック状に含む）

A A′：H=6.50m
B B′：H=6.20m

0　1 m

第43図　３区３面SD303・304遺構図

３面・３面下層（第38・41～47図　写真図版22・23）

３面は集落域縁辺部と推定される。11層上面を遺構面としてとらえた。標高値は調査区西端部で6.05m、C26・27グリット境界部で5.85m、調査区東端部で6.25mをはかる。この面では溝状遺構、柱穴群、自然流路跡を検出した。また遺構が重複している箇所があり、その状況から古い段階の遺構群は３面下層として位置づけた。３面下層の遺構に該当するのが後述するSD306である。３面・３面下層の時期は弥生時代後期から中期後半と推定される。

溝状遺構（SD：第41～43・46図　写真図版22）

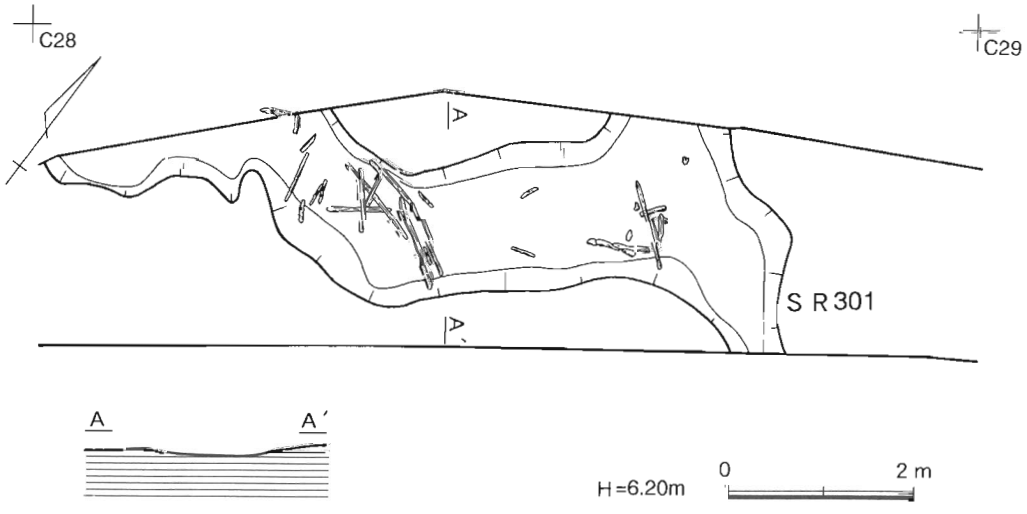
SD301はC26・27グリット境界部に位置する。検出した長さは2.93mをはかる。この溝状遺構の延びる方向はW9.5°Nである。上端幅は1.98～2.09m、下端幅は1.30m、深さは21～31cmをはかる。断面形は逆台形で、底面は平坦である。覆土は２層に分層される。A層（オリーブ黒色シルト質砂層）上位に木質遺物が出土、B層（緑黒色砂層）上位～中位にかけて土器片が多数出土した。いずれもこの場で投棄されたものでなく、上流から流れてきたものであろう。この溝状遺構の下位にあるSD305は４面に位置づけている。

SD302はC29グリットのほぼ中位に位置する。検出できた長さは1.1m程度である。浅い遺構であり、本報告では溝状遺構としたが別の種類の遺構かもしれない。

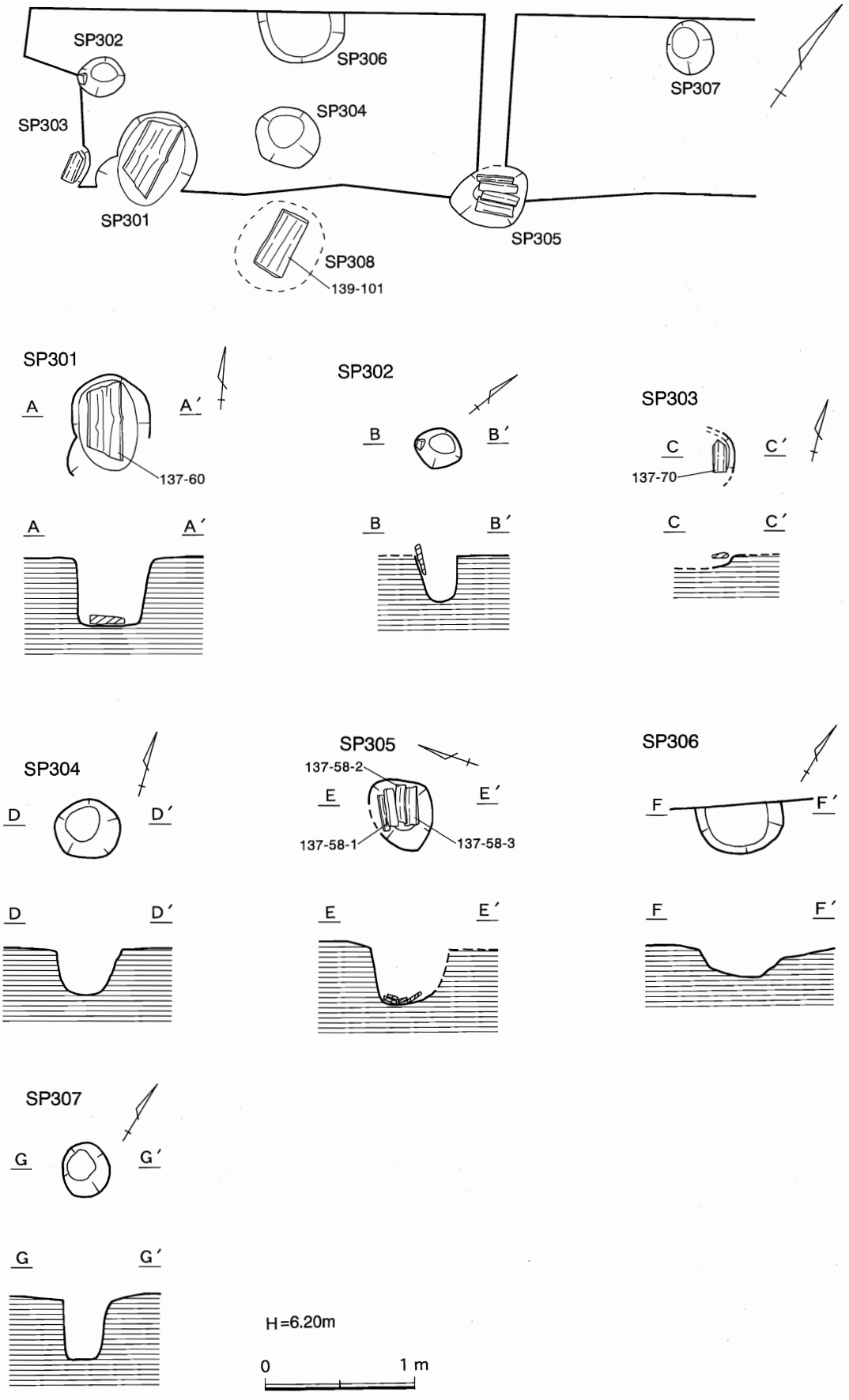
SD303はC25グリット東半部に位置している。検出した長さは4.03mをはかる。この溝状遺構の延びる方向はW9°Nである。上端幅は0.65～0.76m、下端幅は0.21～0.28m、深さは16～29cmをはかる。断面形はU字形を呈する。覆土は黄灰色シルトで、泥炭が混じる。下層のSD306の埋没後に掘削されている。

SD304はC24・25グリット境界部に位置する。検出した長さは4.01mで、この溝状遺構が延びる方向はW5°Nである。上端幅は約1.5m、下端幅約1.0mと推定される。深さは0.34～0.58mをはかる。断面形は逆台形で、底面は平坦である。覆土は３層に分層されるA層は灰色粘質シルトである。B層中に遺物が多く包含されていた。

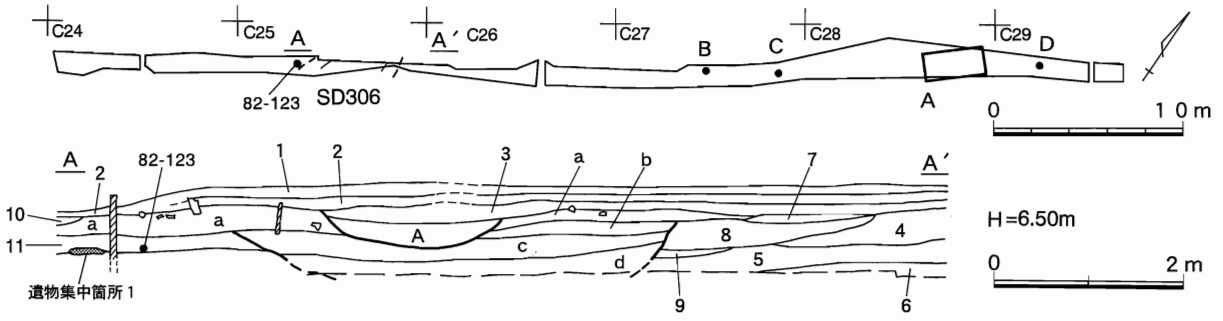
SD306はC25グリットに位置する。土層堆積の観察でその存在を把握した遺構である。その状況から南から北へ延びる溝状遺構である。土層断面では覆土b・c・dが堆積した後に、a層が被覆している。このa層が堆積した後にSD303が掘削・機能している。SD303と306は延びる方向、規模ともに異なる。性格については判然としない。



第44図　３区３面SR301遺構図

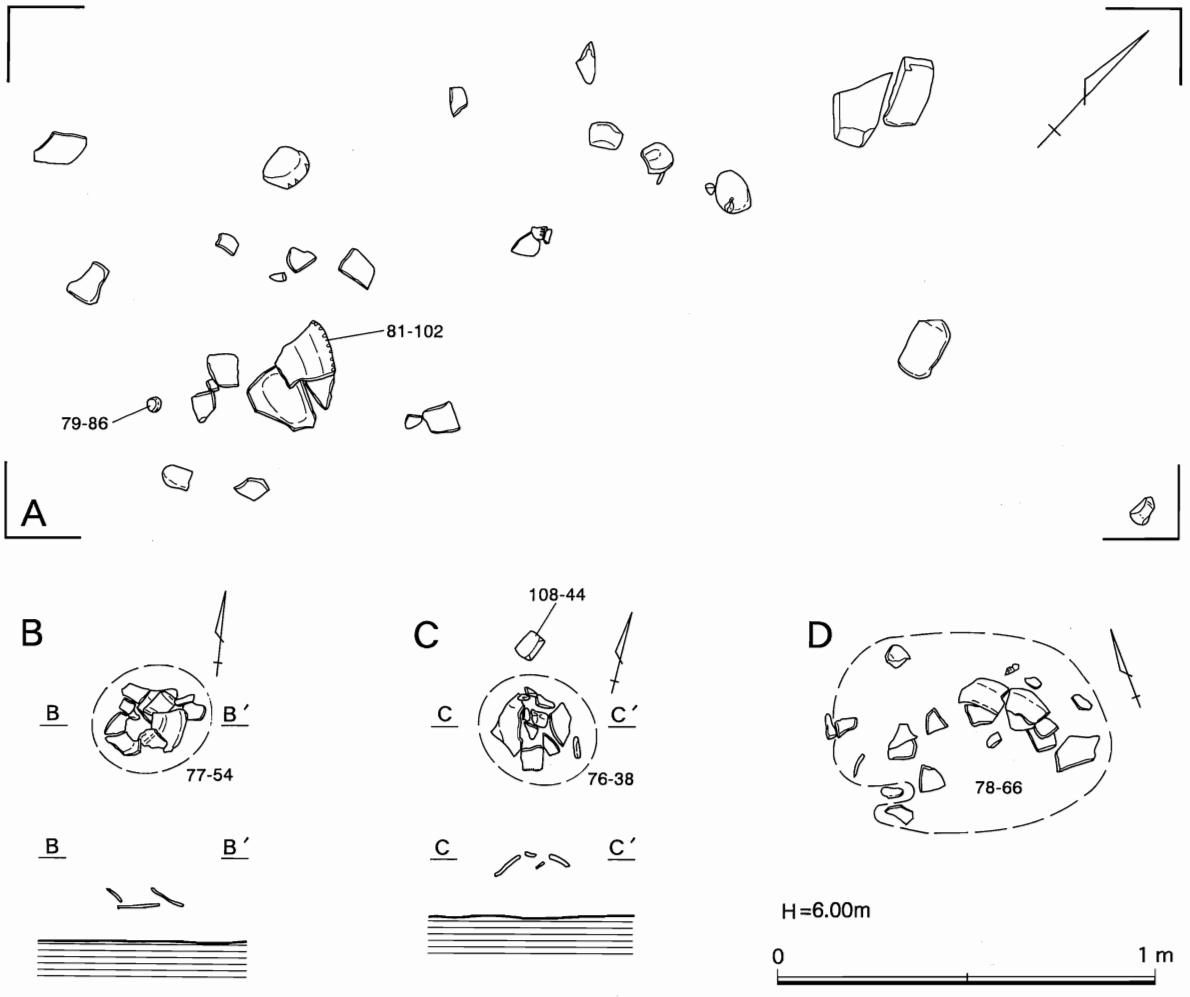


第45図　３区３面SP301～307遺構図

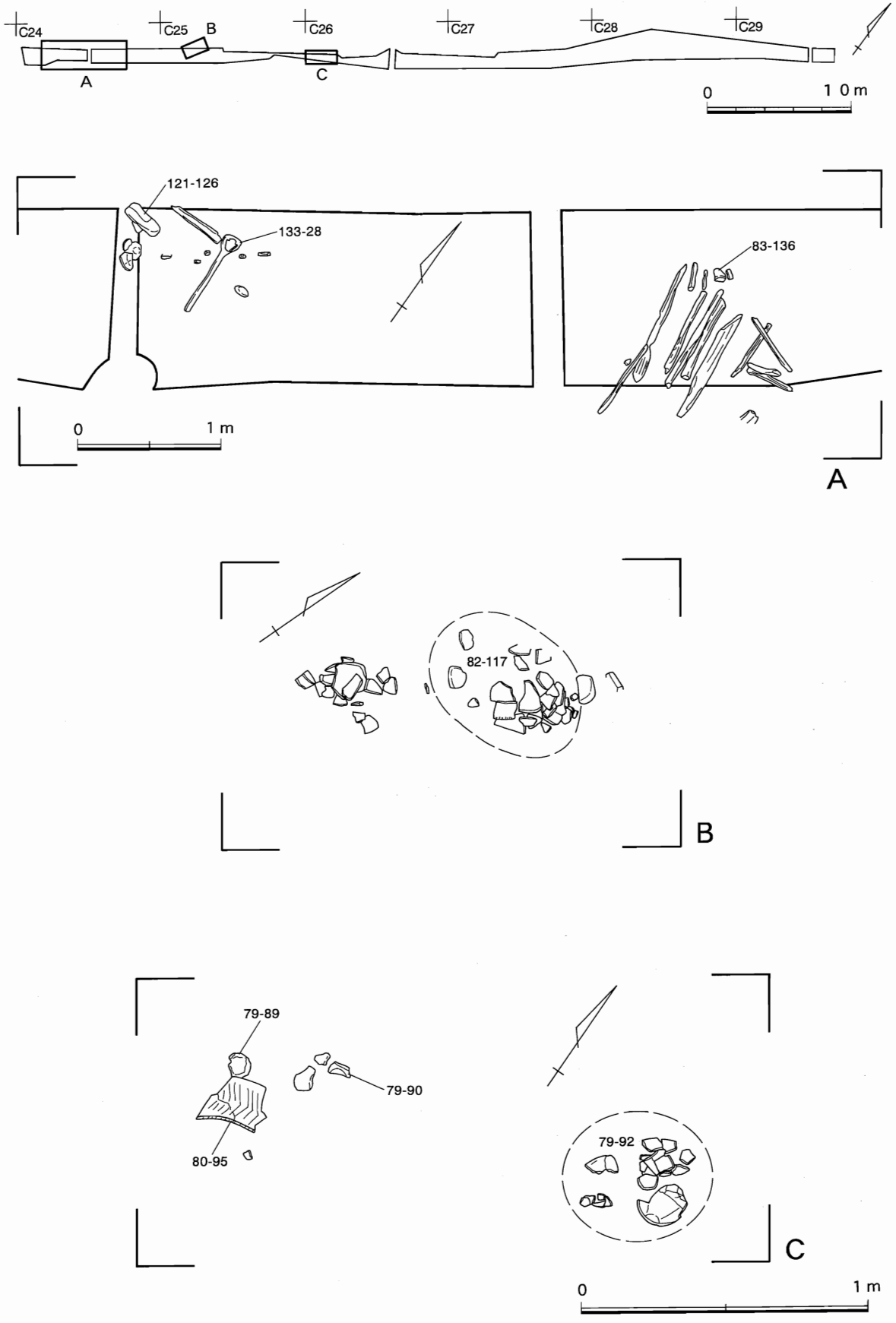


1．7.5Y4/1　灰色シルト質粘土（３区基本土層７）
2．7.5Y3/2　オリーブ黒色粘質シルト（３区基本土層８）
3．5GY4/1～7.5GY4/1　暗オリーブ灰色～暗緑灰色粘質シルト（３区基本土層１０）
4．2.5GY4/1　暗オリーブ灰色粘質シルト（３区基本土層１１）
5．N3/　暗灰色粘土（３区基本土層１２）
6．N3/　暗灰色シルト（３区基本土層１３）
7．2.5GY4/1　暗オリーブ灰色粘質シルト
8．2.5GY4/1　暗オリーブ灰色シルト質粘土（炭化物粒、土器片少量含む）
9．10Y4/1　灰色シルト質粘土（炭化物粒、土器片少量含む）
10．10Y4/1　灰色粘質シルト（ＳＤ304覆土）
11．10Y4/1　灰色粘土

ＳＤ306覆土
a．2.5GY4/1　暗オリーブ灰色粘土（３区基本土層９）
b．7.5GY5/1　緑灰色シルト
c．7.5GY5/1　緑灰色シルト（泥炭をラミナ状に含む）
d．5GY4/1　暗オリーブ灰色砂質シルト+泥炭（ラミナ層）
ＳＤ303覆土
A．2.5Y4/1　黄灰色シルト



第46図　３区３面下層遺構・遺物出土状況図



第47図　３区３～４面包含層遺物出土状況図

柱穴（SP：第45図　写真図版22）

SP（柱穴）群は調査区西端のC23グリットからC24グリットにかけて検出されている。合計８基確認されている。３面でも調査区西端部に集中して検出されている。礎板を伴う柱穴はSP301・303・305・308の４基であるが、いずれも同一の建物の柱穴ではない。各柱穴の底面標高値は5.6～5.7m代が多く、SP303・306については浅い感がある。それらは上層で検出しえなかったのか、または本来的に柱穴ではない可能性もある。なおこの区域より東では柱穴が検出されていないことから、C24グリット付近が集落域の東縁部で、SD304を代表する溝状遺構が集落域の区画溝であった可能性を今後検討されよう。

SR（自然流路：第44図　写真図版22）

SR301はC28グリットに位置する。本来的に流路自体は10層をも削っており、遺構の時期としては３面で検出されている溝状遺構より新しい。遺物は木製品等が覆土中位から下位にかけて出土している。出土状態からこの場で投棄された物ではなく上流部から流れてきたのであろう。底面の標高値は東端部が6.00m、西端部が5.90mをはかり、わずかに西端部が低い。

その他（第46・47図　写真図版23）

水田面である上位の遺構面の２面とは異なり、３面では土器が大量に出土している。なかでも集中して出土したのがC27～29グリットである。３面で出土する土器はいずれも弥生時代中期後半の資料で、後期代の資料は数少ない。また木製品ではＣ25グリットで３面下層に位置づけられる農具の柄が出土している。

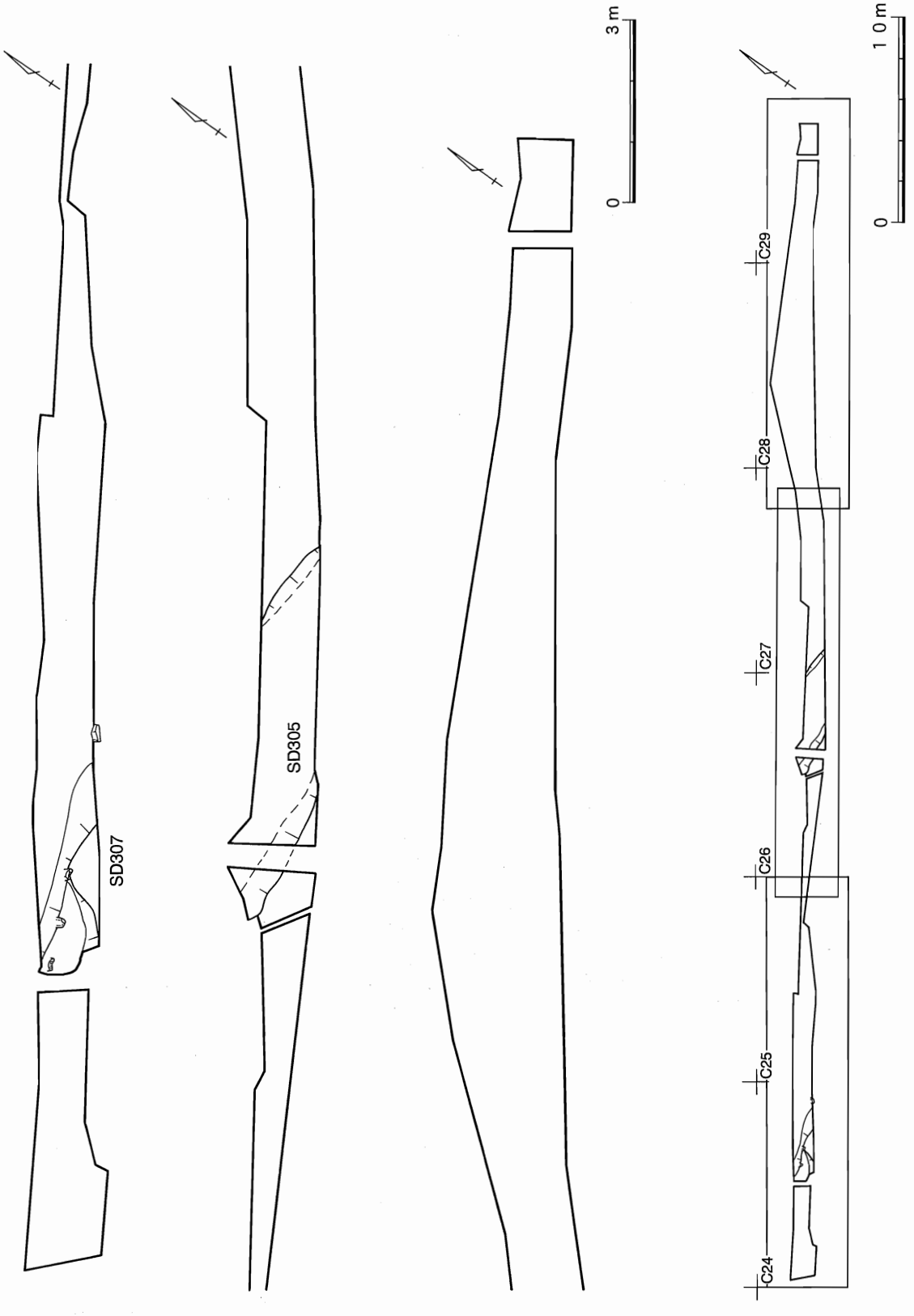
４面（第48・49図　写真図版23）

４面は集落域縁辺部と推定される。３区付近の地表面標高値が10.2～10.3mで、４面の最深部ではすでに5.2m程度をはかり、４m以上の掘削を行っている。法面の崩落防止のため33.3°という緩い傾斜角度を保ちつつ掘削を行っているため、４面の検出範囲は著しく狭長となった。検出した遺構は溝状遺構のみである。時期的には弥生時代中期中葉から中期後半であろう。

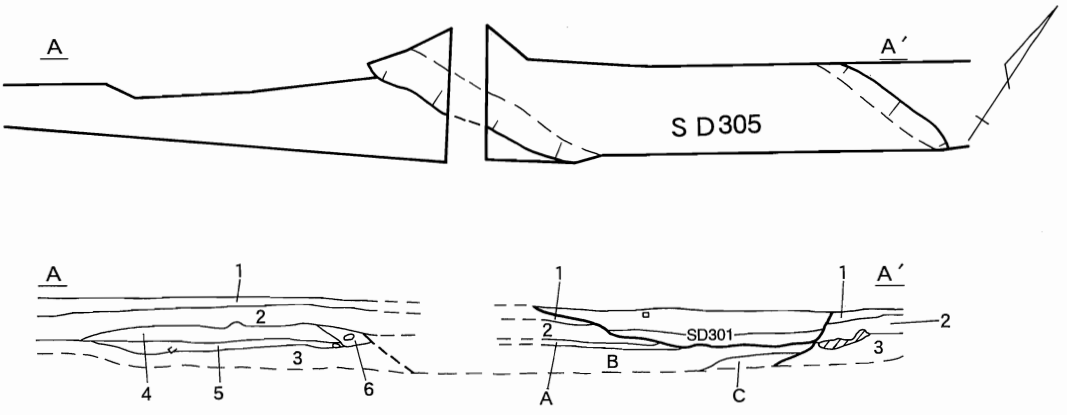
溝状遺構（SD：第49図　写真図版23）

SD305はC26・27グリットにかけて位置する。検出した長さは5.64mをはかる。この溝状遺構の延びる方向はW1°Nである。上端幅は約2.7m、下端幅は約2.2mと推定される。溝の下半部は激しい湧水のため掘削不能であった。覆土は３層に分層され、Ｂ層の下位から土器・石器が出土している。なお土層堆積の観察時に、この溝状遺構西側に盛土状の土層堆積を確認した。盛土遺構下位の層は土器片を多く含む砂層で、粘土ブロック等は含まれない。

SD307はC24グリットに位置する。調査区最深部にあたり崩落の危険もあったため完掘は出来なかった。覆土中より甕を中心とした土器片や木製品が出土している。投棄されたものではなく、流れ込みか。第６章でも触れるが土器には時期差が認められる。検出面直上層より土器片がまとまった量出土しているが、SD307埋没後の資料と推定される。

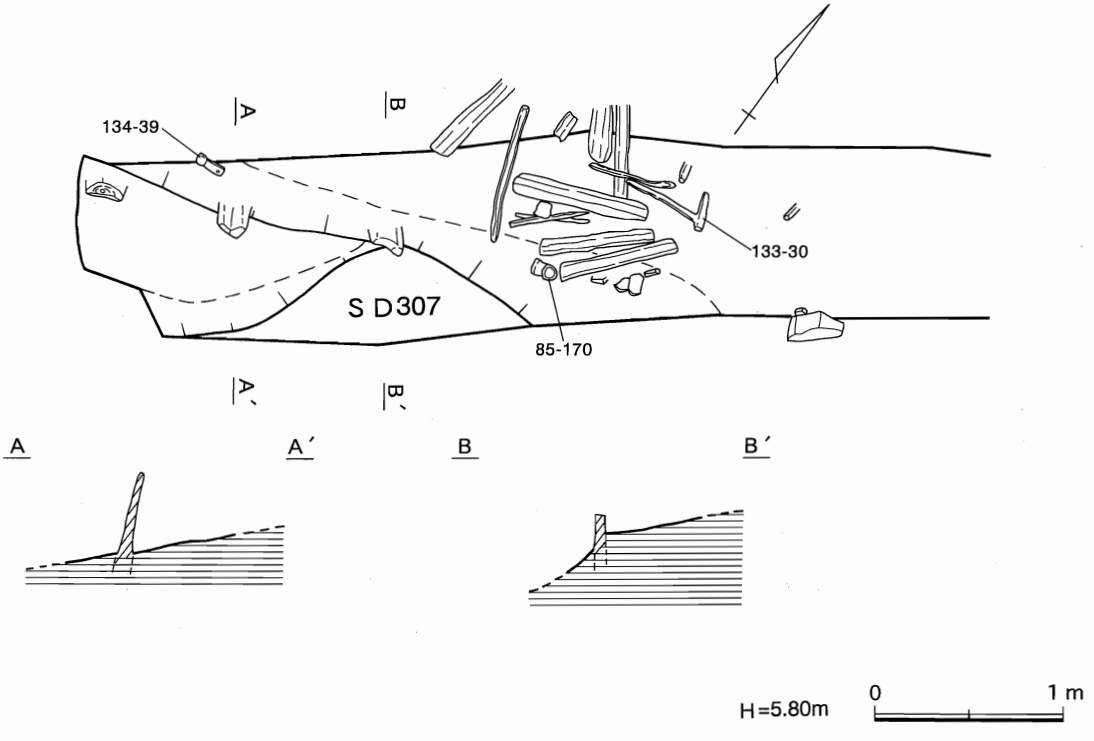


第48図　３区４面全体図



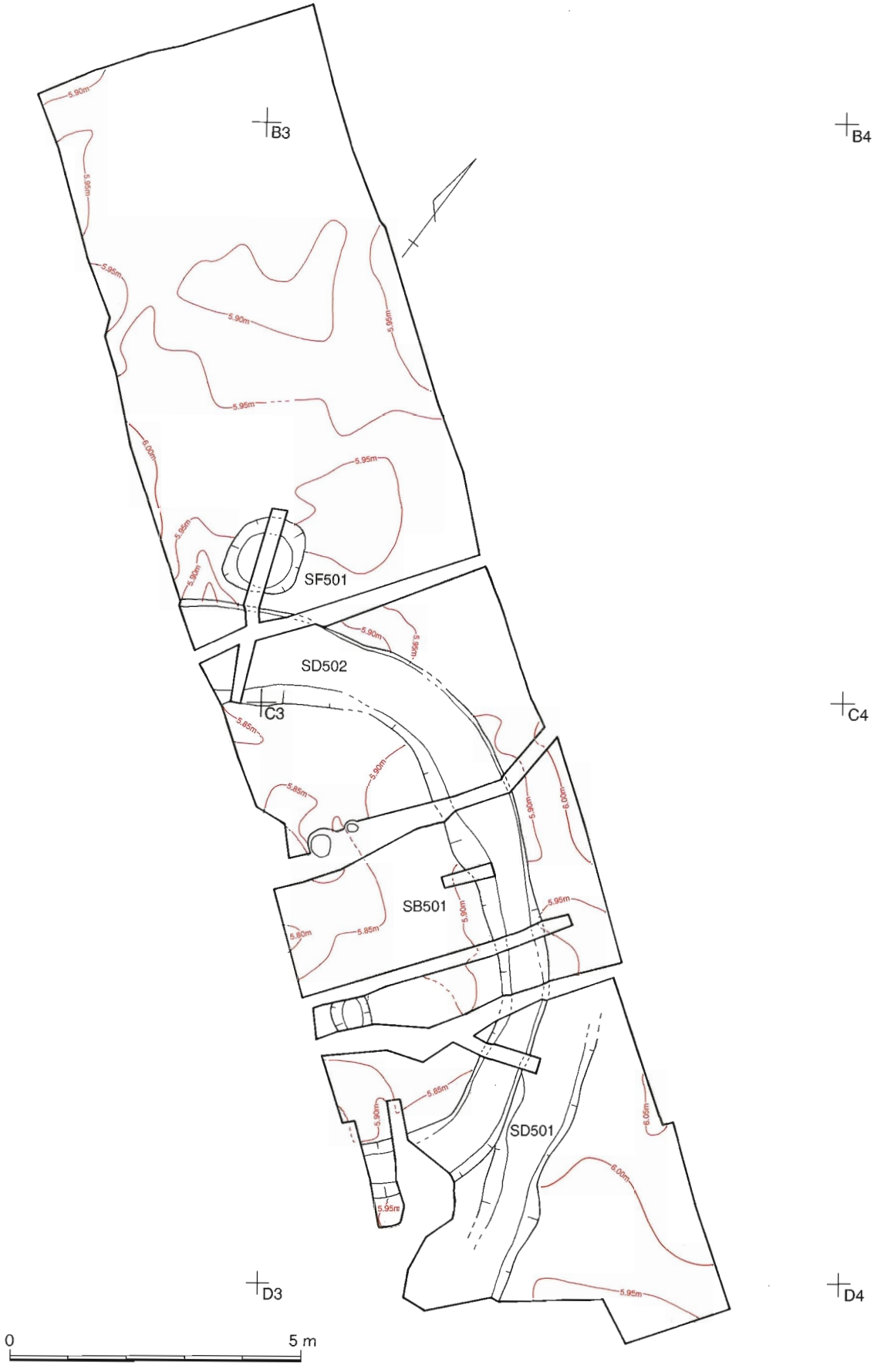
1．2.5GY4/1　暗オリーブ灰色粘質シルト（３区基本土層１１）
2．N3/　暗灰色粘土（３区基本土層１２）
3．N3/　暗灰色シルト（３区基本土層１３）
4．7.5GY4/1　暗緑灰色粘質シルト
5．10GY3/1　暗緑灰色砂層（土器片多く含む）
6．10GY3/1　暗緑灰色砂層
S D305覆土
A．5Y5/1　灰色粘土
B．N2/　黒色粘質シルト
C．N3/　暗灰色シルト（砂粒多く含む）

H=6.10m　0　2 m



H=5.80m　0　1 m

第49図　３区４面SD305・307遺構図


B3
B4
C3
C4
D3
D4
SF501
SD502
SB501
SD501
5.90m
5.95m
6.00m
5.85m
0
5 m

第50図　５－１区全体図

第4節　4区・5－1区・5－2区・6区

①　4区（写真図版27）

4区は平成15年10月に調査を実施した。調査対象範囲は長辺11.6m、短辺8.0m、面積は92.8㎡という極めて小さい調査区である。1～3区とは異なり周囲をシートパイルで囲繞し、垂直掘削を行った。平成13年2月から4月まで行った試掘調査で3区東端部に位置するTPNo.65で観察された土層堆積状況の結果、また3区現地調査の結果からも、3区以東も遺構面が継続しているものと推定されていた。しかし掘削調査の結果、表土以下自然流路に由来する砂礫層が標高5mまで堆積しているのを確認した。集水升設置箇所においても砂礫層が続いているのを確認しているので、さらに下位に砂礫層が堆積しているものと思われる。堆積している砂礫層は決して一様ではないので長期間にわたり自然流路によって運搬された層と推定される。また砂礫層中に標高5.3mの位置で粘土ブロックが含まれており、その中から土器片・石器等が出土している。さすれば本来的に周囲に3区から継続して延びていた遺物を包含する粘土層が存在し、後世の浸食により削られたものと理解できる。

②　5－1区

5－1区は平成14年11月から平成15年1月まで調査を実施した。調査対象面積は137㎡である。北街道線が跨ぐ継川の東側橋脚部にあたる。長辺24.1m、短辺5.7mという極めて狭長な調査区である。当初1区に隣接していることもあり、1区と同様の複数の遺構面の存在が想定されていたが、調査の結果、継川に由来すると思われる河川堆積層（砂層、礫層、泥層）により削平されていた。したがって調査が可能であったのが1面のみであった。

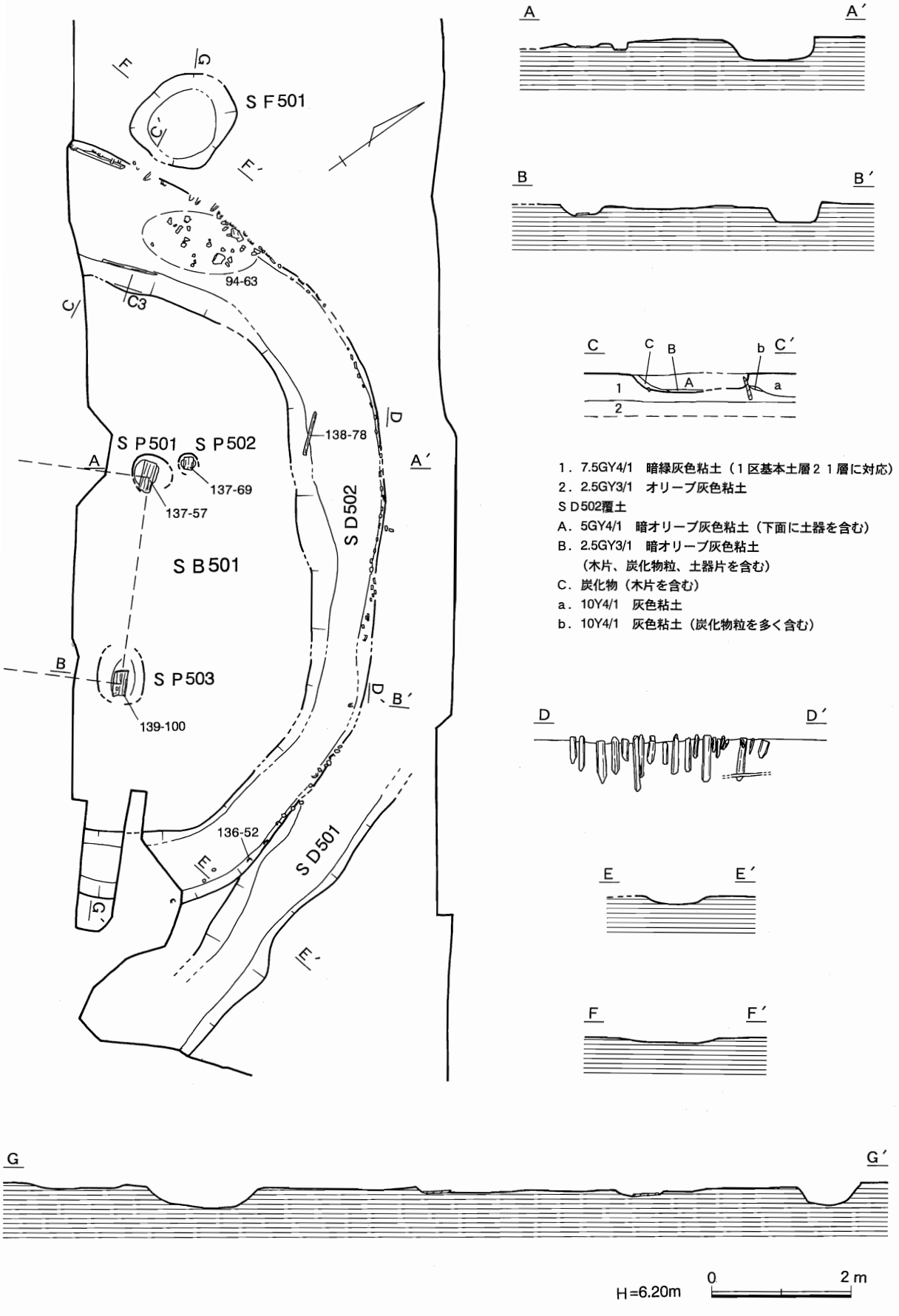
1面（第50・51図　写真図版24・25）

1面は集落域である。5－1区基本土層17層下層上面を遺構面として捉えている。この層位は1区基本土層の21層上面に相当するものと推定される。従って1区5面上層と本調査区1面は同一遺構面である。第1節でも触れたように5面上層と5面は同一時期の遺構面の可能性が多分にあり、本調査区1面と1区5面も同一時期として考えることも可能である。標高値はB3グリット杭付近で5.93mをはかる。1面で検出できた遺構は住居跡・溝状遺構・土坑である。

住居跡（SB：第51図　写真図版24・25）

住居跡は1基検出した。SB501はB2・3、C2・3グリットに位置する。住居跡は柱穴であるSP501・502・503及び周溝であるSD502で構成される。住居跡の半分は調査区域外に延びており、一部、SD501と重複する。時期的にはSD501はSD502、すなわちSB501よりも新しい時期のものと推定される。柱穴は3基とも全体を確認することはできなかった。住居跡北半部にはSP501・502が位置する。前者の平面は楕円形で、長径0.68m、短径0.58mと推定される。深さは8㎝をはかる。後者の平面は円形に近い。径0.35m程度であったと推定される。深さは11.6㎝をはかる。住居跡の南半部に位置するSP503の平面は楕円形を呈し、長径0.85m、短径0.64mと推定される。深さは13㎝をはかる。支柱穴であるSP501とSP503を結ぶ線は、N45°Wの方向へ延びている。

周溝であるSD502は護岸杭列を伴う。調査時には最初、杭の頂部のみ確認できたことにより、畦畔等に代表される水田施設の可能性を想起したが、調査終了5日前になって、溝の平面形及び柱穴の確認により本遺構が住居跡であるという確信に至った。SD502の上端幅は0.7～1.77m、下端幅は0.51～1.43m、深さは17.4～39.7㎝をはかる。周溝は必ずしも並行に穿たれていない。底面は平坦で、護岸杭は打設さ


S F501
S P501
S P502
S P503
S B501
S D502
S D501
94-63
138-78
137-69
137-57
139-100
136-52
A
A′
B
B′
C
C′
D
D′
E
E′
F
F′
G
G′
1．7.5GY4/1　暗緑灰色粘土（１区基本土層２１層に対応）
2．2.5GY3/1　オリーブ灰色粘土
ＳＤ502覆土
A．5GY4/1　暗オリーブ灰色粘土（下面に土器を含む）
B．2.5GY3/1　暗オリーブ灰色粘土
（木片、炭化物粒、土器片を含む）
C．炭化物（木片を含む）
a．10Y4/1　灰色粘土
b．10Y4/1　灰色粘土（炭化物粒を多く含む）
H=6.20m
0
2 m

第51図　５－１区遺構図

れていたのは周溝外辺である。外辺はほぼ垂直に立ち上がる。内辺はやや緩やかに立ち上がっている。覆土は暗緑灰色粘土を基調とし、住居北側調査区壁側、及びSP502の北方約２ｍの位置の周溝底面には炭化物の集積が見られた。またSP501の北西約３ｍの位置の周溝底面には土器63が散乱した状態で出土している。護岸杭に用いられた杭は20～80㎝程度の長さで、木片に近いものも打ち込まれていた。おそらく周溝内辺に沿って周堤が築かれていたと推定されるが検出することが出来なかった。この住居跡の所属時期は周溝内出土土器から弥生時代後期後半と推定される。

溝状遺構（SD：第51図）

溝状遺構は前述の住居跡周溝SD502以外にSD501を検出した。D3からC3グリットにかけて位置する。この溝はN20.5°Wの方向へ直線的に延びる。検出できた長さは4.70ｍで、上端幅は0.85～1.37ｍ、下端幅は0.51～0.79ｍをはかる。深さは8.2～10.8㎝で重複するSD502と比べて浅い。溝の北側、南側は確認出来なかった。この溝の所属時期はSB501よりも新しい時期で、弥生時代末以降と推定される。

土坑（SF：第51図）

土坑は１基検出した。SF501はB2・３グリット境界部に位置する。平面はいびつな円形を呈し、径は1.54～1.77ｍをはかる。深さは3.7～5.1㎝をはかり、極めて浅い。出土遺物はないものの、周辺に遺構が確認されていない点から、住居跡と時期的並行する可能性がある。

③　５－２区・６区

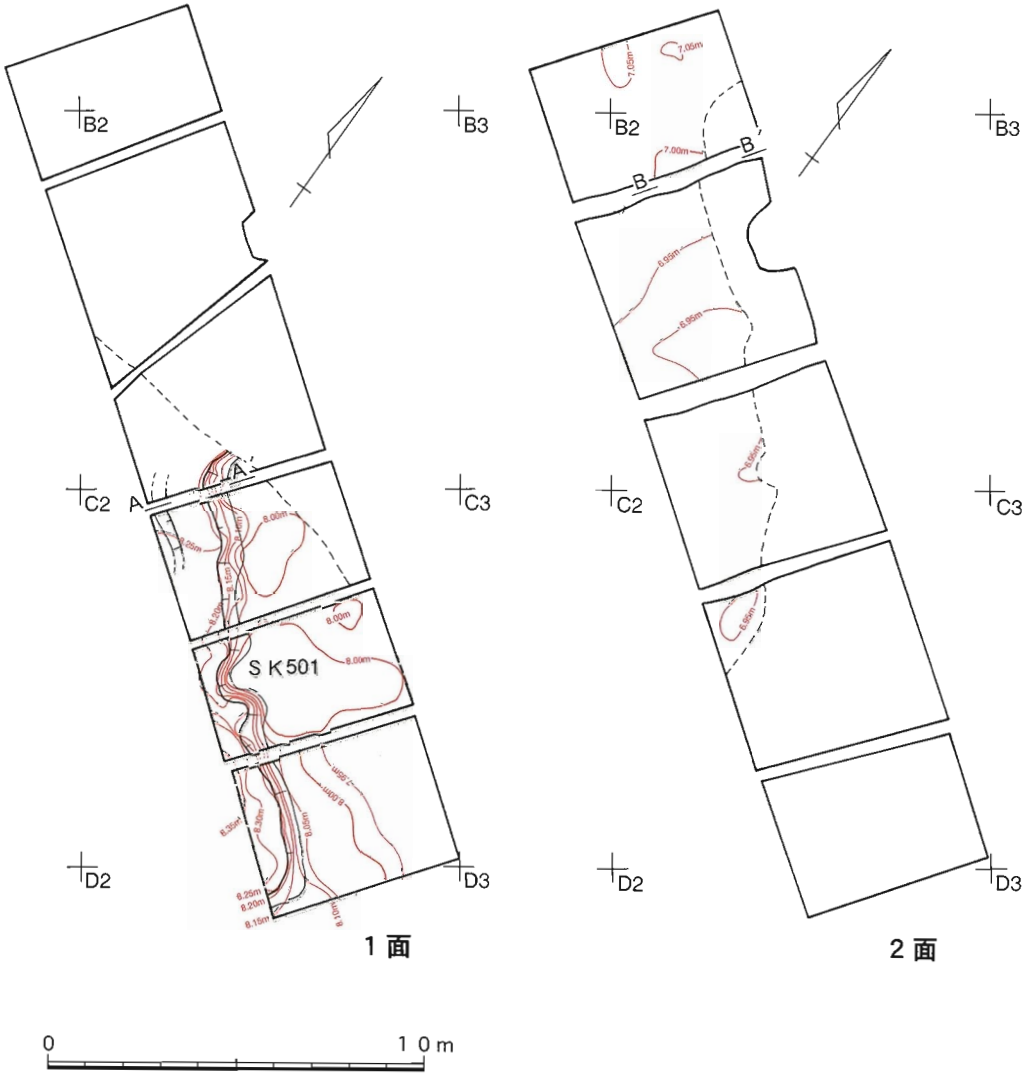
５－２区は平成15年５月から７月まで、６区は平成14年９月から10月にかけて調査を実施した。前者は５－１区と同様、継川を跨ぐ橋の西橋脚部、６区はさらにその西側に位置する。６区の調査対象面積は163㎡で実掘範囲は４ｍ×４ｍ、16㎡というシートパイルで囲繞した調査である。その調査結果により１区の調査で観察された幾つかの土層が継川西岸部まで延びていることが判明した。５－２区はその結果を参考に調査を行っている。５－２区は長辺24.7ｍ、短辺5.5ｍで面積は136㎡である。１区と土層では対応するものの、継川の影響を少なからず受けている。さらに湧水がかなり激しく、遺構の検出状態も極めて不良である。本節は５－２区を中心に述べてみる。

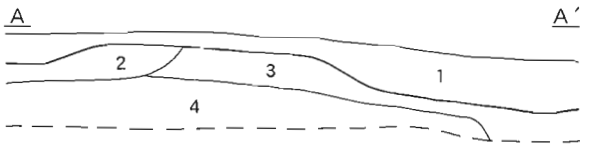
１面（第52図　写真図版26）

５－２区における１面は５－２区基本土層の８層上面を遺構面としてとらえた。この層と対応する層位が２区まで継続しており、第２節で概観した２区１面として調査を行っている。この５－２区１面は砂層に広く覆われていたため、比較的検出は用意であった。北半部は遺構面は消滅しており、C2グリットを中心に調査を行っている。

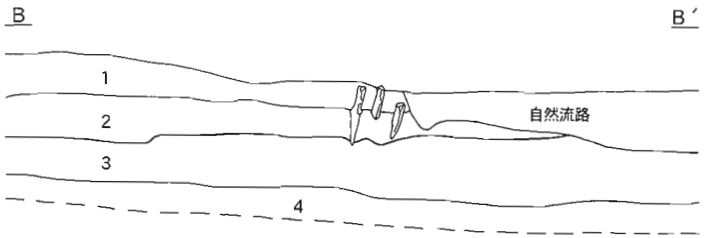
畦畔（SK：第52図　写真図版26）

SK501はB2グリット南端部からC2・D2グリット北辺部まで延び、畦畔の可能性もある遺構として取り上げた。全長は12.3ｍをはかる。上端幅1.03ｍ、下端幅1.92ｍをはかる。この遺構の東側・西側の標高値は約8.00ｍ、約8.2ｍと田面としては差が大きい。畦畔上面はやや硬質であった。踏み固められた可能性がある。所属時期は中世以降か。





1．2.5GY4/1　暗オリーブ灰色砂と7.5Y4/2　灰オリーブ色砂の互層
2．2.5GY4/1　暗オリーブ灰色砂（一部シルト、砂粒含む）
3．2.5GY3/1　暗オリーブ灰色シルト
4．2.5GY3/1　暗オリーブ灰色シルト（砂粒多く含む）



1．7.5Y3/2　オリーブ黒色粘土（５-２区基本土層１１）
2．7.5Y3/2　オリーブ黒色粘土（５-２区基本土層１２）
（植物遺体を多く含む）
3．5BG5/1　青灰色粘土（５-２区基本土層１３）
4．5GY3/1　暗オリーブ灰色粘土（５-２区基本土層１４）

ＡＡ´：H=8.40m
ＢＢ´：H=7.60m

0　10m

0　1m

第52図　５－２区１・２面全体図

２面（第52図）

５－２区における２面は基本土層13層上面を遺構面としてとらえた。隣接する５－１区では検出できなかったが、１区では水田が検出された１面に相当する。標高は6.95m～7.00m代である。自然流路により南半部が消滅している。自然流路際には護岸のための杭が打設されていた。自然流路より銅銭が１点出土している。そのため自然流路の所属時期は中世以降と推定しておく。13層を覆う12層（オリーブ黒色粘土層）には植物遺体を多く含んでおり、耕作土の可能性も考えたが、畦畔については全く検出されなかった。この遺構面の所属時期は１区１面の時期、すなわち奈良時代以降としておく。

３面（第53図　写真図版26）

５－２区における３面は基本土層15層上面を遺構面としてとらえた。隣接する５－１区では検出できなかったが、１区では小区画水田が検出された２面に相当する。標高は6.65m～6.60m代である。水田面であるが、湧水かつ軟弱な層で、精緻に畦畔を検出できなかった。所属時期は１区２面の時期、すなわち弥生時代末以降としておく。

畦畔（SK：第53図　写真図版26）

SK502はB1・２グリット境界部で検出した。その規模から小畦畔の一部と思われる。検出できたのは2.8m足らずである。畦畔の東側については検出できなかった。高さは６㎝程度である。SK503はB2グリットの南半部に位置する。検出できた長さは3.41ｍである。上端幅は0.27m、下端幅は0.39ｍをはかる。高さは４㎝程度である。この畦畔から北側に直交する畦畔があったようであるが、検出できなかった。またSK504とは接合しないため、水口であった可能性がある。SK504はB2グリットからC2グリットにかけて検出した。東側の立ち上がりが観察できないために、畦畔ではなく微高地である可能性を持つ。

４面（第53図）

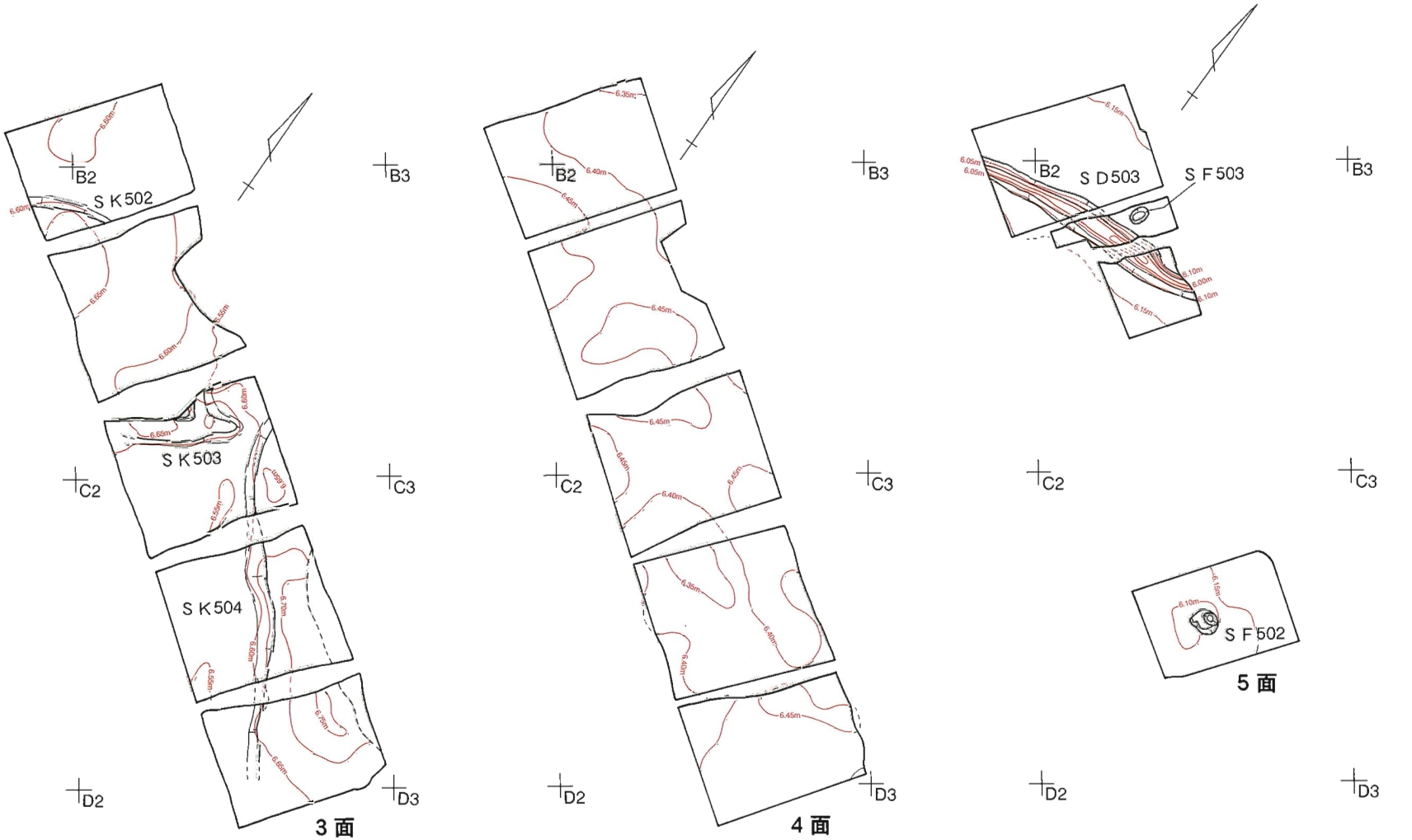
５－２区における４面は基本土層16層上面を遺構面としてとらえた。標高値は6.40m～6.50ｍをはかる。遺構は全く検出できなかったが、この遺構面を覆う15層中より土器片・石器が多数出土している。よって本遺構面は集落域の縁辺である可能性もある。

５面（第53図）

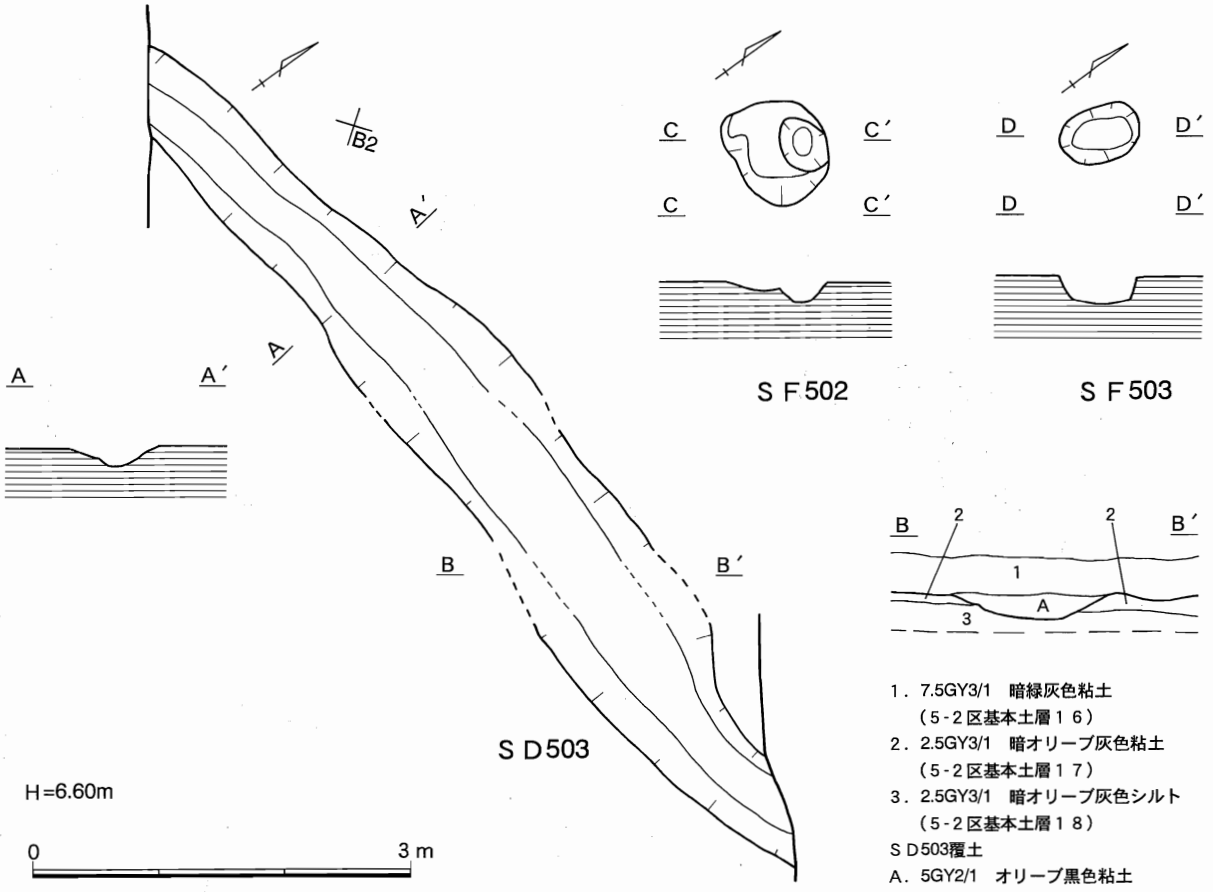
５－２区における５面は基本土層17層上面を遺構面としてとらえた。標高値は6.05m～6.10ｍをはかる。この遺構面を覆う16層中から土器片が出土している。検出した遺構は溝状遺構と土坑である。なお６区の調査結果から17層下位から遺物が含まれなくなり、19層が砂礫層であるのが確認されているので未掘削である。また本遺構面調査時には湧水がさらに激しくなっており、調査出来たのは北半部と南半部の一部である。この遺構面の所属時期は弥生時代後期後半から末期にかけてと推定される。

溝状遺構（SD：第54図）

SD503はB1グリットからB2グリット中央部付近にかけて位置する溝状遺構である。この溝状遺構はW6°Sの方向へ直線的に延びる。検出できた長さは8.22m、上端幅は0.60～1.13m、下端幅0.28～0.61ｍをはかる。深さは4.8～21.9㎝である。底面は平坦で、標高値は西端が5.978m、東端が5.828ｍである。



第53図　５－２区３・４・５面全体図



第54図　５－２区５面遺構図

土坑（SF：第54図）

SF502はC2グリットのほぼ中央部に位置している。この土坑の平面はいびつな楕円形を呈し、長軸0.82m、短軸0.72mをはかる。深さは16.2cmである。SF503はB2グリットの北半部に位置する。SD503から24cmの位置にある。この土坑の平面は楕円形を呈し、長軸0.63m、短軸0.43mをはかる。深さは14cmである。SF502・503共に遺物は出土していない。

第５章　出土遺物

第１節　土　器

本節では瀬名川遺跡から出土した土器について、調査区、出土遺構・層位、器種毎に分類し概観する。個々の資料についての形態や調整・文様、土器の胎土、色調等の詳細な情報は出土土器一覧表（194頁～216頁）にまとめたので参照してもらいたい。出土した土器群の所属する時期については、近年まとめられた研究成果である佐藤由紀男・荻野谷正広・篠原和大2002「遠江・駿河地域」『弥生土器の様式と編年―東海編―』を主要な参考文献とした。

１区出土土器（第55～60図１～78　写真図版28～30）

１区からは弥生時代中期中葉～古墳時代前期に位置付けられる土器群が出土した。出土遺構・層位毎に説明する。

SK103出土土器（第55図１）

２面SK103からはその盛土部内より数点土器が出土しているが、図化出来た資料はこの１点のみである。壷の口縁部である。口唇部は折返し、指頭で押圧している。

SX106出土土器（第55図２）

壷の口縁部である。内外面ともにハケ調整を施していると思われるが、器面は摩滅し判然としない。口唇部を折り返さない単純口縁である。

SD121出土土器（第55図３・４　写真図版28）

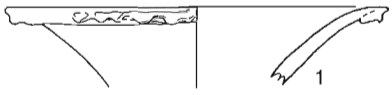
SD121の調査区北壁際で一括して投棄された状態で出土した土器である。３は台付甕である。４もおそらく台付甕であろう。３に比べ４は胴部中位が膨らむが、共に口縁部は緩く折れ、且つ口唇部には刻目が無い点で共通する。３の胴部外面は横方向のハケ調整、４は縦方向のハケ調整を基調とする。４の外面には粘土紐の輪積痕、指頭痕が観察される。粗雑な作りである。これらの資料は西駿河Ⅵ様式の範疇、弥生時代後期後葉以降の資料か。

SD122出土土器（第55図５～９　写真図版28）

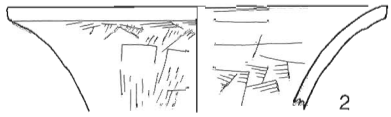
SD122の底部で木質遺物と共に出土した土器群である。全て壷と考えられる。５は口縁部から胴部まで、６・７は頸部から肩部にかけて遺存した資料である。６は円形浮文、７にはＹ字状の浮文が肩部に見られる。欠損しているため当初の形態は判然としない。静清平野付近で多く見られる勾玉状のモチーフの可能性がある。この類の貼付文は５―１区でも出土している（文献１）。６の浮文は２ヶ所に観察される。８は肩部から胴部中位にかけての資料である。９は壷の底部である。底面に木葉痕が観察される。これらの土器群はSD121と同様、弥生時代後期後葉の範疇か。

SD124出土土器（第56図10～15　写真図版28）

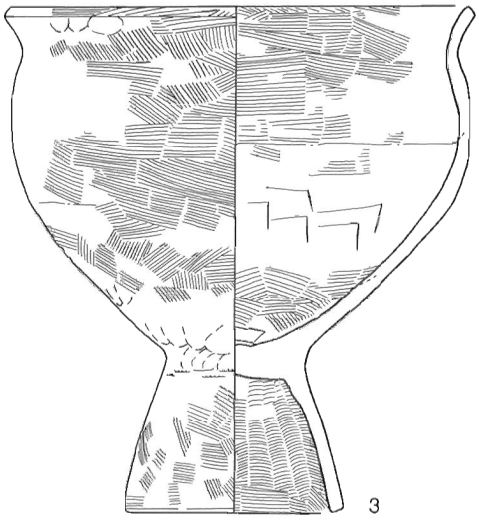
SD124の調査区南壁際で一括投棄された状態で出土した土器群である。10～12は壷、13～15は甕である。10は口縁部から頸部にかけて遺存した資料である。口縁部を大きく外反させ、口縁部内面には櫛描波状

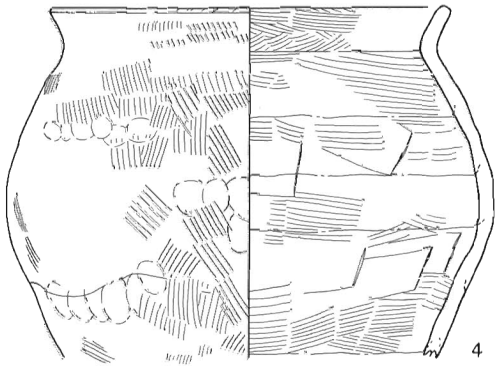


SK103



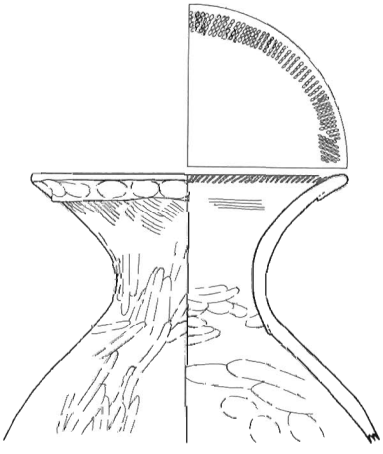
SX106

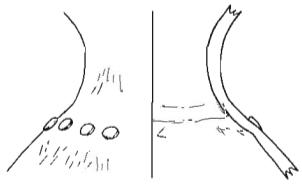


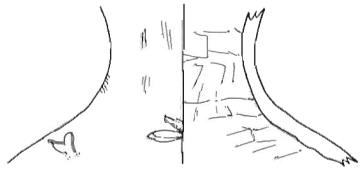


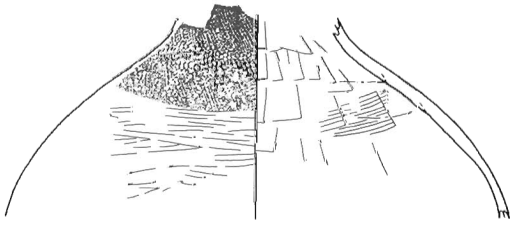
SD121

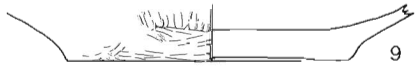
SD122





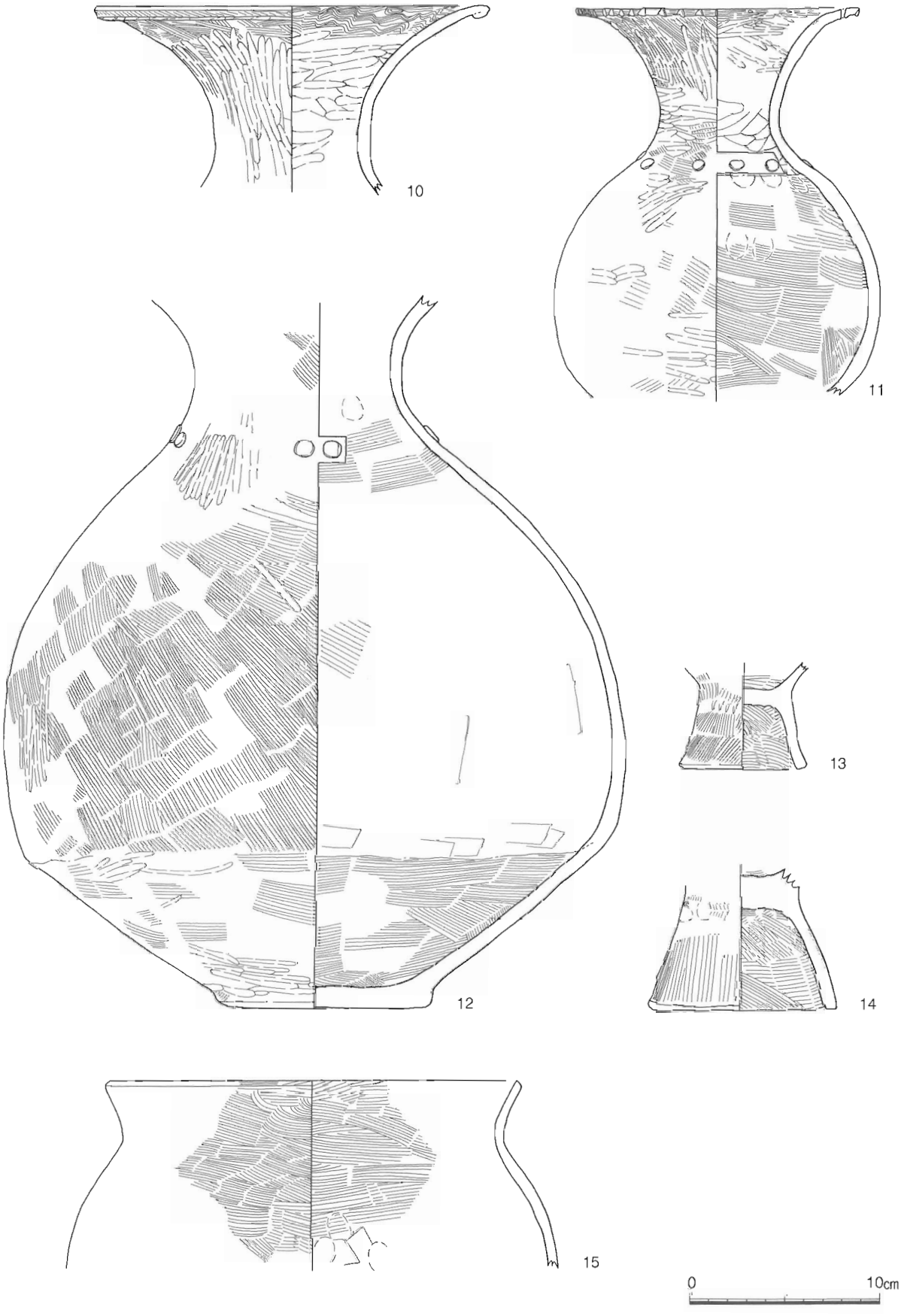




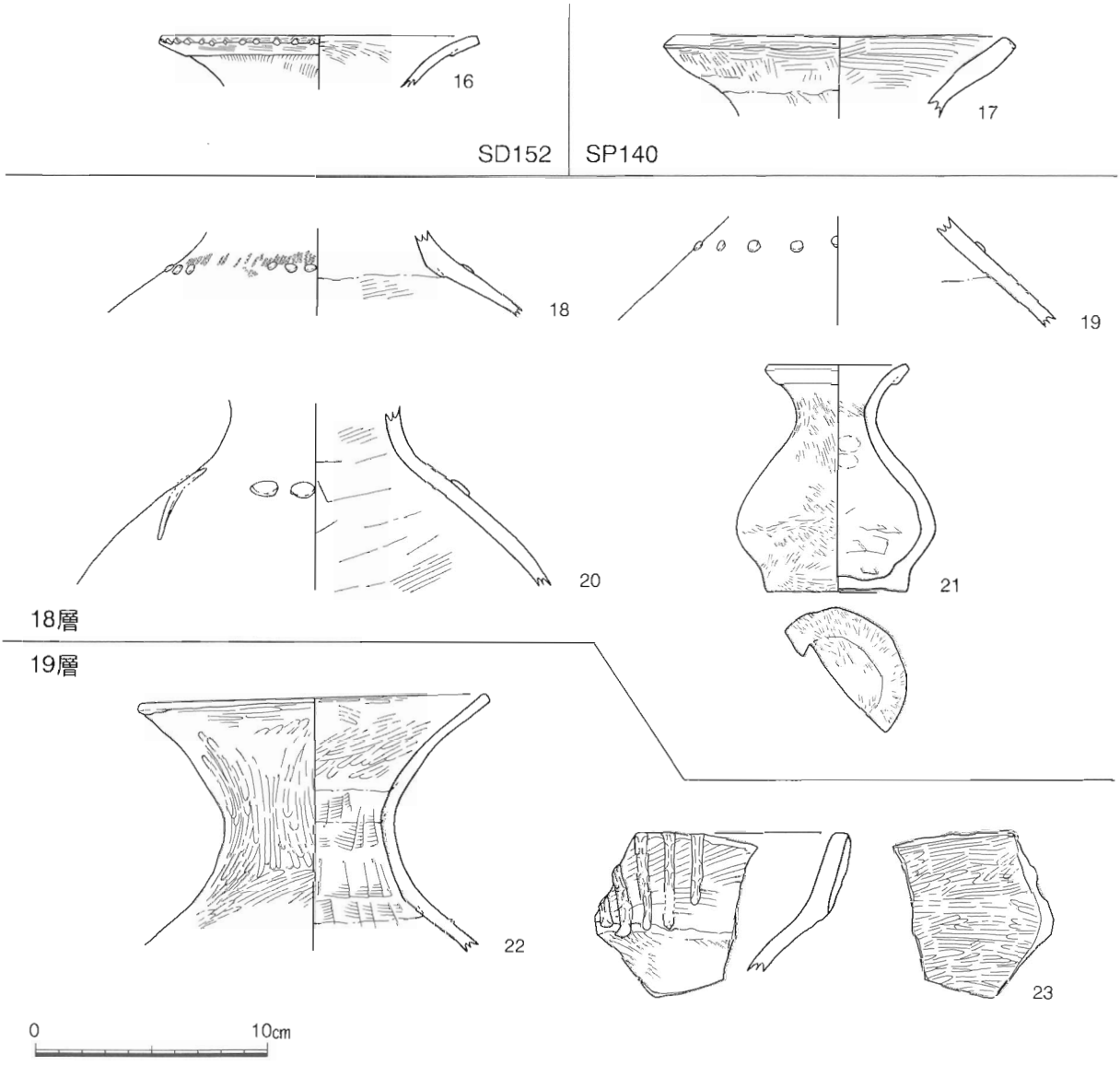


第55図　1区出土土器①

SD124



第56図　１区出土土器②



第57図　1区出土土器③

文を施す。赤彩資料である。11は底部を欠失した資料である。丸みを帯びた胴部から水平方向まで外湾して開く口縁部が遺存する。口唇部には工具で刻目、肩部には円形浮文が施されている。口縁部は焼成前に鋭い棒状工具で穿孔している。12は口縁部を欠いている。胴部下位で屈折し、中位から上位にかけては大きく膨らむ。肩部には円形浮文が貼り付けられている。13・14は台付甕の台部のみの資料である。15は胴部上位から口縁部にかけての資料である。口唇部には刻目は見られない。これらの資料は西駿河VI様式、弥生時代後期後葉の範疇に入るものと推定される。

SD152出土土器（第57図16）

SD121と重複し、時期的にその溝状遺構より先行する遺構である。図化出来たのはこの1点のみである。16は壷の口縁部である。口唇部を折返したもので、ハケ調整の後に刻み目を入れる。

SP140出土土器（第57図17）

17は壷の口縁部である。単純口縁で、平坦に仕上げられた口唇部にはハケ調整の痕跡が観察される。内面も横位のハケ調整である。

18層出土土器（第57図18～21）

18・19は壷の肩部のみの資料である。18は肩部に微細な縄文を施文した後に円形浮文を、19は円形浮文のみである。肩部から胴部上位にかけて遺存した20は円形浮文と棒状の浮文を貼り付けている。棒状の浮文は一部剥脱しているため、当初の姿は判然としない。21は小型壷である。

19層出土土器（第57図22・23　写真図版28）

22は肩部から口縁部にかけて遺存した資料である。ヘラミガキを多用する。23は口縁部の破片資料である。複合口縁で、棒状浮文を貼り付けている。

20層出土土器（第58図24～30　写真図版30）

24～28は壷である。24・26・27は複合口縁である。24は口唇部は欠失しているものの、棒状浮文が５条単位で貼り付けられている。26も複合口縁で細片資料である。下端が剥脱している。27は口縁部に櫛状工具で波状文を施している。25は頸部のみの資料である。横位に櫛描文を施している。28は肩部の破片資料である。縄文の下位に鋸歯文が施されている。本資料は土製円盤に転用した可能性もある。29・30は甕である。29は小型甕である。口唇部に棒状工具で刻み目を施している。30は口縁部の破片資料である。口唇部は平坦に仕上げられている。刻目は無い。この層位から出土した土器の主体は西駿河Ⅳ～Ⅴ様式、弥生時代後期と推定される。

21層出土土器（第58図31～39　写真図版30）

31～36は壷である。31は内面に２個の円形浮文を貼り付けている。33は頸部から肩部にかけての資料である。頸部に僅かであるが沈線を施している。34・35は肩部の破片資料である。共に円形浮文を貼り付け、34は櫛描波状文、35はハケ調整の後、棒状工具の先端で細かく連続刺突したものか。36は太頸壷の口縁部の破片資料である。平坦に仕上げられた口唇部には櫛描文が施されている。外面口唇部直下から多段の櫛描文が横位に施されている。当遺跡で中期の太頸壷の資料は他に無い。

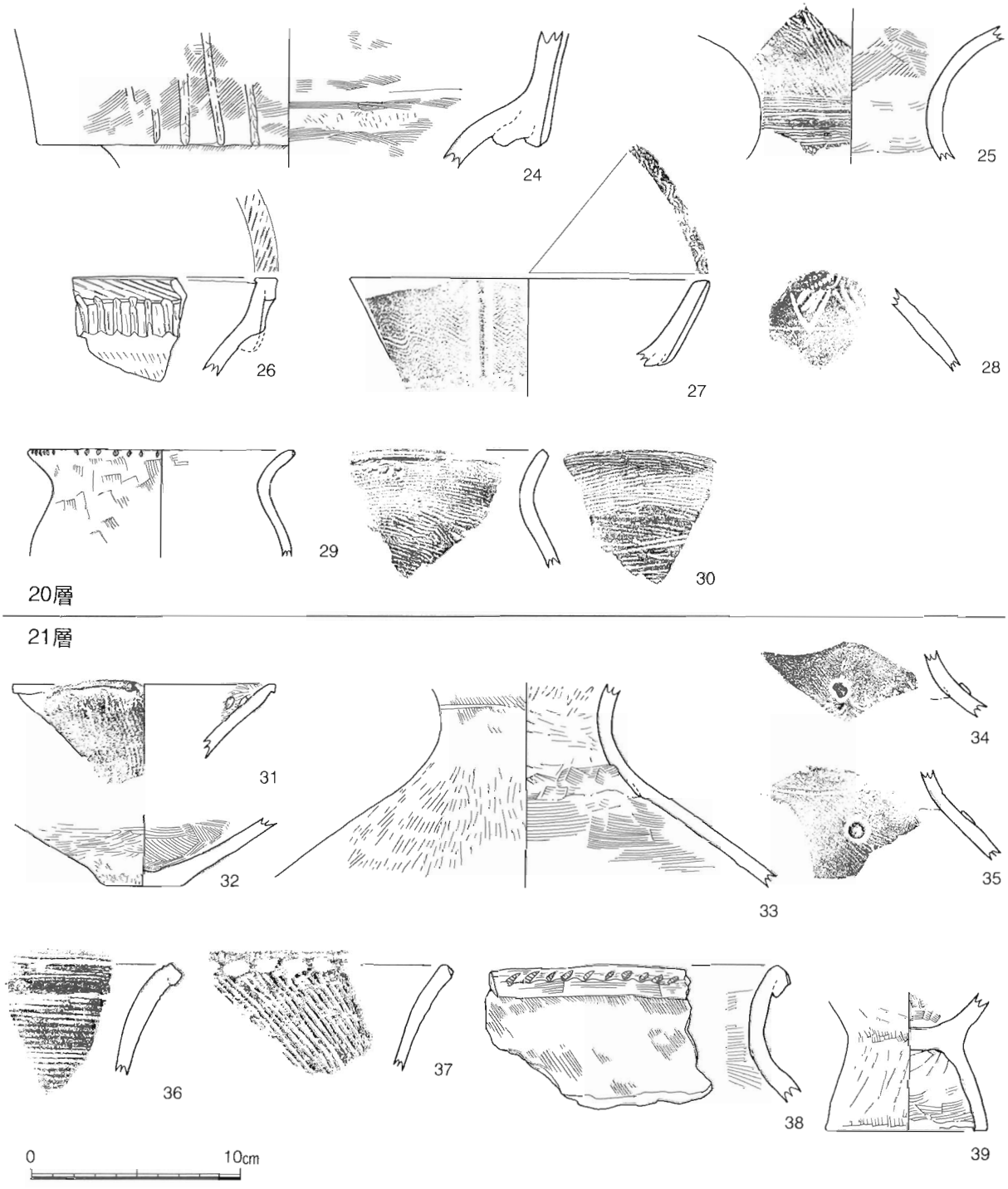
37～39は甕である。37・38は甕の口縁部の破片資料である。37の外面には荒いハケ調整が施されている。口唇部は指頭押圧されている。38は全面ハケ調整の後、口唇部を折返して再度ハケ調整を施し、同一のハケ状工具で刻み目を入れている。39は台付甕である。台部のみの資料である。土器群の所属時期は西駿河Ⅲ～Ⅴ様式まで、弥生時代中期中葉から後期後葉までと時期差がある。

SX161出土土器（第59図40・41　写真図版29）

40・41共に壷である。40は口縁部が欠失した資料である。小型の細頸壷か。41は壷肩部の破片資料である。おそらく棒状工具で三角文を描き、その内部に刺突文を施したものであろう。これらの資料は西駿河Ⅲ期以降の特徴を持つ。弥生時代中期中葉以降か。

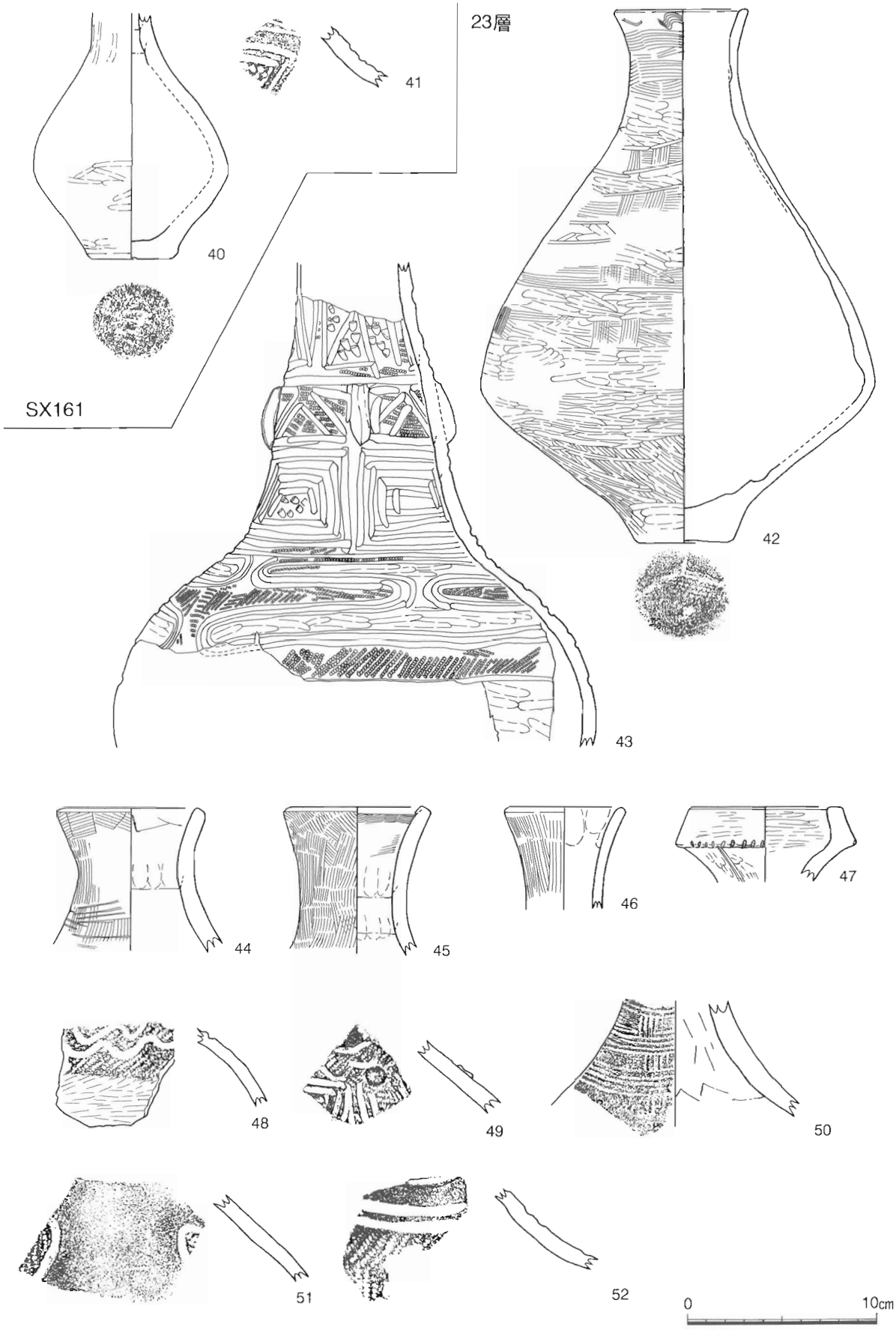
23層出土土器（第59・60図42～63　写真図版29・30）

42～59は壷である。42は短頸気味の細頸壷である。底部外面に僅かに籠目とおぼしき痕跡が観察される。胴部は大きく外傾して立ち上がり、胴部下位で最大径を有する。この部分から一転して内傾ぎみに胴部が延びる。口唇部は平坦に仕上げ、その外面直下に櫛状工具で波状文を施している。頸部直下から胴部中位にかけても施文されている。施文順序としてまず横位に櫛描文、次に縦位の櫛描文、そしてその櫛描部を棒状工具で沈線による区画をする。最後にヘラミガキで仕上げている。内面は剥脱がひどく、調整は判然としない。43も細頸壷である。胴部上位から頸部にかけての遺存した資料である。胴部上位



第58図　1区出土土器④

から肩部にかけては磨消縄文、頸部下位に重四角文とその内部に刺突文、頸部中位には縄文を施した後に棒状浮文を貼り付け、沈線で区画文を施す。頸部上位には棒状工具による沈線区画文内部に刺突文を施している。44～47は口縁部のみの資料である。44～46は単純口縁、47は受口状の口縁部で、屈折部に棒状工具で刻目を施している。48～56は頸部から肩部にかけての破片資料である。48は縄文の中に棒状工具で稚拙な波状文を施している。49は縄文・沈線・円形浮文が観察される。51・52は磨消縄文である。50は細頸壷で櫛状工具で丁字文が施されている。53～55は棒状工具を使用し、54は格子文か？　56は丁字文の上位に櫛描波状文を施す。57～59は底部である。



第59図　１区出土土器⑤

60～63は甕である。61～63は外面に荒いハケ調整（もしくは条痕）を施した口縁部の破片資料である。61は口唇部を平坦に仕上げ、両端に刻目を入れている。62は外面に条痕を施した後に口唇部を折返し、ナデ調整し口唇部に平坦な面を整えてから、外面と同一の工具で条痕文を施している。最後に口唇部端部に棒状の工具で刻目を入れている。63は外面に荒いハケ調整を施している。口唇部は細かいハケ調整を施した後に工具を用いて押圧文を施す。60は台付甕の台部の可能性もある。これらの土器群の主体は西駿河Ⅲ～Ⅳ様式、すなわち弥生時代中期中葉から後葉にかけての時期と推定される。

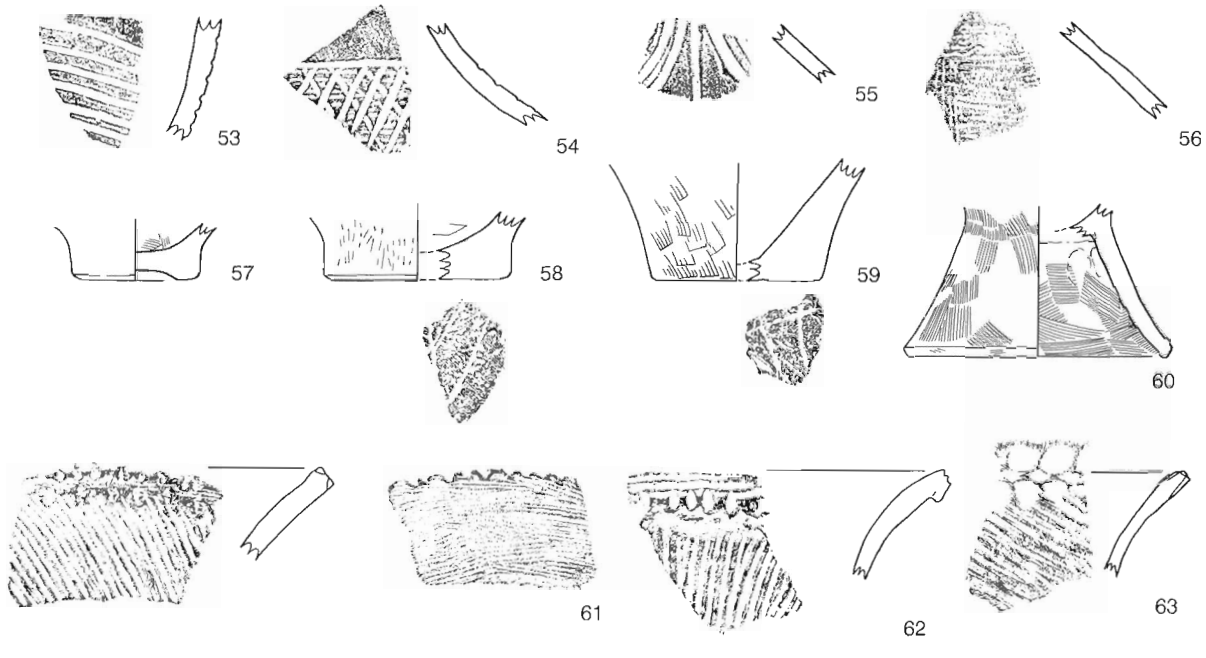
24層出土土器（第60図64～78　写真図版30）

64～73は壷である。64・65は受口状口縁部である。64は口唇部内面に指頭による押圧を加え、棒状工具で縦位に２条の沈線を施している。65は波状文を施している。66は頸部のみの破片資料である。縦位櫛描文の上に波状文等を施している。67～69は肩部に磨消縄文の類が施された資料である。70・71は重三角文が施され、71は内部に刺突文が観察される。72は23層54の資料に酷似する。73はかなり稚拙な波状文が斜方向に施されている。

74～78は甕である。74～76は口縁部の破片資料である。74は外面にハケ調整、内面には横位の条痕が観察される。口唇部は工具で両端を押圧されている。75は外側に折り曲げた後に指頭による押圧を施した可能性がある。76の外面は条痕もしくは荒いハケ調整の後に、口唇部を指頭による押圧を施している。77・78は胴部の破片資料である。77は斜方向にハケ調整の後、同一工具により縦位羽状にハケ目を入れている。破片の下端付近に横位の沈線が観察される。磨消線文の甕か。78は羽状文を施している。この土器群の主体は23層とほぼ同時期と思われる。

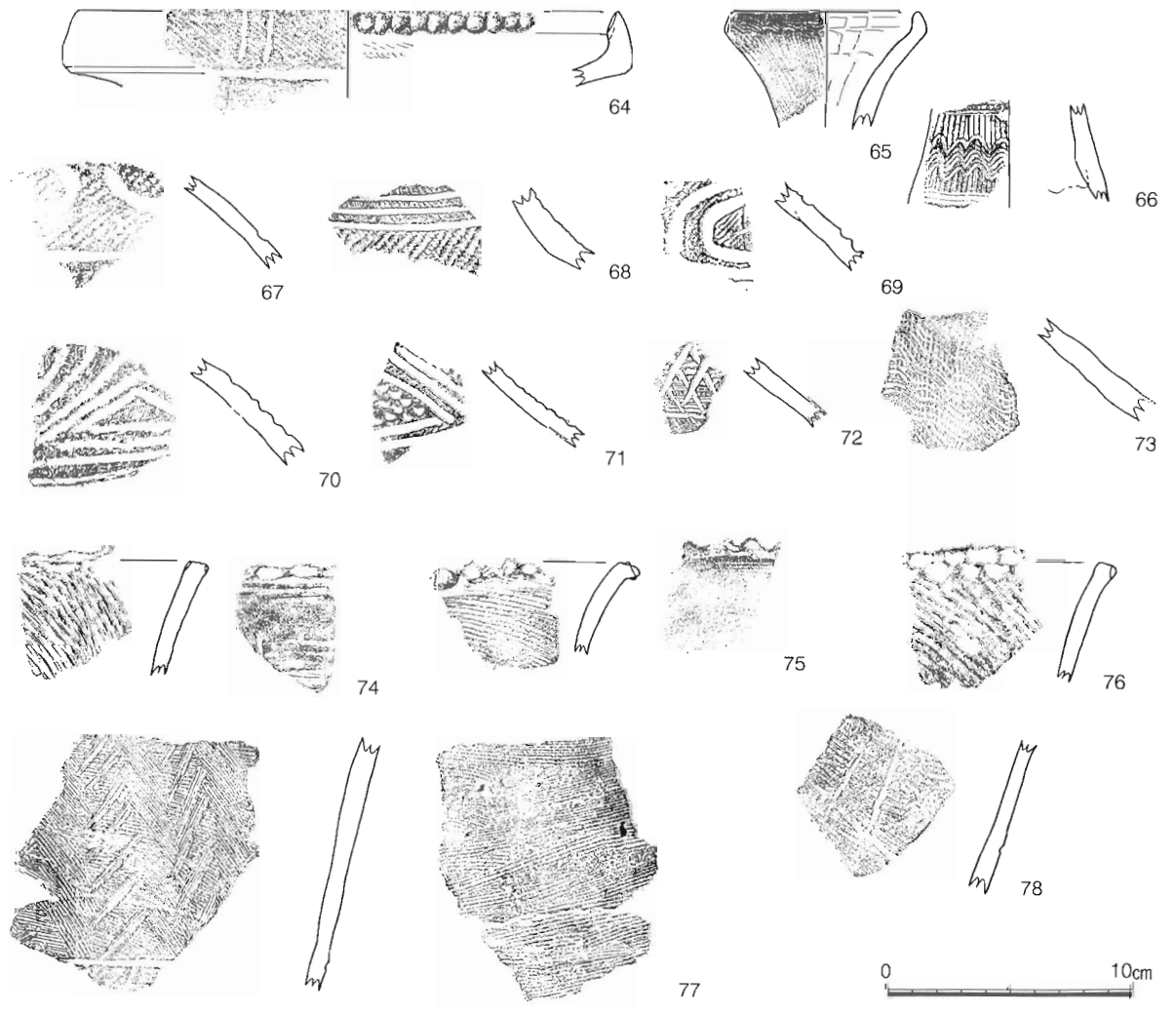
参考文献

岩本　貴　2001「首飾りをする壷～勾玉付土器に関する予察～」『研究紀要』第８号　(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所



23層

24層



第60図　1区出土土器⑥

２区出土土器（第61～73図１～113　写真図版31～38）

２区からは弥生時代中期後半から古墳時代中期に位置づけられる土器群が出土した。出土遺構・層位毎に説明する。

15層相当層出土土器（第61図１～３　写真図版31）

１は甕の口縁部から肩にかけての部位である。２・３は高坏の脚部である。２は「ハ」の字状に延びる。３は脚部中位で大きく屈折する。古墳時代中期における典型的な「屈折脚高坏」である。やや摩滅気味である。

17～19層出土土器（第61～63図４～22　写真図版31・32）

４～17は壷である。４～８は単純口縁を持つ。４については中位に最大径があり、全体的に丸みを帯び、底面には明瞭に木葉痕を残す。５は口縁部から胴部中位まで遺存した資料である。６は丸みの帯びた胴部に直立した口縁部を持つ。７は弥生時代中期の短頸の細頸壷である。10～12は折返し口縁を持つ。10は棒状浮文を持ち、11は口唇部に刻目を持つ。13は広頸壷であろう。14は複合口縁で赤彩か。15は受口状口縁を持つ。16・17は肩部の破片資料である。16はハケ状工具で羽状に刺突している。擬似羽状文か。東遠江の菊川様式の影響だろう。

18～20は甕である。18は台付甕である。台部の外面にはハケ調整の後に棒状浮文が貼り付けられている。19は口縁部の破片資料である。口唇部は指頭押圧が施される。底部のみの資料である20は中期代の資料であろう。21は高坏である。22は高坏の口縁部の破片資料か。中部高地の栗林式の可能性がある。これらの資料の時期は弥生時代中期後半から古墳時代までと時期差がある。

SD201出土土器（第64図23～26　写真図版33）

23～25は壷である。23と24は折返口縁を持つ。23は口唇部・口縁内面部に波状文を施す。頸部から肩部にかけてはその痕跡は認められない。24は口縁部内面より穿孔しており、その遺存状況から少なくとも15ヶ所穿孔されていた可能性をもつ。25は弥生時代中期の壷の肩部である。26は甕である。台付甕か。口唇部に刻目はない。これらの資料は西駿河Ⅵ様式、すなわち弥生時代後期後葉と推定される。

SD203出土土器（第64図27・28　写真図版32）

27・28は壷である。２点とも折返口縁を持つ。27は外面をハケ調整した後、丹念にヘラミガキを施している。口縁部内面には波状文。28の口縁部にはハケ状工具で連続刺突している。これらの遺物の所属時期もSD201と同時期か。

SK219直下砂層出土土器（第65図29）

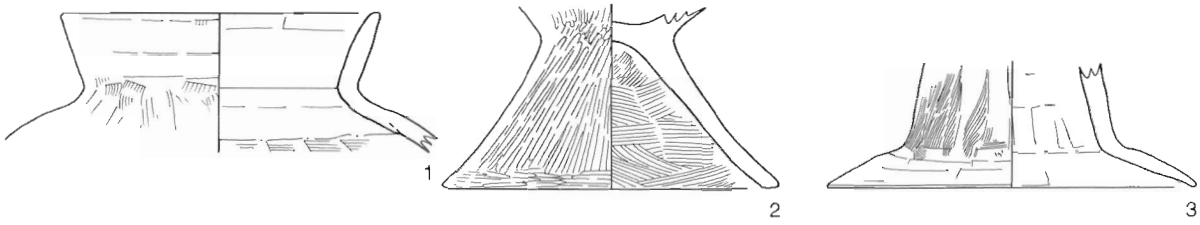
29は壷である。頸部のみの資料である。外面に施された波状文は少なくとも４段観察される。

SK220出土土器（第65図30～34）

30～33は壷である。30・31は口縁部のみ、33は頸部のみの資料である。32は壷の肩部である。円形浮文が２個１組で貼り付けられている。34は高坏の脚部であろう。東遠江からの影響か。

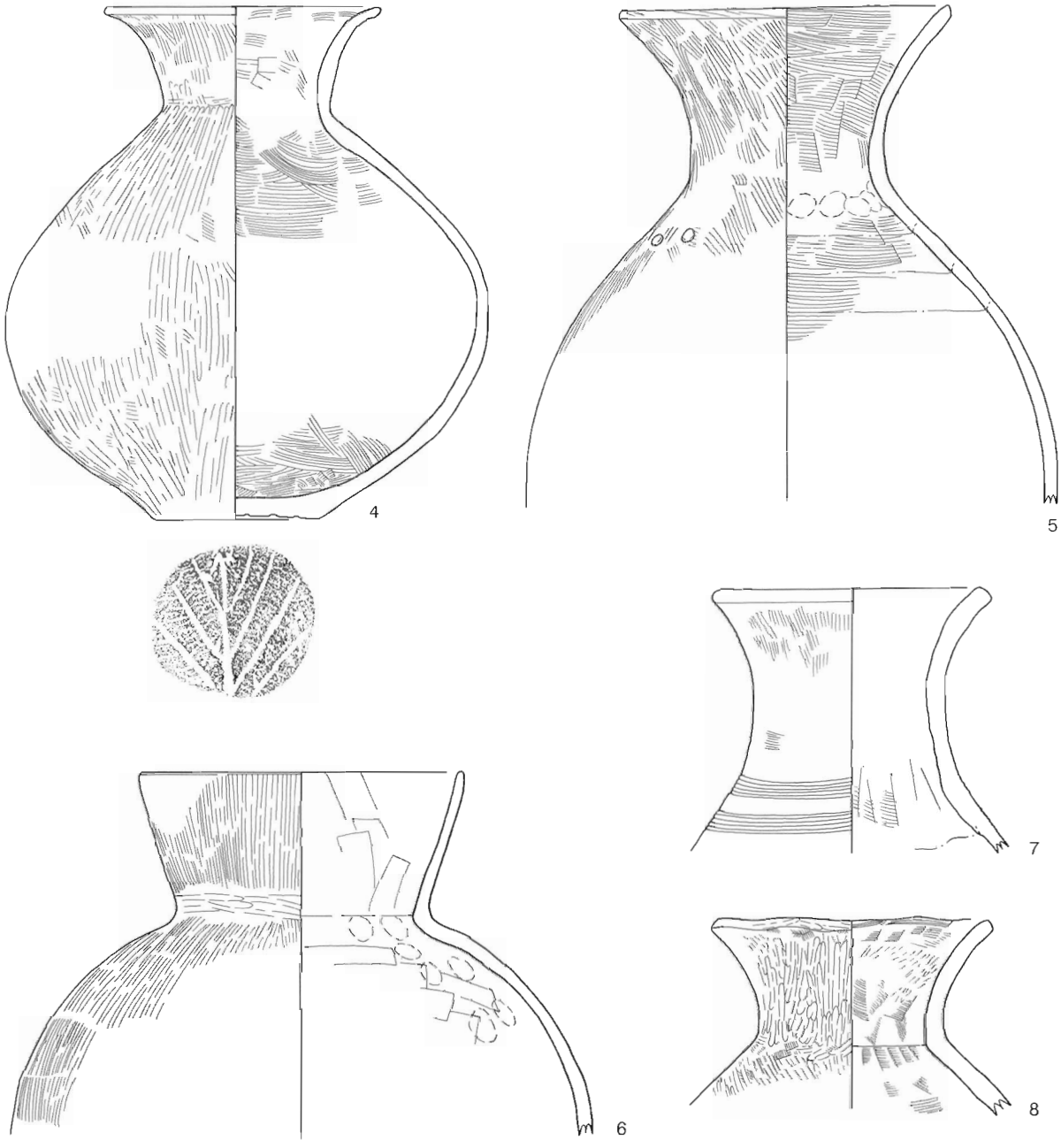
護岸杭列（SA201）出土土器（第65・66図35～48　写真図版33）

ここでは杭列内部及び杭列に近接した区域から出土した土器を集めた。35～45・48は壷である。これ

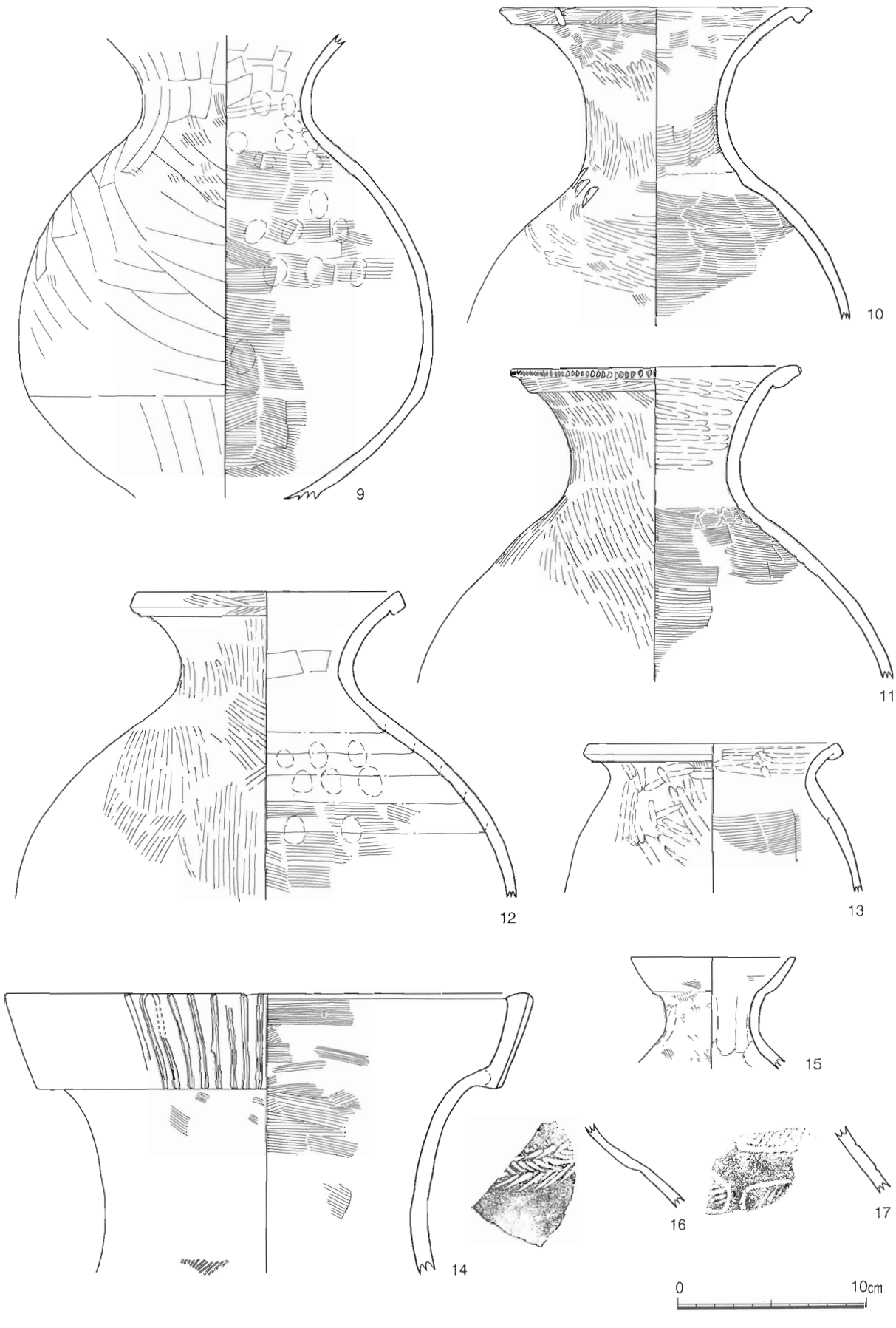


15層

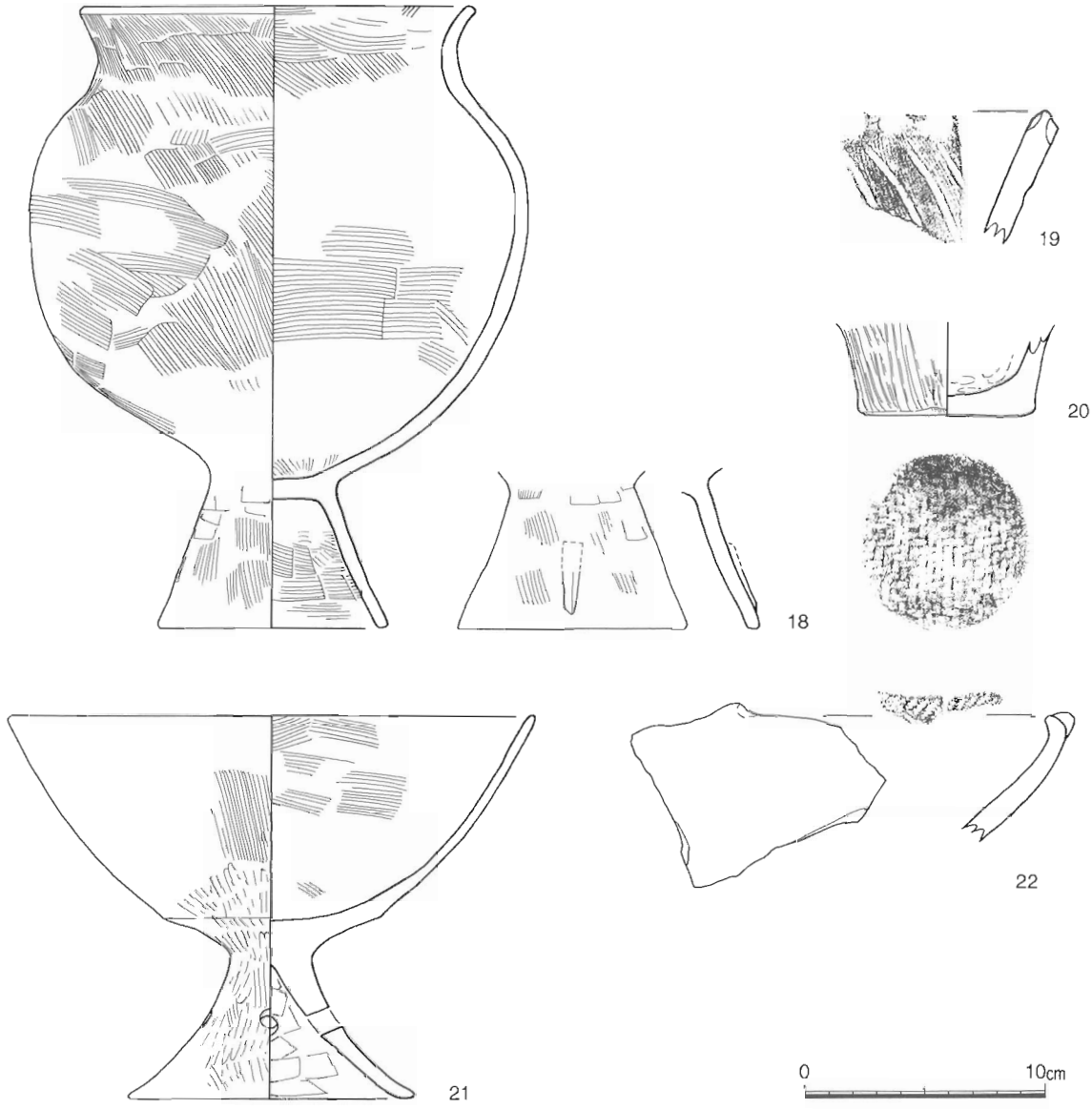
17～19層



第61図　２区出土土器①



第62図　２区出土土器②

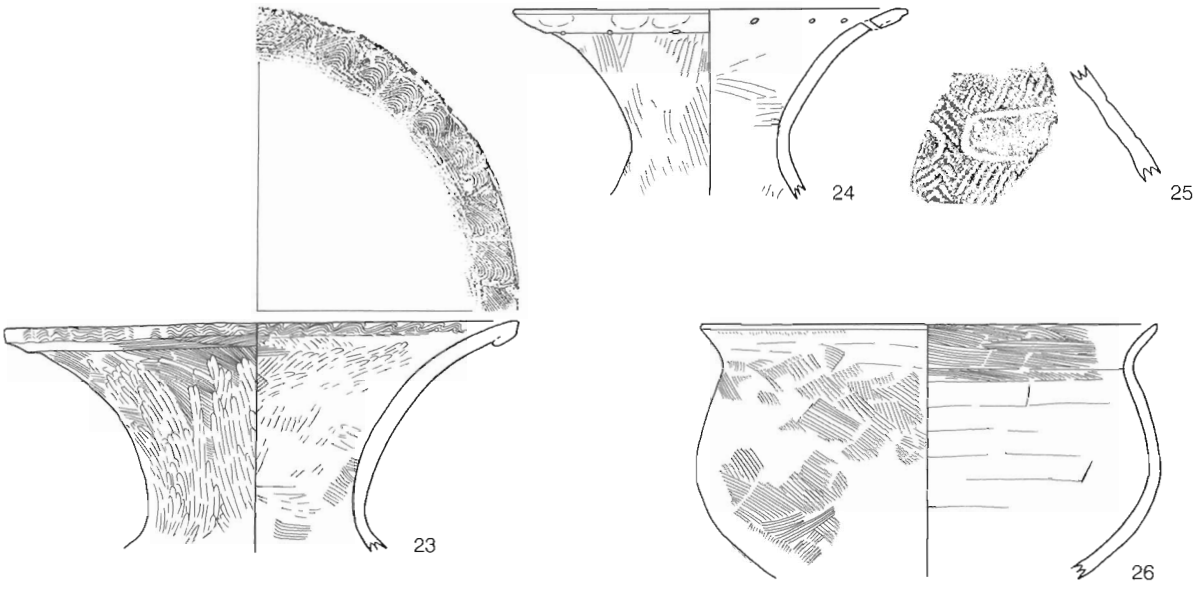


第63図　２区出土土器③

らのうち36は口縁内部に縄文・穿孔を行っている資料である。37はほぼ完形の状態で杭列内から出土した資料である。折返し口縁を持ち、胴部下位と中位で屈折する。円形浮文が貼り付けられている。39は口唇部に刻目を入れている。40・41は口縁内部と頸部～肩部にかけて波状文が施されている。42・43は複合口縁である。44は胴部から底部にかけての資料で、37等と比較してその形態は低平で、肩部の張りが著しい。35については中期の短頸壷であろう。45・48は壷の底部である。46は小形甕、47は台付甕の台部であろう。これらの土器群の主体は西駿河Ⅴ～Ⅵ様式、すなわち弥生時代後期後半以降の範疇に入るものと推定される。

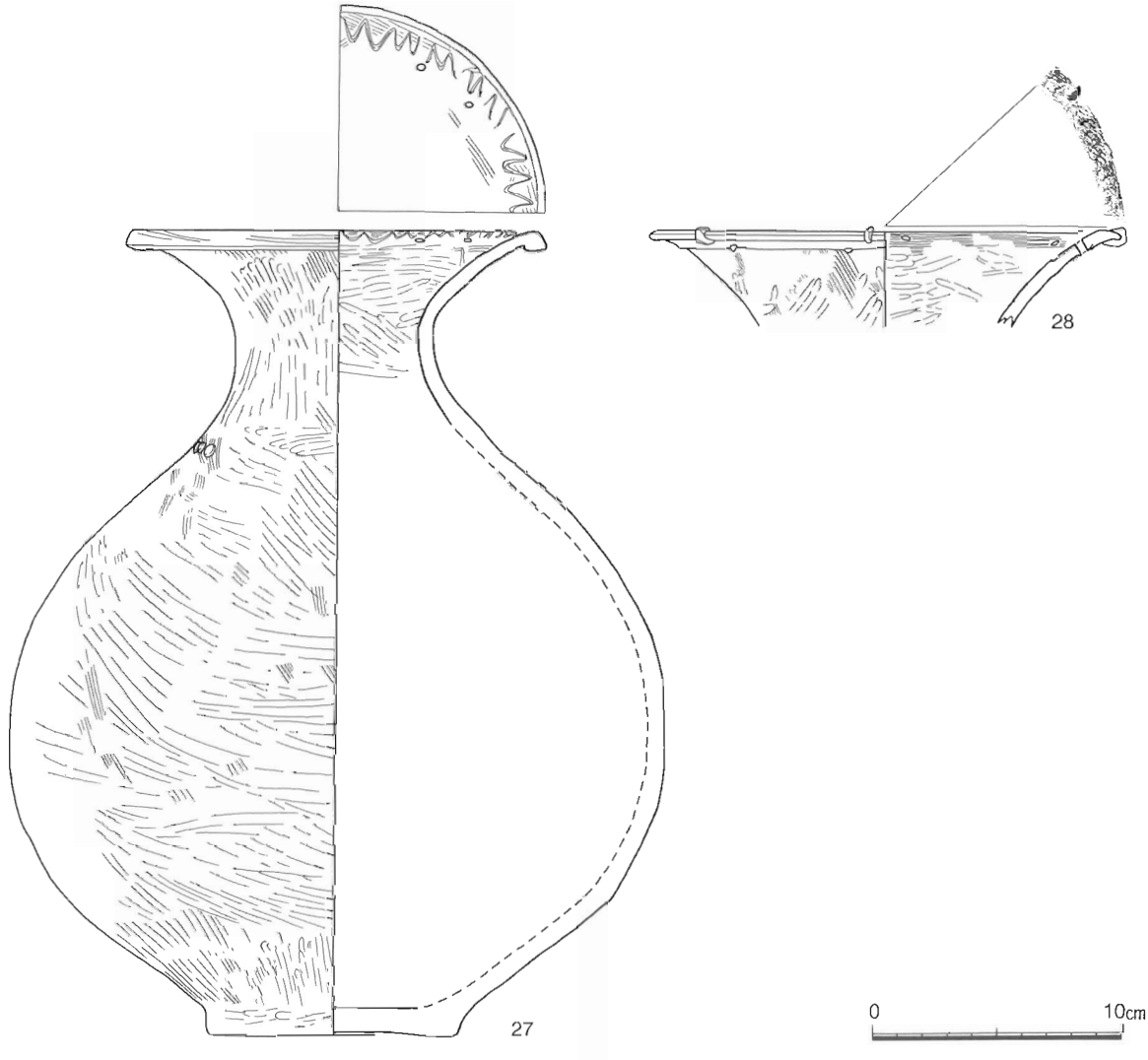
19層出土土器（第66図49～54）

ここでは護岸杭列及びSK219以東の水田耕作土と思しき層位から出土した土器群を図示する。49～51は壷の口縁部のみの資料である。51は受口状口縁である。52・53は甕である。53は台付甕の台部で煤が付着する。54は器台か。これらは護岸杭列（SA201）付近出土土器と時期的に同じであろう。ただし51については西駿河Ⅲ様式、すなわち弥生時代中期中葉以降の所産であろう。

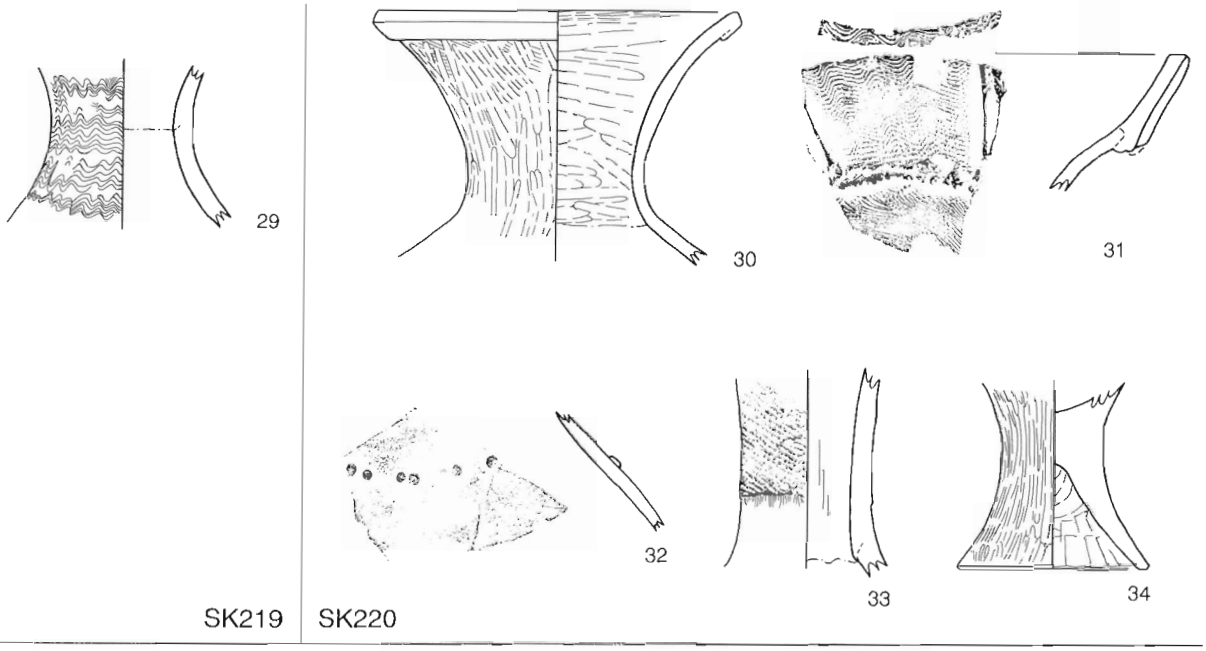


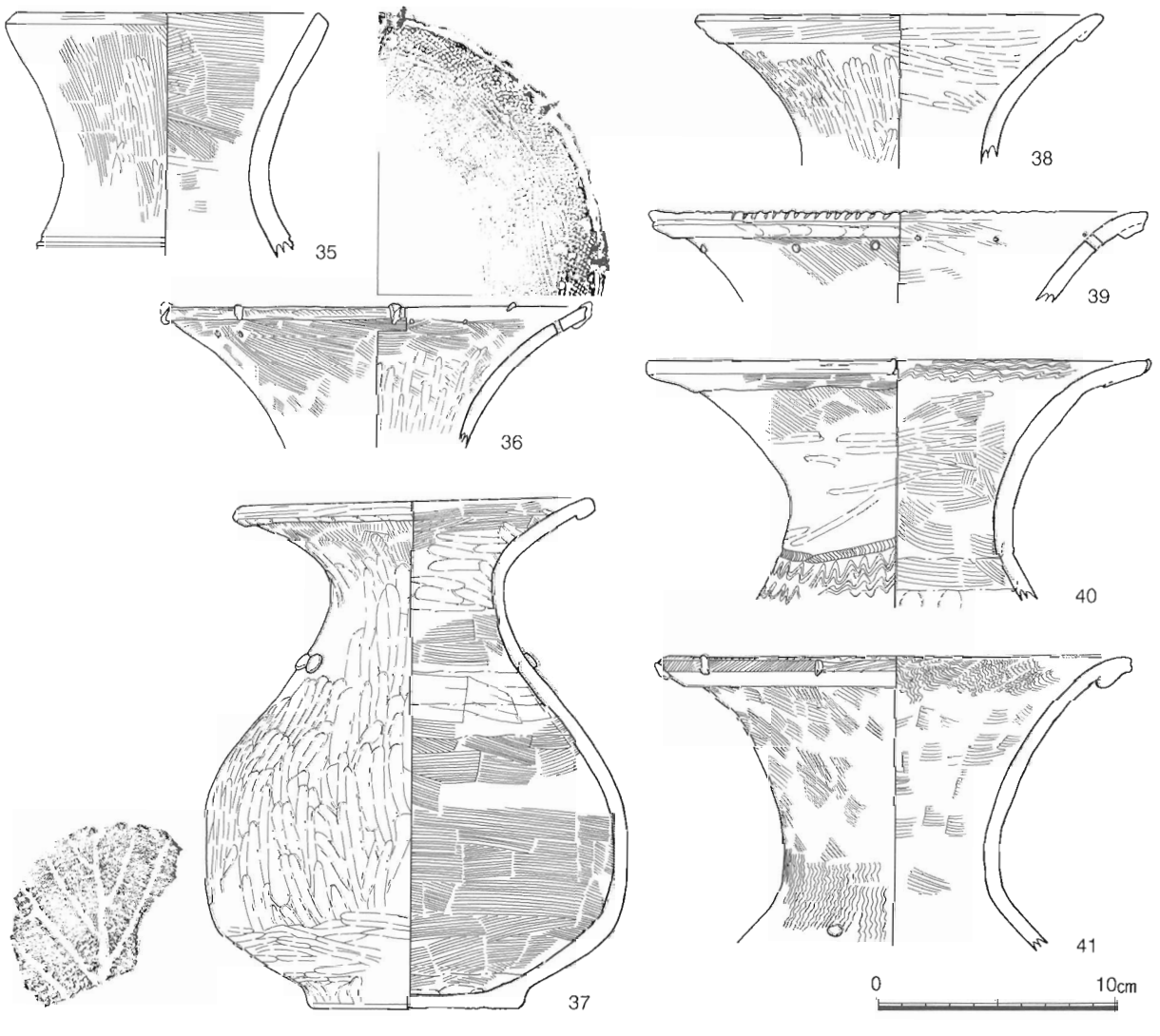
SD201

SD203

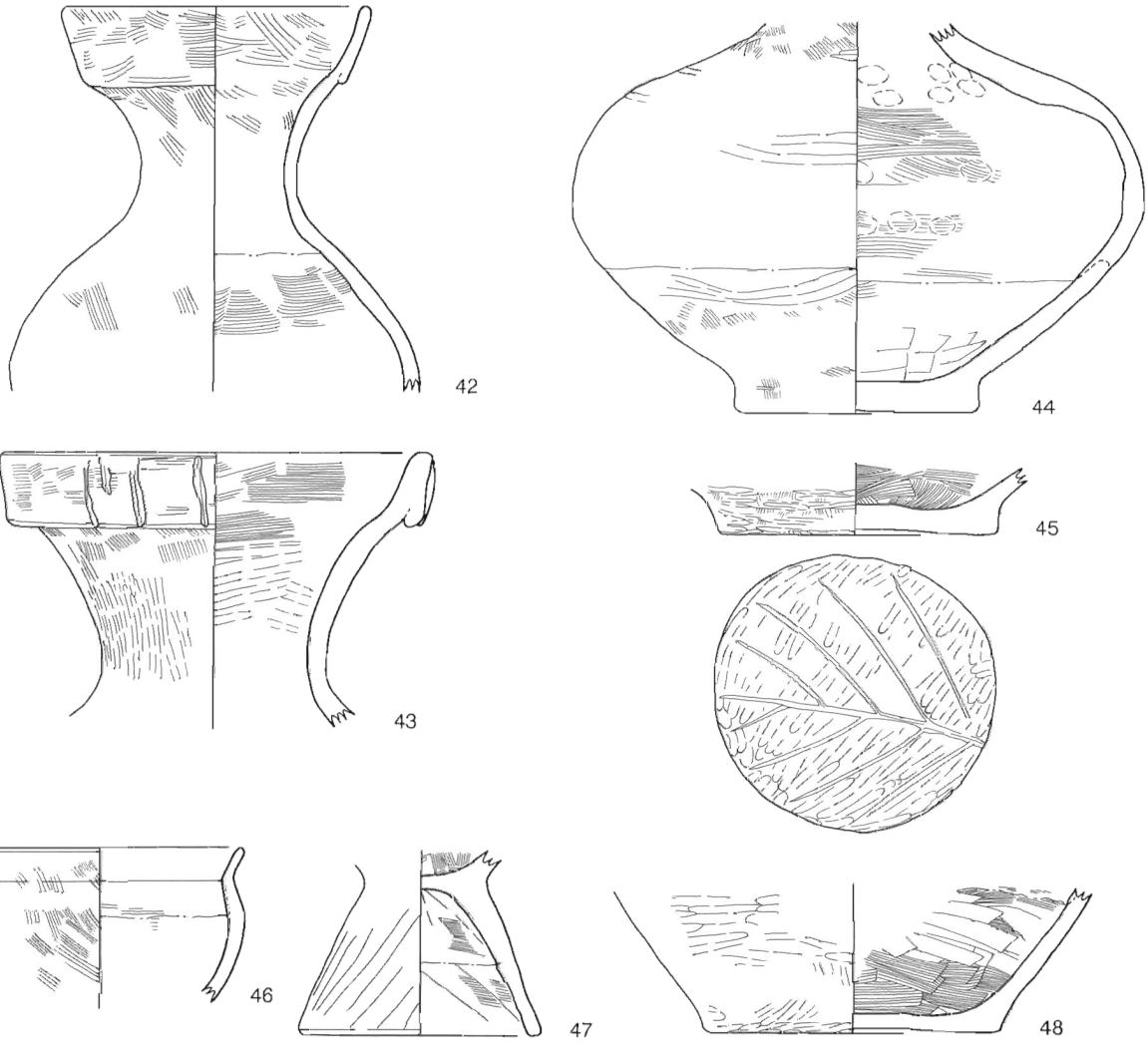


第64図　２区出土土器④





第65図　2区出土土器⑤



第66図　2区出土土器⑥

土手状遺構ａ層他出土土器（第67図55～66　写真図版34）

ここでは土手状遺構ａ層及びその周辺から出土した土器を集めている。55・56は壷である。55は内面に波状文を持つ折返し口縁部である。56は頸部に刻目入りの突帯を持つ。57～60は甕である。57・59は共に胴部から底部を欠いている。本来は台付甕か。口唇部に刻目は無い。61は高坏で、坏部の見込み、脚部の一部が遺存している。62は小形の高坏で、63・64は器台である。64の坏部見込みは焼成前に穿孔されている。65・66はコップ形を呈し、共に内面はヘラミガキが施されている。極小鉢に分類される。これらの土器群の時期はⅥ様式以降、すなわち弥生時代後期後葉から古墳時代初頭に位置づけられよう。

土手状遺構ｄ層出土土器（第67図67～72　写真図版34）

ここでは土手状遺構のｄ層付近で出土した土器を集めている。67～70は壷である。69は複合口縁、68は単純口縁の壷である。67・70は小形の壷である。別個体か。71・72は共に台付甕である。71については別の層位から出土した破片が接合している。

SR204出土土器（第68図73～77　写真図版35）

73～75・77は壷である。73は口縁部から肩部にかけての資料である。口縁部の立ち上がりがやや直線的である。74は複合口縁の破片資料である。75は頸部から胴部中位の資料である。73・75は共に肩部に円形浮文を貼り付けている。77は小形の壷である。外面は赤彩されている。76は甕である。口唇部に刻目が施されている。台付甕であろう。これらの土器群の時期は西駿河Ⅵ様式、すなわち弥生時代後期後葉に位置づけられよう。

SX201出土土器（第68図78）

SX201から出土した土器で図化できたのは78のみである。この資料は壷の底部で、平坦な底面には辛うじて木葉痕が観察される。また黒斑が胴部外面から底面にかけて観察される。

SX202出土土器（第68図79）

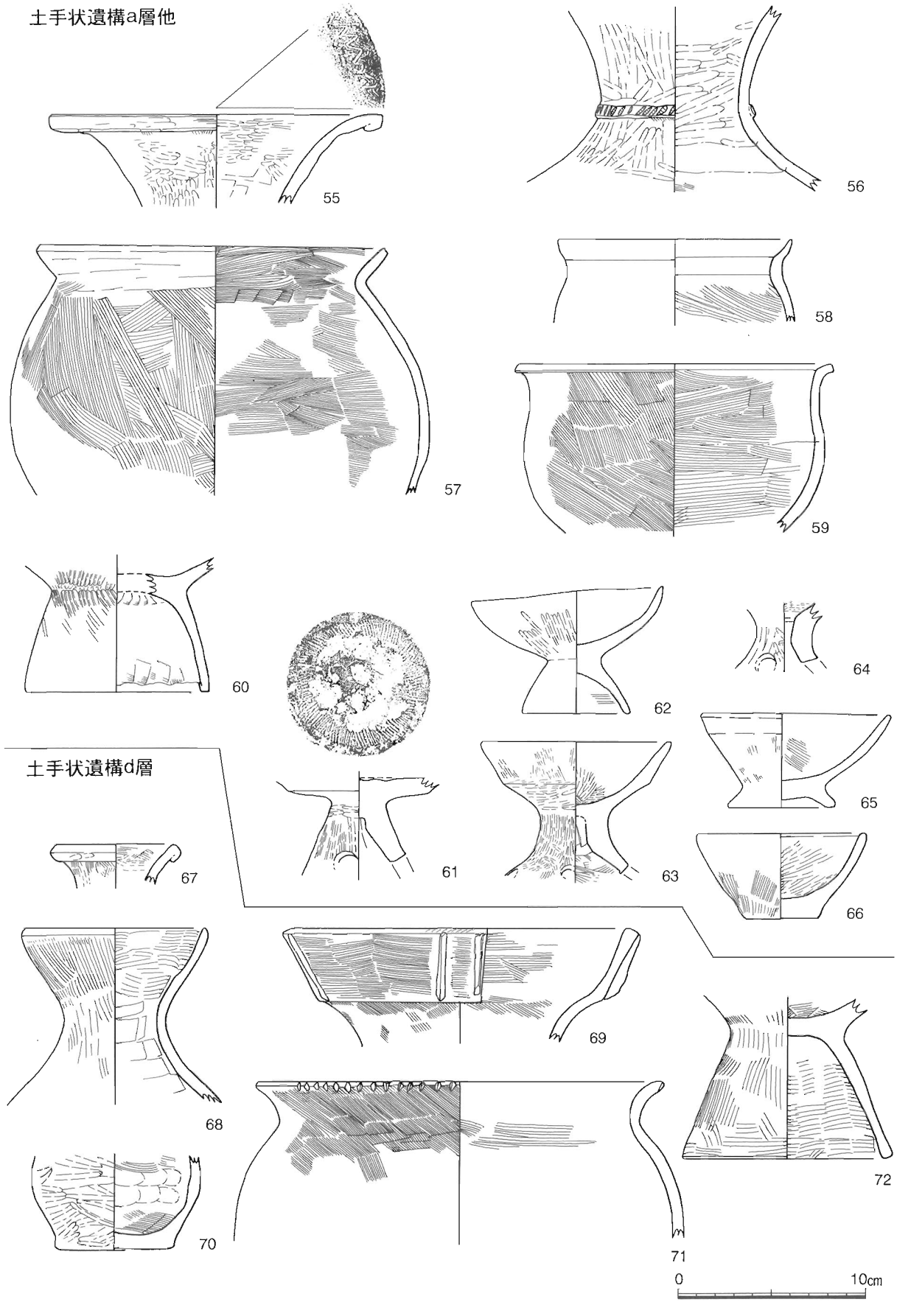
SX202から出土した土器で図化できたのは79のみである。この資料は壷の口縁部のみの資料である。単純口縁で口唇部は平坦に仕上げている。内外面共にハケ調整の後にヘラミガキを施している。器面は摩滅気味である。

微高地出土土器（第69図80　写真図版35）

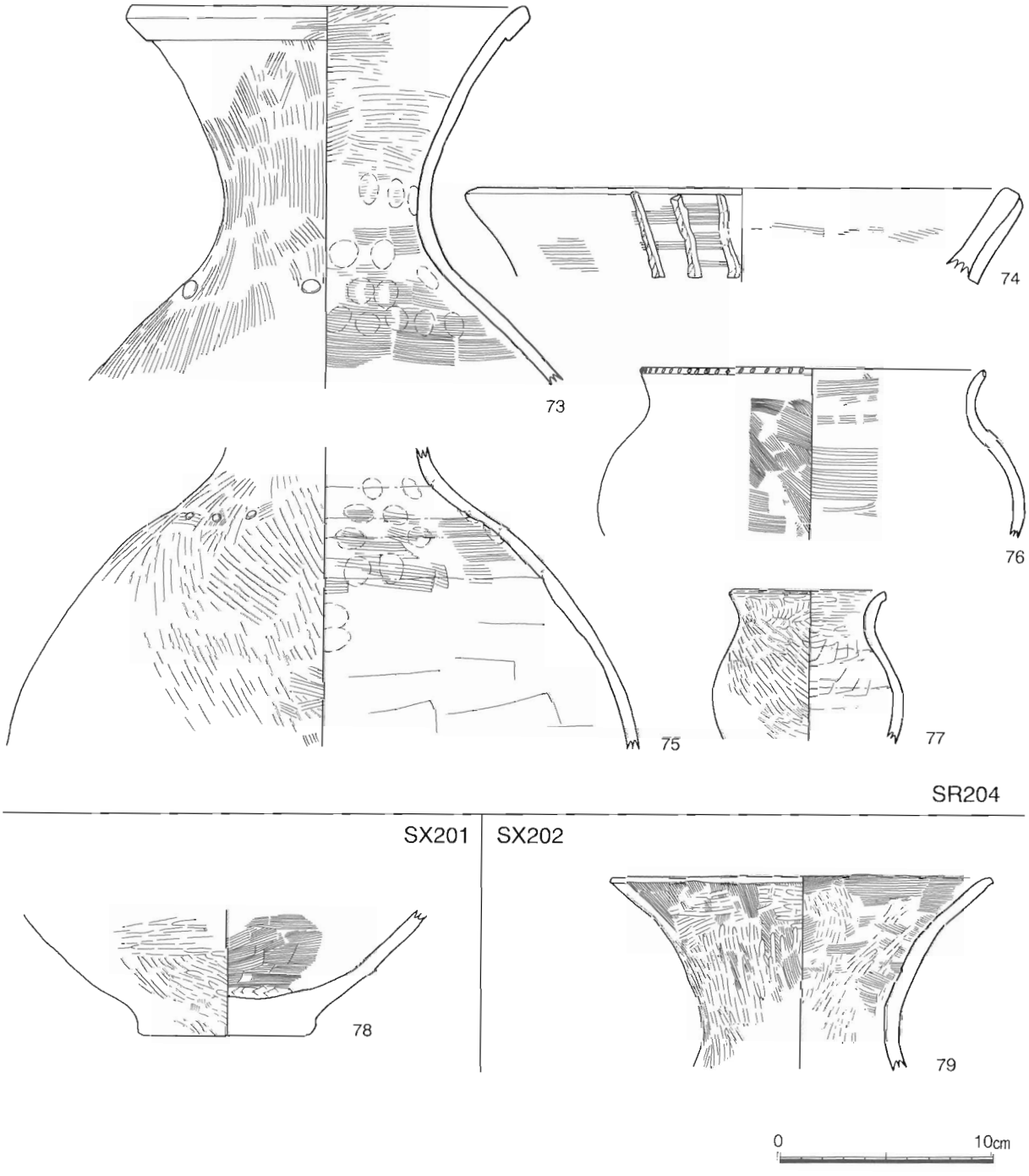
80はSX201・202よりも下位の位置で出土した大型の壷である。本来的にこれらの遺構に伴っていたかどうかは判然としない。この資料は文様は施されず、外面は全面ハケ調整が施されている。底部からやや外反気味に立ち上がり、胴部中位で最大径をはかる。あまり肩部は張らず頸部に移行する。

20層出土土器（第70図81～95　写真図版38）

81～93は壷である。81は明瞭ではないが折返している。口唇部に浮文が付く。83は大型壷の複合口縁である。88は中期の細頸壷の口縁部である。89～93は壷の頸部～肩部の破片資料である。89・91は櫛状工具を用い、また90は棒状工具を用い波状文等を施す。92・93は後期代の資料で、前者は櫛描波状文、後者は縄文の上に浮文を貼り付けている。95は台付甕の口縁部か。94は中期代の甕の口縁部であろう。この層位では西駿河Ⅲ～Ⅳ様式までの資料が混在する。83が時期的に最も新しいものと推定される。

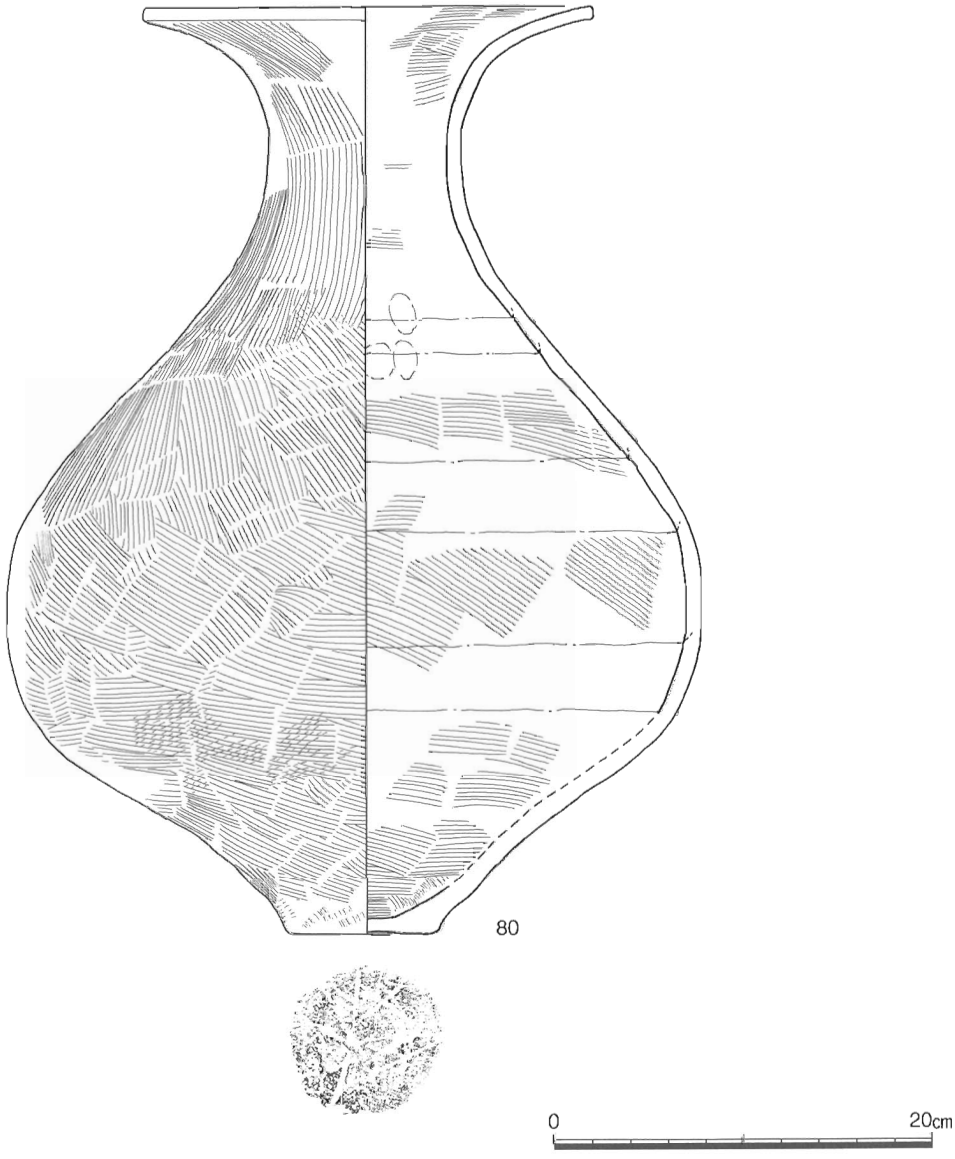


第67図　2区出土土器⑦



第68図　２区出土土器⑧

微高地

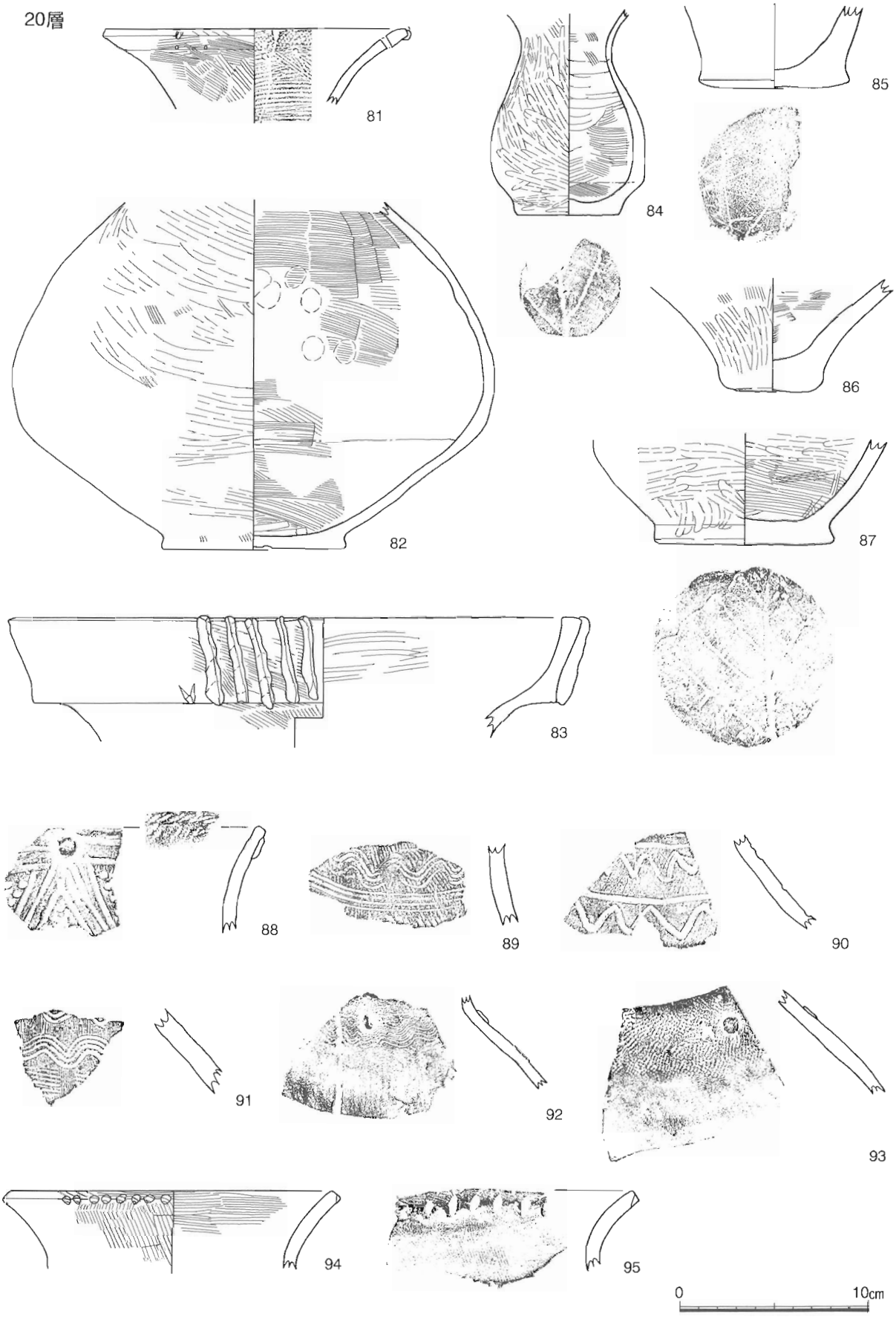


第69図　２区出土土器⑨

中期層出土土器（第71図96～102　写真図版36・38）

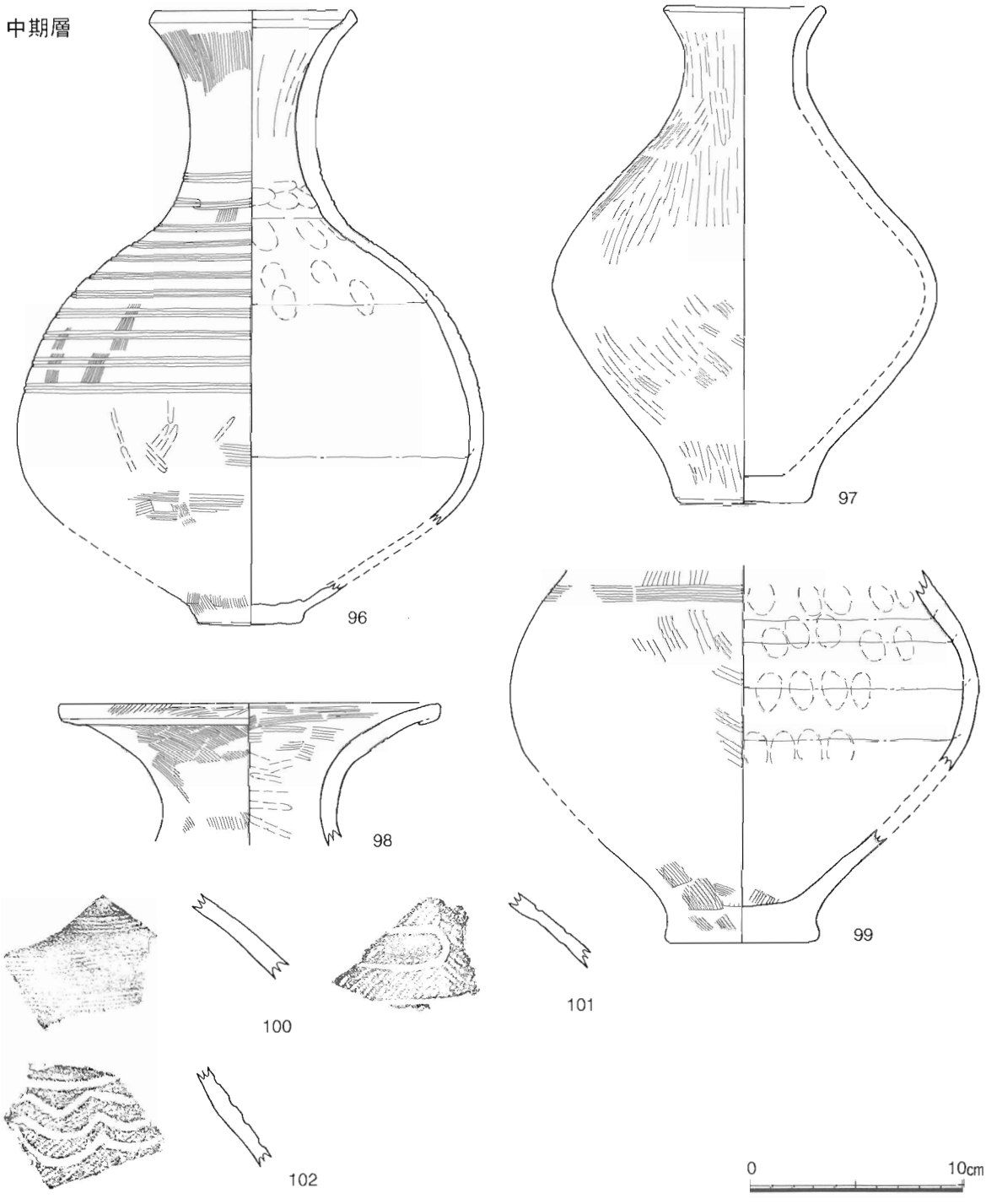
この層位は２区B13グリットより西半部で確認された青灰色シルト～暗オリーブ灰色シルト層である。前章の遺構説明でも述べた如く、２区基本土層とした層位は弥生時代後期より以前に形成されたものではないため、１区の基本土層との比較でもかなりの違いを見せている。しかしこの中期層とした層位は基本的に１区と継続した層位と推定される。出土標高値については２区22層出土土器と近似値であるが、各々の土器には明らかな時期差がある。

96～102は全て壷である。96は櫛状工具で直線文を11段施した壷である。施文の様子は東遠江Ⅳ－１様式の壷を想起させるが、器形として肩が張り全体的に丸みを帯びている点で、在地色が垣間見える。97は短頸壷である。最大径が胴部中位ではかり、肩部・胴部下位が直線的に延びる。そのため97は算盤玉の如き形状を呈する。99は肩部近くに櫛描直線文が観察される。施文の部位も肩部付近のみで、胴部中位付近で最大径をはかる。100～102は壷の肩部の破片資料である。100は96同様櫛描直線文、101には磨消縄文、102は縄文内に工具で弧状文が施されている。98のみは後期の折返し口縁である。上層からの混じりか。この層位から出土せる土器群の主体は西駿河Ⅳ様式、すなわち弥生時代中期後半代の範疇に入るものと推定される。



第70図　２区出土土器⑩

中期層



第71図　2区出土土器⑪

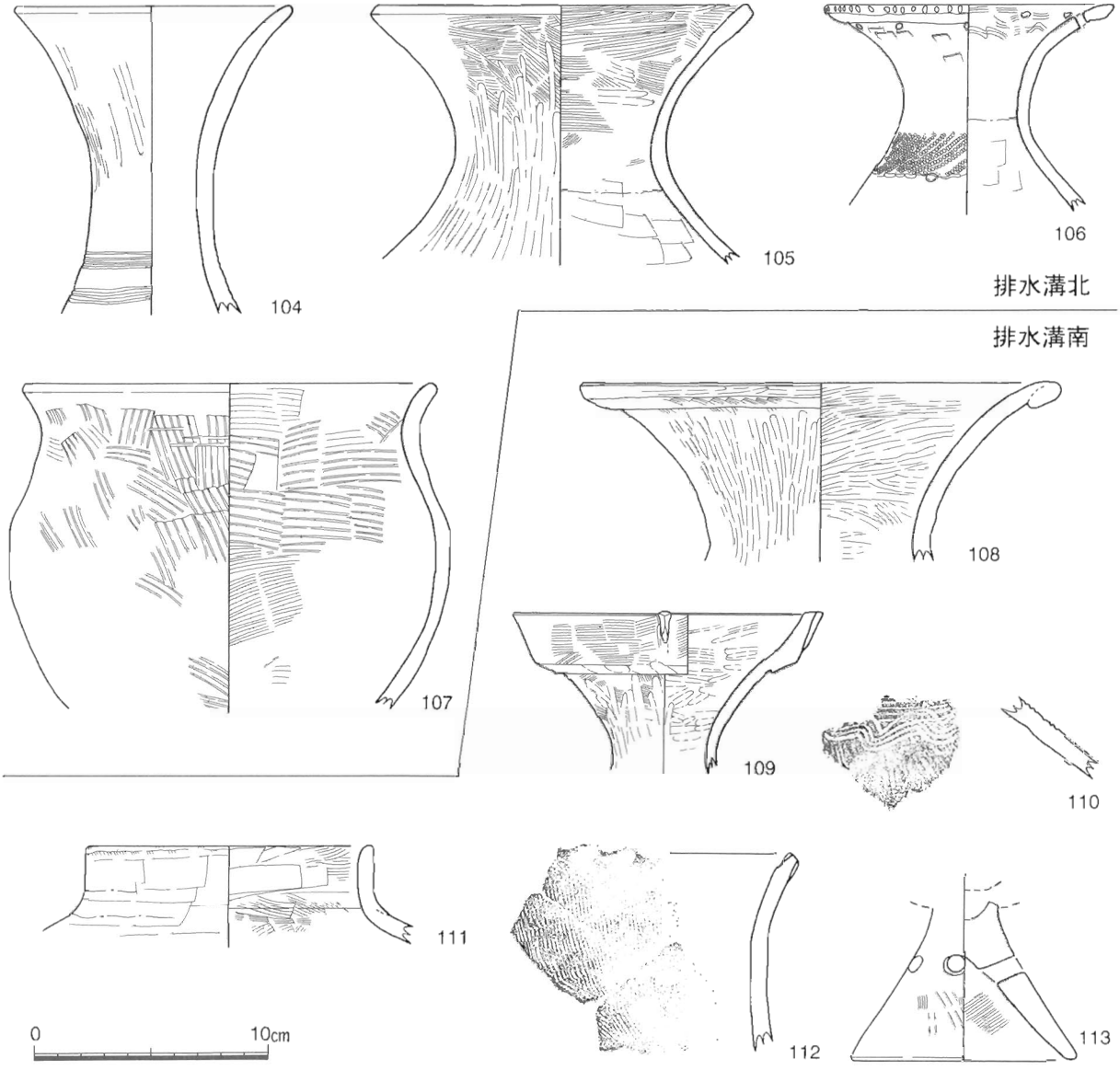
第72図　２区出土土器⑫

22層上面出土土器（第72図103　写真図版37）

103はSK219よりも下位、22層上面で出土した大型の壷である。口縁部と底部が欠失している。頸部に円形浮文が貼り付けられている以外には、文様の類は施されていない。底部から直線的に立ち上がり、胴部中位からやや下位寄りの位置で屈折・最大径をはかる。頸部までは内湾して立ち上がる。屈折部外面には粘土紐の輪積み痕が明瞭に観察でき、全体的に粗雑な作りを見せている。かくも大型の壷の類例については沼津市植出遺跡SB231出土資料があげられる。本来的に当該資料には複合口縁があったのであろう。

排水溝出土土器（第73図104～113　写真図版36・38）

２区は１区と比較して出水が激しく、調査区の縁辺等に排水用の溝を掘削し排水している。この溝の掘削時に多くの土器が出土している。層位は基本土層の17～20層に該当する。104～106・108・109は壷の口縁部である。複合口縁の109や折返し口縁106・108が見られる。また104のような中期代の資料も散見される。110は壷の肩部である。波状文を施す。107は台付甕と推定される資料で台部は欠損している。113は高坏である。これらの土器群は104が西駿河Ⅳ様式の典型的な細頸壷で、112の口縁部には指頭押圧



第73図　２区出土土器⑬

が見られることから所属時期の上限は弥生時代中期後葉で、109の複合口縁や口唇部に刻目を施していない107の存在から古墳時代初頭までと考えられる。

３区出土土器（第74～89図１～217　写真図版39～50）

３区からは弥生時代中期中葉から弥生時代後期に位置づけられる土器群が出土した。出土遺構・層位毎に説明する。

SK306出土土器（第74図１～３　写真図版39）

１～３は壷である。１は受口状の口縁部である。口縁部は沈線文・円形浮文が施されている。２は複合口縁である。棒状浮文が１本単位で口縁部に貼り付けられている。３は肩部から胴部にかけての資料である。複合鋸歯文が施されている。これらの資料のうち２が西駿河Ⅴ様式以降、すなわち弥生時代後期代に位置づけられる。従って畦畔自体の年代も該期に当たるものと推定される。

７層出土土器（第74図４～６　写真図版39）

７層は２面の基盤層になる層位である。４・５は壷である。２点とも単純口縁で口唇部は平坦に仕上げられ、縄文が施されている。６は小型の壷の底部か。土器群の時期は西駿河Ⅴ様式、弥生時代中期後半であろう。

８層出土土器（第74図７～10　写真図版39）

７～10は壷である。７～９は肩部の資料である。７はＳ字結節縄文と刺突文が施されている。８は磨消縄文か。10は底面に網代の痕跡が観察される。

９～10層出土土器層（第75図11～40　写真図版39・40）

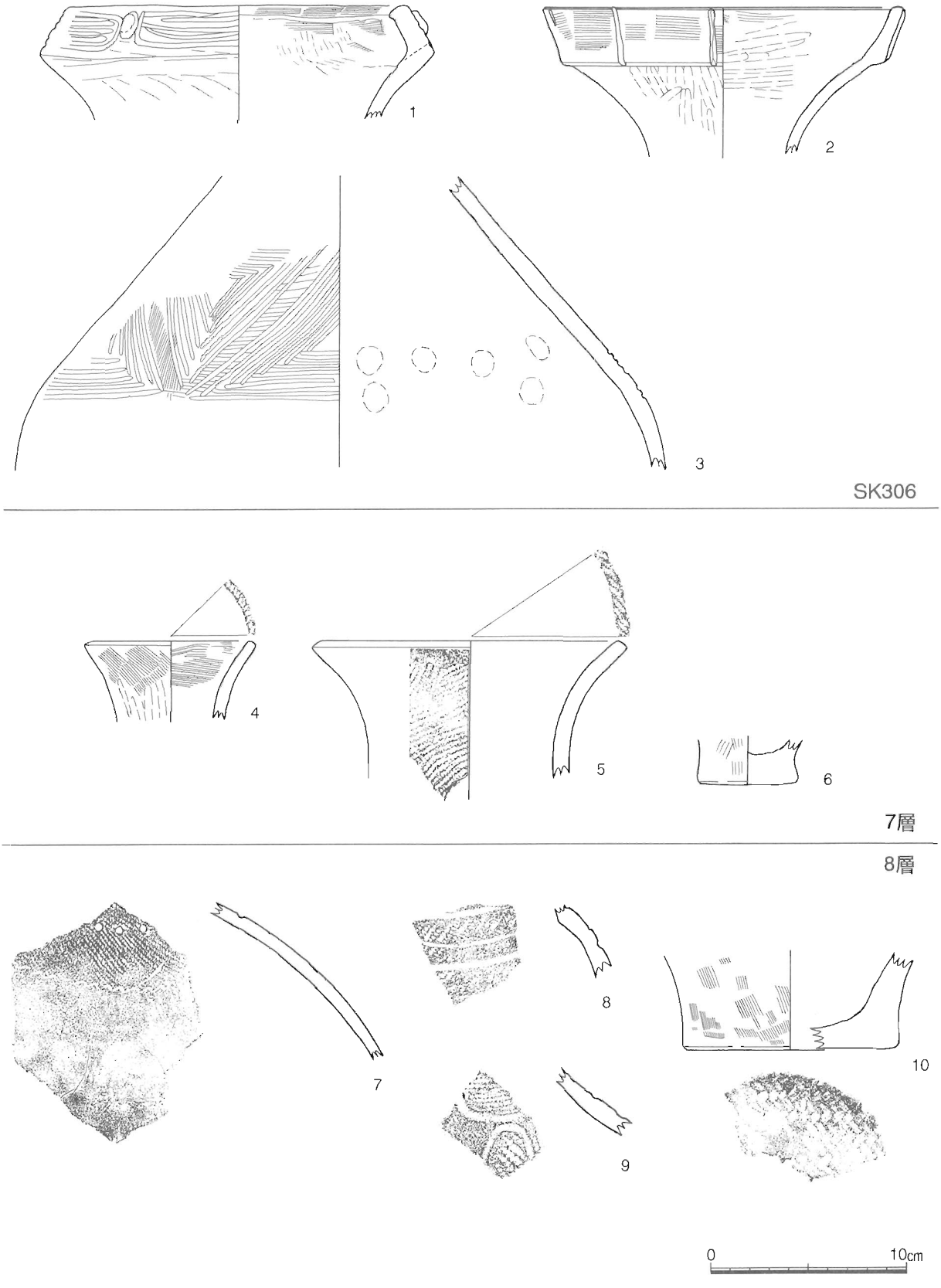
２～３面の間層である９層は、調査時には単層として掘削したが、基本土層とした３区中央部付近では９層を上層・下層として分離されるのを確認した。従って９層下層を本報告では10層とし、９～10層出土土器を一括で取り上げてみたい。

11～26は壷である。11は受口状口縁、12・13は単純口縁である。15～26は壷の肩部である。16～22は櫛状工具を使用した波状文・直線文・刺突文を用いて施文している。23・24は区画縄文を施している。

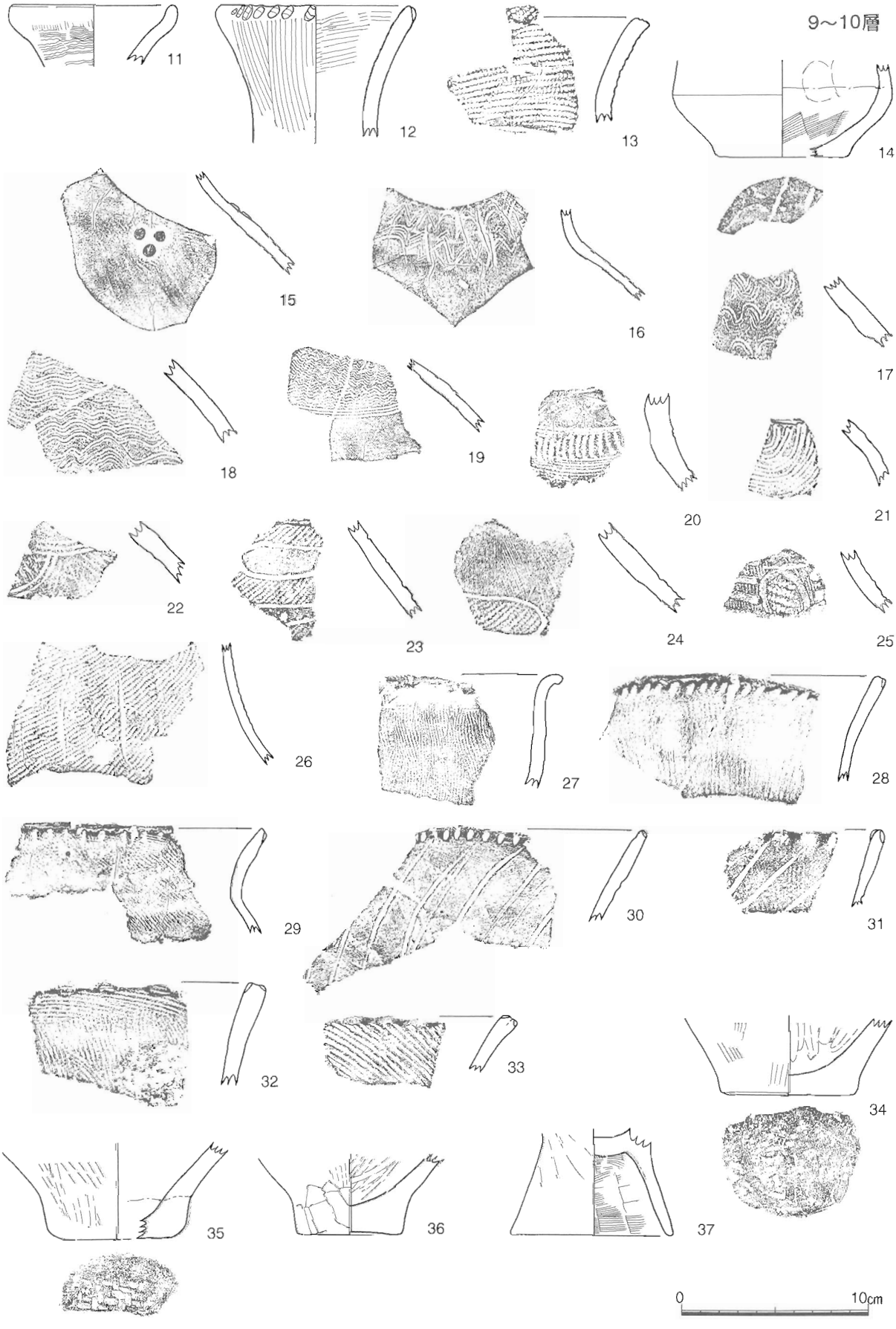
27～37は甕である。27～33は甕の口縁部の破片資料である。口唇部を折り曲げた27以外は工具を用いた刻目や指頭押圧を口唇部に施している。30・31は口唇部直下からヘラ状工具で沈線を施す。横走羽状文か。37は台付甕の台部である。38は高坏である。坏部はやや直線的に延び、口縁部は屈折させて口唇部に刻目を施している。東遠江からの影響か。調査時には３面下層の遺物と考えたが、出土標高値から３面に伴う遺物として判断した。39は小型の甕である。口縁部は折り曲げ、かつ刻目を施している。40は小型の鉢とした。これらの土器群の時期は、胴部下位が屈折する14、頸部に円形浮文を貼り付けた15、頸部に波状文を施した16、台付甕の37については西駿河Ⅴ様式以降、弥生時代後期の所産であろう。それ以外の土器群はⅣ様式、中期後半の土器群であろう。

SD301出土土器（第76図41～47　写真図版40）

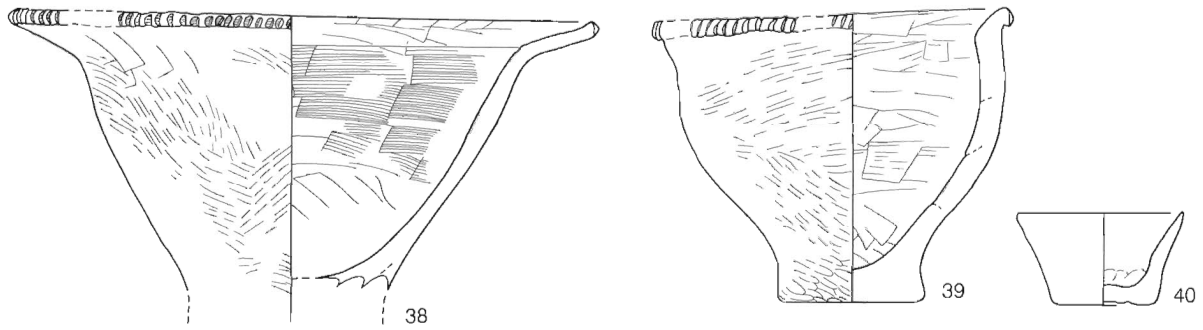
41～45は壷である。41は受口状口縁で、他は肩部から胴部にかけての破片資料である。42は沈線で三角文をえがいたものか。三角で区画された狭間には縄文や円形浮文が見られる。43～45は磨消縄文を施している。46・47は甕の口縁部である。いずれも口唇部に刻目を施す。その施文具は46はヘラ状工具、47はハケ状工具である。これらの土器群については42のような西駿河Ⅲ様式まで遡る資料がある。残りはⅣ様式、弥生時代中期後半のものであろう。



第74図　３区出土土器①

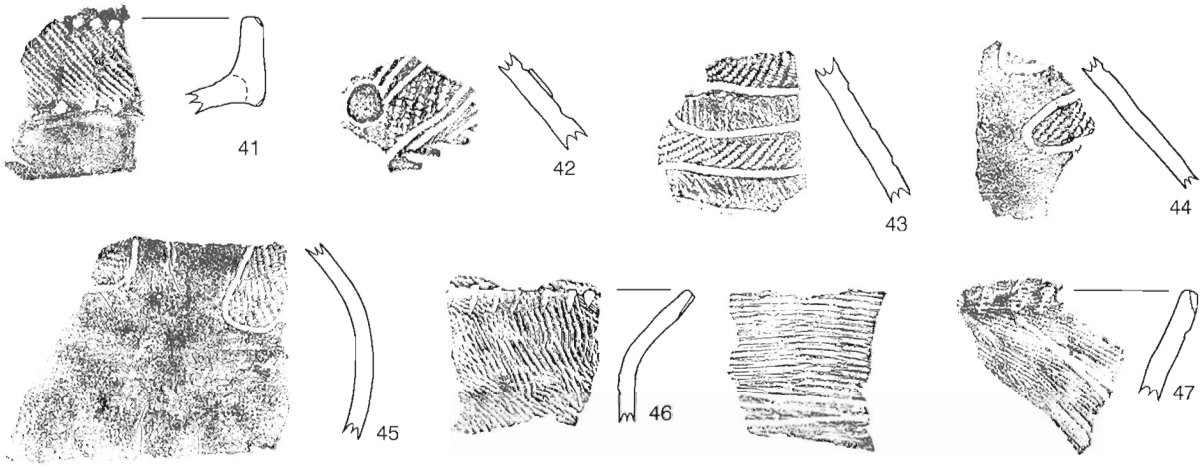


第75図　3区出土土器②

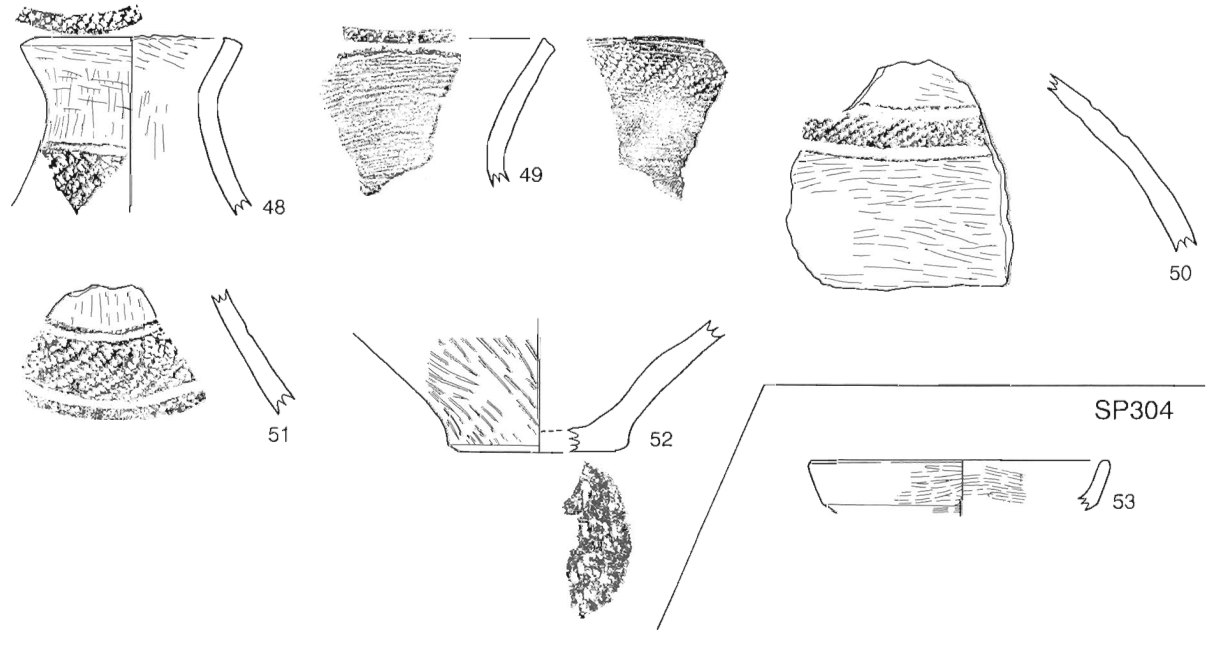


9～10層

SD301



SD304



SP304

第76図　３区出土土器③

SD304出土土器（第76図48～52　写真図版41）

48～52は全て壷である。48は短頸の細頸壷である。49も判然としないが48同様短頸の細頸壷であろう。両者とも平坦な口唇部に縄文が施されている。50と51は肩部に沈線で区画された縄文帯が施されている。縄文を施した後に沈線で区画、ヘラミガキを施して縄文を消している。52は底部である。荒いハケ調整が施されている。底面は網代の痕跡か。これらの土器群の所属時期は西駿河Ⅳ様式、弥生時代中期後半であろう。

SP304出土土器（第76図53）

53は壷である。受口状の口縁の破片資料である。

11層出土土器（第77図54～60　写真図版41）

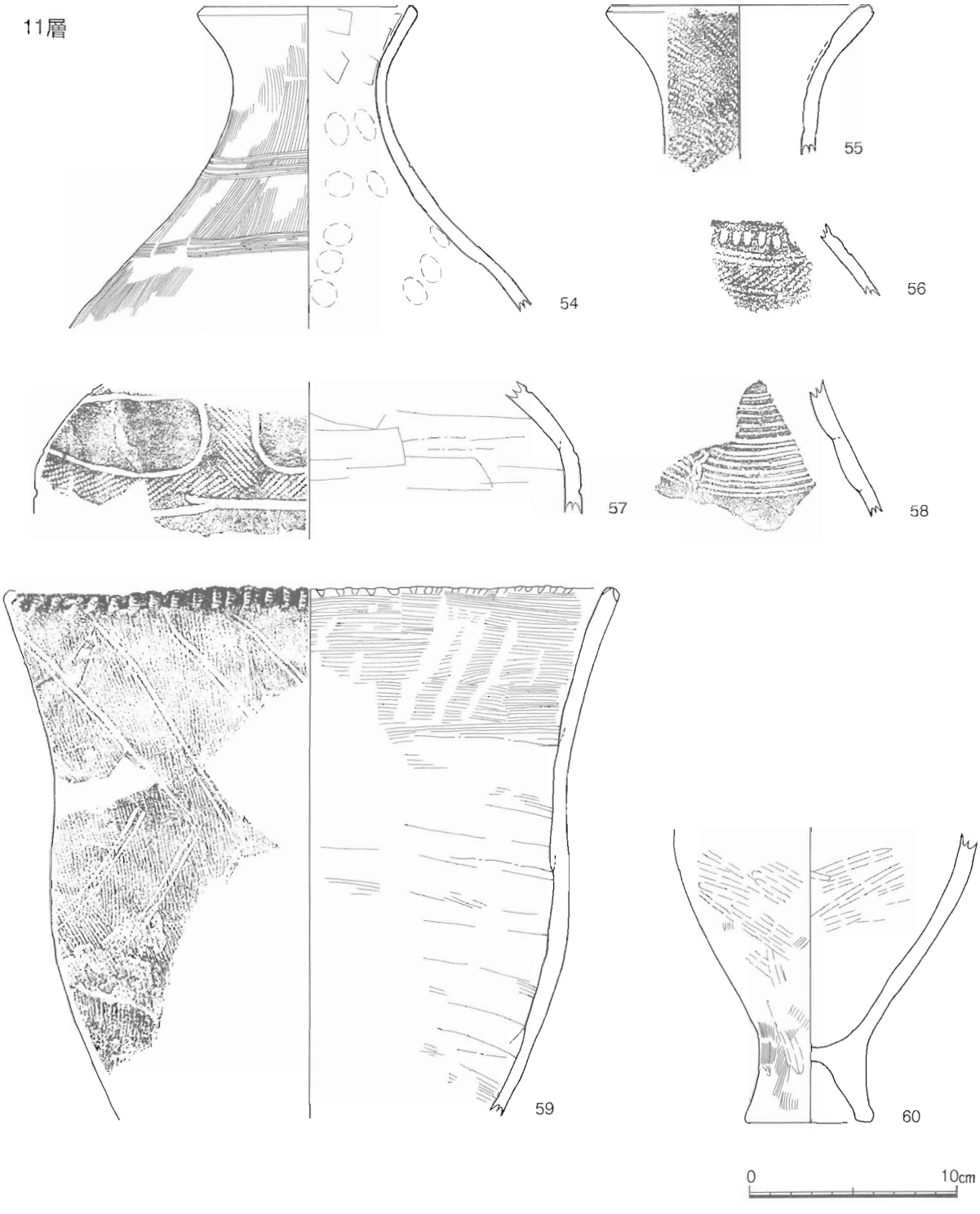
調査時には10層出土としていたが、前述のとおり９層下層を10層としたため、11層として本報告では記述したい。54～58は壷である。54は短頸の細頸壷で櫛描直線文が間隔をあけて施されている。調査時には３面下層に伴う土器と考えていたが、標高値等から３面に伴う遺物と判断した。55は口唇部まで縄文が施された単純口縁である。56は連続した棒状工具による刺突が観察される。列点文と言うべきか。57は磨消縄文が施された胴部である。58は櫛描直線文上に縦位に半截竹管状工具で波状文を施す。12層出土の79に酷似する。59・60は甕である。59は横走羽状文が施されている。60は台付甕である。内外面共にヘラミガキか。見込みに炭化物が付着している。これらの土器群の所属時期は西駿河Ⅳ様式、弥生時代中期後半であろう。

12層出土土器（第78～81図61～110　写真図版42～44）

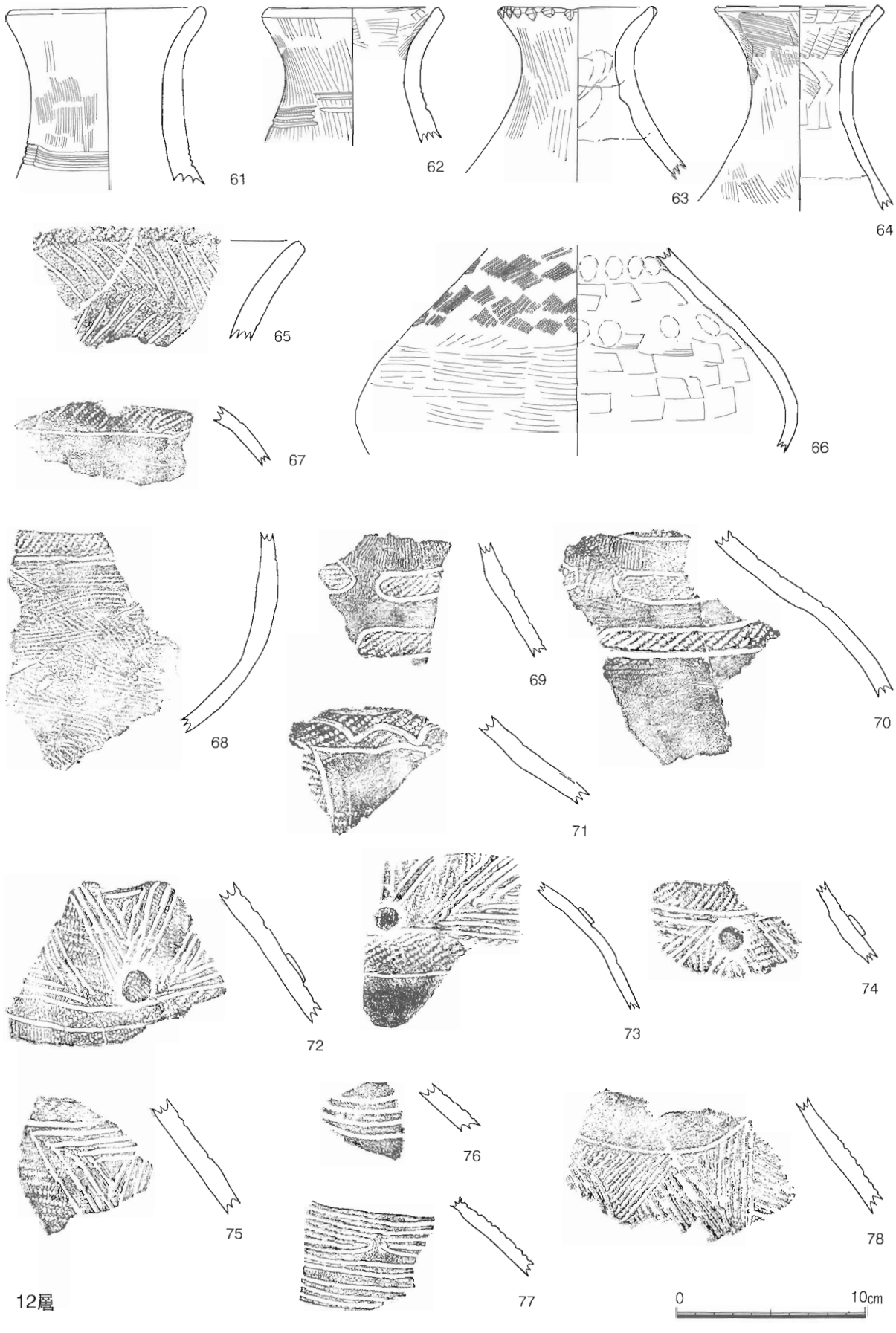
12層は調査時に11層として扱った層位である。この層位から大量の土器が出土している。いずれも破片資料が多く、図化出来なかった資料もある。先に触れた９層から12層まで全体的に包含層から出土する土器は、調査区東半部が多い。

61～90は壷である。61～65は単純口縁の短頸壷である。いずれも口縁部～頸部のみの資料である。61・62は頸部に直線文を巡らせている。63・64は無文である。65は平坦な口唇部に縄文が認められ、横走羽状文が施されている。66は肩部から胴部上位にかけて縄文を施す。胴部中位から下位にかけて最大径をはかる。67～71は沈線で区画された縄文帯が認められる胴部の破片資料である。69・70は同一個体の可能性がある。71は区画された縄文帯の内部に波状文を施している。72～75は重三角文を施している。いずれもハケ調整の後に縄文を施し沈線を描いている。他にも図化出来なかったが同様の資料がある。77は擬似流水文と思しき文様が描かれている。78は複合鋸歯文である。79～83は櫛状工具で施文した資料である。79は11層出土資料と酷似する。80・82は直線文のみ、81は直線文の波状文と組み合わせである。83は81と同様直線文と波状文との組み合わせか。84は胴部中位から底部にかけての資料である。無文である。85～90は壷の底部と考えられる資料である。木葉痕もしくは網代痕が認められる。

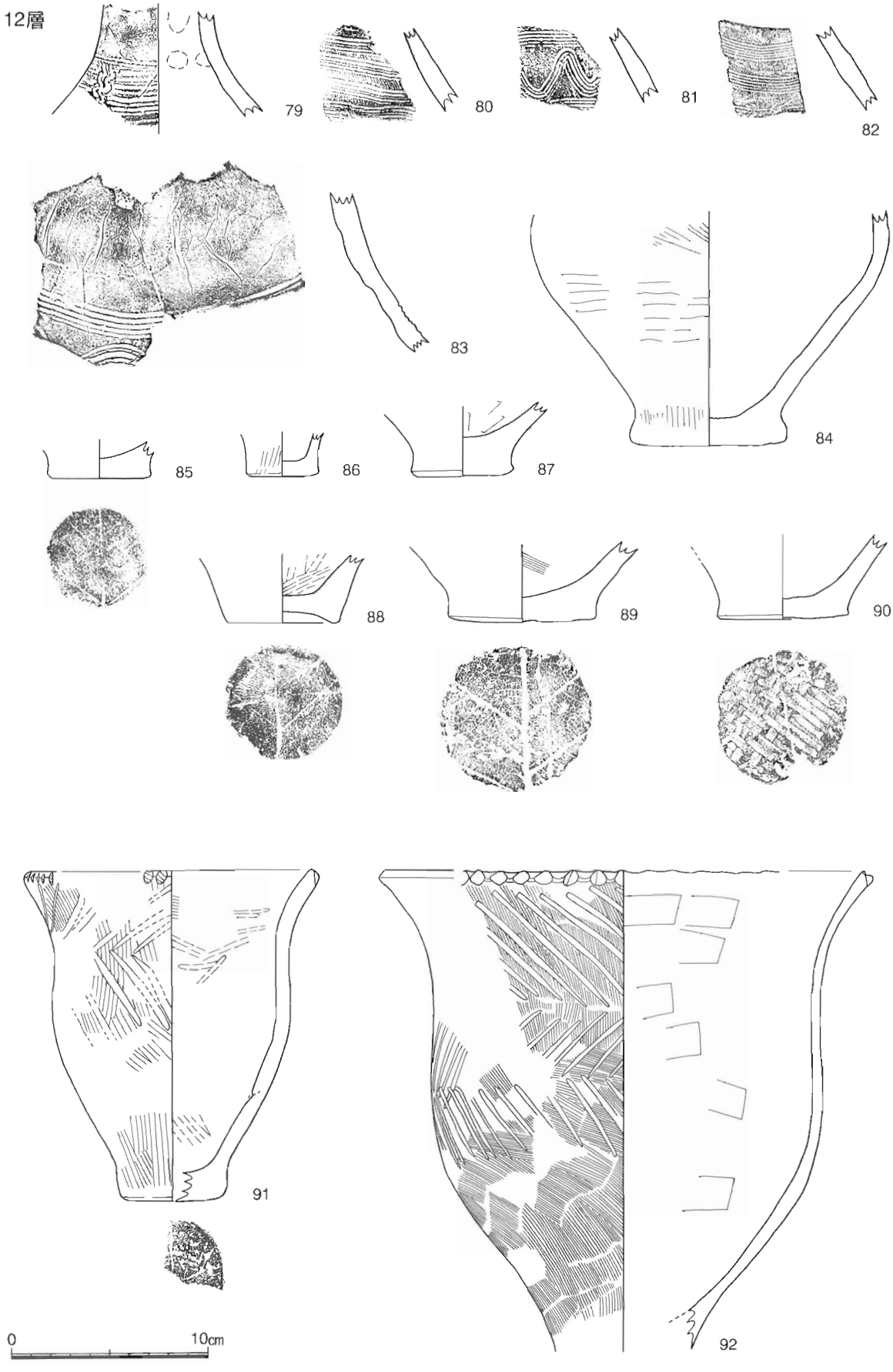
91～109は甕である。壷と比較しても器形がある程度復元できる資料が多く出土した。93～102・109は口縁部である。そのうち口径が推定できる資料は93～99・102・109の11点である。口径は14.4～36.0cmで殆どが20cm台をはかる資料である。91の如く極めて小口径な甕については一考を要する。これらの資料の口唇部はハケ状工具等で平坦に仕上げた後に、指頭による押圧や工具による押圧、もしくは刻目が施されている。傾向としてハケ状工具を使用したものが多く、指頭押圧が92・94・100・101の４例、ヘラ状工具を使用しているのは99の１例である。文様として口唇部直下から胴部中位にかけて横走羽状文を施すもの、一切文様を施さないものに分類される。図示したものでもそれぞれ同数で、報告出来なか



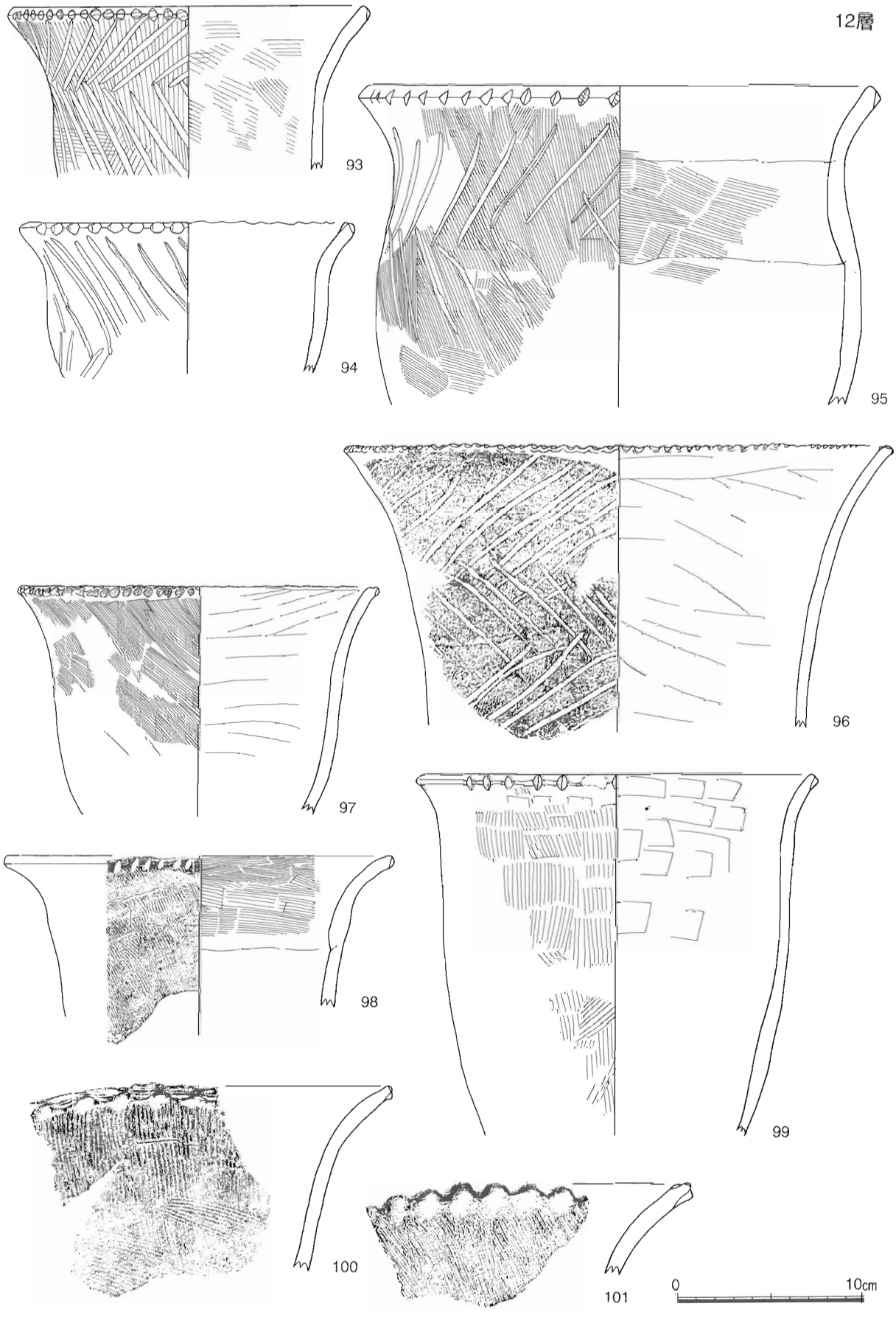
第77図　3区出土土器④



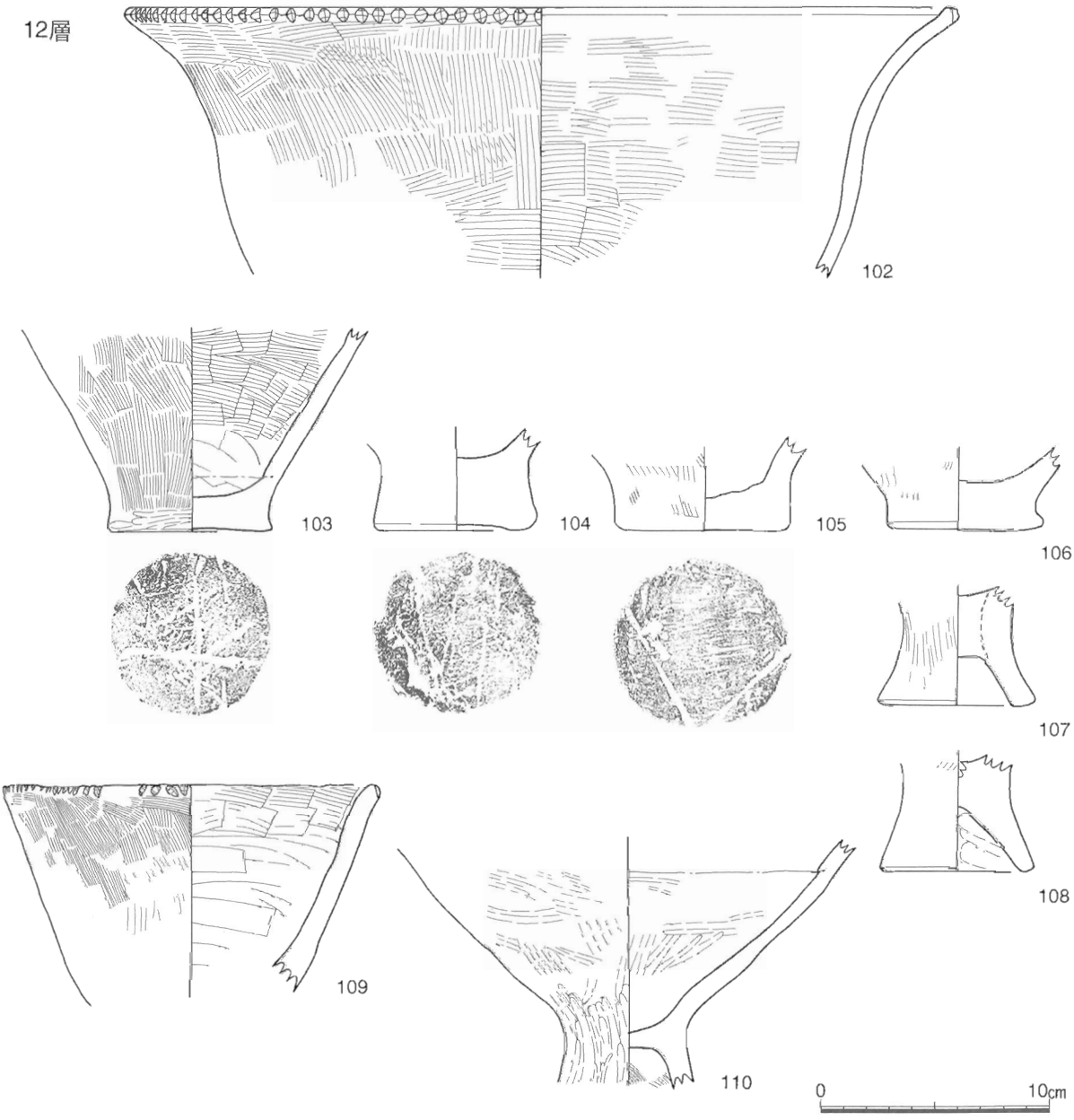
第78図　３区出土土器⑤



第79図　３区出土土器⑥



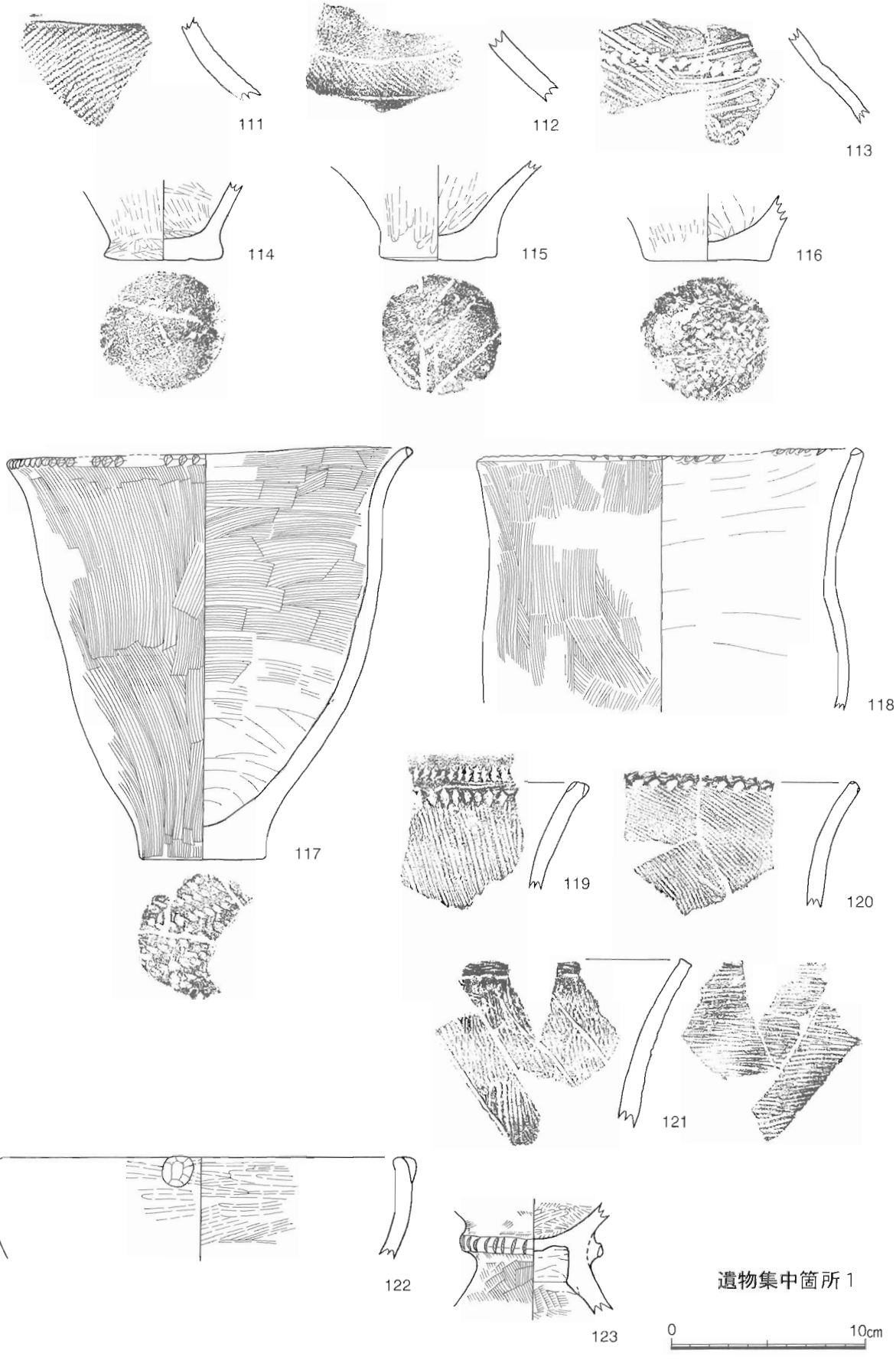
第80図　3区出土土器⑦



第81図　3区出土土器⑧

った資料も勘案すれば、ほぼ同程度の割合であったと推定される。器形では胴部上位～中位が張るもの、胴部の張りが少ないもの。口縁部は外反させるもの、殆ど外反させないものとに分類されるが特に傾向は見いだせない。いずれの甕も外面の調整はハケ状工具の使用を基調とし、内面は板ナデ・ハケ・ナデ調整である。109については91～102とは異なり、胴部の立ち上がりも直線的で鉢状の外観を呈し、口唇部にはハケ状工具で刻目を施されており小型の甕と判断した。103～108は甕の底部である。そのうち107・108は台付甕の台部である。後期代の資料とは異なり低平である。110は高坏の坏部中位から脚部にかけての資料である。東遠江Ⅳ様式の影響を受けたものか。脚部は折損面を磨り研いでいる。見込みは敲打し窪めている。

これらの土器群の特徴は短頸壷が数量的に卓越し、甕では磨消線文甕が無く、横走羽状文甕・無文甕で構成され、かつ台付甕が客体的ではあるが見られるところにある。横走羽状文甕の最盛期に入る時期という点を勘案すれば西駿河Ⅳ様式の前半、弥生時代中期後半として考えられる。



第82図　３区出土土器⑨

遺物集中箇所１出土土器（第82図111～123　写真図版45・46）

第46図で示した通り、SD306より古い時期のものと理解される。111～116は壷である。111・112は縄文を施した後に沈線で区画している。113は半截竹管文上に棒状工具で連続して刺突、列点文を施す。114～116は壷の底部と推定した資料である。117～121は甕である。これらは口唇部には指頭押圧、工具を使用した刻目が施されている。119は口唇部両側からハケ状工具で刺突、刻目を入れる。口縁部は117のように外反させるものと、118のようにほとんど外反させないものがある。文様は121以外には認められない。122・123は高坏である。前者は坏部、後者は坏部と脚部の接合部である。ハケ状工具で刺突、刻目を施した突帯が貼り付けられている。これらの土器群の時期は弥生時代中期後半か。

遺物集中個所２出土土器（第83図124～126　写真図版45・46）

第43図で示した通り、SD304より古い時期のものと理解される。124は頸部から底部にかけて遺存した資料である。底部から直線的に立ち上がり、胴部下位からは内湾気味に立ち上がる。肩部から胴部中位にかけて櫛描直線文を８条施し、その上に間隔をあけて３条の沈線を縦位に加える。最上位の直線文には刺突された円形浮文が貼り付けられている。頸部には１条沈線が施される。東遠江Ⅳ様式の影響か。125は高坏の坏部である。坏部中位付近で微かに膨らむ。口縁部は屈折し鍔状をなす。東遠江Ⅳ様式の影響か。これらの土器群の所属時期は西駿河Ⅳ様式の範疇、弥生時代中期後葉として考えられる。

SD307直上層出土土器（第83・84図127～143　写真図版46）

前章でも述べたように、本層位はSD307に伴うものではなくSD307の直上部で出土した土器群で、後述するSD307内出土遺物とは時間差がある。

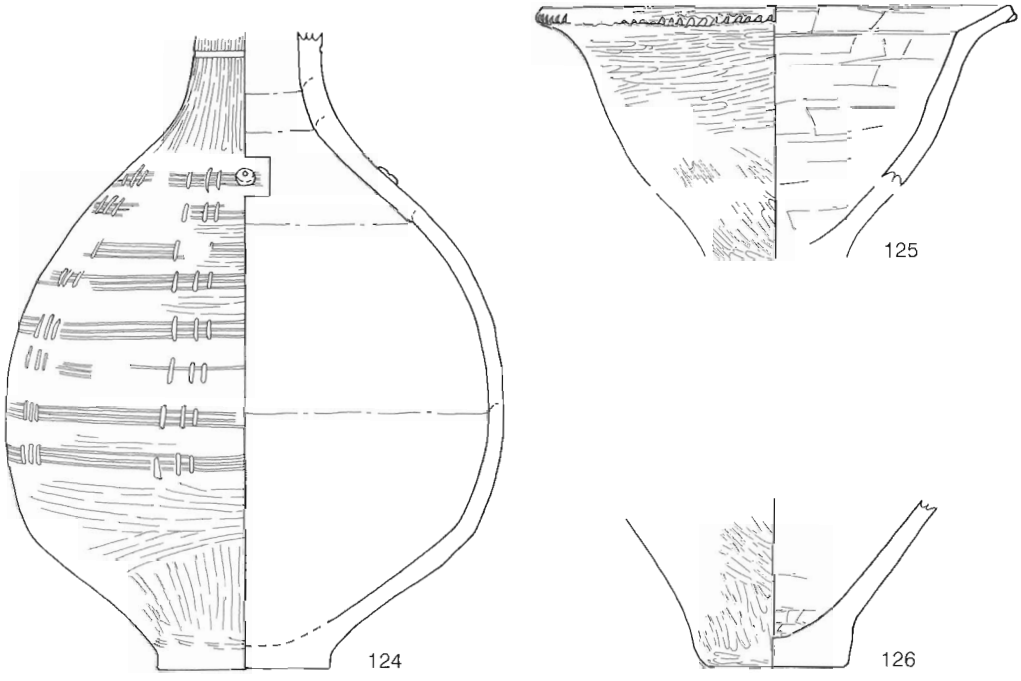
127～136は壷である。127・128は口縁部のみの資料で、単純口縁である。両者とも口唇部を平坦に仕上げているが、128は縄文を施し、直線文上に指頭で押捺文を施す。129～134は肩部の破片資料である。129・130は区画縄文を施す。131・132はハケ調整の後に緩やかな波状の沈線文を施し、133・134は直線文を施している。135・136は壷の底部か。135は網代痕が観察される。136も網代痕と考えられるが、明瞭ではない。

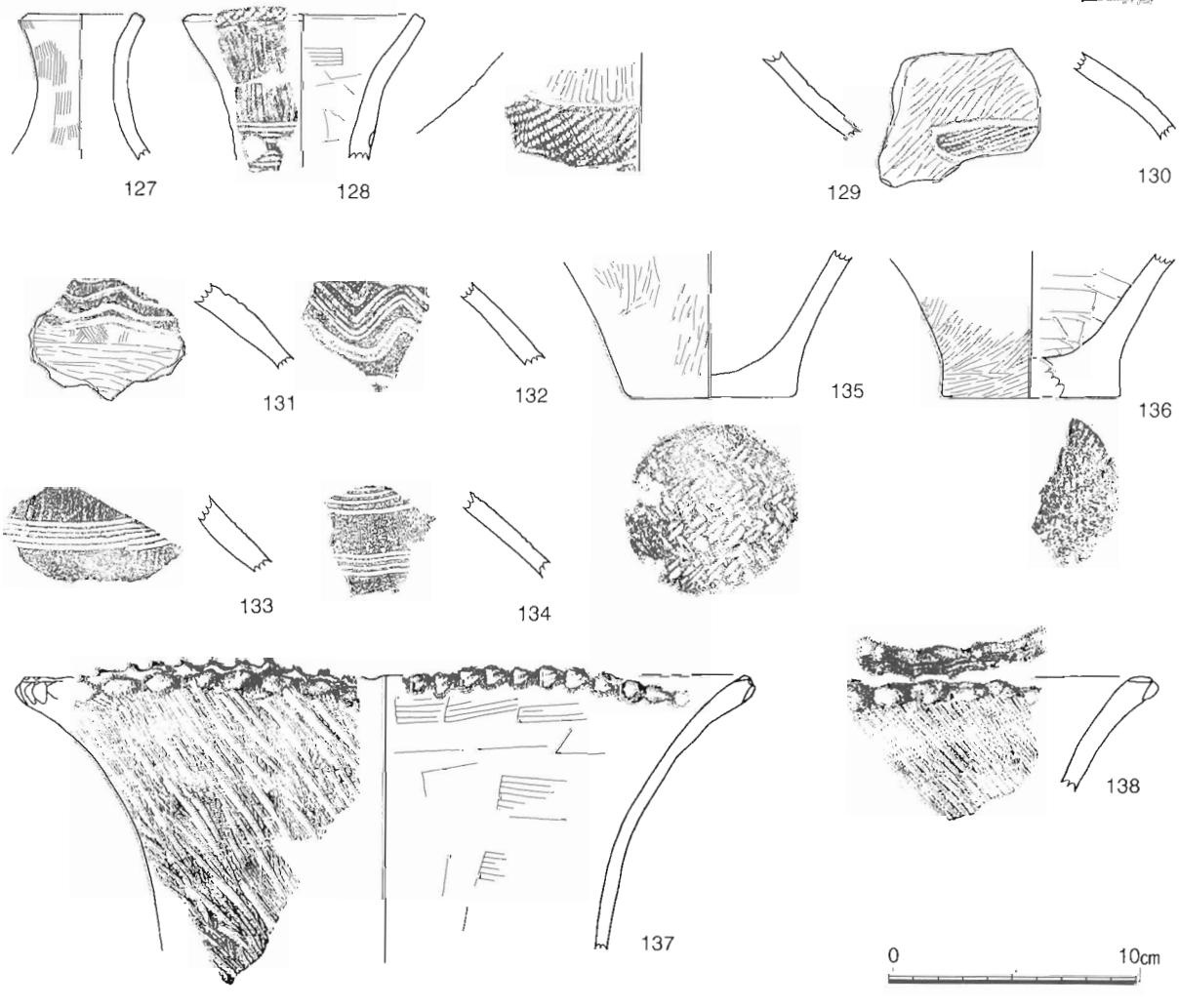
137～143は甕である。137～141は口縁部の資料である。いずれの資料も口唇部の調整が異なる。137は外面は指頭押圧、内面はハケ状工具を刺突、刻目を入れている。138・141の口唇部は指頭押圧、139はヘラ状工具、140はハケ状工具を用いている。142・143は甕の底部と推定された資料である。これらの土器群の所属時期は遺物集中個所２とほぼ同じ時期か。

SD306出土土器（第84図144～154　写真図版47）

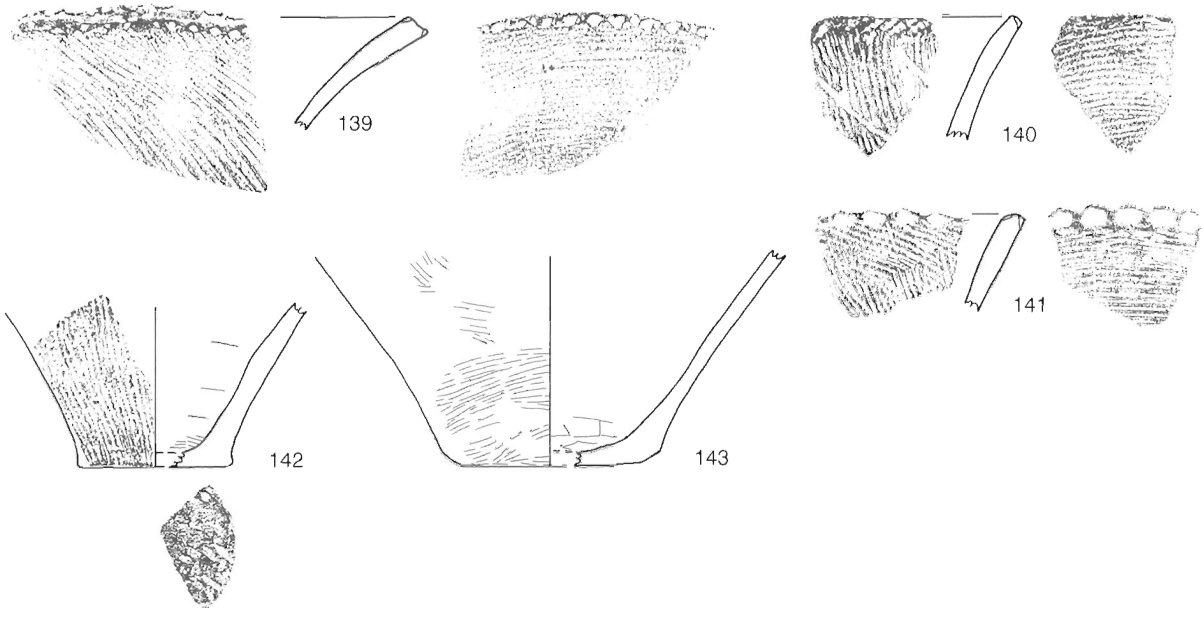
144～149は壷である。144は口縁部の破片資料である。口唇部を平坦に仕上げている。145～147は肩部～胴部の破片資料で、145は沈線で区画された縄文、146は櫛状工具で直線文と波状文が施されている。147は鋸歯文内部に刺突文が見られる。148は連弧状に沈線が引かれている。149は波状文と横走羽状文の組み合わせである。

150～154は甕である。いずれの資料もヘラ状工具で沈線が口唇部直下から引かれている。横走羽状文であろう。口唇部の調整は150については指頭押圧によるものだが、151～154はハケ状工具の刺突による刻目文である。151についてはは口唇部の施文の後にヘラ状工具で横走羽状文を施している。いずれの資料の口縁部は大きな外反はしていない。これらの土器群の所属時期は西駿河Ⅳ―３様式、弥生時代中期後半として考えたい。

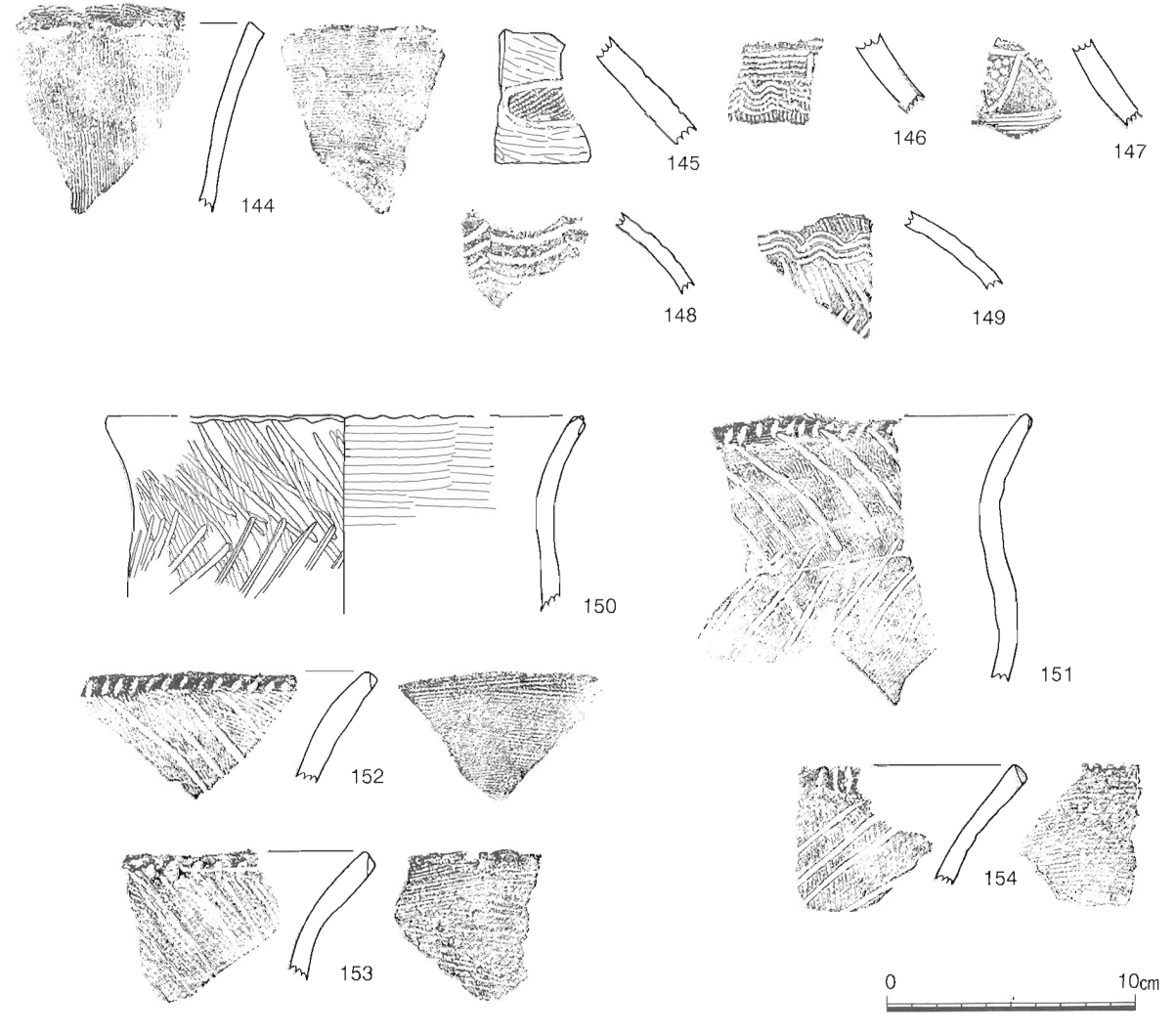




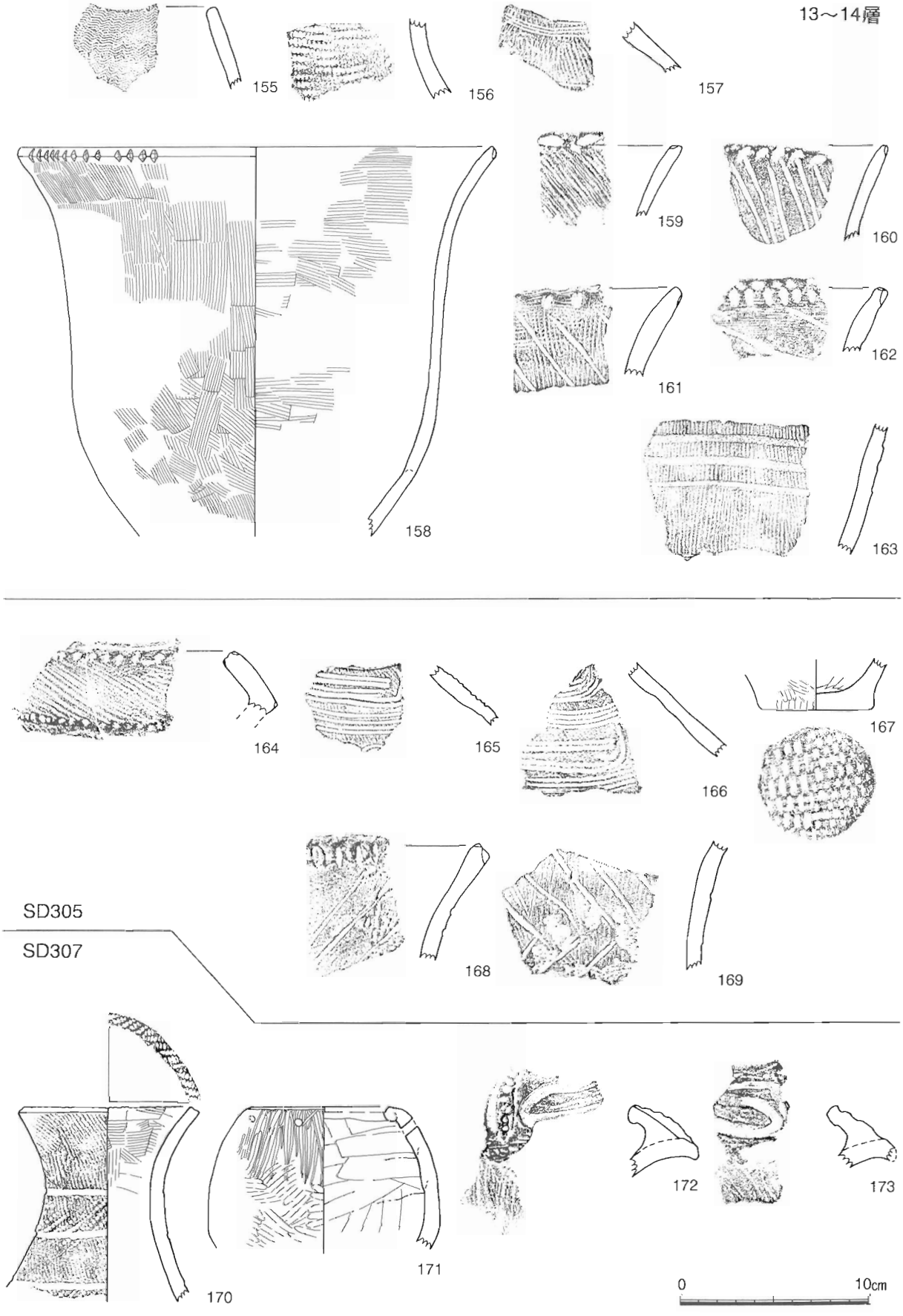
第83図　3I区出土土器⑩



SD306



第84図　3区出土土器⑪



第85図　３区出土土器⑫

13～14層出土土器（第85図155～163　写真図版47）

155～157は壷である。155は無頸壷であろうか。櫛状工具で細かい波状文が施されている。口縁部の形状から波状を呈していたものか。判然としない。156・157は共に肩部付近の破片資料であろう。前者は縄文、後者は櫛状工具で施文されている。

158～163は甕である。158は底部が欠損した資料である。12層出土の甕資料に見られた胴部中位付近の膨らみが無い。緩やかに外反する口縁部を持つ。横走羽状文のような文様は見られない。159～162は口縁部の資料である。口唇部の施文については159・161は指頭押圧、160・162は櫛状工具で刺突したものである。161のみ器厚がある。163は甕の胴部か。縦位のハケ調整の後に３条の沈線が施されており、またこの資料は胴部中位付近と考えられるため磨消線文甕の可能性がある。これらの土器群の所属時期は西駿河Ⅳ様式の範疇、弥生時代中期後半として考えたい。

SD305出土土器（第85図164～169　写真図版47）

164～167は壷である。164は受口状を呈する口縁部である。165・166は擬似流水文であろう。櫛状工具と半截竹管状の工具を併用している。167は網代痕が明瞭に観察される底部である。168・169は共に甕の破片資料である。169は横走羽状文である。

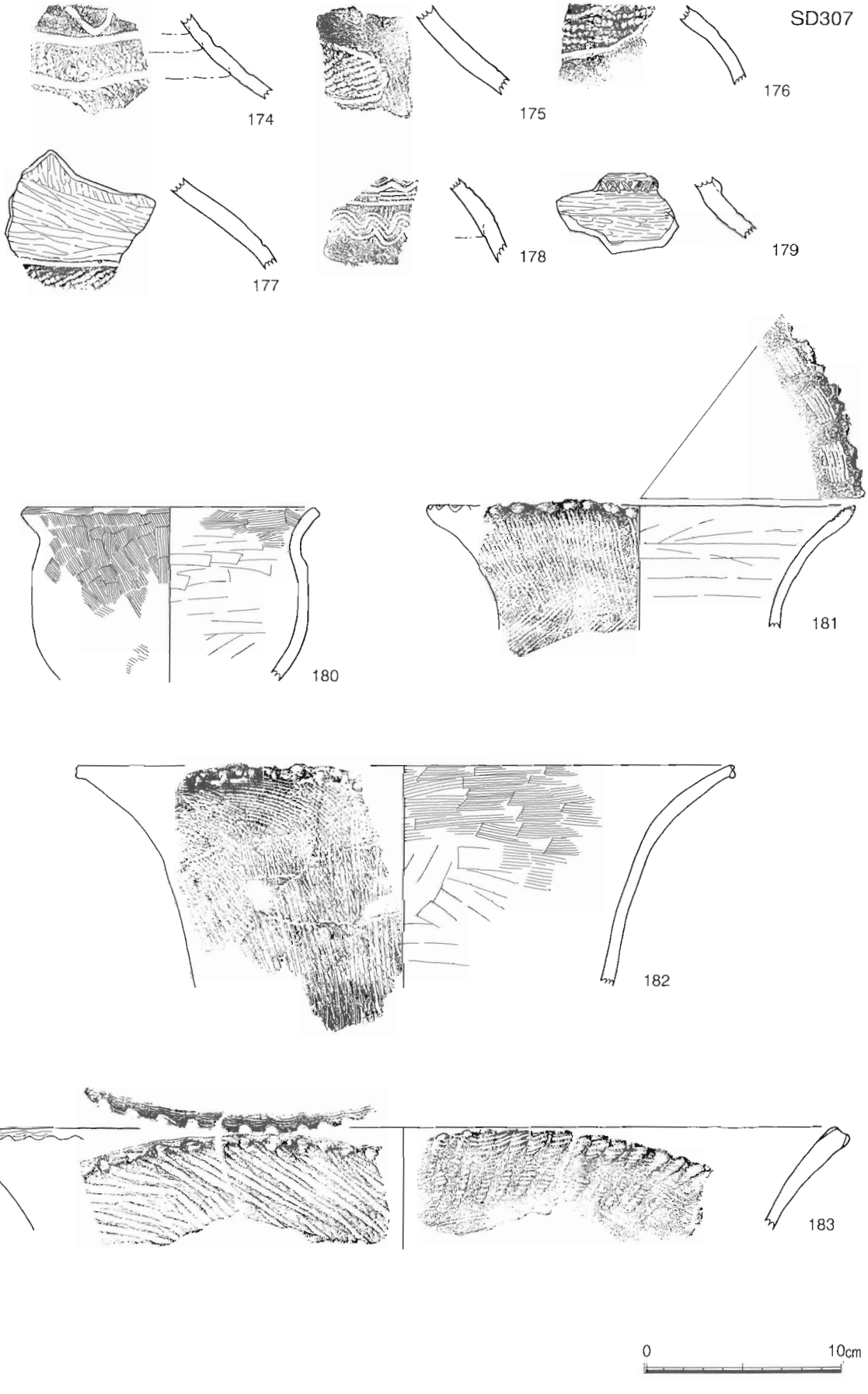
SD307出土土器（第85～87図170～188　写真図版48～50）

前述しているようにSD307直上層出土遺物とは時間差があり、本資料はSD307に伴う資料で直上層資料に先行して埋没したものである。

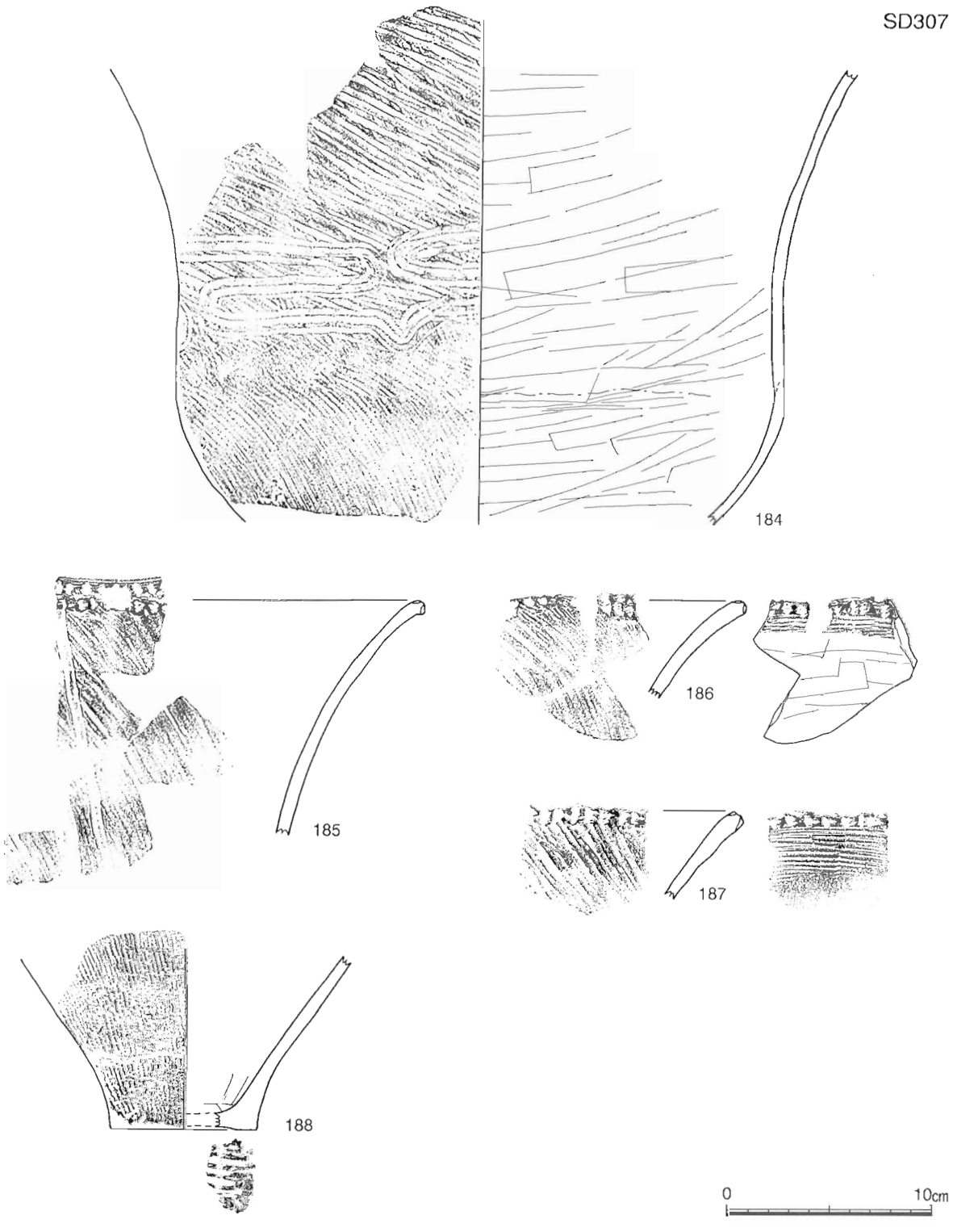
170～179は壷である。170は口縁部から肩部にかけて遺存した短頸の細頸壷である。頸部と肩部に区画された縄文帯が施されている。口唇部は平坦に仕上げられ、縄文が認められる。171は無頸壷であろう。口唇部は軽く折り返され、荒いハケ調整（条痕）が観察される。口縁部付近に２箇所の焼成前の穿孔が観察される。県内の類例として静岡市丸子セイゾウ山遺跡出土例がよく知られる。第49図で示したように２点ともSD307最下面で木製品30と出土した遺物である。172・173は受口状を呈する口縁部である。刻目を入れた隆帯を持ち、その脇に指頭による曲線文を描く。174～177は沈線で区画された縄文帯を持つ。178は櫛状工具で直線文・波状文を施す。179は突帯を巡らし工具で刻目を入れている。判然としない資料である。

180～188は甕である。180は小型の甕である。丸みを帯びた胴部を持ち、口縁部には押圧等の文様は施していない。181～188と異なり径の大きい砂粒を含む。181・182は共に口縁部が大きく外反する。181の外面は横走羽状文、口縁部内面には外面と同一工具であろうか断続した直線文を施す。所謂「櫛目鎖状文」であろう。口唇部は指頭押圧である。182は細かいハケ調整の後に荒いハケ調整で仕上げている。183はひときわ大型の甕である。外面は条痕で、同一工具で口唇部を押圧、刻目を入れている。内面は外面と同一工具で２段にわたり、押圧している。184は甕の胴部の資料である。胴部中位外面には幅の広い原体を２本連ねたようなもので流水文状の磨消線を引いている。その流水文状の磨消線文を境に上位が粗いハケ（条痕）、下位がハケ調整を施している。185も条痕を基調とし、内面は口唇部直下は横位のハケ調整である。口唇部はそのハケ状工具による刺突を両側から行っている。口唇部直下からは幅の広い原体２本単位で縦位に施文している。186は185と同一個体か。187は外面の調整と口唇部の刺突は同一工具を用いている。188は底部である。底面にはスノコ痕らしき痕跡が観察される。

次にSD307から出土した土器群の特徴として甕について特に触れておきたい。他の遺構では殆ど出土していない粗いハケ調整（条痕）の甕がSD307より多く出土した。この遺構からはこの種の破片資料が覆土上位付近でまとまって出土したが、細片であったため接合作業によりその全体を復元することは不可能



第86図　３区出土土器⑬



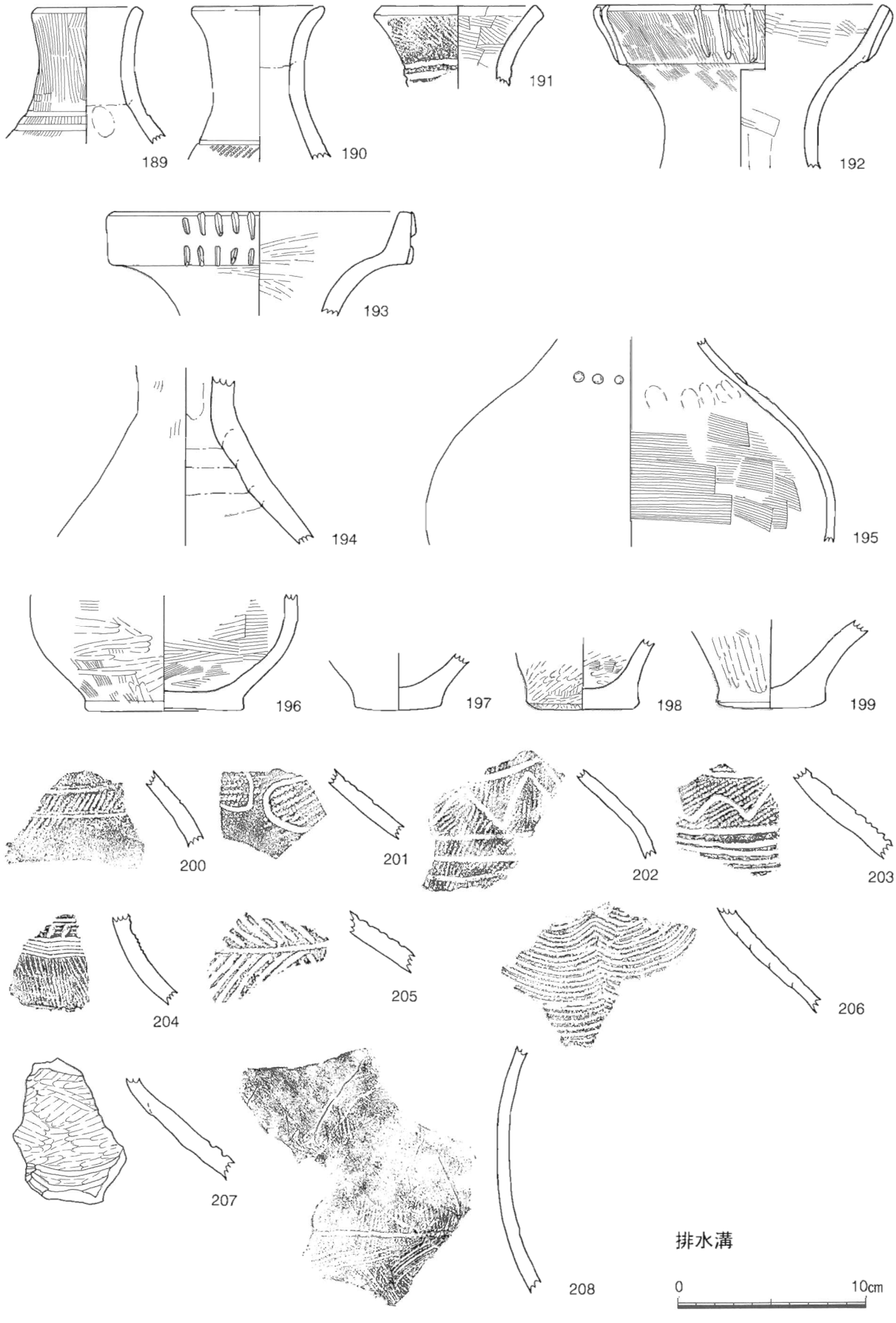
第87図　３区出土土器⑭

であった。静岡県中部地域において器面を粗いハケ調整（条痕）を施した比較できる資料としては藤枝市清水遺跡ST―22・G―10出土資料、静岡市有東遺跡第16次調査SK―05出土資料や川合遺跡SX11607出土資料があげられる。しかし184のようにはっきり入り組んだ磨消線文を施文した資料は知られていないが、従来知られる磨消線文甕の一類型と推定される。一方181の如き口縁部内面に見られる断続した櫛状工具による施文された甕は、客体的な存在で中期後半以降県内では数例認められるのみである。この口縁部内面への施文するものとして清水遺跡ST―22出土資料には櫛状工具による連続した刺突を行っている甕があるが、多くの類例として南関東地方でいう宮ノ台式の初頭の口縁内面に「櫛目鎖状文」が知られる。これらの土器群の所属する時期は上記のような特徴から西駿河Ⅲ～Ⅳ様式代、すなわち弥生時代中期中葉～中期後半と推定され、今回報告する土器群でも最も古い時期の資料を含んでいる。詳細は第６章で触れてみたい。

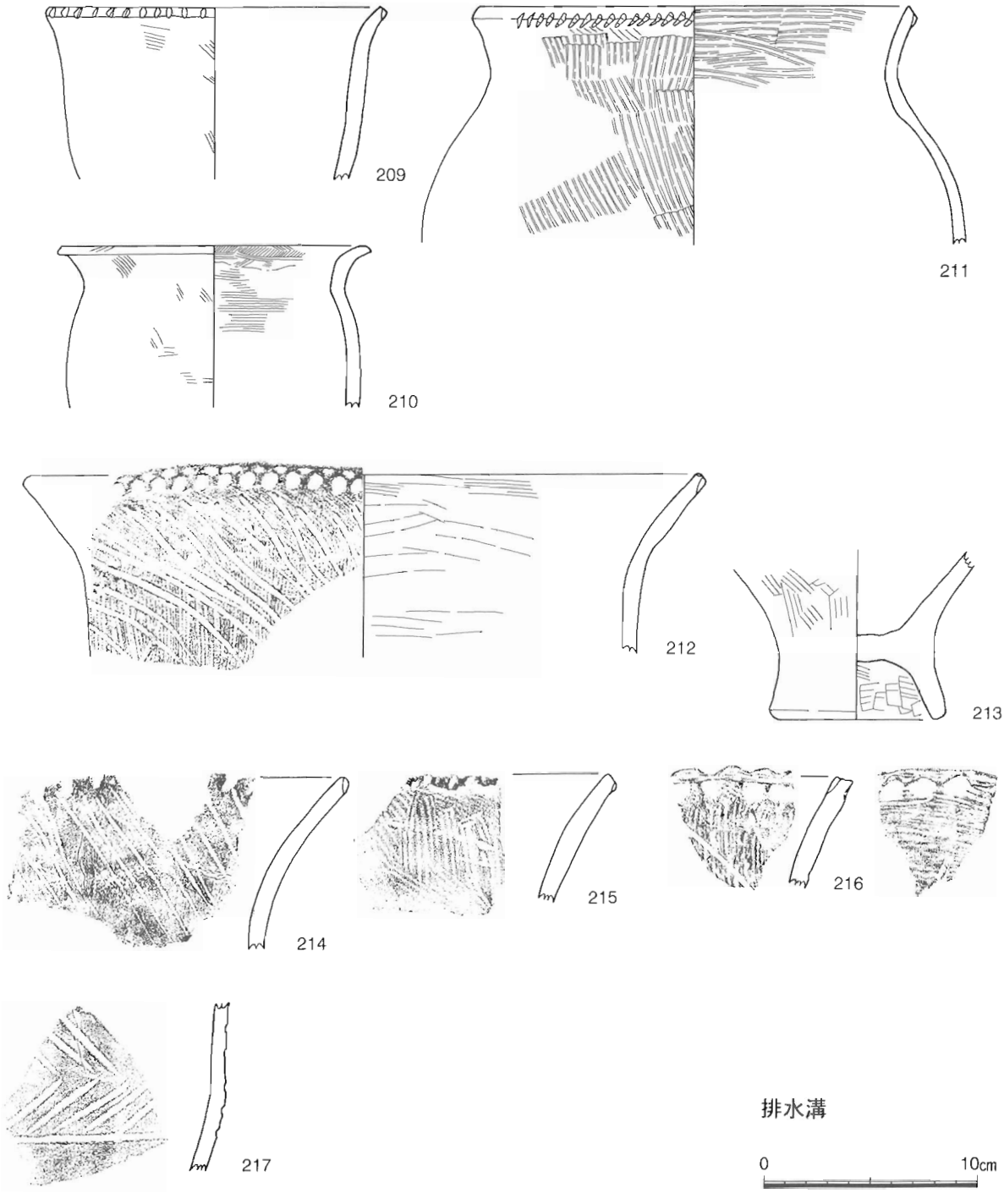
排水溝出土土器（第88図189～217）

調査時の排水溝・集水升掘削時に出土した土器群のうち、層位が特定できなかった資料を掲載した。189～208は壺である。189・190は短頸壺である。頸部から肩部にかけて文様帯を持つ。191は細頸壺の口縁部か。192・193は複合口縁で口縁部には棒状浮文が付く。194・195は肩部から胴部にかけての資料である。前者は肩部が張らないタイプで中期後半の資料である。後者は円形浮文が付く。196～199は底部の資料である。200～203は沈線で区画された縄文が施文された資料である。202・203はその縄文帯内部に波状文を施す。204は直線文である。205は多段の複合鋸歯文か。206は櫛状工具で、207はヘラ状工具で弧状文を施す。208は肩部から頸部付近の資料である。櫛状工具で羽状に施文か。

209～217は甕である。209～211は口縁部から胴部中位まで遺存した無文の甕である。209は口縁部を軽く外反させるのみである。210は口縁部を外湾させる。211は胴部を大きく膨らませるタイプで、口縁部は工具で刻目を入れている。212・214・216はヘラ状工具で斜方向の沈線を描く。横走羽状文か。215には施文が見られない。217は胴部中位付近の資料である。横走羽状文とそれを区画する沈線が見られる。213は台付甕の台部か。低平である。これらの資料は西駿河Ⅳ様式からⅥ様式まで、弥生時代中期後半から後期後半までの時間幅があるものと推定される。



第88図　3区出土土器⑮



第89図　３区出土土器⑯

５－１区出土土器（第90～94図１～67　写真図版51～53）

５－１区からは弥生時代中期中葉から平安時代末期に位置づけられる土器群が出土した。出土遺構・出土層位毎に説明する。

砂利層出土土器（第90図１～８　写真図版51）

砂利層は継川及び自然流路に起因する層位で、本書では一括して掲載した。１は山茶椀の小椀である。胎土は青灰色を呈し、黒い吹き出しが確認される。高台の畳付きにはスノコ痕が観察される。これらの諸特徴から東遠江で生産された山茶椀の小椀であるものと推定される。時期は12世紀前半だろう。弥生時代の土器群は次の７点である。２～８は壷である。２は口縁部で、３は頸部、４は肩部、そして５は胴部中位から底部にかけての資料である。３については長頸壷の頸部と推定される。穿孔された突起が貼り付けられており、本来的には頸部中位付近と推定される。６～８は甕である。６・７は口唇部の刻目が施されていない。西駿河Ⅵ様式か。これらの土器群の主体は西駿河Ⅴ～Ⅵ様式、弥生時代後期後半以降であるが、３の１点はⅢ～Ⅳ様式、弥生時代中期中葉以降の所産であろう。

15～17層出土土器（第90・91図9～24　写真図版51）

15～16層は継川・自然流路等の削平や近世以降の護岸等によりかなり攪乱された層位である。その攪乱は一部17層まで達しており、調査時には15・16層を分層しないで掘削している。

９～11・13・14・17～21は壷である。９は複合口縁で、10・17・19は短頸気味である。12・15・22～24は甕である。口縁部が残る資料（12・22～24）の内、口唇部に刻目を施している資料は１点も無い。22は全体を復原できた土器である。この台付甕は頸部はあまり屈折せず上方に延ばし、口縁部は折返している。16は高坏の破片資料である。これらの土器群の諸特徴から西駿河Ⅴ～Ⅵ様式、弥生時代後期後半以降の範疇に入るものと推定される。

なお10～12・14・16の出土地点が17層下層上面で検出したSD501の上位にあり、可能性として15層付近から掘削されていたSD501から出土した可能性もある。

17層上層出土土器（第92図25～40　写真図版52）

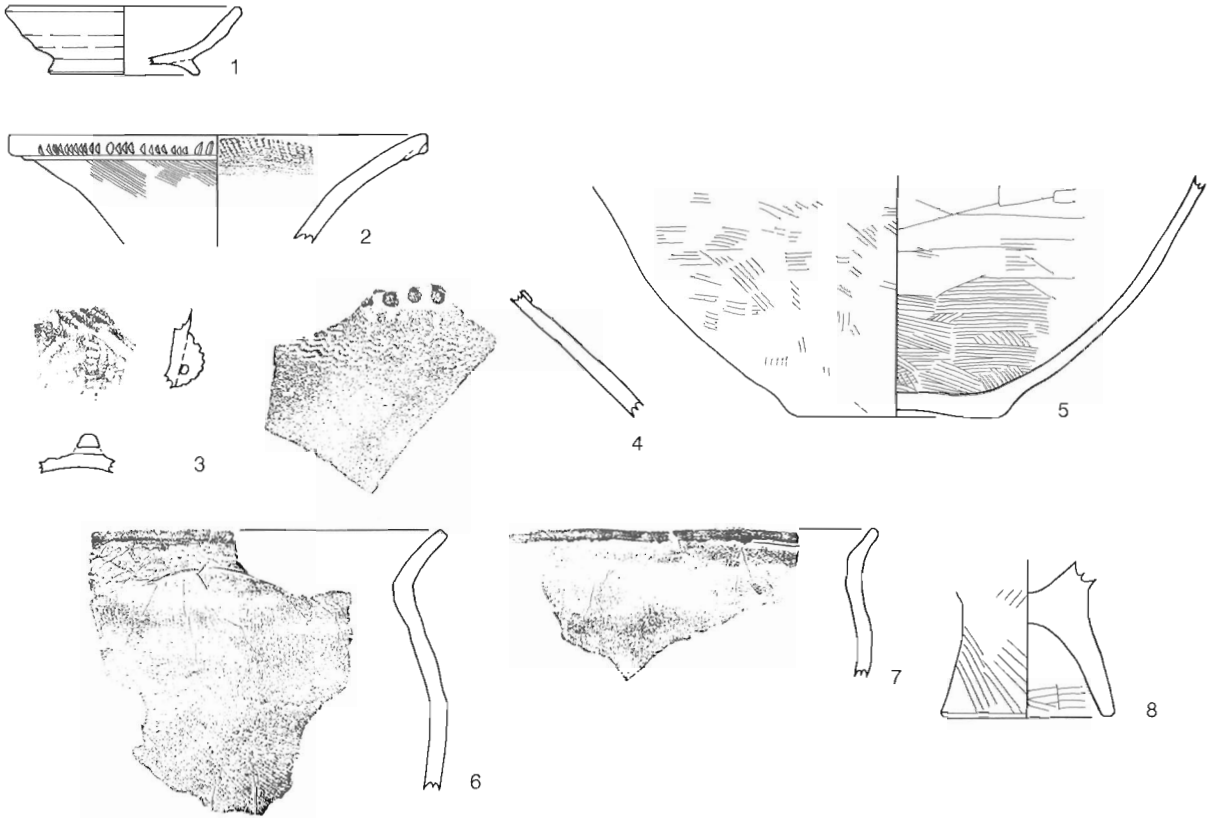
５－１区の調査の進展に従い、当初17層としていた層位が調査中に上下２層に分層できるのが確認され、17層上層、17層下層と命名した。本報告も調査時の名称を引き続き採用した。この17層下層上面においてはSD501・502やSB501を検出している。

25～35は壷である。25・26は口縁部である。27・28は小型壷である。31・32は同一個体で三角文が施されている。また35は磨消縄文が観察されるので、これら３点の土器片は西駿河Ⅲ～Ⅳ様式、弥生時代中期中葉以降の所産であろう。34は勾玉状の浮文を貼り付けている。静清平野でよく見られる浮文である。36～38は甕である。36の口唇部には刻目が施されていない。37については外面に煤が付着し、被熱している点から甕としたが、本来的には別の器種かもしれない。39は高坏、40は器台である。39は焼成前に坏部見込みに穿孔を施している。

17層下層出土土器（第92・93図41～57　写真図版52）

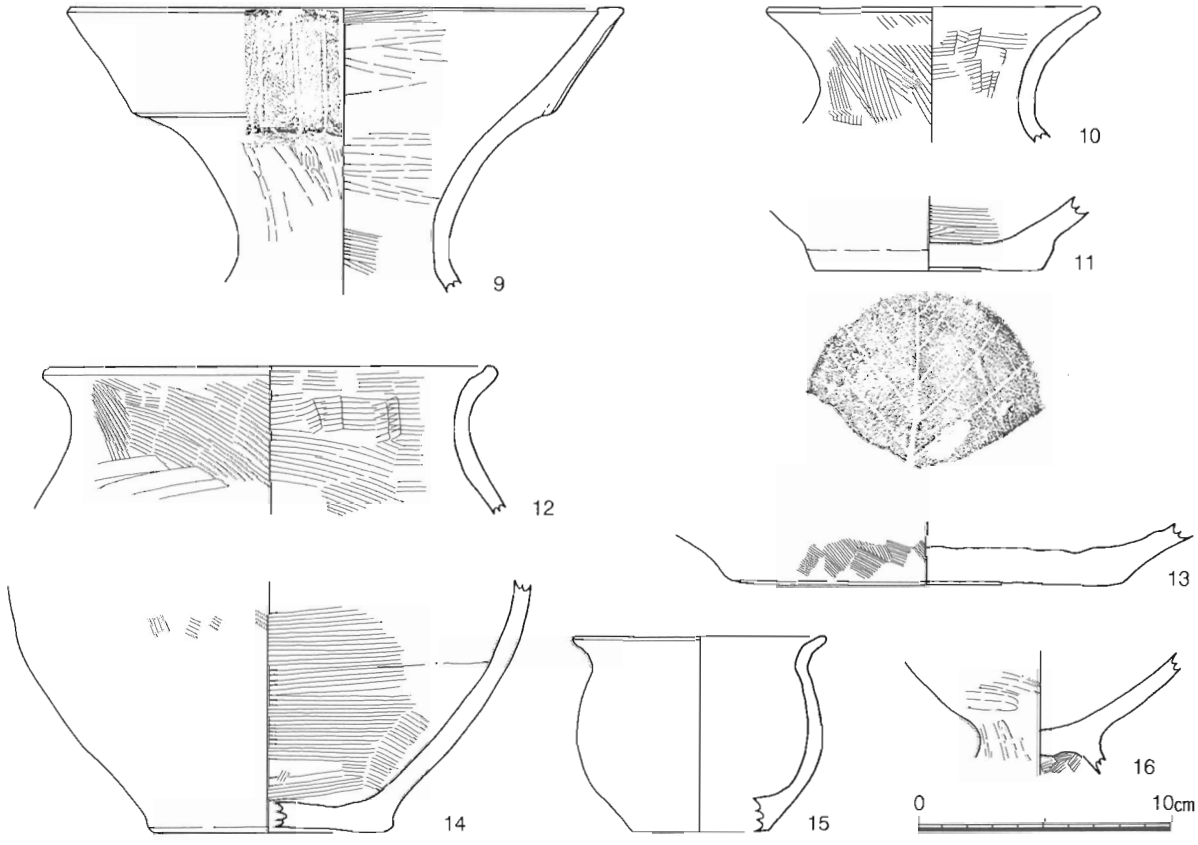
前述した遺構群を検出した層位である。41～47は壷である。41・43は短頸壷、42は複合口縁の壷である。縦位の沈線が施されている。44～46の破片資料で44は結節縄文、45は磨消縄文、46は波状文が施される。47は小型の壷である。

48～55は甕である。口縁部の残存したる資料（48～51）の内、口唇部に刻目を施しているのは48の１

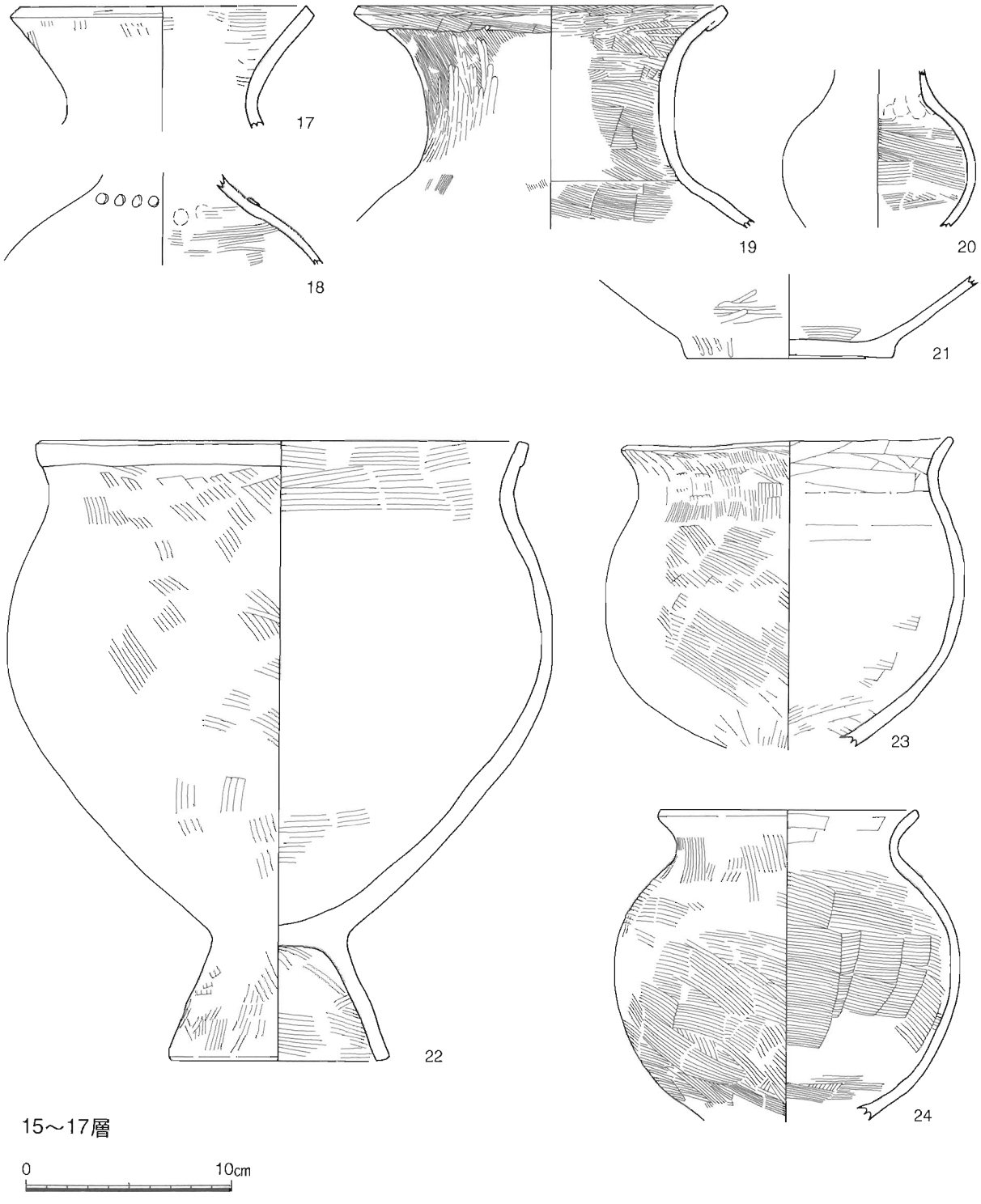


砂利層

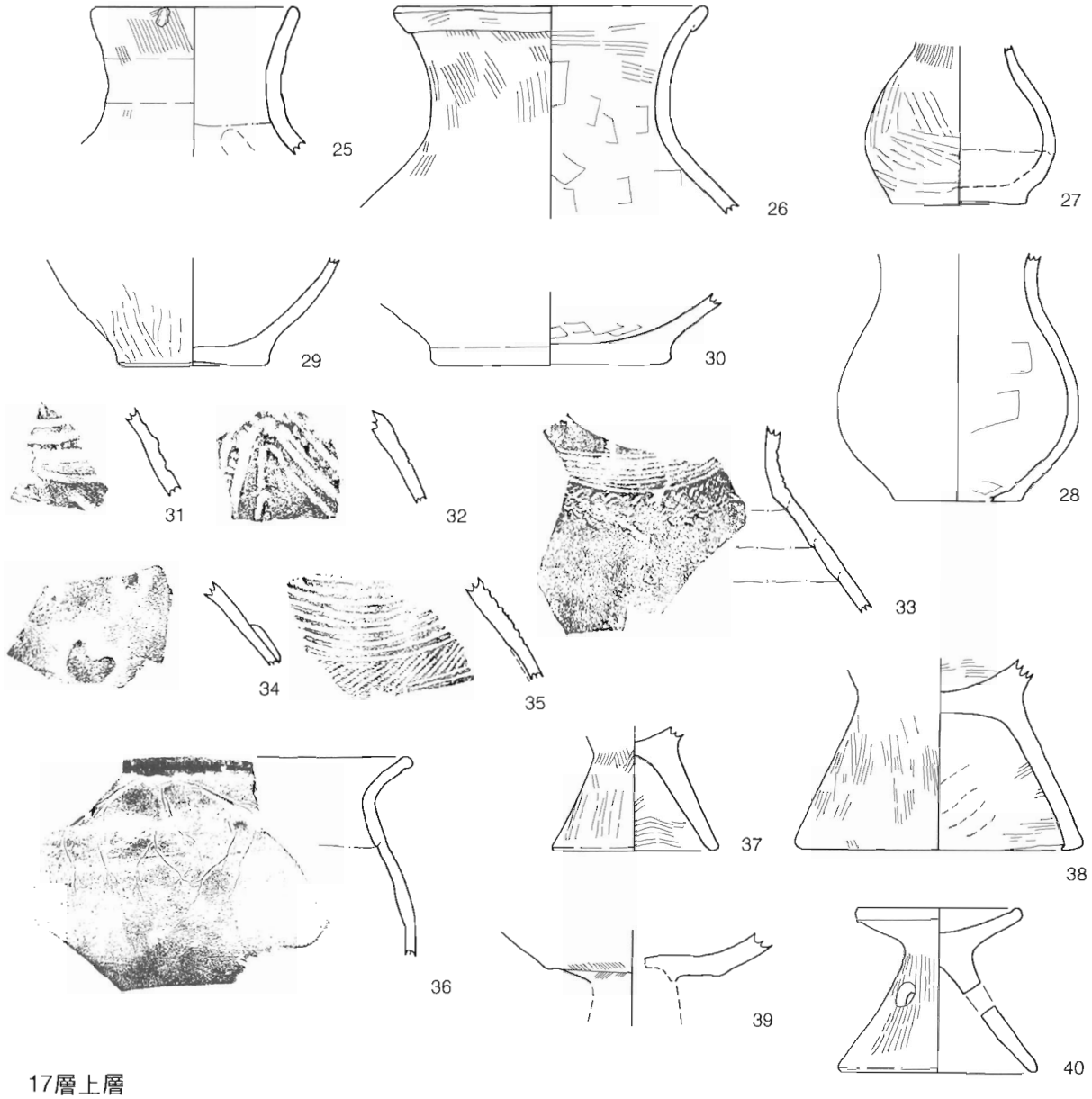
15～16・17層



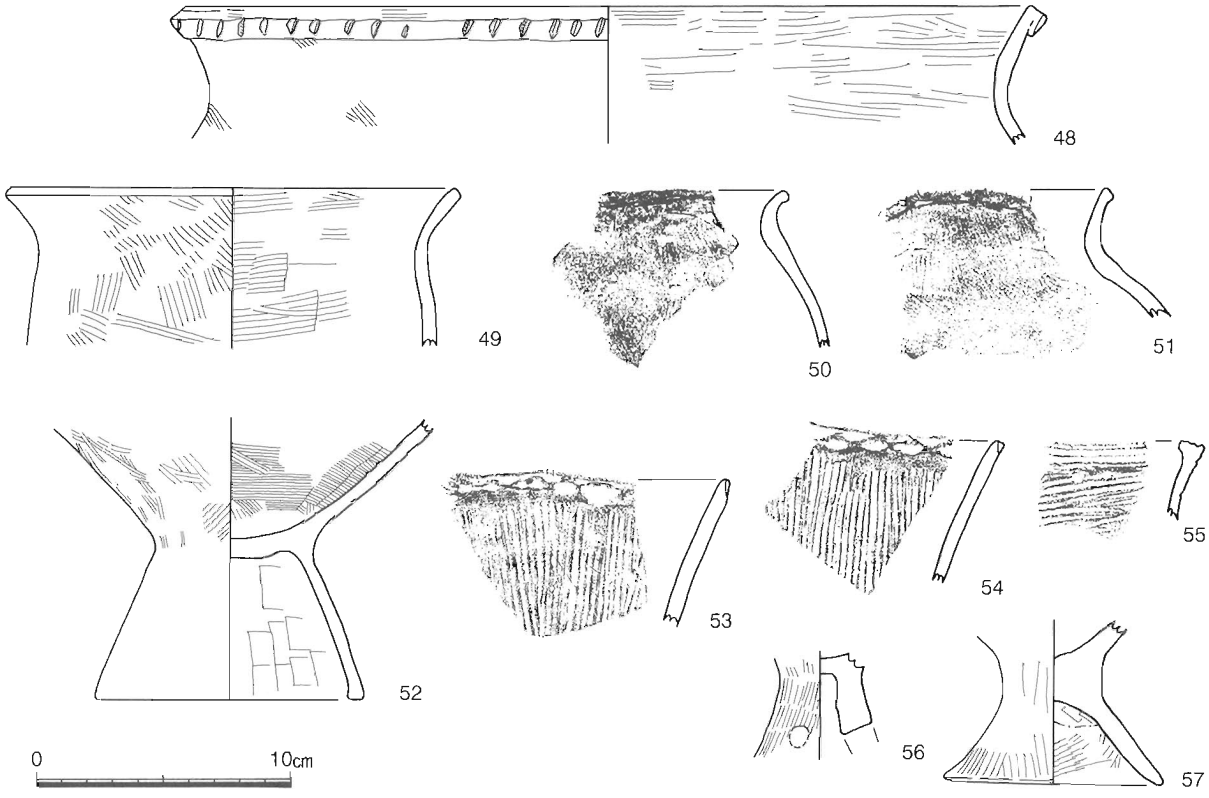
第90図　５－１区出土土器①



第91図　５－１区出土土器②



第92図　５－１区出土土器③



第93図　５－１区出土土器④

点のみである。53～55は外面に荒いハケ調整もしくは条痕を施している。口縁部は53・54は指頭押圧、55は口唇部を平坦に仕上げ、荒いハケ調整もしくは条痕を施している。56は高坏、57は鉢の脚部であろう。これらの大半は西駿河Ⅴ～Ⅵ様式の範疇に入るものと推定されるが、45についてはⅣ様式まで、53～55はⅢ様式まで遡りうる。

SD501出土土器（第94図58～62　写真図版53）

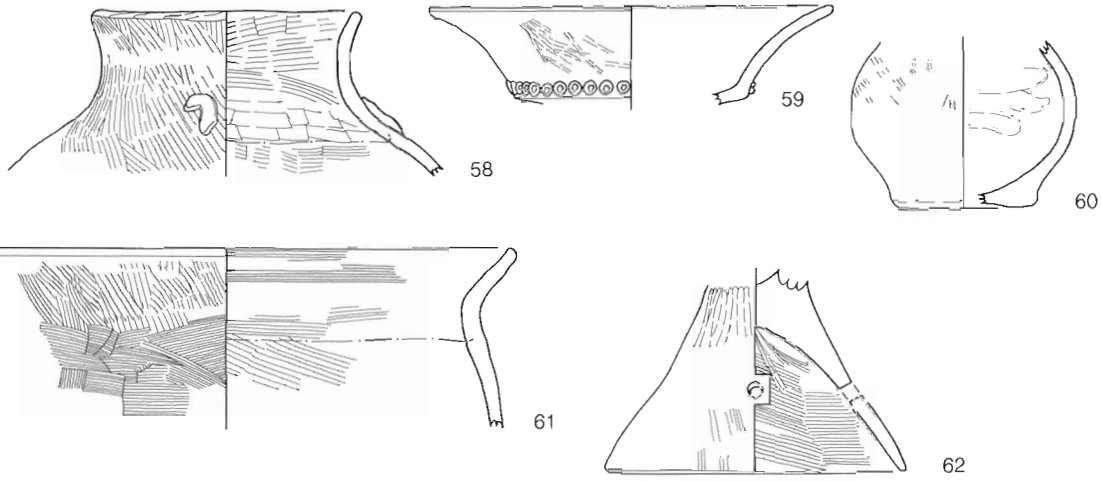
58は短頸壷である。口縁部は軽く外反させるのみで、肩部に勾玉状の浮文を付ける。59は二重口縁の資料である。胎土は比較的密で、刺突竹管文を施した円形浮文を連続して貼り付けている。60は小型の壷、61は甕、62は高坏の脚部である。脚部中位付近で僅かに内湾させる。なお前述しているように15～17層出土遺物で当該遺構から出土している資料が５点ある。それらを含め時期的には西駿河Ⅴ～Ⅵ様式、弥生時代後期後半以降の範疇に入る資料であろう。

SD502出土土器（第94図63～66　写真図版53）

63は壷の口縁部から頸部にかけての資料である。大型の壷で頸部中位から口縁部にかけて一面に縄文が施されている。内外面ともに赤彩。64も壷で円形浮文を付けており、口縁部は比較的直線的に延びている。65は疑似流水文が施された壷の肩部である。66は小型の壷である。西駿河Ⅳ様式の範疇に入る65は流れ込みの資料であろう。このSD502の時期は64の所属時期である西駿河Ⅴ様式、弥生時代後期後半と考えられる。

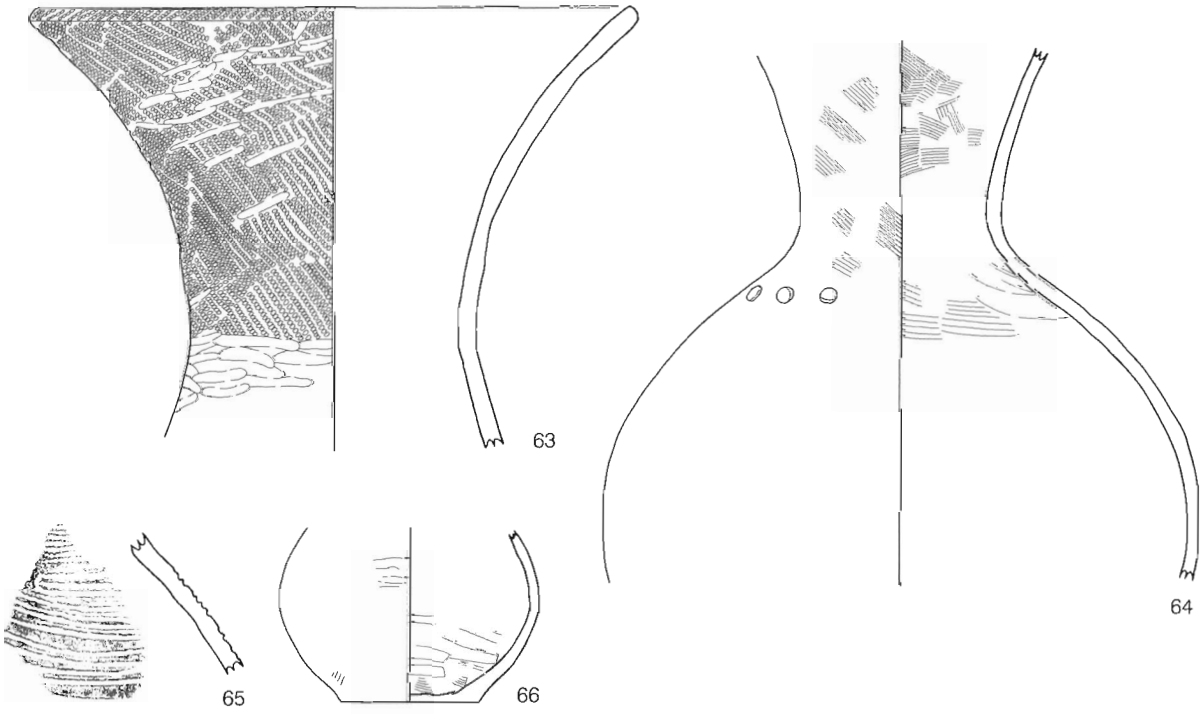
SP501出土土器（第94図67　写真図版53）

67はSPより出土した資料である。壷の肩部付近であろう。外面は赤彩の後に櫛描波状文が数段描かれている。類例は藤枝市清水遺跡15層出土土器が知られる。

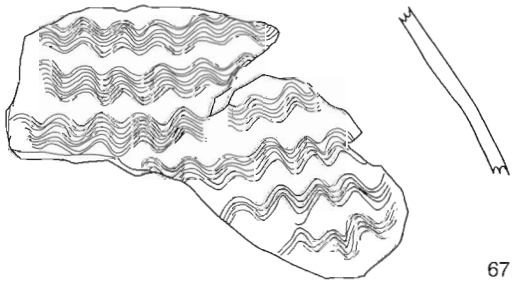


SD501

SD502



SP501



第94図　５－１区出土土器⑤

５－２区出土土器（第95・96図１～16　写真図版54）

５－２区からは弥生時代中期中葉から平安時代に位置づけられる土器群が出土した。出土遺構・出土層位毎に説明する。

自然流路跡出土土器（第95図１）

１は灰釉陶器の碗である。流路内の砂利層から出土している。低平な角高台を持ち、見込みには僅かに重ね焼きの痕跡が観察される。トチンは使用していない。また釉薬はあまり発色していない。漬け掛けであろう。時期はO53窯式の後半、時期は10世紀前半か。

16層出土土器（第95図２　写真図版54）

２は高坏である。口縁部は欠損している。ほぼ同形の高坏が瀬名遺跡８区17a層から出土している。瀬名例は坏部が丸みを帯びた資料であるが、２は坏部中位に稜線が入る。

SD503出土土器（第95図３・４　写真図版54）

３は壷の口縁部である。単純口縁である。４は直口壷である。近隣では川合遺跡第７遺構面10号周溝SX11601でも類例がある。弥生時代末～古墳時代初頭の範疇に入る資料であろう。

SF502出土土器（第95図５）

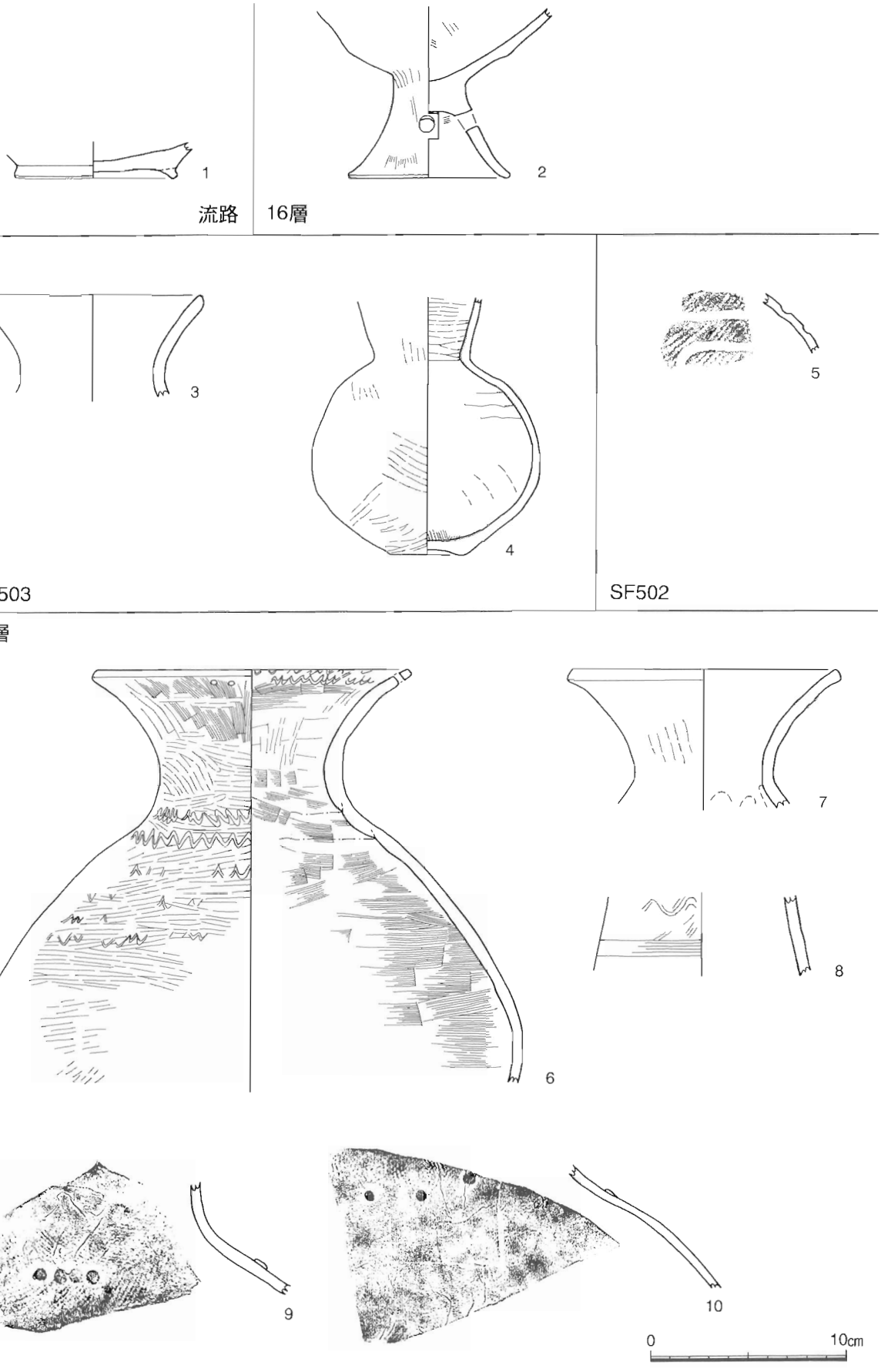
５は壷の肩部である。磨消縄文を施した典型的な中期の土器である。当該遺構は弥生時代後期以降に位置づけられており、５は流れ込みの資料と判断される。

17層出土土器（第95・96図６～14　写真図版54）

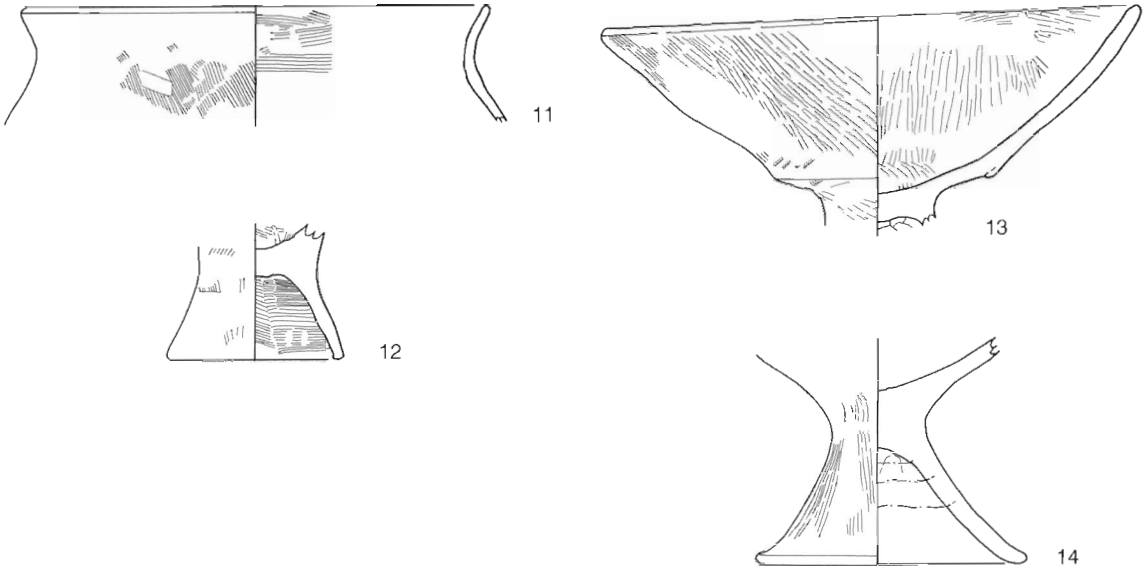
６～10は壷である。６は口縁部から胴部中位まで遺存した資料である。短頸気味で、肩部から胴部上位にかけてヘラ状工具を用いた波状文が６条認められる。上の２条を除き残りはヘラミガキで消されている。７は単純口縁である。短頸気味である。８は頸部のみの資料である。直立気味の頸部で、櫛状工具で波状文・横位の直線文を施す点から弥生時代中期の資料であろう。９・10は肩部の破片資料である。２点とも肩部に施された縄文上に円形浮文を貼り付けている。11・12は甕である。11は口縁部、12は台部のみの資料である。11の口唇部には刻目は見られない。13・14は高坏である。13は坏部のみの資料である。底部から逆「ハ」の字状に広がり、口唇部は丸く仕上げる。内外面共に丁寧にヘラミガキを施している。脚部は故意に折損させている。14は脚部から坏底部まで残存した資料である。脚部は「ハ」の字状に大きく広がり、外面は丁寧なヘラミガキが施される。赤彩か。これらの土器群の主体は西駿河Ⅴ様式以降、すなわち弥生時代後期後半であろう。

18～19層出土土器（第96図15～18　写真図版54）

15・16は壷である。15は折返し口縁を持つ壷である。16は複合口縁の資料である。通常このタイプの資料に見られる棒状浮文・沈線等は残存していなかった。17は甕の口縁部である。口唇部に刻目は無く、胴部が大きく膨張した資料である。18は口縁部の破片資料である。外面は条痕、もしくは荒いハケ調整で、口唇部も平坦に仕上げられ同様の調整が観察される。本資料は西駿河Ⅲ様式の範疇に入るもので、混入品である。本来的に土器群の主体は17層に近い時期であろう。

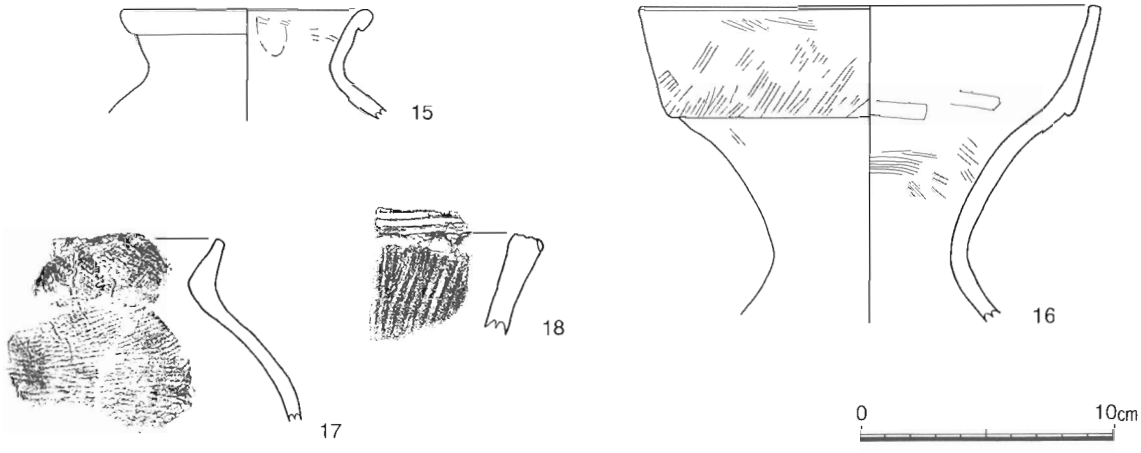


第95図　５－２区出土土器①



17層

18～19層



第96図　５－２区出土土器②

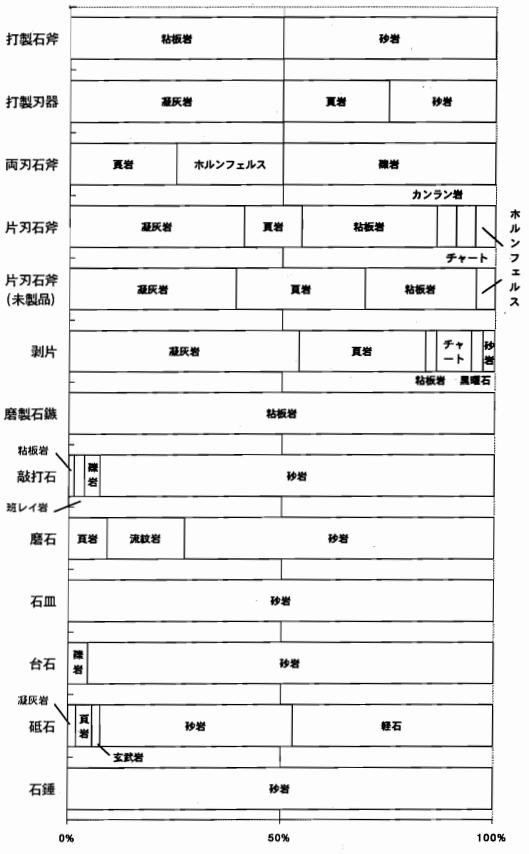
第2節　石　器

１．概　要

瀬名川遺跡では合計284点の石器が出土している。木工具である片刃石斧の製品・未製品やそれらの製作工具と考えられる敲打石・砥石などを中心に、限られた調査範囲にもかかわらず様々な器種の石器が見られる（第４表）。その大半は弥生時代中期中葉～古墳時代前期の土器を伴う包含層から出土している。各包含層は所属時期が前後する土器が混在しており、さらに溝や畦畔など遺構に伴い検出された石器でも同様のことが言えるため、石器の所属時期を確定することは難しい。しかし、静清平野では太型蛤刃石斧・偏平片刃石斧・柱状片刃石斧などのいわゆる大陸系磨製石器の盛行する時期は弥生時代中期後半にほぼ限定されるため、これらの石器に関しては同時期のものと判断している。これら以外の石器の所属時期については特に記述のない場合は共伴する土器から弥生時代中期中葉～古墳時代前期と考えている。このような状況から所属時期ごとの記述という方法ではなく、器種ごとにまとめて記述する方法を採用した。また、石材は安倍川・長尾川流域で産出される石材を利用している（註１）。主な石器の石材比率は第97図に示す通りである。煩雑な説明を避けるため個々の石器についての出土地点・計測値などは一覧表を参照していただき、ここではそれぞれの器種の特徴について説明する。

第４表　調査区別出土石器一覧表

	１区	２区	３区	４区	５－１区	５－２区	確認調査	計
打製石斧	1	0	1	0	0	0	0	2
打製刃器	1	1	2	0	0	0	0	4
両刃石斧	0	0	4	0	0	0	0	4
片刃石斧	5	9	27	0	1	2	1	45
剥片	3	3	26	0	0	5	0	37
磨製石鏃	0	0	2	1	0	0	0	3
敲打石	12	13	36	0	7	15	0	83
磨石	2	9	0	0	0	0	0	11
石皿	0	2	0	0	0	0	0	2
台石	2	11	7	0	1	1	0	22
砥石	5	14	25	0	6	3	0	53
軽石	1	0	11	0	1	1	0	14
石錘	1	0	1	0	0	1	0	3
その他の石製品	1	0	0	0	0	0	0	1
計	34	62	142	1	16	28	1	284



第97図　主要石器石材比率

２．打製石斧（第101図１・２　写真図版55）

瀬名川遺跡では２点の打製石斧が出土している。打製石斧としての明確な使用痕が認められるものがなかったため、石材によっては磨製石斧の未製品との判別に苦慮するものもあったが、磨製石斧としては薄手でその使用に耐えかねるものを打製石斧とした。石材は粘板岩と砂岩である（第97図）。いずれも器面に自然面が見られず、柄に装着するためか側縁を敲打によって潰している。

３．打製刃器（第101図３～６　写真図版55）

瀬名川遺跡では４点の打製刃器が出土している。打製刃器とは母岩から打ち剥がした自然面を残す剥片にそれほど加工を加えることなく刃器として使用したもの、またはその可能性が考えられるものであ

る。３・４は側縁に剥離調整を行っている。３～５は鋭利な縁辺部分が磨滅している。

４．両刃石斧（第102・103図７～10　写真図版56）

瀬名川遺跡では未製品も含めて４点の両刃石斧が出土している。７～９は側縁がほぼ平行で、横断面が偏平な楕円形を呈することからいわゆる太型蛤刃石斧と考えられる。７は自然礫を直接全面的に敲打しているが、器面の一部に自然面を残し刃部のみ研磨している。８は整形時の敲打痕を消すように全面的に研磨している。７・８はいずれも敲打石に転用されており、７は刃縁と基端部に敲打痕が、８は刃縁に線状痕が見られる。９は刃部を欠損しているため、製品か未製品かの判別はできないが、一部に自然面を残し横断面が楕円形になるように敲打整形している。10は原石を荒割り、剥離調整した後に稜を潰すように敲打している。頁岩製であるが片刃石斧としては分厚く、すでに敲打工程に入っていることから両刃石斧の未製品とした。

５．片刃石斧（第104～109図11～55　写真図版57～59）

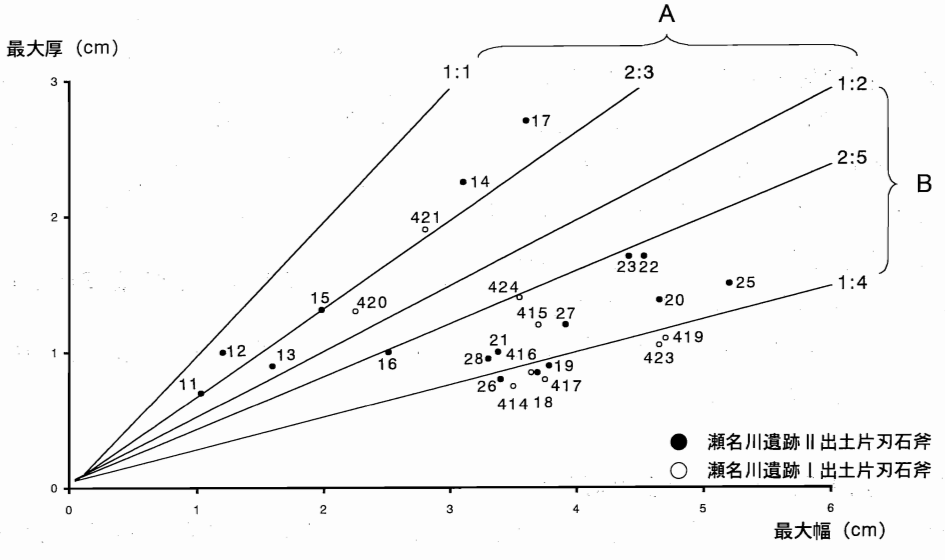
瀬名川遺跡では未製品も含めて45点の片刃石斧が出土している。片刃石斧の中で未製品は約半数あり、非常に高い割合を占めている。石材は製品・未製品ともに安倍川で採集された凝灰岩、頁岩、粘板岩が主体で同様の傾向を示している（第97図）。特に暗～赤紫色凝灰岩は全体の31～35％を占める。

片刃石斧製品（第104～106図11～32　写真図版57）

片刃石斧の製品は破片も含めて22点出土している。製品の認定に当たっては、刃部の遺存していない破片や基端部のみの資料は研磨の緻密さや柄に装着して使用が可能であったと判断したものは製品として分類した。

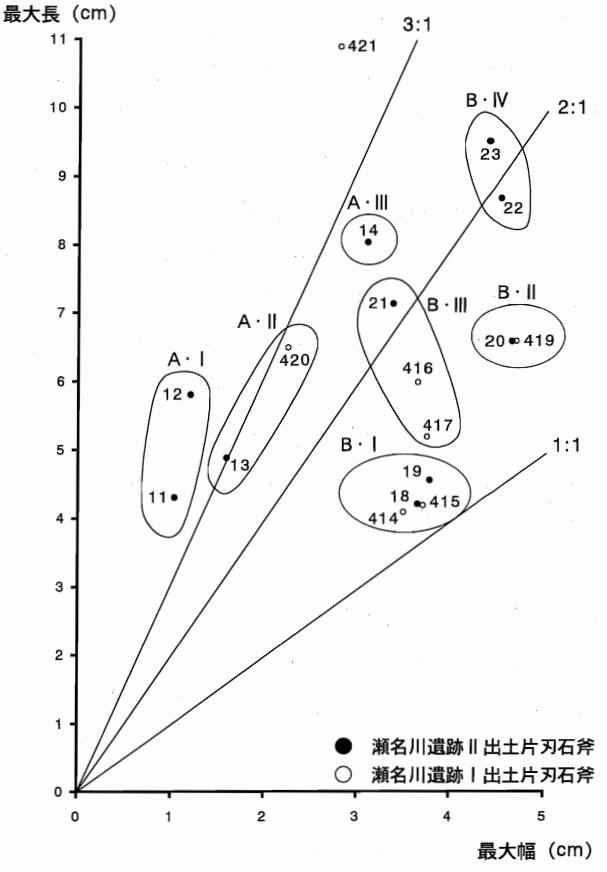
静清平野の片刃石斧は偏平化の傾向が強く、柱状片刃石斧に分類すべきか偏平片刃石斧に分類すべきか視覚的に分別しがたいことが指摘されている（註２）。瀬名川遺跡の片刃石斧にもこうした傾向が見られるため、石斧の最大厚・最大幅、最大長・最大幅により分類した。また、この図に参考資料として前回の瀬名川遺跡（以下、瀬名川遺跡Ⅰ）の調査で出土した片刃石斧の計測値も追加した（註３）。

まず石斧の断面形について、石斧の最大厚・最大幅が計測可能なものを抽出し分布図を作成した（第98図）。この図を見ると最大厚：最大幅が１：２のラインを境に分類できるようである。そこで最大厚：最大幅が１：２のラインより上部にくるものを柱状斧（A）、下部にくるものを偏平斧（B）とした（註４）。



第98図　片刃石斧計測値分布図①

次に石斧の平面形について、石斧の最大長・最大幅が計測可能なものを抽出し分布図を作成した（第99図）。柱状斧（A）は遺存状態の良好な資料は多いとは言えないが、先程の断面形も加味すれば分類は可能であると考え、計測値により柱状斧（A）をⅠ～Ⅲに偏平斧（B）をⅠ～Ⅳに細分した。



第99図　片刃石斧計測値分布図②

Ａ・Ⅰ　11・12が該当する。いわゆる小型方柱状片刃石斧（ノミ型石斧）に相当するものである。

Ａ・Ⅱ　13が該当する。Ａ・Ⅰに比べ断面がやや偏平なことからＡ・Ⅰから独立させた。刃部は遺存していないが断面形と平面形から15もこのタイプに分類できる可能性がある。

Ａ・Ⅲ　14が該当する。中型の柱状斧である。刃部は遺存していないが断面形と平面形から17もこのタイプに分類できる可能性がある。

Ｂ・Ⅰ　18・19が該当する。平面形が正方形を呈する偏平斧である。比較的分布が集中することから使い込まれた結果、柄に装着が不可能になった最終形態と考えられる。

Ｂ・Ⅱ　20が該当する。Ｂ・Ⅰに比べ斧身が長く断面がやや厚い。20は非常に丁寧に研磨されている。基端部は遺存していないが断面形と平面形から25もこのタイプに分類できる可能性がある。

Ｂ・Ⅲ　21が該当する。平面形は斧身が長く身幅が狭い柱状斧のようだが厚さが薄い偏平斧である。刃部は遺存していないが断面形と平面形から26～28もこのタイプに分類できる可能性がある。

Ｂ・Ⅳ　22・23が該当する。Ｂ・Ⅲを一回り大きくしたような形態である。

以上のように分類を行った。良好な資料が少ないことも関連すると考えられるが、形態差がかなりあるという印象を受ける。静清平野では片刃石斧の必要性が高かったことが指摘されているが（註５）、機能の面から考えれば木製品を加工するために様々な形態の片刃石斧を必要としたためであろうか。

使用痕が顕著に見られる資料はないが、20は後主面の一部に刃縁に直交する使用痕が見られる。また12には装着痕が見られる。後主面と両側面の後主面付近に幅1.0～1.5㎜の８本の白い線状のものが見られ、紐により斧台に固定されていたと考えられる。22は刃こぼれした剥離面の刃縁部分に再び研磨を施している再加工品であるが、加工を途中で止めている。

製作技法に関しては11・25には擦切技法によると思われる溝が見られる。いずれも主面方向からのみ溝を設けている。また、20のように丁寧に研磨して仕上げているものは稀で器面に製作時の剥離面を残すものが多い。

片刃石斧未製品（第106～109図33～55　写真図版58・59）

片刃石斧の未製品は23点出土している（註６）。刃部を作り出す以前の段階のものを未製品とした。製作工程を復元するため原石を直接加工するものをＡタイプ、一部に自然面が見られる剥片を利用したものをＢタイプ、全く自然面の見られない剥片を利用したものをＣタイプとした。さらに、製作工程をⅠ・荒割り、Ⅱ・剥離調整、Ⅲ・敲打整形、Ⅳ・研磨というように分類した。それぞれの分類別の点数は第

５表のようになった。また個々の石器の分類については一覧表に掲載してある。

Ａタイプ（33～38）　製品の形状に近い転礫を利用しており、ほとんど加工をせず自然面上を直接研磨しているものもある（38）。37は製品では出土しなかったが大型柱状片刃石斧の未製品と考えられる。Ａタイプでは６点中３点が暗～赤紫色凝灰岩であり、特徴的な色合いから製品の形状に適した原石の採集が容易であったと考えられる。

Ｂタイプ（39～52）　Ａタイプに比べ小型品が多く、剥片の平らな自然面をうまく利用しているという印象を受ける。石材は凝灰岩、頁岩、粘板岩がほぼ同数である。

Ｃタイプ（53～55）　３点のみの出土であるが、研磨段階のものが２点出土している。55は刃部から基端部にかけて縦割れした製品とも考えられるが、後主面への研磨が不十分であるために未製品とした。完成した場合には最も小型の偏平斧となる。

以上のように未製品を分類したが、Ｂタイプは未製品23点中14点と最も多く、製作方法の主流をなしていたといえる。

６．剥片（写真図版68）

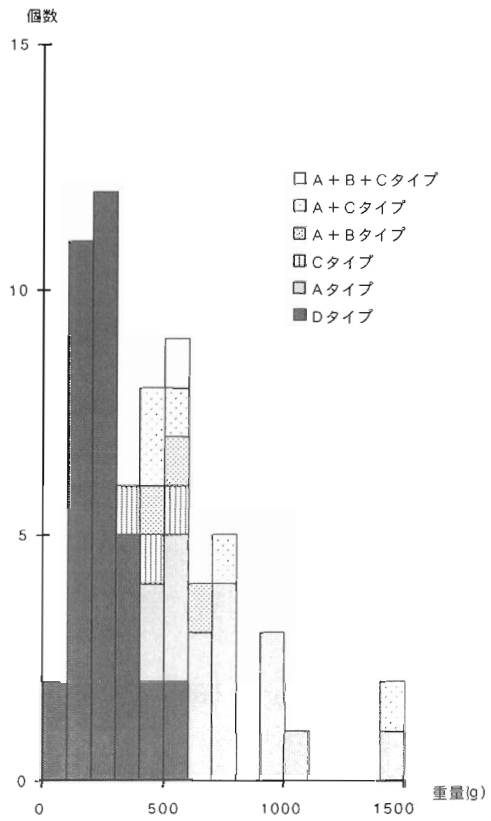
瀬名川遺跡では37点の剥片・石核と思われる資料が出土している。計測値が２～５cm程度の小剥片がほとんどで、約半数は器面のどこかに自然面を残している。石材は砂岩や黒曜石がそれぞれ１点ずつ見られるが、それら以外の石材は片刃石斧の製品やその未製品と同様の傾向を示す（第97図）。特に暗～赤紫色凝灰岩は46％を占めるため、片刃石斧製作の際に割れ落ちた廃材と考えられ、瀬名川遺跡での石斧製作の証拠となる資料である。

第５表　片刃石斧未製品分類別点数表

素材 / 製作段階	A	B	C	計
Ⅰ	1	1	0	2
Ⅱ	1	6	1	8
Ⅲ	3	4	0	7
Ⅳ	1	3	2	6
計	6	14	3	23

第６表　敲打石分類別点数表

	a	b	c	計
Ａタイプ	5	4	10	19
Ｃタイプ	5	0	5	10
Ａ＋Ｂタイプ	1	1	1	3
Ａ＋Ｃタイプ	3	0	4	7
Ａ＋Ｂ＋Ｃタイプ	1	0	0	1
Ｄタイプ	41			41



第100図　敲打石重量計測図

７．磨製石鏃（第109図56・57　写真図版56）

瀬名川遺跡では３点の磨製石鏃が出土している。石材はすべて粘板岩である（第97図）。完形品の出土はなく、いずれも破損資料であるため基部の形態は不明である。56は有孔磨製石鏃で、平面形は二等辺三角形を呈し、側縁中位からやや外湾する。57の平面形は両側縁の直線的な二等辺三角形を呈する。

８．敲打石（第110～118図58～108　写真図版60～63）

瀬名川遺跡では83点の敲打石が出土している。これは瀬名川遺跡の石製品全体の約29％を占め、最も多く出土した石器である。敲打石とは手に握ってハンマーとして使用した石器で、堅果類を打ち割ったり、石器の製作に使用されたものである。石材は砂岩が全体の約93％を占め、中でも中粒砂岩と凝灰質中粒砂岩が多い（第97図）。

敲打石は敲打痕の確認される部位とその種類によって以下のように分類した（註５）。

Ａ…礫の端部・側縁部、及び稜線上に敲打痕をもつもの

Ｂ…礫の端部・側縁部、及び稜線上に線状の敲打痕（線状痕）をもつもの

Ｃ…礫の器面上に敲打痕あるいは敲打によるくぼみをもつもの

Ｄ…手のひらに収まる程度の不定形な礫で礫の全面あるいは一面に集中的に敲打痕をもつもの

さらにＡ～Ｃタイプを礫の形態からａ・偏平礫、ｂ・楕円球状礫、ｃ・棒状礫に分類した（第６表）。

このうちＤタイプが最も多く全体の約半数を占める。第100図から重量は100～300ｇに集中する傾向が見られ、手に持つのに適した大きさと重量の自然礫を選択しているといえる。

これ以外のタイプの全体の印象としては、Ａタイプは棒状の礫の両端部を使用する場合が多い。Ｂタイプの線状痕は礫の端部・側縁部のみに見られ、稜線上に見られるものはない。Ｃタイプは偏平礫と棒状礫を使用する場合が同数あるが、偏平礫を使用する場合はどちらか一方の器面のみを使う場合が多いようである。また、92は敲打石のＣタイプに分類しているが、本来は凹石に分類すべき資料かもしれない。偏平で据わりのよい礫のほぼ中央に直径約２㎝程度の凹みが見られる。

また、敲打石に分類した中で石錘の可能性のあるものが４点あった（105～108）。平野吾郎氏は駿河湾沿岸を中心に広がる弥生時代の石錘を集成・分類し、特に有頭石錘について検討を行っている（平野2004）。その中で106はＤ―１類に分類でき、静岡市（旧清水市）飯田遺跡の有頭石錘と形態や底部先端が摩耗している点など非常によく似ている。しかし、この４点はいずれも側縁以外にも敲打痕が見られ石錘とは断定しがたい。

９．磨石（第119図109～115　写真図版64）

瀬名川遺跡では11点の磨石が出土している。磨石とは食料その他をすり潰したり、砕いたりした石器である。出土地点は２区の北側に集中する。石材は敲打石と同様砂岩が最も多い（第97図）。

磨石は、球状の礫で全面的に磨滅するもの（Ａタイプ、111）、偏平な礫のやや湾曲した面が磨滅するもの（Ｂタイプ、110・112・115）、棒状の礫の平坦面が磨滅するもの（Ｃタイプ、109・113・114）に分けられる。109は珪質頁岩製で、円柱状の礫の下端が鏡のように滑らかに磨滅しており、何かの顔料が付着している。側面は手に持って作業しやすくするためか礫の稜を研磨している。

10．石皿（第120図116・117　写真図版65）

瀬名川遺跡では２点の石皿が出土している。石皿は植物質食料の粉砕、製粉を行ったと考えられる石器である。磨石と組み合わせて使用されたものであり、磨石と同様２区の北側から出土している。石材はいずれも砂岩を使用している（第97図）。使用面は凹状をなし、擦痕や磨滅痕が見られる。

11. 台石（第120・121図118～126　写真図版65）

瀬名川遺跡では22点の台石が出土している。台石とは作業台として機能した石器である。石材はほとんどが砂岩である（第97図）。長さ約15cm、重量１kg未満の小型品から、長さ約35cm、重量10kg程度の大型品まである。いずれも据わりのよい礫の広い平坦面のところどころに敲打痕が見られ、特定部分に敲打痕が集中する場合は少ない。使用頻度の低さによるものであろうか。

12. 砥石（第122～126図127～148　写真図版65～67）

瀬名川遺跡では28点の砥石が出土している。128は古墳時代～奈良時代に相当する２区15層からの出土であるが、それ以外は他の石器と同様に弥生時代中期中葉～古墳時代前期と考えられる。砥石は、地面に据え置き使用される「置き砥石」と手に持って使用される「持ち砥石」に分類されるが、破損品が多いためこの区分は明瞭ではない。ここでは礫の形状を考慮し、さらに重量が500ｇを超えるものを置き砥石とした（註５）。また一部には敲打痕の見られるものがあり、台石または敲打石と兼用されているが、砥石としての使用頻度の方が高かったと考えられるものは砥石に分類している。

置き砥石（第122～124図127～138　写真図版65）

置き砥石に分類したものは15点である。石材は15点中14点が砂岩で１点は玄武岩である。ほとんどが破損資料である。礫の形状は様々であるが、据わりのよい点では共通している。砥面は片面のみに見られるものからほぼ全面に見られるものがあり、平坦面（127、128など）、凹状（133、134など）、凸状（137）をなしているが対象物は特定できない。

持ち砥石（第125・126図139～148　写真図版66）

持ち砥石に分類したものは13点である。石材は13点中11点が砂岩で２点は頁岩である。置き砥石同様ほとんどが破損資料である。砥面は置き砥石に比べ平坦面をなすものが多い。141・143には刃痕のような細い傷が見られ、143は頁岩製であることから仕上げ砥石として使用された可能性がある（註７）。また、148は裏面に平坦な砥面が見られるため持ち砥石に分類しているが、右側縁を刃器として使用しており、それに伴う剥離が数箇所見られる。さらに左側部の稜線上に敲打痕が見られ、手に持ちやすくするために器面を整えたのであろうか。

13. 軽石製砥石（第127～129図149～164　写真図版67）

上記の砥石のほかに瀬名川遺跡では軽石製の砥石が25点出土している。軽石は遺跡周辺で採集できるものではなく、駿河湾沿岸に漂着したものを採集したと考えられる。適度な硬度と多孔質のため研磨効果が大きいものである。

石器に残された使用痕から砥面をもつものをＡタイプ、刃痕をもつものをＢタイプ、穿孔をもつものをＣタイプのように分類した（註５）。Ａタイプは一つの面いっぱいにほぼ平坦な砥面が広がるものが多く、150・159のように幅の狭いやや凹状の砥面をなすものは少ない。Ｂタイプの刃痕はＶ字状の深い痕と幅が広く浅い凹状の痕が見られる。Ｃタイプの穿孔は未貫通のものがほとんどで、一つの面に１箇所だけのものや10箇所程度見られるものもある。孔の直径は0.3～1.2cm、深さは0.3～1.9cmと様々である。また孔の断面形は垂直なものが多いがすり鉢状のものもある。垂直な孔の底には突起が残るものもある（162など）。

158は浮子の可能性のある資料である。側縁の対になる部分を打ち欠きくびれを作り出しているが、浮きとしての使用痕は明確ではない。

このほか使用痕の見られない軽石が14点出土している。出土地点・計測値などについては一覧表に掲載してあるのでそちらを参照していただきたい。

14. 石錘（第130図165～167　写真図版67）

瀬名川遺跡では３点の石錘が出土している。石材はすべて砂岩である（第97図）。165・166は打欠石錘、167は有頭石錘に分類できる。165は楕円形の礫の短軸側縁を打ち欠いたもので、166は長楕円形の礫の長軸側縁を打ち欠いたものである。167は偏平な礫の体部上位に敲打により溝を設けているが、溝は全周せず敲打痕もあまり発達していない。

15. その他の石製品（第130図168）

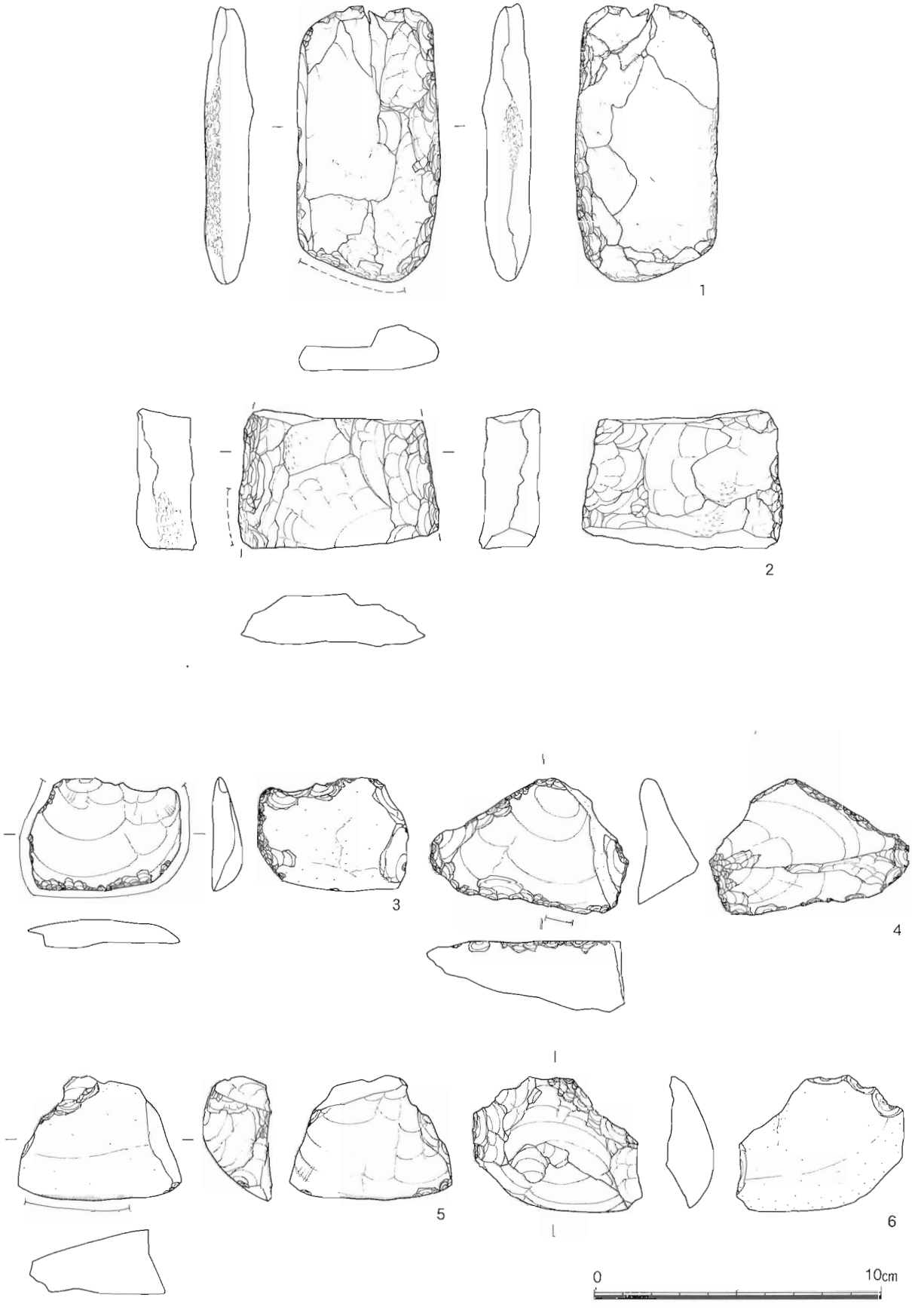
168は砥石と考えられるが、出土層位が不明であるため前述の砥石からは区分した。石材は流紋岩質凝灰岩である。人頭大の礫の中央に幅約3.5cmの平坦な砥面が見られ、板状の薄いものを研いだようである。

註

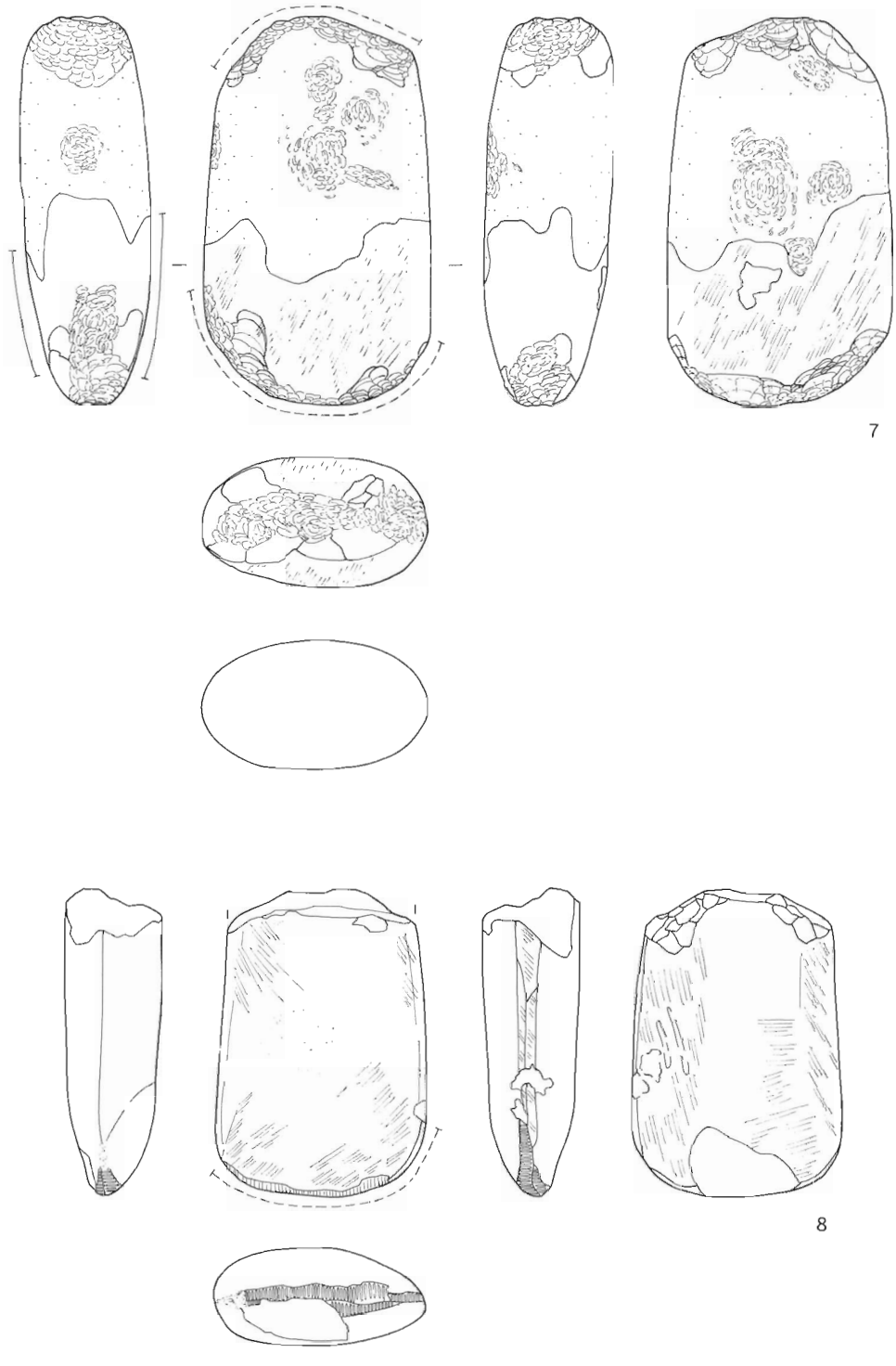
１．石器の石材鑑定については静岡大学名誉教授　伊藤通玄氏に依頼した。
２．参考文献２・５
３．瀬名川遺跡Ⅰの資料の計測値は報告書による。また、第98・99図の番号は報告書の挿図番号と一致する。
４．川合遺跡では柱状斧と偏平斧の境界を最大厚：最大幅が３：５のラインに設けているが、あくまでも便宜的なものとしている。
５．参考文献２
６．今回の調査では何も加工をしていない片刃石斧の原石と考えられる資料は出土していない。
７．伊藤通玄氏には石材の鑑定のほかに石器の用途についても御教示をいただいた。

参考文献

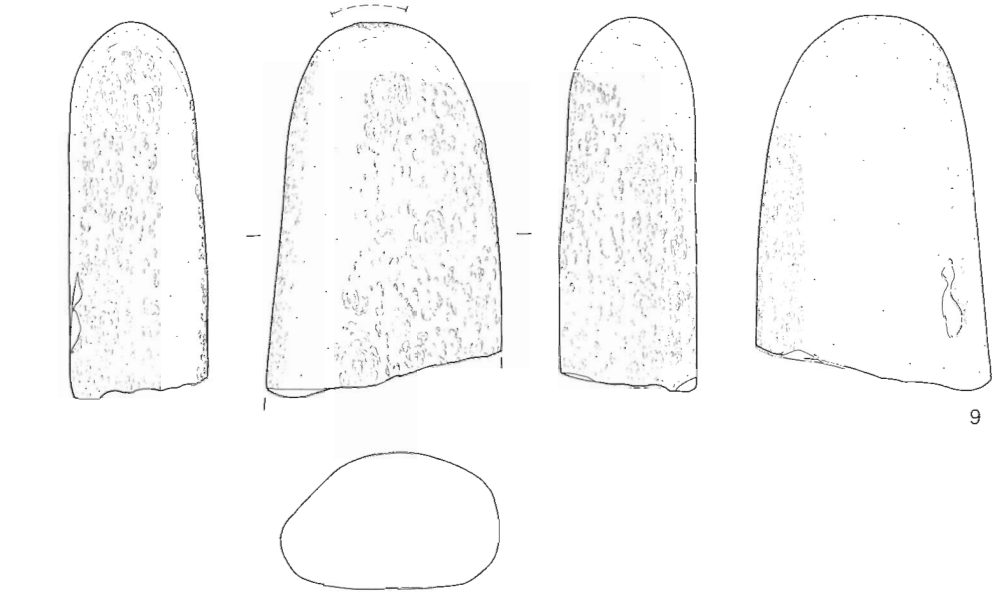
１．石黒立人他　1993『朝日遺跡Ⅳ』㈶愛知県埋蔵文化財センター
２．伊藤律子他　1992『川合遺跡』遺物編２　㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所
３．勝又直人　1996『角江遺跡Ⅱ』遺物編３　㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所
４．佐藤由起男　1995『川山遺跡Ⅱ』　㈶浜松市文化協会
５．佐藤由紀男　2000「駿河湾周辺における弥生系磨製石斧の生産と流通」『考古学論究』第７号　立正大学考古学会
６．佐原　真　1977「石斧論―横斧から縦斧へ―」『考古学論集―慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集―』松崎寿和先生退官記念事業会
７．杉山　満・中西道行　1981『飯田遺跡Ⅱ―昭和55年度発掘調査概報』清水市教育委員会
８．中川律子　1999『瀬名川遺跡』㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所
９．平野吾郎　1986「東海地方における弥生時代の石器について」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅰ』
10．平野吾郎　2004「有頭石錘考」『㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　設立20周年記念論文集』
11．前田清彦他　1993『麻生田大橋遺跡』豊橋市教育委員会
12．宮腰健司他　2000『朝日遺跡Ⅵ―新資料館地点の調査―』㈶愛知県埋蔵文化財センター

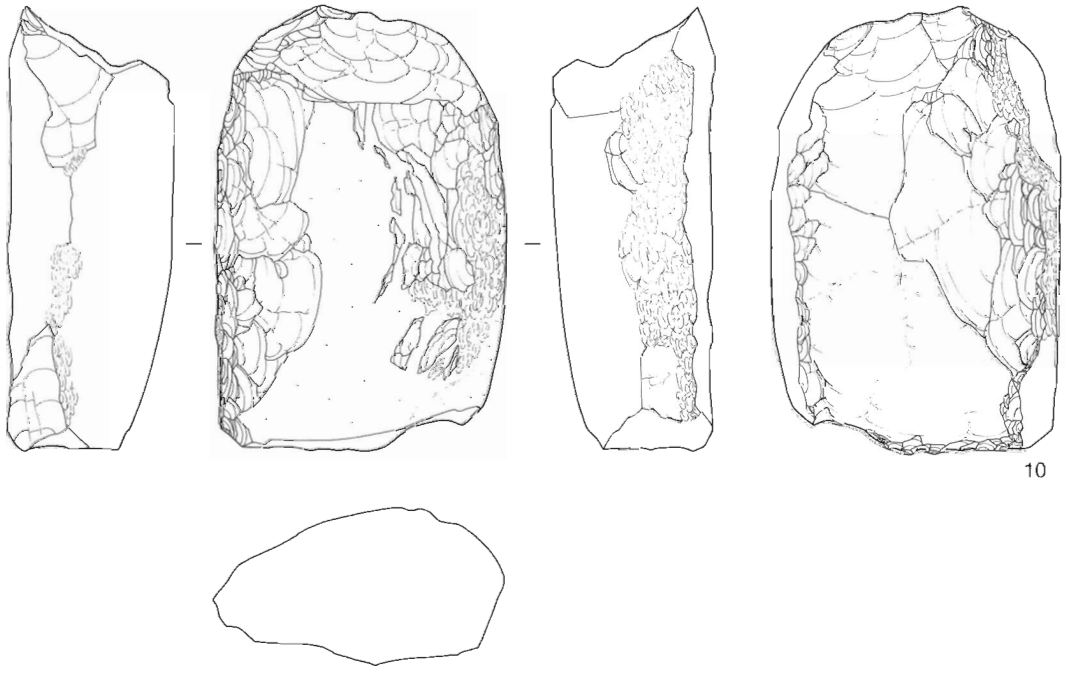


第101図　打製石斧・打製刃器

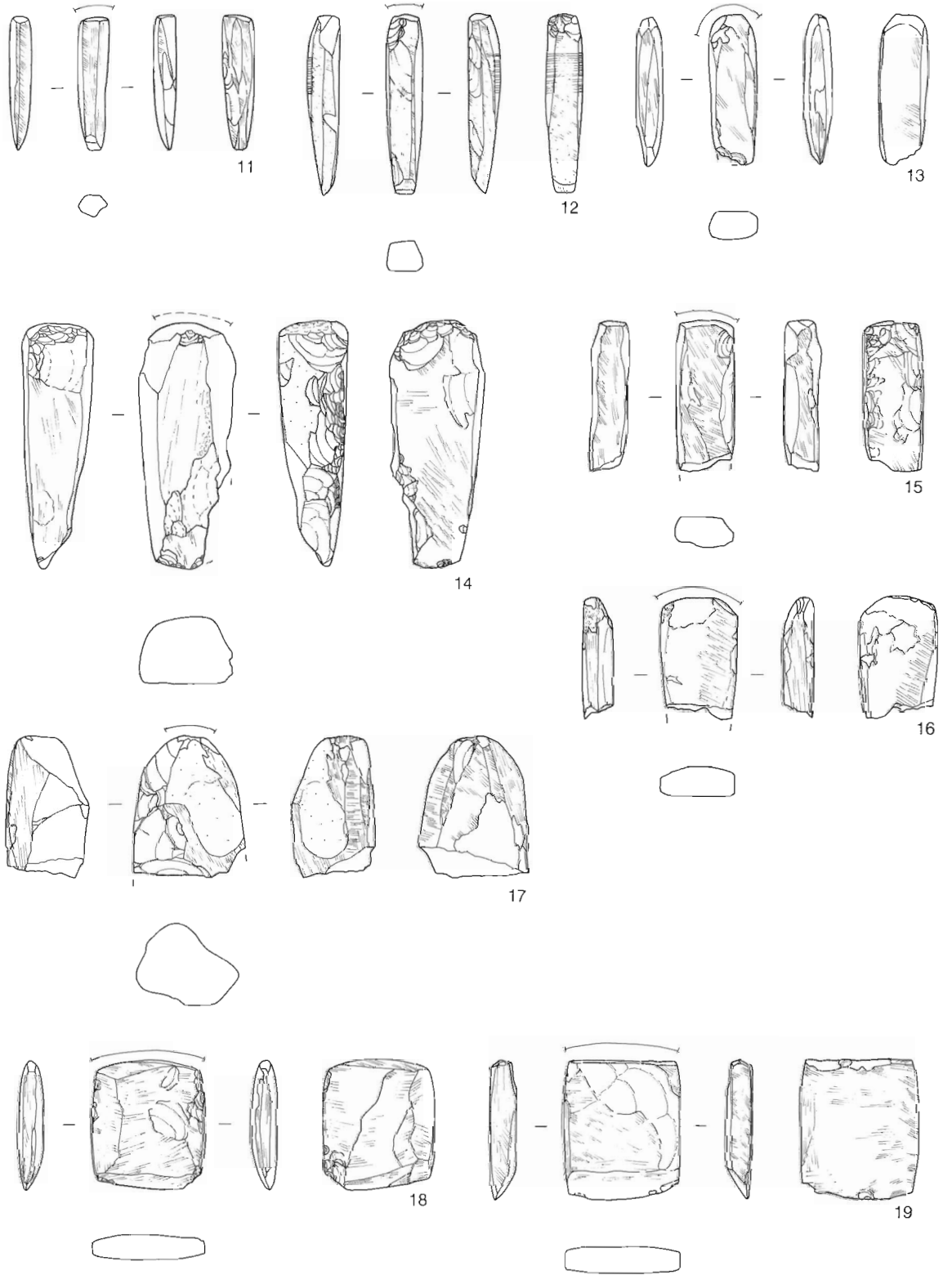


第102図　両刃石斧（転用）

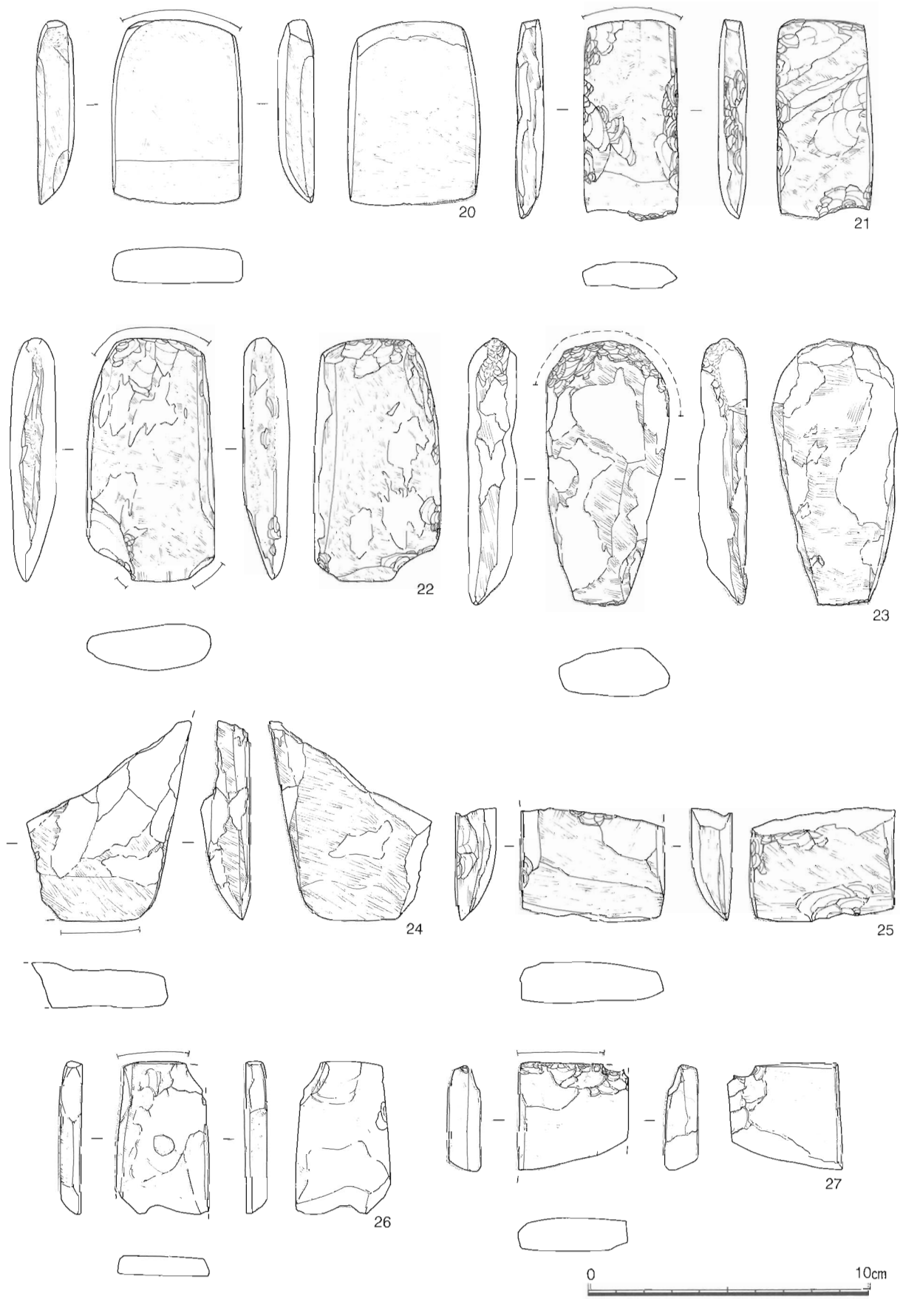




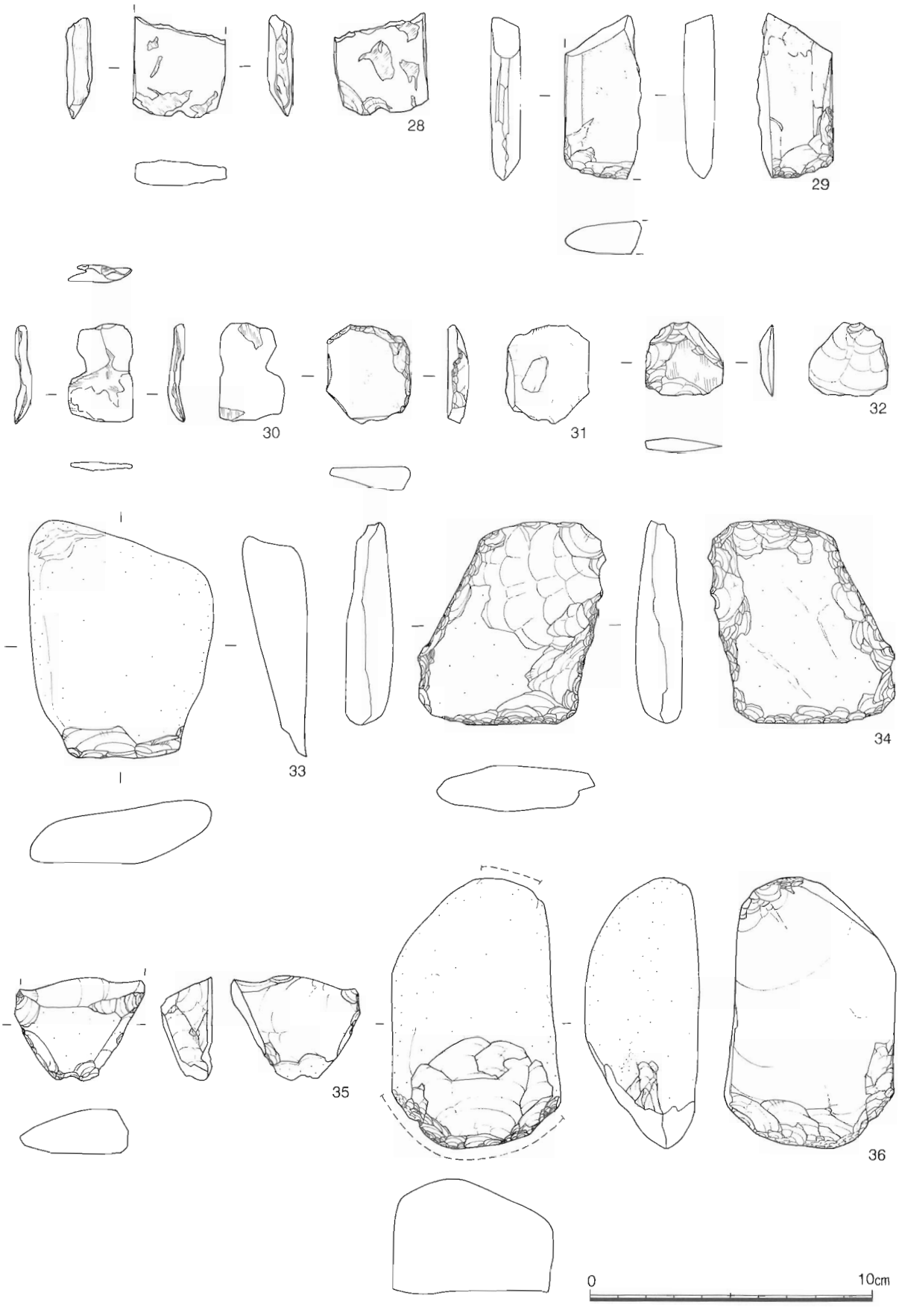
第103図　両刃石斧（未製品）



第104図　片刃石斧①

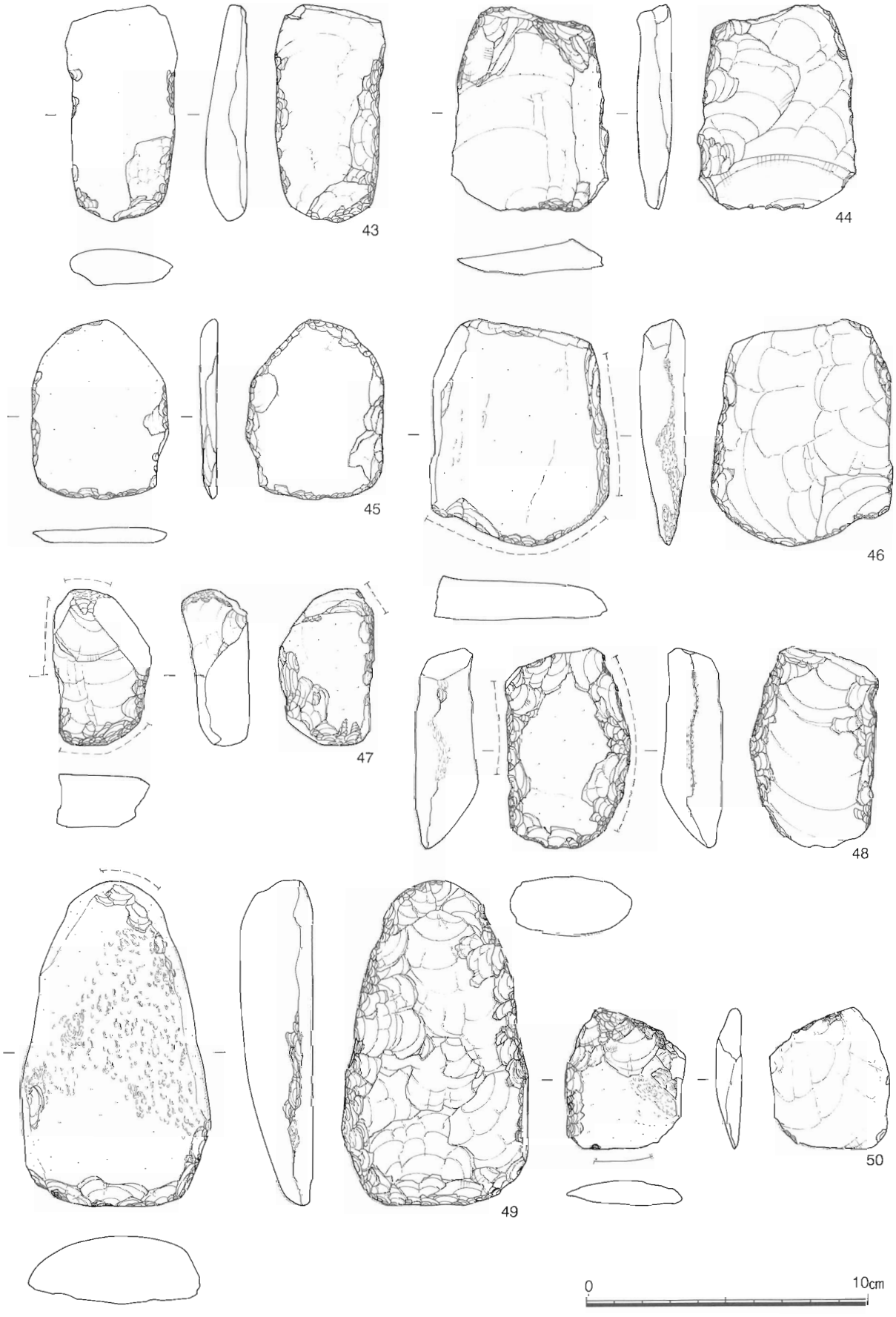


第105図　片刃石斧②

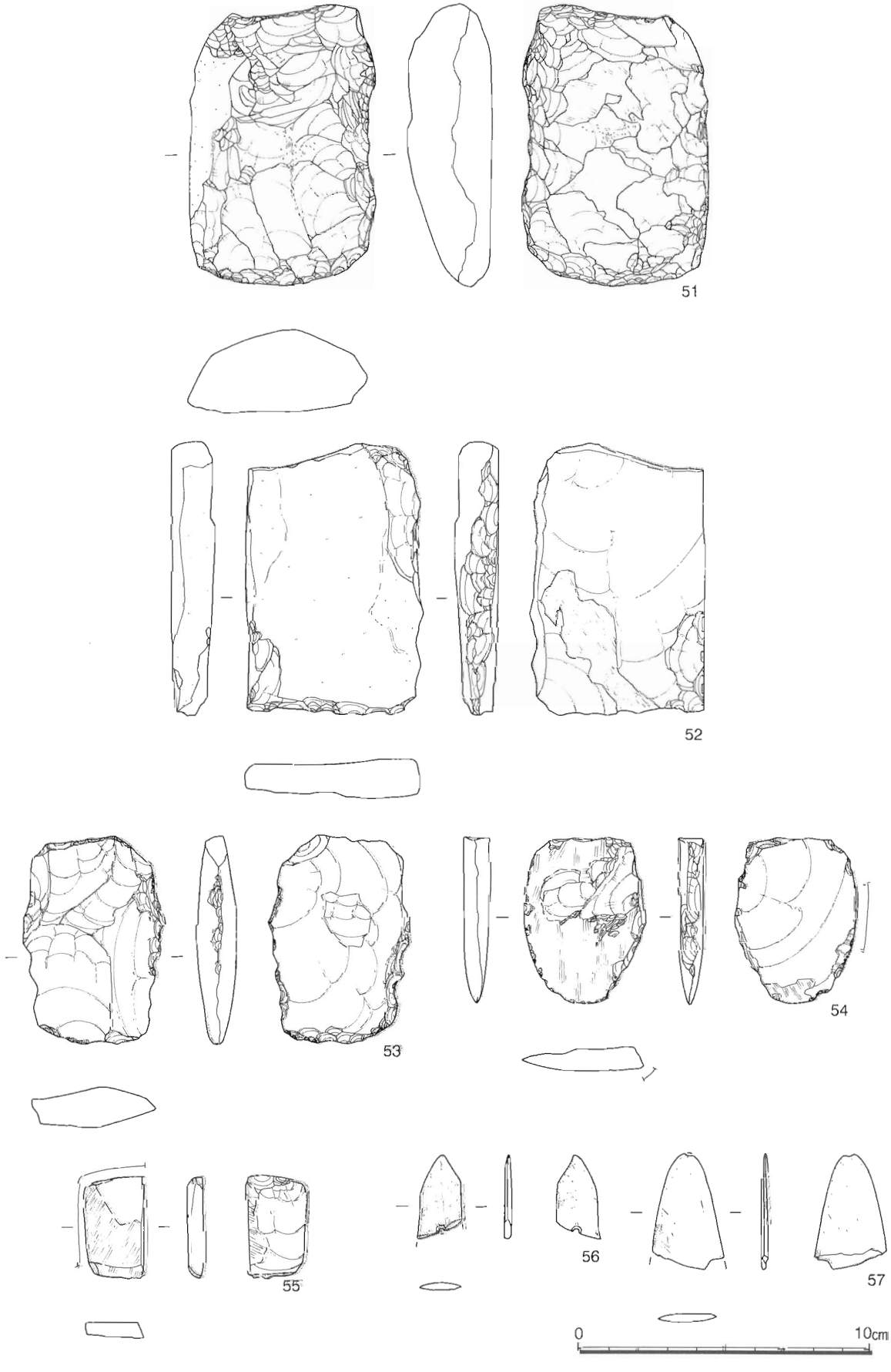


第106図　片刃石斧③・片刃石斧未製品①

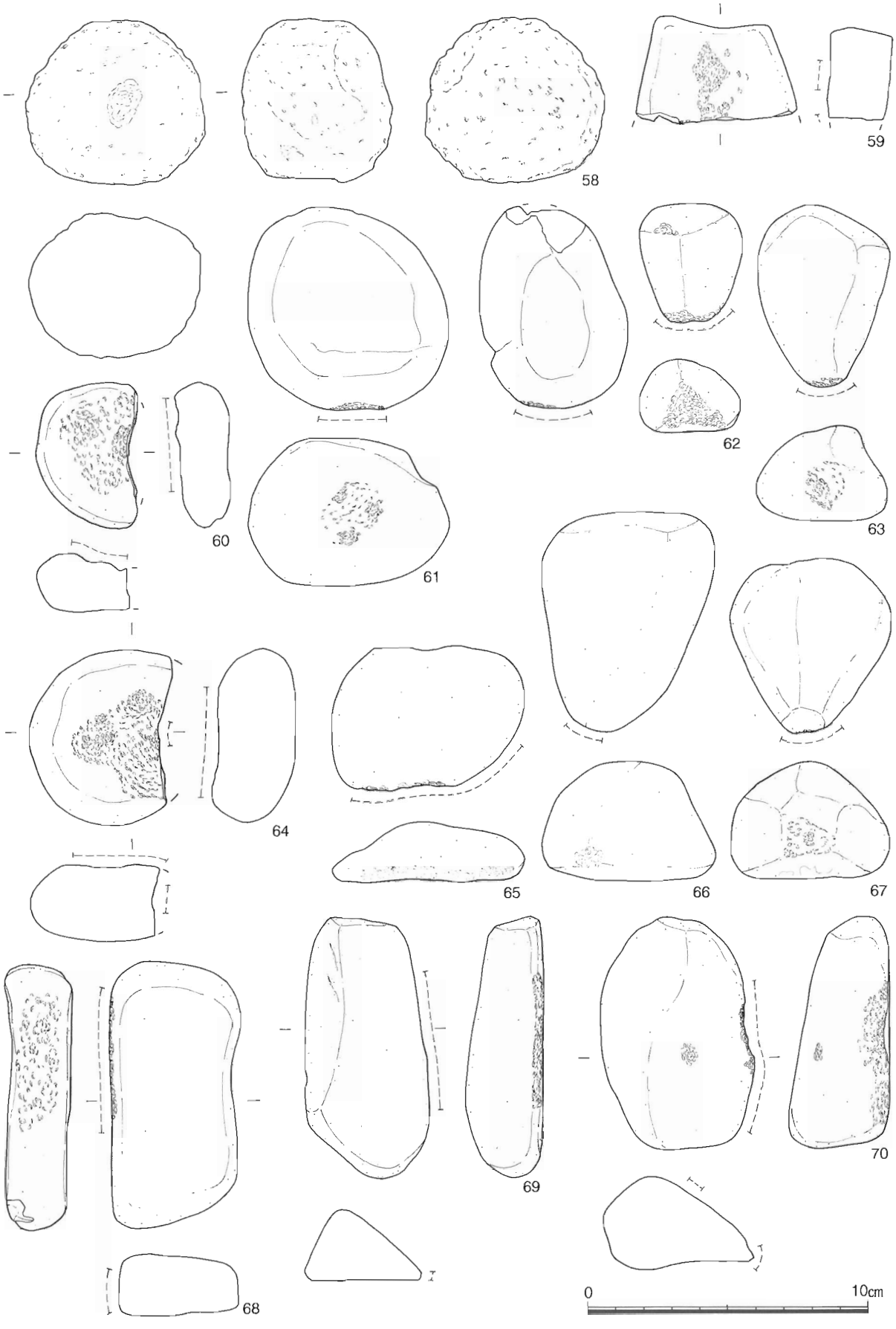
第107図　片刃石斧未製品②



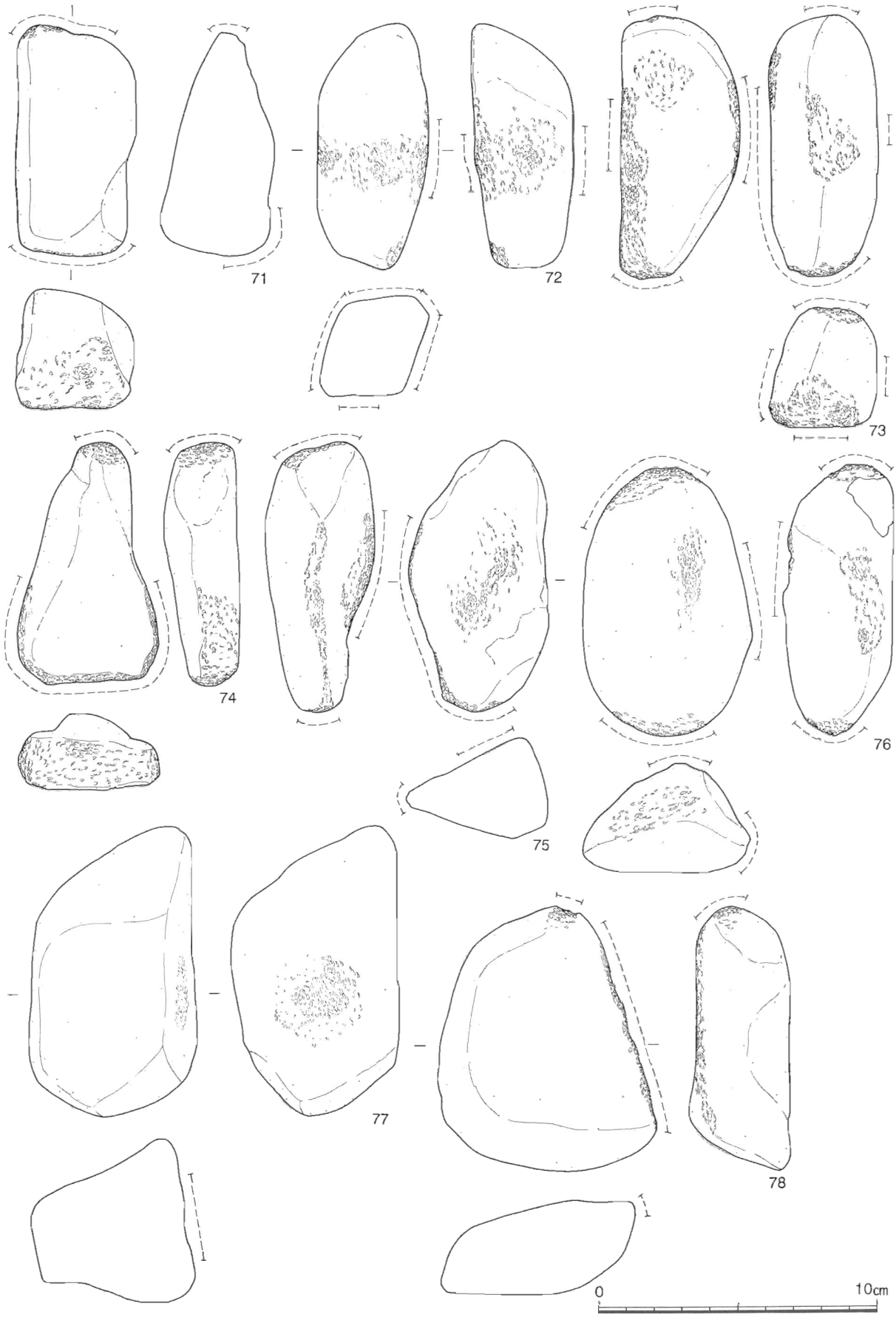
第108図　片刃石斧未製品③



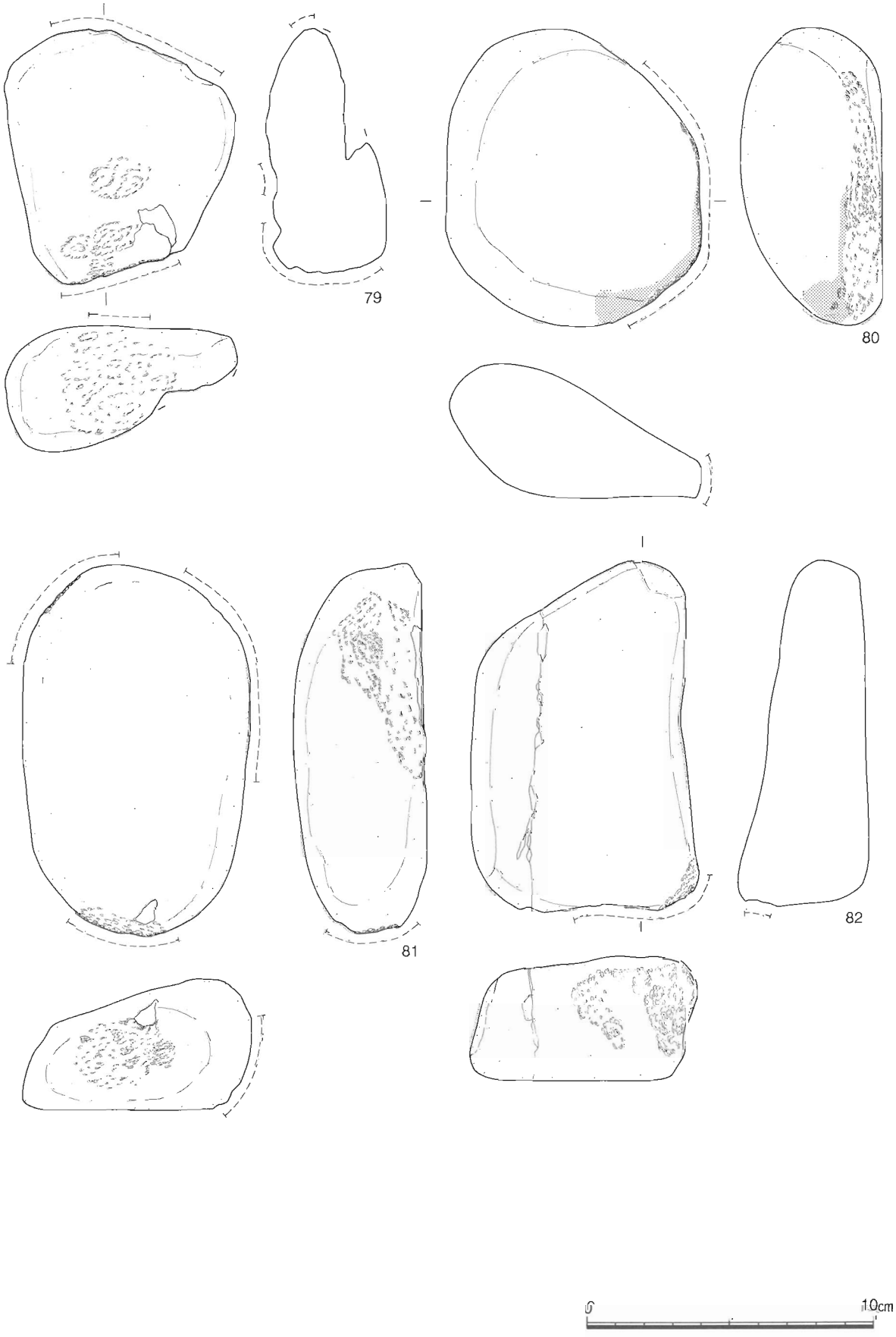
第109図　片刃石斧未製品④・磨製石鏃



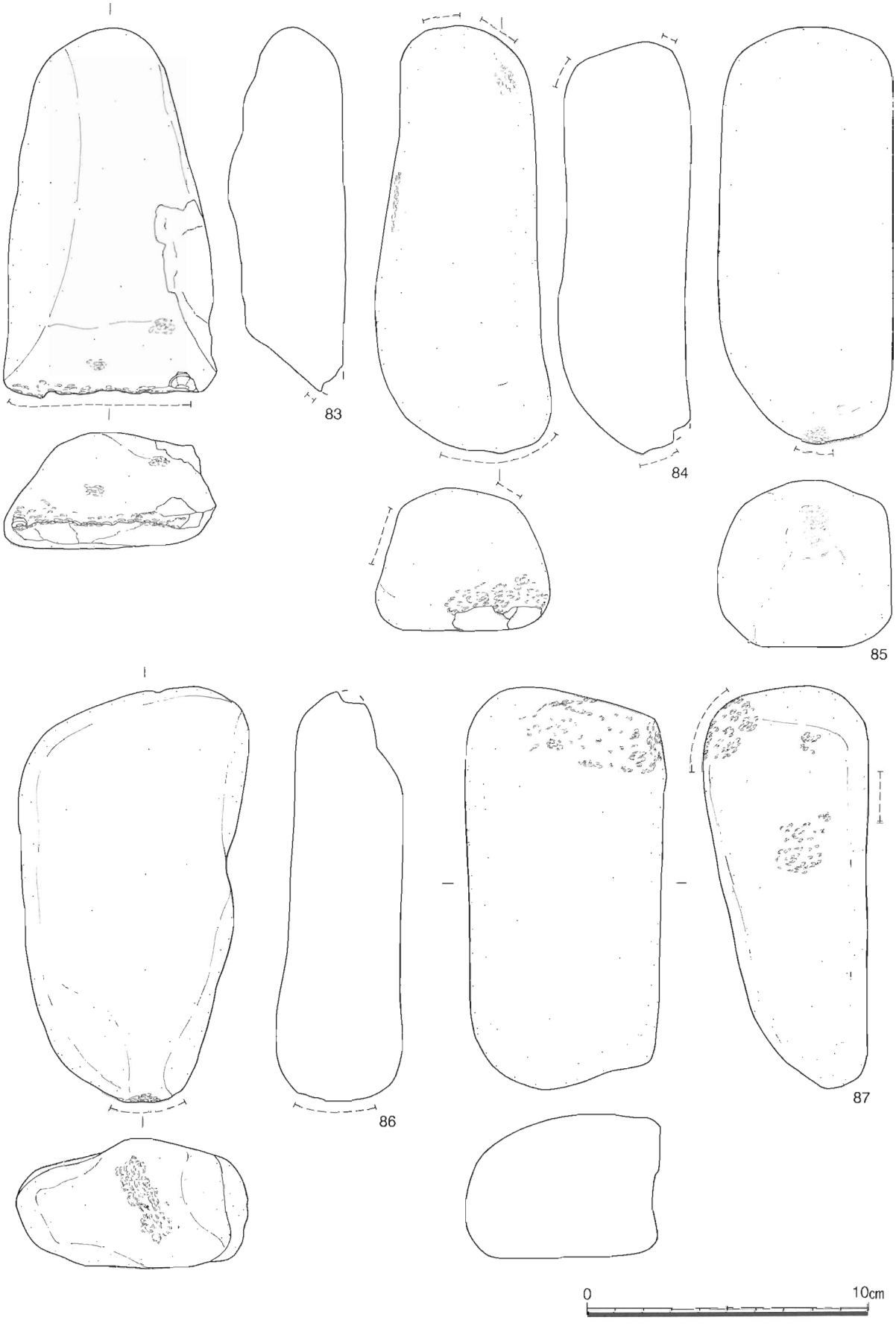
第110図　敲打石①



第111図　敲打石②

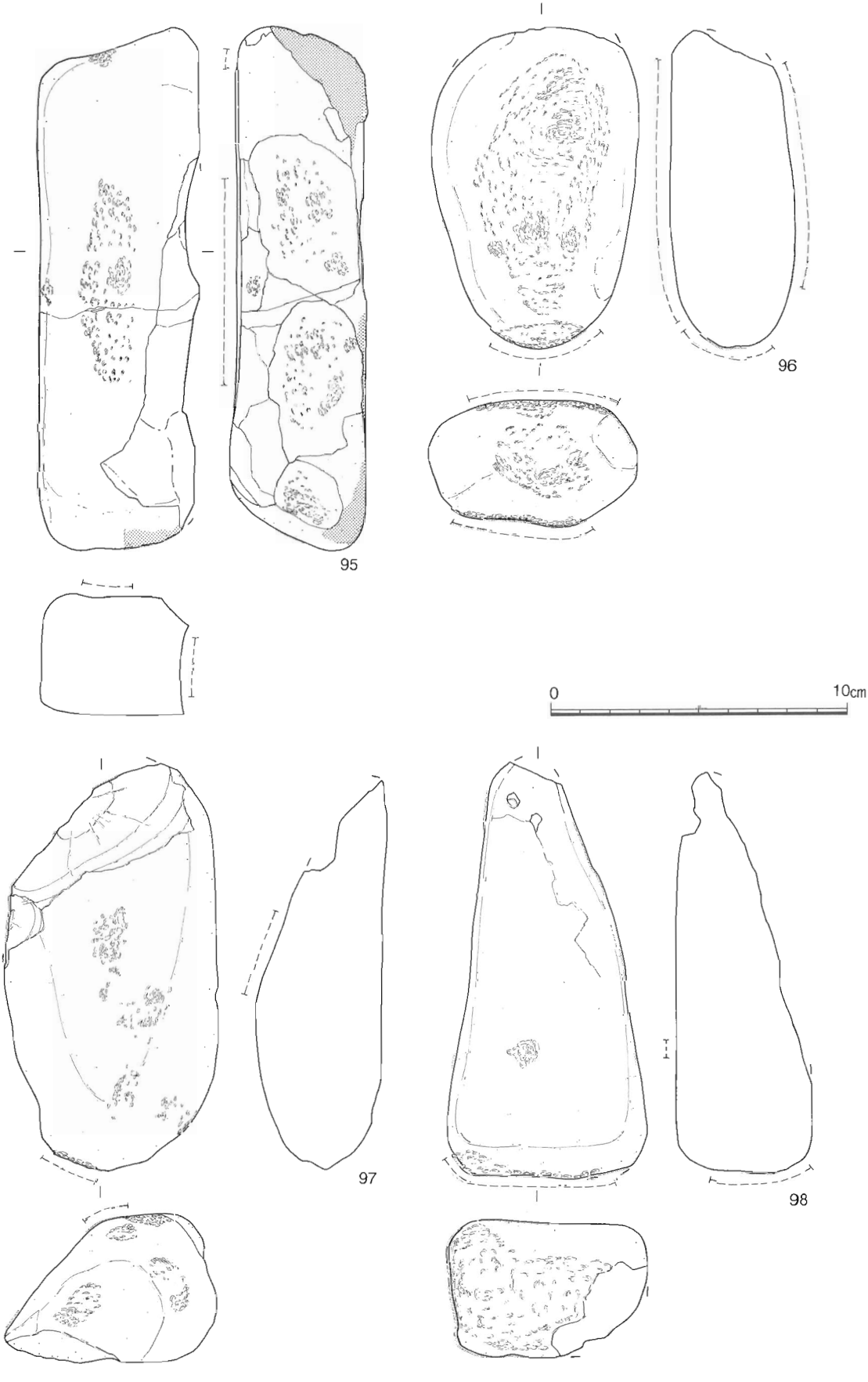


第112図　敲打石③

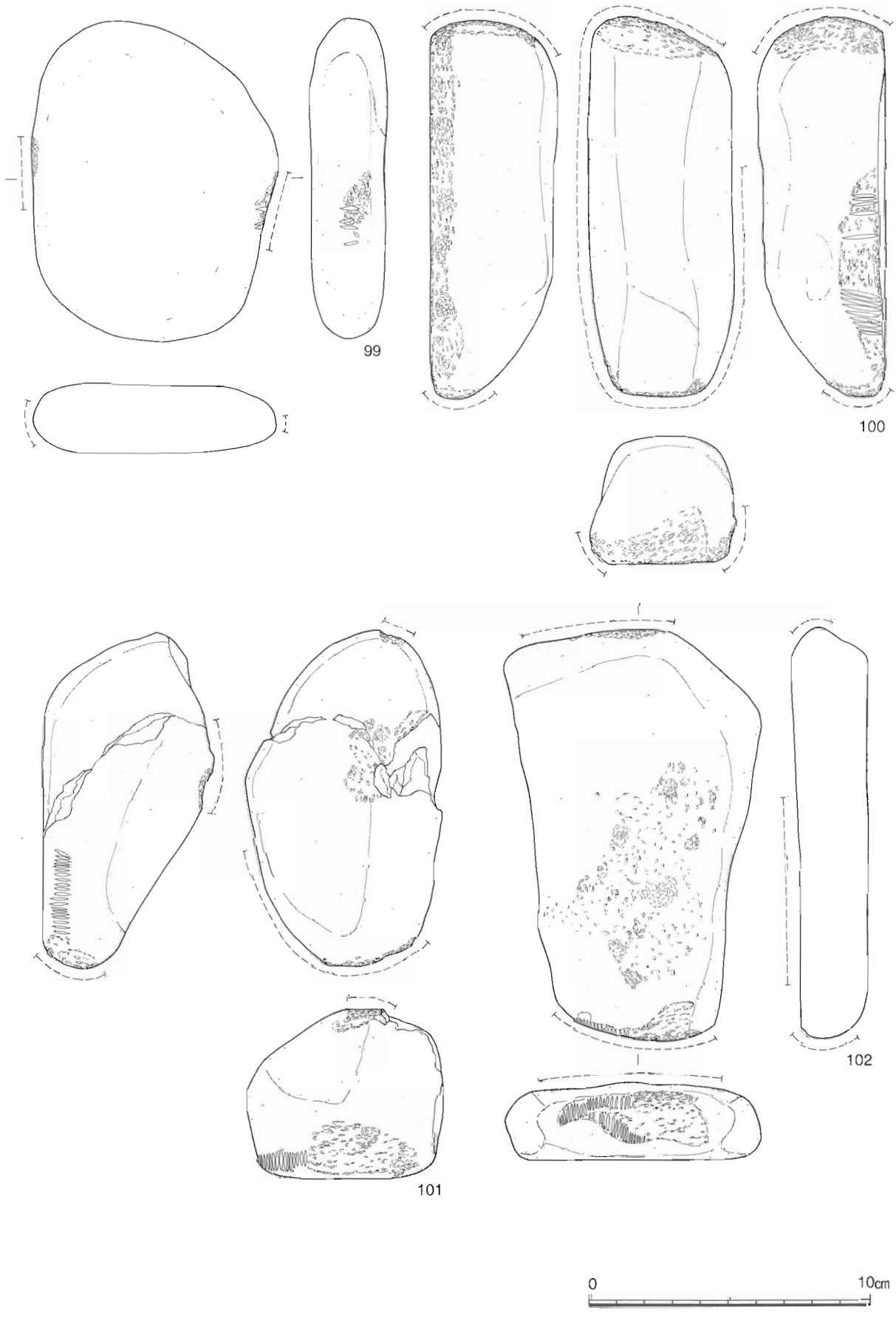


第113図　敲打石④

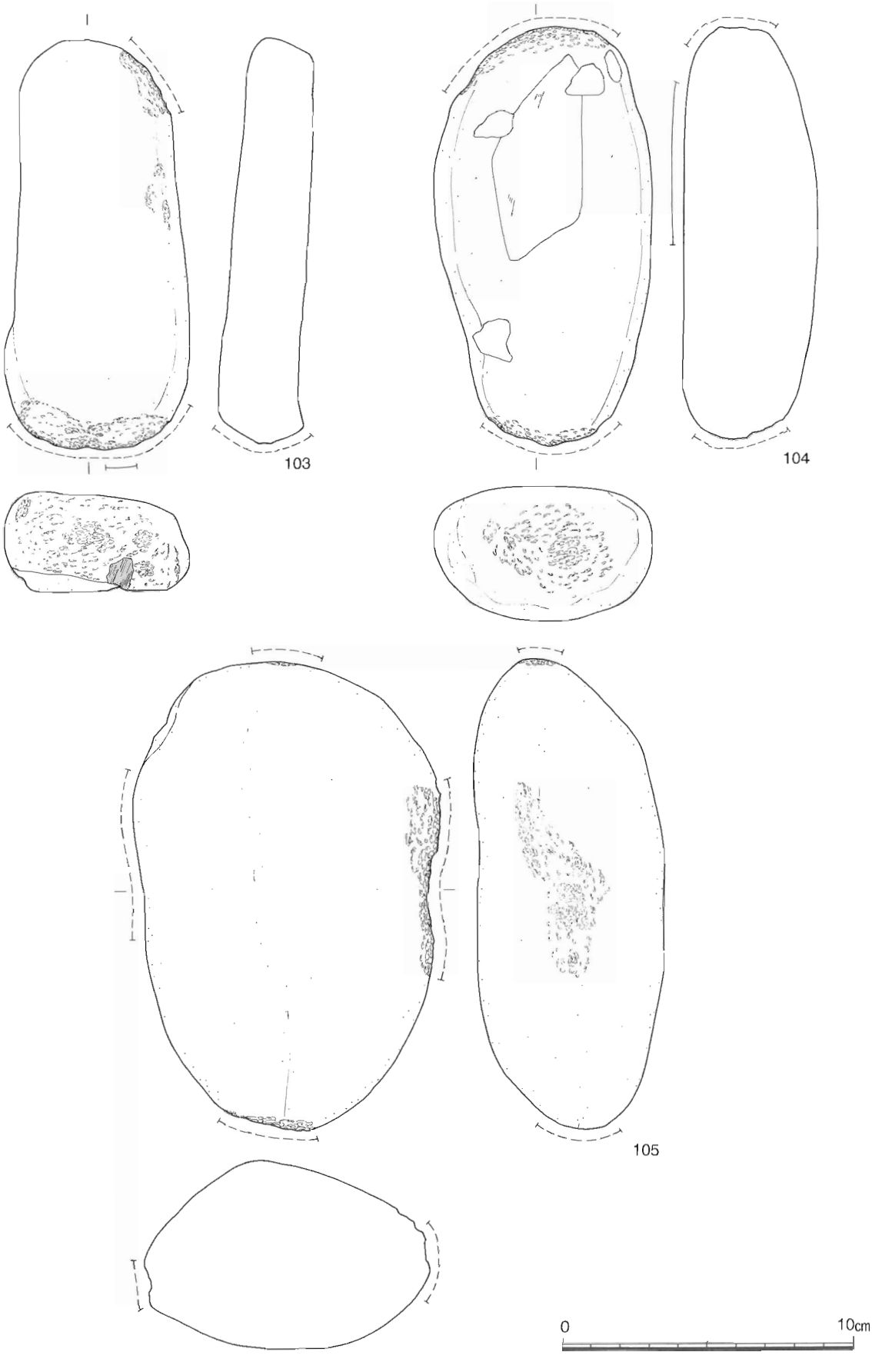
第114図　敲打石⑤



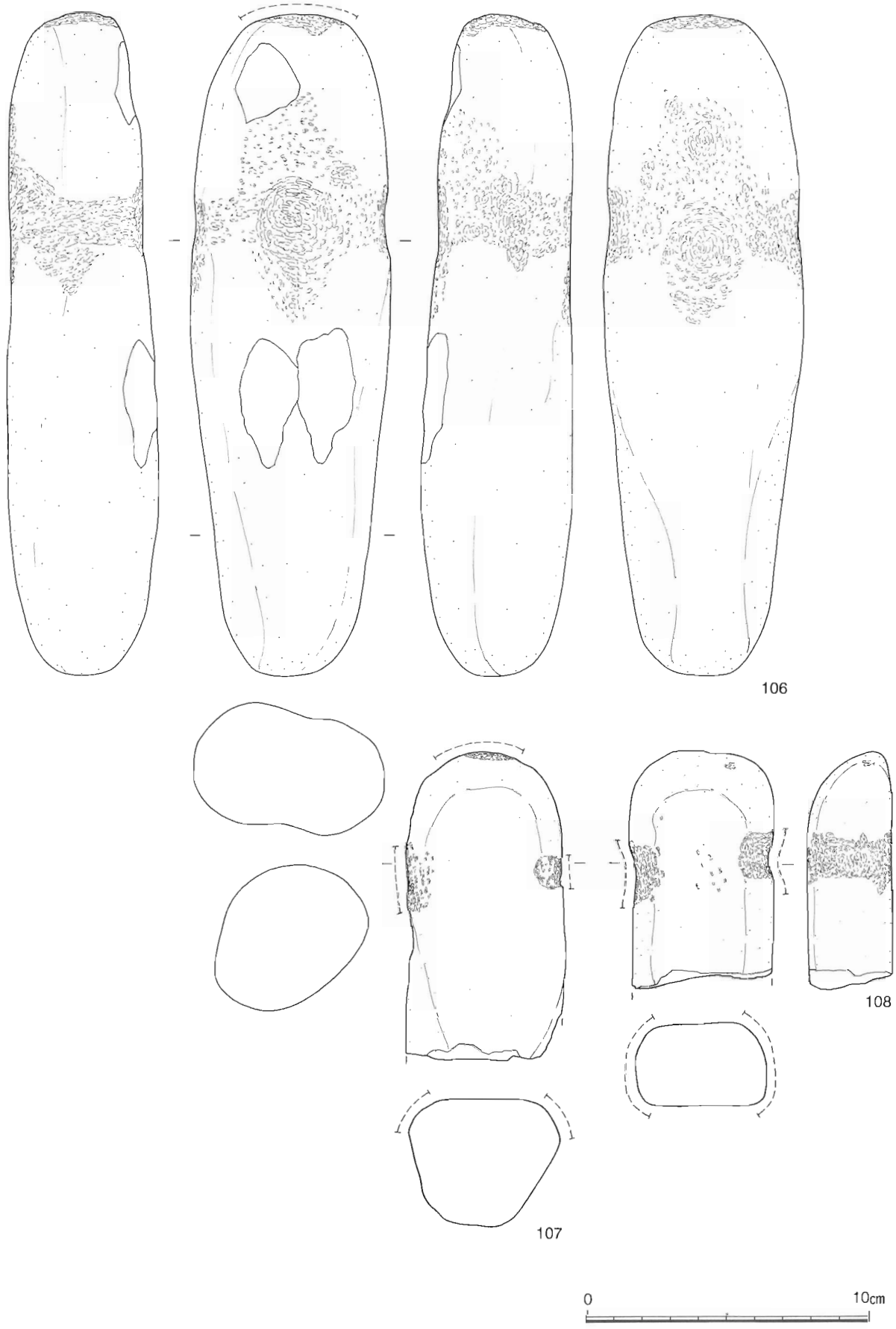
第115図　敲打石⑥



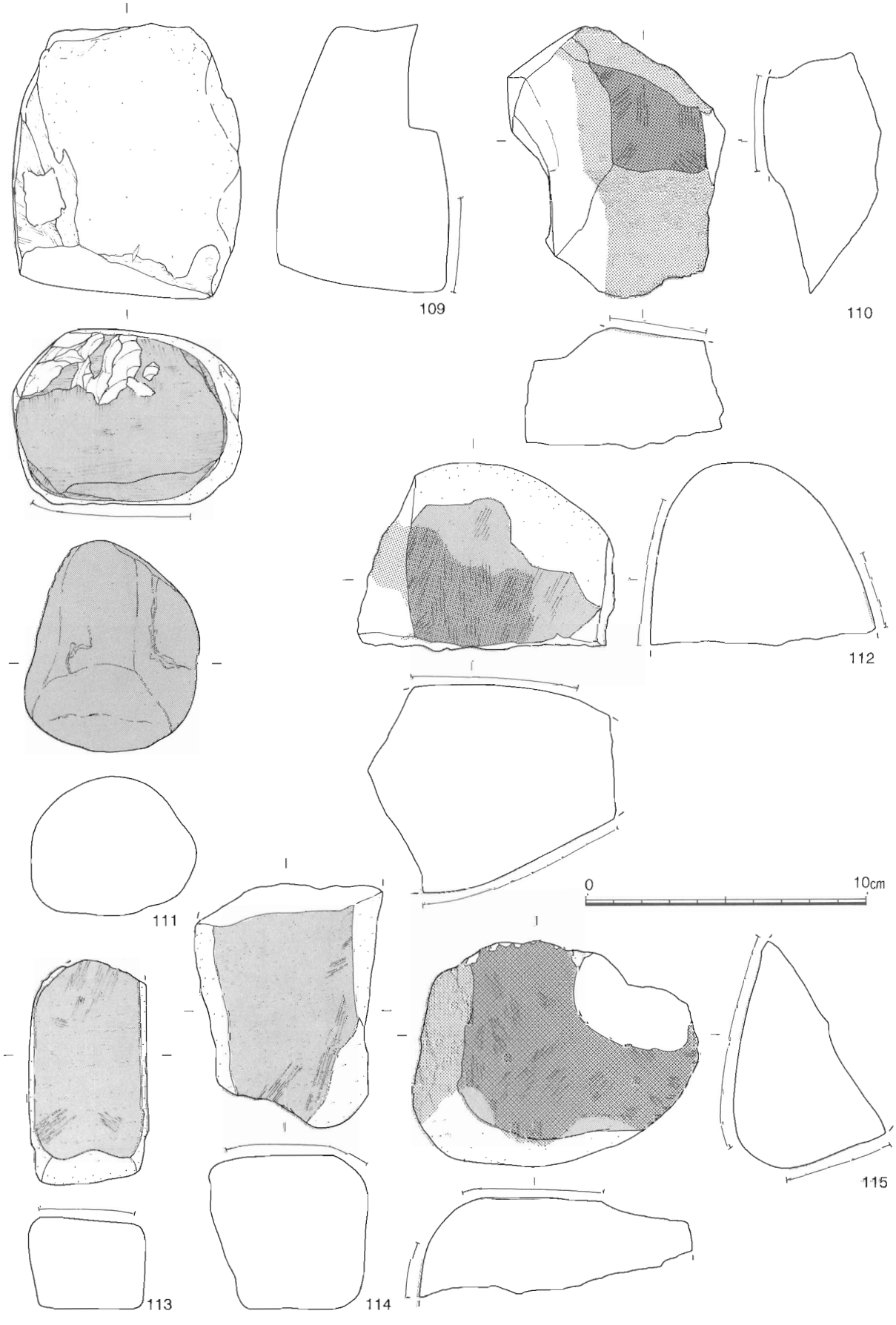
第116図　敲打石⑦



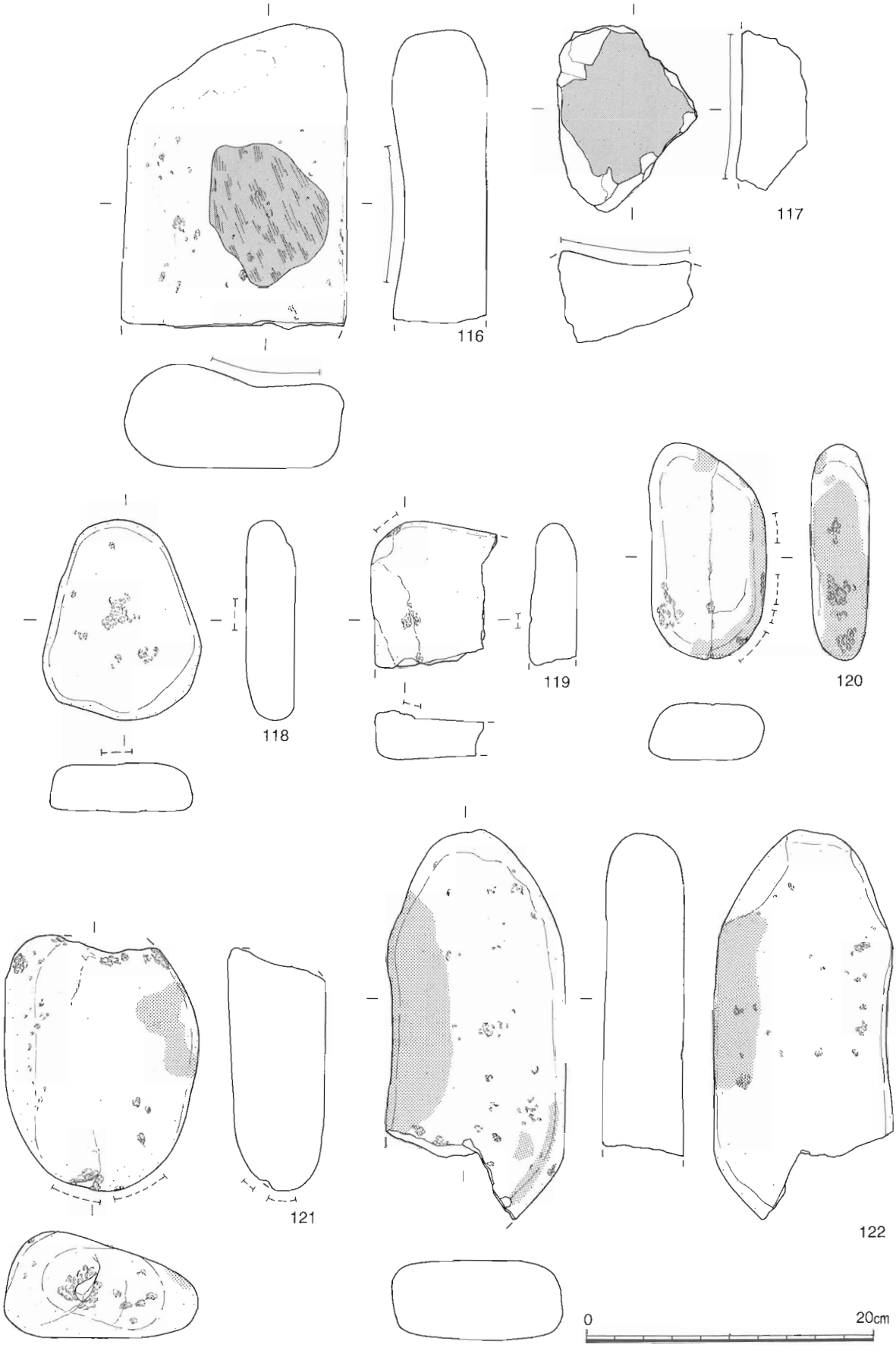
第117図　敲打石⑧



第118図　敲打石⑨

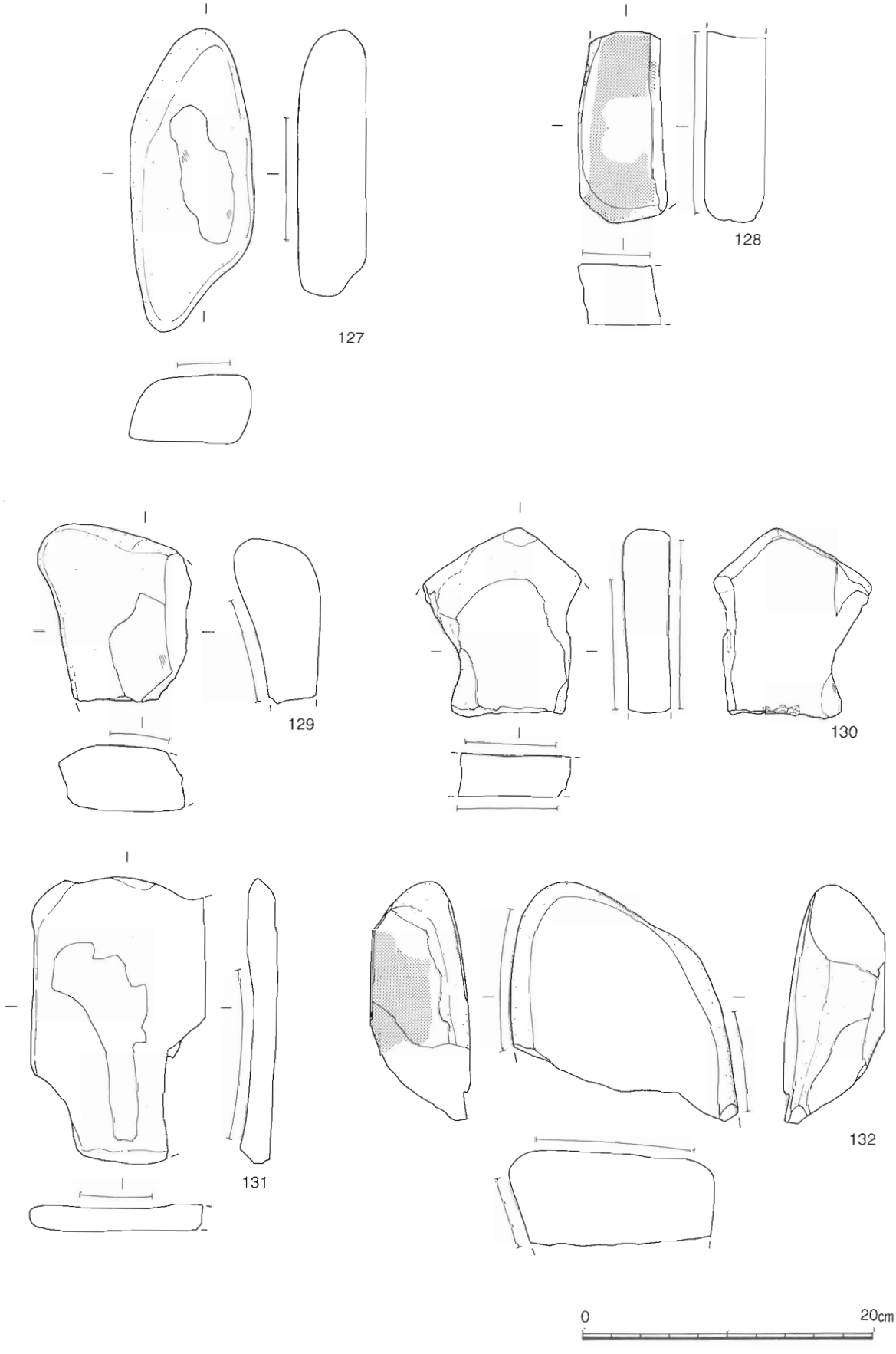


第119図　磨石

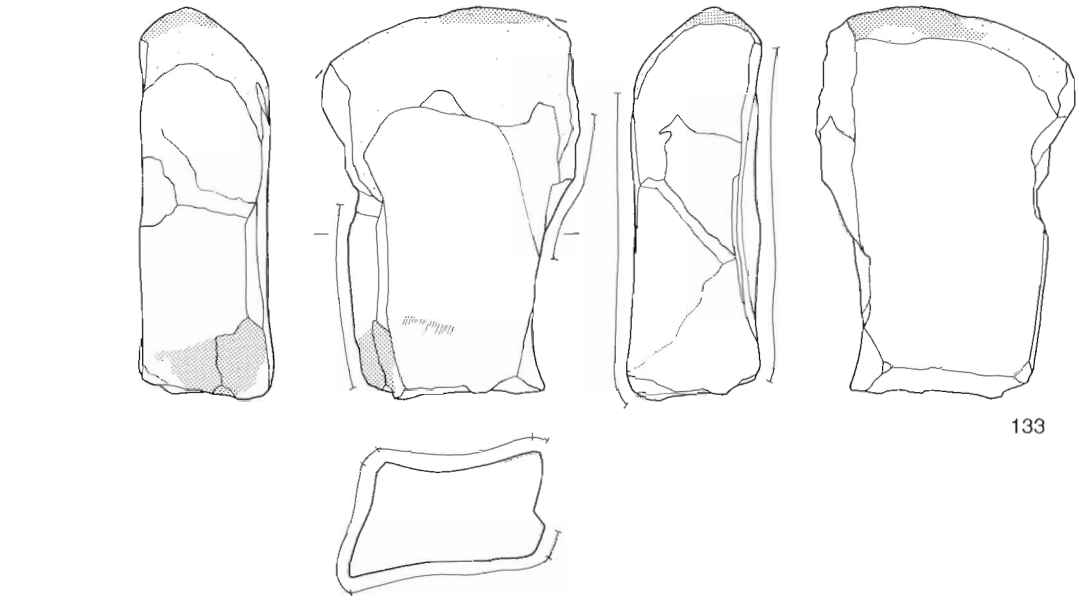


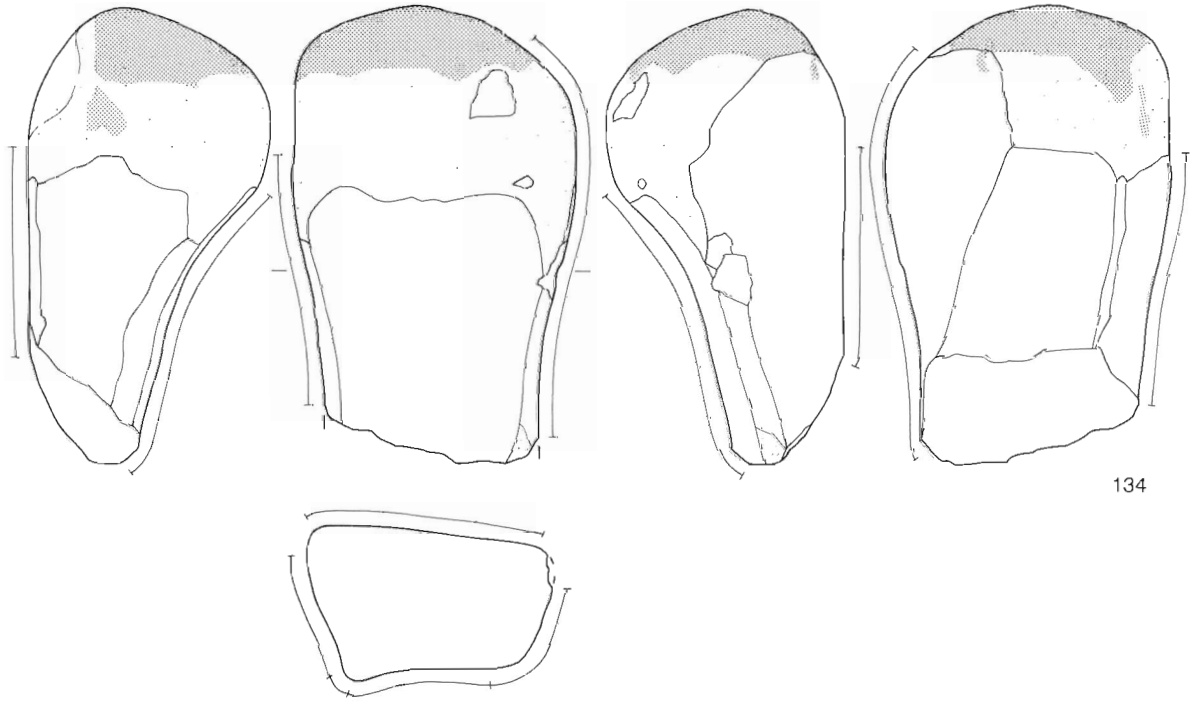
第120図　石皿・台石①

第121図　台石②

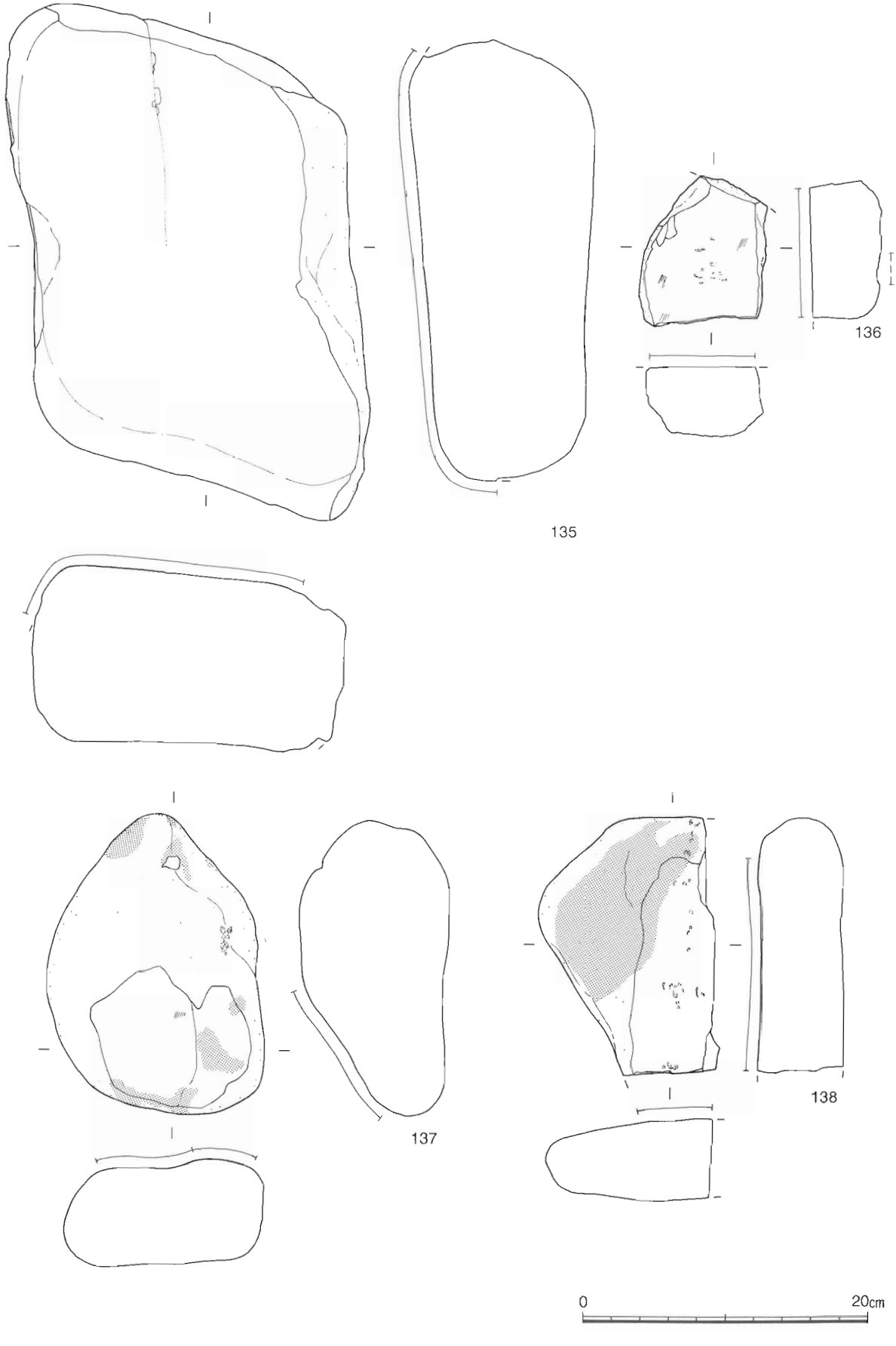


第122図　砥石①





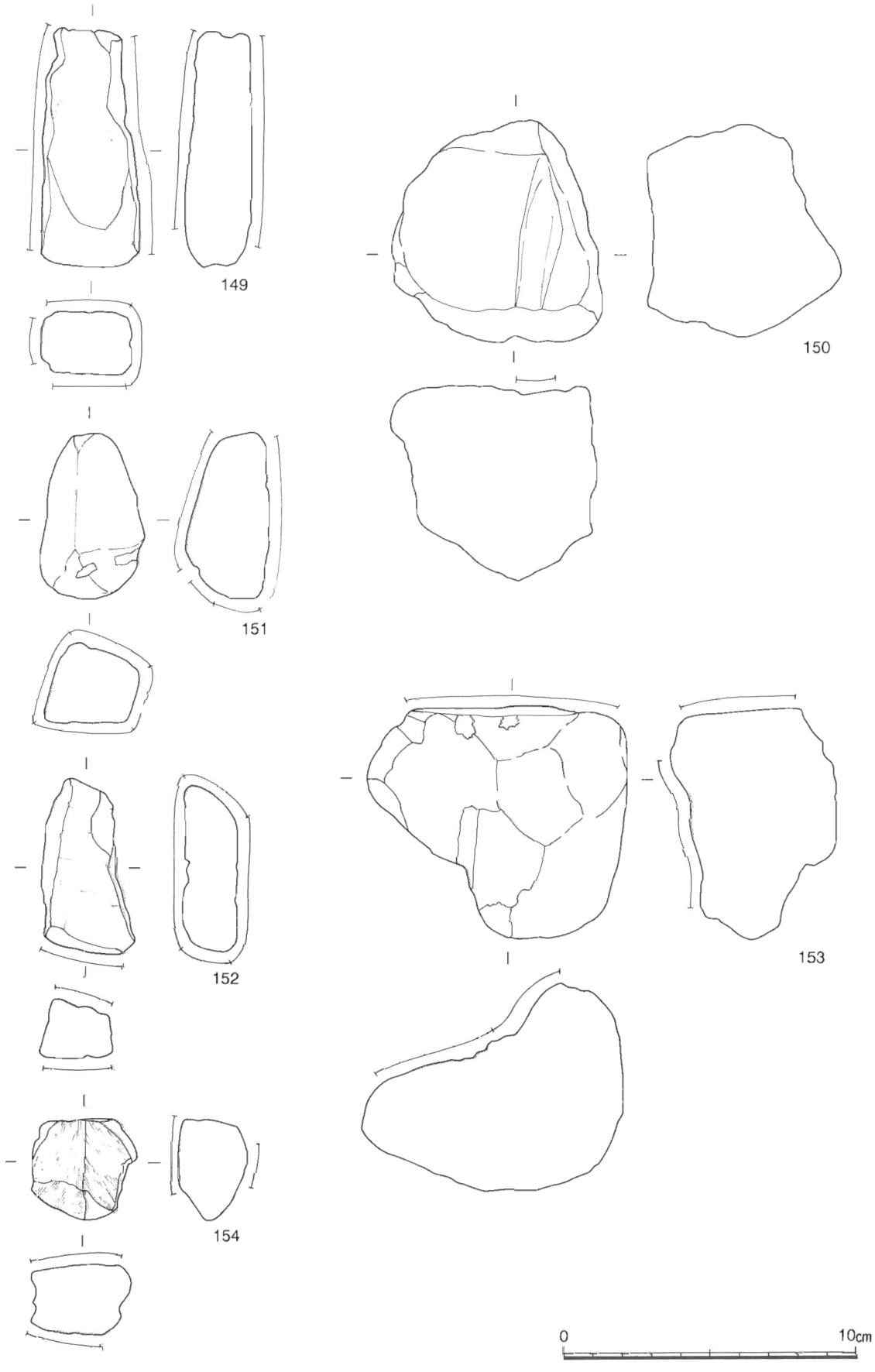
第123図　砥石②



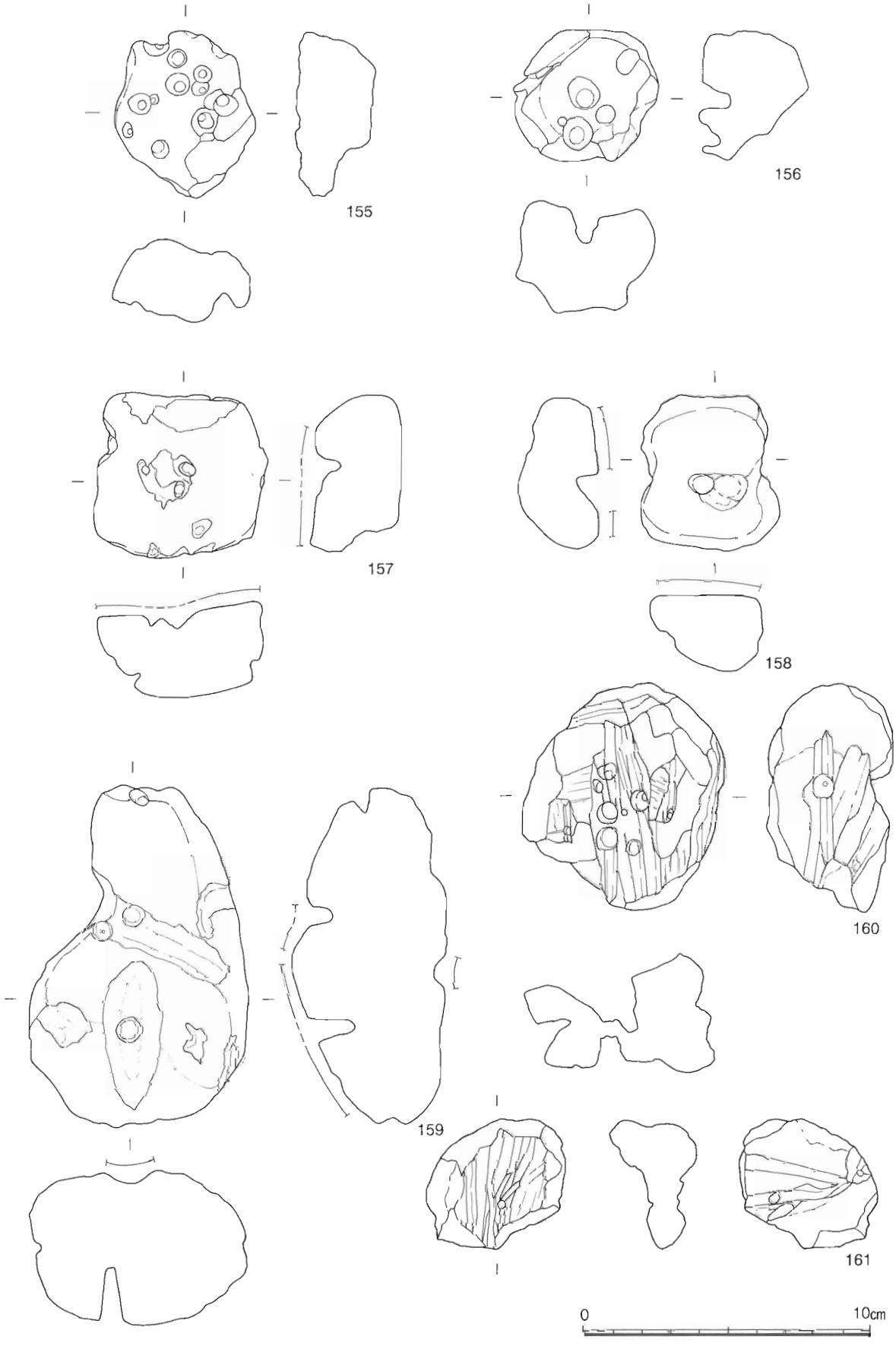
第124図　砥石③

第125図　砥石④

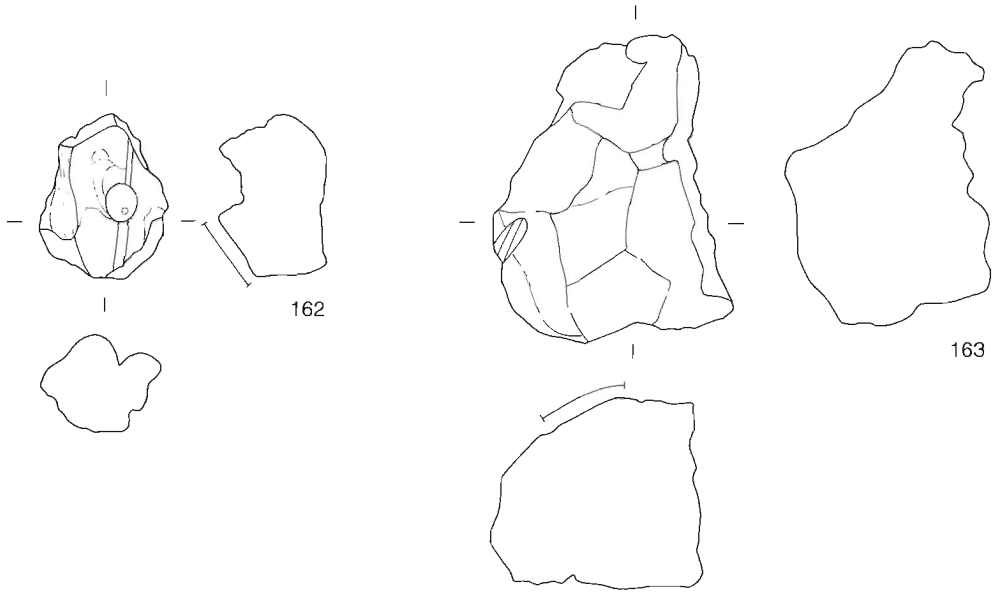
第126図　砥石⑤

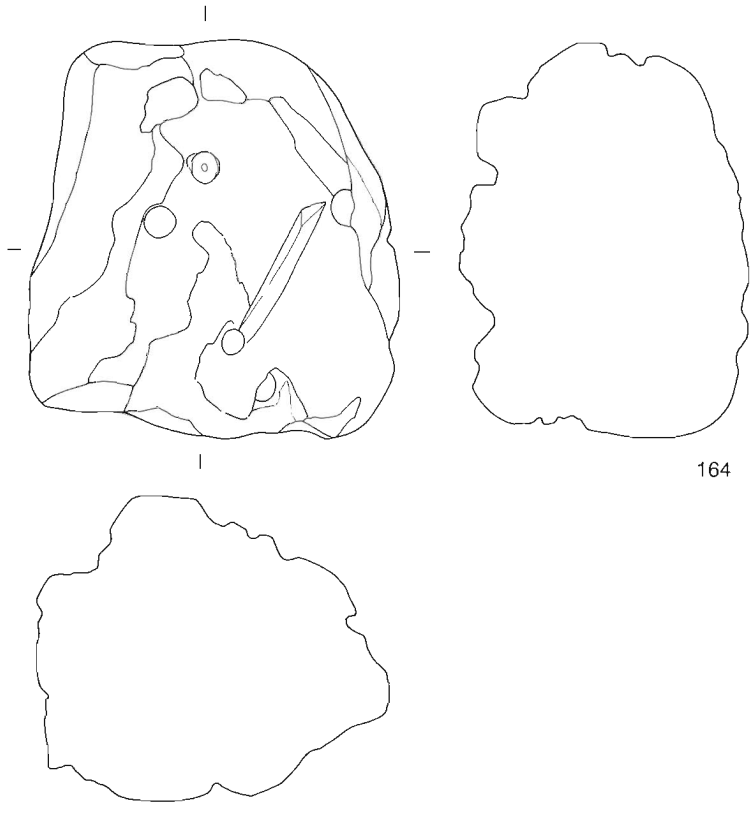


第127図　礪石⑥

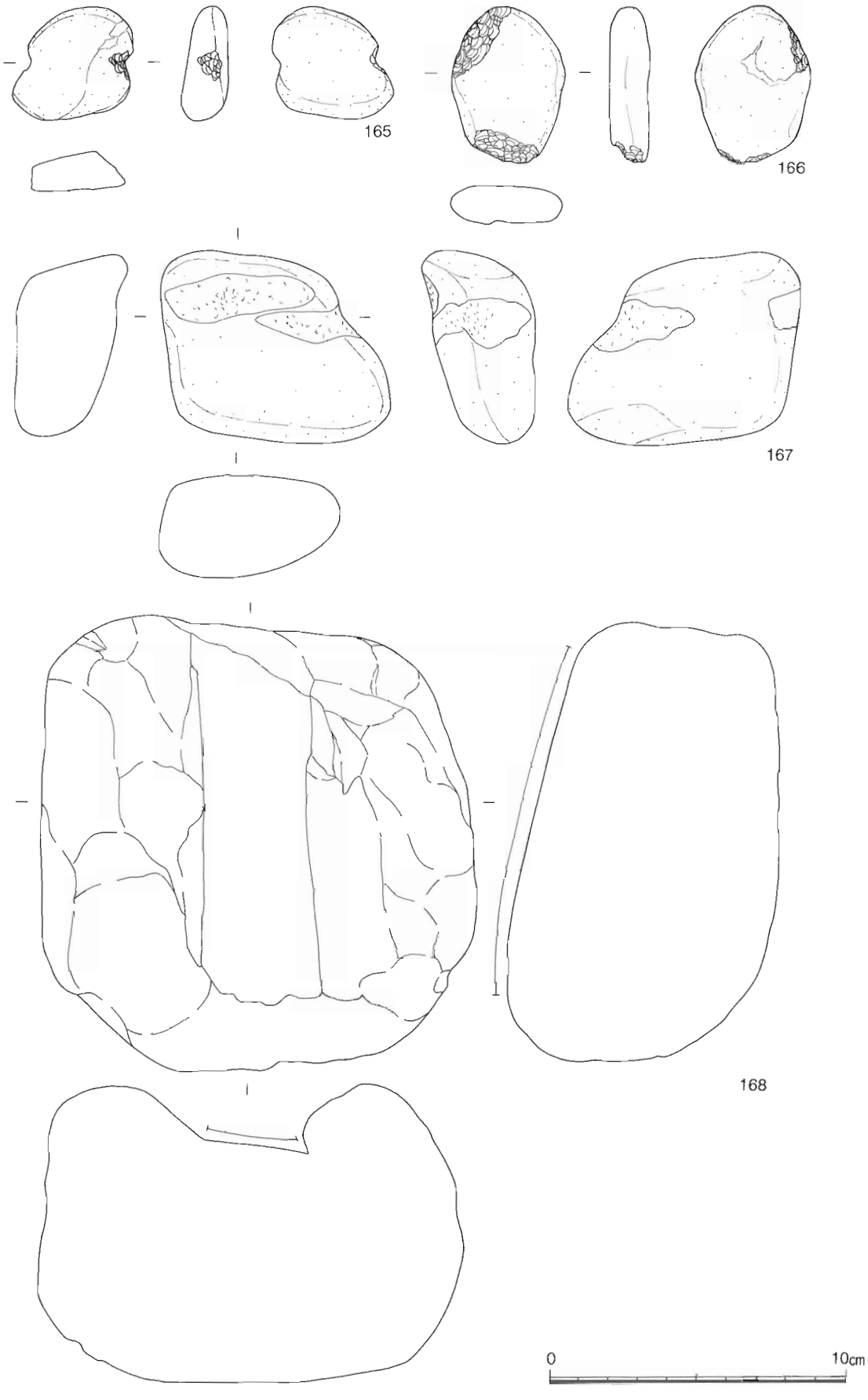


第128図　砥石⑦





第129図　砥石⑧



第130図　石錘・その他の石器

第３節　木製品

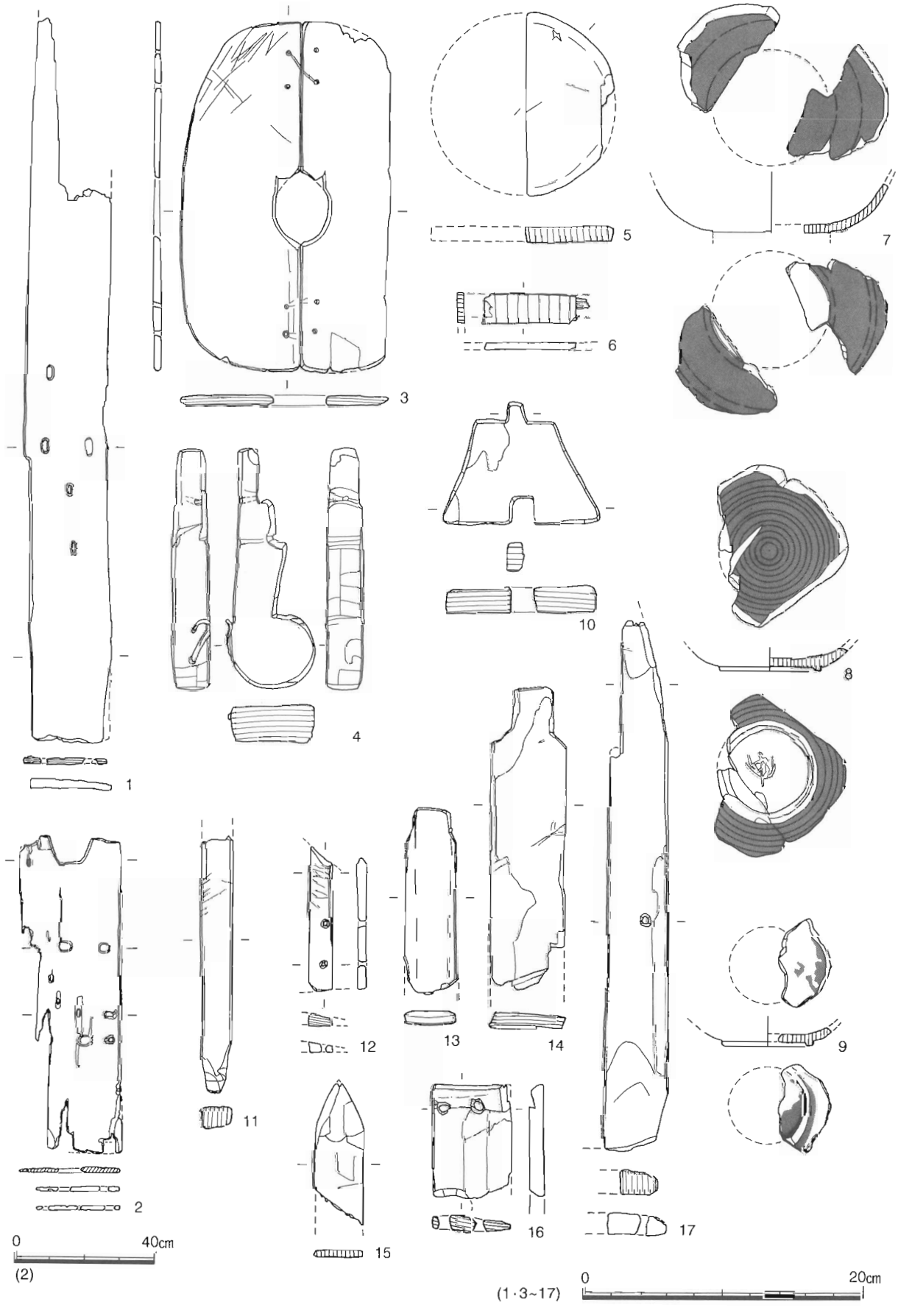
本節は瀬名川遺跡１区・２区・３区と５－１区より出土した木製品を解説する。出土総数137点の木製品のうち、加工された製品を中心に102点を図化し本書に掲載した。第131図１・４～10は鎌倉時代～江戸期の木製品で、砂利層及び４層から14層までの間に出土した。第131図２・３・11～17は古墳時代～奈良・平安時代。12～18層までの包含層より出土した。第132図18以降の木製品は弥生時代中期～古墳時代初頭に属する。ここでは前半に個別製品の解説、後半に類例資料や県内の木製遺物の状況と考察を記載する。なお、本節を記載するにあたり、木製品の分類及び名称は『木器集成図録（近畿原始篇）』（奈良国立文化財研究所　1993年）にならった。

A　古墳時代以降～江戸時代の木製品（第131図　写真図版69）

１・２は貫穴のある板材である。どちらも製材された板であり建築材と思われる。１は５－１区砂利層内より出土した鎌倉～江戸時代の木製品である。厚さが１cmに満たない整形板に５箇所の孔がある。孔の形状は長さ１cm前後の長方形で、不規則に並んでいる。上部が欠損しているため全長は不明である。２は長さ90cmを超える大型材。幅30cmほどの整形板で、複数個所の孔がある。上端部は逆台形状に抉りが入る。全体に腐食が激しく原形を留めない。古墳時代～奈良時代の建築材と思われる。３は４層上面から出土した奈良～平安時代の泥除けである。泥除けは鍬身よりも手前の柄部分に装着するもので、中央の円形孔には柄が通る。孔の直径は５×４cmほどである。上下に４箇所ずつある小孔は左右の材を緊縛して固定するためのものである。小孔周辺には緊縛した紐の圧痕がついている。圧痕の方向から見て交差するように緊縛されていたものと思われる。

４～10は鎌倉時代～江戸時代の木製品。４は完存しているが用途不明の製品である。他の部材と組み合わせ使われるものであろう。左側面には径0.2～0.3cmの金属が打ち込まれている。上部には段差を切り込んであり、貫通孔が穿たれている。５は曲物の底板と思われる円形板である。スギの板目材で、全体の１/２残存している。側面には木釘など側板を固定していたような痕跡は見られない。６は曲物の側板。薄いヒノキの柾目材の内側にケビキを入れてある。７～９は漆椀。３点ともケヤキ材で作られている。７は高台から体部の一部で口縁部は破損している。内外面とも黒漆が塗られている。８は高台部分。内外面に黒漆が塗られている。内・外椀面は轆轤引きの痕跡がはっきりしている。高台内側には轆轤の爪痕がある。９は高台が１/４残存。復元底径は6.6cm。内外面に黒漆が残存している。10は用途不明木製品。台形状に整形した板である。上端部中央には1.5cmほどの出枘を削りだしてある。更に下辺から中央部分を方形に切り込んでいる。

11～17は古墳時代～奈良・平安時代の木製品。いずれも用途不明品である。11は棒状木製品。角は面取りされ、下端部は薄く削られている。12は有孔板。小孔が２箇所、左右側面は欠損している。小片のため断定し難いが、３のような泥除けの一部とも考えられる。13・14は上部に出枘がある板。13の出枘は明瞭な肩がつくられていない。器面は丁寧に削られている。14は上部に出枘が削りだされている。板を割り出した際の割面が残る。大足の部材と考えることも出来るが完存していないため限定は難しい。15は非常に丁寧に面を削った薄板である。先端を尖らせてある。16は孔が２箇所ある板状木製品。上部の切り込みは曲物底板のカキゾコのそれに似ている。奈良・平安時代の製品である。上部切り込みの部分に貫通孔が２箇所ある。17はスギの柾目板材。２箇所に穿孔の痕がある。上部は内側にすぼまる形状でやや厚みを持っている。孔は0.7～0.9cmと小さく方形である。孔の位置から輪カンジキ形田下駄の足板とも考えられる。



第131図　木製品①

B　弥生時代～古墳時代初頭の木製品（第132～139図　写真図版70～78）

農具には、鍬、鍬柄、鋤柄、田下駄がある。樹種は膝柄と田下駄以外はすべてアカガシの柾目材で作られている。第132図18は曲柄。膝柄と呼ばれる鍬の柄である。サカキの幹から枝分かれした部分を使って作られている。工具の柄と異なる点は、鍬の装着部分に柄と鍬身を固定するために、後主面側に突起を作り出してあることである。19は円形の柄孔が一部残る直柄鍬の破片。後主面側には一段高い部分があるが、舟形隆起の一部と思われる。刃部の下方は欠損している。20は直柄鍬。直柄の一部も残存している。後主面側に突き出た直柄の先端部は平坦に加工されている。断面は円形を呈する。鍬身は上半の一部が残存している。右肩部分と下半部が欠損。欠損部の側面には火を受けて焦げた痕がある。後主面側は上部に張り出した舟形隆起がある。隆起は鍬身よりも3.5cmほど高い。前主面側は平坦になっている。左肩上部には長方形の小孔が一箇所ある。対称位置にも同様の孔があったものと思われる。泥除けを装着するための孔と思われるが実際に使われていたかどうか定かではない（註１）。

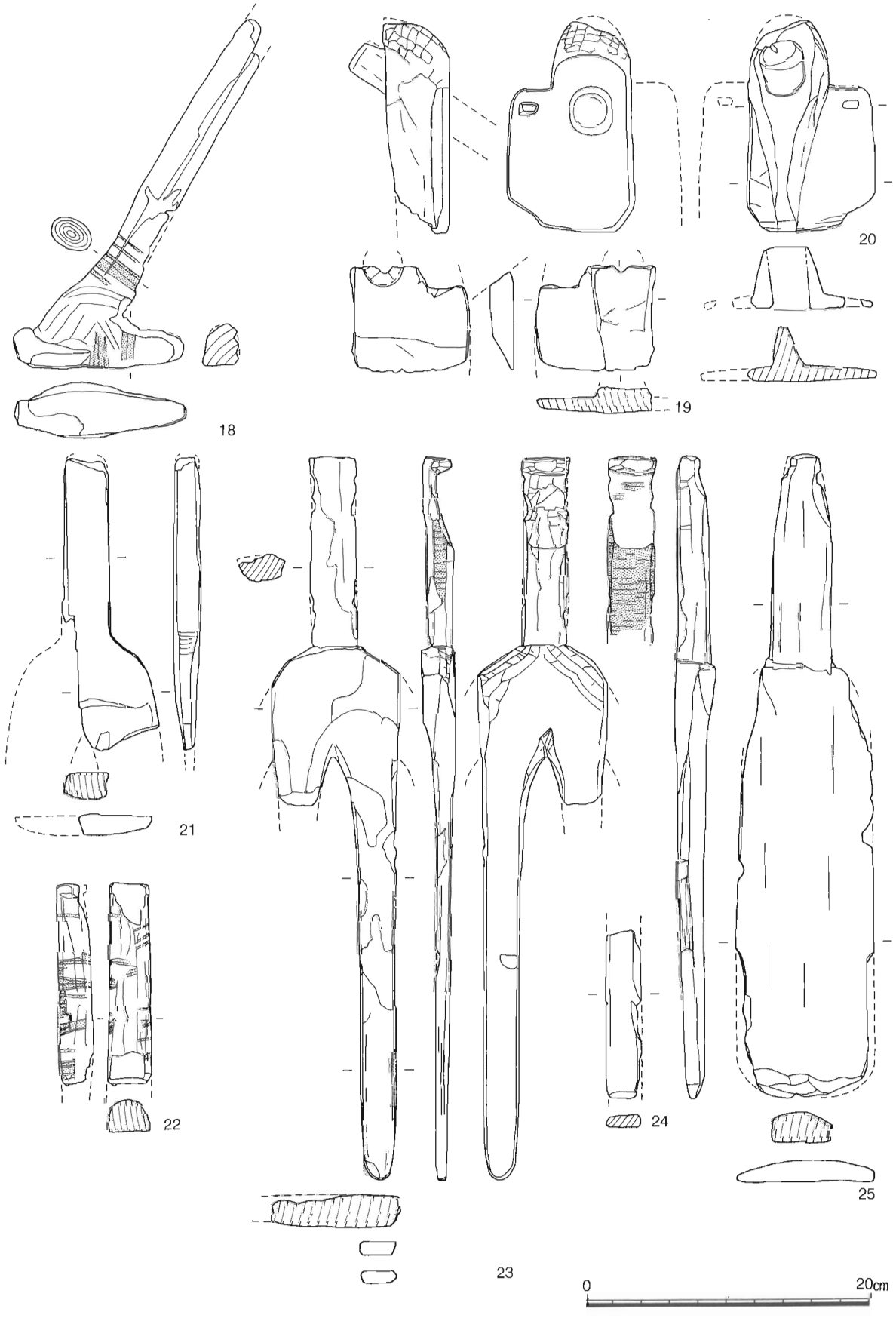
21は曲柄又鍬。鍬身に切れ込みが残存していることから二又鍬と思われる。軸部の上端は欠損している。軸部・鍬身共に前主側は平坦面となり、後主面側は丸味を持つ。軸から肩にかけては明確な稜はなく、なで肩である。22は曲柄鍬の軸部。曲柄に装着する前主面は平らに削られている。後主面側の上端部は突起状に削り出され、中央には緊縛痕が残っている。断面形はカマボコ状を呈する。23は曲柄四又鍬。軸部と刃部の一部が残存する。４本刃の又鍬であったと思われる。前主面側は軸部から刃部付根にかけて段差は無く平坦で厚みを持つが、四又に切り込まれる部分から刃の先端にかけては徐々に薄くなっている。軸部付け根は刃部との境に明瞭な肩を作り出している。軸部は前出の22と同様のもので前主側は平坦に削られ、後主面は丸味を持つ。軸部裏面は中央から上部にかけて大きく抉り込まれ、上端部に緊縛のための突起を作り出している。器面には緊縛痕が残っている。刃部は一本の刃が完全に残っている。刃の長さは約30cmあり、幅は2.5cm、厚さは1.0cm、先端部は丸味を持つ。さほど激しい使用痕は無く、磨り減りも少ない。24は又鍬の刃部と思われる破片である。上下端部が破損しているが、形態の特徴や出土した遺構・層位が同じであることからも23の四又鍬と同一個体である可能性が高い。

25は曲柄平鍬。弥生時代中期から後期にかけて東海地域で一般的に見られるいわゆる「東海系曲柄鍬」である（註２）。図は後主面側になる。軸部と刃部はほぼ完全に近い形状が残っている。軸部の作りは21～23と同様で、前主面は平坦、後主面は丸味を帯びる。軸部と刃部の付け根はわずかに段差があり、肩も作り出されていたと思われる。刃部は長さ30cmほど、身幅は最大で10cmある。刃部先端は使い込んで磨り減った状態ではない。

第133図26～28は鋤柄。いずれも逆三角形の把手を作り出してある。また柄の途中で折損しているため鋤身は残存していない。26・27は弥生時代末～古墳時代初頭の鋤柄である。26は上端部が欠損している。柄の太さは1.5cm。27は把手上部と柄の一部が残る。柄の表面には加工時の刃物痕が顕著に残っている。28は弥生時代中期の鋤柄。供伴する土器の時期から中期後半期のものと考えられる。三角形の把手を持つ鋤では県内では古い出土例となる（註３）。把手の形はほぼ正三角形を呈する。柄の軸は下方へ行くほど径が太くなる。

29は板状田下駄。形状は小判形をし、四箇所の孔をあけた横型に使う田下駄である。表面には面調整の手斧痕が顕著に残る。手斧痕は長軸に平行した方向に並ぶ。板面は中央部分にやや膨らみを持つ。孔は上部に２箇所、下部に２箇所穿たれ、穿孔位置は逆台形状になる。上部には板と足を固定するために緊縛した紐の圧痕がある。この田下駄は掘立柱建物跡の礎板に転用されていた。SH104のSP142から出土している。

30は工具の膝柄と思われる。柄の握部先端が欠損している。台部には扁平片刃石斧や柱状方刃石斧を固定するための切り込みや抉り込みが無いうえ、柄には樹皮が一部に残っている。このことからも本資



第132図　木製品②

料は斧柄の未製品と考えられる。溝状遺構（SD307）より出土した。弥生時代中期に属する。

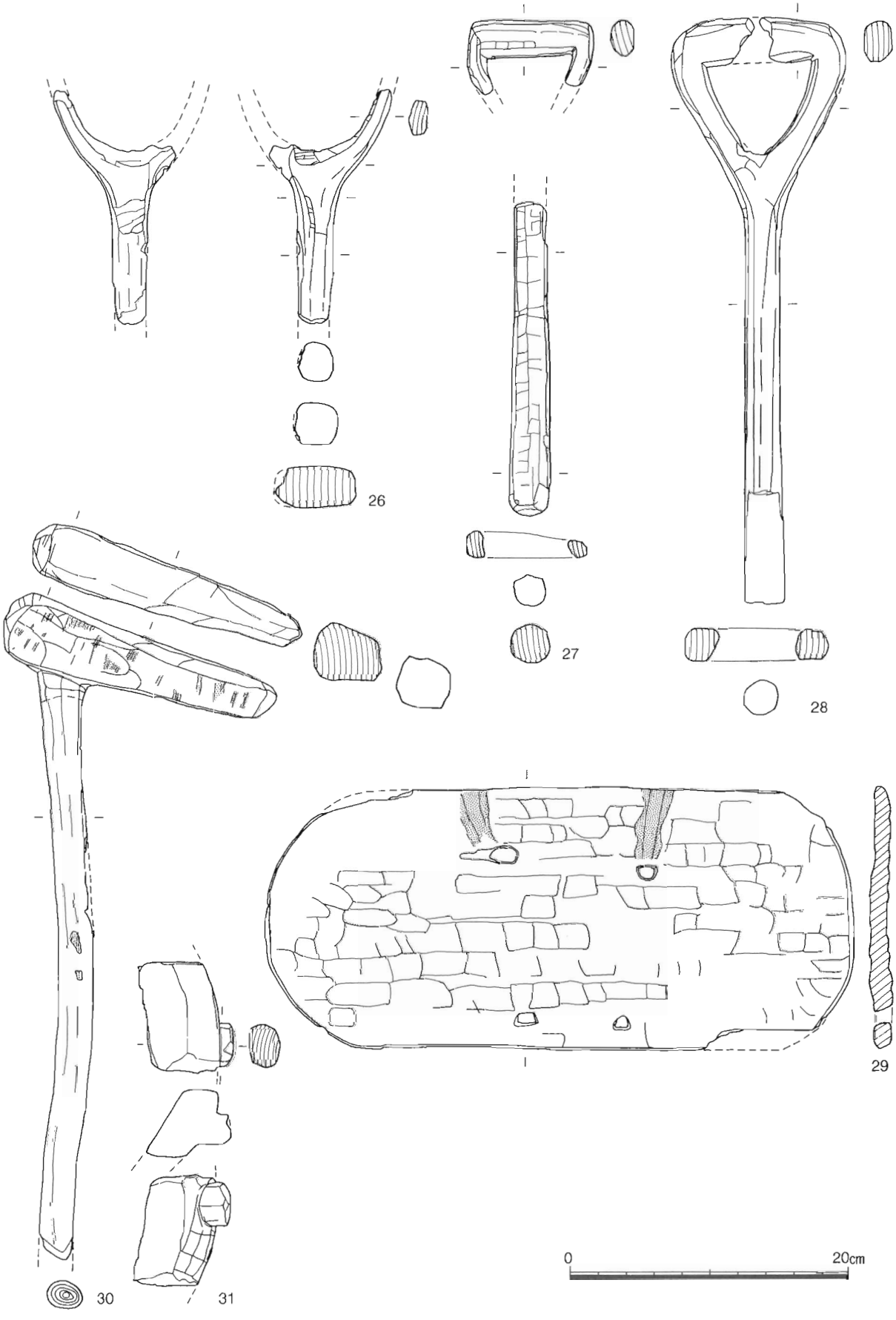
31は槽（田舟）の破片。ごく一部の破片だが、器面の厚さから見てもかなり大型の槽であった可能性が高い。2区護岸杭列（SA201）より出土した弥生時代末～古墳時代初頭の時期のものである。本資料のような断面の丸い把手を持つ槽は楕円形又は長楕円形のタイプに多く見られ、突起は外面の長軸端部に付く。この突起は本体から2.8cm突出している。

第134図32～35は槽などの容器である。いずれも楕円形であったと思われる。32は口縁部の厚さから見て大型の楕円形槽であろう。弥生時代後期に属する。内外面ともに加工痕が顕著である。内面の一部には黒い顔料又は炭化したような痕が残っている。33も槽と思われる破片である。弥生時代中期後半期と考えられる。外面には１cm幅の手斧痕がある。34は楕円形槽。ほぼ完形に近い形状である。内面底部は円形を呈し細かい線状の刃物痕が塗られたような痕が残っている。外面底部は楕円形で平底、器面には手斧の調整痕が口縁方向へ向かって規則的に並ぶ。35も楕円形槽の一部であるか、またはやや片寄った形状から片口の一部とも考えられる。内外面全体に黒い顔料が残る。外面には非常に細かい手斧痕がある。

36～40は建築部材の栓。本遺跡からは方形に作られた五本の栓が出土している。36は唯一アカガシ材で作られた製品。上部は９cmほどの頭部を持ち、軸部は一段厚みを落としている。下方の欠損部分には円形の孔の痕跡が残っている。37は下端部が欠損する。イヌマキの芯持ち材。頭部の断面形は円形、軸部は方形であったと思われる。38～40はほぼ同じような形態の特徴を持ち、完存している。いずれもスギ材でつくられる。軸部は約３cm角で下方に孔を穿ってある。38は弥生時代後期の栓である。軸部に方形孔が穿たれている。39は弥生時代中期に属する。軸部の孔はすり鉢状で円形に近い。40は弥生時代末～古墳時代初頭の栓である。方形孔は長方形を呈する。

第135図41～43は建築部材のネズミ返し。いずれも１/４に分割され礎板に転用されていたものである。形状は角を丸く削り落とした隅丸方形を呈するものであろう。41は復元長80cmを超える大型品。表・裏面とも幅４cmほどの手斧痕が木目に沿って並んでいる。中央の孔は方形であり、孔の一辺は８cm以上あったものと思われる。孔周りの隆起は無い。下端部は幅のある手斧で表裏両面から切断されている。42は方形に近いネズミ返しで孔の周囲には方形に削り残された高い隆起部分を持つ。復元長は70cmを超える。本体の表裏両面には２cm幅の手斧痕がある。上端部は表裏両面から切断された痕跡があり、最後に折り取られている。中央の方形孔は８cm以上の抜き孔であったと思われる。43もネズミ返しを切断して礎板に転用されていたものである。中央の隆起は方形で厚さ5.6cmを測る。両面ともに腐食が激しいが、幅２cmほどの手斧で面調整された痕跡が見える。

44は大型の扉板である。44—１と44—２は分割され掘立柱建物の柱を支える礎板として転用されていた。上端部に切断された痕が残っていることから１/４に分割されたものであろう。扉板の幅は78.5cm、長軸は130cmを超える長さがあったと想定される。上部左隅には５cmほどの枘孔がある。右下には長さ3.4cmの軸部が作り出されている。軸部の断面は楕円形で4.4cmほどの太さがある。軸部が短いことから扉の下方部分と思われる。44—１は正面側が礎板の上面にあたり表面は風化が激しい。44—１には約19×17cmの方形柱があたっていた痕跡がある。この上に折り重なるように61があった。出土状況を見ると、44—１の方形柱があたっていた痕跡の横に61があったことから、61は方形柱を押さえるために添えられていたとも考えられる。裏面は手斧による面調整の痕が顕著である。44—２は正面側が柱穴の底面に接していたため、手斧痕が鮮明に残っている。工具幅は４cmほどで、長軸方向に沿って手斧がけしている。裏面側中央に方形柱のあたった痕跡がある（同図模式図参照）。この上に重なるように55が出土した。しかし55にも方形柱があたっていた痕跡がある。SP140やSP148のあるSH103は礎板が複数折り重なり、柱穴も複雑に切りあっていることから、建て替えがあった可能性も考えられる。



第133図　木製品③

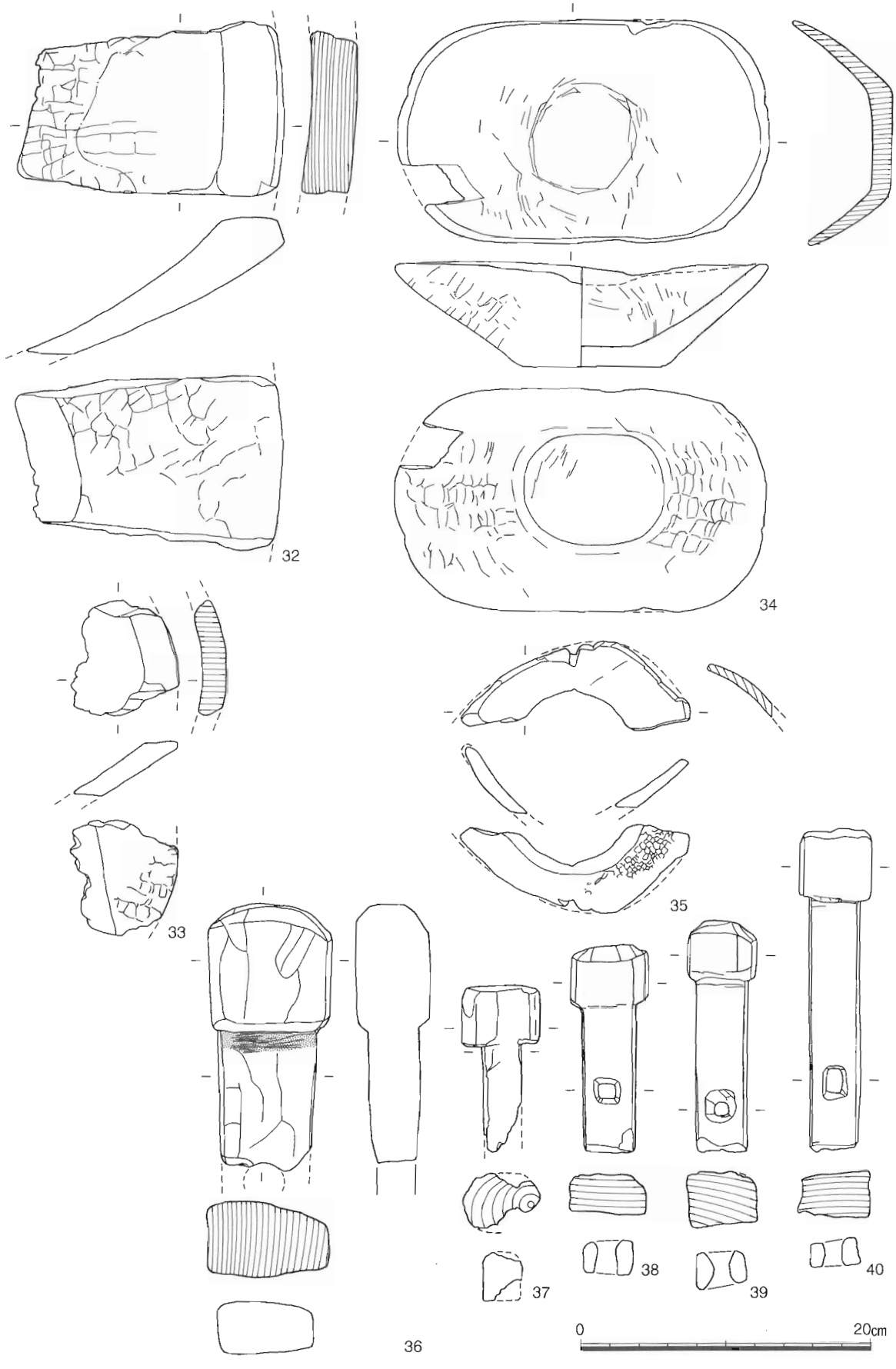
45・46は梯子。45は水田畦畔（SK219）から出土した。スギの板目材から階段部を削りだしてある。階段部は２段残っており、段は板面に対しほぼ直角に削りだされている。幅は23.2cm、最大8.2cmの厚みを持つ。46は掘立柱建物の礎板に転用されていた。スギの柾目板で丁寧に整形されている。表面には整形時の手斧痕が明瞭に残っている。左右側面は一部面調整されているが、分割時の割面が残っている部分もある。上下端部は人為的に切断されている。上部は段のすぐ上で切られている。表裏から刃物を入れているため切り口の断面はＶ字状になっている。

第136図47は弥生時代後期の水田畦畔（SK306）から出土した。杭列の横板で大型の板材である。長さは157.8cm以上、幅は16.4cmのスギの板目材である。左端を斜めに手斧がけで削ってあることから壁板材であったと考えられる。右側面の裏側にも同様の手斧がけがあることから、壁板同士を合わせる際に面落としした部分をつなぎ、更に枘穴で緊縛して固定したものと思われる。48は長さ137cmの棒状製品。17層より出土した。スギの板目材で、加工されているものの用途は特定できない。弥生時代後期から古墳時代初頭に属する。49は３ｍを超える棒状製品。角材に加工されている。護岸杭列（SA201）から出土した。本来の用途は建築材であったと思われるが廃材となった後に護岸杭の横木として転用したものであろう。50は弥生時代後期の水田畦畔（SK305）杭列の横板に転用されていたスギの板目材。右側面近くに長方形の枘穴がある。47と同様、壁板材であった可能性がある。

51・52は杭。51は水田畦畔（SK220）から出土した。左側面は加工面、右側面は割り面である。表裏に面調整は見られない。先端部を尖らせてあるが、杭に転用した時の加工痕よりも古い刃物痕があるため、建築部材からの転用とも考えられる。52は溝跡（SD502）より出土した。表裏、左側面とも面調整されている板目材である。割面が残る右側が転用時の分割面であろう。下端部の一部に古い加工痕があることから建築部材からの転用の可能性がある。

第136・137図53～70は竪穴住居跡または掘立柱建物の柱穴底から出土した礎板である。ほとんどが建築廃材を礎板として再利用したものであろう。建築廃材を切断して使うため接合するものが幾つか確認された。また明らかに同一材から切り出されたと判断できるものもあった。53―１・２は掘立柱建物跡SH102のSP136とSP153から出土した礎板で接合する。現存幅21.8cm、厚さ4.7cmの板材で長さは１ｍ以上あったものと思われる。表裏両面とも手斧による面調整がされているが、木表面側は中央の膨らんだ部分のみ手斧がけされている。枘孔のある側がやや薄くなり、裏面は面調整されている。53―１には右隅に方形の枘穴が一箇所ある。左側面は欠損面で上下端部は刃物で切断されていることから扉板など大型で厚みのある建築材から分割された可能性がある。54―１・２に接合点はないが同一材から分割されたものである。SH104の柱穴SP142・147から出土した。54―１は上部に５×６cmの切り欠きがある。54―２の下端部は表裏面からの切断痕のほかに左右側面から切り込まれた痕がある。面調整した痕は無く割り剥がした面がそのまま残っている。55はSP140から出土した礎板である。中央部分で切断し柱穴に二枚重ね合わせてあった状態で出土した。55―１は腐食が激しく面調整痕は見えない。55―２には中央に15cmほどの方形柱があたっていた痕跡がある。土圧か又は柱圧のためか中央で縦方向に折損している。折損方向は木目とは逆方向であることから、かなりの加重がかかっていたものと思われる。転用前は幅33.9cm、厚さ5.0cmの面調整された整形板である。下端部も切断痕がある。

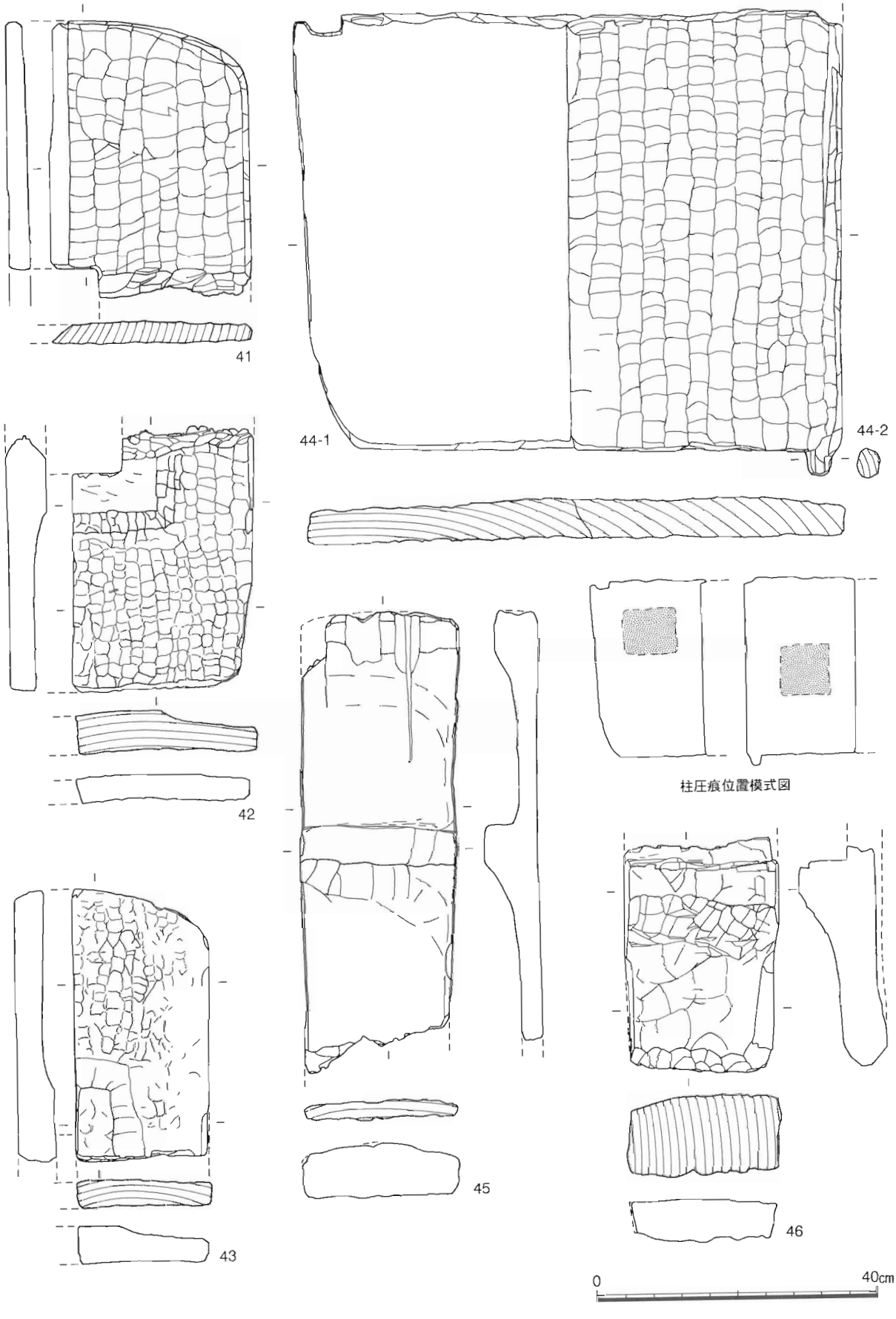
第137図56は板上部に５cmほどの方形孔と右側面に長方形の大きな切込みがある。切込みの左側には帯状の圧痕がある。57は竪穴住居跡（SB501）の柱穴礎板である。やや薄いスギの板目材。顕著な切断痕はないが表面に線状の刃物跡が無数に見える。中央で縦方向に折れている。同じ住居跡柱穴の礎板には69と100がある。58は３点が接合する。SP305からまとまって出土したもので、板の真ん中で折れている59もSP155から３点が出土した。器面には手斧による面調整がなされている。やはり木目とは逆方向に折れていることから柱の加重がかかっていたと考えられる。SP301から出土した60は右側中央に高い隆起部分



第134図　木製品④

があることからネズミ返しを礎板に転用したと思われる。表裏全面に手斧痕が残る。しかし隆起部分に枘孔の痕跡が見られない。また外形も整形途中のように思われる。隆起部分には節があり加工途中で破損したため礎板に再利用したものとも考えられる。61はSH103の柱穴SP148の礎板である。腐食欠損が激しく、手斧痕は見えない。左側面近くに枘孔がある。また右側面には丸い切り欠きがある。62と67はともにSH101の礎板である。同じSH101には46の梯子を転用した礎板もある。どちらも面調整の手斧痕は無く、割面のままの板を礎板として使っている。62は薄い板目の整形板。縦方向に折れている。63は右隅に幅１cm程の２箇所の孔がある。板中央には幅１cmほどの２本の線状圧痕がある。下方の枘孔から下の部分は全体に薄く削られている。64はSH102の柱穴礎板である。左上部に長方形の孔がある。板の表面は丁寧な面調整がされ、上下端部には切断された痕跡があることから建築廃材の転用と思われる。同じSH102の礎板には53―１・２がある。65は縦方向に折れているが接合する。正面は手斧で整形され裏面は木表の丸みを持つ。木表側は手斧で面調整されている。上下端部には切断された痕がある。66・68は竪穴状遺構（SB110）の柱穴から出土した礎板である。接合点はないが同じような断面形であることから同一材から割り出されたものである可能性が高い。66は下端部に刃物で切断した痕がある。板中央には13.1×9.9cmの方形柱のあたった圧痕がある。68も板中央に方形柱があたっている。圧痕から計測すると方形柱の一辺は約10cmあったものと思われる。中央で縦方向に割れている。67は前述したSH101の柱穴礎板である。板面の丁寧な整形はなく割面部分を多く残す。板の真ん中で縦割れしている。下端部は鋭利な刃物で切断されている。69は57・100とともに竪穴住居跡（SB501）の柱穴より出土した。所どころ焦げた痕が残り炭化している。70も礎板として利用されていた。長さ20cmほどの薄い板で表裏面は割面のままになっている。下端部は矢板状に先端を尖らせてある。100は楕円形の穿孔がある板である。建築廃材を礎板に転用されていた。101は柱穴SP308から出土した。左側面は角を面落としている。上下端部は刃物で切断されている。47のような壁板として使われていた板を適度な長さに切断して礎板に再利用したと考えられる。

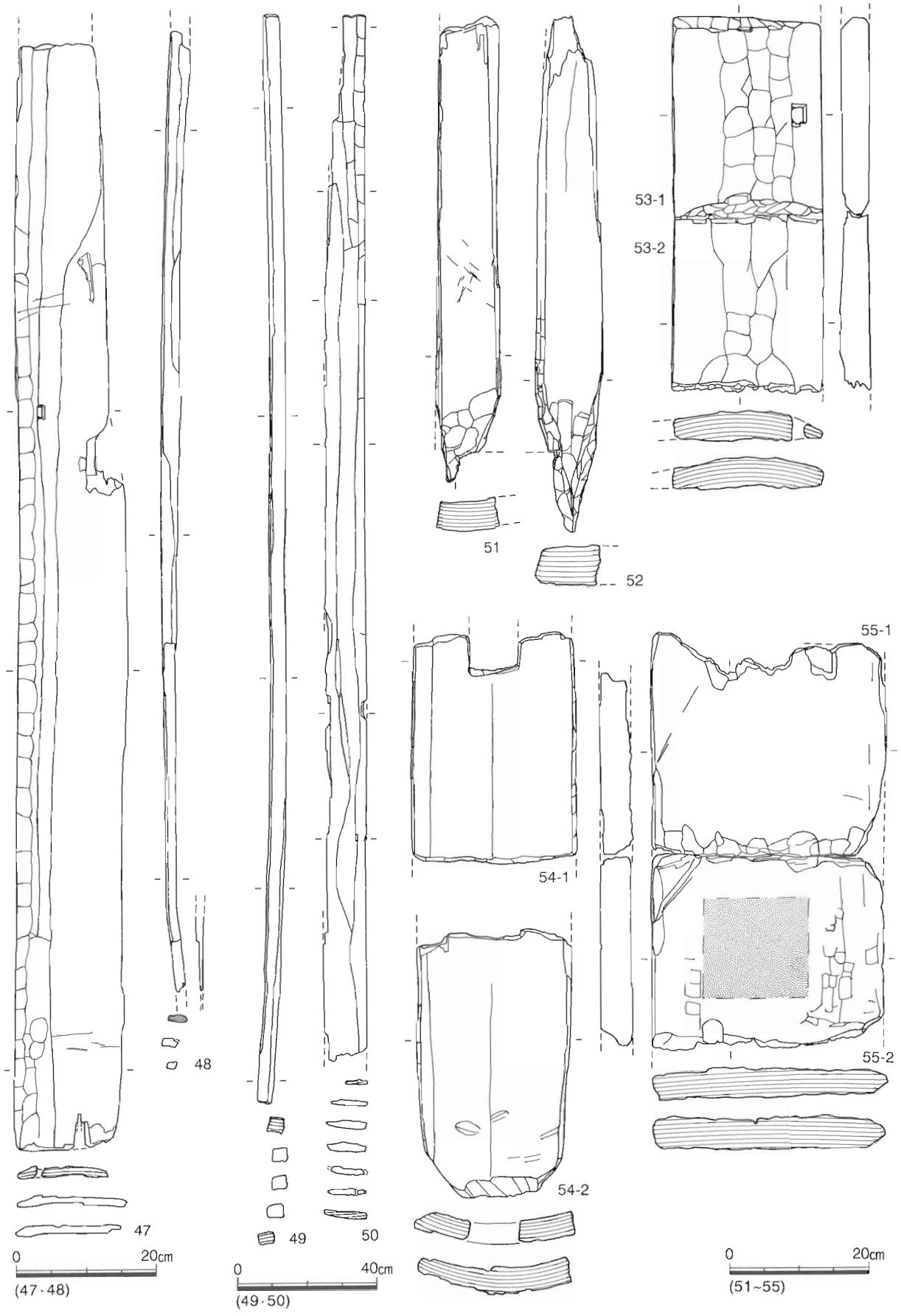
第138・139図の71～99・102は用途が特定できないが何らかの加工を施してある木製品である。71はもともと棒状の木製品であったと思われる。芯持ち材ではなく割材から棒状に加工してある製品である。表面は丸味を持つ。上端部は丸く仕上げてあるため端部であろう。裏面側は剥離欠損しているため刀子の鞘などである可能性は低い。72は剣形状を呈する木製品。幅1.7cmほどの短い軸部を持ち、上半部は剣のように先端を尖らせてある。両面とも平坦面で稜線は無い。また左右は面になっており刃物を模したようには見えない。そのため剣形のようなものである可能性は低い。73は完存品でスギの板目材を加工した製品。上下端部は角を落とし丸く仕上げてある。正面には上端部から5.8cmの位置に段差を作り出してある。そのすぐ下に何かを縛り付けたような圧痕がある。裏面には下から7.5cm上を浅く抉ってある。74は一部欠損するがほぼ完形に近い。細長い板状で左右側面の角は面取りしてある。上端部はやや薄く削られている。正面側は割面。75も同様の形状を持つ。板状を呈するが下端部は丸く削り薄くなっている。76は棒状木製品。上端部は丸く削られている。サカキの芯持ち材。この時期のサカキ材は農具や工具の膝柄に使われることが多く、本遺跡から出土した膝柄も同様の特徴を持つ。また残存長などからも鍬など農具の曲柄の可能性がある。77は細長い棒状木製品。割材から丁寧に削りだし断面形は算盤玉状を呈する。上部はやや薄く中央部は厚みを持つ。中央部の断面形は半円形状をしている。下方部分は欠損しているため全体形は復元できない。78は有頭棒状木製品。ほぼ完形品である。頭部は不正形な円で厚みを持つ。下方の棒状部分も不正形で未完成品のような感がある。下方に行くに従って細くなり、端部は摩滅している。79は棒状木製品。下端部は破損している。断面形の丸い棒状製品だが、上部に半円形の突起部を作り出してある。この部分は端へ行くほど薄く加工されている。棒状部分には表面一帯に蔓状のものを巻いたと思われる緊縛痕がある。特に中央部分の緊縛痕は深く食い込んでいる。材はアカ



第135図　木製品⑤

ガシの柾目材であることから農具の可能性もあるが、その形状に該当する類似例が無く用途が不明である。80は薄い板状の木製品。上端部は三角形状に尖っている。先端両面に僅かであるが朱色の顔料が残っている。下方には0.5cmほどの穿孔が2箇所ある。81は方形断面の棒状木製品。上端部は欠損している。下端部は面取りされ丸みのある仕上げになっている。四面全体に緊縛痕のような横方向の線状圧痕が見られる。散孔材という樹種からも、農耕具か柄などの可能性がある。82は６～７cmの環状を呈するが、外周は全て欠損している。正面は中央に膨らみを持ち、裏面は平坦に加工されている。中央には2.5cmほどの方形孔があり、さらに左隅には径0.2cmほどの小孔がある。両面ともに朱色の顔料が残っている。時期は弥生時代後～古墳時代初頭に属する。非常に丁寧に作られた製品であることから、高坏などの容器の可能性がある。

第139図83は両面とも手斧で面調整された整形板材である。手斧幅は３～４cmで、はつり痕は長軸に並行した列をなす。全面に火を受けて炭化している。上部と左側面が欠損している。上部左側の手斧痕が乱れ、やや隆起していることからもネズミ返しであった可能性が高い。84もネズミ返しであったと思われる。上部は側面を削り落とし丸くしてある。表裏両面に幅の広い手斧痕が長軸方向に沿って並んでいる。右側面と下端部が欠損している。85はほぼ完形に近い整形板材である。上部に1.5cmほどの方形孔がある。また板の中央よりやや下方に幅2.4cm、長さ７cmの圧痕がある。板の両面は幅の狭い手斧で細かく面調整されている。板の最大幅は孔のある上部にあり、下方へ行くに従って徐々に幅が狭くなる。86は右側面に三角形に抉られた加工のある板材。抉りの一部が焼け焦げている。上部は欠損しているため元の長さは不明である。下部は端部を丸く仕上げてある。両面には面調整の手斧痕が部分的に残っている。87は上部に出枘のある板材。中央部分はかなり加圧を受けたためかへこんで収縮している。88は上端部を半円形に抉り込まれた板材である。全体の形状は上部で最大８cm幅ほどあるが下方に行くに従い細くなる。特にていねいに整形した痕はなく、用途も特定出来ない。護岸杭列（SA201）付近より出土した。89はかなり腐食が激しい。2箇所の方形孔を持つ板材である。腐食のため整形時の痕跡は見えない。90・91は１区の試掘調査で出土した木製品である。１区は竪穴住居跡や掘立柱建物跡が検出されている調査区であることから礎板に使われていたとも考えられる。面には全体に手斧痕がある。元々は梯子であろうか。段の部分は二次的に手斧で削り取られたものと思われる。下端部は両面から切断されている。接合しないが両者とも同じような特徴を持つことから同一個体であった可能性もある。92―１・２は有孔板材。別個体になっていたものが接合した。上部の加工は分割後、二次的に矢板状に削られたものである。孔は円形で２箇所ある。正面には細かい手斧で面調整した痕があり、かなり削りこまれて薄い板になっている。93も非常に薄手につくられた板材。左側に円形の小孔が２箇所ある。下端部は弧状に浅く抉られている。94は厚みのある板材である。完形に近い製品で、板としても丁寧に加工された柾目材だが、穿孔はかなり粗雑で下端部も荒く切断されている。95も厚みのある板材。表裏は木目に沿って分割した割面のままで、上部に長方形の孔がある。96も孔のある板材。1.2～1.4cmほどの方形孔が２箇所ある。両面とも器面には細かい手斧痕が見える。97は整形された板材。表裏側面とも手斧で加工してある。上端部は切断されているが下端部は整形時の面を残していることから整形板の端材であろう。下方の中央に圧痕が見える。98は板材。正面には細かい傷跡が無数にある。右側面は欠損している。右側面中央には切り欠き部分があるが、方形の孔であった可能性もある。上下端部は手斧で切り落とされた痕が残る。99は有孔板材。弥生時代後期の水田畦畔（SK305）より出土した。全体に腐食欠損が激しい。建築廃材を畦の補強材として使っている。102も板状に整形してあったものと思われるが表面の風化が著しく加工痕が見られない。


53-1
53-2
51
52
48
47
49
50
54-1
54-2
55-1
55-2
0
20cm
(47・48)
0
40cm
(49・50)
0
20cm
(51~55)

第136図　木製品⑥

考　察

以上、図版掲載した木製品について解説した。以降、周辺遺跡の類例資料との比較や県内の木製遺物の状況をもとに出土木製品の若干の考察を加えることとする。

まず、第131図３の奈良～平安時代の泥除けであるが、静岡平野ではこの時期の泥除けの出土例は数多くある。この形態の泥除けが最も多く出土する時期は奈良時代以降である。周辺遺跡の類例資料では静岡市岳美遺跡や池ヶ谷遺跡、上土遺跡、瀬名遺跡などの水田遺跡から出土している。本遺跡の泥除けもこの時期のものであり、形態の特徴や樹種も一致している。

一方、弥生時代の鍬に装着する泥除けは県内にはほとんど出土事例が無い。静岡県内では、泥除けを装着したと思われる孔を持つ直柄鍬は、静岡市川合遺跡や同市（旧清水市）長崎遺跡・下野遺跡で出土している。また静岡市神明原・元宮川遺跡から出土した直柄横鍬の上部左右に同じような小孔がある。しかし県内ではこれまでに弥生時代から古墳時代にかけて木製の泥除けの出土例は無い。泥除けの実物が伴わない以上、実際に泥除けを装着して鍬を使用していたかどうかの推察は不可能である。検討については今後の発掘調査から増加する資料を待つ必要がある。

第132図21・23に類似する多又鍬は弥生時代中期後半期から古墳時代中期を通じて出土例がある。曲柄を装着する刃の長い又鍬は弥生時代後期から古墳時代初頭に増加する。県内のこの時期の様相は、農耕具の数が増え種類が豊富に揃い、曲柄又鍬と平鍬・直柄鍬が共存する時期でもある。本遺跡から出土した鍬類はこの時期のものであり、こうした県内の傾向にほぼ合致すると言える。

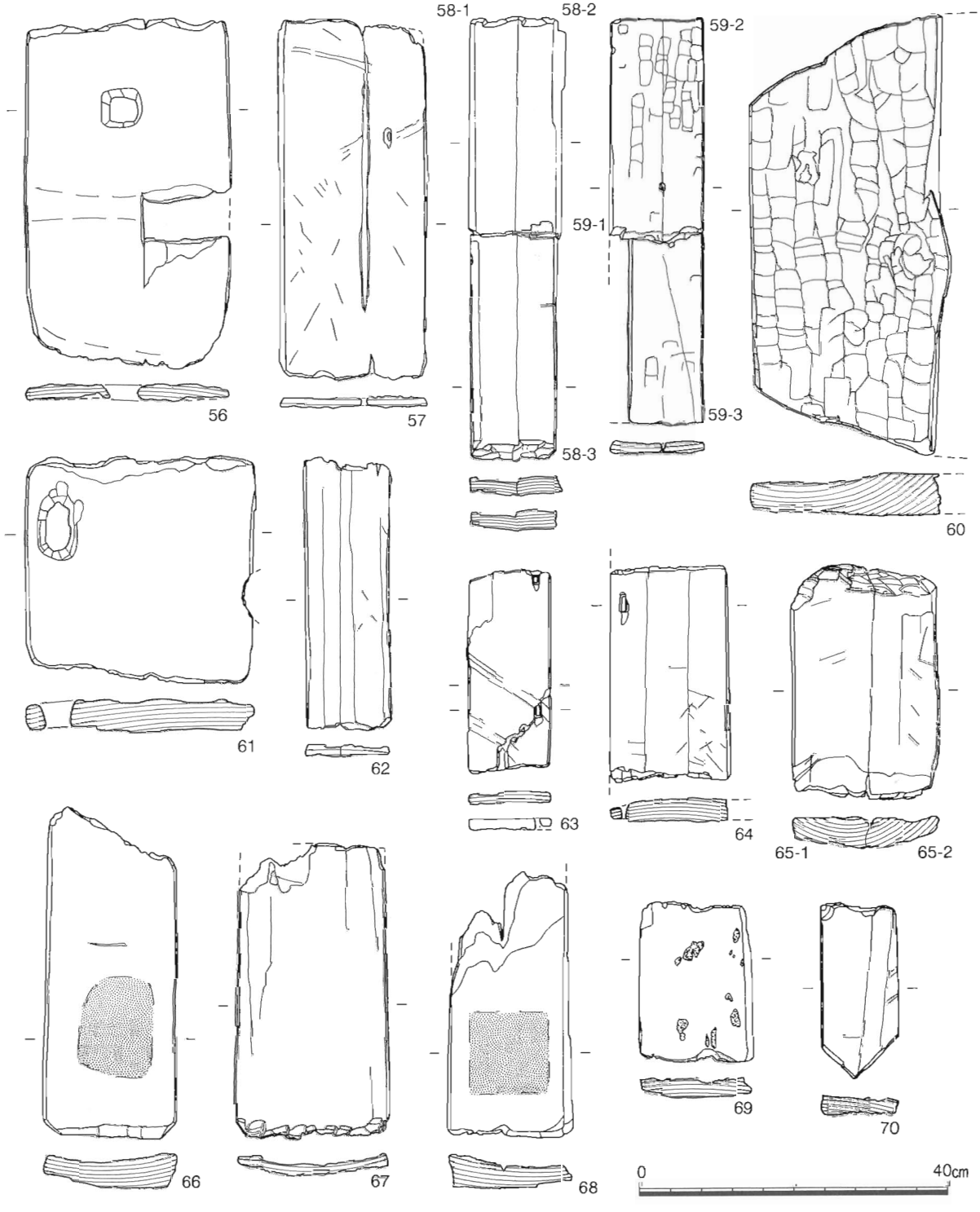
鋤については弥生時代から一木鋤や組み合わせ鋤の出土例がある。組み合わせ鋤は弥生時代中期後半期に一木鋤と混在するが、その後出土例が無くなることから、後期以降は一木鋤のみになっていく傾向が見られる（註３）。以降、三角形の把手を持つ一木鋤は奈良・平安時代まで継続する。本遺跡と同形態の把手を持つ鋤は弥生時代末～古墳時代初頭にかけての時期以降に多く見られる。周辺では静岡市川合遺跡や瀬名遺跡、同市（旧清水市）下野遺跡で出土している。

鍬・鋤の身や直柄はアカガシ、曲柄はサカキという樹種選択は静岡県内では一般的な傾向としてみられる。静岡県内でも西部地区の遺跡ではアカガシの他にコナラやクヌギが使われている（註４）が、静清平野ではアカガシ以外の材は見られない。本遺跡の農具も全く同様であった。

本遺跡から出土した田下駄は弥生時代後期から古墳時代初頭にかけて静清平野では多く見られるものである。特に静清バイパスの建設に伴う発掘調査以降、水田遺跡の調査が盛んに行われ、関連資料は急激に増加した。その結果、田下駄の時期変遷が明らかになってきた。静岡県内では弥生時代中期後半から盛行した四つ孔の板状田下駄に代わり、弥生時代後期後葉頃より輪カンジキ型田下駄が出現してくるが、広く普及するのは古墳時代中期になってからのことである。過去の瀬名川遺跡調査（1999）でも弥生時代後期の水田遺構で板状田下駄が出土している。輪カンジキ型田下駄の足板と思われる資料は第131図17があるが、時期は古墳時代以降である。このことからも本遺跡の資料は静清平野の変遷傾向と一致するところである。

容器は小型の槽と大型の槽が混在する。形状は楕円形のみで長方形の槽は無い。静清平野で弥生中期から古墳時代初頭に見られるものと変わらない。容器の樹種は大型の槽はスギ、小型の槽についてはサクラ属とアカガシを使っている。県内の類例資料も大型の槽にはスギが使われる。県内の小型の槽についてはケヤキ材が多く見られるのだが、サクラ属やアカガシの類似例は少ない。

瀬名川遺跡の木製品のなかで建築材の占める割合は約半数と非常に高い。その要因としては、建築廃材が水田の杭列畦畔に埋め込まれていたことにある。第136図47の壁板材は平成９・10年度の調査（『瀬名川遺跡』1999）でもⅡ層水田（弥生時代後期）から同様の壁板が見つかっている。これも水田畦畔の横木に転用されていた。また今回の調査でも特に多く見られたのは建築廃材を掘立柱建物や竪穴住居跡


58-1
58-2
59-2
59-1
59-3
58-3
56
57
60
61
62
63
64
65-1
65-2
66
67
68
69
70
0
40cm

第137図　木製品⑦

の礎板に転用していることであった。つまり出土した建築材は、そのほとんどが使用状態で見つかることは無く、廃材を杭列畦畔に転用、又は礎板として再利用した状態で見つかっている。今回の建築廃材の種類と出土数から見ると、弥生時代後期～末にかけて集落内に掘立柱建物が複数棟存在していたことが推察される。しかも礎板に転用されていた扉板やネズミ返しの復元した大きさから見ても、かなり大型であったことが考えられるのである。

この礎板に転用された建築材は、もうひとつの手がかりを残している。柱穴から出土した礎板の面には柱の痕跡がある。この圧痕は方形であることから、当時の竪穴住居や掘立柱建物は方形柱であったことがわかる。更にこの方形柱の一辺は10～15cmある。このことからも弥生時代末～古墳時代初頭の竪穴住居・掘立柱建物は大木を分割し製材された方形柱であったことが明らかとなった。しかし方形柱自体は発見されていない現状がある。転用・再利用されている廃材は整形板だけであり、柱が転用されていないことには疑問が残る。

建築材の樹種は枘材として使われたアカガシ・イヌマキ材の栓を除いて全てスギ材である。静清平野で出土する建築材の約90%以上がスギ材というこれまでの傾向と合致する。礎板はスギの板目材が多く使われている。面調整の手斧幅は２～３cm前後のものと４cm幅のものがある。静清平野では弥生時代後期末～古墳時代初頭には工具は既に鉄器化しており、容易に大木を切り倒すことが可能であったであろう。さらに工具の鉄器化は材の分割や整形を容易にし、大型の整形板をとることが出来るようになる。こうした利器を使って作られた建築材から、当時集落の周辺部にはスギの大木が豊富に存在していたことが想定できる（註５）。

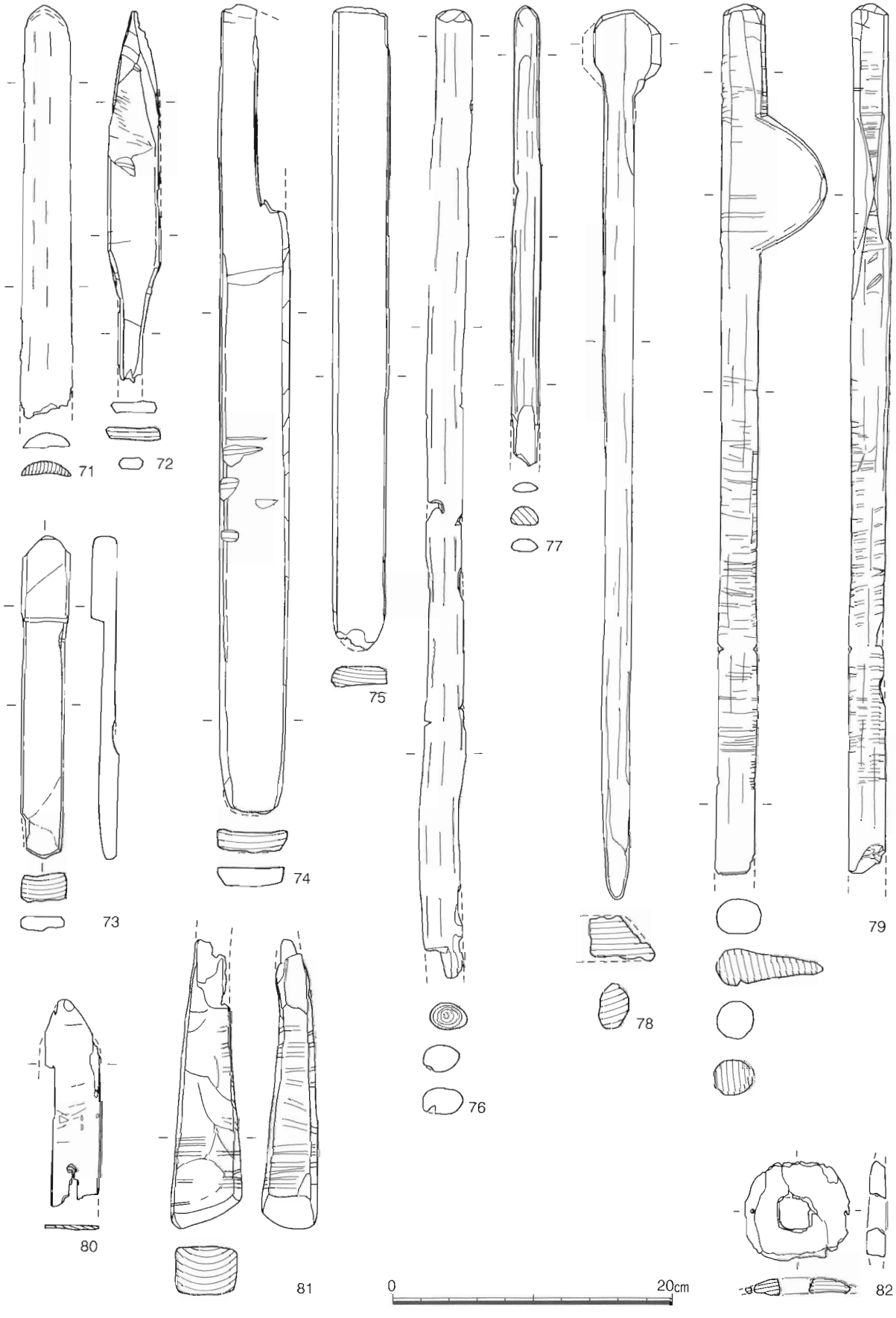
木製品の器種構成については、農具・工具・容器・建築材であり、ごく一般的な集落から出土する生活具が中心であると言える。この遺跡では祭祀具や遊戯具、武器、運搬具は見られない。平成９・10年度の調査（『瀬名川遺跡』1999）でも集落域の時期は若干遡るものの、木製品の器種構成はよく似ている。

本遺跡のもうひとつの特徴として、未製品資料を持たないことが挙げられる。今回の調査箇所では弥生時代中期後半～後期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡等が検出され、集落域である結果が得られた（註６）。工具柄（第133図30）だけは台部に石斧を装着する切り込みが見られないため未製品の可能性があるものの、出土した木製の農耕具や容器のなかには未完成品が見られなかった。平成９・10年度の調査（『瀬名川遺跡』1999）でも未製品と思われる木製品は見つかっていない。静清平野では弥生時代中期後半期に盛んに磨製石斧が作られ、それに伴い木工具が大量生産されている（註７）。瀬名川遺跡では扁平片刃石斧などの磨製石斧とその未製品が出土しており、集落のなかで石斧生産が行われていたことがわかっている。木を加工する斧を製作しているにもかかわらず、集落内で農耕具や容器など製作された形跡がないのは何故であろうか。時期が下り弥生時代後期末～古墳時代初頭には鉄製工具を使うようになってくる。この時期では建築材の再利用は盛んに行われ、大型の扉板や梯子などを切断して礎板に転用している。しかし集落内で木工具を製作した形跡は見られなかった。限られた調査範囲での結果であることから結論を急ぐべきではないが、木工具の生産は集落単位で製作されたものではなく特定の遺跡で作られていた可能性も考えられる。

以上、出土した木製品についての考察を述べてきた。調査は集落域のほんの一部であり、全体を把握するまでには到っていないが、発掘調査の積み重ねによって遺跡の性格と集落の広がりが徐々に明らかとなってきた。

註

1　静岡県内ではこうした泥除けを装着したと思われる孔を持つ鍬は、静岡市川合遺跡や神明原・元宮川遺跡、同市（旧清水市）長崎遺跡・下野遺跡などで出土している。



第138図　木製品⑧

2　樋上　昇「３～５世紀の地域間交流」『日本考古学』第10号　日本考古学協会　2000.10

3　望月氏（2004）の論考の中で、静岡県出土の木製品は器種ごとに年代と推移を整理している。詳細はこちらを参照されたい。

4　静岡県浜松市入野の角江遺跡（弥生時代中期～後期）では、鍬・鋤はアカガシのほかにクヌギ・コナラなどの樹種も多く使われている。

5　瀬名川遺跡で発見された集落に最も近い丘陵は瀬名丘陵である。

6　南瀬名及び瀬名川地区は近年急速に市街地化が進んだ。他の遺跡と同様に瀬名川遺跡も調査の機会は無く、集落域の広がりは未だ掴めてはいない。しかし奇しくも県道の整備に伴い発掘調査の機会を得たのである。現在、周辺は市街地となっている中で地下４～５ｍに埋没する遺跡の調査をするのは非常に難しく、また危険も伴う。その中でこの地区が弥生時代の集落であったことや数多くの遺物が発見されたことは大きな成果である。

7　静清平野ではこれまでの調査から、静岡市有東遺跡、川合遺跡、瀬名川遺跡で扁平片刃石斧や柱状片刃石斧、太型蛤刃石斧などの磨製石斧が集落内で生産されていたことが判っている。平野氏（1986）は弥生時代中期後葉の各遺跡で独自に石器生産が行われていたことを指摘している。

参考文献

清水市教育委員会　1985　『下野遺跡』

平野吾郎　1986　「東海地方における弥生時代の石器について」『静岡県埋蔵文化財調査研究所紀要Ⅰ』　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1989　『大谷川Ⅳ（遺物・考察編）本文編』

奈良国立文化財研究所　1993　『木器集成図録　近畿原始篇（解説）』

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1991　『長崎遺跡Ⅰ（遺物編）本文編』

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1994　『川合遺跡　遺物編３（木製品図版編）』

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1994　『瀬名遺跡Ⅲ（遺物編Ⅰ）図版編』

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1994　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立10周年記念シンポジウム、第４回東日本埋蔵文化財研究会、第２回東海考古学フォーラム　『古代における農具の変遷―稲作技術史を農具から見る―』

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1995　『池ヶ谷遺跡Ⅲ（遺物編）』

埋蔵文化財研究会・第39回埋蔵文化財研究会実行委員会　1996　『古代の木製食器―弥生期から平安期にかけての木製食器―』

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1996　『池ヶ谷遺跡Ⅳ（第Ⅱ期調査）』

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1996　『岳美遺跡Ⅱ（遺物編）』

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1996　『角江遺跡Ⅱ（遺物編）』

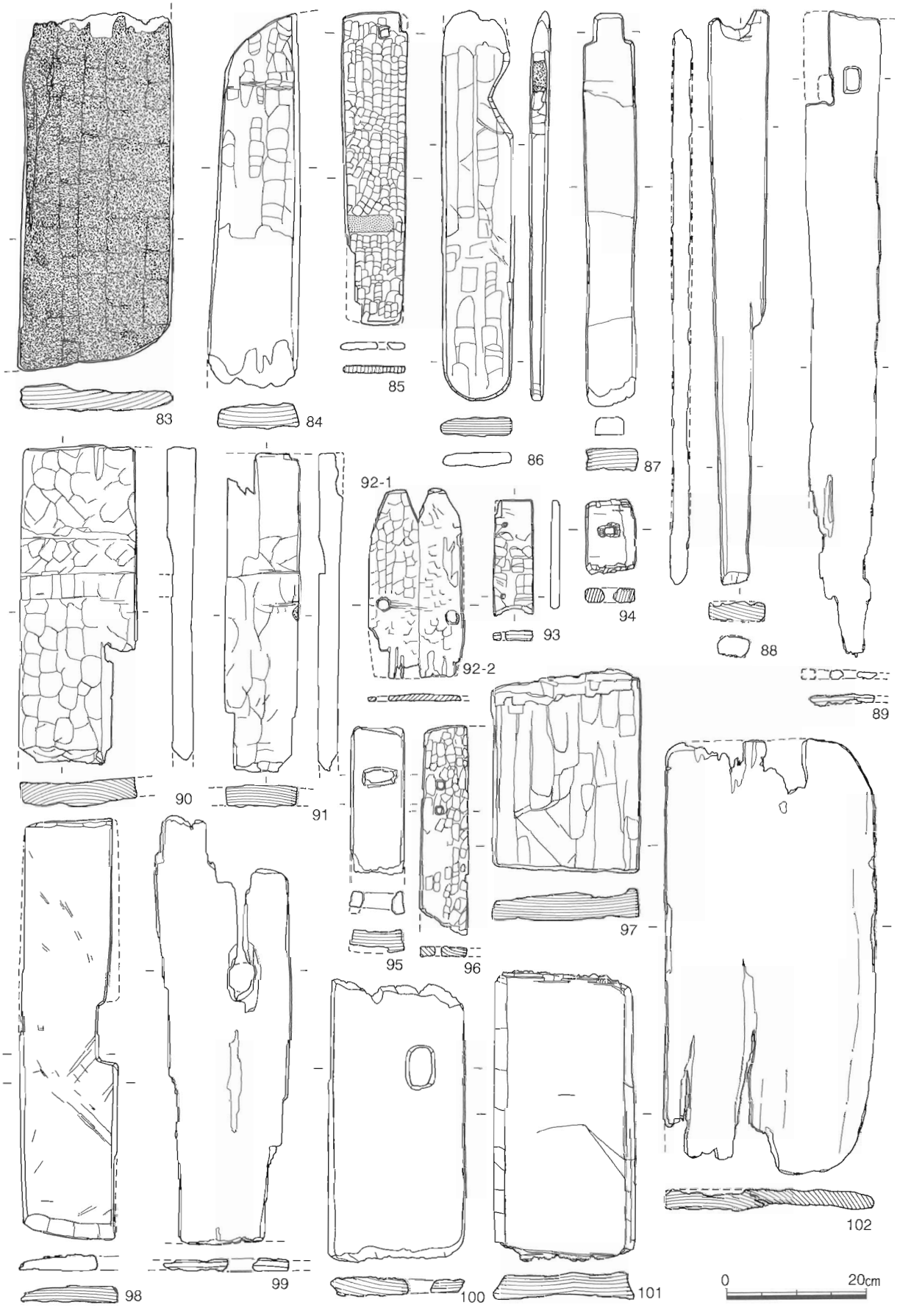
財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1998　『静清バイパス総括編（集成図）』

財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所　1999　『瀬名川遺跡』

樋上　昇　2002　「曲柄鍬の伝播と流通」『考古学ジャーナル　486』

山田昌久編　2003　『考古資料大観８　弥生・古墳時代　木・繊維製品』　小学館

望月由佳子　2004　「静岡県出土の木製品の概観と課題」『財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論文集』　財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所


83
84
85
86
87
88
89
90
91
92-1
92-2
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
0
20cm

第139図　木製品⑨

第４節　金属製品・その他

本節では瀬名川遺跡から出土した金属製品・玉類・獣骨等を報告する。獣骨については独立行政法人奈良文化財研究所の松井章氏に鑑定して頂いた。その鑑定結果については第７表に示した。この節では遺物の種類毎に事実記載を行う。

金属製品（第140図　写真図版79）

本遺跡から出土した金属製品は５点を数え、全て銅製品である。５点のうち４点は弥生時代後期～古墳時代前期の範疇に入る資料と推定される。

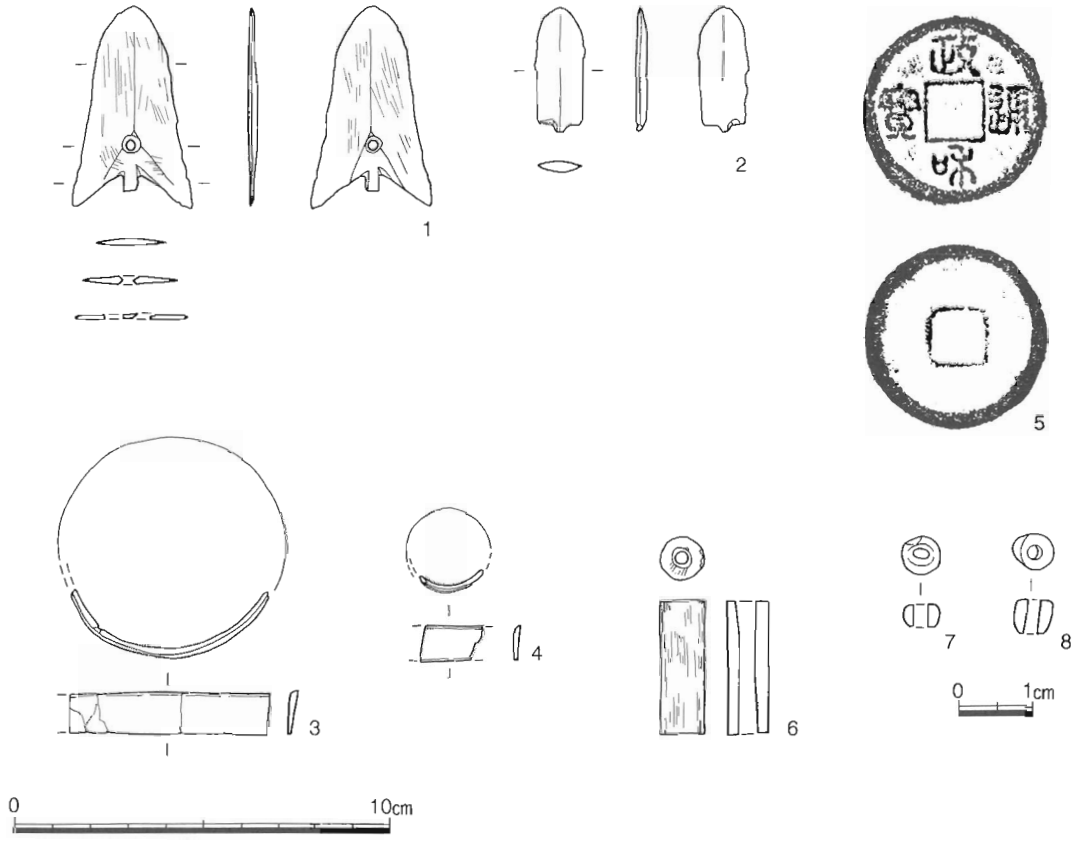
１は銅鏃である。２区第４面B14グリットから出土した。計測値は鏃身長5.4cm、鏃身幅3.2cm、厚さ0.29cm、重さ12.9ｇをはかる。色調は暗褐～黒褐色を呈する。全体的に遺存状態が良好で、表裏両面に擦痕が明瞭に観察され、鋳造後に研磨されたことは明瞭である。そのため鏑も明瞭に研ぎ出され、また縁辺も鋭く研ぎ出されている。両縁辺部でも先端部寄りにふくらが観察され、ふくらから直線的に延び逆刺に至るので、平面的に五角形鏃に近い。逆刺先端も入念に研がれている。茎部先端も切断後に研いだ可能性がある。この銅鏃の特徴として穿孔されていることにある。鏃身部でも茎寄りの位置に両面より穿孔されている。孔は１つで「単孔鏃」と呼ばれる種類である。鏃身の穿孔部から茎部にかけては面的に研いだ痕跡があり、矢柄との装着を意識した行為の可能性がある。静岡市内域において他にこのような銅鏃の出土例は未だに知られていない。

２は銅鏃である。１区第３面C4グリットから出土した。計測値は全長3.34cmで鏃身長3.15cm、鏃身幅1.31cm、厚さ0.3cm、重さ5.5ｇをはかる。色調は灰黄褐～黒褐色を呈するものの、調査時に付いた僅かな擦痕からは銅色が観察される。逆刺・鏑は明瞭ではない。平面形は片側縁辺部にふくらが見られ、「柳葉」形に近い。断面形は鏑が明瞭ではないため、凸レンズ状である。表面には磨いた痕跡は明瞭に観察できないものの、逆刺縁辺は薄く仕上げられている。矢柄との装着に由来するものかは判然としない。茎部は短い。

３は銅釧である。１区第５面上層～第５面B5グリットの21層から出土した。計測値は幅1.11cm、厚さ0.2cm、重さ4.2ｇをはかる。本来は円形を呈していたと思われ、全体の１/３が残存していると思われる。推定径は5.95cmである。色調は灰オリーブ～黒褐色を呈する。調査時に付いた僅かな擦痕からは銅色が観察される。器面には気泡が多く観察されるため、鋳造品であるのは明らかである。断面形は楔形で、片側の幅の広い平坦面を有する端部側に大きめの気泡が多く見られるのは、鋳造時の鋳型の上下関係を示している。幅の広い平坦面には内側に向かって突出があり、鋳造時にできる「バリ」である可能性がある。

４は小銅環である。１区第５面B4グリットSF120の覆土上層から出土した。計測値は幅0.99cm、厚さ0.11cm、重さ1.3ｇをはかる。本来は円形を呈していたと思われ、全体の１/３が残存していると思われる。推定径は2.0cmである。色調は褐灰色で、調査時に付いた僅かな擦痕からは銅色が観察される。器面には細かな気泡が多く観察されるため、鋳造品であるのは明らかである。断面形はくずれた楔形である。表面は全体的に磨いた可能性はあるものの、裏面は鋳造時の器面の可能性がある。

５は銅銭である。５－２区砂利層から出土した。外縁外径2.96cm、外縁内径2.07cm、内郭外径0.82cm、内郭内径0.7cm、外縁厚0.1cm、重さは3.6ｇをはかる。色調は褐灰色を呈するも、部分的に真鍮色が観察される。遺存状態も良好で文字も明瞭に判読される。「政和通寶」と篆書されている。



第140図　金属製品・その他

玉類（第140図　写真図版79）

本遺跡から出土した玉類は３点を数える。

６は管玉である。２区B11グリットSR202から出土した。直径1.13～1.20cm、長さ3.61cm、孔径は0.45～0.56cm、重さは7.7ｇをはかる。色調は濃緑色である。孔は両側から穿孔されている。所属時期は古墳時代以降であろう。

７は試掘調査坑No.55から出土した。１区に該当する。出土層位は不明である。計測値は直径0.51cm、厚さ0.31cm、孔径は0.19cm、重さは0.1ｇをはかる。色調は明るい水色で、細かな気泡が観察される。所属時期は８と同じ弥生時代後期後半か。

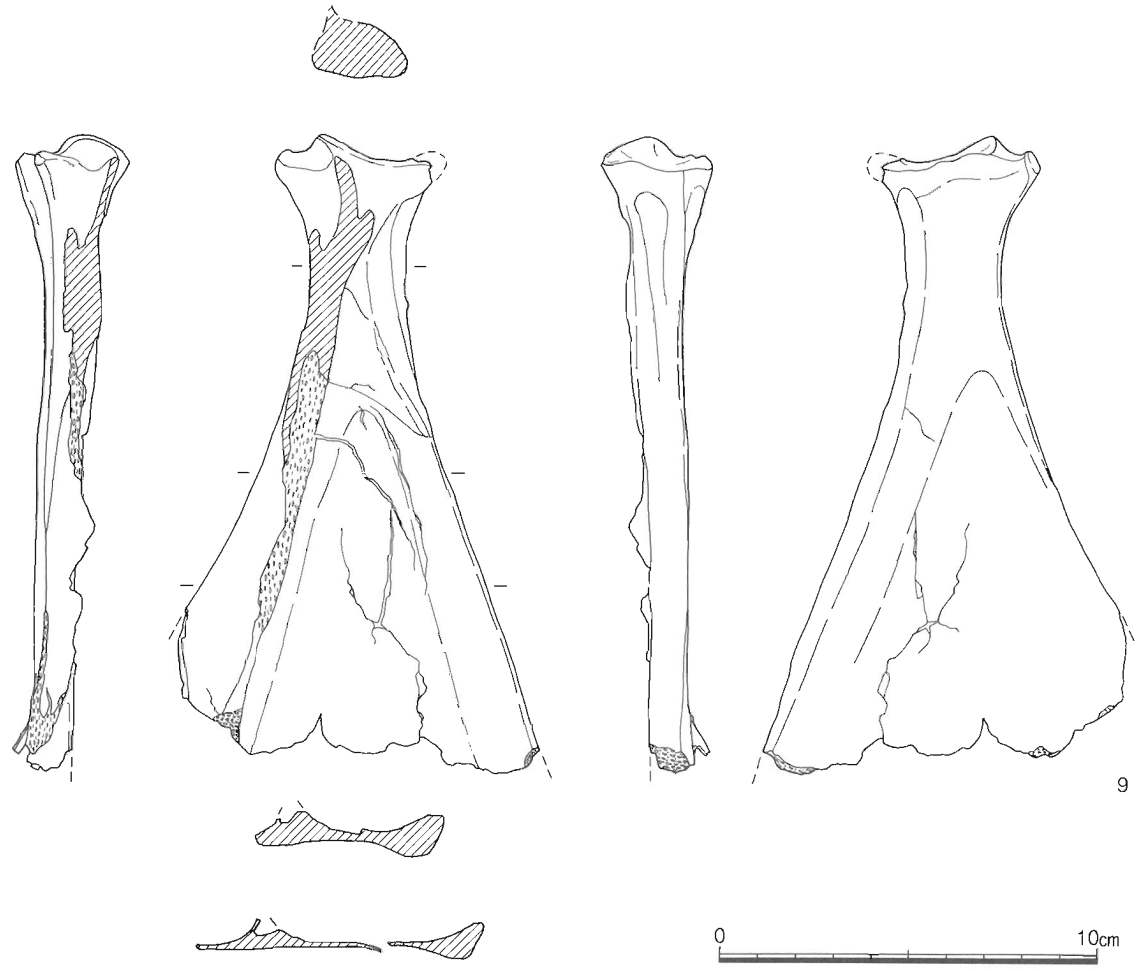
８は１区第５面C5グリットから出土した。計測値は直径0.54cm、厚さ4.5cm、孔径0.18cm、重さは0.2ｇをはかる。色調は濃い青色を呈する。所属時期は弥生時代後期後半か。

獣骨（第141図　写真図版79）

本遺跡からは12点の獣骨が出土した。出土したのは２～３区で全て古墳時代以前の層位からの出土で、イノシシの骨が大半を占めている。９は鹿の肩甲骨（註１）である。所属時期は出土層位から勘案して古墳時代前期まで下る可能性がある。本資料は松井章氏により肩甲棘が人工的に切除されており、平坦な面に見られる亀裂が焼灼である可能性があると教示を受けた。従って本資料は卜骨である可能性がある。近隣では静岡市（旧清水市）長崎遺跡出土資料が知られる。またイヌの骨が２区22層上面から大型壷と共に出土している。所属時期は弥生時代後期後半～後期末と考えられる。

註１　従来「肩胛骨」とも書かれてきたが、本報告は下記の文献を参考にしている。

独立行政法人奈良文化財研究所　2002『中・小型哺乳類骨格図譜』（埋蔵文化財ニュース108）



第141図　獣　　骨

第７表　出土獣骨一覧表

図版番号	写真番号	登録番号	出土地点	獣　種	部　　位	左右	備　　考
第141図	79	H-1	2区B12　18層	シカ	肩甲骨	右	焼灼の可能性有り。肩甲棘を人工的に切除。
	79	H-2	2区B16　22層上面	イヌ	下顎骨		
		H-1	3区C28　11層	イノシシ	上顎第２大臼歯	右	未萌出
		H-2	3区C26　11層	シカ？	臼歯		
		H－3－1	3区C24　10層	イノシシ	側頭骨	左	
		H－3－2	3区C24　10層	イノシシ	後頭骨？		
		H-4	3区C24　10層	—	—		
		H-5	3区C26　13層	イノシシ	上顎臼歯		未萌出
		H－6－1	3区C25　SD304	イノシシ	後頭骨		
		H－6－2	3区C25　SD305	イノシシ	踵骨	左	
		H-7	3区C25　13層	イノシシ	上顎臼歯		未萌出
		H-8	3区C24　SD307	イノシシ	切歯		

第6章　まとめ

第1節　検出遺構

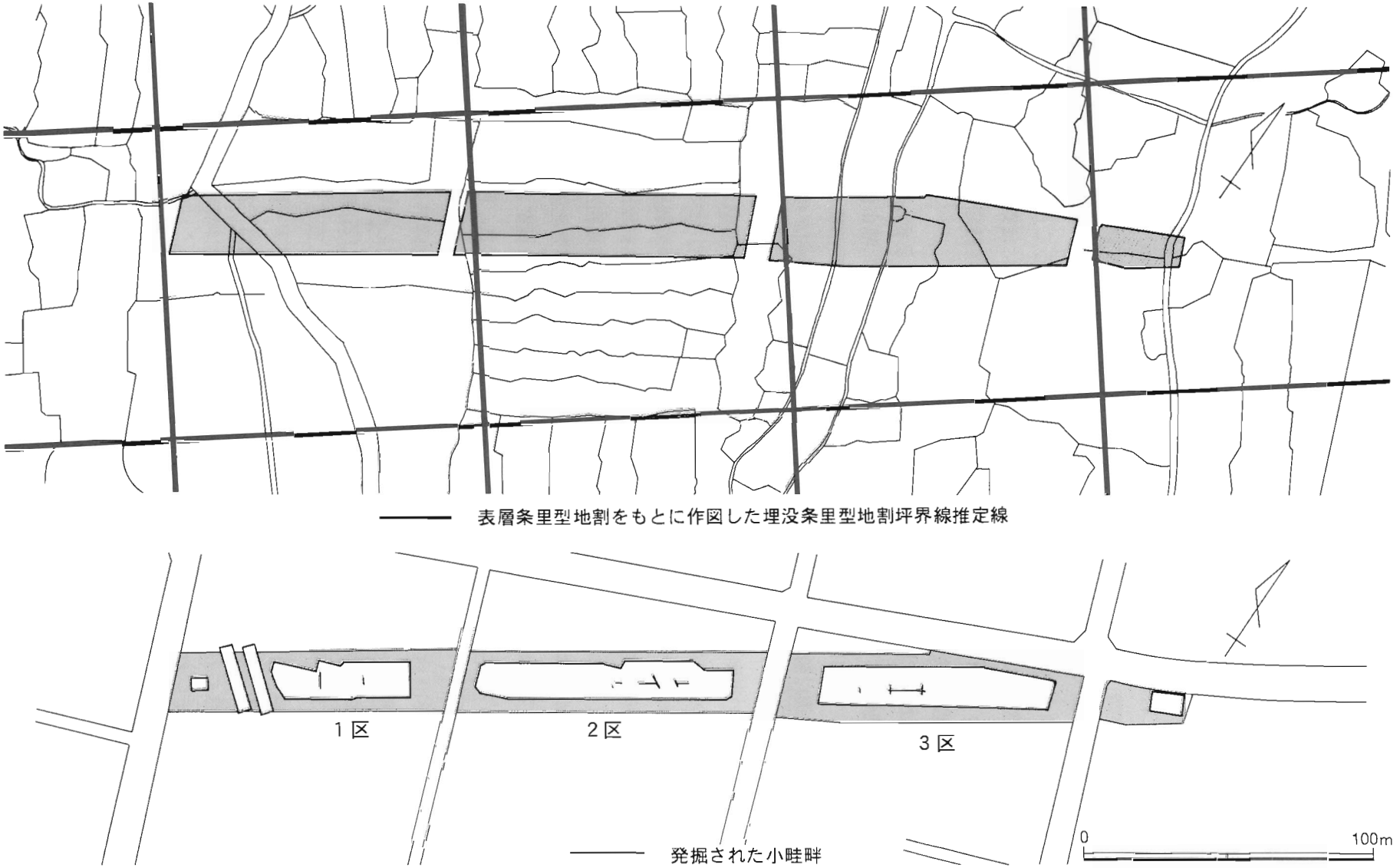
今回の調査では弥生時代以降の遺構面を多数確認した。各面の関係は基本土層図で示した通りである。本節では条里水田を中心にまとめておく。今回の調査では1区第1面、2区第3面、3区第1面が奈良時代以降の水田面であることが推定された。ここで当該地域の条里制水田との関係を検討する必要がある。条里制とは古代に行われた区画整理とその土地制度で、1町（約109m）の方格の地割を設定したものである。条里制は当時、朝廷の勢力範囲（秋田市より南）で施行されている。静清平野北部では静清バイパス建設に伴う埋蔵文化財の発掘調査により、条里制施工時の水田面が検出され、戦後まで現地に遺存せる耕地整理以前の地割が条里型水田と区画的に整合する箇所があることを証明された。岳美遺跡では9～11区SK—11盛土内から出土した助宗産須恵器から、8世紀後半には条里型水田が開かれていた可能性が示されている。瀬名地区は矢田勝氏により当該地域の明治期の地籍図から表層条里型地割を観察し、埋没せる条里型地割や坪界線を推定する作業を行っている。

第142図は矢田氏の文献を参考に耕地整理以前の地割と調査区との関係を示した図である。瀬名地区はかなり早い時期に耕地整理が行われたため、昭和33年から作成され始めた都市計画図には古い地割が記録されていない。よって矢田氏の図面類を参考に瀬名川遺跡の調査区と明治期の地割との関係を図化した。この図から耕地整理以前には調査区が展開する地区には表層条里型地割が残っていたことがわかる。1区西側には流れるのが継川（ままがわ）で、東側が「内坪（ウチツボ）」、西側が「桑原（カバラ）」という字名になる。3区の東側、4区付近に北から南へ延びる区画がある。この区画から東が「玉木田（タマキダ）」になる。この区画から西側が旧「瀬名村」、東側が旧「瀬名川村」となり村境であった。この中で2区が位置する区域には狭長な地割が幾重にも見える。矢田氏はかつて表層条里の分類を行った際に、この区画は「北東向長地型の坪型地割」として分類した。この坪型地割はほぼ1町方格で長地型の短冊地割が入っている。この坪型地割の上下両側は「北西向長地型の坪型地割」が見られ、ほぼ1町方格で長地型の短冊地割が観察される。また矢田氏は瀬名川を含めた静清平野北部にN38°Wの傾きを持った坪界線を推定した。図には坪界線の推定線を示したが、今回の調査区は推定された坪界線を十分検出できる位置にはなかったことがわかる。まず現道を調査出来ないことに加え、作業スペースをとる必要性があったため、調査区間にかなりの領域が未調査区域として残された。そこには推定された坪界線が延びている。2区西端B10・C10付近には自然流路が検出されており、大畦畔が自然流路により削平されたのか、本来的に少し西側へずれた位置に畦畔が延びていたのかは判然としない。

ここで小畦畔について再度概観してみる。1区では2条の北西方向に延びるSK101・102が検出された。畦畔方向はN33.5°～36°Wで推定坪界線の方向値と近似している。これらに直行する北東方向に延びる畦畔は未検出である。2区でも北西に延びる畦畔を検出した。これらはN62°Wで推定坪界線方向と比較して大きく西へ傾いている。この畦畔に合流する北東方向に延びる畦畔SK214・217が検出されているが、これは推定坪界線と同様の方向へ延びる。3区で検出された小畦畔は推定坪界線方向とほぼ同一方向へ延びる畦畔が検出されている。SK302とSK303の間隔は約11mで坪型地割の一辺109mの1/10の数値に近い点から、この坪型地割の内部は約10等分されていた可能性がある。瀬名遺跡等でも明らかなように坪単位で区画内の様相が異なる事例があり、この1～3区まで検出された小畦畔の異なる様相は、各調査区間に実際の坪界線が貫通していた可能性を想起させるに十分であろう。

参考文献

矢田　勝　1990「静岡平野北部における条里型地割の復原と立地環境の変遷」『研究紀要』Ⅲ　(財)静岡県埋蔵文化財調査研究所



第142図　表層条理地割・検出遺構関係図

第2節　弥生時代中期の土器

瀬名川地域における弥生時代の土器の様相については、既に静清バイパス関連で川合遺跡や瀬名遺跡の報告（註1）でも述べられているとおりで、これまで瀬名川遺跡で得られた土器資料についてもこれらの編年案から大きく逸脱するような性格のものではないと信ずる。今回の瀬名川遺跡の調査で出土した弥生時代中期の土器の中には、3区SD307出土の土器には周辺地域でも比較的古い様相を留める条痕を施したる資料が存在している。よって諸研究者により土器研究が進展する状況下において（註2）、本節で当該資料について有る程度の位置づけを行い、今後の弥生土器研究のささやかな叩き台として活用をされんことを期待したい。

3区SD307出土土器は第85～87図170～188に該当する。3区最深部で検出されたSD307の覆土中よりの出土で残念ながら一括投棄されたものではなく、本来的にこの土器群には自ずから時期差が備わっているものと推定される。

主要な器種として壷・甕がある。まず壷について触れてみよう。170は口縁部のみの資料である。沈線で区画された縄文帯を持つ本資料は、短頸の細頸壷で胴部は強く張るタイプであったと推定される。このタイプは時期的に川合遺跡SX11607資料（註3）が丁度初現期にあたることから、170については西駿河Ⅳ様式、弥生時代中期後半の資料である。171は無頸壷に分類される。東海地域全般で見るならば弥生時代の早い時期から通有の器種であるが瀬名川周辺地域では類例が極端に少なく、静岡市セイゾウ遺跡での出土事例が知られるだけである。よって積極的に時期を推定するのは困難であるが、概ね西駿河Ⅲ様式の範疇に入るものであろう。受口状口縁である172・173は川合遺跡SX11607資料と比較して、大きく張った鍔部、隆帯の左右の磨消線など古相を呈している点から、この2点は171同様に西駿河Ⅲ様式、弥生時代中期中葉に位置づけられる。

次に甕について触れてみる。胴部の上半部と下半部の調整が異なった所謂「上下分割調整」で、入り組んだ磨消線文をその調整境界付近に描く甕「磨消線文甕」184については若干の問題がある。周辺地域の出土事例では、当該資料の如き流水文状の磨消線文を施す例を管見に入る範囲内では見つけることが出来なかった。これまでの研究（註4）で胴部上下部の器面調整が異なり（分割調整）、その境界部に数条の磨消線文を施す所謂「磨消線文甕」、胴部の分割調整を行わないで数条の磨消線文を施す所謂「典型的磨消線文甕」の2種に分類されている。また「…上下分割調整のみであったものが、調整を違える胴中央部付近の区画意識が線状に装飾化し、上下分割調整＋線状装飾のものの継続とともに、分割調整しない胴部にも指頭磨消線文を施す典型的な磨消線文甕を生じた…」という見解はほぼ定説化している。この種の甕の分布は、駿河から伊豆、伊豆諸島にあり、神奈川県小田原市三ッ俣遺跡（註5）出土資料を東限とし、静岡県藤枝市清水遺跡（註6）を西限とする極めて地域色の強い土器といえる。この中で184に取り入れられたような、流水文状の磨消線文の類例として東京都三宅島大里東遺跡（註7）において全体の形状のわかる良好な資料が多く得られている。このため伊豆諸島に多く分布する文様のような印象があったが、沼津市雄鹿塚遺跡（註8）でも破片資料であるが「…粗い斜めの貝殻条痕の上に磨り消すように半円状に2条の浅い並行沈線」が描かれた資料が出土している点から、決して伊豆諸島特有ではなく駿河付近の甕でも少なからず採用された文様であることが推定される。次に瀬名川遺跡出土の184の時期的な位置づけであるが、胴部上部には条痕、下部は粗いハケ調整の上下分割調整がなされている。上下分割調整の系譜として、中期初頭に位置づけられる富士宮市渋沢遺跡（註9）で甕Bに分類された資料に遡りうる。上下分割調整を行う甕は、器面調整で条痕が衰退しそれに代わってハケ調整が主流となる西駿河Ⅳ様式でも初期段階が下限と推定される。加えて磨消線文甕自体の消長をも勘案すれば、前述の清水遺跡例や有東遺跡第16次（註10）SK05例が属する西駿河Ⅲ－3様式、弥生時代中期中葉に属

する資料と考えて良いだろう。従って該期における磨消線文甕には横位に数条の磨消線を描くもの、そして入り組んだ文様（流水文等）を描いたものの、２系統の文様があることになる。資料が少ない状況下ではこれ以上に検討を進めることは難しいが、いずれこの資料についての評価は今後の研究の進展により期待するものである。甕の185は口唇部直下から垂直に幅広い磨消線文を施した資料である。このタイプの文様を持つ甕は出土例が少なく判然としない、周辺地域では静岡市（旧清水市）下野遺跡（註11）で認められるのみである。185の器面調整は条痕であることから184と同様の時期か。181は口縁部のみの破片資料である。口縁部内面に断続した櫛描の直線文「櫛目鎖状文」を有し、ハケ状工具による多条の横位羽状文甕と推定される。この181の如き口縁部内面の施文は川合遺跡・瀬名遺跡共に類例が殆ど無く、まず口縁部内面に文様帯を持つ資料は藤枝市清水遺跡ST―22出土資料（註12）が想起される程度であった。ただしこの櫛目鎖状文を有する甕の出土例として三宅島大里遺跡や三宅島坊田遺跡（註13）をあげておく。この三宅島の２遺跡での出土土器群に対する評価（註14）は、壷に関しては東海地方西部の櫛描文の影響下にあり、須和田式土器の色彩が色濃い点、また甕については条数が櫛目鎖状文を施している点から、宮ノ台式土器におけるⅠ～Ⅴ段階内での最古のⅠ期に位置付けている。宮ノ台式土器における甕口縁部内面の櫛目鎖状文の施文はⅢ期に終焉を迎えたとされるが、これはこの種の施文が多条・多段の横走（横位）羽状文甕に多く施され、１条・１段の横走羽状文甕・磨消線文甕には施されなく、しかもその櫛目鎖状文の施された横走（横位）羽状文甕は磨消線文甕との共存しているという指摘（註15）から十分首肯できるものである。遺跡の位置する伊豆諸島部における土器様相が駿河湾沿岸部のそれとほぼ同じ変化を遂げるとするならば、この181については宮ノ台式土器の原初段階に並行する蓋然性が高く、従って先述した184の如き磨消線文甕よりは明らかに時期的に新しい遺物として考えられる。

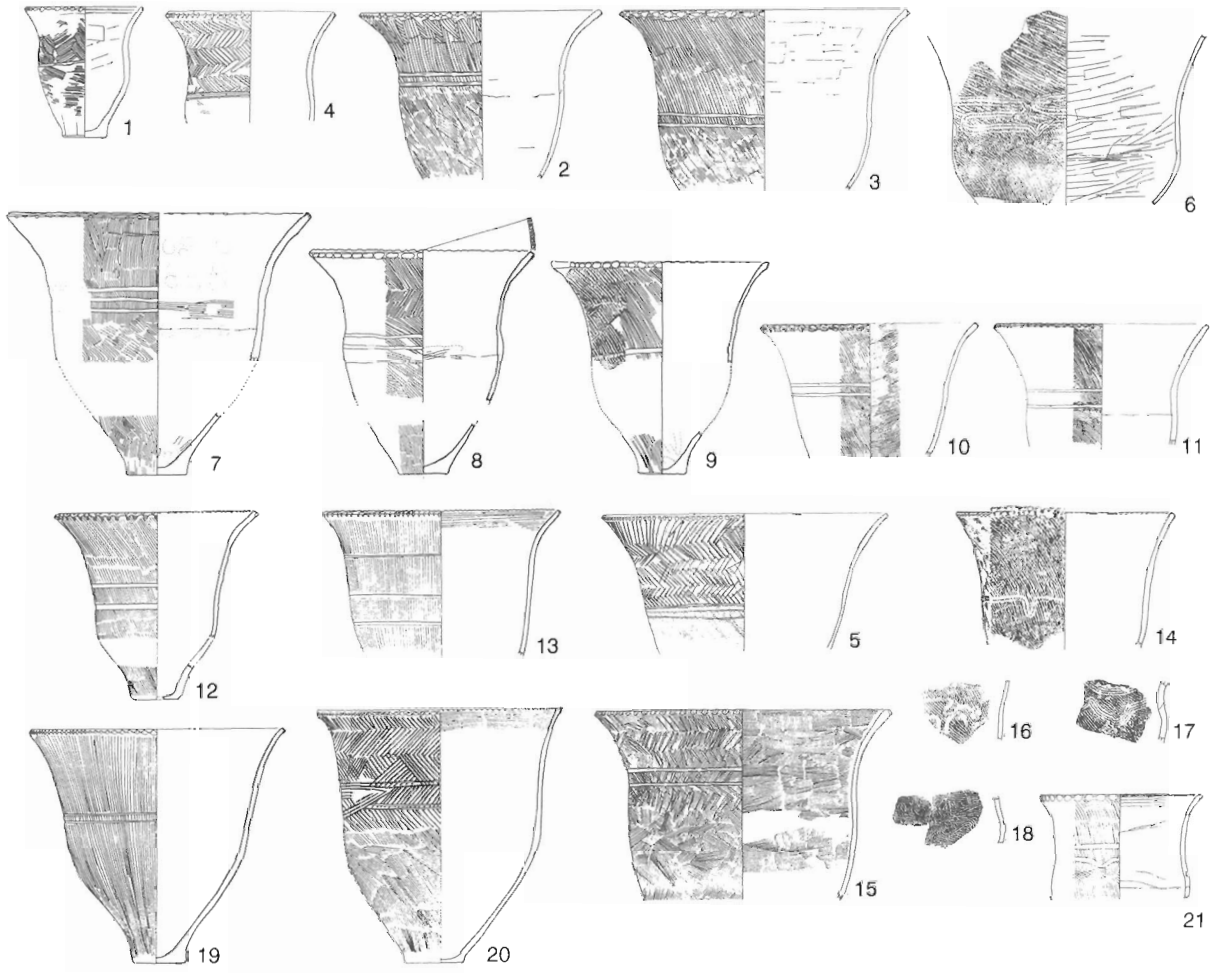
以上のように壷・甕の個々の時期的な位置付け等を行ったが、冒頭に記したようにこれらSD307出土土器は時期的にややまとまりがなく、一括性は認められない資料と理解される。ところでこの遺構の上位には11～14層まで多くの中期後半代の土器資料を含む層が堆積していたが、これらの土器群の中には短頸の細頸壷が主流で、長頸化しかつ口縁部を大きく開いた細頸壷はみられない。壷の肩部から胴部にかけての施文はヘラ状工具や櫛描文、区画縄文帯での装飾が主体で、無文化した資料は認められない。また甕でも磨消線文甕は数点破片資料で見られるのみで、主体はヘラ状工具を用いた１段構成の横走羽状文甕と無文甕が主体となっている。このような状況から西駿河Ⅳ様式でも前半から半ば、Ⅳ―２から４様式の範疇に入るものと推定され、この11～14層出土の土器群は隣接する川合遺跡で方形周溝墓群が形成されていた時期と並行する。しかし後続する資料については２区でも僅かに出土しているのみで（第73図104）、隣接する瀬名遺跡13ａ層出土資料で見られるように、弥生時代中期の終わり頃の生活領域は瀬名川遺跡の北側に展開する瀬名遺跡方向に移動するものと考えられる。

註

1　瀬名川遺跡周辺地域において発掘調査が行われた遺跡のうち、瀬名遺跡と川合遺跡が質・量共に恵まれ、下記の通り報告書内で土器の編年を試みられている。
中鉢賢治　1994「第Ⅵ章第１節　瀬名遺跡出土の弥生式土器」『瀬名遺跡Ⅲ（遺物編Ⅰ）』㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所
足立順司　1996「第３章第１節　弥生中期の土器編年」『川合遺跡　遺物編１』㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所

2　参考文献は下記の通りである。なお佐藤由紀男氏には多くの関連文献・遺跡についてご教授を受けた。いかしきれなかった事が多かったかもしれない。なお文中に表記した様式については第５章と同様、佐藤・萩野谷・篠原2002によるものである。
佐藤由紀男　1987「静岡市丸子セイゾウ山、佐渡遺跡出土土器の再検討」『静岡県博物館協会研究紀要』10　静岡県博物館協会
伊藤淳史　1996「太平洋沿岸における弥生文化の展開―駿河湾岸中期弥生土器からの検討―」『YAY!』弥生土器を語る会
伊藤淳史　1997「太平洋沿岸における弥生文化の展開・補遺」『西相模考古』６　西相模考古学研究会
佐藤由紀男・萩野谷正広・篠原和大　2002「５　遠江・駿河地域」『弥生土器の様式と編年―東海編―』木耳社

3　下記の文献を参考としている。
㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所　1992『川合遺跡　遺物編１（土器・土製品図版編）』
足立順司・山田成洋　1996『川合遺跡　遺物編１（土器・土製品本文編）』㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所



1～3：静岡市有東遺跡　4・5：藤枝市清水遺跡　6：静岡市瀬名川遺跡　7～9：静岡市川合遺跡
10・11：沼津市雄鹿塚遺跡　12：静岡市原添遺跡　13：清水町矢崎遺跡
14～18：三宅村大里東遺跡　19・20：三島市長伏遺跡　21：小田原市三ッ俣遺跡

第143図　駿河・伊豆・相模の磨消線文甕

4　伊藤1996より。
5　当遺跡Ｆ－19区P1より出土している。市川正史・伊丹　徹　1986『三ッ俣遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター
6　藤枝市教育委員会　1992『清水遺跡』
7　青木　豊・内川隆志・小林青樹他　1996　『大里東遺跡発掘調査報告書』大里東遺跡発掘調査団
8　鈴木裕篤　1989『雄鹿塚遺跡発掘調査報告書』沼津市教育委員会　なお後述の遺物は左記報告書のＰ55第29図58が該当する。
9　渡井一信・山上英誉　1989『渋沢遺跡』富士宮市教育委員会
10　岡村　渉　1997『有東遺跡―第16次発掘調査報告書―』静岡市教育委員会
11　Ａ地区旧河道から出土している。
中西道行・大川敬夫・新井正樹・佐藤秀作　1985『下野遺跡』建設省中部地方建設局・静岡県教育委員会・清水市教育委員会
12　註６の文献のＰ14第17図３の甕である。尾張Ⅱ・Ⅲ様式の朝日形甕の影響を受けている。
13　橋口尚武・井口直司・高橋健樹　1983『三宅島坊田遺跡』東京都教育委員会
14　安藤広道　1990「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分（上）―遺跡群研究のためのタイムスケールの整理―」『古代文化』第42巻第６号　古代學協會
安藤広道　1990「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分（下）―遺跡群研究のためのタイムスケールの整理―」『古代文化』第42巻第７号　古代學協會
15　伊藤　1996

図註

1　第143図に使用した土器の図は各報告書から転載。ただし静岡市原添遺跡・清水町矢崎遺跡・三島市長伏遺跡の土器については静岡県　1992『静岡県史』資料編３（考古３）から引用した。

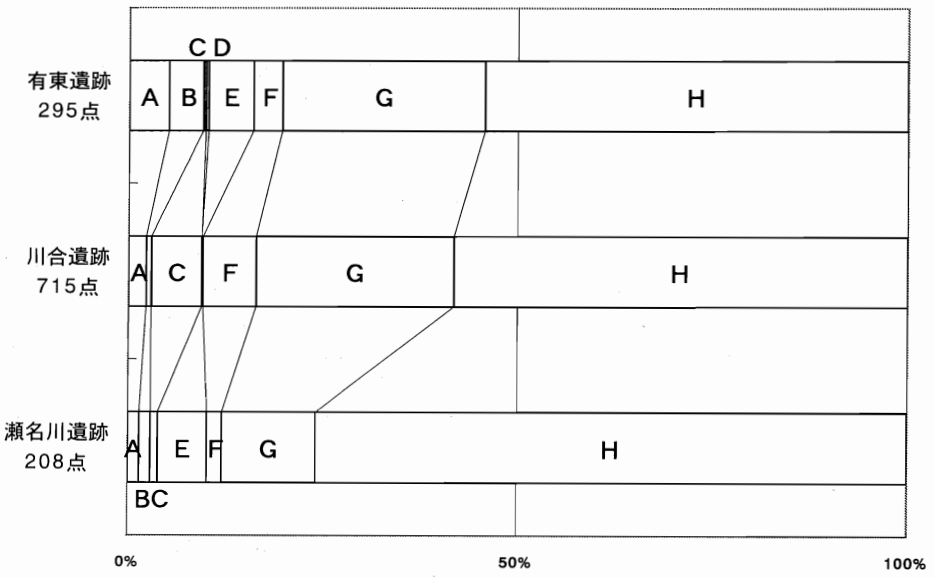
第３節　弥生時代の石器

第５章２節で概観したように瀬名川遺跡では狭い調査範囲にもかかわらず様々な器種の石器が出土している。ここでは各器種ごとに出土分布を整理し、石器組成や磨製石斧の製作について、さらに利用石材から瀬名川遺跡での石器の様相について考えまとめとしたい。

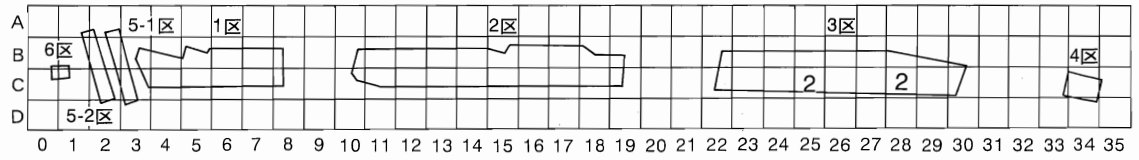
まず出土分布についてである。主な器種の出土分布を示したのが第145図である。ここではやや時期差のある資料を含んでいることをあらかじめ断っておく。瀬名川遺跡で片刃石斧の製作が行われていたことはこれまで述べてきたが、片刃石斧の製作に関連する遺物（片刃石斧未製品、剥片、敲打石、砥石、台石）の出土分布はC24～29グリッドに集中する傾向が見られる。このことからこの付近が石斧製作跡であった可能性が考えられる。

次に石器組成について考えてみたい。静清平野において瀬名川遺跡とほぼ同時期と考えられ、石器の出土量が豊富な有東遺跡（第４次調査）と川合遺跡を比較対象とした。まず対象とした石器は、石鏃などの狩猟具（A）、石錘・浮子などの漁猟具（B）、打製石斧・石鍬などの土掘具（C）、石庖丁などの収穫具（D）、石皿・磨石などの調理具（E）、剥片石器・スクレイパーなどの加工具（F）、太型蛤刃石斧・柱状片刃石斧・偏平片刃石斧などの木工具（G）、砥石・敲打石・台石などの加工具（H）である。未製品や剥片は対象としていない。これらの石器の各遺跡での組成を表したのが第144図である（註１）。瀬名川遺跡で木工具の割合がやや低いことや、川合遺跡で調理具の割合が低く、土掘具である打製石斧の出土量が多いことなどの違いも見られるが、これらの遺跡の石器組成はほぼ似たような傾向を示しているといえる。弥生時代中期後半の静清平野における石器組成の特徴はG・Hと分類した大陸系磨製石斧とその製作・調整具が全体の８割以上を占め、石庖丁が欠落することが指摘されている（安藤　1997）。G・Hの合計の割合は有東遺跡では80%、川合遺跡では84%であり、瀬名川遺跡でも88%を示し、木工具である磨製石斧の積極的な生産から狩猟・漁猟活動に比べ水稲耕作への依存度が高かったことが窺える。しかし、収穫具については有東遺跡で磨製石鎌が１点出土しているのみで、瀬名川遺跡でもやはり石庖丁は出土していない。

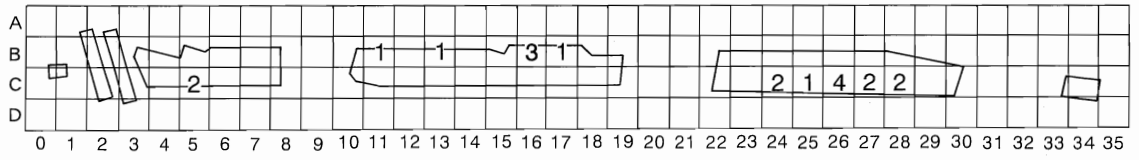
次に片刃石斧の製作について考えてみたい。前章において未製品を素材の利用方法と製作工程段階別に分類した。瀬名川遺跡での片刃石斧の製作において見られた特徴は、剥片を利用した製作方法が主流であり、その際には製作工程の省略はあまり見られないこと、一方原石を直接加工する場合には製品の形状を意識した転礫を利用し、自然面に直接研磨を施すなど製作工程の省略が見られること、さらに石材は安倍川で採取可能な暗赤紫色凝灰岩を主体的に利用することなどである。これらの点はすでに多くの研究者によって静清平野の片刃石斧製作において見られる特徴として指摘



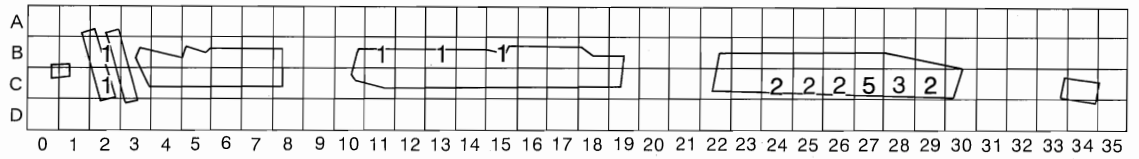
第144図　有東・川合・瀬名川遺跡の石器組成



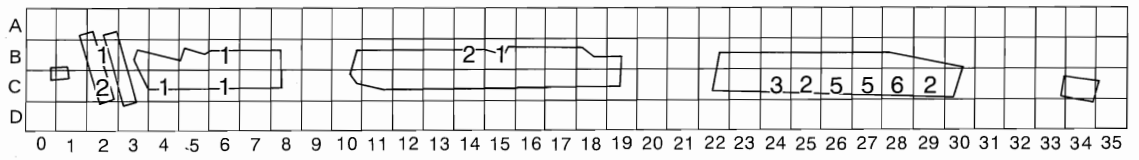
両刃石斧



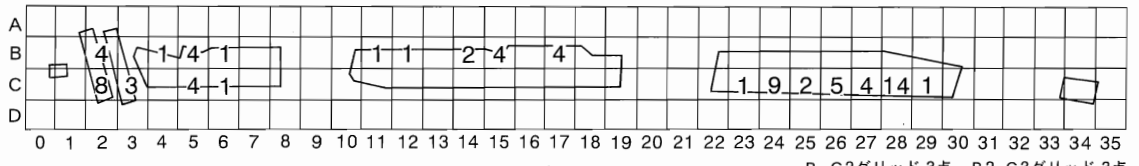
片刃石斧　1区不明 1点　5-1区不明 1点　確認調査 1点



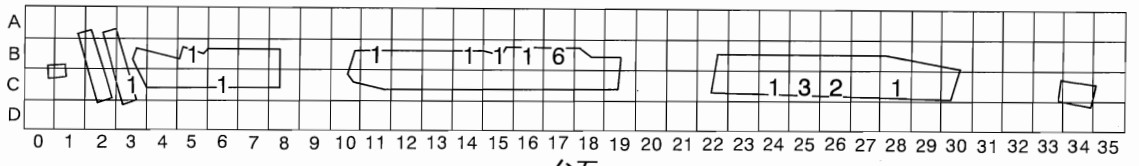
片刃石斧未製品　1区不明 2点



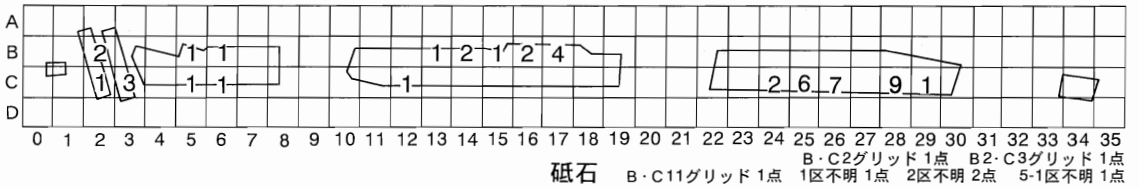
剥片　B・C2グリッド 2点　C25～26グリッド 1点　3区不明 2点



敲打石　B・C2グリッド 3点　B2・C3グリッド 3点
B11・C12グリッド 1点　1区不点 1点　5-1区不明 1点



台石　B・C2グリッド 1点　2区不明 1点



砥石　B・C2グリッド 1点　B2・C3グリッド 1点
B・C11グリッド 1点　1区不明 1点　2区不明 2点　5-1区不明 1点

第145図　器種別出土分布図

されていることであり（伊藤他　1992、佐藤　2000）、瀬名川遺跡においてもこうした特徴が見られることは石斧製作に関する情報を共有していたと考えられる。

ところで、川合遺跡ではDタイプと分類した敲打石に「石斧の素材として持ち込まれそのなかで石斧の材に適さない硬質で加工が難しい」輝緑凝灰岩が使用されているが（伊藤他　1992）、瀬名川遺跡ではこのような傾向は全く見られず、ほとんどが砂岩である。杉山浩平氏は暗赤紫色輝緑凝灰岩を用いた敲打具が出土していない集落では、他の集落に原石の入手を依存している可能性を指摘しており（杉山　2004）、瀬名川遺跡において何も加工をしていない原石段階の未製品が出土していない状況を考え合わせればその可能性も考えられるが、出土した剥片がやや少ないという印象を受けることから石材の供給地で荒割りを行い加工に適した良い石材だけを搬入していたという搬入方法の違いという可能性も考えられる。

また流通の問題についてであるが、片刃石斧の未製品率は約51％であり、現状の資料から考えれば自家消費を目的とした生産と考えるのが妥当であろう。しかし、一部は流通を目的とした生産を行っていた可能性を否定できない（註２）。

最後に石器に利用されている石材についてである（註３）。利用されている石材は凝灰岩、粘板岩、頁岩、カンラン岩、チャート、ホルンフェルス、礫岩、斑レイ岩、流紋岩、玄武岩、砂岩、軽石である。このうち主に磨製石斧に利用されている凝灰岩、粘板岩、頁岩、カンラン岩、チャート、礫岩の供給地は安倍川下流域と考えられる。特に凝灰岩や粘板岩は適度な硬度があり加工し易いなど石斧に適した材質である。これらの石材は近隣の遺跡でも磨製石斧に利用されているが、ホルンフェルスは管見の及ぶ限り静清平野において磨製石斧に利用している遺跡は見られない。ホルンフェルスを利用した石器は両刃石斧と片刃石斧の製品が１点ずつ、片刃石斧の研磨段階の未製品が１点出土している。ホルンフェルスは遺跡近隣で採取できるものではなく、他地域からの搬入品である可能性が高い。ただこの石材は肉眼鑑定で確証を得られたものではなく、供給地についても明確ではない。類例の増加を待ち今後の検討課題としたい。

一方、敲打石、磨石、石皿、台石、砥石、石錘に多用されている砂岩の供給地は主に長尾川と考えられる。また、敲打石、磨石、砥石で少数見られた斑レイ岩、流紋岩、玄武岩は竜爪山系の石材で安倍川で採取できる。瀬名川遺跡から現在の安倍川下流域までは直線距離にして約７㎞である。

註

１．有東遺跡と川合遺跡の石器のデータは国立歴史民俗博物館　1997によった。
２．佐藤由起男氏は駿河湾周辺の加工斧生産の基本は自己消費目的でありそれを補う形での流通、もしくは自己消費的生産と流通が二原的に並立していたと考えるのが妥当としている（佐藤　2000）。
３．石材の供給地についても静岡大学名誉教授　伊藤通玄氏に御教授いただいた。

参考文献

安藤　広道　1997「南関東地方石器～鉄器移行期に関する一考察」『横浜市歴史博物館紀要』第２号　横浜市歴史博物館
石川日出志　1994「東日本の大陸系磨製石器―木工具と穂摘み具―」『考古学研究』第41巻第２号　考古学研究会
伊藤律子他　1992『川合遺跡』遺物編２　㈶静岡県埋蔵文化財調査研究所
伊藤　律子　1997「静岡県の石器」『農耕開始期の石器組成４』中部・近畿　国立歴史民俗博物館
佐藤由紀男　2000「駿河湾周辺における弥生系磨製石斧の生産と流通」『考古学論究』第７号　立正大学考古学会
杉山　浩平　2001「弥生時代加工斧の生産と流通―南関東地方と東海地方東端の分析―」『駒沢史学』第57号　駒沢史学会
杉山　浩平　2004「宮ノ台式土器期社会の交流―石器製作システムの比較分析からの様相―」『物質文化』第77号　物質文化研究会

第４節　弥生時代の金属器

瀬名川遺跡から出土した弥生時代の金属器は４点を数える。土器・石器・木製品と比較すれば甚少である。とは言え当該遺物の位置付けについては全国各地において新たな研究の進展が見られ、看過することができない状況である。よって特に節を設け、今後の研究・出土事例の増加に備えることとしたい。

今回の調査において出土した該期の金属器は銅釧１点、小銅環１点、銅鏃２点、計４点である。平成９・10年度の調査では銅釧の再加工品（垂飾か？）が１点出土しており、計５点となる。瀬名川遺跡から北西へ約500ｍに位置する瀬名遺跡では銅釧が１点出土しているが「古墳時代中期の泥炭層中からの出土」と報告されている。長尾川西岸の川合遺跡では銅釧３点、小銅環４点、銅鏃９点が出土しており、長尾川流域でも当区域に濃密な青銅製品の分布が見られる。安倍川扇状地上では登呂遺跡で銅釧13点（有鉤銅釧１点含む）・小銅環５点が出土しており卓越している。これら銅釧・小銅環についての論考は最近、続出しており、該期の文化を表象するものとして再評価され始めた感がある。静岡市周辺（静岡市、旧清水市も含む）の銅釧・鉄釧・銅環の出土事例については天石夏実氏が集成し「今後他の金属製品ともあわせて他地域からの金属器の流入という視点から検討しなければならない」と注意を喚起している。

銅鏃については先述した川合遺跡や瀬名川遺跡で合計11点出土しているが、他に静清平野においては神明原・元宮川遺跡で２点、長崎遺跡１点が出土している他は出土例が知られていない。銅釧類と比較しても少ない感がある。駿河湾沿岸で出土の弥生時代の銅鏃は管見に触れる範囲内で30点出土している。時期的には後期後半以降の資料が多い。古墳時代以降の銅鏃は墓域からの出土が多いのに比べ、該期は集落域での出土が多い。これら30点の鏃身部長・鏃身部幅の計測値をプロットしたグラフ（第146図）では、ほとんどの銅鏃の計測値が鏃身長：鏃身幅の比率が３：１～２：１で狭長な平面形を指向している。計測値も長さ２～３㎝台、幅１㎝前後と小型である。形態も三角形、もしくは先端部に稜を持つ形態で全て有茎鏃である。ただ瀬名川遺跡から出土し、今回報告せる単孔銅鏃については他の銅鏃と比較しても極めて大型である。比率も２：１～３：２の間にあり他の銅鏃とは異なる。

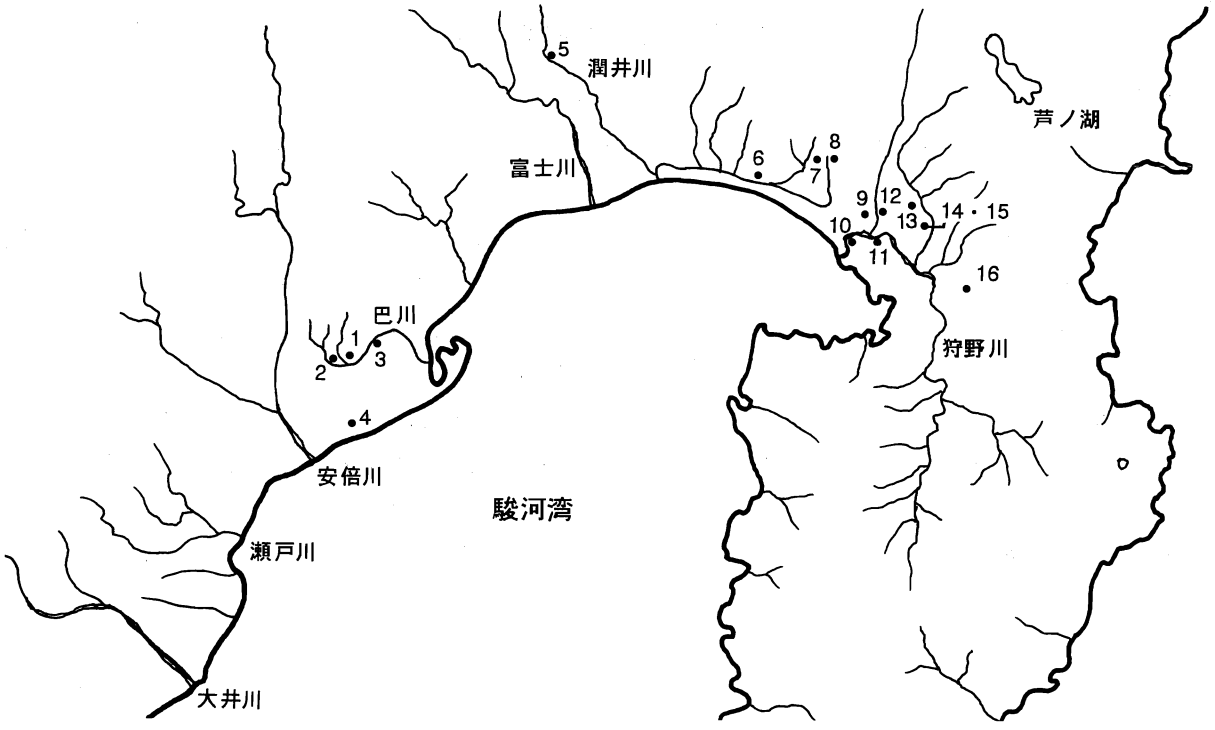
単孔鏃は愛知県（三河國）の渥美半島に多く出土し、本遺跡はその濃密な分布圏より離れた位置にある。菊川町耳川遺跡、富士宮市泉遺跡でその出土例が知られる他には、近隣でその単孔鏃の出土例は殆ど知られていない。鈴木敏則氏によれば1997年の段階で29点の出土が報告され、現時点で30点以上出土している。瀬名川遺跡出土の単孔鏃の由来は渥美半島を中心とした伊勢湾周辺地域に求めうることは可能であるが、その性格は周辺地域の該期の様相も勘案した上で今後評価されるべき遺物である。

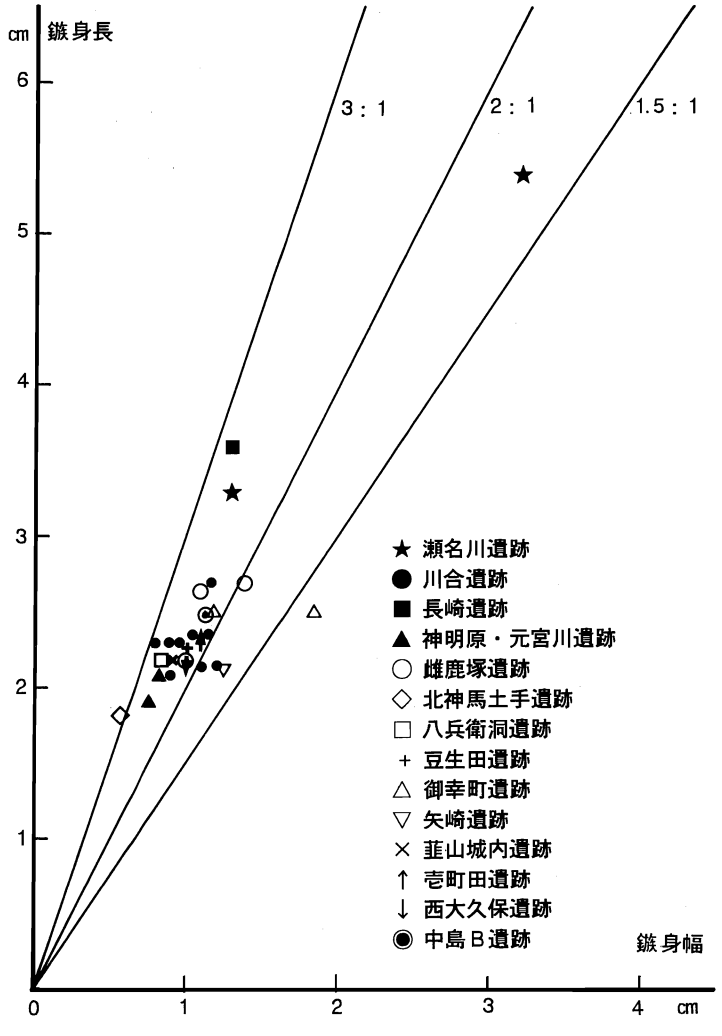
参考文献

銅釧関係
臼居直之　2000「再生される銅釧」『長野県埋蔵文化財センター紀要』８　長野県埋蔵文化財センター
中村　勉　2001「銅環とよばれる青銅器について―東日本出土の青銅器に関する一つの考察―」『貝塚』56　物質文化研究会
天石夏実　2002「静清平野出土の銅釧・鉄釧・銅環」『ふちゅ～る』№10　静岡市教育委員会
野澤誠一　2002「銅釧・鉄釧からみた東日本の弥生社会」『研究紀要』第８号　長野県立歴史館
池田　治　2003「帯状円環型銅釧の形態分類と地域色について」『かながわの考古学』８　㈶かながわ考古学財団
銅鏃関係
赤塚次郎　1994「多孔銅鏃」『考古学フォーラム』５　考古学フォーラム
鈴木敏則　1997「東海地方の弥生銅鏃」『古文化論叢―伊達先生古希記念論集―』伊達先生古希記念論集編集委員会
高田浩司　2001「弥生時代銅鏃の二つの性格と性質―石鏃・鉄鏃との比較を通じて―」『考古学研究』47―４
赤塚次郎　2002「東海の青銅器」『考古学フォーラム定例会資料№42』
高田健一　2002「弥生時代の銅鏃の地域性と変革」『古代武器研究』３　古代武器研究会

謝　辞

現地調査および本書の作成にあたっては、次の方々に有益なご指導・ご助言を賜りました。感謝申し上げます。（敬称略・五十音順）
青木　修　天石夏美　佐藤由紀男　篠原和大　鈴木一有　鈴木悦之　田中　淳　萩野谷正広　平野吾郎





No.	遺跡名	出土点数
1	瀬名川遺跡	2
2	川合遺跡	9
3	長崎遺跡	1
4	神明原・元宮川遺跡	2
5	泉遺跡	1
6	雌鹿塚遺跡	3
7	八兵衛洞遺跡	1
8	北神馬土手遺跡	1
9	豆生田遺跡	1
10	御幸町遺跡	4
11	矢崎遺跡	1
12	根岸遺跡	1
13	西大久保遺跡	1
14	壱町田遺跡	1
15	中島Ｂ遺跡	3
16	韮山城内遺跡	1
	計	33

第146図　銅鏃関連図

観　察　表

第８表　出土土器一覧表

１区出土土器１

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図55-1		壷	１区 B5 SK103	口径(15.2)	壷の口縁部である。折返し口縁である。	全体的に摩滅しており調整は判然としない。口唇部に押圧を加えている。	胎土にφ～２㎜灰白色・赤褐色・雲母含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR6/3にぶい黄橙色。	口縁部 約1/8残存
図55-2		壷	１区 B6 SX106	口径(15.0)	単純口縁を持つ壷。口縁部は外反し、口唇部を平坦に仕上げる。	内外面共にハケ調整を施している。	胎土にφ～0.5㎜灰白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR6/3にぶい褐色。	口縁部 約1/7残存
図55-3	図版28	甕	１区 B5 SD121	口径(18.2) 頸径(17.3) 胴部径(18.1) 底部径(7.8) 器高(20.1)	台付甕である。胴部は台部からやや微かに内湾気味に立ち上がり、胴部中位から上位にかけて最大径をはかる。頸部から口縁部を軽く外反させる。	外面はハケ調整を施す。口縁部に指頭痕か。台部との接合部は指ナデを施す。内面はハケ調整とヘラナデ。台部内面もハケ調整。	胎土にφ～３㎜砂粒含有。焼成は良。内面の色調は7.5YR6/4にぶい橙色、外面は10YR7/2にぶい黄橙色。	全体の 約1/3残存 外面煤付着
図55-4		甕	１区 B5 SD121	口径(15.0) 頸径(14.7) 胴部径(19.2)	台付甕か。胴部下位から台部にかけて欠損。胴部中位で最大径をはかり、口縁部は軽く外反させる。	外面は指ナデの後にハケ調整。輪積痕が観察される。内面はハケ調整とヘラナデ。輪積痕が観察される。口唇部にもハケ調整。	胎土にφ～３㎜砂粒、白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR6/4にぶい橙色。	全体の 約1/5残存 外面煤付着
図55-5	図版28	壷	１区 C5 SD122	口径(12.4) 頸部(5.8)	壷の口縁から肩部にかけての資料である。折返し口縁である。肩部から緩やかに外反する。	外面はハケ調整の後にヘラミガキか。口唇部内面に縄文を施文。口縁内面はハケ調整、頸部内面はヘラミガキ。肩部内面は指ナデか。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/3にぶい橙色、内面は2.5YR6/1黄灰色。	全体の 約1/8残存
図55-6		壷	１区 B5 SD122	頸径(5.4)	壷の肩部である。円形浮文を肩部に４個付ける。	全体的に摩滅気味。外面はヘラミガキか。内面には輪積痕。	胎土にφ～0.5㎜雲母、石英等含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR7/2にぶい黄橙色。	頸部 ～肩部 破片資料
図55-7		壷	１区 B5 SD122	頸径(5.8)	壷の肩部である。浮文を肩部に付ける。一部剥脱しており浮文の形は判然としない。	外面はヘラミガキ。内面はヘラナデか。	胎土にφ～0.5㎜雲母・白色・赤褐色含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/4にぶい橙色。内面は10YR6/1褐灰色。	頸部 ～肩部 破片資料
図55-8		壷	１区 B5 SD122		壷の肩部から胴部上位にかけての資料である。胴部は膨らみを持ちつつ緩やかに頸部に移行する。	外面はハケ調整の後に横位のヘラミガキ。肩部に縄文。内面はヘラナデ。一部にハケ調整。	胎土にφ～0.5㎜雲母・白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/2明褐灰色、内面N6/灰色。	肩部 ～胴部 破片資料
図55-9		壷	１区 B5 SD122	底径(11.3)	壷の底部である。平坦な底面には木葉痕が明瞭に観察される。	全体的に摩滅。外面はヘラミガキ。内面見込みにヘラ痕か。	胎土にφ～0.5㎜雲母、白色・灰色粒子等含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR7/2にぶい黄橙色。	底部 約3/5残存
図56-10		壷	１区 C5 SD124	口径(20.4) 頸径(8.2)	折返し口縁の壷である。口縁部から頸部にかけての資料である。口縁部は大きく外反させている。	外面はハケ調整の後にヘラミガキを施す。口唇部にもハケ調整。口縁部内面はハケ調整の後に櫛状工具で波状文。その付近は赤彩か。波状文下位から頸部にかけてヘラミガキ。	胎土にφ～1.5㎜砂粒、白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/2明褐灰色。	口縁部 約1/4残存
図56-11	図版28	壷	１区 C5 SD124	口径(14.7) 頸径(6.3) 胴部径(17.2)	単純口縁を持つ壷である。胴部下位から底部にかけて欠損。丸く膨らみを持つ胴部から大きく外反し延びる口縁部がある。口縁部に穿孔がなされる。肩部に円形浮文。	外面はハケ調整の後にヘラミガキを施す。口唇部はハケ調整で平坦に仕上げた後に棒状工具で刻目を入れる。内面はヘラミガキとナデとハケ調整の痕跡が見られる。	胎土にφ～0.5㎜白色、黒色、赤褐色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/2にぶい黄橙色、内面は5YR5/1灰色。	全体の 約2/5残存
図56-12	図版28	壷	１区 C5 SD124	頸径(10.8) 胴部径32.5 底径10.6	口縁部を欠いた壷。胴部は底部から直線的に立ち上がり、胴部下位で屈曲し内湾気味となる。肩の張りは少なく、肩部に２個単位の円形浮文を付ける。	全体的に摩滅気味。外面はハケ調整の後にヘラミガキ。内面でも頸部、胴部下位から見込みにかけてハケ調整。殆どの部位はヘラナデか。底面の木葉痕は不明瞭。	胎土にφ～２㎜砂粒、白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/4にぶい橙色、内面は2.5Y6/1黄灰色。	全体の 約2/3残存
図56-13		甕	１区 C5 SD124	底径(5.7)	台付甕の台部のみの資料である。	内外面共にハケ調整である。内面に炭化物か。	胎土にφ～３㎜砂粒、白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR7/6橙色。	台部 約3/4残存 外面煤付着
図56-14		甕	１区 C5 SD124	底径8.9	台付甕の台部のみの資料である。	内外面共にハケ調整である。	胎土にφ～２㎜砂粒、白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は5Y7/1灰白色、内面は7.5YR6/3にぶい橙色。	台部 完存
図56-15		甕	１区 C5 SD124	口径(21.3)	台付甕の口縁部から胴部中位にかけての資料である。膨らみを持った胴部より口縁部が外傾する。	内外面共にハケ調整を施す。平坦に仕上げられた口唇部にはハケ調整。内面一部に板ナデか。	胎土にφ～２㎜砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR6/3にぶい褐色。	口縁部 ～胴部 破片資料
図57-16		壷	１区 B5 SD152	口径(13.6)	壷の口縁部である。折返し口縁である。	外面はハケ調整である。口唇部もハケ調整した後に棒状工具で刻目を施す。内面はハケ調整の後にヘラミガキを施している。	胎土にφ～0.5㎜雲母、灰色、灰白色、白色粒子含有。外面の色調は7.5YR6/2灰褐色、内面は5YR6/2灰褐色。	口縁部 約1/3残存
図57-17		壷	１区 C6 SP140	口径(14.0)	壷の口縁部である。折返し口縁である。口唇部は肥厚する。	内外面共にハケ調整を施し、口唇部の平坦面もハケ調整。	胎土にφ～３㎜雲母、石英、白色灰色粒子・砂粒等含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR8/4浅黄橙色。	口縁部 約1/2残存
図57-18		壷	１区 B5 18層		壷の肩部の破片資料である。	外面には肩部に縄文を施し、その上に円形浮文を３個１組で付ける。内面はハケ調整か。輪積痕有り。	胎土にφ～1㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR6/8橙色。	肩部 破片資料
図57-19		壷	１区 B5 18層		壷の肩部の破片資料である。	外面には肩部に円形浮文をほぼ等間隔で付ける。内外面共に摩滅。	胎土にφ～0.5㎜石英、茶褐色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR6/3にぶい褐色。	肩部 破片資料
図57-20		壷	１区 B5 18層		壷の肩部の破片資料である。	外面には肩部に円形浮文・棒状浮文？が付けられる。内面はハケ調整か。内外面共に摩滅。	胎土にφ～１㎜灰褐色・雲母粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/4にぶい橙色。	口縁部 破片資料
図57-21		壷	１区 B4 18層	口径(5.9) 頸径(3.5) 胴部径(8.5) 底径(6.0) 器高(9.8)	小型壷である。胴部の最大径はやや下位よりにあり、立ち上がりも直線的なため、算盤玉の如き外観を呈する。折返し口縁を持つ。	外面及び底面はヘラミガキ。内面はヘラミガキとヘラナデか。内外面共に摩滅。	胎土にφ～１㎜石英、黒色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に5Y6/1灰色。	全体の 約1/4残存

1区出土土器2

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図57-22	図版28	壷	1区 C6 19層	口径14.8 頸径7.5	単純口縁を持つ壷である。口縁部から肩部にかけての資料である。口唇部はやや平坦に仕上げる。	外面にはヘラミガキを施している。内面はハケ調整の後にヘラミガキを施す。摩滅のためミガキ面は剥脱している。	胎土にφ～2㎜雲母、石英、白色灰褐色粒子、砂粒等含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/3にぶい橙色。	口縁部 完存
図57-23		壷	1区 C5 19層		複合口縁を持つ壷である。	外面はハケ調整の後に棒状浮文を付ける。内面はハケ調整の後にヘラミガキを施す。	胎土にφ～0.5㎜白色・暗灰色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に2.5Y7/1灰白色。	口縁部 破片資料
図58-24		壷	1区 B5 20層		複合口縁を持つ壷である。	外面はハケ調整の後に棒状浮文を付ける。内面はハケ調整の後にヘラミガキか。	胎土にφ～2㎜白色・灰色粒子含有。焼成は良。外面の色調は5YR6/3にぶい橙色、内面は7.5YR6/4にぶい橙色。	口縁部 破片資料
図58-25		壷	1区 C5 20層	頸径(8.6)	壷の口縁部から頸部にかけての資料である。口唇部は欠損。	外面はハケ調整の後に櫛状工具による直線文、その下位に縄文を施す。内面はハケ調整。	胎土にφ～0.5㎜灰色・茶褐色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR7/4にぶい橙色。	頸部 破片資料
図58-26		壷	1区 C5 20層		複合口縁を持つ壷である。	口縁部下端が欠落している。口唇部に粘土帯を貼り付け、その下位に連続棒状浮文を付けている。	胎土にφ～0.5㎜石英含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/3にぶい橙色。	口縁部 破片資料
図58-27	図版30	壷	1区 B5 20層	口径(17.0)	複合口縁を持つ壷である。	外面は櫛状工具で波状文を施した後に棒状浮文を付ける。口唇部の平坦面には波状文。内面は摩滅。	胎土にφ～1㎜石英・灰褐色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR8/1灰白色。	口縁部 約1/7残存
図58-28	図版30	壷	1区 B6 20層		壷の肩部である。	外面に縄文と鋸歯文。内面は摩滅。破片を円形に再加工。	胎土にφ～1㎜石英、灰色・褐色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/3にぶい橙色。	肩部 破片資料 土製円盤か。
図58-29		甕	1区 B4 20層	口径(12.5) 頸径(10.3)	小型の甕である。緩やかに外反する口縁を持つ。	内外面共にハケ調整。口唇部に刻目を施す。全体的に摩滅。	胎土にφ～3㎜石英、灰色等粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR6/6橙色。	口縁部 約1/4残存
図58-30	図版30	甕	1区 C6 20層		小型の甕である。緩やかに外反する口縁を持つ。	内外面共にハケ調整。平坦に仕上げられた口唇部にもハケ調整。	胎土にφ～3㎜雲母、石英、白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR6/4にぶい橙色。	口縁部 破片資料 外面煤付着
図58-31		壷	1区 B5 21層	口径(12.4)	単純口縁を持つ壷である。直線的に延びる口縁部で、口唇部は平坦に仕上げられている。	内外面共にハケ調整を施す。全体的に摩滅。内面に円形浮文を付ける。	胎土にφ～0.5㎜石英、黒色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/2にぶい黄橙色、内面は7.5YR7/2明褐灰色。	口縁部 約1/5残存
図58-32		壷	1区 C5 21層	底径3.9	壷の底部である。平坦な底面を持ち、胴部は直線的に延びる。	外面と底面はヘラミガキを施す。内面はハケ調整。	胎土にφ～3㎜石英、灰色砂粒等含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/2にぶい黄橙色、内面はN5/灰色。	底部 完存
図58-33		壷	1区 C6 21層	頸径(8.2)	壷の頸部から肩部にかけての資料である。頸部までは直線的に延びる。頸部から外反する。	外面はハケ調整とヘラミガキ。頸部付近に横位の沈線文か。内面は頸部付近までヘラミガキか。下位はハケ調整。	胎土にφ～0.5㎜雲母含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/3にぶい橙色、内面はN6/灰色。	頸部 ～胴部 破片資料
図58-34	図版30	壷	1区 B4 21層		壷の肩部である。	外面はハケ調整の後に円形浮文と櫛描波状文。内面は摩滅して判然とせず。	胎土にφ～0.5㎜雲母含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/4にぶい黄橙色、内面は7.5YR7/3にぶい橙色。	肩部 破片資料
図58-35	図版30	壷	1区 B6 21層		壷の肩部である。	外面はハケ調整の後に円形浮文と沈線。沈線は先端が鋭い棒状工具を使用して押し引きか。	胎土にφ～1㎜石英、白色・赤色粒子等含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/2明褐灰色。	肩部 破片資料
図58-36	図版30	壷	1区 B5 21層		太頸壷の口縁部か。口唇部は僅かに折返し、平坦に仕上げている。	外面は荒いハケ調整か条痕。口唇部の平坦面も同様。内面はナデか	胎土にφ～1㎜石英、雲母等含有。焼成は良。外面の色調は10YR6/2灰黄褐色、内面は2.5Y6.5/2灰黄色。	口縁部 破片資料
図58-37	図版30	甕	1区 C6 21層		甕の口縁部である。	外面は荒いハケ調整か条痕。内面は判然とせず。口唇部を指頭押圧している。	胎土にφ～1㎜石英、雲母等含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR3/1黒褐色。	口縁部 破片資料
図58-38	図版30	甕	1区 B5 21層		甕の口縁部である。	内外面共にハケ調整。口縁部を折り返しハケ状工具で刻目を入れる	胎土にφ～5㎜雲母、灰褐色・白色粒子等含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR7/6橙色。	口縁部 破片資料
図58-39		甕	1区 C5 21層	底径7.7	台付甕の台部である。	外面はハケ調整の後にヘラナデか。台部内面はヘラナデとハケ調整。	胎土にφ～5㎜石英、粒子、砂粒等含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/3にぶい橙色。	台部 約4/5残存
図59-40	図版29	壷	1区 B5 SX161	頸径3.1 胴部径10.2 底径4.2	小型壷である。胴部の最大径はやや下位寄りにあり、立ち上がりも直線的なため、算盤玉の如き外観を呈する。口縁部欠損。	外面はヘラミガキを施す。内面は頸部付近に輪積痕有り。	胎土にφ～0.5㎜白色、黒色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR6/3にぶい褐色。	頸部 ～底部 完存
図59-41		壷	1区 B5 SX161		壷の肩部である。	外面に棒状工具で三角文を施し、区画内に刺突文。	胎土にφ～1㎜石英・雲母含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR5/4にぶい褐色、内面は2.5Y5/1黄灰色。	肩部 破片資料
図59-42	図版29	壷	1区 C5 23層	口径(6.9) 頸径(5.7) 胴部径(20.2) 底径(4.5) 器高(28.1)	短頸気味の壷である。最大径が胴部下位にあり、底部から直線的に立ち上がり、屈曲してから微かに内湾する。肩部～口縁部の境界は不明瞭で、口縁部は軽く外反させ口唇部は丸く仕上げる。	外面は胴部中位から肩部にかけて浅い櫛状工具で丁字文。口唇部直下に波状文と直線文か。胴部中位から下位は丹念なヘラミガキを施す。底面には籾目か。内面の調整は器面が剥脱しているため不明。	胎土にφ～1.5㎜石英・砂粒含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR1.7/1黒色、内面は7.5YR6/3にぶい褐色。	全体の 約1/3残存
図59-43	図版29	壷	1区 B5 23層	胴部径(25.4)	細頸壷である。口縁部と胴部中位から底部にかけて欠損。張りのある肩部から内傾気味に頸部が立ち上がる。	胴部中位はヘラミガキ。胴部上位から肩部は磨消縄文。頸部には重四角文等の区画文とその内部の刺突文。頸部中位に棒状浮文を4箇所付ける。	胎土にφ～2㎜雲母、白色・赤褐色粒子、砂粒等含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR5/3にぶい黄橙色。	全体の 約2/5残存
図59-44	図版29	壷	1区 B5 23層	口径(6.7) 頸径(6.1)	短頸壷の口縁部である。口縁部は軽く外傾させ、口唇部は平坦に仕上げている。	口唇部直下は横位のハケ調整、頸部にかけては縦位のハケ調整を施し、櫛描直線文を施す。口唇部はナデ。内面は板ナデか。	胎土にφ～2㎜赤褐色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR8/3浅黄橙色。	口縁部 約1/2残存

１区出土土器３

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図59-45	図版29	壷	１区 C5 23層	口径6.8 頸径5.5	短頸壷の口縁部である。口縁部は軽く外反させ、口唇部は平坦に仕上げている。	外面はハケ調整を施す。口唇部から内面にかけてナデ。頸部上位内面はハケ調整、中位から下は指ナデ。	胎土にφ～1.5㎜赤褐色・白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR8/3浅黄橙色。	口縁部 完存
図59-46	図版29	壷	１区 C5 23層	口径(5.9)	細頸壷の口縁部か。口縁部は軽く外反させ口唇部を平坦に仕上げている。	外面はハケ調整。口唇部はナデ。内面に指頭痕有り。	胎土にφ～２㎜白色粒子、砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/4にぶい橙色。	口縁部 約1/2残存
図59-47		壷	１区 23層	口径(7.9)	受口状口縁を持つ壷である。	内外面共にヘラミガキを施す。屈曲部に刻目を施す。	胎土にφ～１㎜石英、灰色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/4にぶい橙色。	口縁部 約1/6残存
図59-48	図版30	壷	１区 B5 23層		壷の肩部である。	外面は縄文を施した後に棒状工具で２条の波状文。下位のヘラミガキは縄文の施文後。	胎土にφ～0.5㎜雲母、石英含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR3/2黒褐色。	肩部 破片資料
図59-49	図版30	壷	１区 C5 23層		壷の肩部である。	外面に縄文、沈線、円形浮文が見られる。内面は摩滅。	胎土にφ～１㎜雲母、石英含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR5/4にぶい赤褐色。	肩部 破片資料
図59-50	図版30	壷	１区 C5 23層		壷の頸部である。	外面に櫛状工具で丁字文を施す。内面はハケ調整か。輪積痕が観察される。	胎土にφ～２㎜石英、白色粒子、砂粒等含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/3にぶい橙色、内面はN6/灰色。	頸部 ～肩部 破片資料
図59-51	図版30	壷	１区 B5 23層		壷の肩部である。	外面に磨消縄文を施す。内面は摩滅して調整は判然としない。	胎土にφ～１㎜雲母、石英含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR5/3にぶい褐色、内面は10YR6/4にぶい黄橙色。	肩部 破片資料
図59-52	図版30	壷	１区 C5 23層		壷の肩部である。	外面に磨消縄文を施す。内面は摩滅して調整は判然としない。	胎土にφ～１㎜雲母、石英含有。焼成は良。外面の色調は10YR4/1褐灰色、内面は10YR6/3にぶい黄橙色。	肩部 破片資料
図60-53	図版30	壷	１区 C5 23層		壷の胴部か。	外面に沈線が６条観察される。複合鋸歯文か。内面の調整は判然としない。	胎土にφ～0.5㎜雲母、石英、灰色粒子含有。焼成は良。外面の色調は5YR4.5/1褐灰色、内面は5YR3/1黒褐色。	胴部 破片資料
図60-54	図版30	壷	１区 C6 23層		壷の肩部である。	外面に棒状工具を用いて格子文を施す。内面は摩滅。	胎土にφ～１㎜雲母、石英、灰色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR7/3にぶい黄橙色	肩部 破片資料
図60-55	図版30	壷	１区 C6 23層		壷の肩部である。	外面に棒状工具を用いて沈線文を施す。内面に指頭痕か。摩滅気味。	胎土にφ～１㎜雲母、石英含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR5/1褐灰色、内面は10YR7/2にぶい黄橙色。	肩部 破片資料
図60-56	図版30	壷	１区 C5 23層		壷の肩部である。	外面に櫛状工具を用いて波状文を施す。下位に丁字文か。内外面共に摩滅気味。	胎土にφ～１㎜雲母、石英、灰色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に2.5Y7/1灰白色。	肩部 破片資料
図60-57		壷	１区 B5 23層	底径4.3	壷の底部である。底部は上げ底になっている。	見込みは板ナデか。内外面共に摩滅気味。	胎土にφ～２㎜砂粒、白色粒子等含有。焼成は良。外面の色調は10YR6/2灰黄褐色、内面は10YR6/2灰黄褐色。	底部 完存
図60-58		壷	１区 C5 23層	底径(7.0)	壷の底部である。木葉痕の有る平坦な底面を持つ。	外面はヘラミガキか。見込みはヘラナデか。	胎土にφ～１㎜灰褐色・黒色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR7/2にぶい黄橙色。	底部 約1/4残存
図60-59		壷	１区 C5 23層	底径(6.7)	壷の底部である。木葉痕の有る平坦な底面を持つ。	外面はヘラミガキか。内面は摩滅して調整は判然としない。	胎土にφ～１㎜石英、灰色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に2.5Y6/2灰黄色。	底部 約1/6残存
図60-60		甕	１区 C5 23層	底径(10.2)	台付甕の台部か。僅かに外湾した台部。端部は面取り。	内外面共にハケ調整。内面に一部指頭痕有り。	胎土にφ～３㎜砂粒・白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/2明褐灰色、内面は7.5YR6/4にぶい褐色。	台部 約1/3残存
図60-61	図版30	甕	１区 B5 23層		甕の口縁部である。口唇部は平坦に仕上げている。	外面は荒いハケ調整か条痕。平坦な口唇部にはハケ調整を施し、後に内外面よりハケ状工具で刻目。内面は横位のハケ調整。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子、砂粒他含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR5/2灰黄褐色。	口縁部 破片資料
図60-62	図版30	甕	１区 B4 23層		甕の口縁部である。軽く外反させ折返している。折り返して突帯に仕上げた箇所には棒状工具で刻目を入れている。	外面は荒いハケ調整か条痕。平坦な口唇部に沈線か条痕。内面はナデを施す。	胎土にφ～0.5㎜雲母、白色粒子砂粒含む。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR5/2灰褐色。	口縁部 破片資料
図60-63	図版30	甕	１区 C5 23層		甕の口縁部である。軽く外反させ口唇部を平坦に仕上げ、工具で両面から押圧。	外面は荒いハケ調整か条痕。平坦な口唇部に沈線か条痕、後に押圧を加える。内面はナデか。	胎土にφ～0.5㎜石英、白色・黒色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR2.5/2黒褐色、内面は7.5YR5/4にぶい褐色。	口縁部 破片資料
図60-64	図版30	壷	１区 排水溝北 24層	口径(22.0)	受口状口縁を持つ壷である。口縁部を垂直に屈曲させ、口唇部を尖らせている。	外面はハケ調整の後に縦位の沈線を２条施す。口唇部内面は棒状工具で押圧。	胎土にφ～３㎜石英、雲母含有。焼成は良。色調は内外面共に2.5YR6/1黄灰色。	口縁部 約1/8残存
図60-65	図版30	壷	１区 排水溝北 24層	口径(7.4)	受口状口縁を持つ壷である。口縁部を垂直に屈曲させ、口唇部は丸く仕上げている。	外面はハケ調整を施す。口唇部は横ナデの後に波状文。内面はヘラナデ。	胎土にφ～２㎜石英、砂粒、灰色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR8/2灰白色。	口縁部 約1/7残存
図60-66	図版30	壷	１区 C5 24層		細頸壷の頸部である。	外面はまず縦位の櫛描直線文を施した後に横位の直線文と波状文を施す。内面は摩滅。僅かに輪積痕有り。	胎土にφ～1.5㎜石英、灰白色、褐灰色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/3にぶい橙色、内面は7.5YR8/2灰白色。	頸部 破片資料
図60-67	図版30	壷	１区 C6 24層		壷の肩部である。	外面に磨消縄文が施されている。内面は摩滅している。	胎土にφ～１㎜石英含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR4/3褐色。	肩部 破片資料
図60-68	図版30	壷	１区 排水溝 24層		壷の肩部である。	外面はハケ調整した後に縄文を施し横位の沈線を３条引いている。内面はナデか。	胎土にφ～１㎜石英含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR6/6橙色	肩部 破片資料

１区出土土器４

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図60-69	図版30	壷	１区 C5 24層		壷の肩部である。	外面に磨消縄文が施されている。内面は摩滅している。	胎土にφ～１㎜雲母、石英含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR3/1黒褐色。	肩部 破片資料
図60-70	図版30	壷	１区 排水溝 24層		壷の肩部である。	外面に重三角文。工具先端は角状を呈する。内面はナデか。	胎土にφ～１㎜雲母、石英、黒色粒子含有。焼成は良。外面の色調はN3/暗灰色、内面は2.5Y7/2灰黄色。	肩部 破片資料
図60-71	図版30	壷	１区 排水溝 24層		壷の肩部である。	外面には半截竹管状の工具で重三角文を描き、区画内で同一工具で刺突。爪形の刺突文とする。内面は板ナデ。	胎土にφ～0.5㎜雲母・石英含有。焼成は良。外面の色調はN2/黒色、内面は7.5YR4/1褐灰色。	肩部 破片資料
図60-72	図版30	壷	１区 排水溝 24層		壷の肩部である。	外面に棒状工具を用いて格子文を施す。内面は摩滅。	胎土にφ～２㎜石英、灰褐色・赤褐色粒子、砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/3にぶい橙色。	肩部 破片資料
図60-73	図版30	壷	１区 C5 24層		壷の肩部である。	外面は縦位のハケ調整の後に斜方向の稚拙な櫛描波状文が施されている。内面は摩滅気味。ナデか。	胎土にφ～１㎜雲母、石英、灰白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR4.5/2灰黄褐色。	肩部 破片資料
図60-74	図版30	甕	１区 B5 24層		甕の口縁部である。僅かに外反し口唇部を平坦に仕上げた後に、工具により両面から押圧。	外面は荒いハケ調整か条痕。平坦にハケ状工具で口唇部を仕上げ、押圧。内面は条痕か板ナデ。	胎土にφ～0.5㎜雲母、石英、灰色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR5/4にぶい褐色。	口縁部 破片資料
図60-75	図版30	甕	１区 C6 24層		甕の口縁部である。口唇部を軽く外折させ、口唇部を押圧か。	外面は荒いハケ調整か条痕。口唇部を外折させて押圧した後に内面を板ナデか。	胎土にφ～0.5㎜雲母、石英含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR3.5/1黒褐色、内面は7.5YR6/3にぶい褐色。	口縁部 破片資料
図60-76	図版30	甕	１区 C5 24層		甕の口縁部である。口唇部を平坦に仕上げた後に押圧。	外面は荒いハケ調整か条痕。口唇部の押圧は工具か指頭によるものか判然としない。内面は板ナデ。	胎土にφ～0.5㎜石英、雲母、灰褐色粒子含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y3/1黒褐色、内面は2.5YR5/6明赤褐色	口縁部 破片資料
図60-77	図版30	甕	１区 B5 24層		甕の胴部か。直線的に立ち上がる。	外面はハケ調整の後に縦位の羽状文を施し、下位に横位の沈線を引く。磨消線文甕か。	胎土にφ～１㎜雲母、石英、灰色粒子等含有。焼成は良。外面の色調は10YR5/2灰黄褐色、内面は7.5YR4/2灰褐色。	胴部 破片資料
図60-78	図版30	甕	１区 排水溝 24層		甕の胴部である。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で羽状文を施している。内面は横位の板ナデ。	胎土にφ～５㎜褐色・白色粒子、砂粒含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR3/2黒褐色、内面は7.5YR6/4にぶい橙色。	胴部 破片資料 外面煤付着

２区出土土器１

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図61-1	図版31	甕	２区 BC13 ＊15層 相当層	口径(12.4) 頸径(10.8)	甕である。口縁部から肩部にかけての資料である。口縁部は頸部から直線的に立ち上げる。口唇部はやや尖らせる。	外面はハケ調整の後、板ナデか。内面は横方向の板ナデか。下位に横方向のハケ調整。	胎土にφ～５㎜暗灰色等砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR6/3にぶい黄橙色。	口縁部 約1/3残存
図61-2	図版31	高坏	２区 BC13 ＊15層 相当層	底径13.3	高坏の脚部である。「ハ」の字状に広がる。中位より僅かに外反気味になる。	外面は縦位のヘラミガキ。脚部端部は横方向のヘラミガキ。内面はハケ調整を施す。	胎土にφ～４㎜灰白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/1明褐灰色。内面は2.5YR6/6橙色。	脚部 約2/3残存 外面赤彩か。
図61-3		高坏	２区 BC13 ＊15層 相当層	底径(14.6)	典型的な「屈折脚高坏」。下位で大きく屈折。脚部端部はやや丸く仕上げる。	外面はハケ調整の後、縦位のヘラナデ。下位は横方向の板ナデか。内面は板ナデか。	胎土にφ～1.5㎜暗灰色～褐灰色粒子含有。焼成は良。外面の色調は5YR7/6橙色。内面は7.5YR7/3にぶい黄橙色。	脚部 破片資料
図61-4	図版31	壷	２区 17～19層	口径12.2 頸径7.4 最大径21.6 底径7.2 器高23.0	壷である。底部から内湾気味に立ちあがり、胴部中位で最大径をはかる。肩部は張りがあまりない。頸部は直線的に立ち上がり、口縁部は外反する。	外面は全面ハケ調整を施した後に頸部から下位を縦方向のヘラミガキを施している。内面はハケ調整。底面には木葉痕。	胎土にφ～１㎜の白色粒子、石英を含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/3にぶい褐色、内面は10YR7/2にぶい黄橙色。	全体の 約2/3残存
図61-5	図版31	壷	２区 17～19層	口径(14.4) 頸径(8.4)	壷である。口縁部から胴部にかけての資料である。無花果形を呈し肩部に張りはあまりない。単純口縁である。	外面は全面ハケ調整を施し、肩部に円形浮文を貼る。口唇部はハケ調整を施しており、平坦に仕上げられている。内面にはハケ調整、輪積痕、指頭痕有。	胎土にφ～１㎜石英、白色粒子を含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/4にぶい橙色、内面は10YR6/1褐灰色。	口縁部 約2/3残存
図61-6	図版31	壷	２区 B12 17～19層	口径(14.0) 頸径11.2	壷である。丸みを帯びた胴部から、直線的に頸部が立ち上がる。口唇部は丸く仕上げている。	外面は精緻な縦方向のヘラミガキ。頸部のみ横方向。内面は板ナデ。指頭痕有り。	胎土にφ～１㎜白色粒子、石英、砂粒を含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR7/3にぶい黄橙。	口縁部 約2/3残存
図61-7		壷	２区 B12 17～19層	口径(11.5) 頸径(8.5)	短頸壷の口縁部である。肩部から緩やかに外反して口縁部に至る。口唇部は平坦に仕上げられている。	外面はハケ調整。その後に肩部に櫛状工具を用いて２～３条の横方向の直線文を施す。内面は摩滅気味。一部にハケ調整か。	胎土にφ～１㎜黒色・褐色・白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR6/4にぶい橙色。	口縁部 約1/4残存
図61-8		壷	２区 B17 17～19層	口径(12.1) 頸径(8.2)	短頸壷の口縁部である。肩部から外反して口縁部が延びる。口唇部は平坦に仕上げている。	内外面共にハケ調整の後にヘラミガキ。口唇部の平坦面もヘラミガキか。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR8/2灰白色。	口縁部 ～肩部 約1/2残存
図62-9		壷	２区 B17 17～19層	頸径(9.0) 胴部径(22.2)	口縁部と底部を欠いた壷である。胴部は丸みを帯び、口縁部は外反する。	外面はハケ調整の後にヘラミガキ。内面は口縁部付近は板ナデ。頸部から下位はハケ調整。指頭痕が観察される。	胎土にφ～0.2㎜白色・灰色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/3にぶい橙色、内面は2.5Y5/1黄灰色。	全体の 約2/5残存
図62-10	図版31	壷	２区 B14 17～19層	口径(16.7) 頸径7.4	壷の口縁部である。肩部はあまり張らず、なだらかに頸部に移行する。折返口縁を持つ。口縁部と肩部に浮文を貼る。	外面は全面ハケ調整を施した後に頸部より下位にヘラミガキを施している。口縁部は折返して、ハケ調整。内面は全面ハケ調整。頸部と胴部の接合部のみ後からナデ。	胎土にφ～１㎜白色粒子、雲母？含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR6/3灰白色。	口縁部 約2/3残存

２区出土土器２

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図62-11	図版32	壷	２区 B14 17～19層	口径(15.4) 頸径(9.0)	壷の口縁部から胴部中位にかけての資料である。口縁部は膨らみの有る胴部から緩やかに外反して折返し口縁である。	口唇部には刻目とハケ調整。その他外面は全てハケ調整。ハケ調整の後に口縁部を折返し。口縁部内面はヘラミガキ。他はハケ調整。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/3にぶい橙色、内面は2.5Y5/1黄灰色。	全体の約1/7残存
図62-12	図版32	壷	２区 B17 17～19層	口径(14.0) 頸径9.2	壷の口縁部から胴部中位にかけての資料である。短頸気味である。肩はあまり張らず、なだらかに頸部に移行する。折返口縁を持つ。	外面は全面ヘラミガキを施す。その後、口縁部を折り返す。口縁部はハケ調整。内面は口縁部は板ナデか。胴部から輪積痕を残す。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/4にぶい黄橙色、内面は10YR6/1褐灰色。	口縁部約4/5残存
図62-13		壷	２区 B17 17～19層	口径(13.3)	広頸壷である。折返し口縁である	外面はヘラミガキを施す。内面はハケ調整を施した後に、口縁部内面には横方向のヘラミガキを施している。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR7/4にぶい橙色。	口縁部約1/3残存
図62-14		壷	２区 B14 17～19層	口径(27.0)	壷の口縁部から頸部にかけての資料である。頸部は僅かに外彎する複合口縁である。棒状浮文有り。	頸部外面には縄文が、口縁部直下にハケ調整が施されている。内面は横方向のハケ調整。	胎土にφ～１㎜白色粒子、砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR6/4にぶい黄橙色	口縁部約1/8残存 内面赤彩か。
図62-15		壷	２区 B11 17～19層	口径(8.8)	壷の口縁部から肩部にかけての資料である。	外面はハケ調整の後、ヘラミガキか。口縁部内面はハケ調整の後、ナデ。胴部内面は指ナデ。	胎土にφ～２㎜石英、砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR7/2にぶい黄橙色。	口縁～肩部約1/5残存
図62-16		壷	２区 BC13 17～19層		壷の肩部である。	肩部にハケ状工具で連続して刺突。羽状文をなす。それ以外の部位はヘラミガキか。内面はナデ。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR5/1褐灰色、内面は10YR7/3にぶい黄橙色。	肩部 破片資料 東遠江の 菊川式系か。
図62-17		壷	２区 B12 17～19層		壷の肩部である。	外面は縄文を施した後、棒状工具で沈線を描く。沈線で区画された箇所は縄文を磨り消している。	胎土にφ～２㎜白色粒子、砂粒等含有。焼成は良。外面の色調は10YR5/2灰黄色、内面は2.5Y2/1黒色。	肩部 破片資料
図63-18	図版32	甕	２区 B17 17～19層	口径16.2 頸径14.4 最大径20.7 底径9.6 器高25.8	台付甕である。胴部は内湾しながら立ち上がる。肩の張りはあまり無く口縁部はゆるやかに外反する。台部には棒状浮文を１箇所貼り付けている。	外面はハケ調整を施す。胴部と台部との接合部のみナデを施す。内面もハケ調整を施し、一部その後、ナデ調整か。	胎土にφ～１㎜白色粒子を含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/2灰褐色、内面は10YR7/2にぶい黄橙色。	全体約2/3残存 煤付着
図63-19		甕	２区 B12 17～19層		甕の口縁部である。	外面は斜方向にハケ調整を施した後に棒状工具で沈線。横位羽状文か。口唇部はハケ調整の後、指頭押圧。爪痕有。	胎土にφ～２㎜石英、φ～４㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は10YR3/2黒褐色。内面は10YR6/2灰黄褐色。	口縁部 破片資料
図63-20		甕	２区 BC12 17～19層	底径7.4	甕の底部である。体部は平坦な底部から直線的に立ちあげる。	外面は粗いハケ調整もしくは条痕。内面はナデ。底面には網代痕が観察される。	胎土にφ～１㎜石英、φ～２㎜砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR5/4にぶい褐色。	底部 完存
図63-21	図版32	高坏	２区 B17 17～19層	口径(21.8) 坏部底径(9.0) 底径(11.8) 器高15.9	高坏である。「ハ」の字状に大きく広がる脚部と、微かに内湾して大きく広がる坏部がある。脚部の透かし孔は４ヶ所か。	坏部外面は全面ヘラミガキか。坏部上半部のみハケ調整か。坏部内面はハケ調整の後ナデか。脚部内面は板ナデ。	胎土にφ～0.2㎜白色・灰色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/2明灰褐色。	全体の約1/3残存
図63-22		高坏	２区 B18 17～19層		高坏である。坏部は直線的に立ち上げ、口縁部付近で内彎させている。口唇部に突起がある。	内外面共に精緻なヘラミガキを施した後、赤彩している。口唇部はやや平坦で縄文を施している。	胎土にφ～１㎜雲母、白色粒子含有。焼成は良。内外面共に7.5YR4/4にぶい赤色。	口縁部 破片資料 栗林式か。
図64-23	図版33	壷	２区 B12 SD201	口径(20.2) 頸径(8.5)	壷の口縁部である。折返し口縁である。大きく外反させた後に、口唇部を折り返している。	外面はハケ調整した後、縦方向のヘラミガキを施す。折り返した口縁部端面に波状文、その後一部ハケ調整。内面はハケ調整した後にヘラミガキ。口縁部内面は波状文。	胎土にφ～１㎜雲母、白色・灰褐色・暗褐色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/4にぶい橙色。	口縁部約1/2残存
図64-24		壷	２区 B12 SD201	口径(15.6) 頸径(6.2)	折返口縁である。大きく外反させた後、口唇部を折り返している。口縁部は穿孔されている。	外面はハケ調整した後、縦方向のヘラミガキを施す。折り返した口縁部には指頭痕がある。内面はハケ調整の後ヘラミガキか。	胎土にφ～２㎜石英、砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共に2.5Y7/3浅黄色。	口縁部約1/6残存
図64-25		壷	２区 B12 SD201		壷の胴部である。	外面は縄文を施した後、棒状工具で沈線を描く。沈線で区画された箇所は縄文を磨り消している。	胎土にφ～３㎜白色粒子、砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共10YR6/3にぶい黄橙色。	肩部 破片資料
図64-26	図版33	甕	２区 B12 SD201	口径(18.0) 頸径(16.2) 体部径(18.4)	台付甕か。台部は欠失。口縁部は頸部から外折して延びる。口唇部はやや平坦に仕上げられている。	外面は全面ハケ調整。口縁部はその後ヘラナデ。内面は板ナデか。口縁部のみハケ調整。	胎土にφ～１㎜雲母、石英、灰色粒子等含有。焼成は良。外面の色調は2.5YR5/6明赤褐色、内面は5YR5/6明赤褐色。	口縁部約1/6残存 外面煤付着
図64-27	図版32	壷	２区 B11 SD203	口径(16.3) 頸径(7.9) 最大径26.2 底径10.0 器高32.4	折返口縁を持つ壷である。平坦な底部から体部は内湾気味に立ち上がり、胴部中位で最大径をはかる肩は張りが無く、口縁部は大きく外反する。	外面はハケ調整の後、ヘラミガキ。口縁部を折り返した後に、ハケ調整している。口縁部内面は波状文。内面はヘラミガキを施す。ハケ状工具か。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は5YR7/3にぶい橙色、内面は7.5YR6/2灰褐色。	全体の約2/3残存
図64-28		壷	２区 B11 SD203	口径(19.0)	折返口縁である。大きく外反した口縁で、穿孔されている。	外面はハケ調整の後、ヘラミガキ。口唇部に浮文を貼る。内面はヘラミガキ。口唇部は付近は連続刺突文。内側から焼成前に穿孔。	胎土にφ～２㎜の白色粒子、砂粒含有。焼成は良。内外面共に色調は10YR6/4にぶい黄橙色。	口縁部約1/3残存
図65-29		壷	２区 B16 SK219	頸径(5.5)	壷の頸部である。	外面はハケ調整した後に波状文を施す。内面はナデ。輪積痕が明瞭に残る。	胎土にφ～２㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/4にぶい橙色、内面は10YR6/1褐灰色。	頸部約1/2残存 外面赤彩
図65-30		壷	２区 B13 SK220	口径(14.2) 頸径(6.9)	壷の口縁部である。折返し口縁である。	外面はハケ調整の後にヘラミガキ。折り返した口縁部付近はナデか。内面はハケ調整の後にヘラミガキ。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR8/4浅黄橙色、内面は7.5YR8/3浅黄橙色。	口縁部約1/3残存
図65-31		壷	２区 B13 SK220		壷の口縁部である。複合口縁である。	外面は波状文を施した後に棒状浮文を貼り付けている。口唇部にも波状文。頸部はハケ調整。内面はハケ調整の後にヘラミガキ。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR8/6浅黄橙色。	口縁部 破片資料

２区出土土器３

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図65-32		壷	２区 B13 SK220		壷の肩部である。	外面はハケ調整の後にヘラミガキか。円形浮文を２個１組で貼り付ける。内面は指ナデ。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/4にぶい橙色、内面は10YR6/2灰黄褐色。	肩部 破片資料
図65-33		壷	２区 B13 SK220	頸径5.1	細頸壷の頸部である。肩部から直線的に立ち上がる。	外面は縄文を施した後に下半部をハケ調整。内面はナデか。	胎土にφ～３㎜石英、砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR8/6～7/6浅黄橙色～橙色。	頸部 破片資料
図65-34		高坏？	２区 B13 SK220	括れ径4.0 底径(7.3)	高坏の脚部か。	外面は縦方向の精緻なヘラミガキ。内面はヘラナデ・ヘラ削りか。	胎土にφ～1.5㎜石英、白色・灰褐色粒子等含有。焼成は良。外面の色調は10YR8/2灰白色。内面は7.5YR7/3にぶい橙色。	脚部 約4/5残存 外面赤彩
図65-35		壷	２区 B15 SA201	口径(12.5) 頸径(8.5)	短頸壷である。単純口縁で、その口縁は外側に直線的に延びる。口唇部は平坦に仕上げている。	外面はハケ調整の後にヘラミガキを施す。内面はハケ調整。頸部付近は後からミガキ。肩部はナデか。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR6/4にぶい橙色。	口縁部 約1/4残存
図65-36		壷	２区 B15 SA201	口径(17.4)	浮文を貼り付けた単純口縁を持つ壷である。	外面はハケ調整。口唇部は平坦に仕上げた後、口縁内部に縄文を施している。内面はハケ調整の後にヘラミガキ。穿孔は内面から行っている。	胎土にφ～１㎜雲母、褐白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/3にぶい橙色、内面は7.5YR7/3にぶい橙色～7.5YR7/1明褐灰色。	口縁部 約1/2残存
図65-37	図版33	壷	２区 B15 SA201	口径(14.5) 頸径7.1 胴部径17.5 底径(8.7) 器高21.3	折返し口縁を持つ壷である。イチジク形を呈し、口縁部は大きく外反する。底面には木葉痕が残る。	外面はハケ調整の後に縦方向のヘラミガキ。胴部下位は横方向のヘラミガキ。円形浮文を２個１組で２ヶ所に付ける。内面はハケ調整・ヘラミガキ・板ナデ。	胎土にφ～２㎜砂粒、白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/3にぶい橙色。	口縁部 底部以外は完存
図65-38		壷	２区 B14 SA201	口径(16.7)	折返し口縁を持つ壷である。	外面はヘラミガキ。口縁部のみハケ調整。内面は横方向のヘラミガキ。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は2.5YR5/8明赤褐色、内面は7.5YR6/4にぶい橙色。	口縁部 約1/3残存
図65-39		壷	２区 B15 SA201	口径(20.6)	折返口縁を持つ壷である。口縁部は大きく外反させる。	外面はハケ調整。口縁部に指頭痕有り。内面はハケ調整の後にヘラミガキ。口唇部は棒状工具で押圧。穿孔は内面から。２箇所は未貫通。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/3にぶい黄橙色。内面は10YR5/1褐灰色。	口縁部 約1/4残存
図65-40	図版33	壷	２区 B15 SA201	口径(20.7) 頸径9.3	折返し口縁を持つ壷である。大きく外反する。	外面はハケ調整の後にヘラミガキか。頸部から肩部にかけて波状文そして工具を用いて押引き文を施す。口縁部内面には波状文を施している。	胎土にφ～１㎜長石、砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/4にぶい橙色。	口縁部 から肩部 約1/3残存
図65-41	図版33	壷	２区 B15 SA201	口径18.9 頸径9.0	折返し口縁を持つ壷である。張りの少ない肩部から口縁部は大きく外反して延びている。	外面はハケ調整。頸部から肩部にかけて縦方向の波状文。円形浮文も付ける。口縁部内面も波状文。波状文直下から頸部はハケ調整。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR7/3にぶい黄橙色。	口縁部～ 肩部 ほぼ完存
図66-42	図版33	壷	２区 B14 SA201	口径(11.6) 頸径6.1	複合口縁を持つ壷である。最大径は胴部中位付近か。	外面はハケ調整の後にナデか。内面はハケ調整。頸部付近はナデ。肩部内面に輪積痕が見られる。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は5YR6/4にぶい橙色、内面は10YR7/2黄橙色。	口縁部 ～胴部 約5/6残存
図66-43		壷	２区 B14 SA201	口径(16.0) 頸径(8.8)	複合口縁を持つ壷である。頸部はやや外反させている。	外面はハケ調整の後にヘラミガキ。口縁部はハケ調整の後に棒状浮文を付ける。内面は口縁部でハケ調整、頸部以下でヘラミガキか。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR7/2にぶい黄橙色。	口縁部 約1/3残存
図66-44		壷	２区 B14 SA201	胴部径(22.6) 底径9.6	壷である。頸部から口縁部を欠損している。胴部は上から押し潰したように低平である。	外面はヘラミガキを主体とする。肩部と胴部下半部にハケ調整。内面はハケ調整。指頭痕・輪積痕がある。見込みはハケ調整、周辺は板ナデ。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/2にぶい黄褐色、内面は7.5YR7/3にぶい橙色。	肩部～底部 約2/3残存
図66-45		壷	２区 B14 SA201	底径(11.1)	壷の底部である。	外面はハケ調整の後にヘラミガキ。内面はハケ調整のみ。底面はヘラミガキ。ミガキ面下に木葉痕が観察される。	胎土にφ～0.3㎜雲母含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR8/3浅黄橙色。	底部 完存
図66-46		甕か。	２区 B15 SA201	口径(11.0)	小型の甕か。内湾気味の胴部。頸部は明瞭に屈折。	外面はハケ調整。内面はハケ調整の後にナデ。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面ともに7.5YR7/4にぶい橙色。	口縁部 約1/6残存
図66-47		甕	２区 B15 SA201	底径(8.7)	台付甕の台部である。	外面はヘラ状工具でナデか？内面はハケ調整。輪積痕有り。	胎土にφ～３㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y7/2灰黄色、内面は2.5Y4/1黄灰色。	底部 完存
図66-48		壷	２区 B14 SA201	底径(11.8)	壷の底部である。	外面はヘラミガキ。内面はハケ調整の後にヘラナデ。見込みはヘラナデ。底面はヘラミガキ面下に木葉痕が観察される。	胎土にφ～1.5㎜雲母、石英、白色・淡黒・灰白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR8/1灰白色、内面は7.5YR8/1灰白色	底部 約1/2残存
図66-49		壷	２区 B15 19層	口径(18.7)	折返し口縁を持つ壷である。	内外面共にハケ調整の後にヘラミガキ。口縁部を折返した後に口唇部もハケ調整の後にヘラミガキ。口縁部内面には縄文を施す。	胎土にφ～１㎜褐白色・暗灰色粒含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/2にぶい橙色。	口縁部 約1/8残存
図66-50		壷	２区 B14 19層	口径(24.9)	壷の口縁部である。折返し口縁である。	内外面ともにハケ調整。口縁部を折返した後に口唇部もハケ調整。ハケ状工具で口縁部を刺突し刻目を作る。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR6/4にぶい橙色。	口縁部 約1/8残存
図66-51		壷	２区 B15 19層		中期の太頸壷の口縁部か。受口状を呈する。大きく内傾している。	受口部基部に刻目、その上位に浮文を付ける。刻目直下にが荒いハケ調整。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR5/4にぶい褐色、内面は7.5YR6/4にぶい橙色。	口縁部 破片資料
図66-52		甕	２区 B16 19層		甕の胴部である。	外面にヘラ状工具で沈線を斜方向に描く。横位羽状文か。内面はナデか。	胎土にφ～１㎜石英含有。焼成は良。外面の色調は10YR6/4にぶい黄褐色、内面は2.5YR6/6黄褐色。	胴部 破片資料

２区出土土器４

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図66-53		甕	２区 B17 19層	底径9.2	台付甕の台部である。	外面はハケ調整。台部内面はナデ。輪積痕有り。底部見込みにはハケ調整。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR8/2灰白色。	台部 完存
図66-54		器台？	２区 B17 19層		器台か。坏部と脚部の接合部である。	外面はヘラミガキを施す。脚部内面にはハケ調整とナデ。坏部見込みはヘラミガキか。	焼成は良。外面の色調は10YR7/3にぶい黄褐色、内面は5YR6/4にぶい橙色。	坏部と脚部 破片資料
図67-55		壷	２区 B17 土手状ａ	口径(17.8)	壷の口縁部である。折返し口縁である。	外面はハケ調整の後にヘラミガキ。口唇部は指頭痕とヘラミガキが見られる。口縁部内面に波状文が施される。	胎土にφ～0.5㎜白色・灰色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR5/1褐灰色。	口縁部 約1/6残存
図67-56		壷	２区 B17 土手状ａ	頸径(7.9)	壷の頸部のみの資料。頸部に１条の粘土紐を巻いて突帯となす。ハケ状工具で刺突して刻目を施す。	外面はハケ調整の後にヘラミガキ。内面はヘラミガキを施す。肩部付近はナデか。輪積痕有り。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR8/3浅黄橙色。	頸部 約1/2残存
図67-57	図版34	甕	２区 B17 土手状ａ	口径(18.4) 頸径(16.6) 最大径(22.5)	台付甕の口縁部から胴部下位にかけての資料である。丸みのある胴部に外傾した口縁部がある。	内外面ともにハケ調整。口縁部外面のみナデ。外面に煤付着。	胎土にφ～３㎜雲母、石英、暗灰色、赤褐色粒子含有。焼成は良。色調は10YR8/2灰白色。	口縁部 ～胴部 約1/2残存
図67-58	図版34	甕	２区 B17 土手状ａ	口径(12.4) 頸径(11.5)	小型の甕である。口縁部は外方へ引き延ばされるように延びる。口唇部はやや尖らせている。	外面は横方向のナデか。内面は口縁部から頸部にかけてナデ。胴部はハケ調整。	胎土にφ～３㎜石英、黒色粒子等含有。外面の色調は10YR2/2黒褐色、内面は10YR7/3にぶい黄橙色。	口縁部 ～胴部 約1/2残存
図67-59		甕	２区 B17 土手状ａ	口径(16.8)	台付甕か。胴部の張りが弱い。口唇部の刻目は無く、平坦に仕上げている。	内外面共にハケ調整を施している。口縁部はナデ。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/3にぶい褐色。内面は10YR6/2灰黄褐色。	口縁部 約1/6残存 胴部下半に煤付着。
図67-60		甕	２区 B17 土手状ａ	底径(9.8)	台付甕の台部である。	体部外面と台部内面にハケ調整。台部外面にヘラナデ。	胎土にφ～１㎜石英、雲母含有。焼成は良。色調は内外面共に2.5Y7/1灰白色。	台部 約1/3残存
図67-61		高坏	２区 B17 土手状ａ		高坏の坏部・脚部の接合部。脚部の３方に透かし孔が有る。	外面は丁寧なヘラミガキ。見込みはヘラミガキか。その周縁はハケ調整。脚部内面にしぼり跡か。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に2.5YR6/2灰黄色。	全体の 約1/5残存
図67-62	図版34	高坏	２区 B17 土手状ａ	口径10.3 接合部径2.85 底径(5.8) 器高6.8	小型の高坏である。大きく外湾した坏部がある。口唇部は尖らせるように仕上げている。	外面はヘラミガキを施す。坏部内面はナデか。脚部内面はハケ調整を施す。	胎土にφ～１㎜白色・灰色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/3にぶい褐色、内面は5YR6/6橙色。	全体の 約4/5残存
図67-63	図版34	器台	２区 B17 土手状ａ	口径(10.0)	器台である。下半部は欠損。脚部の透かし孔は遺存状況から４ヶ所穿孔か。	外面及び坏部内面は丁寧なヘラミガキ。脚部内面はハケ調整とヘラケズリ。	胎土にφ～１㎜雲母、石英、灰白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR7/3にぶい黄褐色。	全体の 約2/3残存
図67-64		器台	２区 B17 土手状ａ		坏部見込みに穿孔がなされる。脚部の３方に透かし孔有り。	内外面共に丁寧なヘラミガキ。脚部内面は判然としない。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR6/3にぶい黄橙色。	全体の 約1/8残存
図67-65	図版34	鉢	２区 B17 土手状ａ	口径(9.9) 底径(5.7) 器高5.1	台の付いた小型の鉢である。	外面はハケ調整の後にヘラミガキか。口縁部はナデ。内面はハケ調整の後にヘラミガキ。	胎土にφ～4㎜石英、白色粒子、砂粒含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y7/3浅黄色、内面は2.5Y5/3黄褐色。	全体の 約1/3残存。 黒班有り。
図67-66	図版34	鉢	２区 B17 土手状ａ	口径(9.0) 底径3.8 器高4.6	小型の鉢である。平坦な底部からほぼ直線的に立ち上げている。口唇部は丸く仕上げている。	外面はハケ調整の後にナデか。内面はヘラミガキを施す。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR6/3にぶい褐色。	全体の 約2/3残存
図67-67		壷	２区 B17 土手状ｄ	口径(6.2)	小型の壷である。口縁部は折り返している。	外面はハケ調整。口縁部はナデか。内面はハケ調整の後ヘラミガキ。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR6/4にぶい橙色。	口縁部 約1/3残存
図67-68	図版34	壷	２区 B17 土手状ｄ	口径(9.6) 頸径(5.4)	単純口縁を持つ壷である。口縁部は微かに内湾して広がる。	外面はハケ調整の後にヘラミガキか。口縁部内面はハケ調整、頸部から肩部にかけて板ナデか。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR7/2にぶい黄橙色。	口縁部 ～肩部 約1/2残存
図67-69		壷	２区 B17 土手状ｄ	口径(18.2)	壷の口縁部である。複合口縁である。	口縁部は内外面共にハケ調整。頸部外面に一部ヘラミガキか。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR6/4にぶい黄橙色。	口縁部 約1/5残存
図67-70		壷	２区 B17 土手状ｄ	底径6.0	小型の壷である。肩部から口縁部にかけては欠損している。平坦な底部から内湾する胴部を立ち上げている。	外面はヘラミガキを施す。内面はハケ調整とナデ。指頭痕が残る。底面はヘラミガキ。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR6/4にぶい黄橙色、内面は2.5Y6/1黄灰色。	底部 完存
図67-71		甕	２区 B17 土手状ｄ	口径(21.8) 頸径(19.4)	胴部下位から台部が欠損した台付甕である。口縁部は外反し、口唇部に工具で刻目を入れている。	外面はハケ調整。口縁部・胴部上位はナデ。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/4にぶい橙色、内面は10Y6/8赤橙色。	口縁部 ～胴部 約1/5残存
図67-72		甕	２区 B17 土手状ｄ	底径(11.2)	台付甕の台部である。	外面はハケ調整を施す。内面もハケ調整。台部内面には一部ナデ。	胎土にφ～１㎜灰白色・白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/3にぶい橙色、内面は10YR6/2灰黄褐色。	台部 約2/3残存
図68-73	図版35	壷	２区 BC13 SR204	口径(18.4) 頸径(9.7)	折返し口縁を持つ壷である。口縁部は頸部から微かに外反して立ち上がる。肩部には円形浮文は３個１組で３ヶ所付けていたものか。	内外面共にハケ調整の後にヘラミガキか。内面には指頭痕が有る。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/3にぶい橙色、内面は10YR5/1褐灰色。	口縁部 ～体部 約2/3残存
図68-74		壷	２区 BC13 SR204	口径(24.6)	壷の口縁部である。複合口縁である。	内外面共にハケ調整。棒状浮文はハケ調整の後に貼り付けている。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR6/4にぶい橙色。	口縁部 破片資料
図68-75	図版35	壷	２区 B13 SR204		壷の頸部から胴部中位までの遺存した資料である。丸みを帯びた胴部、肩部には円形浮文は３個１組で３ヶ所付けていたものか。	外面はハケ調整を全面に施した後にヘラミガキ。内面は頸部付近はナデ。肩部はハケ調整。胴部は板ナデ。輪積痕・指頭痕有り。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/4にぶい橙色、内面は10YR5/1橙色。	頸部 ～胴部 約1/3残存
図68-76		甕	２区 B12・13 SR204	口径(16.0) 頸径(15.2)	台付甕であろう。口縁部はあまり外反せず、口唇部には工具で刻目を入れる。胴部下半と台部欠損。	内外面共にハケ調整。口縁部外面のみ横方向のナデ。	胎土にφ～８㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/6橙色内面は10YR7/3にぶい黄橙色。	口縁部 約1/4残存 外面煤付着

２区出土土器５

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図68-77		壷	２区 BC13 SR204	口径(7.1) 頸径(6.4) 胴部径(9.0)	小型の壷である。肩は明瞭ではなく、口縁部を緩やかに外反させ、口唇部を平坦に仕上げている。	外面は丁寧なヘラミガキを施す。内面は口縁部から頸部までヘラミガキ。胴部はヘラナデ。	胎土にφ～0.5㎜雲母、石英、灰色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/2～7/3明褐灰色～にぶい橙色。	全体の約1/2残存 外面赤彩か。
図68-78		壷	２区 B14 SX201	底径(8.0)	壷の底部である。体部は底部からやや内湾しながら立ち上がる。底面に微かに木葉痕が観察される。	外面はヘラミガキが施されている。内面はハケ調整が施されている。底面はヘラミガキか。	胎土にφ～0.5㎜雲母含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR7/2にぶい黄褐色。	底部約2/3残存
図68-79		壷	２区 B14 SX202	口径(17.6) 頸径(9.2)	単純口縁を持つ壷である。口縁部は頸部から外反しながら立ち上がり、口唇部は平坦に仕上げられている。	内外面ともにハケ調整の後にヘラミガキか。口唇部の平坦面にもハケ調整。	胎土にφ～0.2㎜雲母、灰色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/2明褐灰色、内面は10YR7/2にぶい黄橙色。	口縁部約1/4残存
図69-80	図版35	壷	２区 B14 微高地	口径(23.5) 頸径(10.2) 胴部径(36.8) 底径6.9 器高49.1	単純口縁を持つ壷である。底部から胴部は外湾気味に立ち上がり、胴部中位直下で内湾、最大径をはかる。肩部はあまり張らず頸部に移行し、口縁部は大きく外反させ口唇部は平坦に仕上げる。	外面はハケ調整。口縁部から胴部中位まで縦方向、胴部下位より横方向。内面は横方向のハケ調整。輪積痕や指頭痕が観察できる。底面には木葉痕が残る。口縁部は歪んでいる。	胎土にφ～２㎜以下の砂粒含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y6/1黄灰色、内面は10YR7/3にぶい黄橙色。	全体の約3/5残存
図70-81		壷	２区 B17 20層	口径(8.0)	壷の口縁部である。明瞭ではないが折返し口縁だろうか。口唇部を平坦に仕上げ、内面から穿孔。	外面はハケ調整。口唇部は平坦に仕上げはハケ調整して浮文を付ける。内面はハケ調整の後に縄文。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR7/3にぶい橙色。	口縁部約1/4残存
図70-82		壷	２区 B17 20層か	胴部径(25.7) 底径(9.6)	頸部～口縁部を欠いた壷である。胴部は外傾しながら立ち上がり、中位付近で内湾気味になる。底面には木葉痕が残る。	外面はハケ調整の後にヘラミガキを施す。内面はハケ調整である。胴部中位内面には指頭痕、下位には輪積痕が観察される。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/3にぶい橙色、内面は10YR7/2。	体部～底部残存
図70-83		壷	２区 B16 20層	口径(28.6)	壷の口縁部である。複合口縁である。	外面はハケ調整の後に棒状浮文を５条貼り付けている。内面はハケ調整、ナデ。	胎土にφ～１㎜灰色・橙色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/3にぶい橙色。	口縁部約1/8残存
図70-84		壷	２区 B17 20層	頸径(4.8) 胴部径(8.3) 底径(5.5)	小型の壷である。口縁部は欠損。胴部最大径が下位にある。形の崩れたイチジク形。底面に木葉痕。	外面はハケ調整の後にヘラミガキ。内面も全面ハケ調整であるが、肩部～胴部上位はナデか。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR7/3にぶい黄橙色。	全体の約4/5残存
図70-85		壷	２区 B16 20層	底径(8.0)	壷の底部である。底面には木葉痕が観察される。	外面の調整は摩滅して判然としない。内面はナデ。	胎土にφ～２㎜灰色砂粒含有。焼成は良。外面の色調は5Y6/1灰色、内面は5Y7/2灰白色。	底部約1/2残存
図70-86		壷	２区 B15 20層	底径(4.6)	壷の底部である。胴部は底部から大きく外反しながら立ち上がる。	外面はハケ調整の後にヘラミガキ。内面はハケ調整とナデ。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y6/2灰黄色、内面は2.5Y3/1黒褐色。	底部ほぼ残存
図70-87		壷	２区 B17 20層	底径9.4	壷の底部から胴部下位の資料である。底面に木葉痕が残る。	外面はヘラミガキ。底部見込みとその周囲はハケ調整だが、その上位はヘラミガキ。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/4にぶい橙色。内面5Y1/5灰色。	底部完存
図70-88	図版38	壷	２区 B16 20層		細頸壷の口縁部。口縁部は微かに外反させる。	外面はハケ調整の後に沈線で区画する。そして区画内に刺突文を施している。沈線の焦点に円形浮文を付ける。口唇部と口縁部内面に縄文を施す。内面は殆どナデ。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR3/2黒褐色、内面は2.5YR7/2灰黄色。	口縁部破片資料
図70-89	図版38	壷	２区 B16 20層		壷の頸部である。	外面はハケ調整の後に櫛状工具で波状文と直線文を施文する。内面はナデ。輪積痕有り。	胎土にφ～0.5㎜灰色砂粒、白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は5YR6/6橙色、内面は10YR7/3にぶい黄褐色。	肩部破片資料
図70-90	図版38	壷	２区 B16 20層		壷の肩部である。	外面はハケ調整の後に横位の沈線で上下を区画し、その内部に同一の工具で波状文。内面はハケ調整の後にナデ。	胎土にφ～0.5㎜石英含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/4にぶい橙色、内面は10YR6/3にぶい黄橙色。	肩部破片資料
図70-91	図版38	壷	２区 B16 20層		壷の肩部である。	外面はハケ調整の後に櫛状工具で波状文を２条施文している。その下位に横位の断続した櫛描文を施す。	胎土にφ～２㎜灰色砂粒、白色粒子含有。焼成は良。外面の色調7.5YR5/4にぶい褐色、内面は10YR7/3にぶい黄橙色。	肩部破片資料
図70-92	図版38	壷	２区 B17 20層		壷の肩部である。	外面は縦方向のヘラミガキを施した後に、櫛状工具で横位の波状文を施文している。円形浮文を最後に付けている。内面はハケ調整。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y6/2灰黄色。内面は2.5Y6/3にぶい黄色。	肩部破片資料
図70-93	図版38	壷	２区 B17 20層		壷の肩部である。	外面は縄文を施文した後にヘラミガキ。縄文の上に円形浮文を２個付ける。１個は剥脱。内面はナデとハケ調整。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/3にぶい橙色、内面は2.5Y6/1黄灰色。	肩部破片資料 外面赤彩か。
図70-94	図版38	甕	２区 B16 20層	口径(17.0)	甕の口縁部である。口縁部は外傾させる。	内外面共にハケ調整を施す。平坦に仕上げられた口唇部に、ハケ状工具で刺突、刻目を入れている。	胎土にφ～２㎜灰色砂粒含有。焼成は良。外面の色調は5YR4/2灰褐色、内面は7.5YR7/3にぶい橙色。	口縁部約1/6残存 外面煤付着
図70-95	図版38	甕	２区 B16 20層		台付甕の口縁か。外反した口縁で口唇部は平坦に仕上げられている。	内外面共にハケ調整が施されている。刻目はハケ調整の後。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR7/6橙色。	口縁部破片資料
図71-96	図版36	壷	２区 B12 中期層	口径9.1 頸径5.8 胴部径(21.9) 底径4.6 器高(28.9)	単純口縁を持つ壷である。木葉痕の有る底部は残存せるも、胴部下半部は推定。胴部中位で最大径をはかり、肩部はやや張る。頸部から外湾気味に立ち上がり、口唇部は平坦に仕上げる。	外面は最初にハケ調整を施し、胴部上半部から頸部にかけて櫛描直線文を施す。胴部下半部から下位はヘラミガキを施す。内面は頸部付近で縦方向にナデ、肩部付近は横ナデ、指頭痕が確認される。	胎土にφ～１㎜灰色砂粒、石英含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/6橙色、内面は10YR8/1灰白色。	全体の約2/3残存
図71-97	図版36	壷	２区 B13 中期層	口径(7.0) 頸径5.7 胴部径18.0 底径5.8 器高23.3	単純口縁を持つ壷である。底部からやや直線的に立ち上がり、胴部中位で最大径をはかる。中位から頸部まで直線的に延び、頸部は短い。口縁部は軽く外反させる。	外面はハケ調整の後に縦方向のヘラミガキを施す。口唇部はやや丸く仕上げている。内面はハケ調整の後にナデか。底面はナデ。全体的に摩滅気味。	胎土にφ～0.5㎜灰色砂粒、白色粒子、石英含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/6橙色。	全体の約4/5残存

２区出土土器６

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図71-98		壷	２区 B13 中期層	口径(17.9)	折返し口縁を持つ壷。大きく外反する。	外面はハケ調整。内面はハケ調整の後、ヘラミガキを施している。平坦に仕上げた口唇部もハケ調整。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/4にぶい橙色、内面は7.5YR7/2明褐灰色。	口縁部 約1/4残存
図71-99		壷	２区 B12 中期層	胴部径(22.0) 底径(7.2)	口縁部から肩部を欠損した壷である。底部から外傾気味に立ち上がり、胴部中位で最大径をはかる。	外面はハケ調整の後に胴部上位付近に櫛状工具で直線文を施す。胴部中位から底部にかけてはハケ調整の後にナデか。底面は木葉痕をナデ消している。内面はナデ。指頭痕、輪積痕が観察される。	胎土にφ～0.5㎜白色・灰色砂粒含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/3にぶい橙色、内面は2.5Y6/1黄灰色。	胴部 ～底部 約2/3残存
図71-100	図版38	壷	２区 B13 中期層		壷の肩部である。	外面に櫛状工具で直線文を施す。内面はナデか。内外面共に摩滅気味で判然とせず。	胎土にφ～１㎜灰色砂粒含有。焼成は良。外面の色調は2.5YR6/6橙色、内面は5YR7/6橙色。	肩部 破片資料
図71-101	図版38	壷	２区 B13 中期層		壷の肩部である。	外面には磨消縄文が施されている。内面は器面が剥脱し不明。全体的に摩滅気味。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は2.5YR5/4にぶい赤褐色、内面は5Y6/1灰色。	肩部 破片資料
図71-102	図版38	壷	２区 B13 中期層		壷の肩部である。	外面には磨消縄文内に弧状文を施文している。文様帯の上はヘラミガキ。内面はナデ。	胎土にφ～１㎜白色粒子、石英、雲母含有。焼成は良。外面の色調はN3/暗灰色、内面は10YR7/4にぶい黄橙色。	肩部 破片資料
図72-103	図版37	壷	２区 B16 22層上面	胴部径50.4	大型壷である。口縁部と底部が欠損している。胴部は底部から直線的に立ち上がり、胴部中位から内湾気味になり、最大径をはかる。この部位に輪積痕が明瞭に残る。肩部に円形浮文を貼り付ける。	外面はハケ調整を主体とする。胴部中位の輪積痕から下位は横方向上位は縦方向のハケ調整。明瞭に残る外面の輪積痕はナデ消されていない。内面はハケ調整。幅の太いハケ状工具も使用。輪積痕有り	胎土にφ～２㎜砂粒、白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR7/3にぶい橙色。	全体の 約1/3残存 外面中位に 黒斑。
図73-104	図版38	壷	２区 B14 排水溝	口径11.7 頸径5.2	単純口縁を持つ壷である。肩部より下位は欠損。頸部からなだらかに外反する。口唇部は丸く仕上げている。	外面はハケ調整の後にヘラミガキか。肩部に櫛状工具で横方向の直線文を２条施す。内面はナデか。全体的に摩滅気味である。	胎土にφ～１㎜灰色砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/2明褐灰色。	口縁部 ～肩部 完存
図73-105	図版36	壷	２区 B17 排水溝	口径(15.7) 頸径(9.0)	単純口縁を持つ壷である。やや外反して立ち上がり、口唇部を平坦に仕上げている。	外面はハケ調整の後に縦方向のヘラミガキを施す。口縁部内面はハケ調整のみ。頸部付近よりハケ調整の後にヘラミガキ。肩部付近は後に板ナデか。輪積痕有り。	胎土にφ～0.5㎜白色・灰色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/4にぶい橙色、内面は5Y5/1灰色。	口縁部 約1/3残存
図73-106	図版36	壷	２区 B14 排水溝	口径(12.4) 頸径(5.4)	折返し口縁を持つ壷である。肩部から下位は欠損している。全体的に摩滅気味。	口唇部には工具による刻目。口縁部から頸部まで板ナデを施す。頸部下位より縄文、円形浮文を付ける。口縁部内面には波状文。穿孔がある。頸部から下位は板ナデ。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR7/2にぶい黄橙色。	口縁部 ～肩部 約2/3残存
図73-107	図版36	甕	２区 B15 排水溝	口径(17.4) 頸径(16.2) 胴部径(18.9)	台部が欠損している台付甕か。胴部中位で最大径をはかり、口縁部は軽く外反する。	内外面共に粗いハケ調整を施している。口唇部はナデで丸く仕上げ、刻目は無い。	胎土にφ～１㎜砂粒、白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR2/1黒色、内面は7.5YR5/3にぶい褐色。	口縁部 ～胴部 約1/2残存 外面煤着
図73-108		壷	２区 B14 排水溝	口径(20.6) 頸径(9.6)	折返し口縁を持つ壷である。頸部から下位は欠損。口唇部は軽く平坦に仕上げる。	外面はハケ調整の後に口唇部を折返しヘラミガキ。内面はハケ調整の後にヘラミガキか。内外面共に丁寧なヘラミガキ。	胎土にφ～１㎜雲母、石英、灰色砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR7/4にぶい橙色。	口縁部 約1/3残存
図73-109		壷	２区 B17 排水溝	口径(12.0) 頸径(4.4)	複合口縁を持つ壷である。口縁部から頸部にかけての資料である。棒状浮文が付けられている。	外面はハケ調整の後にヘラミガキを施す。内面もナデの後にヘラミガキか。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR7/4にぶい橙色。	口縁部 約1/4残存
図73-110		壷	２区 B17 排水溝		壷の肩部である。	外面はハケ調整の後、櫛状工具で横方向の直線文と波状文を施す。内面はナデ。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子、灰色砂粒含有。焼成は良。外面色調は10YR7/3にぶい黄橙色、内面は5YR7/3橙色。	肩部 破片資料
図73-111	図版38	甕	２区 B14 排水溝	口径(12.0)	台付甕か。口縁部は肩部より直立させ、口唇部を丸く仕上げられている。	内外面共にハケ調整の後に板ナデか。	焼成は良。色調は内外面共に10YR7/2にぶい黄橙色。	口縁部 約1/3残存 外面煤付着
図73-112		甕	２区 B17 排水溝		甕の口縁部である。やや直立気味に立ち上がり、口縁部は軽く外反する。	内外面共にハケ調整。口唇部は指頭押圧を施す。爪痕有り。	胎土にφ～２㎜白色粒子、灰色砂粒含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR5/2灰褐色、内面は2.5YR5/6明赤褐色。	口縁部 破片資料
図73-113		高坏	２区 B17 排水溝	底径(9.4)	高坏の脚部である。透かし孔が穿孔されている。	外面はハケ調整の後にヘラミガキか。内面はハケ調整の後にナデ。	胎土にφ～0.5灰色・橙色砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共に2.5Y7/2灰黄色。	脚部 約1/3残存

３区出土土器１

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図74-1	図版39	壷	３区 C25 SK306	口径(17.4)	壷の口縁部である。受口状口縁である。口唇部は平坦に仕上げている。	口縁部外面に区画沈線文を施す。区画文との間に円形の浮文を付ける。口唇部はハケ調整。内面はハケ調整の後にヘラミガキ。	胎土にφ～0.5㎜雲母、石英、白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR6/2灰褐色。	口縁部 約1/6残存
図74-2	図版39	壷	３区 C25 SK306	口径(18.0)	壷の口縁部である。複合口縁である。	口縁部外面はハケ調整の後に棒状浮文を付ける。頸部はヘラミガキ。内面はハケ調整の後にヘラミガキ。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/8黄橙色、内面は7.5YR6/1褐灰色。	口縁部 約1/4残存
図74-3		壷	３区 C25 SK306		壷の肩部から胴部にかけての資料である。肩部はあまり張らない。	外面はハケ調整の後に重三角文が施されている。内面はナデ。指頭痕が観察される。	胎土にφ～0.5㎜白色・灰色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/3にぶい橙色。	胴部 破片資料

3区出土土器2

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図74-4	図版39	壷	3区 C29 7層	口径(8.1)	壷の口縁部である。単純口縁である。口唇部は平坦に仕上げている	外面はハケ調整と縦位のヘラミガキ口唇部には縄文を施す。内面はハケ調整とナデ。	胎土にφ～0.5㎜白色・灰色粒子含有。焼成は良。外面の色調は2.5YR7/6橙色、内面は7.5YR7/4にぶい橙色。	口縁部 約1/4残存
図74-5	図版39	壷	3区 C25 7層	口径(15.1)	壷の口縁部である。単純口縁である。	外面は縄文を施す。口唇部も縄文。内面はナデ。	胎土にφ～0.5㎜石英・雲母含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR4/2褐灰色、内面は5YR5/4にぶい赤褐色。	口縁部 破片資料
図74-6		壷	3区 C29 7層	底径5.0	壷の底部である。	外面はハケ調整。見込みはナデ。底面は摩滅。	胎土にφ～0.5㎜白色・灰色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/4にぶい橙色。	底部 完存
図74-7	図版39	壷	3区 C26 8層		壷の肩部から胴部にかけての破片資料である。	肩部外面はS字結節縄文を施した後に刺突文を施す。胴部はヘラミガキ。内面はハケ調整。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子・石英含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/6橙色。	肩部～胴部 破片資料
図74-8	図版39	壷	3区 C27 8層		壷の肩部である。	外面には磨消縄文が施されている。内面はナデ。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子・砂粒含有。焼成は良。外面の色調は10YR3/1黒褐色、内面10YR5/2灰黄褐色。	肩部 破片資料
図74-9	図版39	壷	3区 C24 8層		壷の肩部である。	外面は磨消縄文が施されている。内面はナデか。全体的に摩滅している。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子・雲母含有。焼成は良。外面の色調は10YR6/2灰黄褐色、内面はN2/黒色。	肩部 破片資料
図74-10		壷	3区 C24 8層	底径(10.8)	壷の底部である。	外面はハケ調整を施す。底面には網代痕が観察される。内面はナデ	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に2.5Y7/2灰黄色。	底部 約1/2残存
図75-11	図版40	壷	3区 C26 9～10層	口径(8.4)	受口状口縁を持つ壷である。口縁部のみの資料である。口唇部を丸く仕上げている。	外面はハケ調整の後に、横位の櫛状工具を用いて波状文を施している。内面はナデ調整。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR7/2にぶい黄橙色。	口縁部 約1/6残存
図75-12	図版40	壷	3区 C26 9～10層	口径(10.1)	単純口縁を持つ壷である。口縁部は微かに外傾させる。	外面にはハケ調整、口唇部にはハケ状工具で刺突、刻目を施す。内面はハケ調整とナデ。	胎土にφ～3㎜砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/3にぶい橙色。	口縁部 約1/5残存
図75-13	図版40	壷	3区 C26 9～10層		単純口縁を持つ壷である。口縁部は微かに外傾させ、口唇部は平坦に仕上げられている。	外面には縄文と沈線。口唇部にも縄文を施す。内面はナデ調整。	胎土にφ～3㎜砂粒、赤色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共5YR7/6橙色。	口縁部 破片資料
図75-14		壷	3区 C25 9～10層	胴部径(11.7) 底径(7.0)	胴部下位から底部が遺存する資料である。胴部は底部より直線的に延び下位で屈折する。	外面はヘラナデか。内面は指頭痕とハケ調整が観察される。底面に木葉痕が見られる。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/3にぶい橙色。内面は2.5Y6/1黄灰色。	底部 約1/6残存
図75-15	図版40	壷	3区 C24 9～10層		壷の肩部である。	外面はハケ調整の後に円形浮文を貼り付け、その後ヘラミガキ。内面はナデ。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/2灰褐色、内面は10YR6/1褐灰色	肩部 破片資料
図75-16	図版40	壷	3区 C25 9～10層		壷の肩部から頸部にかけての資料である。	外面はハケ調整の後に頸部に2条の波状文。内面はハケ調整とナデ。外面に刻の痕跡。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共2.5Y7/2灰黄色。	肩部～頸部 破片資料
図75-17		壷	3区 C26 9～10層		壷の肩部である。	外面は櫛状工具で波状文を数段施す。内面はナデ。	胎土にφ～0.1㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共2.5Y7/2灰黄色。	肩部 破片資料
図75-18	図版40	壷	3区 C26 9～10層		壷の肩部である。	外面に櫛状工具でやや乱雑な波状文を数段施している。内面はヘラミガキとナデ。	胎土にφ～0.1㎜白色粒子、石英雲母含有。焼成は良。外面の色調は5YR3/1黒褐色、内面は2.5YR5/6明赤褐色。	肩部 破片資料
図75-19	図版40	壷	3区 C26 9～10層		壷の肩部である。	外面に櫛状工具で波状文を数段施した後に同一工具で直線文を施し区画、その下位はヘラミガキ。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR5/4にぶい褐色。内面は7.5YR7/6橙色。	肩部 破片資料
図75-20		壷	3区 C28 9～10層		壷の頸部である。細頸壷か。	外面に櫛状工具による連続刺突文、その上下に同一工具で直線文か。内面はナデ。	胎土にφ～2㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/2にぶい黄橙色、内面は2.5Y4/1黄灰色	頸部 破片資料
図75-21	図版40	壷	3区 C26 9～10層		壷の肩部である。	外面に弧状文を施す。半截竹管状の工具を使用か。内面はナデ	胎土にφ～1㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は10YR6/2灰黄褐色。内面は2.5Y7/1灰白色。	肩部 破片資料
図75-22	図版40	壷	3区 C26 9～10層		壷の肩部である。	外面に櫛状工具、半截竹管状の工具を用いて沈線文を施す。内面はナデとハケ調整。	胎土にφ～3㎜砂粒、赤色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共5YR7/6橙色。	肩部 破片資料
図75-23	図版40	壷	3区 C24 9～10層		壷の肩部である。	外面に沈線で区画された縄文帯が施されている。内面はナデ。	胎土にφ～1㎜砂粒、白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/4にぶい黄橙色、内面はN7/灰白色。	肩部 破片資料
図75-24	図版40	壷	3区 C26 9～10層		壷の肩部である。	外面はハケ調整の後に区画された縄文帯を施す。内面はナデ。	胎土にφ～1㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/3にぶい褐色、内面は5YR7/6橙色。	肩部 破片資料
図75-25		壷	3区 C26 9～10層		壷の肩部である。	外面はハケ調整の後に沈線による区画文と縄文を施す。内面はナデ	胎土にφ～0.5㎜白色・黒色粒子雲母、石英含有。焼成は良。色調は7.5YR6/4にぶい橙色。	肩部 破片資料
図75-26	図版40	壷	3区 C29 9～10層		壷の肩部である。	外面は縄文を施す。内面はナデ。	胎土にφ～0.5㎜砂粒含有。焼成は良。外面は7.5YR7/4にぶい黄橙色、内面は7.5YR7/1明褐灰色	肩部 破片資料 内外面赤彩か
図75-27	図版40	甕	3区 C26 9～10層		甕の口縁部である。口縁部は折返している。	外面はハケ調整の後に口唇部を折り返している。内面はハケ調整、口縁部直下から下はナデ。	胎土にφ～3㎜砂粒、橙色粒子含有。焼成は良。外面の色調はN3/暗灰色、内面は10YR6/4にぶい黄橙色。	口縁部 破片資料 外面煤付着

３区出土土器３

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図75-28	図版40	甕	３区 C26 ９～10層		甕の口縁部である。口唇部は平坦に仕上げてある。	外面はハケ調整を施す。口唇部にハケ状工具で刻目を施す。内面は摩滅。	胎土にφ～４㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/6橙色。内面は7.5YR6/3にぶい褐色。	口縁部 破片資料 外面煤付着
図75-29	図版40	甕	３区 C24 ９～10層		甕の口縁部である。口縁部は外折し、口唇部を平坦に仕上げている	外面はハケ調整を施す。口唇部にハケ状工具で刻目を施す。内面は口縁部付近はハケ調整。	胎土にφ～５㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は10YR6/3にぶい黄橙色、内面は2.5YR5/6明赤褐色。	口縁部 破片資料 外面煤付着
図75-30	図版40	甕	３区 C26 ９～10層		甕の口縁部である。口縁部は丸く仕上げている。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で沈線を施す。口唇部にハケ状工具で刻目を施す。	胎土にφ～１㎜砂粒、雲母含有。焼成は良。色調は内外面共10YR4/2灰黄褐色。	口縁部 破片資料 外面煤付着
図75-31	図版40	甕	３区 C26 ９～10層		甕の口縁部である。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で沈線を施す。口唇部は指頭押圧。内面はナデ。	胎土にφ～２㎜砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共10YR6/3にぶい黄橙色。	口縁部 破片資料
図75-32	図版40	甕	３区 C26 ９～10層		甕の口縁部である。口唇部は平坦に仕上げている。器厚はやや肥厚気味である。	外面はハケ調整。口唇部はハケ状工具で平坦に仕上げた後に、同一工具により内外面共に押圧。内面もハケ調整。	胎土にφ～４㎜砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共10YR5/2灰黄褐色。	口縁部 破片資料
図75-33	図版40	甕	３区 C24 ９～10層		甕の口縁部である。	外面は粗いハケ調整。口唇部は平坦に仕上げた後に、指頭押圧を施す。内面はハケ調整の後にナデ。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR4/2灰褐色。	口縁部 破片資料
図75-34		甕か	３区 C26 ９～10層	底径(7.2)	甕の底部と推定される。底面に網代痕か。	外面はハケ調整。内面は指ナデ。	胎土にφ～５㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調はN3/1暗灰色、内面は10YR7/1灰白色。	底部 約2/3残存
図75-35		甕か	３区 C24 ９～10層	底径(5.6)	甕の底部と推定されるが、判然としない。底面に網代痕。	外面はヘラミガキか。内面はナデ。	胎土にφ～１㎜白色粒子、雲母含有。焼成は良。外面の色調10YR5/2灰黄橙色、内面は10YR6/3にぶい黄橙色。	底部 約1/3残存
図75-36		甕か	３区 C26 ９～10層	底径(5.5)	甕か壷の底部と推定される。	外面はヘラケズリとヘラミガキ。内面はナデか。	胎土にφ～３㎜砂粒、白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共2.5YR7/3浅黄色。	底部 ほぼ完存
図75-37		甕	３区 C25 ９～10層	底径(8.6)	台付甕の台部である。	外面はヘラナデか。内面はハケ調整。見込みに炭化物付着。	胎土にφ～２㎜灰色・灰白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/1灰白色、内面は10YR7/6橙色。	台部 約2/5残存
図76-38	図版39	高坏	３区 C27 ９～10層	口径(22.6)	高坏の坏部である。微かに内湾して立ち上がり、口縁部はほぼ水平に折れる。脚部は欠損。	外面はハケ調整の後にヘラミガキ。口唇部は工具で刺突、刻目を施している。内面はハケ調整。	胎土にφ～１㎜灰色・茶褐色粒子石英、雲母含有。焼成は良。外面の色調は2.5YR7/1灰白色、内面は2.5Y7/1灰白色～7.5YR6/6橙色	坏部 約1/2残存
図76-39	図版39	甕	３区 C27 ９～10層	口径(14.0) 胴部径12.9 器高11.7 底径5.8	小型の甕である。平坦な底部から直線的に立ち上がり、胴部中位で内湾気味となる。口縁部は外側に折り返す。	外面はヘラミガキを施す。口唇部はヘラ状工具で刻み、刻目を施す底面はヘラミガキ。内面はハケ調整もしくはヘラナデ。	胎土にφ～1.5㎜暗灰色、褐色粒子、石英含有。焼成は良。外面の色調は10YR8/2灰白色～2.5YR5/4にぶい茶褐色。内面は10YR8/2灰白色。	全体の 約1/2残存
図76-40	図版39	鉢	３区 C26 ９～10層	口径(6.4) 器高3.7 底径4.0	小型の鉢である。平坦な底部から直線的に立ち上がる。口縁部は尖らせる。	内外面ともにナデ。見込み付近には指頭痕有り。底面もナデ。	胎土にφ～0.5㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は5YR7/4にぶい橙色、内面は10YR7/2にぶい黄橙色。	全体の 約2/5残存
図76-41	図版40	壷	３区 C27 SD301		壷の口縁部である。受口状口縁である。	外面は縄文。口唇部には工具で刺突、刻目を入れる。縄文直下にも刻目を入れる。内面はナデ。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/4にぶい橙色、内面は10YR6/2灰黄褐色。	口縁部 破片資料
図76-42	図版40	壷	３区 C27 SD301		壷の肩部である。	外面には重三角文と縄文、円形浮文が施されている。内面はナデ。	胎土にφ～１㎜灰色・褐色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共2.5Y7/1灰白色。	肩部 破片資料
図76-43	図版40	壷	３区 C27 SD301		壷の肩部～胴部上位である。	外面はハケ調整の後に磨消縄文を施し、最後にヘラミガキで仕上げている。内面はハケ調整の後にナデを施している。	胎土にφ～0.5㎜灰色粒子含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y7/1灰白色、内面は5YR7/3にぶい橙色。	肩部～胴部 破片資料
図76-44	図版40	壷	３区 C27 SD301		壷の肩部～胴部上位である。	外面はハケ調整の後に磨消縄文を施し、最後にヘラミガキかナデを施している。内面はナデ。	胎土にφ～１㎜白色・灰色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/2にぶい黄橙色、内面は2.5Y5/1黄灰色。	肩部～胴部 破片資料
図76-45	図版40	壷	３区 C27 SD301		壷の胴部である。	外面はハケ調整の後に磨消縄文を施し、最後にヘラミガキで仕上げている。内面は板ナデ。	胎土にφ～0.5㎜砂粒、石英・雲母等含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y5/1黄灰色、内面は2.5Y6/2灰黄色。	胴部 破片資料
図76-46	図版40	甕	３区 C27 SD301		甕の口縁部である。口唇部は平坦に仕上げている。	内外面共にハケ調整を基調とし、口唇部外面はハケ調整の後にヘラ状工具で刻目を入れる。	胎土にφ～0.1㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR5/2灰黄褐色、内面は7.5YR7/4にぶい橙色。	口縁部 破片資料
図76-47	図版40	甕	３区 C27 SD301		甕の口縁部である。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で沈線文を施す。口唇部はハケ調整の後に同じ工具で刺突、刻目を入れる。	胎土にφ～0.3㎜白色粒子、雲母含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR5/1褐灰色。	口縁部 破片資料
図76-48	図版41	壷	３区 C24 SD304	口径(7.2) 頸径(6.8)	短頸壷である。口縁部から肩部にかけての資料である。口唇部は平坦に仕上げている。	外面はハケ調整の後にヘラミガキ。頸部には縄文を施した後に沈線。口唇部に縄文を施す。内面はヘラミガキか。	胎土にφ～１㎜白色・橙色・灰色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR7/4にぶい橙色。	口縁部 約1/4残存 被熱か。
図76-49		壷	３区 C24 SD304		壷の口縁部である。口唇部は平坦に仕上げられている。	外面、及び口唇部はハケ調整。内面はハケ調整の後に口唇部直下に縄文、その下位はヘラミガキを施している。	胎土にφ～0.5㎜灰白色・白色粒子、雲母含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR5/3にぶい橙色、内面は2.5YR7/6橙色。	口縁部 破片資料 外面赤彩か。
図76-50	図版41	壷	３区 C24 SD304		壷の胴部である。	外面は磨消縄文・ヘラミガキを施している。内面は摩滅。	胎土にφ～１㎜雲母・石英等含有。焼成は良。色調は内外面共N2/黒色。	胴部 破片資料 外面煤付着

3区出土土器4

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図76-51	図版41	壷	3区 C24 SD304		壷の肩部である。	外面には磨消縄文。その上位にはヘラミガキを施す。内面には縦方向のしわ。	胎土にφ～1㎜白色・暗灰色・灰色粒子、石英含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR7/5橙色。	肩部 破片資料
図76-52	図版41	壷	3区 C24 SD304	底径(7.2)	壷の底部である。平坦な底部から直線的に立ち上がる。	外面は条痕、もしくは粗いハケ調整。内面は摩滅。底面には網代痕が僅かに観察される。	胎土にφ～1㎜灰白色粒子、雲母石英含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR6/3にぶい褐色。	底部 約1/5残存
図76-53		壷	3区 C24 SP304	口径(11.7)	壷の口縁部である。受口状口縁である。	内外面共に精緻なヘラミガキと赤彩。	胎土にφ～0.5㎜石英・雲母含有。焼成は良。色調は内外面共10R4/6赤色。	口縁部 約1/6残存
図77-54	図版41	壷	3区 C27 11層	口径(9.8) 頸径7.4	短頸壷である。口縁部から胴部中位にかけての資料である。肩部はあまり張らず、口縁部は軽く外反させる。口唇部は丸く仕上げる。	外面はハケ調整の後に櫛状工具で横位に直線文を2条施す。口唇部はナデ。内面はナデ・板ナデを基調とし、指頭痕が観察される。	胎土にφ～0.5㎜灰色・白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共2.5YR7/4にぶい橙色。	口縁部 ～胴部 約3/5残存
図77-55	図版41	壷	3区 C27 11層	口径(12.5)	壷の口縁部である。口唇部は丸く仕上げている。	外面は全面縄文が施されている。内面はヘラミガキか。器面剥脱が進み、判然としない。	胎土にφ～0.5㎜砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR5/4にぶい褐色。	口縁部 約1/4残存
図77-56	図版41	壷	3区 C27 11層		壷の肩部である。	外面はナデの後に縄文を施し、沈線で区画。上位に刺突文が見られる。内面はナデ。全体的に摩滅。	胎土にφ～3㎜砂粒・石英含有。焼成は良。色調は内外面共5Y6/1灰色。	肩部 破片資料
図77-57	図版41	壷	3区 C26 11層	胴部径(26.4)	壷の胴部である。	外面は磨消縄文で、最後にヘラミガキを施す。内面はヘラナデか。	胎土にφ～0.1㎜雲母・石英含有。焼成は良。色調は内外面共10YR6/2灰黄褐色。	胴部 破片資料
図77-58	図版41	壷	3区 C27 11層		壷の肩部である。	外面は櫛状工具で直線文。その上位に縦位の波状文。丁字文か。直線文の下位はヘラミガキ。	胎土にφ～0.5㎜砂粒・白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/4にぶい黄橙色。内面は2.5Y6/1黄灰色。	胴部 破片資料
図77-59	図版41	甕	3区 C26 11層	口径(29.2) 胴部径(24.9)	甕の口縁部から胴部下位にかけての資料である。胴部中位で僅かに膨らみを持ち、口縁部は微かに外反させている。	外面はハケ調整の後に半截竹管状の工具で横走羽状文。口唇部はハケ状工具で刻目を施す。内面の口縁部付近はハケ、下位は板ナデ。	胎土にφ～1㎜灰色・茶褐色粒子。雲母含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/1灰色、内面は5Y7/1灰白色。	全体の 約1/7残存 外面煤付着
図77-60	図版41	甕	3区 C26 11層	底径(5.8)	台付甕の胴部中位から台部にかけての資料である。胴部は細めで微かに内湾しながら立ち上がる。底部に小さな台部が付く。	外面はハケ調整の後にヘラミガキか。台部との接合部はハケ調整とナデ。内面もヘラミガキ。底部見込み付近に炭化物吸着。	胎土にφ～1㎜砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共10YR6/3にぶい黄橙色。	全体の 約1/4残存
図78-61		壷	3区 C29 12層	口径(10.2) 頸径8.0	短頸壷である。口縁部から頸部にかけての資料である。比較的厚みがあり、口唇部は丸く仕上げる。	外面はハケ調整の後にナデか。頸部に櫛状工具で直線文を施す。内面はナデ。	胎土にφ～1砂粒・白色・灰色粒子、雲母含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR7/4にぶい橙色。	口縁部 ～頸部 約2/3残存
図78-62	図版43	壷	3区 C28 12層	口径(8.9) 頸径(7.1)	短頸壷である。口縁部をやや強めに外傾させ、口唇部を平坦に仕上げている。	外面はハケ調整の後に櫛状工具で直線文を施す。内面は口縁部付近でハケ調整、それより下位はナデ。	胎土にφ～0.5㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は2.5YR6/1黄灰色、内面は7.5YR7/3にぶい橙色	口縁部 約1/2残存
図78-63		壷	3区 C28 12層	口径(7.9) 頸径(5.9)	短頸壷である。張りの無い肩部で口縁部は外傾させる。口唇部は平坦に仕上げる。	外面はハケ調整。口唇部は平坦に仕上げた後に刻目を入れる。内面はナデ。輪積痕が観察される。	胎土にφ～0.5㎜砂粒・白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は5YR7/4にぶい橙色、内面は7.5YR8/4浅黄橙色。	口縁部 ～頸部 約1/4残存
図78-64		壷	3区 C28 12層	口径(8.1) 頸径(5.2)	短頸気味の細頸壷である。口縁部から肩部にかけての資料である。口縁部は軽く外反させ、口唇部は平坦に仕上げている。	外面は細かい目のハケ、次に粗い目のハケ調整を施している。内面は口縁部から頸部付近までハケ調整。それより下位は摩滅。	胎土にφ～2㎜砂粒・石英含有。焼成は良。色調は内外面共5YR6/4にぶい橙色。	口縁部 ～頸部 約1/2残存
図78-65		壷	3区 C25 12層		壷の口縁部である。単純口縁である。口縁部は平坦に仕上げている	外面は横走羽状文を施し、口唇部には縄文を施す。内面はナデか。	胎土にφ～2㎜砂粒・雲母・石英含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR8/4浅黄橙色。内面は7.5YR8/2灰白色。	口縁部 破片資料
図78-66	図版43	壷	3区 C29 12層	胴部径(23.6)	壷の肩部から胴部中位にかけての資料である。大きく膨らんだ胴部で、胴部上位が直線的に延びる。	肩部外面には縄文を施し、胴部はヘラミガキを施す。内面は板ナデと指頭痕が観察される。	胎土にφ～1㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/2にぶい黄橙色。内面は2.5Y6/1黄灰色。	全体の 約1/4残存
図78-67	図版42	壷	3区 C26 12層		壷の肩部か。判然としない。	外面には磨消縄文が施されている。内面はナデ。	胎土にφ～0.5㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y7/2灰黄色、内面は2.5Y4/1黄灰色。	肩部 破片資料
図78-68	図版42	壷	3区 C28 12層		壷の胴部中位から下位にかけての資料である。	外面はハケ調整の後に縄文を施し最後に沈線で区画する。内面はハケ調整とナデ。	胎土にφ～1㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/3にぶい黄橙色、内面は10YR8/2灰白色。	胴部 破片資料
図78-69	図版42	壷	3区 C28 12層		壷の肩部である。	外面はハケ調整の後に磨消縄文を施し、最後にヘラミガキ。内面はナデ。	胎土にφ～1㎜砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR6/4にぶい橙色。	肩部 破片資料
図78-70	図版42	壷	3区 C28 12層		壷の肩部から胴部にかけての資料である。	外面はハケ調整の後に磨消縄文を施し、最後にヘラミガキを施す。内面はナデ。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子、砂粒含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/4にぶい橙色、内面は10YR7/2にぶい黄橙色。	肩部～胴部 破片資料
図78-71	図版42	壷	3区 C24 12層		壷の肩部である。	外面には磨消縄文を施し、その区画内に波状文を引く。最後はヘラミガキ。内面は摩滅。	胎土にφ～0.5㎜砂粒・石英等含有。焼成は良。外面の色調は10YR5/3にぶい黄褐色。内面は10YR6/3にぶい黄橙色。	肩部 破片資料
図78-72	図版42	壷	3区 C28 12層		壷の胴部である。	外面はハケ調整の後に縄文を施し、重三角文を引いている。最後に円形浮文を付ける。内面はナデ。	胎土にφ～2㎜砂粒等含有。焼成は良。外面の色調は10YR8/3浅黄橙色、内面は10YR8/1灰白色	胴部 破片資料
図78-73	図版42	壷	3区 C28 12層		壷の胴部である。	外面はハケ調整の後に重三角文、磨消縄文を施す。内面はナデ。	胎土にφ～3㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/6橙色、内面は7.5YR6/4にぶい橙色。	胴部 破片資料
図78-74	図版42	壷	3区 C29 12層		壷の胴部である。	外面は縄文を施した後に沈線、重三角文を描く。最後に円形浮文を付ける。内面はナデか。	胎土にφ～1㎜砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共10YR7/3にぶい黄橙色。	胴部 破片資料

３区出土土器５

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図78-75	図版42	壷	３区 C28 12層		壷の胴部である。	外面はハケ調整と縄文を施した後に重三角文等を施す。内面はナデを施す。	胎土にφ～１㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/2にぶい黄橙色、内面は10YR8/1灰白色。	胴部 破片資料
図78-76	図版42	壷	３区 C25 12層		壷の肩部である。	外面は４条の沈線が施される。内面はナデ。	胎土にφ～0.5㎜石英・雲母等含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR5/3にぶい褐色。	肩部 破片資料
図78-77	図版42	壷	３区 C25 12層		壷の肩部である。	外面はヘラ状の工具で入り組んだ沈線文を描く。擬似流水文か。内面はナデ。	胎土にφ～１㎜石英、雲母等含有。焼成は良。色調は内外面共10YR7/3にぶい黄橙色。	肩部 破片資料
図78-78	図版42	壷	３区 C19 12層		壷の肩部から胴部にかけての資料である。	外面は複合鋸歯文が施されている。内面はナデ。	胎土にφ～１㎜砂粒、石英、雲母等含有。焼成は良。外面の色調は5YR3/2暗赤褐色、内面は7.5YR4/1灰褐色。	肩部～胴部 破片資料
図79-79	図版42	壷	３区 C29 12層	頸径(4.9)	壷の頸部から肩部にかけての資料である。	外面はハケ調整の後に横位の直線文を引き、その上に縦位の波状文を施す。丁字文か。それらの上位はヘラミガキ。内面はナデ。	胎土にφ～３㎜砂粒、白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR8/3にぶい浅黄橙色、内面は2.5Y5/1黄灰色。	頸部～肩部 約1/4残存
図79-80	図版42	壷	３区 C28 12層		壷の肩部である。	外面はハケ調整の後に櫛状工具で直線文を４条施す。内面はナデか	胎土にφ～0.5㎜雲母等含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y4/4オリーブ褐色、内面は5Y2/1黒色。	肩部 破片資料
図79-81	図版42	壷	３区 C28 12層		壷の肩部である。	外面はナデの後に櫛状工具で直線文と波状文を施す。内面はナデ。	胎土にφ～３㎜砂粒、石英、雲母含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR5/3にぶい褐色、内面は7.5YR6/4にぶい橙色。	肩部 破片資料
図79-82	図版42	壷	３区 C28 12層		壷の肩部である。	外面はナデの後に櫛状工具で直線文を引き、最後にヘラミガキを施す。内面はナデ。	胎土にφ～１㎜砂粒、白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR6/1褐灰色、内面は10YR8/1灰白色。	肩部 破片資料
図79-83	図版42	壷	３区 C28 12層		壷の頸部から肩部にかけての資料である。	肩部外面に櫛状工具で直線文及び波状文らしき文様を施した後にヘラミガキ。内面はナデか。器面が剥脱。	胎土にφ～１㎜砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共10YR7/2にぶい黄橙色。	頸部～肩部 破片資料
図79-84		壷	３区 C28 12層	胴部径(18.3) 底径8.1	壷の胴部中位から底部にかけての資料である。比較的平坦な底部から直線的に立ち上がり、胴部中位付近で最大径をはかる。	外面はハケ調整の後にヘラミガキを施す。底面もヘラミガキか。内面はナデか。	胎土にφ～６㎜砂粒・石英含有。焼成は良。外面の色調は10YR5/2灰黄褐色、内面は10YR5/1褐灰色。	胴部～底部 胴部1/2残存 底部完存 外面煤付着
図79-85	図版42	壷	３区 C28 12層	底径5.4	壷の底部である。	内外面はナデ。底面もナデか。木葉痕が観察される。	胎土にφ～３㎜砂粒・石英含有。焼成は良。外面の色調は5YR7/6橙色、内面は10YR6/1褐灰色。	底部 完存
図79-86		壷	３区 C28 12層	底径5.3	壷の底部である。	外面はハケ調整。底面は摩滅。内面はナデ。	胎土にφ～0.5㎜砂粒等含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR7/4にぶい橙色。	底部 完存
図79-87		壷	３区 C28 12層	底径5.3	壷の底部である。	外面及び底面はナデ。内面は板ナデか。	胎土にφ～７㎜砂粒等含有。焼成は良。外面の色調は10YR3/2黒褐色、内面は7.5YR7/4にぶい橙色。	底部 約1/10残存
図79-88	図版42	壷	３区 C24 12層	底径5.6	壷の底部である。底面は窪んでいる。	外面は摩滅。底面には木葉痕が観察される。内面はヘラミガキ。	胎土にφ～１㎜砂粒等含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/4にぶい橙色、内面はN3/暗灰色。	底部 完存
図79-89	図版42	壷	３区 C26 12層	底径7.6	壷の底部である。	外面はナデ。底面には木葉痕が観察される。内面はハケ調整とナデ。	胎土にφ～２㎜砂粒等含有。焼成は良。色調は内外面共10YR7/2にぶい黄橙色。	底部 ほぼ完存
図79-90	図版42	壷	３区 C26 12層	底径6.6	壷の底部である。	外面はハケ調整か。底面には網代痕が観察される。内面はナデ。	胎土にφ～２㎜砂粒、白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR8/4浅黄橙色、内面は2.5Y6/1黄灰色。	底部 ほぼ完存
図79-91	図版43	甕	３区 C28 12層	口径(14.4) 胴部径(12.2) 器高(17.0) 底径(5.2)	小型の甕である。底部から微かに内湾しながら立ち上がり、胴部中位付近からややすぼまり、口縁部は僅かに外反させている。	外面は縦位のハケ調整の後にヘラ状工具で横走羽状文を施し、口唇部にハケ状工具で刻目を入れる。内面はヘラミガキとナデか。	胎土にφ～１㎜砂粒等含有。焼成は良。外面の色調10YR4/2灰黄褐色、内面は10YR6/2灰黄褐色。	全体の 約1/3残存 外面煤付着
図79-92	図版43	甕	３区 C26 12層	口径(24.2) 胴部径(20.0)	甕である。底部が欠損している。胴部は微かに外反しながら立ち上がり、胴部中位で微かに膨らむ。中位から上位は微かに外湾し、口縁部は外反させる。	外面は縦位のハケ調整の後にヘラ状工具で横走羽状文を施す。口唇部は平坦に仕上げた後に指頭で押圧している。内面は板ナデ。	胎土にφ～0.5㎜砂粒・石英等含有。焼成は良。外面の色調は10YR5/2灰黄褐色、内面は10YR4/2灰黄褐色。	全体の 約1/3残存
図80-93	図版44	甕	３区 C28 12層	口径(18.8)	甕である。口縁部から胴部中位にかけての資料である。胴部はやや直線的ながらも口縁部はやや外側に折れ、口唇部は平坦に仕上げる。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で横走羽状文を施す。口唇部にはハケ状工具で刻目を入れる。内面はハケ調整。	胎土にφ～１㎜砂粒、白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR8/6浅黄橙色。	口縁部 約1/4残存 外面煤付着
図80-94	図版44	甕	３区 C28 12層	口径(16.9)	甕である。口縁部から胴部中位にかけての資料である。胴部上位はやや内湾気味。口縁部は軽く内湾させている。	外面はナデの後にヘラ状工具で横走羽状文を施す。口唇部は指頭押圧。爪跡が僅かに残る。内面は横方向にナデ。	胎土にφ～１㎜砂粒、雲母等含有。焼成は良。色調は内外面共10YR4/2灰黄褐色。	口縁部 約1/4残存 外面煤付着
図80-95	図版43	甕	３区 C26 12層	口径(26.8) 胴部径(25.8)	甕である。口縁部から胴部中位にかけての資料である。胴部中位で膨らみをもち、口縁部は軽く外反させる。口唇部は平坦に仕上げる。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で横走羽状文を施す。口唇部はハケ状工具で刺突、刻目を入れる。内面はハケ調整。輪積痕有り。	胎土にφ～１㎜砂粒等含有。焼成は良。外面の色調は2.5YR6/6橙色～7.5YR7/4にぶい橙色、内面は10YR6/3にぶい黄橙色。	口縁部～ 胴部 約1/4残存 外面煤付着
図80-96	図版43	甕	３区 C29 12層	口径(28.6)	甕である。口縁部から胴部中位にかけての資料である。胴部から口縁部にかけて外反気味に延び、膨らみは無い。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で多段の横走羽状文を施す。口唇部の刻目は指頭か工具を使用したか判然としない。内面は板ナデか。	胎土にφ～２㎜雲母、砂粒、灰白粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR7/1灰白色。	口縁部～ 胴部 約5/8残存

３区出土土器６

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図80-97	図版44	甕	３区 C28 12層	口径(19.0) 胴部径(15.0)	甕である。口縁部から胴部下位にかけての資料である。内湾気味に立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する。	外面はハケ調整のみ。横走羽状文等の文様は認められない。口唇部はハケ状工具を刺突、刻目を入れる。内面は板ナデか。	胎土にφ～２㎜雲母、砂粒等含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/3にぶい褐色～5YR6/6橙色、内面は5YR6/6橙色。	口縁部～胴部 約1/5残存 外面煤付着
図80-98	図版44	甕	３区 C28 12層	口径(20.7)	甕である。口縁部から胴部中位にかけての資料である。直線的な胴部から口縁部は外反させている。口唇部は平坦に仕上げている。	外面はハケ調整のみ。横走羽状文等の文様は認められない。口唇部はハケ状工具を刺突、刻目を入れる。内面はハケ調整とナデ。	胎土にφ～２㎜砂粒等含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/4にぶい橙色。内面は10YR6/2灰黄褐色。	口縁部～胴部 約1/5残存 外面煤付着
図80-99	図版44	甕	３区 C28 12層	口径(20.8) 胴部径(18.6)	甕である。口縁部から胴部下位にかけての資料である。胴部に膨らみは無く微かに内湾しながら立ち上がり、口縁部は僅かに外反。	外面はハケ調整のみ。横走羽状文等の文様は認められない。口唇部はヘラ状工具で刻目を入れる。内面は板ナデか。	胎土にφ～１㎜砂粒、白色、茶褐色粒子含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y3/1黒褐色。内面は10YR7/2にぶい黄橙色。	口縁部～胴部 約1/4残存 外面煤付着
図80-100		甕	３区 C28 12層		甕である。口縁部から胴部上位にかけての資料である。やや直線的な胴部から口縁部を僅かに外反させる。	外面はハケ調整のみ。横走羽状文等の文様は認められない。口唇部はハケ調整で平坦にした後に指頭押圧。内面はハケ調整。	胎土にφ～３㎜白色・赤色粒子、砂粒含有。焼成は良。外面の色調は5YR7/8橙色、内面は10YR7/2にぶい黄橙色。	口縁部～胴部上半 破片資料 外面黒斑有
図80-101	図版44	甕	３区 C28 12層		甕の口縁部である。	外面はハケ調整のみ。横走羽状文等の文様は認められない。口唇部は指頭で強く押圧。未貫通の穿孔箇所がある。内面はハケ調整。	胎土にφ～１㎜砂粒等含有。焼成は良。色調は内外面共2.5Y7/3浅黄橙色。	口縁部 破片資料
図81-102	図版44	甕	３区 C28 12層	口径(36.0)	甕である。口縁部から胴部中位にかけての資料である。内湾気味の胴部から口縁部を外反させる。	外面はハケ調整のみ。横走羽状文等の文様は認められない。口唇部は平坦に仕上げた後にハケ状工具で刻目を入れる。内面はハケ調整の後に板ナデ。	胎土にφ～１㎜砂粒、白色・灰色褐色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR5/4にぶい褐色。内面は7.5YR6/3にぶい褐色。	口縁部～胴部上半 約1/2残存
図81-103		甕	３区 C28 12層	底径7.2	甕の底部か。平坦な底部から直線的に立ち上げる。	外面はハケ調整。底部付近に一部ヘラミガキか。底面はヘラミガキか。木葉痕が観察される。内面はハケ調整。見込み付近はヘラナデ。	胎土にφ～１㎜白色粒子等含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y7/1灰白色～7.5YR7/3にぶい橙色。内面は10YR7/2にぶい黄橙色。	底部 完存 外面黒斑
図81-104		甕	３区 C26 12層	底径6.8	甕の底部か。底部は器厚がある。	外面はナデか。底面には木葉痕。見込みは摩滅して調整不明。	胎土にφ～２㎜砂粒等含有。焼成は良。色調は内外面共10YR7/3にぶい黄橙色。	底部 完存
図81-105		甕	３区 C28 12層	底径7.6	甕の底部か。	外面はハケ調整。底面はヘラミガキか。２条の凹線の由来は不明。見込みはナデ。	胎土にφ～１㎜砂粒、白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共10YR7/2にぶい黄橙色。	底部 完存
図81-106		甕	３区 C29 12層	底径6.9	甕の底部か。	外面はハケ調整。底面は最終的にナデと推定されるが、判然としない。見込みはナデ。	胎土にφ～４㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は10YR6/2灰黄褐色、内面は7.5YR8/4浅黄橙色。	底部 完存
図81-107		甕	３区 C29 12層	底径5.4	台付甕の台部である。	外面はハケ調整。見込み、底面共にナデ。	胎土にφ～３㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y7/2灰黄色、内面は2.5Y6/1黄灰色。	台部 約1/4残存
図81-108		甕	３区 C28 12層	底径6.0	台付甕の台部である。	外面はハケ調整の後にナデか。台部の内側もナデ。	胎土にφ～３㎜砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共2.5Y7/2灰黄色。	台部 約1/3残存
図81-109	図版44	甕	３区 C29 12層	口径15.9	小型の甕である。胴部から口縁部まで直線的に延びる。口唇部は丸く仕上げる。底部は欠損。	外面はハケ調整。胴部下位はナデか。口唇部はハケ状工具で刺突、刻目を入れる。口縁部内面はハケ調整。下位は板ナデか。	胎土にφ～1.5㎜雲母、灰白色粒子等含有。焼成は良。外面の色調は2.5YR7/2明赤灰色～7.5YR7/1明褐灰色。内面は2.5YR7/1明赤灰色。	口縁部～胴部 約1/4残存
図81-110		高坏	３区 C28 12層		高坏の坏部から脚部にかけての資料である。坏部見込みは人為的に敲打、窪みを作る。脚部折損面は研いで平坦にしている。	坏部外面はヘラミガキ。脚部との接合部は精緻にヘラミガキを行う。内面もヘラミガキ。脚部内面はハケ調整とナデ。	胎土にφ～１㎜砂粒等含有。焼成は良。色調は内外面共5YR6/6橙色。	坏部～脚部 約1/6残存
図82-111	図版46	壷	３区 C25 遺物集中箇所①		壷の肩部である。	外面には縄文が施されている。上端に区画線らしき沈線がある。内面は板ナデか。	胎土にφ～１㎜雲母、石英等含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/1明褐灰色、内面は5YR6/4にぶい橙色。	肩部 破片資料
図82-112	図版46	壷	３区 C25 遺物集中箇所①		壷の肩部である。	外面には磨消縄文が施されている。内面は摩滅して判然としない。	胎土にφ～1.5㎜砂粒、灰色粒子等含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/2にぶい黄橙色、内面は7.5YR7/4にぶい橙色。	肩部 破片資料
図82-113	図版46	壷	３区 C25 遺物集中箇所①		壷の肩部である。	外面にはまず半截竹管状の工具で羽状文を施した後に棒状工具もしくは指頭で連続刺突する。羽状文の下位に波状文か。内面はナデ。	胎土にφ～0.5㎜石英、雲母等含有。焼成は良。色調は10YR3/2黒褐色。	肩部 破片資料 外面煤付着
図82-114		壷	３区 C25 遺物集中箇所①	底径6.2	壷の底部か。	内外面共にヘラミガキを施す。底面には木葉痕が観察される。やや摩滅。	胎土にφ～１㎜雲母、石英、灰色粒子等含有。焼成は良。外面の色調は2.5YR7/6橙色、内面は10YR7/2にぶい黄橙色。	底部 完存 外面煤付着
図82-115		壷	３区 C25 遺物集中箇所①	底径6.0	壷の底部か。	内外面共にヘラミガキを施す。底面には木葉痕が観察される。	胎土にφ～２㎜白色粒子、砂粒含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y5/1黄灰色、内面は2.5Y7/2灰黄色。	底部 完存
図82-116		壷	３区 C24 遺物集中箇所①	底径6.5	壷の底部か。	外面はヘラミガキ。内面はヘラナデか。底面には網代痕と木葉痕。木葉痕が新しい。	胎土にφ～1.5㎜石英、灰色粒子等含有。焼成は良。外面の色調は5YR6/6～2.5YR6/6橙色。内面は10YR7/1灰白色。	底部 完存
図82-117	図版45	甕	３区 C25 遺物集中箇所①	口径20.4 胴部径17.4 底径(6.5) 器高21.3	甕である。口縁部から底部まで遺存した資料である。胴部は微かに内湾気味に立ち上がる。胴部中位にはあまり膨らみは無く、口縁部は軽く外反させる。	外面は縦位のハケ調整を施す。横走羽状文のような文様は無い。口唇部は平坦に仕上げてから、ハケ状工具で刺突、刻目を入れる。内面はハケ調整とヘラナデ。底面に網代痕が観察される。	胎土にφ～１㎜雲母、灰色粒子等含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y7/1灰白色、内面は2.5Y7/2灰黄色。	全体の約2/3残存 外面煤付着

３区出土土器７

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図82-118	図版45	甕	３区 C25 遺物集中箇所①	口径(19.2) 胴部径(18.9)	甕である。口縁部から胴部中位にかけての資料である。胴部中位は僅かに膨らみ、口縁部は微かに外傾する。	外面は縦位のハケ調整を施す。横走羽状文のような文様は無い。口唇部は平坦に仕上げてから、内側よりハケ状工具で刺突、刻目を入れる。内面は板ナデか。	胎土にφ～１㎜灰色粒子、砂粒含有。焼成は良。外面の色調はN2/黒色。内面は10YR6/3にぶい黄橙色。	口縁部～胴部 約1/6残存 外面煤付着
図82-119	図版46	甕	３区C25 遺物集中箇所①		甕の口縁部である。	外面はハケ調整。口唇部は平坦に仕上げた後に両面にハケ状工具で刺突、刻目を入れる。内面はナデ。	胎土にφ～１㎜雲母、白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR6/4にぶい橙色。	口縁部 破片資料 外面煤付着
図82-120	図版46	甕	３区 C25 遺物集中箇所①		甕の口縁部である。	外面はハケ調整。口唇部は平坦に仕上げた後にハケ状工具で刺突、刻目を入れる、内面はハケ調整。	胎土にφ～0.5㎜雲母、白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR3/1黒褐色、内面は7.5YR4/2灰褐色。	口縁部 破片資料
図82-121	図版46	甕	３区 C24 遺物集中箇所①		甕の口縁部である。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で沈線を引く。横走羽状文か。口唇部は平坦に仕上げてから指頭押圧か。内面はハケ調整。	胎土にφ～１㎜石英、灰白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR8/2灰白色、内面は7.5YR7/3にぶい橙色。	口縁部 破片資料
図82-122	図版45	高坏	３区C25 遺物集中箇所①	口径(20.4)	高坏の口縁部か。口唇部は丸く仕上げる。破片資料。	内外面共に精緻なヘラミガキ。外面に突起が見られる。	胎土にφ～１㎜砂粒、白色・橙色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5R3/6暗赤色。	口縁部 約1/6残存 内外面赤彩
図82-123	図版45	高坏	３区 C25 遺物集中箇所①		高坏の坏部・脚部の接合部である	外面はハケ調整。突帯を巡らし、ハケ状工具で連続して刺突。坏部内面はヘラミガキ。脚部内面はハケ調整とナデ。	胎土にφ～１㎜雲母、石英、白色粒子含有。焼成は良。色調は10YR6/3にぶい黄橙色～5YR6/6橙色。	坏部～脚部 破片資料 坏部内面に赤彩
図83-124	図版45	壷	３区 C25 遺物集中箇所②	頸径5.0 胴部径(19.6) 底径(6.8)	細頸壷である。口縁部から頸部中位まで欠損している。底部から直線的に延び、胴部下位から内湾気味に膨らみ、胴部中位で最大径をはかる。肩部はやや張り、頸部は直線的に延びる。	外面は３本単位の櫛状工具で８条の横位直線文を引いた後、棒状工具を３本束ねた原体で、縦位に引く。最上段の直線文上に円形浮文を付ける。浮文は４箇所か。最後にヘラミガキ。内面はナデと輪積痕。	胎土にφ～0.2㎜白色・橙色粒子石英等含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/3にぶい黄橙色。内面は10YR5/1褐灰色。	頸部～底部 約1/3残存
図83-125	図版46	高坏	３区 C25 遺物集中箇所②	口径(18.4)	高坏である。脚部が欠損している坏部は僅かに内湾させ、口縁部は直線的に屈折させる。口唇部は平担に仕上げる。	外面はヘラミガキを施す。口唇部はヘラ状工具で刻目を入れる。内面はヘラナデか。	胎土にφ～２㎜白色粒子、雲母、石英含有。焼成は良。外面の色調10YR6/2灰黄褐色、内面は2.5Y6/3にぶい黄色。	口縁部～胴部 約1/4残存 外面赤彩 煤付着
図83-126		壷	３区 C25 遺物集中箇所②	底径5.6	壷である。胴部下位から底部にかけての資料である。	外面から底面にかけてヘラミガキを施す。内面は摩滅し、調整は判然としない。	胎土にφ～１㎜石英、灰褐色・暗灰色粒子等含有。焼成は良。外面は10YR6/3にぶい黄橙色。内面は2.5Y6/2灰黄色。	底部 約9/10残存
図83-127		壷	３区C24 SD307 直上層	口径(4.3) 頸径(3.1)	短頸壷である。口縁部から頸部にかけての資料である。口唇部は平担に仕上げている。	外面はハケ調整。内面は摩滅して判然としない。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共10YR7/2にぶい黄橙色。	口縁部～頸部 約1/4残存
図83-128	図版46	壷	３区 C24 SD307 直上層	口径(9.0)	細頸壷である。単純口縁をもつ資料である。	外面はハケ調整の後に櫛状工具で直線文を描く。その上に指頭で押圧文を入れる。口唇部には縄文。内面は口縁部付近でヘラナデか。	胎土にφ～0.2㎜石英、橙色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共10YR7/1灰白色。	口縁部 約1/10残存
図83-129	図版46	壷	３区C24 SD307 直上層		壷の肩部である。破片資料である。	外面は磨消縄文とヘラミガキが施されている。内面は摩滅。	胎土にφ～１㎜雲母、石英等含有。焼成は良。外面の色調10YR8/2灰白色。内面は2.5Y7/1灰白色。	肩部 破片資料
図83-130	図版46	壷	３区 C24 SD307 直上層		壷の肩部である。破片資料である。	外面は磨消縄文とヘラミガキが施されている。内面は摩滅。ナデか。	胎土にφ～0.5㎜灰白色粒子、雲母含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y6/2灰黄色。内面は2.5Y6/1黄灰色。	肩部 破片資料
図83-131	図版46	壷	３区C24 SD307 直上層		壷の肩部である。破片資料である。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で波状文を施す。その下位はヘラミガキ。内面はナデ。	胎土にφ～１㎜灰白色粒子、雲母含有。焼成は良。色調は内外面共2.5Y8/1灰白色。	肩部 破片資料
図83-132	図版46	壷	３区C24 SD307 直上層		壷の肩部である。破片資料である。	外面は波状文を施す。内面は摩滅。	胎土にφ～１㎜雲母、石英含有。焼成は良。外面の色調は10YR4/1褐灰色。内面はN2/黒色。	肩部 破片資料
図83-133	図版46	壷	３区 C24 SD307 直上層		壷の肩部である。破片資料である。	外面はハケ調整の後に櫛状工具で直線文を描く。内面は判然としない。内外面共に摩滅気味。	胎土にφ～１㎜暗灰色・白色粒子等含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y2/1黒色。内面は2.5Y5/1黄灰色。	肩部 破片資料 外面黒斑部
図83-134	図版46	壷	３区C24 SD307 直上層		壷の肩部である。破片資料である。	外面はハケ調整の後に櫛状工具で直線文を描く。内面は判然としない。	胎土にφ～0.5㎜砂粒、長石等含有。焼成は良。色調は内外面共2.5Y8/1灰白色。	肩部 破片資料 外面煤付着
図83-135		壷	３区 C24 SD307 直上層	底径7.0	壷の底部である。	外面はヘラミガキを施す。底面には網代痕が観察される。内面は摩滅。	胎土にφ～１㎜石英、暗灰色粒子等含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/4にぶい橙色。内面は10YR8/1灰白色。	底部 約4/5残存
図83-136		壷	３区C24 SD307 直上層	底径(7.2)	壷の底部である。	外面はヘラミガキを施す。底面は網代痕か。内面はヘラナデか。	胎土にφ～３㎜雲母、石英等含有。焼成は良。色調は内外面共N3/黒色。	底部 約1/4残存
図83-137	図版46	甕	３区 C24 SD307 直上層	口径(28.9)	甕である。口縁部から胴部中位にかけての破片資料である。	外面はハケ調整の後に粗いハケ調整もしくは条痕。口唇部は外面に指頭押圧、内面は工具で刺突している。内面はハケ調整か。	胎土にφ～0.5㎜雲母、石英、灰色・黒色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共10YR5/2灰黄褐色。	口縁部 約1/5残存 外面煤付着
図83-138	図版46	甕	３区 C24 SD307 直上層		甕の口縁部である。	外面は粗いハケ調整または条痕。口唇部外面は指頭押圧、内面は工具を押圧か。判然としない。口縁部内面はナデか。	胎土にφ～１㎜灰白色、橙色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/2灰褐色。内面は5YR6/3にぶい橙色。	口縁部 破片資料

3区出土土器8

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図84-139	図版46	甕	3区 C24 SD307 直上層		甕の口縁部である。	外面は粗いハケ調整または条痕。口唇部は平坦に仕上げ、両側から工具で刺突し、刻目を入れる。内面はハケ調整か。	胎土にφ～0.1㎜雲母、石英等含有。焼成は良。色調は内外面共10YR4/1褐灰色。	口縁部 破片資料 外面煤付着
図84-140	図版46	甕	3区 C24 SD307 直上層		甕の口縁部か。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で沈線を引く。横走羽状文か。口唇部にハケ状工具を刺突、刻目を入れる。内面はハケ調整。	胎土にφ～2㎜褐色粒子等含有。焼成は良。色調は内外面共10YR8/2灰白色。	口縁部 破片資料
図84-141	図版46	甕	3区 C24 SD307 直上層		甕の口縁部である。	外面はハケ調整の後に口唇部を指頭押圧か。内面もハケ調整。	胎土にφ～1㎜石英、暗灰色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR3/1黒褐色。内面は10YR5/3にぶい黄褐色。	口縁部 破片資料 外面煤付着
図84-142		甕	3区 C24 SD307 直上層	底径(6.2)	甕の底部である。	外面はハケ調整を施す。底面には網代痕が観察される。内面はハケ調整か。摩滅気味。二次焼成か。	胎土にφ～0.5㎜雲母、石英等含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR5/4にぶい褐色。内面は10YR5/2灰黄褐色。	底部 約1/5残存 内外面共に煤付着
図84-143		甕か	3区 C24 SD307 直上層	底径(7.2)	甕の底部か。	外面はヘラミガキか。内外面共に摩滅し、調整は判然としない。	胎土にφ～1㎜雲母・石英等含有。焼成は良。外面の色調は10YR3/2黒褐色。内面は10YR3/1黒褐色	底部 約1/3残存 外面煤付着
図84-144	図版47	壷	3区 C25 SD306		壷の口縁部か。	内外面共にハケ調整で、平坦に仕上げられた口唇部もハケ調整を施している。	胎土にφ～1㎜砂粒、白色・灰色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR6/2暗黄褐色。	口縁部 破片資料
図84-145	図版47	壷	3区 C26 SD306		壷の肩部である。	外面は区画された縄文帯が施文され、最後にヘラミガキか。内面はナデか。	胎土にφ～1㎜石英、白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR7/6橙色。	肩部 破片資料
図84-146	図版47	壷	3区 C26 SD306		壷の肩部である。	外面はハケ調整の後に櫛状工具で直線文、波状文を施す。内面はハケ調整。	胎土にφ～1㎜石英・雲母等含有。焼成は良。外面の色調は10YR5/2灰黄褐色。内面は2.5Y5/2暗灰黄色。	肩部 破片資料
図84-147	図版47	壷	3区 C26 SD306		壷の頸部～肩部にかけての資料か	外面は鋸歯文と直線文が引かれる。鋸歯文内部には刺突文を充填。文様の間隙はヘラミガキ。内面はナデか。	胎土にφ～2㎜砂粒、白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/3にぶい褐色。内面は10YR7/2にぶい黄橙色。	肩部 破片資料
図84-148	図版47	壷	3区 C26 SD306		壷の肩部である。	外面は弧状文が施されている。内面は摩滅。ナデか。	胎土にφ～1㎜石英、灰褐色粒子砂粒等含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/3にぶい橙色、内面は2.5Y6/1黄灰色。	肩部 破片資料
図84-149	図版47	壷	3区 C26 SD306		壷の肩部である。	外面はヘラ状工具で羽状文を施し、その上位に半截竹管状の工具で2条の波状文を施す。内面はナデか。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR5/3にぶい褐色。	肩部 破片資料
図84-150	図版47	甕	3区 C26 SD306	口径(19.1)	甕の口縁部から胴部上位にかけての資料である。胴部は僅かに膨らみを持つ。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で横走羽状文を施す。口唇部は指頭押圧。内面はハケ調整とナデ。	胎土にφ～3㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は10YR2/1黒色、内面は10YR6/4にぶい黄橙色。	口縁部 約1/6残存 外面煤付着
図84-151	図版47	甕	3区 C26 SD306		甕の口縁部から胴部中位にかけての破片資料である。胴部は僅かに膨らみを持ち、口縁部は微かに外反させる。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で横走羽状文を施す。口唇部はハケ調整を施した後、ハケ状工具で刺突、刻目を入れる。内面はハケ調整とナデ。	胎土にφ～2㎜砂粒、白色粒子含有。色調は内外面共7.5YR6/4にぶい橙色。	口縁部 ～胴部上半 破片資料
図84-152	図版47	甕	3区 C26 SD306		甕の口縁部である。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で沈線を描く。横走羽状文か。口唇部にはハケ状工具で刺突、刻目を入れる。内面はハケ調整。	胎土にφ～1㎜灰白色粒子。焼成は良。外面の色調は10YR6/2灰黄褐色。内面は5YR7/4にぶい橙色。	口縁部 破片資料
図84-153	図版47	甕	3区 C26 SD306		甕の口縁部である。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で沈線を描く。横走羽状文か。口唇部にはハケ状工具で刺突、刻目を入れる。内面はハケ調整。	胎土にφ～1㎜灰色・白色・赤褐色粒子、砂粒等含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR8/2灰白色～5YR7/2にぶい橙色。	口縁部 破片資料
図84-154	図版47	甕	3区 C26 SD306		甕の口縁部である。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で沈線を描く。横走羽状文か。口唇部にはハケ状工具で刺突、刻目を入れる。内面はハケ調整。	胎土にφ～1㎜灰白色・白色粒子、雲母、砂粒等含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR4/1褐灰色。内面は5YR6/5にぶい橙色。	口縁部 破片資料 外面煤付着
図85-155	図版47	壷か。	3区 C26 13～14層		無頸壷の口縁部か。判然としない	外面は櫛状工具で波状文を一面に描く。口唇部は平坦に仕上げる。内面はナデか。	胎土にφ～0.5㎜石英等含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR4/3褐色、内面は10YR6/3にぶい黄橙色。	口縁部 破片資料
図85-156	図版47	壷	3区 C26 13～14層		壷の頸部である。	外面は縄文を施す。内面は精緻なヘラミガキを施している。	胎土にφ～0.5㎜石英、雲母、砂粒含有。焼成は良。外面の色調は10YR6/2灰黄褐色。内面は2.5YR6/4にぶい橙色。	頸部～肩部 破片資料 外面煤付着
図85-157	図版47	壷	3区 C26 13～14層		壷の肩部か。	外面はハケ調整の後に櫛状工具で直線文を施す。内面はナデか。	胎土にφ～1㎜白色粒子、砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR7/6橙色。	肩部 破片資料 内面赤彩か。
図85-158	図版47	甕	3区 C26 13～14層	口径(25.0) 胴部径(19.7)	甕である。口縁部から胴部下位にかけての資料である。底部から内湾気味に立ち上がり胴部中位ではあまり膨らみがなく、口縁部は緩やかに外反する。	外面は縦位のハケ調整を施す。横走羽状文のような文様は無い。口唇部は平坦に仕上げてから、外側よりハケ状工具で刺突、刻目を入れる。内面はハケ調整とナデ。	胎土にφ～1㎜砂粒、橙色・灰色粒子等含有。焼成は良。外面の色調は10YR3/1黒褐色、内面は10YR6/3にぶい黄橙色。	口縁部 ～胴部下半 約1/3残存 外面煤付着
図85-159	図版47	甕	3区 C26 13～14層		甕の口縁部である。	外面はハケ調整を施す。口唇部は指頭押圧。内面はナデか。	胎土にφ～0.3㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は2.5YR5/6明赤褐色。内面はN2/黒色。	口縁部 破片資料 内面煤？付着
図85-160	図版47	甕	3区 C26 13～14層		甕の口縁部である。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で沈線を描く。横走羽状文か。口唇部にはハケ状工具で刻目を入れる。内面は板ナデか。	胎土にφ～1㎜砂粒、白色・橙色粒子含有。焼成は良。外面の色調はN3/灰色、内面は10YR6/3にぶい黄橙色。	口縁部 破片資料 外面煤付着

３区出土土器９

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図85-161	図版47	甕	３区 C26 13～14層		甕の口縁部である。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で沈線を描く。横走羽状文か。口唇部には指頭押圧。内面はハケ調整。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR4/2灰黄褐色、内面は10YR6/3にぶい黄橙色。	口縁部 破片資料
図85-162	図版47	甕	３区 C24 13～14層		甕の口縁部である。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で沈線を描く。横走羽状文か。口唇部にはハケ状工具で刻目を入れる。内面はハケ調整か。	胎土にφ～２㎜砂粒、灰色粒子、石英、雲母含有。焼成は良。色調は7.5YR5/4にぶい褐色。	口縁部 破片資料 外面全体に煤付着
図85-163	図版47	甕か。	３区 C25 13～14層		甕の胴部か。磨消線文甕。	外面は縦位にハケ調整した後に３条の沈線を描く。内面はハケ調整とナデ。	胎土にφ～0.2㎜砂粒、白色粒子含有。焼成は良。外面の色調はN3/暗灰色。内面は2.5Y6/3にぶい黄色。	胴部 破片資料 外面煤付着
図85-164	図版47	壷	３区 C26 SD305		壷である。受口状口縁か。	外面はハケ調整。口唇部は平坦に仕上げた後に外側からハケ状工具で刺突、刻目を入れる。受口部下端も同様。内面はヘラミガキか。	胎土にφ～0.5㎜雲母・石英等含有。焼成は良。色調は内外面共5YR6/6橙色。	口縁部 破片資料
図85-165		壷	３区 C26 SD305		壷の肩部である。	外面はハケ調整の後に半截竹管状の工具で擬似流水文を描く。内面は器面剥脱、調整は判然としない。	胎土にφ～0.5㎜雲母、石英、白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共5YR4/3にぶい赤褐色。	肩部 破片資料 166と同一？
図85-166	図版47	壷	３区 C26 SD305		壷の肩部である。	外面はハケ調整の後に半截竹管状の工具で擬似流水文を描く。内面は器面剥脱、調整は判然としない。	胎土にφ～0.5㎜雲母、石英、白色・赤色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共5YR7/6橙色。	肩部 破片資料 165と同一？
図85-167	図版47		３区 C26 SD305	底径6.1	壷の底部である。	外面はヘラミガキ。底面には網代痕が明瞭に残る。見込みにヘラの痕跡。	胎土にφ～1㎜白色・橙色粒子、雲母、石英含有。焼成は良。色調は内外面共10YR6/1褐灰色。	底部 完存 底面黒斑
図85-168	図版47	甕	３区 C26 SD305		甕の口縁部である。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で沈線を描く。横走羽状文か。口唇部にはハケ状工具で刻目を入れる。内面は板ナデか。	胎土にφ～１㎜石英、褐灰色・赤褐色粒子、砂粒含有。焼成は良。外面の色調7.5YR7/4にぶい橙色、内面は10YR7/2にぶい黄橙色。	口縁部 破片資料
図85-169	図版47	甕	３区 C26 SD305		甕の胴部である。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で横走羽状文を描く。内面はハケ調整。	胎土にφ～２㎜白色・赤色粒子砂粒含有。焼成は良。外面の色調はN3/暗灰色、内面は7.5YR7/4にぶい橙色。	胴部 破片資料 外面煤付着
図85-170	図版48	壷	３区 C24 SD307	口径(8.8) 頸径6.3	壷の口縁部から頸部にかけての資料である。短頸壷で口縁部は頸部から緩やかに外反させる。単純口縁である。	外面はハケ調整の後に縄文を施し、沈線で区画する。平坦な口唇部には縄文が認められる。内面はハケ調整を基調とするが、頸部より下位は磨滅し、調整は判然とせず。	胎土にφ～１㎜白色・灰白色粒子石英、雲母、砂粒含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR8/2灰白色～2.5YR7/6橙色、内面は2.5YR6/6橙色～7.5YR6/1褐灰色。	口縁部～頸部約2/3残存
図85-171	図版48	壷	３区 C24 SD307	口径(6.8) 胴部径(12.4)	無頸壷である。口縁部から胴部にかけての資料である。内湾する胴部で、口唇部は折返して丸く仕上げる。	口縁部外面は粗いハケ調整、胴部はヘラミガキか。最後に口唇部をナデ整える。２箇所の穿孔は焼成前。内面はヘラナデか。輪積痕が観察される。	胎土にφ～1.0白色粒子、雲母、砂粒等含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/4にぶい橙色、内面は10YR6/3にぶい黄橙色。	口縁部～胴部約5/8残存
図85-172	図版48～49	壷	３区 C24 SD307		壷である。受口状口縁の破片である。	外面に刻目を入れた縦位の隆帯を付け、脇に指頭による曲線文を描く。内面はヘラミガキか。	胎土にφ～0.5㎜雲母、白色粒子等含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR5/3にぶい褐色。	口縁部 破片資料 173と同一か
図85-173	図版48～49	壷	３区 C24 SD307		壷である。受口状口縁の破片である。	外面に縦位の隆帯を付け、脇に指頭による曲線文。口唇部は工具で押引きか。内面はヘラミガキか。	胎土にφ～0.5㎜雲母、白色粒子等含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR5/3にぶい褐色。	口縁部 破片資料 172と同一か
図86-174	図版48～49	壷	３区 C24 SD307		壷の肩部である。	外面に縄文を施した後に区画沈線を引く。その上位に波状文か。内面はナデ。輪積痕が観察される。	胎土にφ～１㎜雲母等含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y6/1黄灰色、内面は2.5Y6/2黄灰色。	肩部 破片資料 外面赤彩
図86-175	図版48～49	壷	３区 C24 SD307		壷の肩部である。	外面にハケ調整の後に縄文を沈線で区画。最後にヘラミガキで仕上げる。内面はヘラナデかヘラミガキ。	胎土にφ～１㎜灰色粒子、砂粒等含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/4にぶい橙色。内面は2.5YR7/2灰黄色。	肩部 破片資料
図86-176	図版48～49	壷	３区 C24 SD307		壷の肩部である。	外面に沈線で区画した縄文帯を施文。内面はナデか。	胎土にφ～１㎜暗灰色粒子、砂粒含有。焼成は良。外面の色調はN2/黒色、内面は10YR6/1褐灰色。	肩部 破片資料 外面煤付着
図86-177	図版48～49	壷	３区 C24 SD307		壷の肩部である。	外面に沈線で区画した縄文帯を施文。最後にヘラミガキで仕上げ。内面もヘラミガキ。	胎土にφ～0.5㎜雲母、暗灰色・灰白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR6/2灰黄褐色。	肩部 破片資料 外面煤付着
図86-178	図版48～49	壷	３区 C24 SD307		壷の肩部である。	外面はハケ調整の後に櫛状工具で直線文と波状文を描く。文様の下位はヘラミガキ。内面はナデ。	胎土にφ～1㎜石英、雲母等含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/4にぶい橙色。内面は10YR6/3にぶい黄橙色。	肩部 破片資料 外面煤付着
図86-179		壷	３区 C24 SD307		壷の肩部か。	外面に突帯を巡らし、工具で刺突、刻目を入れている。他はヘラミガキ。内面は摩滅して調整不明。	胎土にφ～１㎜灰色粒子、石英、雲母含有。焼成は良。外面の色調は10YR5/1褐灰色、内面は2.5Y7/1灰白色。	肩部 破片資料
図86-180	図版49	甕	３区 C24 SD307	口径(14.6) 頸径(13.3) 胴部径(14.2)	小型の甕である。口縁部から胴部にかけての資料である。内湾して丸みのある胴部から、口縁部を外反気味に延ばす。口唇部は平坦に仕上げる。	外面はハケ調整。平坦に仕上げられた口唇部にもハケ調整が認められる。口縁部内面はハケ調整。胴部はヘラナデか。	胎土にφ～５㎜砂粒等含有。焼成は良。色調は7.5YR5/3にぶい褐色。	口縁部～胴部下半約1/6残存 外面煤付着
図86-181	図版48～49	甕	３区 C24 SD307	口径(21.8)	甕である。口縁部から胴部上位にかけての資料である。口縁部は外反させ、口唇部をやや尖らせる。	外面は横走羽状文。尖らせた口唇部は指頭押圧。内面は口唇部直下に直線文を断続させる。外面と同一工具。直線文下位は板ナデか。	胎土にφ～１㎜雲母含有。焼成は良。色調は内外面共10YR2/1黒色。	口縁部 約1/6残存 外面煤付着
図86-182	図版49	甕	３区 C24 SD307	口径(33.2)	甕である。口縁部から胴部上位にかけての資料である。口縁部は外反させる。	外面はハケ調整の後に粗いハケ調整。口唇部は押圧は指頭か工具か判然としない。内面はハケ調整とヘラナデか。	胎土にφ～２㎜砂粒、赤色粒子等含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR6/4にぶい橙色。	口縁部～胴部上半約1/9残存 外面煤付着

3区出土土器10

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図86-183	図版48～49	甕	3区 C24 SD307	口径(44.0)	甕である。口縁部のみの資料である。外反した口縁部はやや肥厚させ、口唇部は平坦に仕上げる。	外面は一面に条痕を施す。平坦に仕上げた口唇部にはハケ調整が認められる。内面は2段の条痕施文具の断続押圧。１段目は口唇部にかかるため刻目状をなす。口唇部外側も条痕施文具による深い押圧痕。	胎土にφ～0.5㎜雲母、赤色・白色粒子等含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR5/2灰褐色。	口縁部 約1/5残存 外面煤付着
図87-184	図版50	甕	3区 C24 SD307		甕である。胴部のみの資料である胴部中位付近で微かに内湾させつつ直立させ、上位付近で緩やかに外傾させる。	外面はハケ調整の後、胴部中位から上位にかけて条痕を施す。その後、条痕施文部下位に入り組んだ磨消線文を施す。施文は指頭によるものか。	胎土にφ～0.3㎜雲母、白色・赤色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR5.5/2灰褐色。	胴部 破片資料 外面煤付着
図87-185	図版48～49	甕	3区 C24 SD307		甕である。口縁部から胴部上位にかけての資料である。胴部から口縁部にかけて外傾させる。	外面は条痕が施され、最後に口唇部直下から垂直に磨消線を引く。施文は指頭ではない。口唇部は両側からハケ状工具で刻目を入れる内面口唇部直下はハケメを1段入れている。他は板ナデか。	胎土にφ～0.5㎜雲母、白色・赤褐色粒子等含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR3/1黒褐色。	口縁部～胴部上半 破片資料 外面煤付着 186と同一個体か
図87-186		甕	3区 C24 SD307		甕の口縁部である。器厚をやや肥厚させる。	外面はハケ調整の後に条痕を施している。口唇部は両側よりハケ状工具で刻目を入れている。内面は口唇部直下に横位のハケメ。他は板ナデか。	胎土にφ～0.5㎜雲母、白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR4/1褐灰色。	口縁部 破片資料 外面煤付着 185と同一個体か
図87-187	図版48～49	甕	3区 C24 SD307		甕の口縁部である。	外面は条痕が施されている。口唇部は平坦に仕上げた後に条痕施文具で両側から刺突、刻目を入れている。内面口唇部直下は1段の横位のハケメか。その下位はナデ。	胎土にφ～0.5㎜雲母、白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR4/1褐灰色。	口縁部 破片資料
図87-188		甕	3区 C24 SD307	底径(7.2)	甕の胴部下位から底部にかけての資料である。平坦な底部から胴部を直線的に立ち上げている。	外面はハケ調整。内面は炭化物付着と摩滅で調整不明。底面にはスノコ痕が確認される。	胎土にφ～１㎜灰白色粒子、雲母等含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR6/4にぶい橙色。	底部 約1/6残存
図88-189		壷	3区 排水溝	口径(5.2) 頸径(5.0)	短頸壷の口縁部である。単純口縁である。口唇部は平坦に仕上げている。	外面はハケ調整の後に沈線を２条描く。口唇部はナデ。内面はナデ指頭痕有り。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子、砂粒、雲母含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/3にぶい黄橙色。内面は10YR8/2灰白色。	口縁部～頸部 約1/3残存
図88-190		壷	3区 C27 排水溝	口径(6.8) 頸径(4.9)	短頸壷の口縁部から頸部にかけての資料である。肩部から外湾気味に立ち上がり、口縁部は軽く外反させる。単純口縁である。口唇部は丸く仕上げている。	頸部下端に区画された縄文が観察される。内面はナデか。全体的に摩滅気味である。	胎土にφ～２㎜砂粒、白色・橙色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR8/3浅黄橙色。	口縁部～頸部 約3/4残存
図88-191		壷	3区 C24 排水溝	口径(8.2)	壷の口縁部である。単純口縁である。口唇部は平坦に仕上げる。	外面はハケ調整の後に2条の沈線を横位に引く。内面はハケ調整とヘラナデ。	胎土にφ～２㎜砂粒、雲母、石英含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR7/4にぶい橙色～5YR7/6橙色。	口縁部 約1/6残存 内面赤彩か
図88-192		壷	3区 C25 排水溝	口径(15.1) 頸径(8.1)	壷の口縁部である。複合口縁である。	外面はハケ調整の後に棒状浮文を3本貼り付ける。内面はハケ調整。頸部付近に絞り痕か。	胎土にφ～１㎜白色・灰白色粒子雲母等含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR7/3にぶい黄橙色。	口縁部～頸部 約1/3残存
図88-193		壷	3区 C29 排水溝	口径(15.2)	壷の口縁部である。複合口縁である。	外面はヘラミガキか。口縁部に棒状浮文を2段5本を貼り付ける。口唇部は平坦に仕上げる。内面もヘラミガキか。全体的に摩滅。	胎土にφ～0.5㎜砂粒、橙色・白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に5YR7/4にぶい橙色。	口縁部 約1/12残存
図88-194		壷	3区 C27 排水溝	頸径(5.1)	壷の頸部から胴部上位にかけての資料である。	外面はハケ調整の後にヘラミガキか。内面はナデ。輪積痕が観察される。	胎土にφ～４㎜砂粒、白色粒子等含有。焼成は良。外面の色調は5YR7/4にぶい橙色。内面は5Y5/1灰色。	頸部～胴部上半 約1/2残存
図88-195		壷	3区 C25 排水溝	胴部径(21.8)	壷の肩部から胴部中位にかけての資料である。	外面はハケ調整の後にナデか。一部ヘラミガキか。円形浮文を３個貼り付ける。内面はハケ調整とナデ。指頭痕が残る。	胎土にφ～0.3㎜白色粒子等が含有。焼成は良。外面の色調10YR7/3にぶい黄橙色。内面は2.5Y6/1黄灰色。	頸部～胴部 約1/2残存
図88-196		壷	3区 C25 排水溝	底径(8.4)	壷の胴部中位から底部にかけての資料である。胴部は底部から直線的に延び、胴部中位で屈折、内湾して立ち上がる。	外面はハケ調整の後にヘラミガキ。底面は木葉痕をナデ消している。内面はハケ調整。見込みはナデ。	胎土にφ～２㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR8/4浅黄橙色。内面は7.5YR7/6橙色。	底部 約1/2残存
図88-197		壷	3区 C28 排水溝	底径4.6	壷の底部である。	外面はヘラミガキか。内面と底面の調整は判然としない。全体的に摩滅気味。	胎土にφ～３㎜砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共10YR3/1黒褐色。	底部 完存
図88-198		壷	3区 C26 排水溝	底径6.0	壷の底部か。	外面はハケ調整の後にヘラミガキ。底面には刷毛痕が観察される。内面もハケ調整の後にヘラミガキ。	胎土にφ～２㎜砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共10YR7/2にぶい黄橙色。	底部 完存 外面煤付着
図88-199		壷	3区 C25 排水溝	底径5.7	壷の底部である。胴部はやや外湾気味に立ち上がる。	外面はヘラミガキか。底面は摩滅のため判然としない。内面はヘラナデか。	胎土にφ～２㎜砂粒等含有。焼成は良。外面の色調は10YR6/3にぶい黄橙色。内面は10YR6/1褐灰色。	底部 完存
図88-200		壷	3区 C26 排水溝		壷の肩部である。	外面に沈線で区画された縄文を施す。内面はハケ調整。全体的に摩滅。	胎土にφ～0.3㎜砂粒等含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/3にぶい橙色。内面2.5Y6/1黄灰色	肩部 破片資料
図88-201		壷	3区 C28 排水溝		壷の肩部である。	外面に縄文を施した後に沈線で区画。内面はヘラナデか。	胎土にφ～0.3㎜白色・黒色粒子雲母・石英含有。焼成は良。外面の色調7.5YR6/6橙色。内面は10YR7/4にぶい橙色。	肩部 破片資料
図88-202		壷	3区 C26 排水溝		壷の肩部である。	外面は縄文を施した後に沈線で、波状文等を描く。内面は器面剥脱のため判然としない。	胎土にφ～２㎜石英、雲母、砂粒等含有。焼成は良。外面の色調は10YR6/3にぶい黄橙色、内面は2.5Y3/1黒褐色。	肩部 破片資料

３区出土土器11

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図88-203		壷	３区 C24 排水溝		壷の肩部である。	外面は縄文を施した後に沈線で区画。下位にも沈線。内面はナデ。	胎土にφ～1㎜雲母、石英等含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/4にぶい橙色。内面は10YR6/3にぶい黄橙色。	肩部 破片資料
図88-204		壷	３区 C24 排水溝		壷の肩部である。	外面はハケ調整の後に櫛状工具で２段の直線文。直上に指頭で列点状に刺突。内面は摩滅。	胎土にφ～１㎜砂粒、石英等含有。焼成は良。色調は内外面共2.5YR6/6橙色～7.5YR7/1明褐灰色。	頸部 破片資料
図88-205		壷	３区 C28 排水溝		壷の肩部の破片資料である。	外面には複合鋸歯文が施されている。内面はハケ調整。	胎土にφ～砂粒、赤色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共10YR6/1褐灰色。	肩部 破片資料
図88-206		壷	３区 C25 排水溝		壷の肩部である。	外面は櫛状工具で弧状文を描く。内面はナデ。輪積痕有り。	胎土にφ～１㎜石英、雲母等含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR6/3にぶい褐色。	肩部 破片資料
図88-207		壷	３区 C26 排水溝		壷の肩部である。	外面はヘラ状工具で弧状文を描いた後にヘラミガキ。内面はヘラナデか。	胎土にφ～１㎜雲母、石英含有。外面の色調は10YR3/2黒褐色、内面は2.5Y6/1黄灰色。	肩部 破片資料 外面黒斑
図88-208		壷か	３区 C29 排水溝		壷の頸部である。	外面はハケ調整の後に櫛状工具で羽状に施文。最後に横位の沈線で区画している。内面はナデ。	胎土にφ～３㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は5YR7/4にぶい橙色。内面は10YR6/1褐灰色。	頸部 破片資料
図89-209		甕	３区 C28 排水溝	口径(15.5)	甕の口縁部から胴部中位にかけての資料である。微かに内湾しながら立ち上がり、口唇部を外反させている。	外面はハケ調整のみ。横走羽状文等の文様は無い。平坦に仕上げた口唇部は工具で刻目を入れる。内面はナデ。	胎土にφ～４㎜砂粒等含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y7/2灰黄色。内面は10YR8/4浅黄橙色。	口縁部 ～胴部上半 約1/4残存 外面煤付着
図89-210		甕	３区 C25 排水溝	口径(14.0) 頸径(12.2)	甕の口縁部から胴部中位にかけての資料である。やや膨らんだ胴部から口縁部をやや強めに外反させている。	外面はハケ調整の後にナデか。口唇部は平坦で、ハケ調整がなされている。内面はハケ調整。一部ナデか。	胎土にφ～４㎜白色粒子、砂粒等含有。焼成は良。外面の色調は10YR6/3にぶい黄橙色。内面は10YR5/4にぶい黄褐色。	口縁部 ～胴部上半 約1/4残存
図89-211		甕	３区 排水溝	口径(20.0) 頸径(19.0)	甕である。口縁部から胴部中位にかけての資料である。	外面はハケ調整を施している。平坦に仕上げられた口唇部にはハケ調整の後にナデ。工具で刻目を入れている。内面はハケ調整とナデ。	胎土にφ～１㎜砂粒、白色粒子等含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR5/3にぶい褐色。内面は7.5YR7/4にぶい橙色。	口縁部 ～胴部上半 約1/3残存 外面煤付着
図89-212		甕	３区 C28 排水溝	口径(31.0)	甕の口縁部である。口縁部は外傾させている。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で沈線を描く。横走羽状文か。口唇部は指頭押圧。内面はハケ調整の後にヘラナデ。	胎土にφ～４㎜砂粒、石英、雲母含有。焼成は良。外面の色調は10YR5/3にぶい黄褐色、内面は7.5YR6/4にぶい橙色。	口縁部 ～胴部上半 約1/6残存 外面煤付着
図89-213		甕	３区 C28 排水溝	底径7.2	台付甕の台部である。器厚は厚く台部もやや低平な作りである。	外面はハケ調整。見込み付近は摩滅。炭化物が吸着。台部内面はナデとハケ調整。	胎土にφ～２㎜砂粒、雲母、白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR6/3にぶい黄橙色。	台部 完存 内面炭吸着
図89-214		甕	３区 C26 排水溝		甕の口縁部である。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で沈線を描く。横走羽状文か。口唇部はハケ状工具で押圧、刻目を入れる。内面は板ナデ。全体摩滅。	胎土にφ～３㎜砂粒等含有。焼成は良。色調は内外面共2.5Y7/2黄灰色。	口縁部 破片資料
図89-215		甕	３区 C24 排水溝		甕の口縁部である。口唇部を平坦に仕上げている。	外面はハケ調整。口唇部は外側かハケ状工具で刺突、刻目を入れている。	胎土にφ～0.3㎜石英、雲母、白色粒子含有。焼成は良。色調は10YR5/3にぶい黄褐色。	口縁部 破片資料
図89-216		甕	３区 C24 排水溝		甕の口縁部である。	外面はハケ調整の後にヘラ状工具で沈線を引く。横走羽状文か。平坦な口唇部はハケ調整の後に指頭押圧。内面はハケ調整。	胎土にφ～1.5㎜砂粒等含有。焼成は良。外面の色調は2.5YR7/6橙色。内面は10YR7/3にぶい黄橙色。	口縁部 破片資料
図89-217		甕	３区 C27 排水溝		甕の胴部である。	外面はヘラ状工具で横走羽状文を施し、下端を１条の沈線で区画。内面はナデ。	胎土にφ～0.5㎜石英、雲母等含有。焼成は良。外面の色調は10YR3/2黒褐色。内面は10YR4/2灰黄褐色。	胴部 破片資料

５－１区出土土器１

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図90-1		小椀	５－１区 砂利層	口径(9.0) 底径(5.6) 器高(2.7)	山茶椀である。やや内湾気味に立ち上がり、口唇部を丸く仕上げる	自然釉が掛かる。見込みには重ね焼きの痕跡が残る。高台の畳付きにはスノコ痕が残る。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共N7/灰白色。黒い吹き出し有り。	全体の 約1/3残存
図90-2	図版51	壷	５－１区 砂利層	口径(16.5)	折返し口縁を持つ壷である。口縁部のみの資料である。	外面はハケ調整の後に折返し、さらにハケ調整を施し、ハケ状工具で口唇部を刺突。内面は口縁部に連続刺突。他はナデ。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/4にぶい橙色、内面は5YR7/4にぶい橙色。	全体の 約1/5残存
図90-3	図版51	壷	５－１区 B・C3 砂利層		長頸壷の頸部である。	外面には縄文と沈線を施し、突起を有する。突起には刻目と穿孔がなされている。内面はナデ。	胎土にφ～0.5㎜雲母・白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共10YR5/2灰黄橙色。	頸部 破片資料
図90-4	図版51	壷	５－１区 砂利層		壷の肩部である。	外面にはクシ状工具で波状文を施す。その上位には円形浮文が４個付けられている。内面はナデ。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/3にぶい褐色、内面は10YR6/1褐灰色。	肩部 破片資料
図90-5		壷	５－１区 C3 砂利層	底径(8.0)	壷の胴部から底部にかけての資料である。	外面はハケ調整の後にヘラミガキ内面は板ナデとハケ調整。底面にはヘラミガキ。木葉痕一部残存。	胎土にφ～２㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/3にぶい黄橙色、内面は2.5YR8/3浅黄色。	底部 約1/2残存
図90-6	図版51	甕	５－１区 C3 砂利層		甕の口縁部から胴部中位にかけての資料である。最大径は口縁部ではかる。口唇部は平坦に仕上げ。	外面はハケ調整。口縁部内面はハケ調整。胴部内面はハケ調整の後ナデか。	胎土にφ～１㎜砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共5YR6/4にぶい橙色。	口縁部 破片資料 外面煤付着
図90-7	図版51	甕	５－１区 B3～C3 砂利層		甕の口縁部から胴部中位にかけての資料である。最大径は口縁部ではかる。口唇部は平坦に仕上げ。	内外面共にハケ調整。口唇部の平坦面周辺はナデ。	胎土にφ～１㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共5YR5/4にぶい赤褐色。	口縁部 破片資料 外面煤付着

5－1区出土土器2

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図90-8		甕	5－1区 B2～B3 砂利層	底径6.4	台付甕の台部である。比較的低平で器厚はやや厚い。	外面はハケ調整の後にナデ。台部内面はナデとハケ調整。	胎土にφ～1㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共10YR6/4にぶい黄橙色。	台部 完存
図90-9		壷	5－1区 C3 15～16層	口径(21.4)	複合口縁を持つ壷である。口縁部から頸部にかけての資料である。	口縁部外面はハケ調整の後にナデ。3条の沈線を施す。頸部はハケ調整の後にヘラミガキ。内面はヘラミガキとハケ調整。	胎土にφ～1㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/3にぶい褐色、内面は10YR6/1褐灰色。	口縁部 約1/8残存
図90-10		壷	5－1区 C3 15～16層	口径(12.8)	壷の口縁部である。	内外面共にハケ調整。口唇部付近はナデ。	胎土にφ～1㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR5/3にぶい褐色。	頸部 完存
図90-11		壷	5－1区 C3 15～16層	底径(9.2)	壷の底部である。	外面はナデ。内面はハケ調整。底面に木葉痕が明瞭に観察される。	胎土にφ～1㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/3にぶい黄橙色、内面はN3/暗灰色。	底部 約2/3残存
図90-12		甕	5－1区 C3 15～16層	口径(17.4)	甕の口縁部である。最大径は胴部ではかる。口唇部は平坦に仕上げる。	内外面共にハケ調整。胴部外面に一部ナデ。口唇部付近はナデ。	胎土にφ～1㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共2.5Y6/2灰黄色。	口縁部 約1/5残存
図90-13		壷	5－1区 C3 15～16層	底径(15.6)	大型壷の底部である。	外面はハケ調整。内面は器面剥脱して判然としない。	胎土にφ～1㎜白色・橙色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共10YR8/4浅黄橙色。	底部 完存
図90-14		壷	5－1区 C3 15～16層	底径(9.0)	壷の底部である。やや平坦な底部から微かに内湾しながら胴部が立ち上がる。	外面はハケ調整の後にナデ、内面はハケ調整。全体的に摩滅。	胎土にφ～1㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共2.5YR7/8橙色。	底部 約2/3残存 底面に炭化物
図90-15		甕	5－1区 C3 15～16層	口径(10.0) 頸径(8.5) 胴部径(9.8) 底径(5.5) 器高7.8	小型の甕である。胴部は内湾気味に立ち上がり、中位付近で胴部最大径をはかる。口縁部は軽く外反し、口唇部を丸く仕上げる。	全体的に摩滅し、調整は一切不明。	胎土にφ～1㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR6/3にぶい黄橙色、内面は5YR6/4にぶい橙色。	全体の 約1/4残存
図90-16		高坏	5－1区 C3 15～16層		高坏の破片資料である。脚部は故意に折損されている。	外面はヘラミガキ。坏部内面もヘラミガキ。脚部内面はハケ調整とナデ。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共10YR6/3にぶい黄橙色。	全体の 約1/8残存
図91-17		壷	5－1区 C3 15～17層	口径(14.0) 頸径(9.3)	単純口縁を持つ壷である。	外面はハケ調整の後にヘラミガキ。内面はハケ調整。のちにヘラミガキか。内外面共に赤彩。	胎土にφ～2㎜砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共10YR7/3にぶい黄橙色。	口縁部 約1/4残存
図91-18		壷	5－1区 B～C3 15～17層		壷の肩部である。	外面は円形浮文を貼り付けた後にナデ。内面はハケ調整の後にナデ。	胎土にφ～2㎜白色粒子、砂粒含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/4にぶい橙色、内面は2.5Y6/1黄灰色。	肩部 約1/2残存
図91-19	図版51	壷	5－1区 C3 15～17層	口径(17.9) 頸径12.0	折返し口縁を持つ壷である。肩部から下位は欠損している。肩部から直立させて後、口縁部は外反させる。	外面はハケ調整の後に口縁部を折返し、口唇部にもハケ調整。口唇部直下から一部縦方向のヘラミガキ。内面はハケ調整。口縁部に一部ヘラミガキ。	胎土にφ～0.5㎜雲母・石英等含有。焼成は良。外面の色調は5YR6/6橙色。内面7.5YR6/2灰褐色。	口縁部 約2/5残存
図91-20		壷	5－1区 C3 15～17層	胴部径(9.4)	小型の壷である。丸みを帯びた胴部にやや直立気味に延びた頸部が見られる。無花果形である。	外面はナデの後にヘラミガキ。内面はナデとハケ調整。	胎土にφ～2㎜白色粒子、石英、砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR7/4にぶい橙色。	胴部 約1/2残存
図91-21		壷	5－1区 C3 15～17層	底径(10.0)	壷の底部である。	外面及び底面はヘラミガキを施す。底面には僅かに木葉痕が観察される。内面はハケ調整の後にナデ。	胎土にφ～2㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は2.5YR5/8明赤褐色、内面は7.5Y5/1灰色。	底部 約3/4残存
図91-22	図版51	甕	5－1区 C3 15～17層	口径(23.2) 頸径(22.6) 胴部径(26.6) 底径10.8 器高30.2	台付甕である。口縁部から台部まで復原された資料である。直線的に胴部は立ち上がり、中位から上位にかけての位置で最大径をはかる。口縁部は折り返している。	外面はハケ調整の後にナデか。口縁部内面と底部付近はハケ調整。胴部内面は板ナデか。台部は内外面共にハケ調整。	胎土にφ～1㎜灰色・白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/2にぶい黄橙色、内面は7.5YR6/3にぶい褐色。	全体の 約1/3残存
図91-23	図版51	甕	5－1区 C3 15～17層	口径(15.6) 頸径(14.7) 胴部径(17.4)	台付甕である。台部は欠損している。丸みを帯びた胴部で、口唇部は平坦に仕上げられている。	口縁部外面は縦方向のハケ調整。頸部から下位は横方向となる。口唇部はナデ。内面は板ナデとハケ調整。	胎土にφ～5㎜砂粒・雲母等含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR7/4にぶい橙色。	全体の 約2/3残存 外面煤付着
図91-24	図版51	甕	5－1区 C3 15～17層	口径(12.4) 頸径(10.8) 胴部径(16.8)	台付甕か。底部から台部欠損。全体的に丸みを帯びた胴部を持ち、口縁部はやや丸く仕上げる。	外面はハケ調整。頸部付近は縦、胴部は横方向。口縁部は横ナデ。内面は口縁部は板ナデ。胴部はハケ調整。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子他含有。焼成は良。外面の色調は10YR6/2灰黄橙色、内面は2.5Y6/1黄灰色。	全体の 約2/5残存
図92-25		壷	5－1区 C3 17層上層	口径(8.6)	短頸壷である。口縁部から肩部にかけての資料である。単純口縁である。口唇部は丸く仕上げている	外面はハケ調整の後にナデ。口唇部直下に浮文を付ける。内面もハケ調整の後にナデ。	胎土にφ～1㎜白色粒子・砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共10YR7/2にぶい黄橙色。	口縁部 約1/4残存
図92-26	図版52	壷	5－1区 C3 17層上層	口径(13.4) 頸径(10.4)	折返し口縁を持つ壷である。口縁部から肩部にかけての資料である。頸部からあまり外反させない。	外面はハケ調整の後に口縁部を折り返している。部分的にヘラミガキか。内面はハケ調整と板ナデ。	胎土にφ～1㎜白色・灰色・褐色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に10YR7/3にぶい黄橙色。	口縁部 約1/2残存
図92-27		壷	5－1区 C3 17層上層	胴部径(8.3) 底径(6.0)	小型の壷である。底部から内湾して立ち上がる。胴部下位で最大径をはかる。肩部は張らない。	外面はハケ調整の後にヘラミガキ。内面はナデ。底面はヘラミガキ。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子・雲母含有。焼成は良。色調は内外面共10YR6/2灰黄褐色。	頸部～底部 完存
図92-28		壷	5－1区 C3 17層上層	頸径(6.8) 胴部径(10.6) 底径(5.6)	小型の壷である。内湾気味に立ち上がり、肩部は張らずに頸部へ移行する。	外面はハケ調整の後にナデか。内面は板ナデ。	胎土にφ～1㎜灰色・白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR6/2灰黄褐色、内面は10YR7/2にぶい黄褐色。	胴部 約1/3残存
図92-29		壷	5－1区 C3 17層上層	底径(6.7)	壷の底部から胴部下位にかけての資料である。	外面はヘラミガキ。内面はナデ。底面もヘラミガキを施す。	胎土にφ～2㎜白色粒子、砂粒含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/6橙色、内面は10YR7/4にぶい黄橙色。	底部 約1/10残存
図92-30		壷	5－1区 B～C3 17層上層	底径(10.5)	壷の底部である。	外面の調整は判然としない。内面は板ナデ。	胎土にφ～0.5㎜雲母、白色・灰色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR5/2灰黄褐色、内面は10YR7/2にぶい黄橙色。	底部 約3/4残存

5－1区出土土器3

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図92-31		壷	5－1区 B～C3 17層上層		長頸壷の胴部か。	外面には沈線で三角文を描く。周囲に刺突か。内面はナデ。	胎土にφ～0.5㎜雲母・白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/3にぶい褐色。内面は10YR6/2灰黄褐色。	胴部 破片資料 32と同一個体
図92-32	図版52	壷	5－1区 B～C3 17層上層		長頸壷の胴部か。	外面には沈線で三角文を描く。周囲に刺突か。内面はナデ。	胎土にφ～0.5㎜雲母・白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/3にぶい褐色。内面は10YR6/2灰黄褐色。	胴部 破片資料 31と同一個体
図92-33	図版52	壷	5－1区 B～C3 17層上層		壷の頸部から肩部にかけての資料である。あまり張りは無い。	頸部外面にはクシ状工具で横位の直線文。その下位に波状文。内面はナデ。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR6/2灰黄橙色、内面は2.5YR6/1黄灰色。	頸部～肩部 破片資料
図92-34	図版52	壷	5－1区 C3 17層上層		壷の肩部である。	内外面共にナデ。外面に円形浮文、勾玉状の浮文が付けられている。	胎土にφ～1㎜砂粒・白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/3にぶい橙色、内面は2.5Y6/1黄灰色。	肩部 破片資料
図92-35	図版52	壷	5－1区 B～C3 17層上層		壷の肩部である。	外面に横位の沈線文と磨消縄文が施されている。内面はナデか。	胎土にφ～0.5㎜雲母・白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/4にぶい橙色、内面は10YR7/2にぶい黄橙色。	肩部 破片資料
図92-36	図版52	壷	5－1区 C3 17層上層		甕の口縁部である。胴部は大きく膨らみ、最大径は胴部ではかるものと思われる。	外面は細かいハケ調整。口縁部～頸部は後で指ナデ。内面はハケ調整。まず荒いハケ調整の後に胴部は細かいハケ調整。	胎土にφ～1㎜砂粒・白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR6/4にぶい橙色。	口縁部～胴部 破片資料
図92-37		甕	5－1区 B～C3 17層上層	底径7.4	台付甕の台部である。「ハ」の字状に直線的に広がる。	外面はヘラミガキ。接合部はハケ調整。内面はハケ調整とナデ。	胎土にφ～0.5㎜砂粒・白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共10YR6/2灰黄褐色。	台部 完存 外面煤付着
図92-38		甕	5－1区 B2～B3 17層上層	底径(12.8)	台付甕の台部である。「ハ」の字状に直線的に広がる。	外面はハケ調整。接合部はナデ。台部内面はハケ調整の後にナデ。	胎土にφ～4㎜雲母・砂粒・白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y7/2灰黄色、内面は7.5YR6/6橙色。	台部 完存
図92-39		高坏	5－1区 C3 17層上層		高坏の坏部である。	坏部内面は丁寧で精緻なヘラミガキ。外面はハケ調整。見込み中央に焼成前に穿孔。脚部は接合部で折損。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共10YR6/3にぶい黄橙色。	坏部 破片資料
図92-40		器台	5－1区 C3 17層上層	口径(7.1) 頸径(3.0) 台径(8.4) 器高(7.2)	器台である。脚部は「ハ」の字状に広がる。透かし孔は3箇所、焼成前に穿孔する。受部の口唇部は丸く仕上げる。	受部は内外面共にナデ。脚部外面は縦方向のヘラミガキ。内面はナデ。しぼり痕有り。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR7/3にぶい橙色。	全体の約1/3残存
図92-41		壷	5－1区 B2～B3 17層下層	口径(15.6)	短頸壷である。口縁部から頸部のみの資料である。口唇部は平坦に仕上げられている。	外面はハケ調整の後にヘラミガキ。口唇部はハケ調整の後にナデ。内面はハケ調整の後にナデ。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共10YR6/2灰黄褐色。	口縁部 約1/4残存
図92-42		壷	5－1区 B2～B3 17層下層	口径(20.4)	複合口縁を持つ壷である。口縁部のみの資料である。	口縁部外面にはハケ調整の後にナデ。最後に縦位の沈線を4条施している。内面はハケ調整の後にヘラミガキ。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共10YR6/2灰黄褐色。	口縁部 約1/4残存
図92-43		壷	5－1区 C3 17層下層	口径(13.9) 頸径(10.3)	短頸壷である。口縁部のみの資料である。単純口縁で口唇部を平坦に仕上げている。	外面はハケ調整、頸部はその後に縦位のヘラミガキ。内面もハケ調整で、口縁部はヘラミガキ。口唇部はハケ調整。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR6/4にぶい橙色。	口縁部 約1/3残存
図92-44	図版52	壷	5－1区 B～C3 17層下層		壷の肩部である。	外面は縄文が施され、その下位に円形浮文。内面はハケ調整。	胎土にφ～0.5㎜砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共2.5Y6/1黄灰色。	肩部 破片資料
図92-45	図版52	壷	5－1区 C3 17層下層		壷の肩部である。	外面は磨消縄文を施す。内面はナデ。	胎土にφ～2㎜石英・砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共10YR6/3にぶい黄橙色。	肩部 破片資料
図92-46	図版52	壷	5－1区 C3 17層下層		壷の肩部である。	外面はヘラミガキの後に赤彩。最後にクシ状工具で波状文。内面は摩滅のため判然としない。	胎土にφ～1㎜白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共10YR5/2灰黄褐色。	肩部 破片資料 67と同一個体
図92-47		壷	5－1区 B～C3 17層下層	胴部径(9.0) 底径3.9	小型の壷である。頸部から口縁部は欠損。やや丸みを帯びた底部から胴部は内湾して立ち上がる。胴部中位で最大径をはかる。	外面は摩滅のため調整は判然としない。内面はナデ。	胎土にφ～1㎜白色・黒色粒子、砂粒含有。焼成は良。外面の色調は10YR5/1褐灰色、内面は5Y6/1灰色。	底部 完存
図93-48		壷	5－1区 B2～3 17層下層	口径(33.4)	甕の口縁部である。頸部から軽く外反させている。	外面はハケ調整の後に折返し、指ナデを行いハケ状工具で刺突。内面はハケ調整の後にナデ。	胎土にφ～6㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/4橙色、内面は5YR5/6明赤褐色。	口縁部 約1/4残存
図93-49		壷	5－1区 B3～C3 17層下層	口径(17.6) 頸径(15.4)	甕の口縁部から胴部にかけての資料である。口縁部は直線的に延び口唇部は平坦に仕上げている。	内外面共にハケ調整を施す。口唇部はナデ。全体的に摩滅。	胎土にφ～5㎜白色粒子、砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共10YR7/2にぶい黄橙色。	口縁部 約1/6残存
図93-50	図版52	甕	5－1区 C3 17層下層		甕の口縁部である。	外面は摩滅で調整は判然としない。内面はナデか。	胎土にφ～7㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は5YR6/6橙色、内面は7.5YR6/6橙色。	口縁部 破片資料
図93-51	図版52	甕	5－1区 B～C3 17層下層		甕の口縁部である。	外面はハケ調整の後にナデか。内面はハケ調整。口唇部はナデ	胎土にφ～5㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/4にぶい黄橙色、内面は2.5YR6/8橙色	口縁部 破片資料
図93-52		甕	5－1区 B～C3 17層下層	底径(10.6)	台付甕の胴部下位から台部にかけての資料である。台部は「ハ」の字状に直線的に延びる。器厚は胴部と同程度。	胴部外面はハケ調整。接合部付近はハケ調整の後にナデ。台部外面はナデ。胴部内面はハケ調整。見込みはナデ。台部内面は板ナデ。	胎土にφ～2㎜灰色砂粒含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y6/1黄灰色、内面は7.5YR6/4にぶい橙色	台部 完存
図93-53	図版52	甕	5－1区 C3 17層下層		甕の口縁部である。	外面はハケ調整。内面はナデ。	胎土にφ～2㎜雲母・石英等含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y2/1黒色、内面は10YR3/1黒褐色。	口縁部 破片資料
図93-54	図版52	甕	5－1区 C3 17層下層		甕の口縁部である。	外面に荒いハケ調整か条痕。内面はナデ。口唇部は指頭押圧。	胎土にφ～2㎜雲母・石英等含有。焼成は良。外面の色調は10YR4/1褐灰色、内面は10YR3/1黒褐色。	口縁部 破片資料

5－1区出土土器4

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図93-55	図版52	甕	5－1区 B2～3 17層下層		甕の口縁部である。口唇部を肥厚平坦に仕上げている。	外面は荒いハケ調整か条痕。平坦な口唇部も同様。内面はナデ。	胎土にφ～2㎜石英、白色粒子、砂粒含有。焼成は良。外面の色調は7.5Y3/1黒褐色、内面は10YR7/2にぶい黄橙色。	口縁部 破片資料
図93-56		高坏	5－1区 B2～3 17層下層		高坏の脚部である。坏部との接合部付近のみ残存。透かし孔が穿孔される。	外面は丁寧なヘラミガキ。内面はナデ。	胎土にφ～1㎜白色粒子。砂粒含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/3にぶい橙色、内面は10YR7/2にぶい黄橙色。	脚部 破片資料
図93-57		鉢	5－1区 B～C3 17層下層		鉢の脚部であろう。低平な脚部で「ハ」の字状に広がる。脚部端部はやや丸く仕上げている。	外面はハケ調整。接合部付近はヘラナデ。内面はハケ調整と粘土の掻き取り痕か。	胎土にφ～3㎜白色・灰色・赤色粒子、砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共10YR7/3にぶい黄橙色。	脚部 約3/4残存
図94-58	図版53	壷	5－1区 C3 SD501	口径(10.2) 頸径(9.8)	単純口縁を持つ短頸壷である。肩部から口縁部のみの資料である。口縁部は殆ど外反せず、直立気味に立ちあげる。	外面はハケ調整。肩部に勾玉状の浮文を付ける。内面は頸部付近にヘラナデ。他はハケ調整。	胎土にφ～5㎜砂粒、雲母等含有。焼成は良。色調は内外面共10YR7/2にぶい黄橙色～7.5YR7/3にぶい橙色。	口縁部 約1/3残存
図94-59	図版53	壷	5－1区 C3 SD501	口径(15.8)	二重口縁を持つ壷である。口縁部のみの資料である。口縁部は軽く外反する。	外面はヘラミガキ。円形浮文には竹管状の工具で刺突。内面は摩滅	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR6/4にぶい橙色、内面は2.5Y5/1黄灰色。	口縁部 約1/3残存
図94-60		壷	5－1区 C3 SD501	胴部径(8.8) 底径(5.8)	小型の壷である。胴部上位から底部にかけての資料である。胴部は中位付近で最大径をはかる。	外面はハケ調整の後にヘラミガキ。内面はナデ。底面はナデか。	胎土にφ～2㎜石英、白色粒子、砂粒含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/2にぶい黄橙色、内面は2.5Y6/1黄灰色。	底部 約1/3残存
図94-61		甕	5－1区 C3 SD501	口径(22.6) 頸径(20.4)	甕の口縁部である。口縁部から胴部上位にかけての資料である。口縁部はやや直線的で、口唇部は丸く仕上げる。	内外面共に荒いハケ調整の後に、細かいハケ調整。ただし内外面の細いハケ調整の工具は別個体。口唇部はナデ。	胎土にφ～1㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR6/3にぶい黄橙色、内面は7.5YR5/3にぶい褐色。	口縁部 約1/5残存
図94-62		高坏	5－1区 C3 SD501	底径(11.9)	高坏の脚部である。「ハ」の字状に広がるが、中位でやや外方に広がる。中位に透かし孔が穿孔されている。	外面はハケ調整の後に縦位のヘラミガキを施す。内面はハケ調整。	胎土にφ～0.5㎜白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/3にぶい黄橙色、内面は7.5YR5/4にぶい褐色。	脚部 約1/6残存
図94-63	図版53	壷	5－1区 B3 SD502	口径(23.4) 頸径(11.3)	単純口縁を持つ壷である。口縁部から頸部にかけての資料である。肩部から緩やかに外反しながら広がる口縁部である。	外面は口唇部から頸部中位まで縄文、その下位は横方向のヘラミガキ。内面は摩滅のため調整判然とせず。ナデか。	胎土にφ～2㎜砂粒、長石含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/4にぶい橙色。	口縁部 約3/5残存 内外面共に赤彩か。
図94-64	図版53	壷	5－1区 C3 SD502	頸径(8.0) 胴部径(23.6)	口縁部と胴下半部から底部を欠損した壷である。胴部中位で最大径をはかり、直線的な頸部を持つ。	外面はハケ調整の後にナデか？肩部に円形浮文を貼り付ける。内面はハケ調整。胴部は板ナデか。全体的に摩滅気味。	胎土にφ～5㎜白色・灰色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR6/2灰黄褐色、内面は2.5Y6/1黄灰色。	全体の 約1/7残存
図94-65		壷	5－1区 B～C3 SD502		壷の肩部である。	外面に縄文と擬似流水文が施される。内面は摩滅して判然とせず。	胎土にφ～3㎜石英・砂粒等含有。焼成は良。外面の色調は2.5YR5/2暗灰黄色、内面は10YR7/3にぶい黄橙色。	肩部 破片資料
図94-66		壷	5－1区 C3 SD502	胴部径(10.3) 底径(5.4)	小型の壷である。胴部上位から底部にかけての資料である。胴部は中位付近で最大径をはかる。	外面はハケ調整の後にヘラミガキ。内面はヘラナデとハケ調整。底面はナデか。僅かに木葉痕有り。	胎土にφ～2㎜砂粒、白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は7.5YRにぶい橙色、内面は2.5Y6/1黄灰色。	胴部～底部 約1/2残存
図94-67	図版53	壷	5－1区 C3 SP501		壷の胴部である。	外面はナデ調整の後に赤彩。最後にクシ状工具で横位に波状文を施している。	胎土にφ～1㎜白色粒子、雲母、砂粒含有。焼成は良。外面の色調は5YR6/6橙色、内面は10YR5/3にぶい黄褐色。	胴部 破片資料 46と同一個体

5－2区出土土器1

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図95-1		碗	5－2区 BC2 自然流路 砂利層	底径8.0	灰釉陶器の碗である。高台は角高台である。	見込みは回転指ナデ。底面はナデ。畳付きもナデ。	胎土にφ～3㎜白色・黒色砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共7.5Y7/1灰白色	底部 完存
図95-2	図版54	高坏	5－2区 C2 排水溝 16層	底径(8.2)	口縁部を欠いた高坏である。脚部は「ハ」の字状に外反する。三方から透かし孔を穿孔している。坏部は下位で屈曲している。	外面はハケ調整の後にヘラミガキ。坏部内面はハケ調整の後にヘラミガキか。脚部内面はナデ。内外面共に摩滅気味。	胎土にφ～4㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y7/2黄灰、内面は5YR7/6橙色。	全体の 約1/2残存
図95-3		壷	5－2区 B2 SD503	口径(10.1)	単純口縁を持つ壷である。口縁部を軽く外反させ、口唇部は丸く仕上げている。	内外面共にナデか。全体的に摩滅。	胎土にφ～3㎜砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共10YR6/2灰黄褐色。	口縁部 約1/4残存
図95-4	図版54	壷	5－2区 B2 SD503	頸径(4.8) 胴部径(11.7) 底径(3.8)	直口壷である。口縁部は欠損している。凸気味の底部から丸みを帯びた胴部が立ち上がる。肩部からはほぼ直立する。	外面はヘラミガキを施す。口縁部内面は横方向のヘラミガキ。胴部は横ナデ。見込みはハケ調整の痕跡が残る。	胎土にφ～4㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/4浅黄橙色、内面は2.5Y6/1黄灰色。	全体の 約3/4残存
図95-5		壷	5－2区 C2 SF502		壷の胴部である。	外面に磨消縄文が施される。内面はナデ。	胎土にφ～5㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y7/3浅黄色、内面2.5Y7/2灰黄色。	胴部 破片資料
図95-6	図版54	壷	5－2区 D2 17層 集水升	口径(16.0) 頸径(9.4) 胴部径(28.2)	単純口縁を持つ壷である。胴部中位から底部を欠損。短頸で、口縁部は外反する。口縁部に穿孔している。	外面は細かいハケ調整？の後に頸部より下位はヘラミガキ。頸部に棒状工具を用いた波状文が2条確認される。下位にもヘラミガキで消された波状文がある。口縁部内面にも波状文。他はハケ調整。	胎土にφ～0.5㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は2.5Y7/2灰黄色、内面は10YR7/1灰白色。	全体の 約1/6残存

5－2区出土土器2

図版番号	写真番号	器種	出土地点	計測値	形態の特徴	手法の特徴	胎土等の特徴	備考
図95-7		壷	5－2区 BC2 17層	口径(13.5) 頸径(7.1)	単純口縁を持つ壷である。外反させた口縁部で、口唇部は平坦に仕上げている。	外面はヘラミガキを施す。内面は横ナデか。下位に指頭痕が観察される。	胎土にφ～3㎜砂粒、石英含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR7/4にぶい橙色。	口縁部 約1/6残存
図95-8		壷	5－2区 C2 17層		壷の頸部である。	外面にハケ調整の後に櫛状工具を用いて波状文と横方位の直線文を施す。内面は摩滅して判然としない。	胎土にφ～4㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR7/4にぶい橙色。内面の色調は10YR7/2にぶい橙色。	頸部 破片資料
図95-9		壷	5－2区 BC2 17層		壷の肩部である。	外面に羽状縄文を施した後にヘラミガキか。最後に円形浮文を貼り付けている。内面はハケ調整とヘラミガキ。	胎土にφ～2㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は10YR6/2灰黄褐色、内面は10YR6/1褐灰色。	肩部 破片資料
図95-10		壷	5－2区 BC2 17層		壷の肩部である。	外面に縄文が施され、その直下に円形浮文が貼り付けられている。内面はハケ調整と指ナデ。	胎土にφ～0.5㎜白色・黒色粒子含有。焼成は良。外面の色調は10YR7/3にぶい黄橙色、内面は7.5Y6/1黄灰色。	肩部 破片資料
図96-11		甕	5－2区 B2 17層	口径(17.9)	台付甕と思われる。口縁部から肩部にかけて残存。	内外面共にハケ調整を施す。	胎土にφ～7㎜石英、砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共に7.5YR7/4にぶい橙色。	口縁部 約1/6残存 外面煤付着
図96-12		甕	5－2区 BC2 17層	底径(6.8)	台付甕の台部である。	内外面共にハケ調整を施す。	胎土にφ～3㎜石英、白色粒子含有。焼成は良。色調は内外面共に2.5Y7/2灰黄色。	台部 約1/2残存
図96-13	図版54	高坏	5－2区 B2 17層	口径(20.9)	高坏の坏部である。坏部は微かに内湾しながら立ち上がり、口唇部を丸く仕上げる。	外面はハケ調整の後丁寧なヘラミガキを施す。内面もヘラミガキ。全体的に摩滅気味。	胎土にφ～2㎜雲母、石英、灰白色粒子等含有。焼成は良。外面の色調は10YR1/1灰白色、内面は10YR7/2にぶい橙色。	坏部 約5/8残存 二次焼成
図96-14		高坏	5－2区 B2 17層	底径(10.8)	口縁部を欠損した高坏である。「ハ」の字状に広がる脚部を持ち、坏部も直線的に立ち上がる。	外面は丁寧な縦方向のヘラミガキ。脚部内面は横方向のナデ。坏部内面はヘラミガキ。	胎土にφ～2㎜石英、白色粒子含有。焼成は良。外面の色調は2.5YR4/6赤褐色、脚部内面は7.5YR6/6橙色。	全体の 約1/2残存 外面と坏部内面に赤彩
図96-15	図版54	壷	5－2区 B2 18～19層	口径(9.6)	折返し口縁を持つ短頸壷である。頸部から口縁部を外折させ、口唇部を折り返している。	外面はナデか。内面はハケ調整の後にナデ。全体的に摩滅気味。	胎土にφ～5㎜砂粒含有。焼成は良。色調は内外面共7.5YR6/6橙色。	口縁部 約1/2残存
図96-16	図版54	壷	5－2区 BC2 18～19層	口径(17.3) 頸径(7.6)	複合口縁を持つ壷である。頸部から口縁部にかけての資料である。	外面はハケ調整とヘラミガキ。内面はハケ調整とナデ。全体的に摩滅気味。	胎土にφ～2㎜白色粒子等含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR5/4にぶい橙色、内面は5Y4/1灰色	口縁部 約1/3残存
図96-17		甕	5－2区 B2 18層		甕の口縁部である。	内外面共にハケ調整。	胎土にφ～2㎜砂粒含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR3/1黒色、内面は10YR7/4にぶい黄橙色。	口縁部 破片資料
図96-18		甕	5－2区 B2 18層		甕の口縁部である。	外面は荒いハケ調整か条痕。口唇部は平坦に仕上げ、外面と同様にハケ調整か条痕。口唇部に工具で刻目。	胎土にφ～2㎜石英、砂粒含有。焼成は良。外面の色調は7.5YR5/3にぶい褐色、内面は7.5YR4/2灰褐色。	口縁部 破片資料

第９表　出土石器一覧表

打製石斧

図版番号	写真図版	登録番号	出土地点	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
1	55	S-3-105	3区C24	9.77	5.00	1.75	95.8	黒色粘板岩	短冊型　敲打痕あり
2	55	S-1-45	1区C6　23層	4.90	7.05	2.10	104.4	暗灰色中粒砂岩	基部・刃部欠損　短冊型？　敲打痕あり

打製刃器

図版番号	写真図版	登録番号	出土地点	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
3	55	S-1-34	1区B5　24層	4.00	5.33	1.10	27.2	暗赤紫色凝灰質珪質頁岩	完形　使用痕顕著
4	55	S-3-31	3区C25　9層	4.80	6.95	2.50	64.3	暗赤紫色珪質凝灰岩	完形　一部摩滅
5	55	S-2-27	2区B17	4.40	5.72	2.45	61.7	暗赤紫色珪質凝灰岩	完形　一部摩滅
6	55	S-3-43	3区C28　10層	4.80	5.90	1.65	49.5	暗灰色細粒砂岩	完形　使用痕なし

両刃石斧

図版番号	写真図版	登録番号	出土地点	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
7	56	S-3-61	3区C28　11層	11.10	6.47	3.75	435.3	暗灰色細礫岩	敲打石に転用
8	56	S-3-107	3区C25　SD307付近	8.80	6.04	2.80	236.4	ホルンフェルス？	敲打石に転用
9	56	S-3-109	3区C28　9～11層	10.01	6.29	3.65	361.4	暗灰色細礫岩	未製品？　基端部のみ
10	56	S-3-63	3区C25　SD304	11.80	7.70	4.40	572.3	黒色珪質頁岩	未製品

片刃石斧

図版番号	写真図版	登録番号	出土地点	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
11	57	S-3-7	3区C24　12層	4.31	1.03	0.70	5.5	黒色珪質粘板岩	完形　擦切技法　A・I
12	57	S-3-59	3区C26　11層	5.81	1.20	1.00	12.4	黒色珪質粘板岩	完形　装着痕あり　A・I
13	57	S-3-15	3区C26　8層下位	4.89	1.59	0.90	12.4	ホルンフェルス？	刃部欠損　A・II
14	57	S-3-114	3区C26　SD301	8.05	3.10	2.25	87.2	赤紫色珪質凝灰岩	刃部一部欠損　A・III
15	57	S-3-39	3区C24	4.88	1.98	1.31	19.3	黒色珪質粘板岩	刃部欠損　全体的に被熱　A・II
16	57	S-2-23	2区B16　4面(20層上面)	4.00	2.51	1.00	17.7	緑灰色チャート	基端部のみ　B
17	57	S-2-63	2区B16　SK219	4.50	3.60	2.70	55.9	暗赤紫色珪質凝灰岩	基端部のみ　A・(III)
18	57	S-1-31	1区　出土地点不明	4.22	3.68	0.85	23.9	暗赤紫色凝灰質珪質頁岩	完形　B・I
19	57	S-確認-1	試掘坑No.55	4.57	3.78	0.90	32.5	暗緑色凝灰質珪質粘板岩	完形　B・I
20	57	S-3-38	3区C27　10層	6.60	4.65	1.38	96.0	暗緑黒色カンラン岩	完形　使用痕あり　B・II
21	57	S-1-41	1区C5　23層	7.15	3.38	1.00	47.7	暗赤紫色凝灰質珪質頁岩	刃部一部欠損　B・III
22	57	S-3-102	3区C25	8.70	4.53	1.70	98.3	黒色珪質粘板岩	刃部一部欠損　再加工　B・IV
23	57	S-2-20	2区B17	9.53	4.41	1.70	112.9	黒色珪質粘板岩	ほぼ完形　B・IV
24	57	S-2-4	2区B11　4面(20層上面)	5.80	5.20	1.65	63.8	暗紫灰色砂質凝灰岩	刃部のみ　被熱
25	57	S-1-33	1区C5　23層	4.06	5.20	1.50	50.4	黒色珪質頁岩	刃部のみ　擦切技法　B・(II)
26	57	S-3-32	3区C27　9層	5.50	3.40	0.80	27.4	暗赤紫色珪質凝灰岩	刃部欠損　B・(III)
27	57	S-3-36	3区C26　10層上面	3.89	3.91	1.20	31.8	暗緑灰色凝灰質頁岩	基端部のみ　B・(III)
28	57	S-2-8	2区B13　16層	3.62	3.30	0.95	15.2	暗赤紫色珪質凝灰岩	刃部のみ　B・(III)
29	57	S-3-85	3区C28　12層	5.85	2.72	1.15	29.3	暗赤紫色珪質凝灰岩	刃部から基端部にかけて縦割れ
30	57	S-2-62	2区B16　SK219	3.49	2.30	0.59	4.3	暗赤やや紫色珪質凝灰岩	細片
31	57	S-5-1-20	5－1区　出土地点不明	3.50	2.95	0.80	10.0	暗赤紫色珪質凝灰岩	細片
32	57	S-3-55	3区C28　SR301周辺	2.65	2.78	0.50	4.0	暗赤紫色珪質凝灰岩	細片

片刃石斧（未製品）

図版番号	写真図版	登録番号	出土地点	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
33	58	S-2-7	2区B13　16層	8.50	6.58	2.50	189.0	暗赤紫色珪質凝灰岩	完形　A・I
34	58	S-3-3	3区C29	7.20	6.65	1.70	92.0	黒色粘板岩	完形　A・II
35	58	S-5-2-19	5－2区C2　17層	3.70	4.60	1.80	29.4	黒色珪質頁岩	基端部欠損　A・III
36	58	S-3-10	3区C27　8層	9.70	6.01	4.10	371.7	赤紫色珪質凝灰岩	完形　A・III

37	58・59	S-3-11	3区C27	15.16	5.71	5.90	697.3	暗赤紫色凝灰岩	完形　A・Ⅲ
38	58	S-3-35	3区C26　10層	7.30	5.27	3.35	151.9	暗灰色砂質頁岩	基端部欠損　A・Ⅳ
39	58	S-2-71	2区B15　19層	4.48	3.40	0.55	13.4	黒色粘板岩	完形　B・Ⅱ
40	58	S-3-5	3区C25	5.48	3.41	1.90	41.7	暗赤紫色珪質凝灰岩	完形　B・Ⅱ
41	58	S-3-21	3区C28　8層	5.96	4.82	1.59	63.9	灰緑色凝灰岩	完形　B・Ⅰ
42	58	S-3-76	3区C28　11層	6.80	4.50	2.00	53.2	暗赤紫色珪質凝灰岩	完形　B・Ⅱ
43	58	S-5-2-27	5－2区B2　17層	7.77	4.00	1.50	56.5	黒色粘板岩	完形　B・Ⅱ
44	58	S-3-40	3区C27　11層	7.35	5.60	1.25	58.2	灰緑色凝灰岩	完形　B・Ⅱ
45	58	S-3-140	3区C24　SD307	6.40	4.86	0.60	32.9	暗赤紫色凝灰質粘板岩	完形　B・Ⅱ
46	58	S-3-23	3区C27	8.15	6.45	1.70	121.5	黒色珪質粘板岩	完形　B・Ⅲ
47	58	S-3-101	3区C25　12層	5.60	3.45	2.40	62.2	黒色珪質頁岩	完形　B・Ⅲ
48	58	S-2-70	2区B11	7.20	4.54	2.20	88.2	灰黒色珪質頁岩	完形　B・Ⅲ
49	58・59	S-3-106	3区C24	11.65	6.70	2.60	259.1	黒色粘板岩	完形　B・Ⅲ
50	58	S-3-48	3区C26　9～10層	5.06	4.25	0.90	22.8	暗灰色粗粒頁岩	細片　B・Ⅳ
51	58・59	S-1-4	1区　出土地点不明	9.70	6.43	2.91	245.2	黒色砂質珪質頁岩	完形　B・Ⅳ
52	58	S-3-25	3区C27	9.35	6.15	1.50	131.8	ホルンフェルス？	完形　B・Ⅳ
53	58	S-3-6	3区C28　9層上面	7.19	4.81	1.40	67.0	暗赤紫色珪質凝灰岩	完形　C・Ⅱ
54	58	S-1-32	1区　出土地点不明	5.70	4.15	0.90	28.8	暗赤紫色凝灰質珪質頁岩	完形　C・Ⅳ
55	58	S-3-8	3区C29　9層上面	3.50	2.10	0.55	7.9	暗赤紫色珪質凝灰岩	完形　C・Ⅳ

磨製石鏃

図版番号	写真図版	登録番号	出土地点	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
56	56	S-3-66	3区C25	2.90	1.52	0.22	1.1	黒色粘板岩	基部欠損　有孔磨製石鏃
57	56	S-4-1	4区C34	4.00	2.45	0.25	3.7	黒色千枚岩質粘板岩	基部欠損
	56	S-3-116	3区C26　SD301	—	—	—	0.4	黒色珪質粘板岩	細片　有孔磨製石鏃

敲打石

図版番号	写真図版	登録番号	出土地点	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
58	60	S-3-20	3区C28　8層	5.91	6.42	5.35	268.7	風化斑レイ岩	完形　D
59		S-1-14	1区B5　21層	3.87	5.75	2.46	84.7	暗緑灰色凝灰質中粒砂岩	端部のみ　D
60	60	S-5-2-36	5－2区B2・C3　17層	5.26	3.66	2.15	56.1	暗緑灰色中粒砂岩	半分欠損　D
61	60	S-3-75	3区C28　11層	7.27	7.18	5.30	340.4	暗灰色粗粒細礫岩	ほぼ完形　D
62	60	S-1-13	1区B5	4.28	3.62	2.61	52.2	灰色中粒砂岩	完形　D
63	60	S-3-118	3区C23　SP301	6.51	4.70	3.45	129.3	淡褐灰色中粒砂岩	完形　D
64	60	S-3-131	3区C24　SK305	6.26	5.08	3.05	134.1	暗灰色凝灰質中粒砂岩	半分欠損　D
65		S-1-11	1区B6	5.16	6.89	2.20	94.8	暗緑灰色凝灰質粗粒砂岩	完形　D
66	60	S-1-39	1区B5　21層	7.88	6.29	4.27	260.2	暗灰色粗粒砂岩	完形　D
67	60	S-3-87	3区C28　12層	6.26	5.72	4.15	189.8	暗灰色凝灰質細粒砂岩	完形　D
68	60	S-2-6	2区B14　20層	9.56	4.72	2.41	184.6	やや暗灰色中粒砂岩	完形　D
69	60	S-3-127	3区C24	9.38	4.46	2.80	138.7	暗灰色凝灰質中粒砂岩	完形　D
70	60	S-3-139	3区C24　SD307	8.28	5.51	3.60	175.2	暗灰色凝灰質中粒砂岩	完形　D
71		S-5-1-3	5－1区B2・C3	8.33	4.31	4.29	203.6	暗緑灰色凝灰質中粒砂岩	完形　D
72	60	S-2-17	2区B17　19層	8.79	4.01	3.69	187.8	暗灰色中粒砂岩	完形　D
73	60	S-3-126	3区C24	9.40	3.91	4.32	220.7	褐灰色凝灰質中粒砂岩	完形　D
74	60	S-2-61	2区B14　19層	9.70	5.02	2.71	142.6	緑灰色凝灰質中粒砂岩	完形　D
75	60	S-3-96	3区C27　11層	9.73	3.94	5.02	207.8	暗灰色中粒砂岩	完形　D
76	60	S-3-93	3区C26　11層下面	9.61	5.56	3.94	290.9	暗灰色凝灰質中粒砂岩	ほぼ完形　D
77	60	S-3-94	3区C27　11層	10.41	6.04	6.05	456.9	暗灰色凝灰質中粒砂岩	完形　D
78	60	S-3-95	3区C27　11層	9.52	7.90	3.65	336.9	暗灰色中粒砂岩	完形　D
79	60	S-3-72	3区C28　12層	8.91	8.08	4.40	325.0	淡褐灰色凝灰質中粒砂岩	一部欠損　D
		S-1-36	1区C5　SD122	5.50	5.46	3.90	131.0	暗灰色凝灰質粗粒砂岩	完形　D
		S-1-38	1区C5	6.15	6.03	3.56	139.1	風化斑レイ岩	一部欠損　D？
		S-1-40	1区B4　SB110	6.89	6.03	5.07	246.1	緑灰色凝灰質粗粒砂岩	ほぼ完形　D
		S-1-43	1区B5　21層	6.39	5.26	1.10	31.1	暗灰色砂質粘板岩	破片　D？
		S-2-42	2区B15　19層	7.63	6.80	4.91	329.8	やや暗緑灰色凝灰質粗粒砂岩	完形　D
		S-2-64	2区B17　SD202	7.29	5.32	4.80	178.1	暗灰色やや凝灰質粗粒砂岩	完形　D
		S-3-108	3区C28　11層	10.42	6.26	5.61	502.2	暗灰色凝灰質中粒砂岩	完形　D

		S-3-125	3区C25	10.87	6.90	4.38	504.4	褐灰色凝灰質粗粒砂岩	完形　D
		S-3-133	3区C24　SK305	9.45	6.28	2.75	261.6	暗灰色凝灰質中粒砂岩	完形　D
		S-3-135	3区C24　SK305	9.91	6.01	3.59	232.9	暗灰色凝灰質中粒砂岩	完形　D
		S-5-2-2	5－2区C2　17層	9.45	5.70	3.84	320.9	やや暗褐灰色凝灰質中粒砂岩	完形　D
		S-5-2-9	5－2区B2・C2　17層	6.07	5.68	4.39	218.5	やや暗灰色凝灰質中粒砂岩	完形　D
		S-5-2-12	5－2区B2　18層	8.06	6.20	3.24	241.7	暗褐色細粒砂岩	完形　被熱　D
		S-5-2-13	5－2区B2　SD503	9.11	8.62	6.69	482.9	灰黒色中粒砂岩	完形　被熱　D
		S-5-2-16	5－2区C2　17層	6.20	5.94	4.00	191.7	暗灰色凝灰質粗粒砂岩	完形　D
		S-5-2-17	5－2区C2　17層	8.68	5.20	4.56	247.2	やや暗灰色凝灰質中粒砂岩	完形　D
		S-5-2-26	5－2区C2　17層	7.21	6.68	3.19	200.0	暗緑灰色凝灰質中粒砂岩	完形　D
		S-5-2-34	5－2区B2・C2　17層	9.49	5.32	4.40	309.2	やや暗灰色粗粒砂岩	完形　D
		S-5-2-40	5－2区C2　18～19層	10.39	4.40	3.26	198.5	暗灰色中粒砂岩	半分欠損　D？
80	61	S-3-121	3区C26　12層	10.54	8.98	4.99	518.9	灰色中粒砂岩	完形　被熱　A・a
81	61	S-3-88	3区C28　12層	12.95	7.96	4.60	695.4	暗灰色凝灰質中粒砂岩	ほぼ完形　A・a
82		S-2-43	2区B15　19層	12.31	8.00	4.38	624.9	褐灰色粗粒砂岩	完形　A・a
		S-5-2-22	5－2区C2　17層	12.74	7.36	4.85	567.4	暗灰色粗粒砂岩	完形　A・a
		S-1-19	1区　出土地点不明	10.91	7.92	5.71	487.8	暗灰褐色中粒砂岩	完形　A・b
		S-3-58	3区C28	9.38	9.72	6.60	754.8	暗灰色凝灰質粗粒砂岩	完形　A・b
		S-3-64	3区C26	10.00	9.43	8.10	1078.7	暗灰色凝灰質細礫岩	完形　A・b
		S-5-2-15	5－2区C2　17層	12.50	6.65	6.25	735.7	暗灰色凝灰質粗粒砂岩	完形　A・b
83		S-3-81	3区C26　11層	13.15	7.61	4.15	557.6	暗緑灰色凝灰質中粒砂岩	ほぼ完形　A・c
84	61	S-5-2-24	5－2区C2　17層	12.78	6.30	5.11	686.1	暗緑灰色凝灰質中粒砂岩	ほぼ完形　A・c
85	61	S-2-5	2区B11・C12	14.79	6.20	5.92	943.1	やや暗緑灰色凝灰質粗粒砂岩	完形　A・c
86		S-5-1-10	5－1区B2　17層	14.81	8.22	4.60	760.6	暗灰色凝灰質粗粒砂岩	完形　A・c
87		S-2-51	2区B17	14.35	7.18	5.91	990.6	やや暗緑灰色凝灰質粗粒砂岩	完形　A・c
		S-5-2-10	5－2区B2・C2　17層	16.24	7.81	5.88	943.1	暗灰色凝灰質粗粒砂岩	完形　A・c
88	61	S-3-22	3区C28　8層	8.45	5.51	2.00	125.9	暗灰色凝灰質中粒砂岩	半分欠損　C・a
89	61	S-3-134	3区C24　SK305	8.90	5.53	3.35	234.5	暗灰色凝灰質中粒砂岩	半分欠損　C・a
90		S-2-50	2区B17	11.71	6.79	2.85	376.7	暗緑灰色凝灰質中粒砂岩	完形　C・a
91	61	S-5-1-14	5－1区C3　SD502	10.54	7.97	4.08	428.9	やや暗緑灰色凝灰質中粒砂岩	ほぼ完形　2片　C・a
92	61	S-2-45	2区B15　SX202	11.13	8.11	4.37	515.0	暗緑灰色凝灰質細粒砂岩	ほぼ完形　C・a　凹石か？
93	61	S-2-18	2区B12　20層	10.22	4.06	4.51	468.2	暗灰色凝灰質中粒砂岩	半分欠損　手擦れにより摩滅？　C・c
94		S-3-73	3区C28　12層	12.65	4.36	2.81	241.2	暗灰色中粒砂岩	一部欠損　C・c
95	61	S-2-69	2区B11　中期層	17.15	5.50	4.62	808.7	暗褐灰色凝灰質中粒砂岩	一部欠損　被熱　2片　C・c
		S-3-68	3区C25　12層	10.27	5.15	1.60	123.3	灰色凝灰質中粒砂岩	端部欠損　C・c
		S-5-2-14	5－2区B2　SD503	10.75	3.77	3.65	241.3	？(砂岩から斑糲岩へ変質中)	端部欠損　C・c
96	61	S-3-57	3区C28　SR301周辺	10.86	7.07	4.29	468.4	暗灰色凝灰質粗粒砂岩	ほぼ完形　A＋C・a
		S-5-1-9	5－1区C3　17層	11.71	8.41	5.12	734.5	やや暗緑灰色凝灰質中粒砂岩	ほぼ完形　A＋C・a
		S-1-47	1区C6　23層	9.98	7.74	4.67	560.6	暗灰色中粒砂岩	ほぼ完形　A＋C・a
97		S-3-100	3区C24　9～10層	13.79	7.27	4.81	577.6	暗灰色凝灰質中粒砂岩	端部欠損　A＋C・c
98		S-2-41	2区B15　19層	14.11	6.77	4.96	539.2	暗灰色凝灰質粗粒砂岩	端部欠損　A＋C・c
		S-3-69	3区C29　12層	12.92	6.51	3.78	446.4	暗灰色凝灰質含礫粗粒砂岩	ほぼ完形　A＋C・c
99	62・63	S-1-50	1区C5　24層	11.56	8.86	2.84	477.8	暗灰色中粒砂岩	完形　A＋B・a
100	62・63	S-3-50	3区C26　砂利層	13.65	5.26	4.59	545.6	暗灰色凝灰質中粒砂岩	完形　A＋B・c
101		S-3-83	3区C28　12層	12.03	7.06	6.10	622.2	暗灰色凝灰質細粒砂岩	完形　A＋B・b
102	62・63	S-3-84	3区C28　12層	14.84	9.26	2.80	539.8	褐灰色凝灰質細粒砂岩	完形　A＋B＋C・a
		S-3-89	3区C28　12層	8.42	4.21	3.31	202.9	暗灰色中粒砂岩	大部分を欠損　CかD
		S-3-90	3区C28　12層	11.30	4.75	5.45	320.2	暗灰色凝灰質中粒砂岩	半分欠損　A＋C・aかD
103	62・63	S-3-91	3区C27　11層	14.18	6.41	3.45	457.3	暗灰色凝灰質中粒砂岩	完形　磨石兼用　A・c
104	62	S-5-1-4	5－1区　出土地点不明	14.50	7.54	4.65	723.0	褐灰色中粒砂岩	完形　置(?)砥石兼用　A・c
105	62	S-5-1-15	5－1区C3　17層下層	16.21	10.62	6.61	1474.8	暗灰色凝灰質細礫岩	完形　A・a　石錘か？
106	62・63	S-1-22	1区C5　SD124	23.60	7.18	5.40	1418.7	暗灰色凝灰質粗粒砂岩	完形　被熱　A＋C・c　石錘か？
107	62	S-3-110	3区C24　9～10層	10.97	5.59	5.12	491.5	暗灰色凝灰質中粒砂岩	端部欠損　A・c　石錘か？
108	62	S-5-1-13	5－1区B2・C3　17層下層	8.50	5.24	3.00	251.3	暗緑灰色凝灰質中粒砂岩	端部欠損　A・c　石錘か？

磨石

図版番号	写真図版	登録番号	出土地点	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
109	64	S-1-8	1区B4	9.90	8.19	6.32	802.2	黒色珪質頁岩	ほぼ完形　顔料付着　C
110	64	S-2-30	2区B17　土手状遺構	9.70	7.81	4.40	316.8	灰褐色凝灰質細粒砂岩	大部分を欠損　全体的に被熱　B

111	64	S-2-48	2区B15　SA201	7.55	6.29	5.00	289.4	流紋岩	完形　A
112	64	S-2-15	2区B17	6.80	9.25	8.10	591.3	灰褐色凝灰質中粒砂岩	大部分を欠損　被熱　B
113	64	S-2-46	2区B15　SX202	8.08	4.32	3.40	209.2	暗緑灰色凝灰質中粒砂岩	端部欠損　C
114	64	S-2-13	2区B17　20～21層	8.78	6.73	5.50	492.5	暗灰褐色中粒砂岩	端部欠損　C
115	64	S-2-52	2区B17	8.13	10.30	5.41	449.1	緑灰色凝灰質中粒砂岩	大部分を欠損　全体的に被熱　B
	64	S-1-44	1区　出土地点不明	8.38	6.78	6.12	477.0	流紋岩	完形　A
		S-2-9	2区B13　SR204	11.65	7.31	5.55	692.2	暗灰色粗粒砂岩	完形　被熱　C
		S-2-47	2区B15　SX202	10.77	7.00	5.00	443.7	暗褐灰色凝灰質中粒砂岩	半分欠損　C？
		S-2-68	2区B11　20層	6.40	5.10	4.10	187.0	暗緑灰色凝灰質粗粒砂岩	完形　A？

石　皿

図版番号	写真図版	登録番号	出土地点	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
116	65	S-2-11	2区B17　土手状遺構	21.38	15.73	7.42	4222.5	暗緑灰色凝灰質中粒砂岩	端部欠損
117	65	S-2-38	2区B12　20層	13.00	9.75	5.91	804.9	淡褐灰色凝灰質中粒砂岩	大部分を欠損

台　石

図版番号	写真図版	登録番号	出土地点	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
118	65	S-3-27	3区C26　9～10層	14.01	10.95	3.51	821.4	灰黒色中粒砂岩	完形
119		S-5-1-5	5－1区C3　15～16層	10.31	8.79	4.43	457.6	暗灰色中粒砂岩	大部分を欠損
120		S-1-6	1区B5	15.18	8.27	4.10	806.5	緑灰色凝灰質中粒砂岩	ほぼ完形　被熱　S-1-9と接合
121		S-5-2-5	5－2区B2・C2　16層	17.90	13.42	7.48	2423.1	褐灰色細粒砂岩	端部欠損　被熱
122	65	S-3-92	3区C25　9～10層	27.28	12.43	5.83	5058.1	灰黒色中粒砂岩	端部欠損　被熱
123		S-3-37	3区C26　SK306	31.32	13.09	9.71	5530.1	やや暗褐灰色凝灰質中粒砂岩	ほぼ完形　被熱
124	65	S-3-67	3区C25　SD304	34.24	18.99	10.02	9721.6	暗灰色やや凝灰質中粒砂岩	完形
125	65	S-1-48	1区C6　24層	24.71	21.32	6.01	5130.1	暗灰色凝灰質中粒砂岩	完形
126		S-3-62	3区C24	27.44	11.31	8.44	3415.3	暗灰色やや凝灰質中粒砂岩	完形　被熱
		S-2-10	2区B16　4面(20層上面)	10.80	11.87	7.72	1108.7	暗褐灰色縞状凝灰質中粒砂岩	ほぼ完形　全体的に被熱
		S-2-26	2区B17	27.89	10.88	9.90	3909.9	暗灰色中粒砂岩	ほぼ完形　被熱
		S-2-29	2区B17　土手状遺構	13.61	9.01	7.49	1392.0	暗灰色中粒砂岩	ほぼ完形　全体的に被熱
		S-2-31	2区B17　土手状遺構	13.20	6.61	7.80	791.0	暗褐灰色凝灰質中粒砂岩	大部分を欠損　被熱
		S-2-32	2区B17　土手状遺構	10.98	4.32	3.90	175.7	暗褐灰色凝灰質粗粒砂岩	破片　被熱
		S-2-37	2区B17　土手状遺構	20.51	7.62	6.21	1641.7	淡褐灰色凝灰質縞状中粒砂岩	一部欠損
		S-2-39	2区B15　19層	16.70	7.37	7.35	1368.7	暗灰色細粒礫岩	端部欠損　被熱
		S-2-40	2区排土	19.69	11.47	8.40	2490.1	暗灰色凝灰質粗粒砂岩	端部欠損　被熱
		S-2-49	2区B17	14.55	9.67	2.75	286.4	暗灰色凝灰質粗粒砂岩	端部欠損　被熱
		S-2-54	2区B14　20～21層	10.90	10.40	4.20	728.6	暗灰色粗粒砂岩	端部欠損
		S-2-67	2区B11	10.31	8.10	7.55	809.4	暗褐灰色縞状凝灰質中粒砂岩	大部分を欠損
		S-3-56	3区C28　SR301周辺	9.33	11.90	8.20	1444.0	灰黒色中粒砂岩	大部分を欠損　被熱
		S-3-123	3区C25　12層	10.96	14.91	7.95	1343.9	灰黒色中粒砂岩	大部分を欠損　被熱

砥　石

図版番号	写真図版	登録番号	出土地点	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
127	65	S-3-18	3区C25	21.03	8.63	4.81	1340.1	暗灰色細粒砂岩	置砥石　完形
128		S-2-2	2区C12　15層	13.26	6.12	4.21	623.8	暗灰色中粒砂岩	置砥石　大部分を欠損
129		S-5-1-1	5－1区C3　砂利層	12.36	10.58	6.22	949.1	灰褐色含礫粗粒砂岩	置砥石　大部分を欠損
130		S-2-58	2区B17	13.10	10.89	3.46	701.8	褐灰色板状中粒砂岩	置砥石　大部分を欠損
131	65	S-2-16	2区B16　20層	19.82	11.99	2.50	838.9	褐灰色凝灰質板状粗粒砂岩	置砥石　端部欠損
132		S-5-1-2	5－1区B2　砂利層	16.53	15.84	7.00	1984.7	褐灰色中粒砂岩	置砥石　半分欠損
133	65	S-5-1-16	5－1区C3　17層	20.84	13.69	7.10	2593.8	褐灰色中粒砂岩	置砥石　端部欠損
134	65	S-2-21	2区　出土地点不明	25.32	15.02	12.71	5282.2	褐灰色中粒砂岩	置砥石　端部欠損
135	65	S-2-65	2区B13　4面上層	36.31	25.78	14.78	18572.5	暗灰色中粒砂岩	置砥石　底部欠損　S-2-66と接合
136		S-3-138	3区C25　Ⅱ層　SK306	10.61	8.95	5.15	678.5	暗褐灰色凝灰質中粒砂岩	置砥石　大部分を欠損　敲打痕あり
137	65	S-5-1-12	5－1区C3　15～16層	21.23	15.28	10.65	4048.0	褐灰色中粒砂岩	置砥石　完形　敲打痕あり
138		S-5-1-18	5－1区　出土地点不明	18.27	12.74	6.05	1980.3	暗緑灰色凝灰質中粒砂岩	置砥石　大部分を欠損　敲打痕あり
		S-2-28	2区B17　土手状遺構	10.79	5.24	4.71	503.9	暗灰色中粒砂岩	置砥石　大部分を欠損

		S-5-1-17	5－1区B2・C3	24.24	12.08	9.40	3534.3	玄武岩	置砥石　底部欠損　被熱
		S-3-16	3区C26　9～10層	—	—	—	41.4	暗灰色中粒砂岩	置砥石？　破片
139	66	S-3-80	3区C28　12層	13.84	7.49	2.75	380.2	暗灰色中粒砂岩	持ち砥石　完形
140	66	S-3-142	3区C25　SK306	9.80	4.99	3.95	294.1	暗緑灰色中粒砂岩	持ち砥石　端部欠損
141	66	S-1-2	1区B5　SK103	8.93	5.89	3.95	272.8	緑灰色凝灰質細粒砂岩	持ち砥石　底部欠損
142	66	S-3-98	3区C28　12層	6.58	4.95	2.63	118.1	暗灰色中粒砂岩	持ち砥石　大部分を欠損
143	66	S-1-35	1区C5　SD122	9.62	4.84	2.22	122.1	黒色やや珪質頁岩	持ち砥石　一部欠損
144	66	S-3-97	3区C28　12層	8.00	4.27	5.33	192.7	暗灰黒色珪質頁岩	持ち砥石　一部欠損
145	66	S-5-2-33	5－2区B2　17層	7.41	5.02	1.55	90.7	淡緑灰色珪質凝灰岩	持ち砥石　完形
146	66	S-1-1	1区　出土地点不明	12.03	5.31	5.61	480.2	緑灰褐色凝灰質中粒砂岩	持ち砥石　端部欠損　2片　敲打石兼用
147	66	S-3-79	3区C28　12層	7.22	5.73	3.30	193.8	暗灰色中粒砂岩	持ち砥石　半分欠損　敲打石兼用
148	66	S-1-10	1区B6	9.77	4.79	1.45	99.7	緑灰色凝灰質中粒砂岩	複合石器　ほぼ完形
		S-2-3	2区B11・C11　15層	3.78	2.72	1.29	11.4	暗灰色中粒砂岩	持ち砥石　破片
		S-3-82	3区C28　12層	4.38	3.89	1.79	23.5	淡褐灰色凝灰質中粒砂岩	持ち砥石　破片
		S-3-104	3区C26　9～10層	4.45	3.51	2.10	36.3	淡褐灰色含礫粗粒砂岩	持ち砥石　破片

軽石製砥石

図版番号	写真図版	登録番号	出土地点	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
149	67	S-3-77	3区C28　11層	8.21	3.40	2.30	32.9	軽石	完形　A
150	67	S-3-71	3区C28　12層	7.63	7.22	6.70	143.7	軽石	端部欠損　A
151	67	S-3-78	3区C28　12層	5.68	3.49	2.90	16.0	軽石	完形　A
152	67	S-3-117	3区C26　SD301	6.07	3.20	2.00	13.1	軽石	完形　A
153	67	S-1-49	1区C6　24層	8.00	8.90	6.90	131.5	軽石	完形　A
154	67	S-2-55	2区B14　SA201	3.47	3.61	2.50	6.0	軽石	完形　A
		S-2-19	2区B16　20層	4.10	3.83	3.30	12.3	軽石	完形　2片　A
		S-3-4	3区C25	4.28	3.31	2.30	4.7	軽石	完形　A
		S-3-47	3区C26　SD301上面	4.40	2.90	1.80	5.7	軽石	完形　A
		S-3-51	3区C24　10～12層	3.18	2.58	1.80	2.0	軽石	完形　A
		S-3-53	3区C24　10～12層	4.30	2.82	2.20	3.0	軽石	完形　A
		S-3-86	3区C29　12層	5.11	3.60	3.30	16.2	軽石	完形　A
		S-3-128	3区C26　13層	2.80	2.00	1.50	24.4	軽石	端部欠損　A
		S-3-129	3区C26　SD305	6.91	4.50	2.60	2.1	軽石	ほぼ完形　A
		S-3-136	3区C25　Ⅱ層	7.91	5.85	5.60	101.6	軽石	完形　A
155	67	S-2-14	2区B15　19層	5.90	5.20	2.80	11.3	軽石	一部欠損　C
156	67	S-2-25	2区B17　土手状遺構	4.59	5.07	4.20	16.5	軽石	ほぼ完形　C
157	67	S-3-49	3区C25　9～10層	5.71	6.07	3.40	33.8	軽石	ほぼ完形　A＋C
158	67	S-3-26	3区C26　9～10層	5.50	4.85	2.80	26.8	軽石	完形　A＋C　浮子か？
159	67	S-3-70	3区C28　12層	12.00	7.62	5.40	127.9	軽石	完形　A＋C
160	67	S-2-59	2区B14　20～21層	7.98	7.01	4.41	32.2	軽石	ほぼ完形　B＋C
161	67	S-2-57	2区B17	4.55	4.83	3.30	10.5	軽石	完形　B＋C
162	67	S-2-1	2区　出土地点不明	4.39	3.46	2.77	4.8	軽石	完形　A＋B＋C
163	67	S-5-2-30	5－2区C2　17層下位	8.15	6.29	5.50	68.6	軽石	ほぼ完形　A＋B＋C
164	67	S-5-2-7	5－2区B2・C2　17層	10.61	9.86	8.10	241.2	軽石	ほぼ完形　A＋B＋C

軽　石

図版番号	写真図版	登録番号	出土地点	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
		S-1-51	1区C5　24層	4.74	4.22	3.35	24.3	軽石	完形
		S-3-29	3区C25　8層	3.88	2.31	1.40	3.0	軽石	完形
		S-3-30	3区C25　9～10層	6.30	3.05	2.40	10.6	軽石	完形
		S-3-34	3区C27　8層	4.35	2.80	2.20	6.7	軽石	完形
		S-3-45	3区C28　10層	3.40	3.15	2.95	9.8	軽石	完形
		S-3-46	3区C28　10層	3.68	3.04	2.70	9.3	軽石	完形
		S-3-54	3区C29　12層	5.72	4.60	2.10	13.5	軽石	ほぼ完形
		S-3-65	3区C26	4.60	3.60	2.30	10.0	軽石	完形
		S-3-119	3区C25　SD306	2.62	2.39	1.10	2.0	軽石	完形
		S-3-120	3区C25　SD306	1.95	1.40	1.20	1.2	軽石	端部欠損
		S-3-122	3区C26　12層	3.70	2.10	1.70	3.3	軽石	完形

		S-3-130	3区C26　SD305	10.50	11.38	5.54	194.0	軽石	ほぼ完形
		S-5-1-19	5－1区　出土地点不明	8.20	4.30	2.20	21.0	軽石	完形
		S-5-2-38	5－2区B2・C3　18～19層	7.15	5.45	3.80	40.8	軽石	完形

石　錘

図版番号	写真図版	登録番号	出土地点	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
165	67	S-1-37	1区C4	3.60	4.40	1.60	27.7	暗緑灰白色凝灰質粗粒砂岩	完形　打欠石錘
166	67	S-3-132	3区C24　SK305	5.33	3.83	1.40	35.7	暗緑灰色凝灰質中粒砂岩	完形　打欠石錘
167	67	S-5-2-25	5－2区C2　17層	6.53	7.81	3.90	227.2	褐灰色凝灰質中粒砂岩	完形　有頭石錘

その他の石製品

図版番号	写真図版	登録番号	出土地点	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
168		S-1-3	1区　出土地点不明	15.40	14.80	10.12	830.6	淡黄褐色流紋岩質凝灰岩	完形　砥石

剥　片

図版番号	写真図版	登録番号	出土地点	計測値 長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	石材	備考
	68	S-1-42	1区C4　SP128	2.20	2.20	0.75	3.2	暗赤紫色凝灰岩	片刃石斧廃材　自然面なし
	68	S-3-74	3区C28　12層	1.99	1.40	0.31	0.7	暗赤紫色凝灰岩	片刃石斧廃材　自然面なし
	68	S-3-12	3区C29　2面(7層上面)	2.16	2.25	0.35	1.5	暗赤紫色やや珪質凝灰岩	片刃石斧廃材　自然面なし
	68	S-3-2	3区C26　2面(7層上面)	2.20	1.78	0.39	1.5	暗赤紫色珪質凝灰岩	片刃石斧廃材　自然面あり
	68	S-3-28	3区C28	2.10	2.45	0.39	1.5	暗赤紫色珪質凝灰岩	片刃石斧廃材　自然面なし
	68	S-3-14	3区C27　8層	2.11	2.65	0.45	2.3	暗赤紫色凝灰岩	片刃石斧廃材　自然面あり
	68	S-3-115	3区C26　SD301	3.38	2.19	0.98	6.5	赤紫色やや珪質凝灰岩	片刃石斧廃材　自然面なし
	68	S-5-2-21	5－2区C2　17層	3.75	1.55	0.65	3.4	暗赤紫色珪質凝灰岩	片刃石斧廃材　自然面なし
	68	S-5-2-20	5－2区C2　17層	3.50	2.95	0.80	7.3	暗赤紫色凝灰岩	片刃石斧廃材　自然面なし
	68	S-3-1	3区C25～26	4.65	2.80	1.65	19.8	暗赤紫色凝灰岩	片刃石斧廃材　自然面なし
	68	S-3-143	3区　出土地点不明	4.52	3.11	0.60	9.4	赤紫色凝灰岩	片刃石斧廃材　自然面なし
	68	S-2-44	2区B15　SX202	3.58	3.58	0.70	11.2	暗赤紫色凝灰岩	片刃石斧廃材　自然面あり
	68	S-3-17	3区C24　9～10層	3.40	4.29	0.60	8.4	暗赤紫色凝灰岩	片刃石斧廃材　自然面あり
	68	S-3-124	3区C28　12層	5.03	2.66	1.01	13.6	暗赤紫色凝灰岩	片刃石斧廃材　自然面なし
	68	S-3-144	3区　出土地点不明	3.69	4.71	1.00	14.3	赤紫色やや珪質凝灰岩	片刃石斧廃材　自然面なし
	68	S-3-60	3区C25　9～11層	6.00	4.60	1.55	37.1	暗赤紫色凝灰岩	片刃石斧廃材　自然面なし
	68	S-3-99	3区C24　9～10層	4.10	4.25	2.84	30.9	淡緑灰色凝灰岩	片刃石斧廃材　自然面あり
	68	S-3-33	3区C27　9～10層	5.22	4.80	3.10	39.7	淡緑灰色凝灰岩	片刃石斧廃材　自然面あり
	68	S-3-111	3区C26　SD305	8.11	5.76	2.45	71.9	淡緑灰色凝灰岩	片刃石斧廃材　自然面なし　一部被熱
	68	S-3-24	3区C27	7.79	6.10	4.00	149.2	暗緑赤紫色凝灰岩	片刃石斧廃材　自然面なし
	68	S-2-53	2区B14　20～21層	4.71	4.51	2.70	61.6	灰黒色頁岩	片刃石斧廃材　自然面あり　石核か
	68	S-5-2-43	5－2区B2・C2　18～19層	2.06	1.65	0.79	2.4	黒色珪質頁岩	片刃石斧廃材　自然面あり
	68	S-3-113	3区C26　SD301	2.15	2.10	0.65	2.0	黒色珪質頁岩	片刃石斧廃材　自然面なし
	68	S-1-29	1区B6　23層	2.99	1.80	0.83	3.6	灰黒色珪質頁岩	片刃石斧廃材　自然面あり
	68	S-3-42	3区C28　10層	2.89	3.00	0.61	4.2	暗灰色珪質頁岩	片刃石斧廃材　自然面なし
	68	S-3-44	3区C28　10層	3.84	2.90	1.17	11.9	黒色頁岩	片刃石斧廃材　自然面なし
	68	S-3-13	3区C27　2面(7層上面)	4.78	2.00	1.35	11.1	淡緑灰色凝灰質頁岩	片刃石斧廃材　自然面なし
	68	S-3-41	3区C27　10層	5.08	3.06	2.40	27.7	黒色珪質頁岩	片刃石斧廃材　自然面あり
	68	S-3-9	3区C28　8層	4.35	4.95	2.00	38.7	黒色珪質頁岩	片刃石斧廃材　自然面あり
	68	S-3-19	3区C29　8層	7.05	3.83	1.10	25.4	暗緑赤紫色凝灰質頁岩	片刃石斧廃材　自然面あり
	68	S-1-15	1区C6	8.30	5.81	1.39	53.9	黒色砂質頁岩	片刃石斧廃材　自然面あり
	68	S-3-112	3区C26　SD301	1.49	1.58	1.50	3.0	チャート	片刃石斧廃材　自然面なし
	68	S-5-2-18	5－2区B2　16層	2.32	1.66	0.95	4.5	灰白色チャート	片刃石斧廃材　自然面なし？
	68	S-5-2-41	5－2区B2・C2　18～19層	9.90	8.90	4.15	416.3	灰黒色チャート	片刃石斧廃材　自然面あり　石核か
	68	S-3-103	3区C25	3.15	2.62	0.45	3.4	黒色粘板岩	片刃石斧廃材　自然面なし
	68	S-2-60	2区B14　19層	3.90	3.46	1.41	18.0	暗灰色粗粒砂岩	自然面あり
	68	S-3-141	3区C24　SD307	2.10	1.50	0.65	1.5	黒曜石	自然面あり

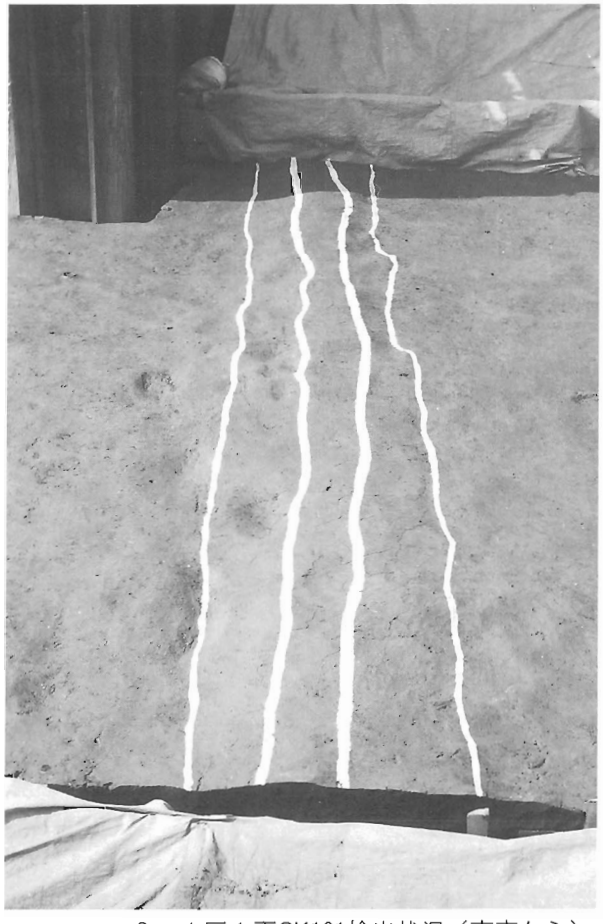
第10表　出土木製品一覧表

図版番号	写真番号	大項目	中項目	小項目	年代	区	遺構・層位	木取り	樹種	計測値 (cm)			備考
										長さ	幅	厚さ	
第131図1	69	建築材	有孔板材		鎌倉～江戸	5-1	砂利層	板目	スギ	52.3	6.3	0.9	
第131図2	69	建築材	有抉有孔板材		古墳～奈良	3	C29　5層	斜柾目	スギ	91.5	29.1	1.6	
第131図3	69	農具	鍬	泥除け具	奈良～平安	3	C26　4層上面	板目	ヒノキ	25.4	15.0	0.8	
第131図4	69	用途不明	装飾品？		鎌倉～江戸	5-1	C3　集水枡	板目	スギ	17.4	6.3	2.8	
第131図5	69	容器	曲物	底板	鎌倉～江戸	5-1	C3　砂利層	柾目	スギ	(直径)13.3		1.1	
第131図6		容器	曲物	側板	鎌倉～江戸	2	14層	柾目	ヒノキ	2.2	7.7	0.5	
第131図7		容器	挽物	椀	鎌倉～江戸	5-1	砂利層	柾目	ケヤキ	(口径)－	(底径)8.4	(器高)3.5	漆椀
第131図8	69	容器	挽物	椀	鎌倉～江戸	5-1	砂利層	横木取り柾目	ケヤキ	(口径)－	(底径)7.2	(器高)1.6	漆椀
第131図9		容器	挽物	椀	鎌倉～江戸	5-1	砂利層	横木取り柾目	ケヤキ	(口径)－	(底径)6.6	(器高)1.2	漆椀
第131図10	69	用途不明品	加工板材		鎌倉～江戸	5-1	砂利層	板目	スギ	8.9	11.3	2.0	
第131図11		用途不明品	棒状木製品		古墳～奈良	1	C5　13層上面	柾目	スギ	18.5	2.2	1.6	
第131図12	69	用途不明品	有孔板材		古墳～	2	C12　1区18層相当層	板目	スギ	10.4	1.7	0.8	泥除け具？
第131図13	69	用途不明品	加工板材		古墳～奈良	2	B11　15層上面	板目	スギ	13.4	3.9	0.9	
第131図14	69	用途不明品	加工板材		古墳～奈良	2	B14　16層上面	板目	スギ	21.9	5.5	1.2	大足部材か
第131図15	69	用途不明品	加工板材		古墳～奈良	1	C5　15～16層	柾目	スギ	10.2	3.5	0.5	
第131図16	69	用途不明品	有孔板材		奈良～平安	1	12～13層	板目	スギ	8.2	5.7	1.2	
第131図17	69	用途不明品	有孔板材		古墳～	2	C15　16層上面	柾目	スギ	38.3	4.7	1.8	輪カンジキ形田下駄足板？
第132図18	70	農具	鍬	膝柄	弥生中～後	3	C27　SD301	枝材	サカキ	(残存長)28.9 (鍬台)11.9	(鍬台)4.0	(鍬台)2.9	柄装着角度59.5°
第132図19		農具	鍬	直柄鍬	弥生後～古墳初	2	B16　20層上面	柾目	アカガシ	7.5	8.5	1.6	着柄角度37°
第132図20	71	農具	鍬	直柄挟鍬	弥生後～古墳初	2	B14　SA201	柾目	アカガシ	(身)14.8 (柄)7.3	(身)9.0 (柄)2.3×2.4	(身)4.7	着柄角度57°
第132図21	70	農具	鍬	曲柄又鍬	弥生後～古墳初	2	B17　19層	柾目	アカガシ	20.6	6.8		
第132図22		農具	鍬	曲柄鍬	弥生中～後	3	C29　9層	柾目	アカガシ	14.2	3.1	2.3	
第132図23	70	農具	鍬	曲柄又鍬	弥生後	3	C24　SK305	柾目	アカガシ	52.0	9.0	2.3	
第132図24	71	農具	鍬	曲柄又鍬	弥生後	3	C24　SK305	柾目		11.8	2.5	0.9	
第132図25	70	農具	鍬	曲柄平鍬	弥生中～後	3	C25　SD304	柾目	アカガシ	45.4	18.7	2.9	
第133図26		農具	鋤	柄	弥生後～古墳初	2	B15　SA201	柾目	アカガシ	16.8	8.7	2.5	
第133図27	71	農具	鋤	把手・柄	弥生後～古墳初	2	B17　19層	柾目	アカガシ	(把手)5.3 (柄)22.4	(把手)9.0 (柄)3.0	(把手)2.5 (柄)2.7	
第133図28	71	農具	鋤	柄	弥生中	3	C24　13層	板目	アカガシ	42.0	12.4	2.5	
第133図29		農具	田下駄		弥生後～古墳初	1	B～C6　SP142	追柾目	スギ	18.8	41.9	1.6	礎板に転用SH104
第133図30	71	工具		膝柄	弥生中	3	C24　SD307	枝材	サカキ	(台)20.2 (握り)42.0	(台)4.3 (握り)2.5	(台)5.3 (握り)2.0	未製品か
第133図31		農具	田舟？		弥生後～古墳初	2	B15　SA201	横木取り板目	スギ	(残存長)5.9 (把手)2.2	(残存幅)7.9 (把手)3.1	(残存厚)4.9 (把手)2.1	槽の可能性有り
第134図32	72	容器	刳物		弥生後	3	C24　SK305	横木取り板目	スギ	18.3×12.0		9.4	内面一部炭化
第134図33		容器	刳物		弥生中	3	C25　11層	横木取り柾目	サクラ属	7.3×7.9		3.8	
第134図34	72	容器	刳物		弥生後～古墳初	2	B15　SA201	横木取り柾目	スギ	25.6×15.5		7.3	
第134図35		容器	刳物	片口	弥生後～古墳初	2	B16　SA201付近	横木取り柾目	サクラ属	15.8	6.1	4.5	内外面炭化？
第134図36	72	建築材	枘材	栓		2		柾目	アカガシ	18.4	8.5	5.3	TPNo.59
第134図37	72	建築材	枘材	栓	弥生後	3	C25　SK306付近	芯持材	イヌマキ	11.5	5.5	3.8	
第134図38	72	建築材	枘材	栓	弥生後	3	C24　SK305付近9層	板目	スギ	14.4	5.5	2.8	
第134図39	72	建築材	枘材	栓	弥生中	3	C24　SD307	板目	スギ	16.0	4.8	3.9	
第134図40	72	建築材	枘材	栓	弥生後～古墳初	1	C5　SD124	板目	スギ	22.3	5.0	3.2	
第135図41	73	建築材	ネズミ返し		弥生後～古墳初	1	C4　SP129	斜柾目	スギ	28.4	39.8	3.2	礎板に転用
第135図42	73	建築材	ネズミ返し		弥生後～古墳初	1	B5　SP153	板目	スギ	26.4	37.9	5.8	礎板に転用
第135図43	73	建築材	ネズミ返し		弥生後～古墳初	1	C5　SD122	板目	スギ	19.5	39.0	5.6	礎板に転用
第135図44-1 第135図44-2	74 75	建築材	扉		弥生後～古墳初	1	B～C6　SP148 B～C6　SP140	斜柾目	スギ	67.4	78.5	5.8	礎板に転用 SH103
第135図45	73	建築材	梯子		弥生後～古墳初	2	B16　SK219	板目	スギ	65.6	23.2	8.2	
第135図46	73	建築材	梯子		弥生後～古墳初	1	C5　SP132	柾目	スギ	33.4	22.2	12.3	礎板に転用SH101
第136図47	76	建築材	壁板材		弥生後	3	C25　SK306	板目	スギ	157.8	16.4	1.8	穿孔材横板に転用
第136図48	76	用途不明品	棒状木製品		弥生後～古墳初	5-1	C3　17層下層	板目	スギ	137.1	2.7	1.4	
第136図49	76	用途不明品	棒状木製品		弥生後～古墳初	2	B14　SA201	板目	スギ	310.9	5.0	4.5	横板に転用
第136図50	76	建築材	壁板材か		弥生後	3	C24　SK305	板目	スギ	298.8	13.0	3.0	穿孔材横板に転用
第136図51		土木材	杭		弥生後～古墳初	2	B13　SK220	板目	スギ	66.6	9.3	4.6	
第136図52		土木材	杭		弥生後～古墳初	5-1	C3　SD502	板目	スギ	73.9	9.5	5.8	
第136図53-1 第136図53-2		建築材	礎板		弥生後～古墳初	1	B5　SP136 B5　SP153	板目	スギ	54.3	21.8	4.7	SH102
第136図54-1 第136図54-2		建築材	礎板		弥生後～古墳初	1	B～C6　SP142 B～C6　SP147	板目	スギ	33.2 38.6	23.7 22.2	3.4 4.0	SH104

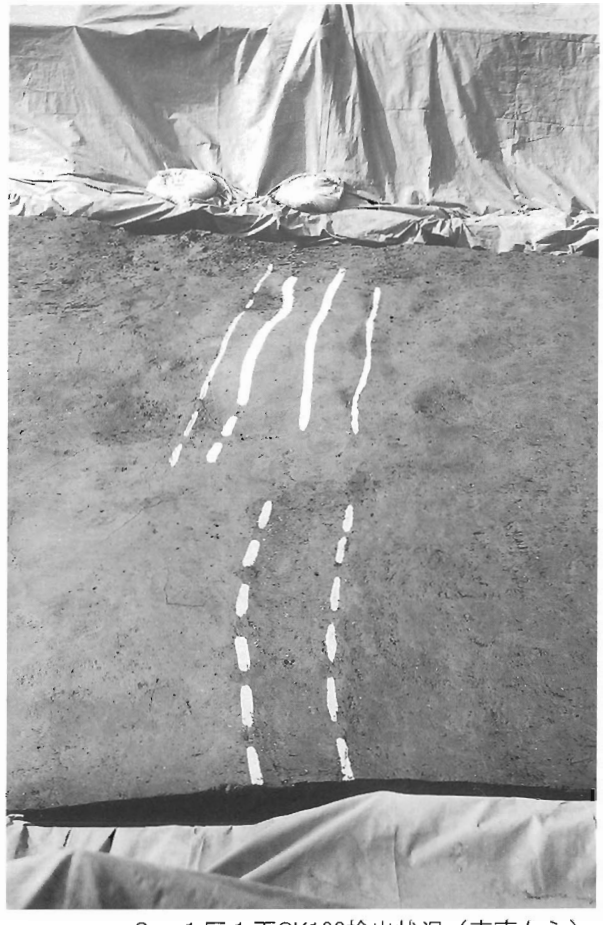
図版番号	写真番号	大項目	中項目	小項目	年代	区	遺構・層位	木取り	樹種	計測値 (cm)			備考
										長さ	幅	厚さ	
第136図55-1 第136図55-2		建築材	礎板		弥生後～古墳初	1	C6 SP140	板目	スギ	60.2	33.9	5.0	
第137図56		建築材	礎板		弥生後～古墳初	1	B～C6 SP142	板目	スギ	45.7	26.6	2.2	
第137図57		建築材	礎板		弥生後～古墳初	5-1	C3 SP501	板目	スギ	46.7	19.3	1.6	SB501
第137図58-1 第137図58-2 第137図58-3		建築材	礎板		弥生中～後	3	C24 SP305	板目	スギ	57.4	12.6	2.3	
第137図59-1 第137図59-2 第137図59-3		建築材	礎板		弥生後～古墳初	1	B5 SP155	板目	スギ	52.6	12.2	1.6	SH101
第137図60		建築材	礎板		弥生中～後	3	C23 SP301	板目	スギ	57.2	26.1	5.7	
第137図61		建築材	礎板		弥生後～古墳初	1	B～C6 SP148	板目	スギ	29.5	29.8	4.4	SH103 穿孔材
第137図62-1 第137図62-2		建築材	礎板		弥生後～古墳初	1	C5 SP138	板目	スギ	35.4	11.4	1.4	SH101
第137図63		建築材	礎板		弥生後～古墳初	1	C6 SP156	板目	スギ	26.6	11.0	1.5	
第137図64		建築材	礎板		弥生後～古墳初	1	B～C5 SP153	板目	スギ	28.1	15.6	3.2	SH102 穿孔材
第137図65-1 第137図65-2		建築材	礎板		弥生後～古墳初	1	C6 SP154	板目	スギ	30.5	19.3	4.2	
第137図66		建築材	礎板		弥生後～古墳初	1	B4 SP116	板目	スギ	43.1	17.3	4.4	SB110
第137図67		建築材	礎板		弥生後～古墳初	1	C5 SP138	板目	スギ	38.3	19.9	1.6	SH101
第137図68		建築材	礎板		弥生後～古墳初	1	B4 SP115	板目	スギ	34.6	16.3	4.0	SB110
第137図69		建築材	礎板		弥生後～古墳初	5-1	C3 SP502	板目	スギ	20.8	14.8	2.4	SB501
第137図70		建築材	礎板		弥生中～後	3	C23 SP303	板目	スギ	22.7	10.0	2.5	
第138図71		用途不明品	棒状木製品		弥生後～古墳初	2	B16 22層	柾目	スギ	29.3	3.7	1.1	
第138図72	77	用途不明品	加工板材		弥生後～古墳初	2	B16 SK219	板目	スギ	26.5	3.8	1.0	
第138図73	77	用途不明品	棒状木製品		弥生後～古墳初	2	B15 SA201	板目	スギ	22.9	3.4	2.1	
第138図74		用途不明品	棒状木製品		弥生後	3	C24 SK305	板目	スギ	57.8	5.2	1.7	
第138図75		用途不明品	棒状木製品		弥生中～後	3	C26 SD301	板目	スギ	46.0	4.1	1.4	
第138図76		用途不明品	棒状木製品	柄	弥生中～後	3	C26 SD301	芯持材	サカキ	68.9	3.0	1.9	
第138図77	77	用途不明品	棒状木製品		弥生後～古墳初	1	C5 SD152	斜柾目	サクラ属	32.8	2.0	1.3	
第138図78	77	用途不明品	有頭棒		弥生後～古墳初	5-1	C3 SD502	板目	スギ	63.4	4.7	3.2	
第138図79	77	用途不明品	棒状木製品		弥生後～古墳初	2	B17 19層	柾目	アカガシ	61.8	3.1	2.6	農具か
第138図80		用途不明品	加工板材		弥生後～古墳初	1	C6 SD105	板目	スギ	14.8	3.9	0.4	
第138図81	77	用途不明品	棒状木製品		弥生後～古墳初	2	B17 18～19層	板目	散孔材	20.6	5.0	4.0	
第138図82	77	用途不明品	有孔板材		弥生後～古墳初	2	B16 20層	板目	スギ	6.9	7.4	1.3	赤彩
第139図83		用途不明品	加工板材		弥生中～後	3	C26 SD301	板目	スギ	51.3	22.4	4.0	被熱 表面炭化
第139図84		用途不明品	加工板材		弥生後	3	C25 SK306	板目	スギ	53.7	13.2	3.6	ネズミ返し？
第139図85	78	用途不明品	有孔板材		弥生後	3	C24 SK305	柾目	スギ	45.9	9.4	1.2	
第139図86	78	用途不明品	有抉板材		弥生後	3	C25 SK306	板目	スギ	56.1	10.5	2.8	
第139図87	78	用途不明品	加工板材		弥生後	3	C24 SK305	板目	スギ	56.6	7.6	3.3	
第139図88	78	用途不明品	有抉板材		弥生後～古墳初	2	B15 SA201付近	板目	スギ	82.6	8.8	3.1	
第139図89	78	用途不明品	有孔板材		弥生後～古墳初	2	B13 SK220	板目	スギ	93.0	10.8	1.7	
第139図90		建築材	梯子？			1		板目	スギ	46.1	17.0	4.2	TPNo.55
第139図91		建築材	梯子？			1		板目	スギ	45.8	10.7	3.4	TPNo.55
第139図92-1 第139図92-2	78	用途不明品	有孔板材		弥生後	3	C24 SK305	追柾目	スギ	27.3	13.6	1.0	
第139図93	78	用途不明品	有孔板材		弥生～古墳	2	B17 18層	板目	スギ	16.7	5.8	1.3	
第139図94	78	用途不明品	有孔板材		弥生後～古墳初	2	B16 22層	柾目	スギ	10.6	7.0	2.1	
第139図95	78	用途不明品	有孔板材		弥生後	3	C24 SK305	板目	スギ	21.2	8.0	3.3	
第139図96	78	用途不明品	有孔板材		弥生後	3	C24 SK305	板目	スギ	30.1	7.1	1.5	
第139図97		用途不明品	加工板材		弥生後～古墳初	2	B16 SK219	板目	スギ	29.2	21.4	4.2	
第139図98		用途不明品	加工板材		弥生後～古墳初	2	B17 19層	板目	スギ	60.5	14.3	2.4	
第139図99		用途不明品	有孔板材		弥生後	3	C24 SK305	板目	スギ	61.5	19.4	1.8	
第139図100	78	建築材	礎板		弥生後～古墳初	5-1	C3 SP503	板目	スギ	40.7	19.8	2.7	有孔板材 SB501
第139図101		建築材	礎板		弥生中～後	3	C24 SP308	板目	スギ	41.8	20.5	3.9	
第139図102		用途不明品			弥生後～古墳初	2	B16 SK219	柾目	スギ	63.7	30.6	2.8	
	78	土木材	杭		—	2	11層	芯持材	ユズリハ	95.4	4.4	3.8	W-8
	78	土木材	杭		—	2	11層	芯持材	ユズリハ	93.8	6.9	4.4	W-15
	78	土木材	杭		—	2	11層	芯持材	スギ	81.5	5.3	4.2	W-17

写　真　図　版

1．１区１面全景

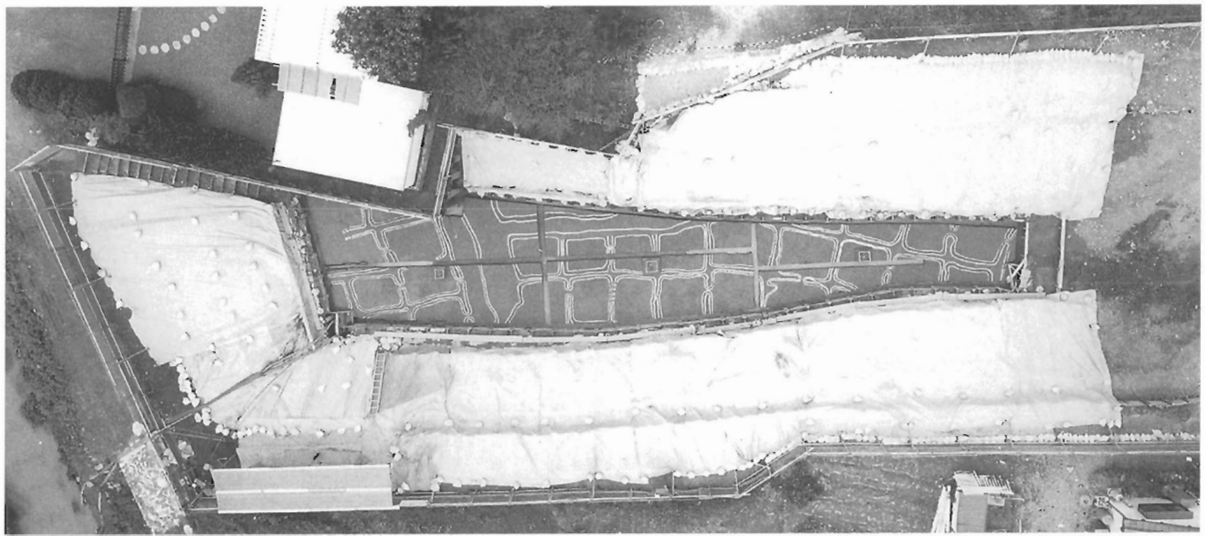


2．１区１面SK101検出状況（南東から）

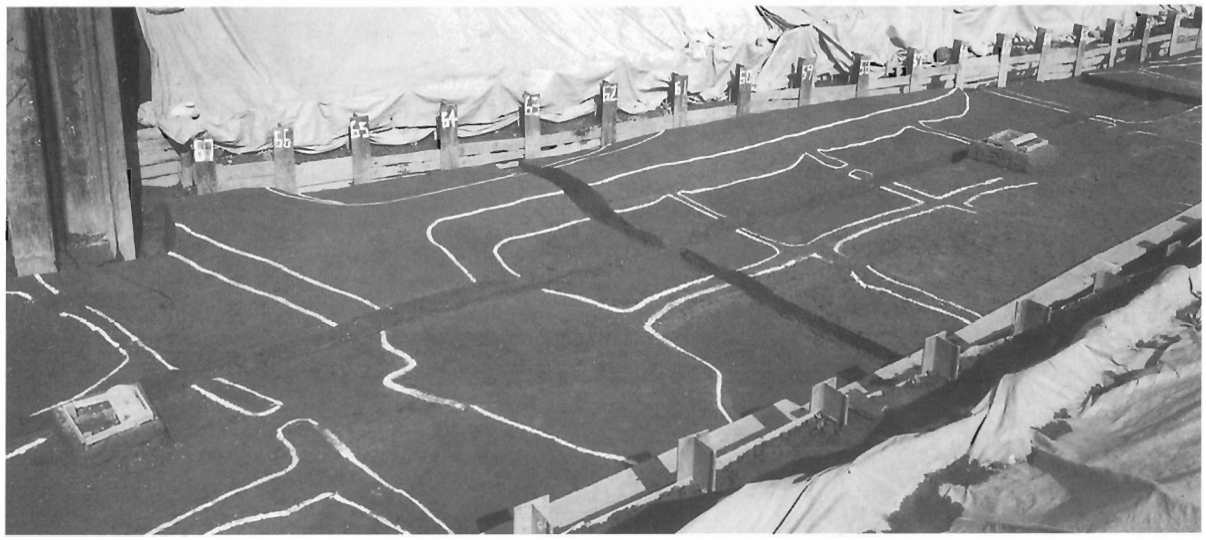


3．１区１面SK102検出状況（南東から）

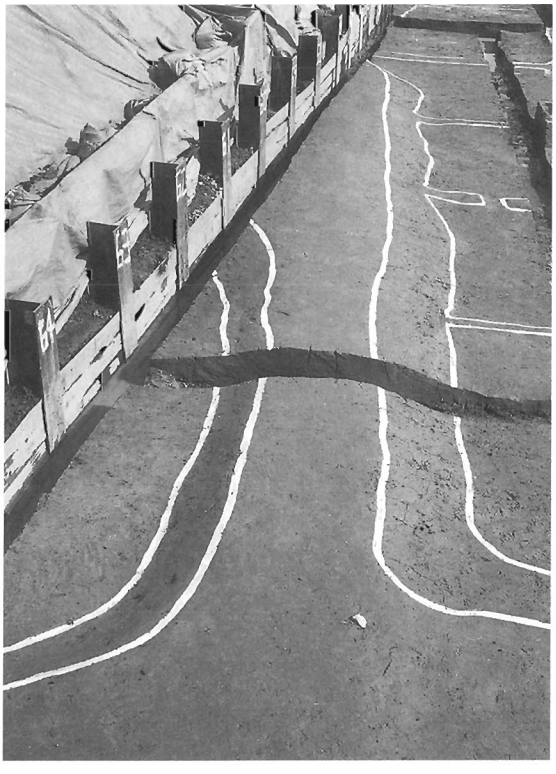
図版 2



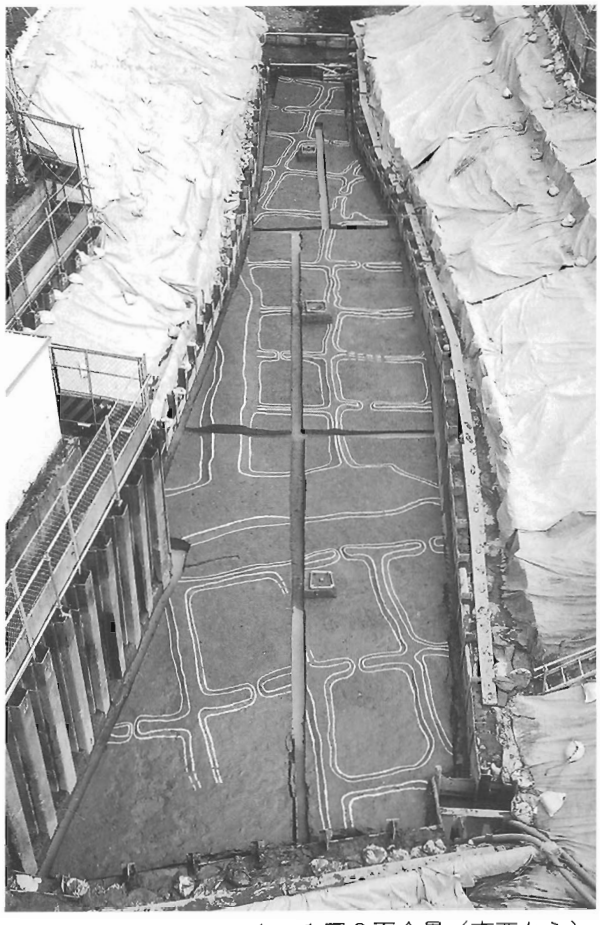
1．１区２面全景



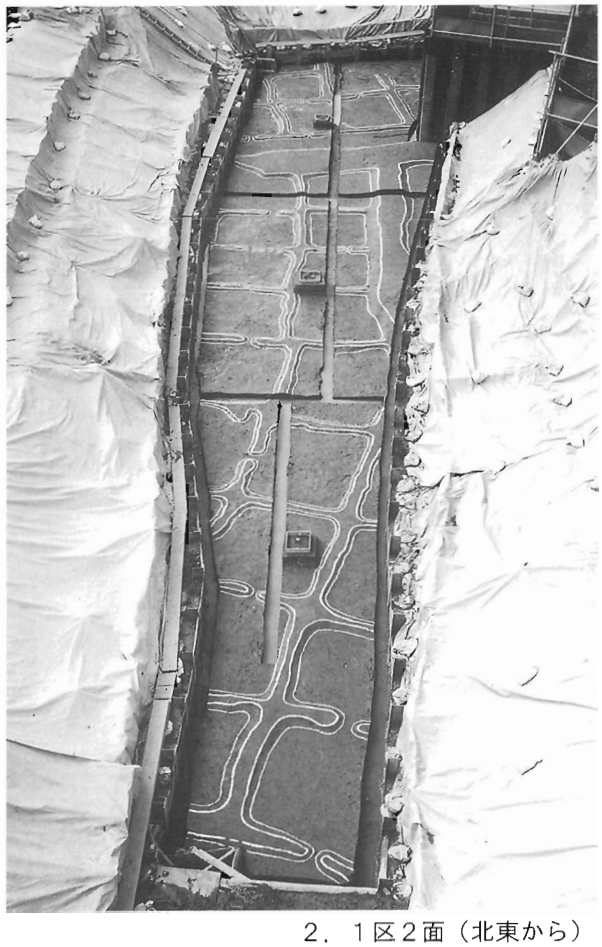
2．１区SK103・104検出状況（南から）



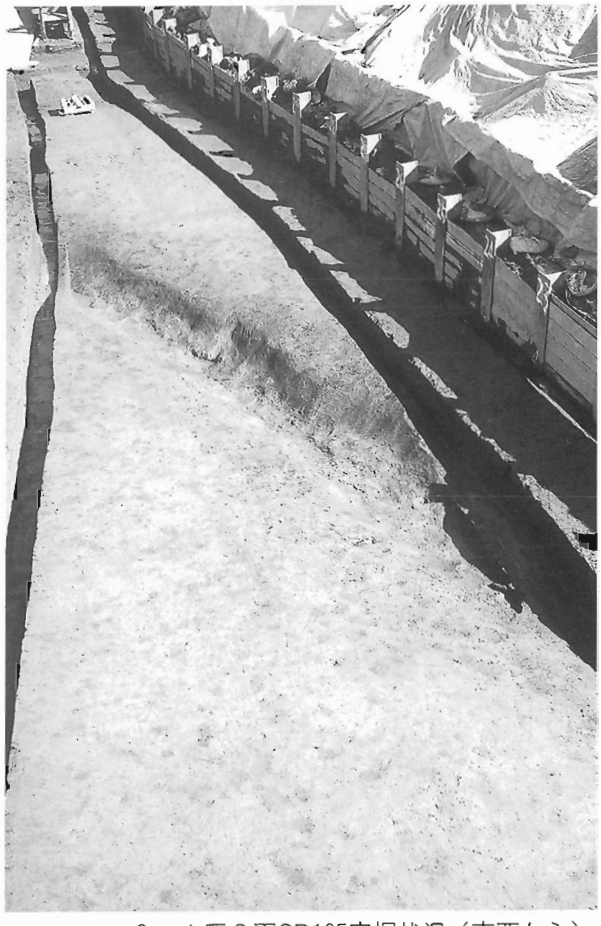
3．１区SK103検出状況（南西から）



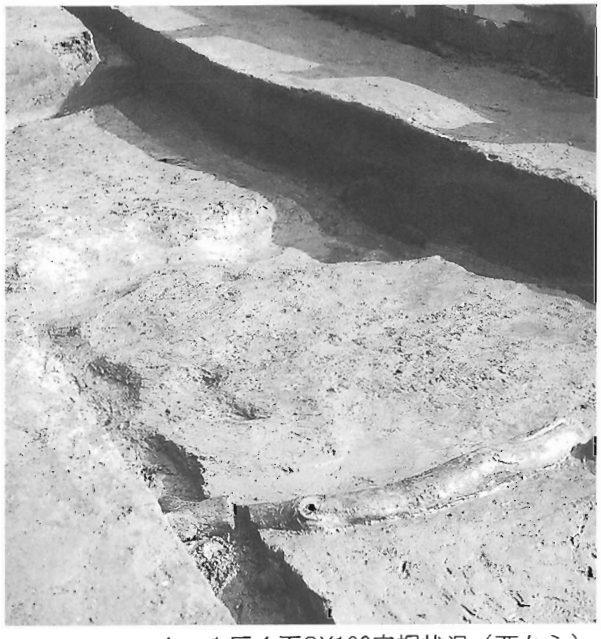
1．１区２面全景（南西から）



2．１区２面（北東から）

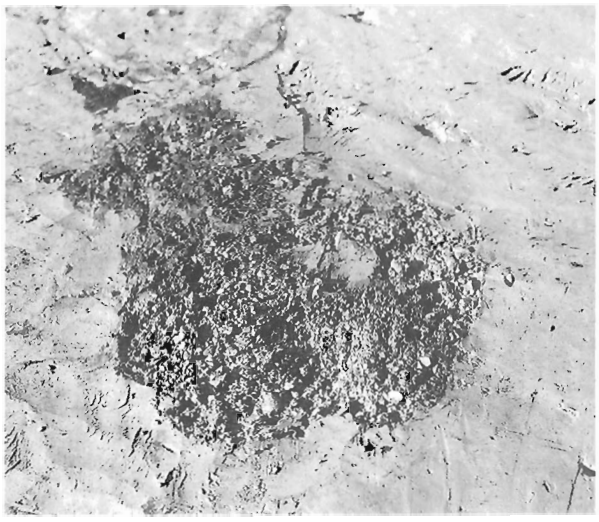


3．１区３面SD105完掘状況（南西から）



4．１区４面SX106完掘状況（西から）

図版 4



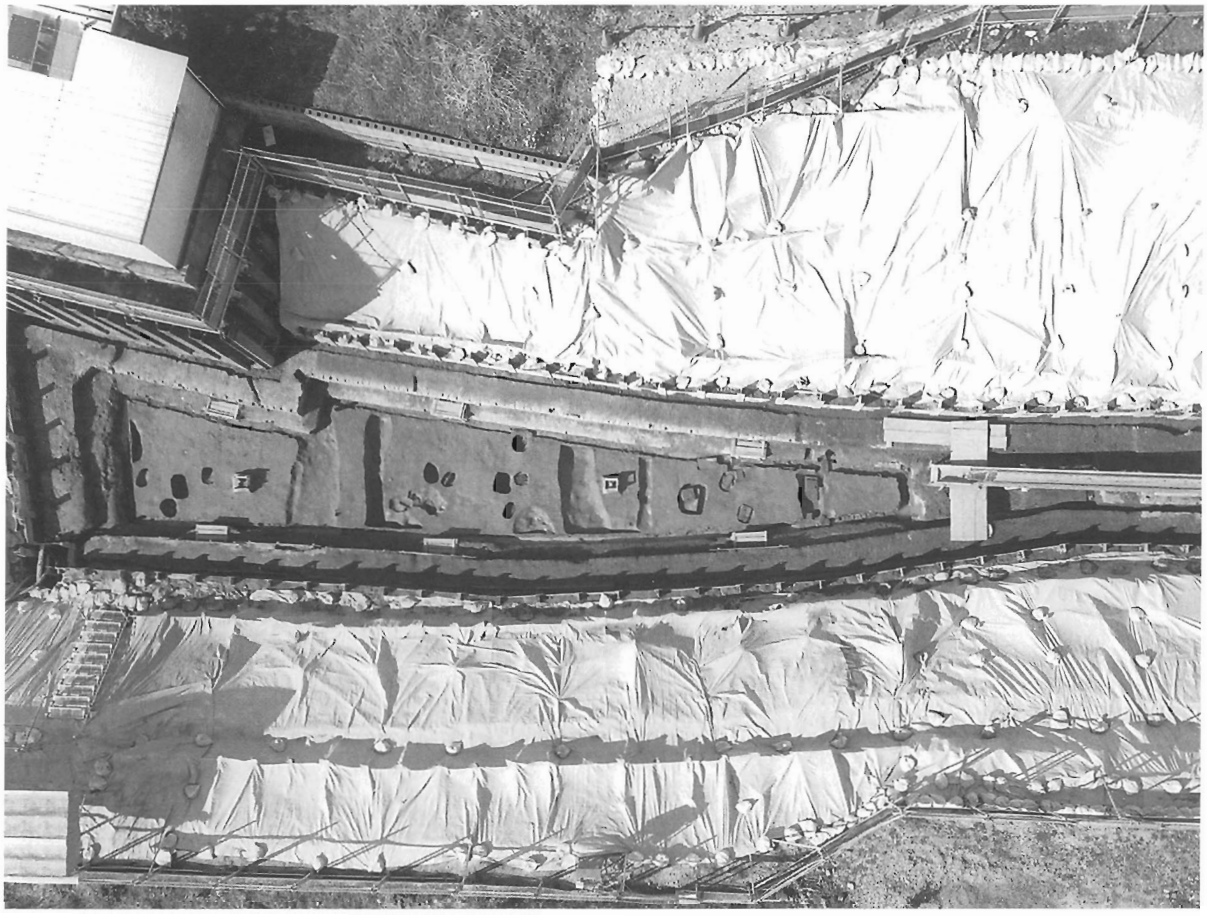
1．１区５面上層SF107検出状況（南から）

2．１区５面上層SF107完掘状況（南から）

3．１区５面上層SP114検出状況（東から）

4．１区５面上層SF108完掘状況（北西から）

5．１区５面上層SB110完掘状況（南東から）



1．１区５面全景

2．１区５面SP群検出状況（東から）

図版 6

1．１区５面SD121・122完掘状況（南東から）

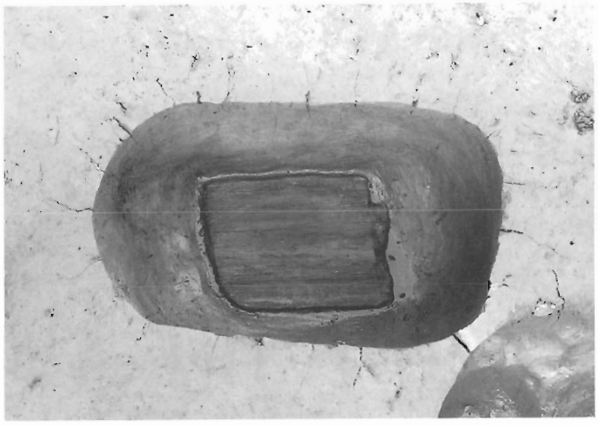
2．１区５面SD152炭化物検出状況（南東から）

3．１区５面SD122遺物出土状況（南東から）

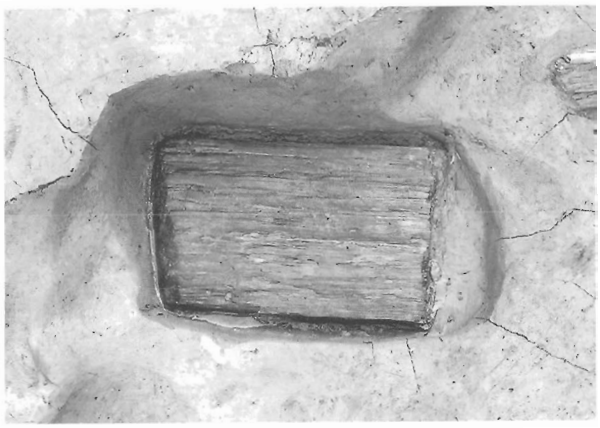
1．１区５面SD124・127完掘状況（南東から）

2．１区５面SD124遺物出土状況（南東から）

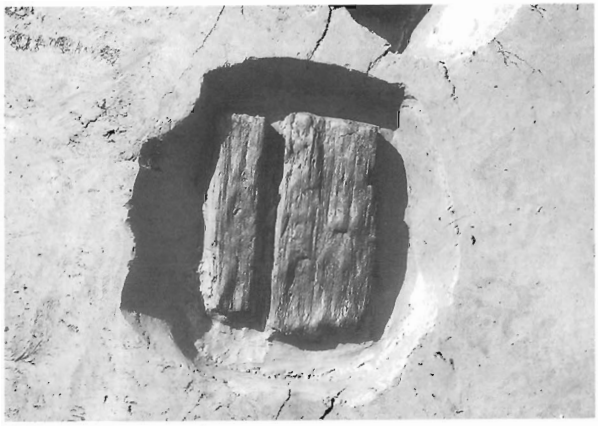
図版 8



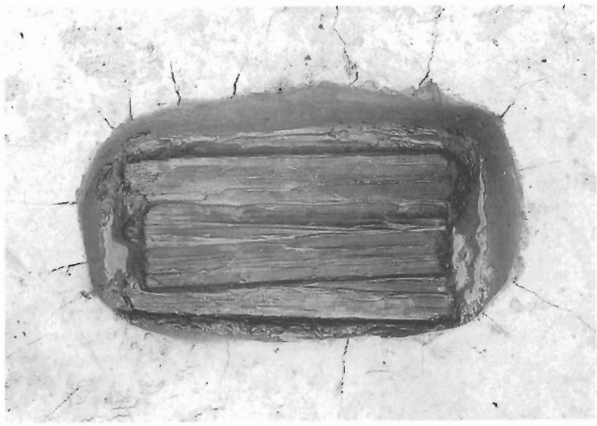
1．SP129（北東から）



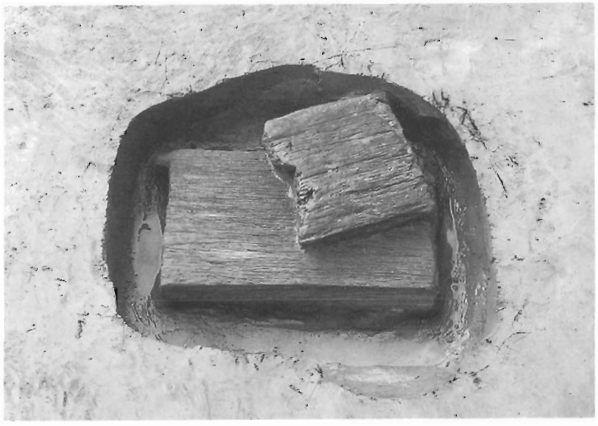
2．SP132（SH101.北から）



3．SP137（北東から）

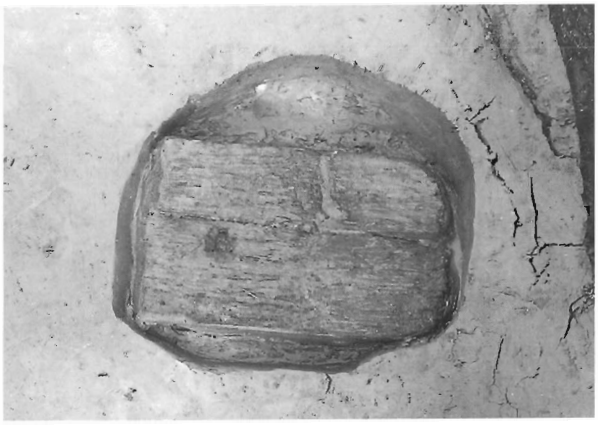


4．SP138（SH101.西から）



5．SP140（北東から）

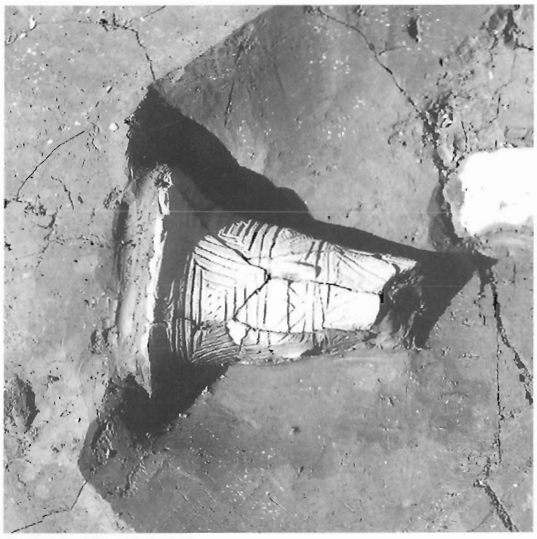
6．SP142（東から）



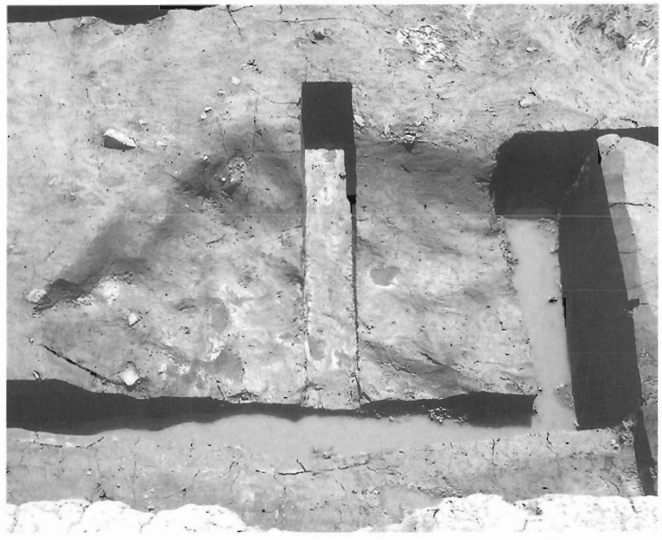
7．SP144（西から）

8．SP150（北東から）

1区5面柱穴（SP）礎板検出状況



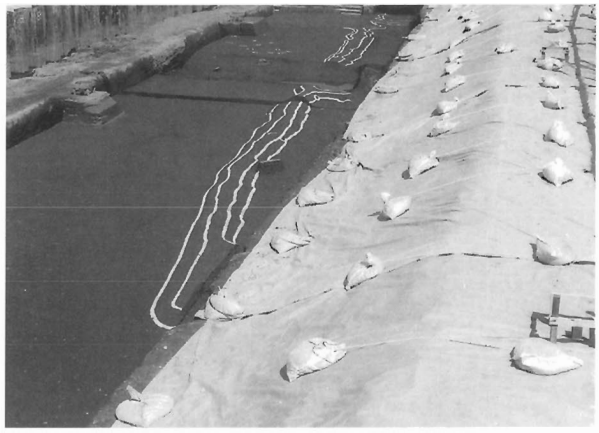
1．１区６面土器43出土状況（東から）



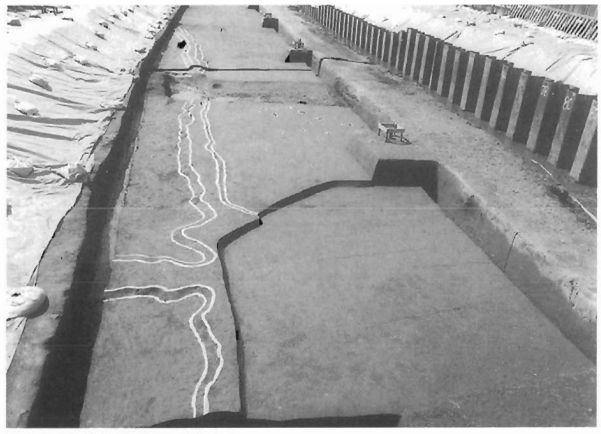
2．１区６面SX161完掘状況（北から）

3．１区７面全景（北東から）

図版10



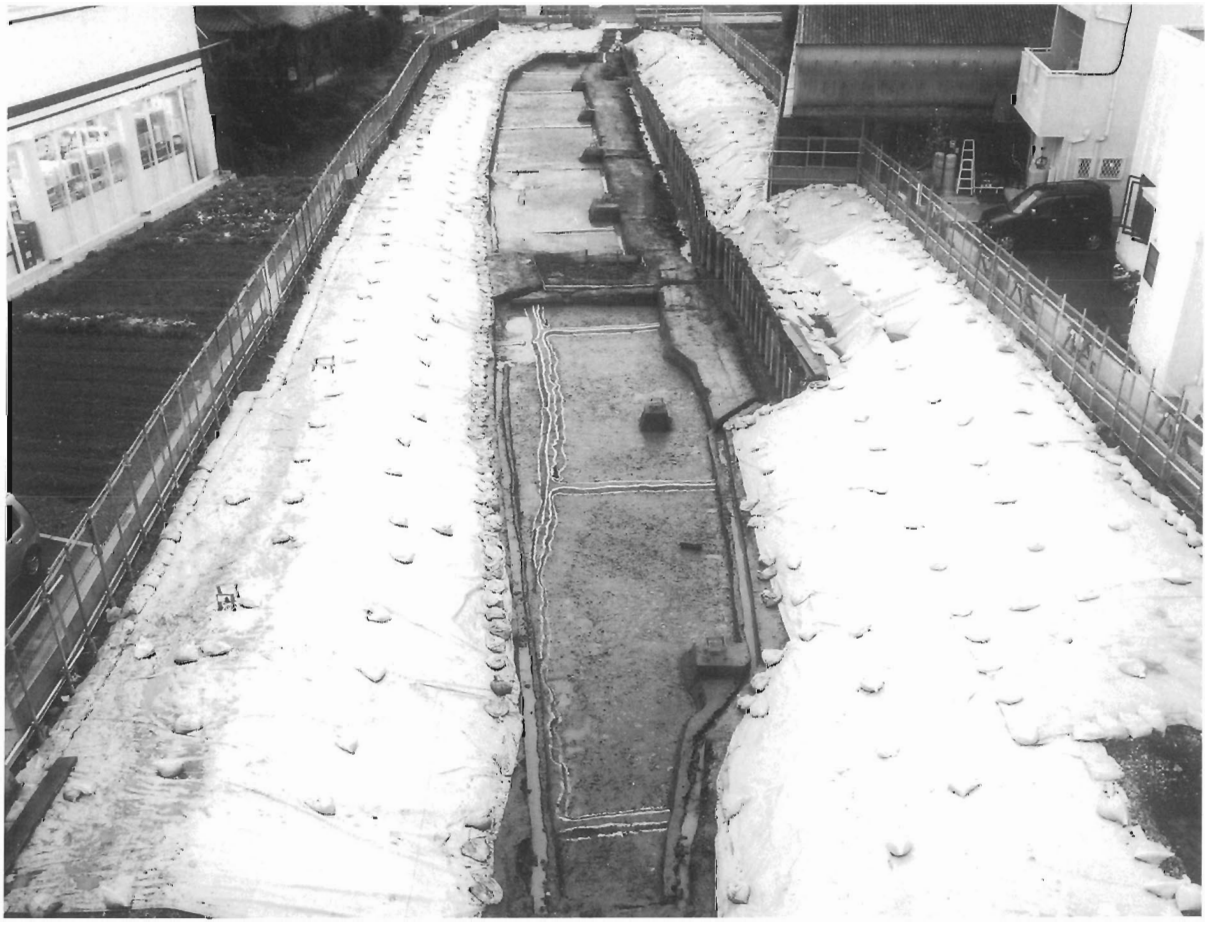
1．２区１面SK201検出状況（南西から）



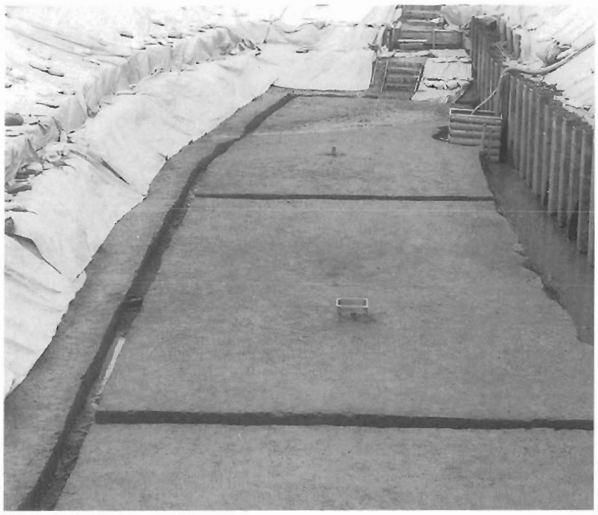
2．２区１面SK201検出状況（北東から）

3．２区１面SK202検出状況（北東から）

4．２区１面SR201検出状況（南東から）



5．２区２面全景（北東から）



1．２区３面西半部検出状況（北東から）

2．２区３面SR202管玉出土状況（南東から）

3．２区３面SK212検出状況（北西から）

4．２区３面SK213検出状況（北西から）

5．２区３面東半部SK検出状況
（南西から）

6．２区３面SK217検出状況（北東から）

図版 12

1．２区４面SH201
礎板検出状況（南東から）

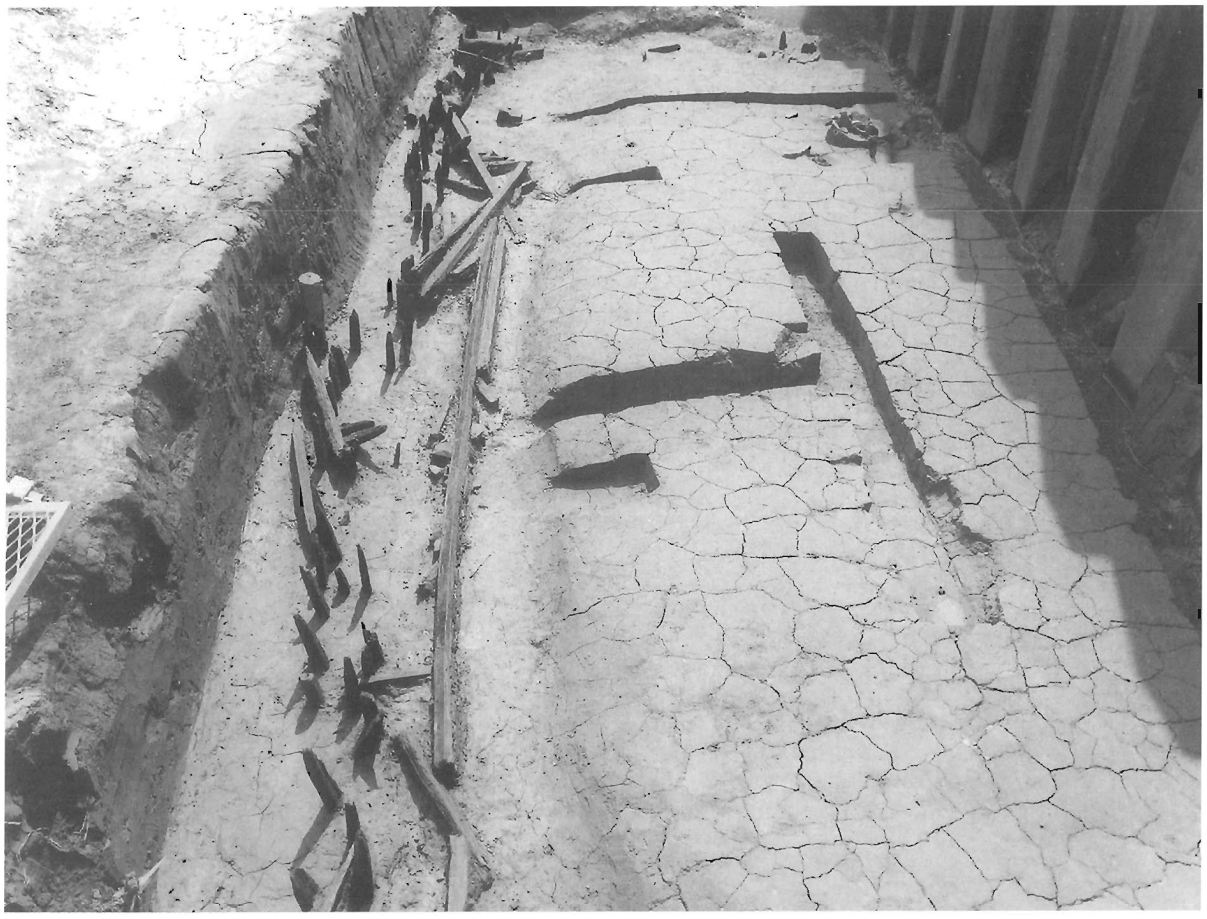
2．２区４面SD201
遺物出土状況（南西から）

3．２区４面SK220
検出状況（北から）

1．２区４面SA201検出状況（南西から）

2．２区４面SA201解体状況（南西から）

図版14

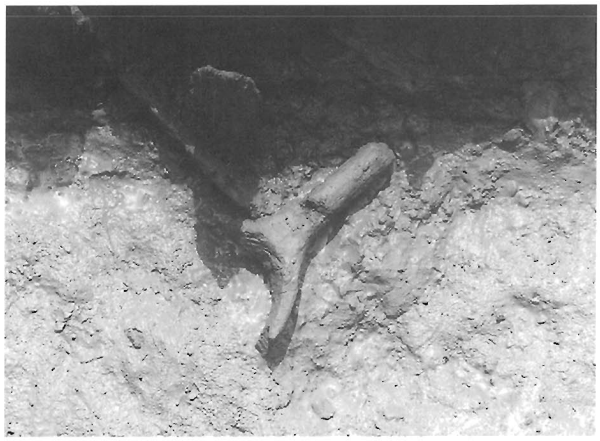


1．２区４面SA201・微高地検出状況①（北東から）

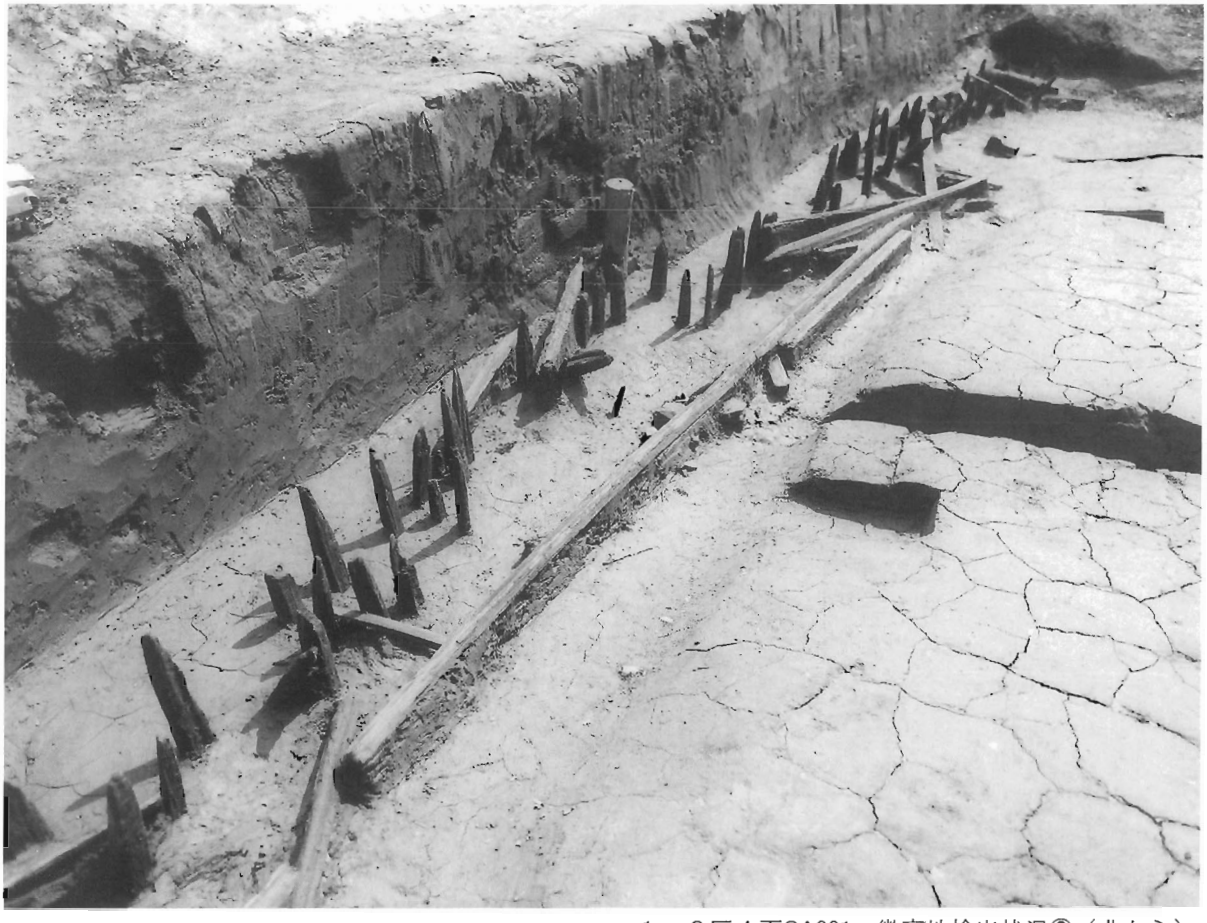
2．２区４面SX201検出状況（南西から）

3．２区４面土器80出土状況（南から）

4．２区４面木製品20出土状況（北西から）



5．２区４面木製品26出土状況（西から）



1．２区４面SA201・微高地検出状況②（北から）

2．２区４面SK219
検出状況（南西から）

3．２区４面SD202
完掘状況（北東から）

図版16

1．土器40（南から）

2．土器41（南西から）

3．土器77（西から）

4．鹿肩甲骨（北から）

5．木製品34（南から）

6．木製品79（南東から）

7．土器101（南東から）

8．土器97（南から）

2区4・5面遺物出土状況

1．２区５面土器103出土状況
（南から）

2．２区５面犬下顎骨出土状況
（南から）

3．２区調査終了状況（北東から）

図版18

1．３区１面全景（南西から）

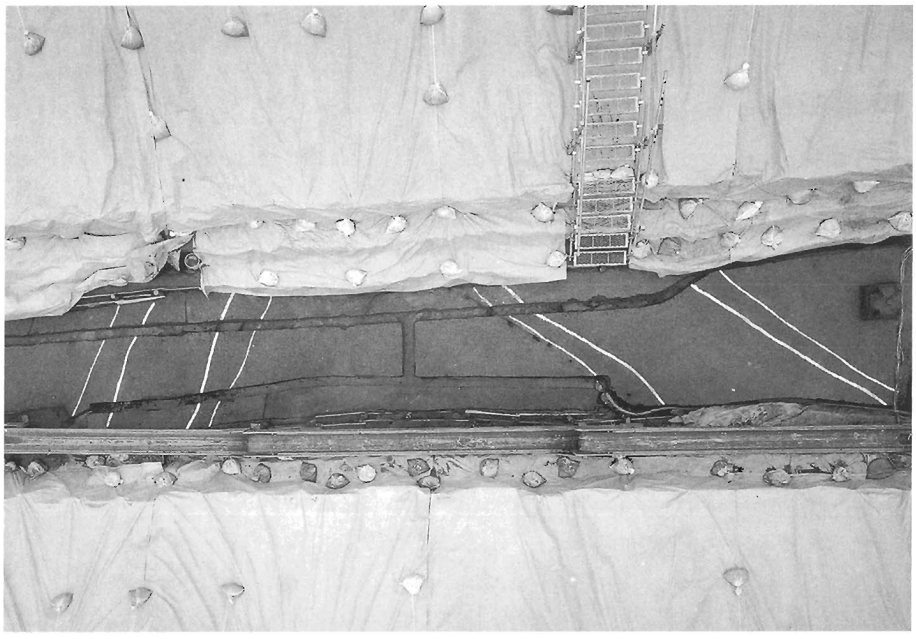
2．３区１面SK304検出状況（北東から）

3．３区１面木製品３出土状況
（北西から）

1．３区２面全景

2．３区２面SK検出状況（北東から）

図版20

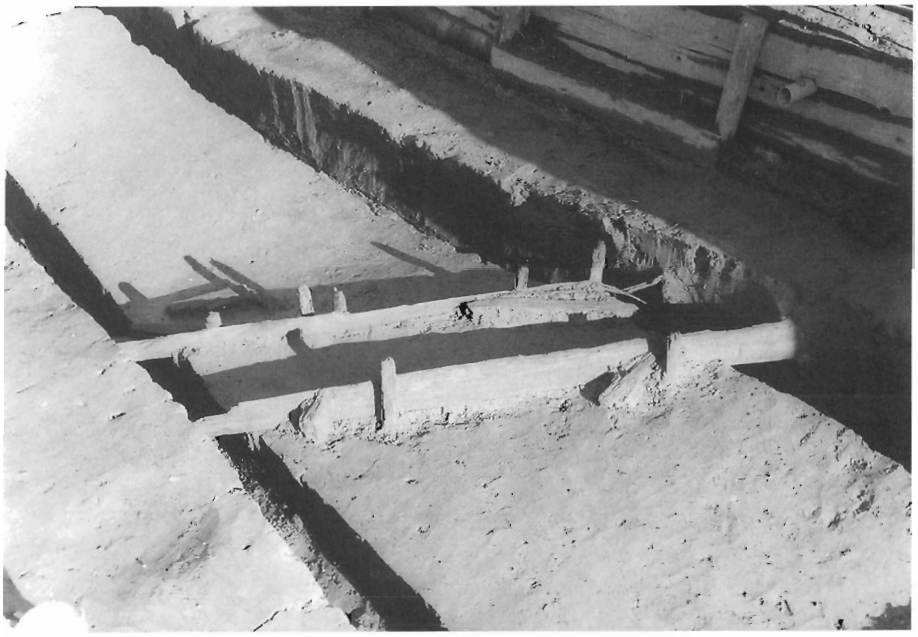


1．３区２面SK305・306検出状況

2．３区２面SK306杭列検出状況（西から）

3．３区２面SK306解体状況（北東から）

1．３区２面SK305
検出状況
（北東から）



2．３区２面SK305
解体状況①
（西から）

3．３区２面SK305
解体状況②
（北西から）

図版22

1．３区３面SP群検出状況（北から）

2．３区３面SP305礎板検出状況（南西から）

3．３区３面SP301半截状況（北から）

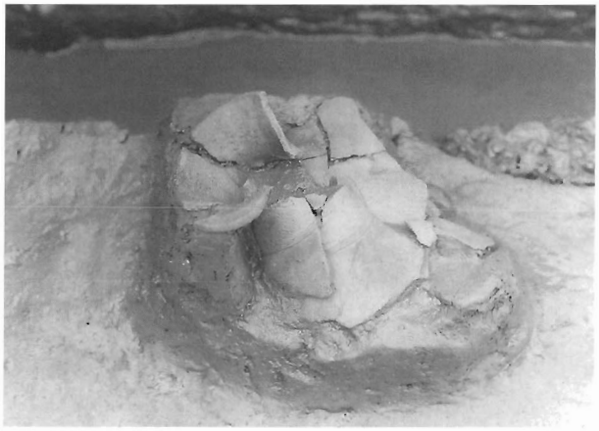
4．３区３面SP301礎板検出状況（東から）

5．３区３面SR301遺物出土状況（南西から）

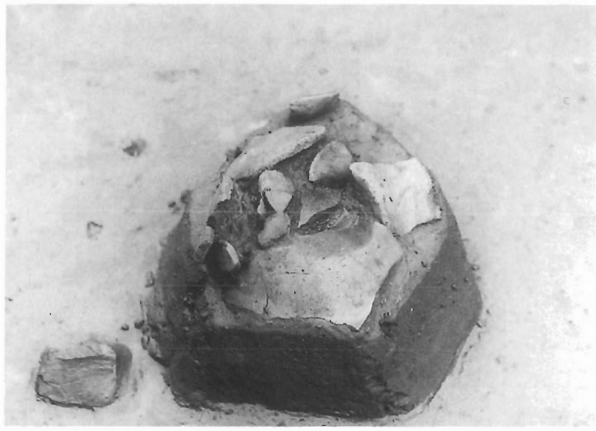
6．３区３面SD301遺物出土状況（北西から）

7．３区３面SD304検出状況（北東から）

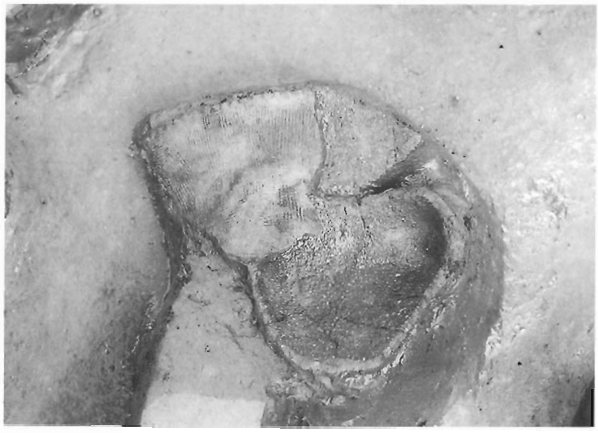
8．３区４面SD307遺物出土状況（北東から）



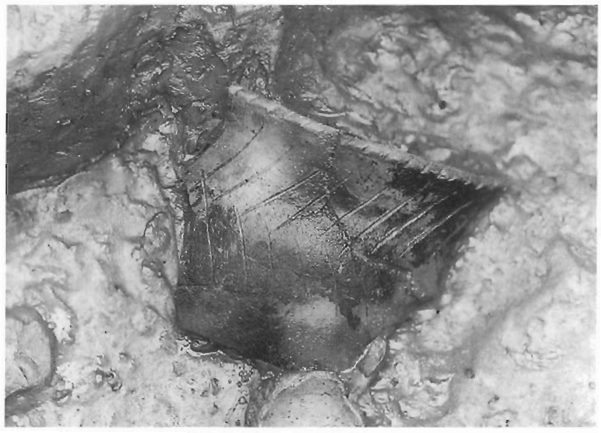
1．３区11層土器54出土状況（南東から）



2．３区９～10層土器38出土状況（西から）



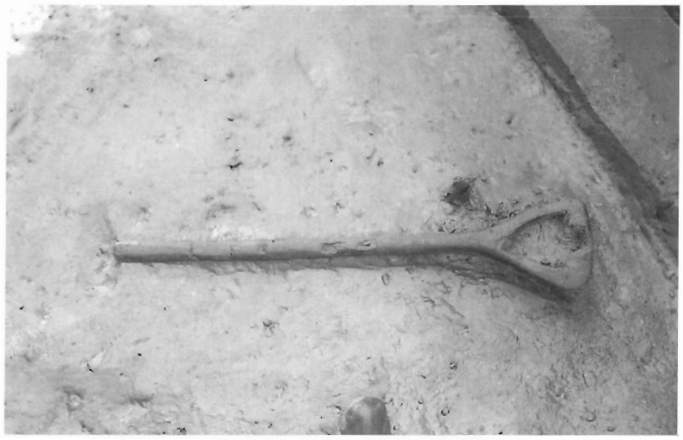
3．３区12層土器102出土状況（南から）



4．３区12層土器95出土状況（北から）

5．３区３面石器13出土状況（南東から）

6．３区４面石器20出土状況（南西から）



7．３区４面木製品28出土状況（西から）

8．３区４面木製品31出土状況（北西から）

図版24

1．５－１区SB501検出状況（東から）

2．５－１区SP501・502
礎板検出状況（南東から）

3．５－１区SP503礎板検出状況（南東から）

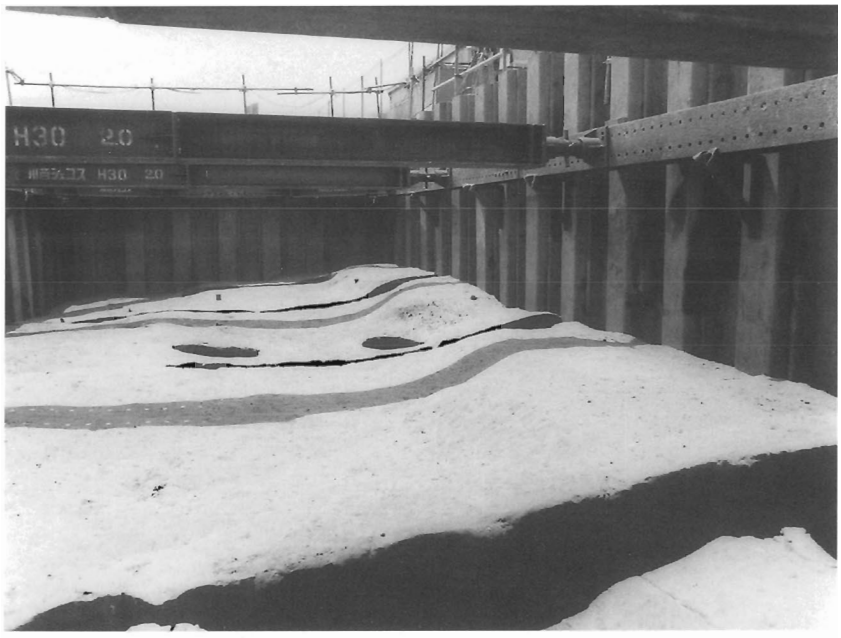
4．５－１区SD502土層堆積状況（東から）

1．５－１区SD502杭列検出状況①（西から）

2．５－１区SD502杭列
検出状況②（南西から）

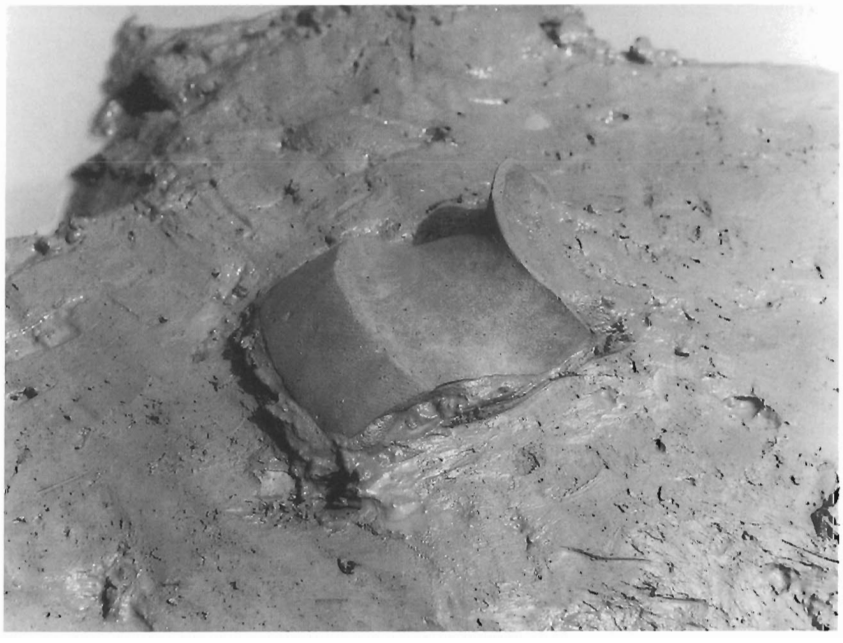
3．５－１区SD502土器63
出土状況（南東から）

図版 26



1．５－２区１面全景
（北西から）

2．５－２区３面全景
（北西から）



3．５－２区土器16
出土状況（北西から）

1．４区作業風景（西から）

2．４区作業風景（東から）

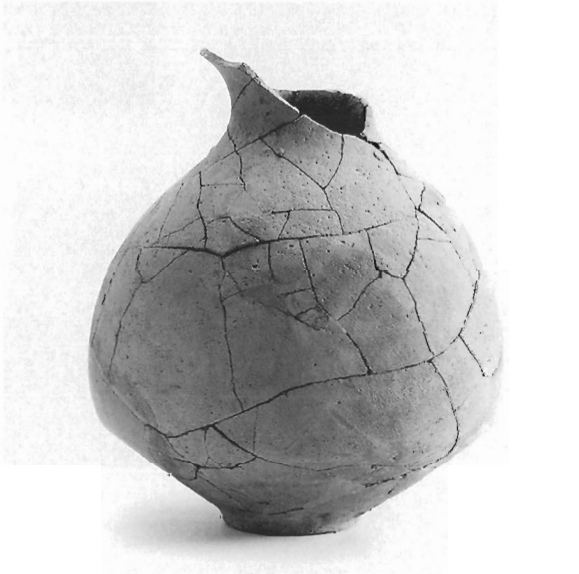
3．瀬名川遺跡調査終了後風景（北東から）

図版 28

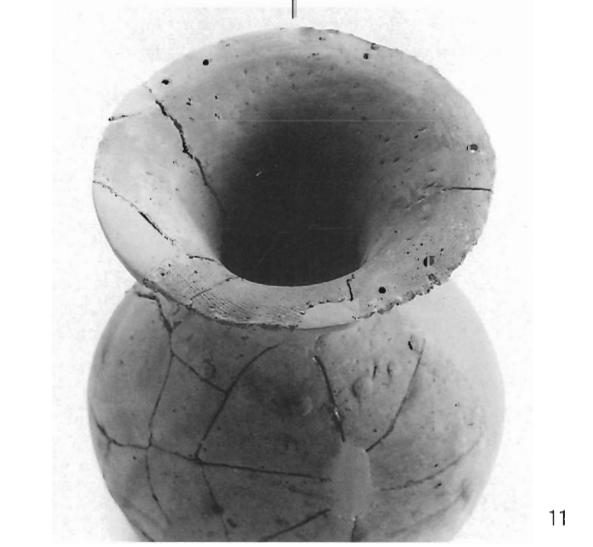
3

5

11



12



11

22

1 区SD121・122・124・19層出土土器

40

46

44

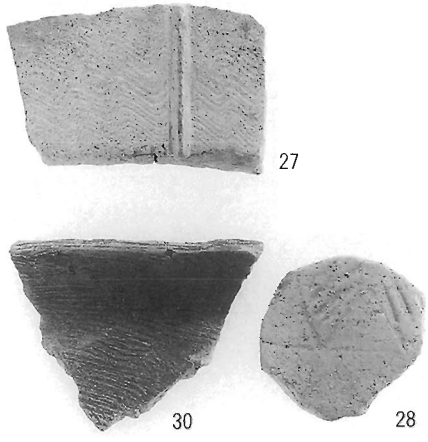
45

43

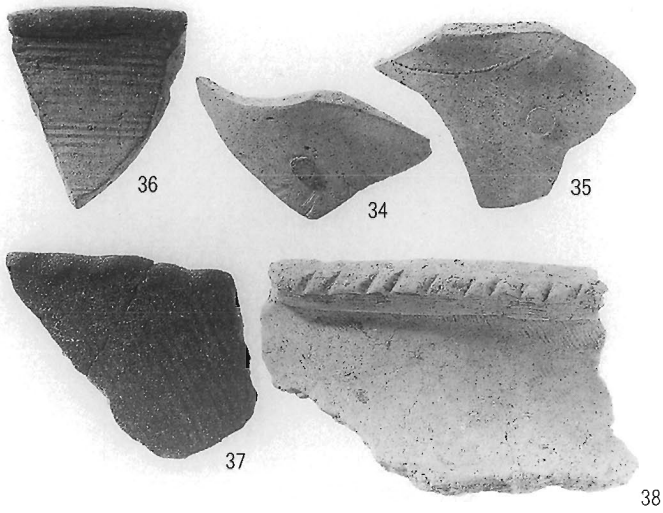
42

1 区SX161・23層出土土器

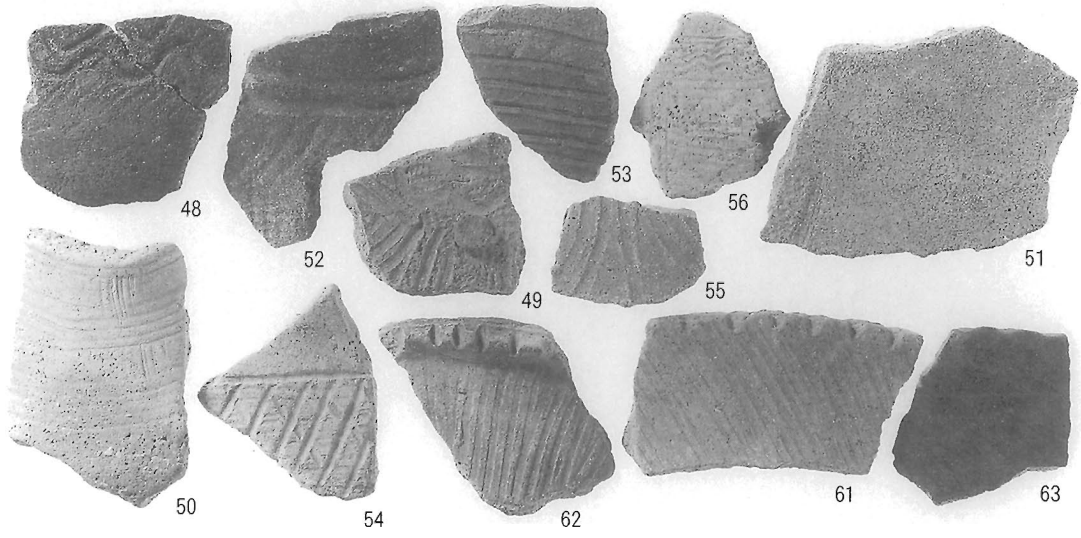
図版 30



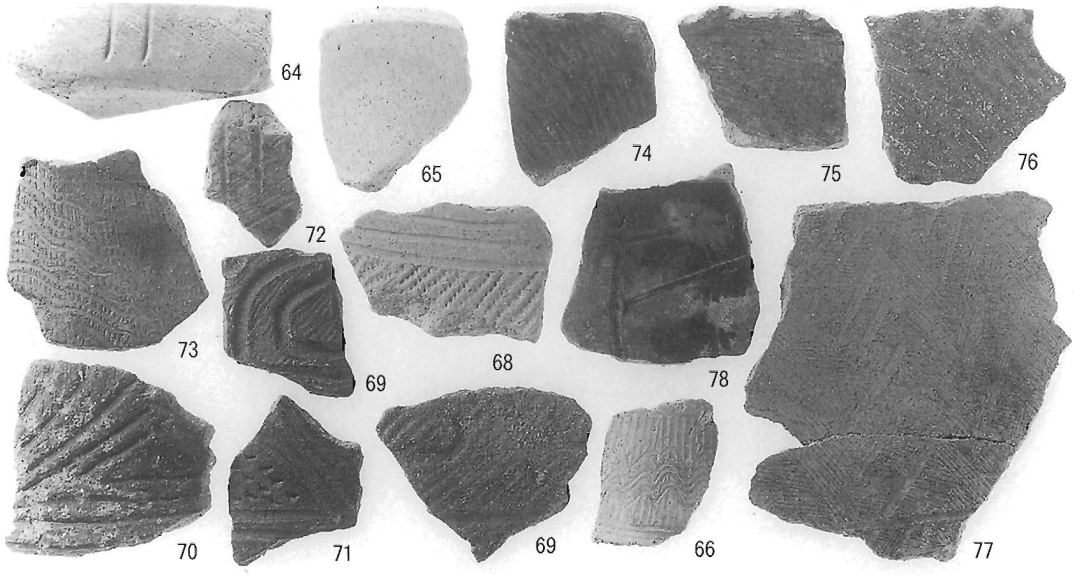
1 区20層出土土器



1 区21層出土土器



1 区23層出土土器

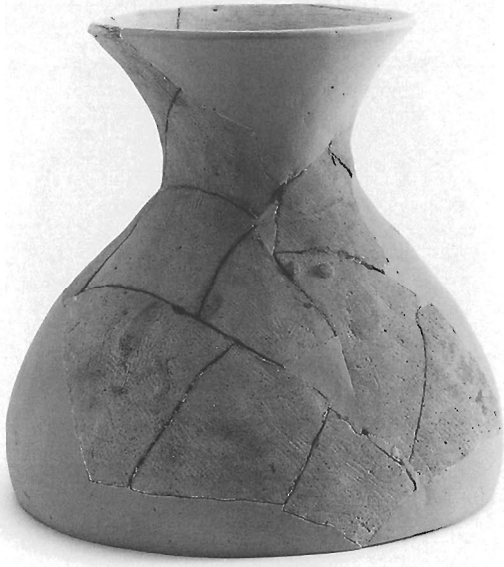


1 区24層出土土器

1

2

4



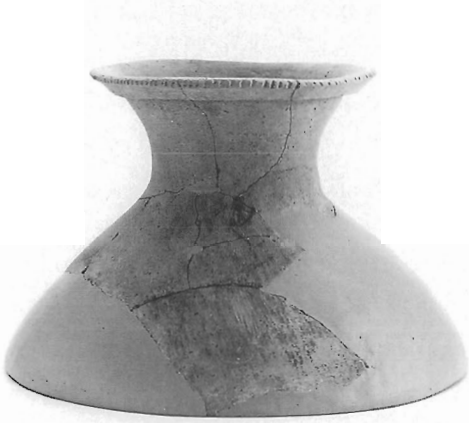
5

6

10

2区15層・17～19層出土土器

図版 32



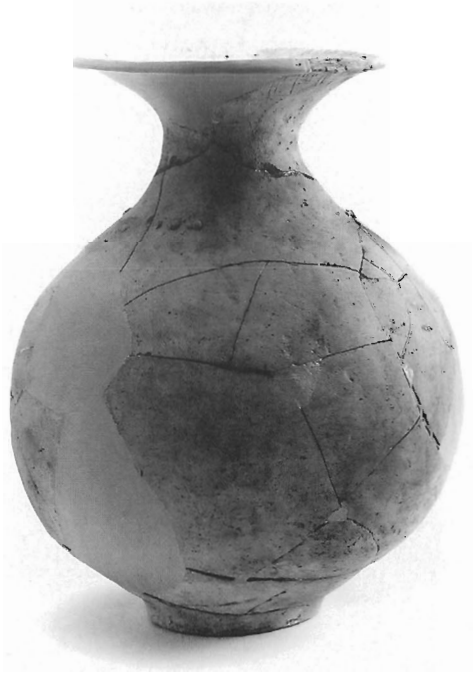
11

12

18

21

18



27

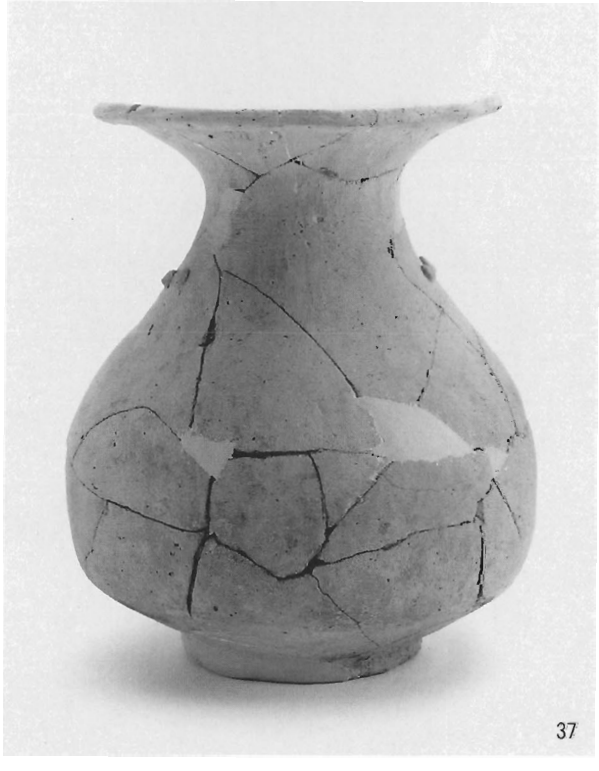
2区17～19層・SD203出土土器

23

26

40

41


37

42

2区SD201・護岸杭列(SA201)出土土器

図版 34

63

58

62

57

65

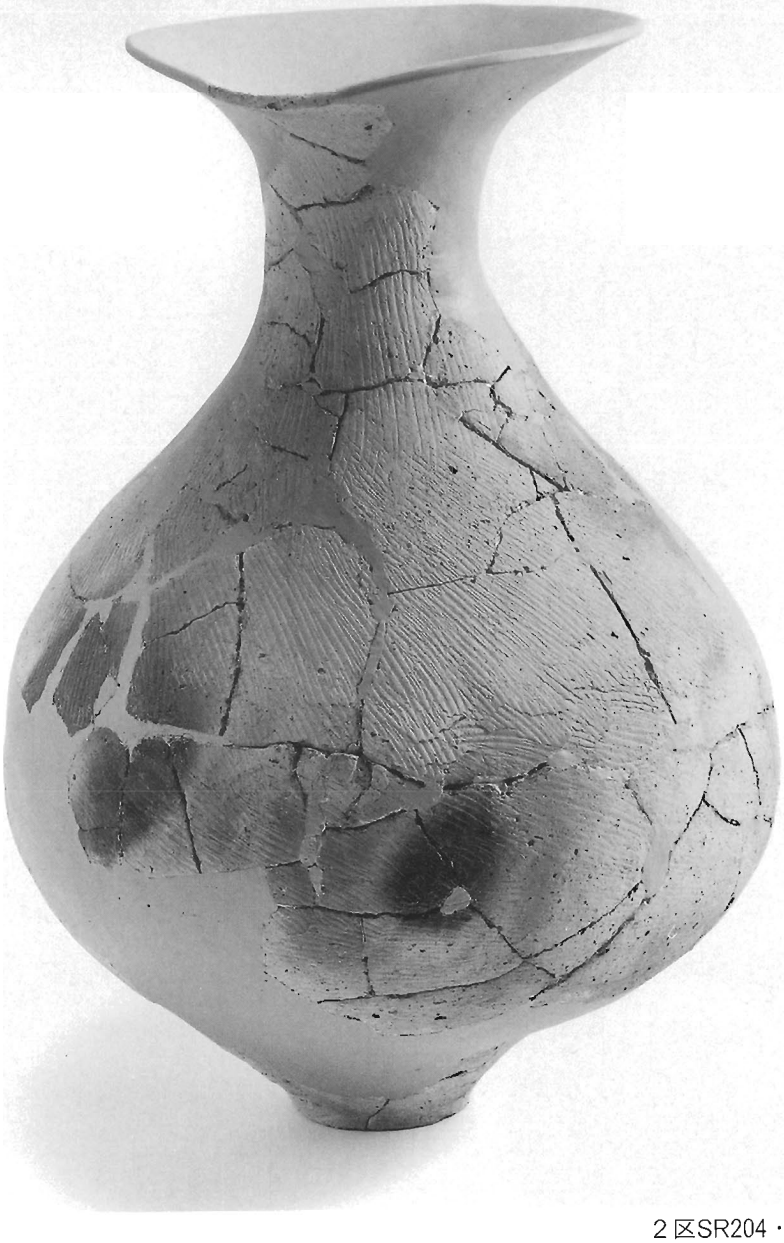
68

66

2区土手状遺構ａ・ｄ層出土土器

73

75



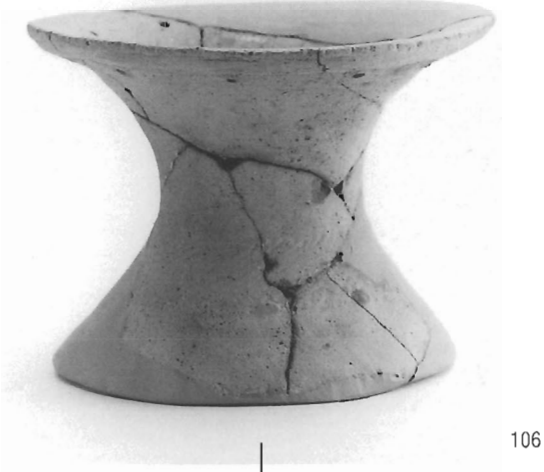
80

2区SR204・微高地出土土器

図版 36

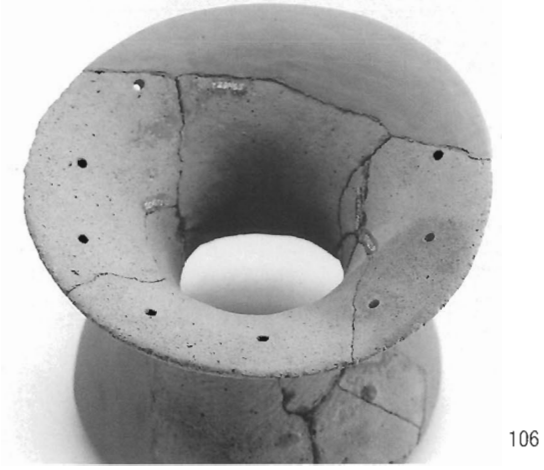
96

97



106

105



106

107

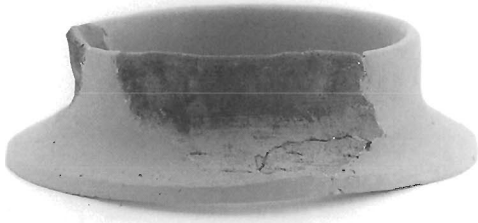
2区中期層・排水溝出土土器

103

2区22層上面出土土器

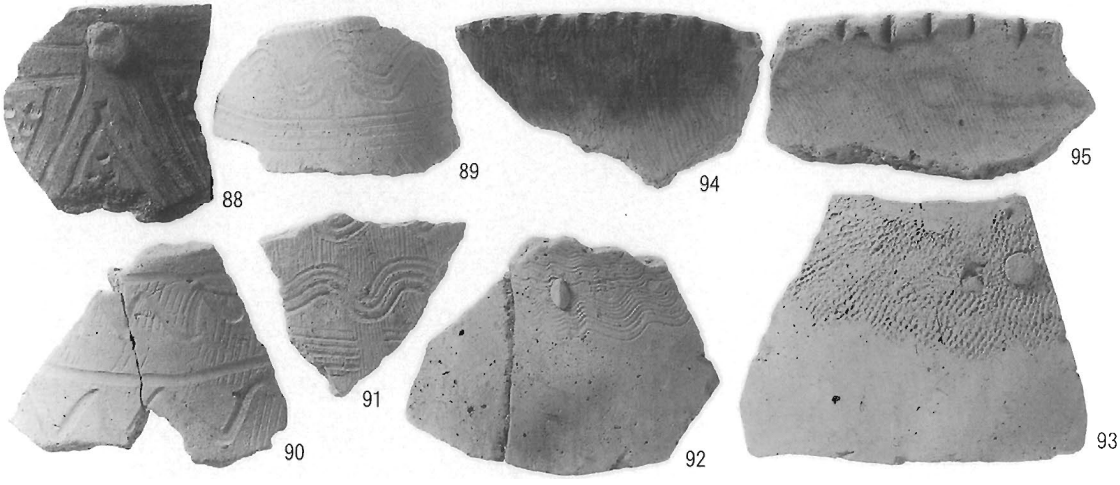
図版 38

104

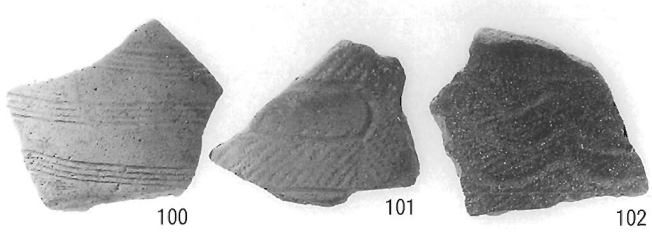


111

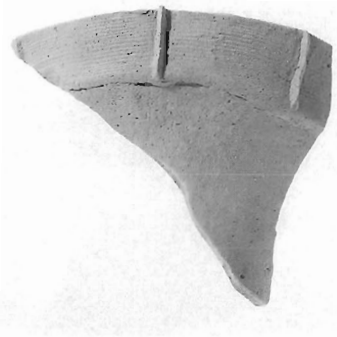
2区排水溝出土土器



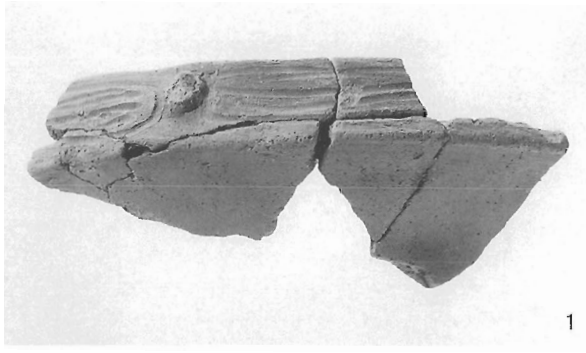
2区20層出土土器



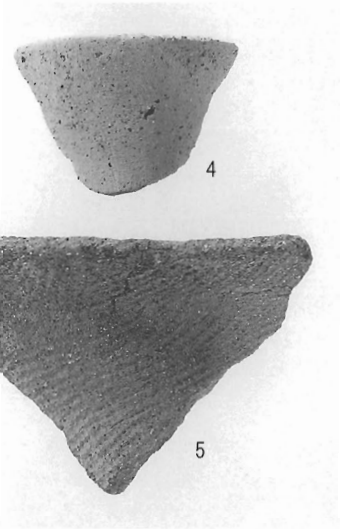
2区中期層出土土器



2

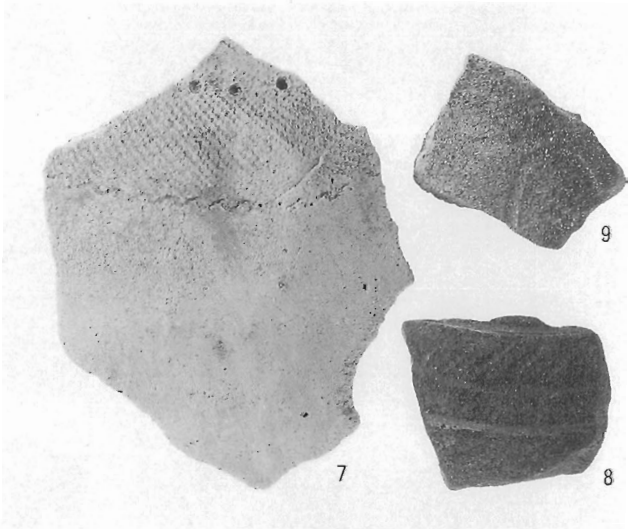


1



4

5



7

9

8

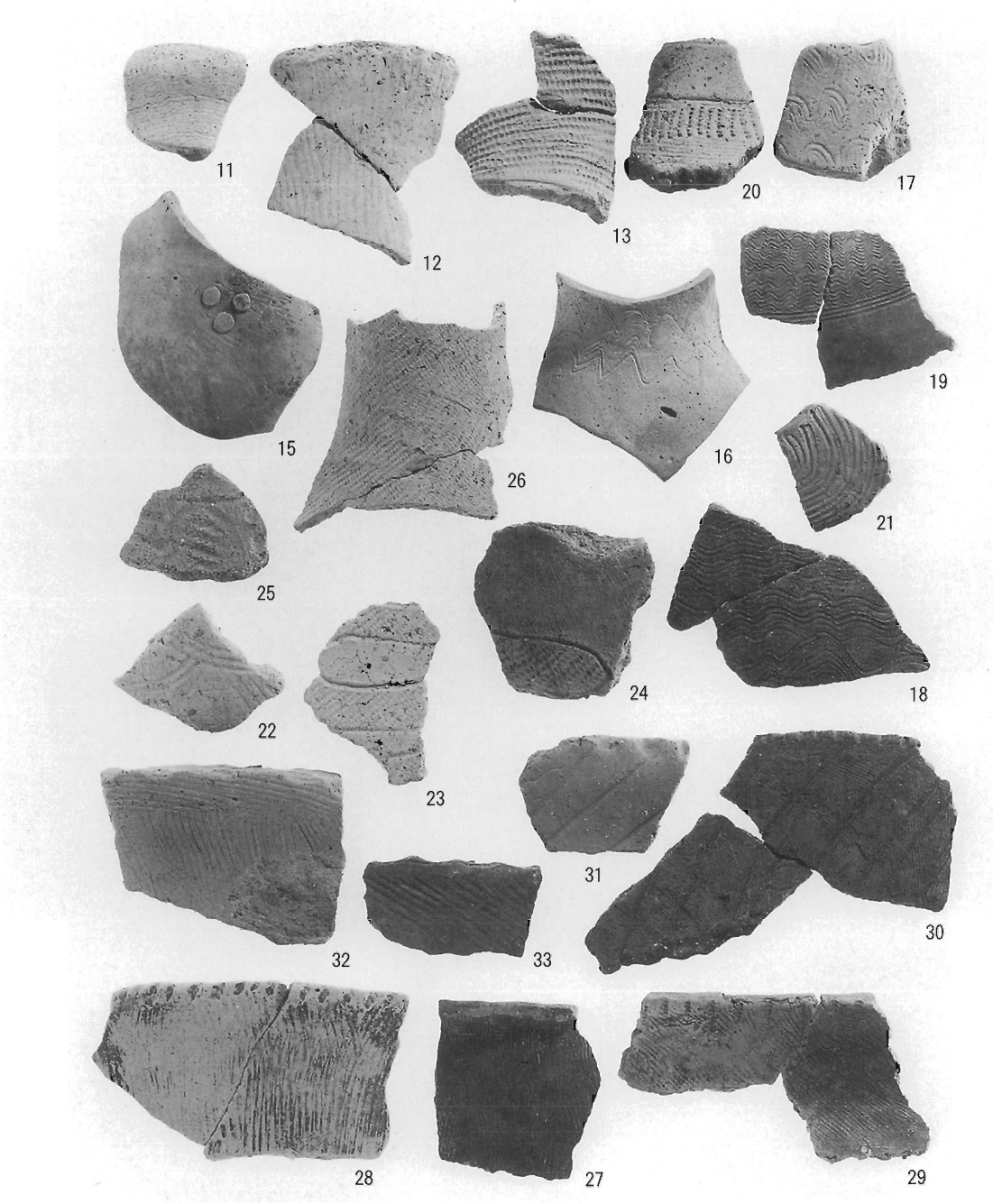
38

39

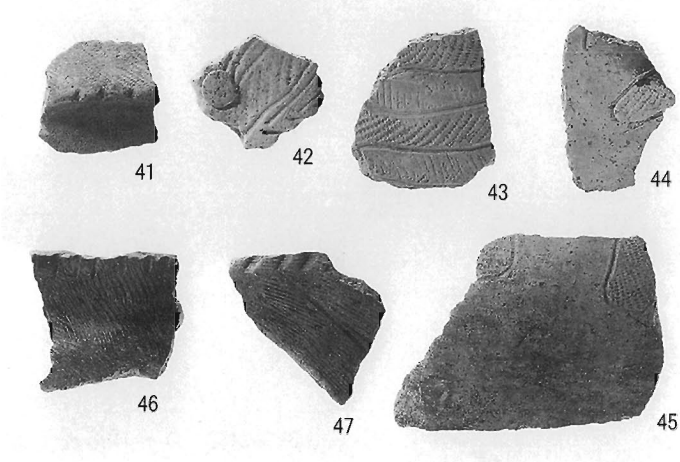
40

3区SK306・7～10層出土土器

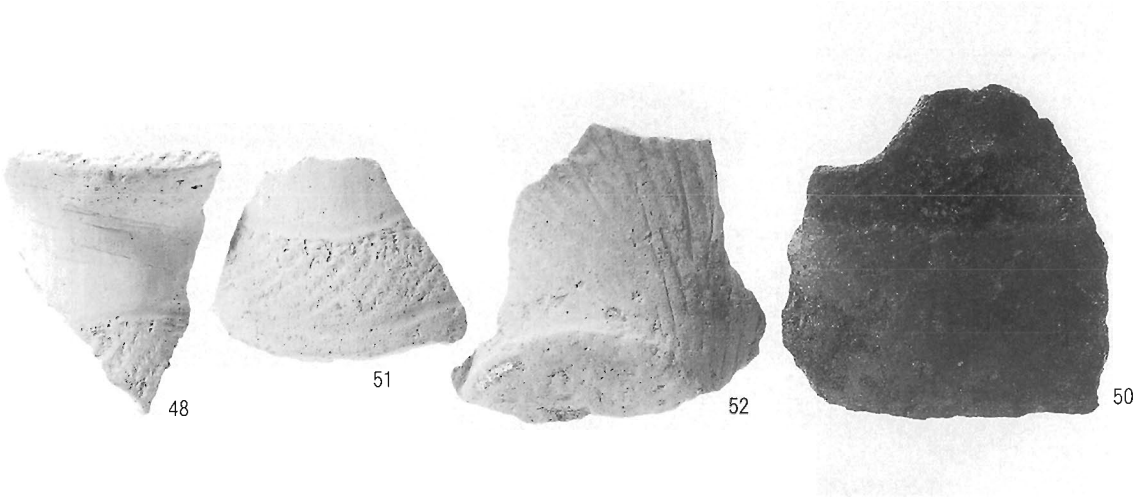
図版 40



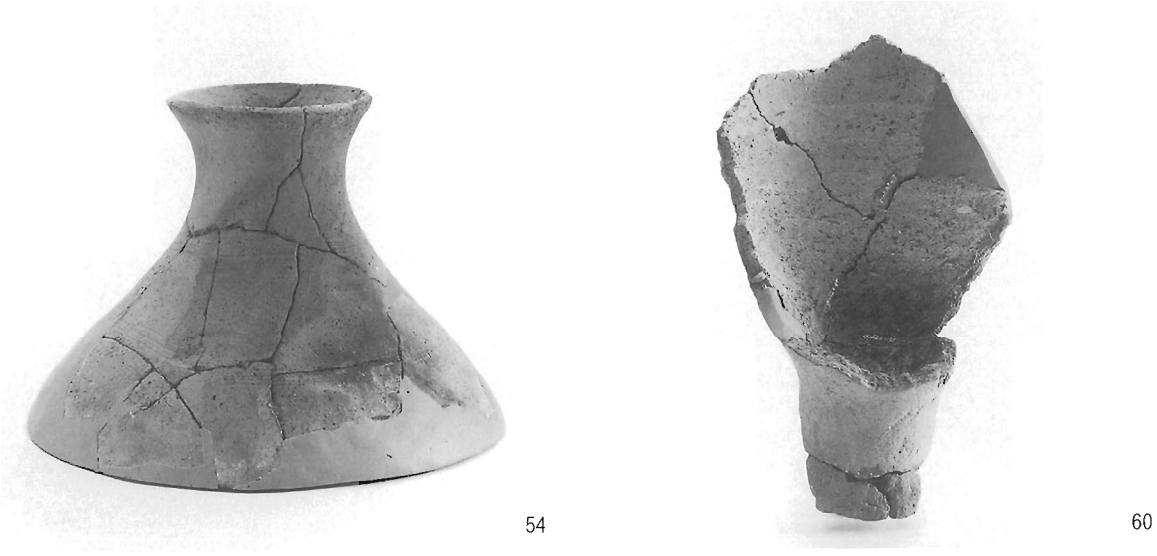
３区９～10層出土土器

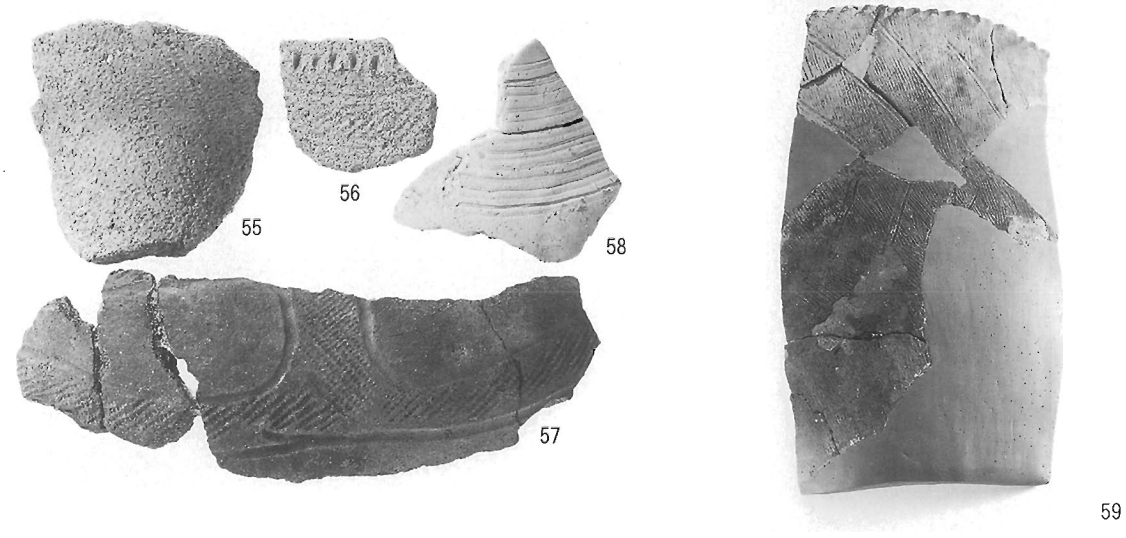


３区SD301出土土器



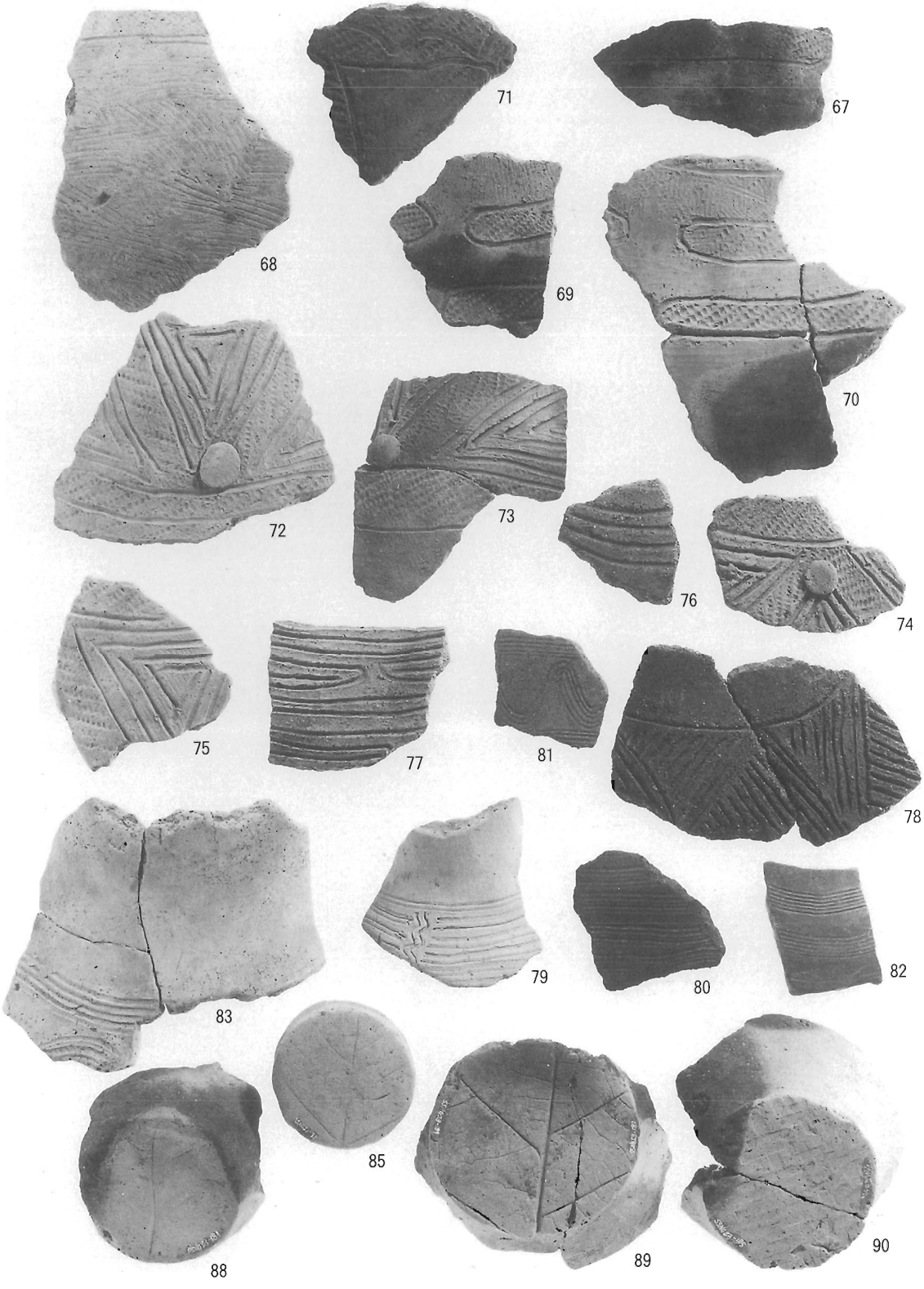
3区SD304出土土器



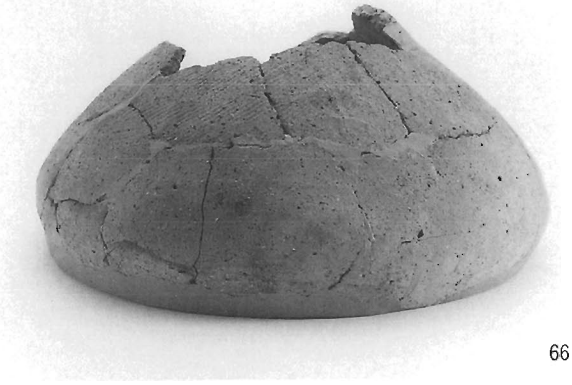


3区11層出土土器

図版 42



3区12層出土土器①



66

62

91

92

95

96

3区12層出土土器②

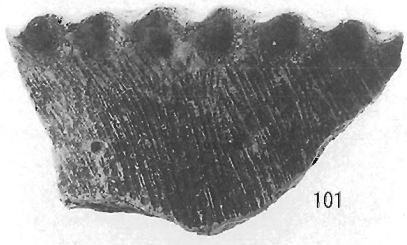
図版 44

97

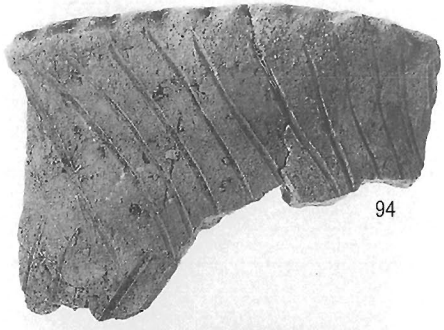
99

109

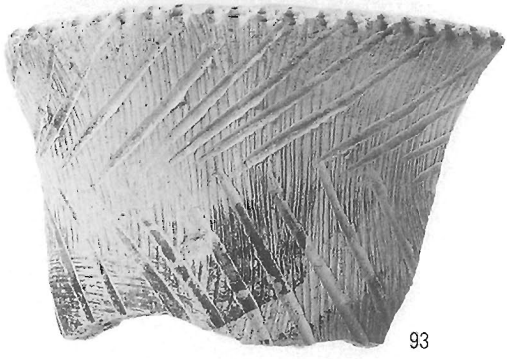
102



101



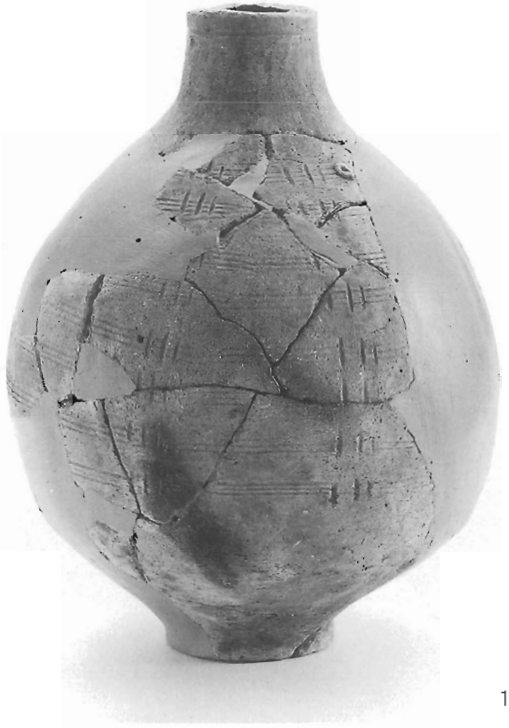
94



93

98

3区12層出土土器③



124

117

123

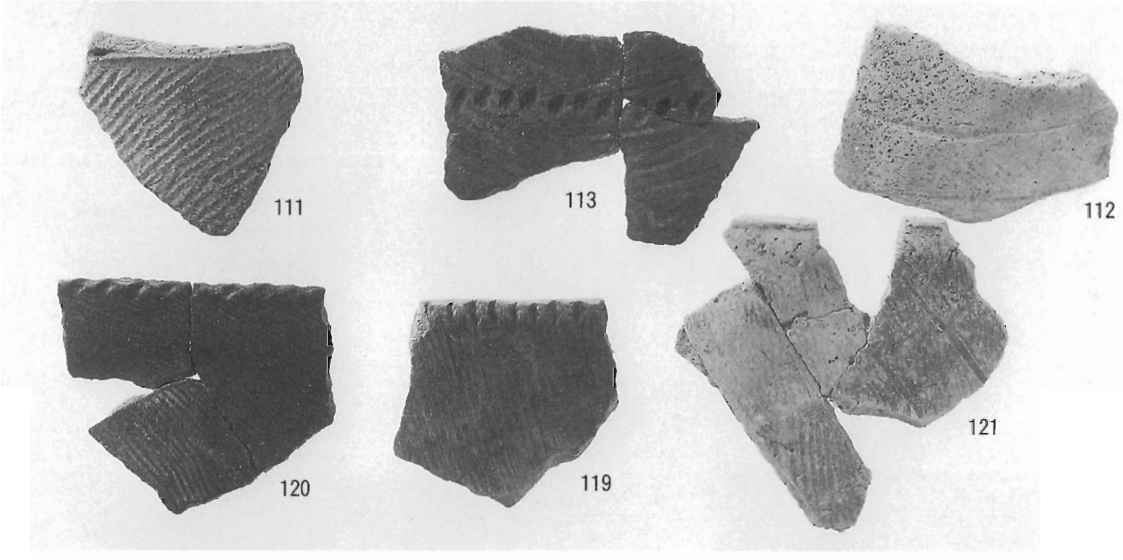
118

122

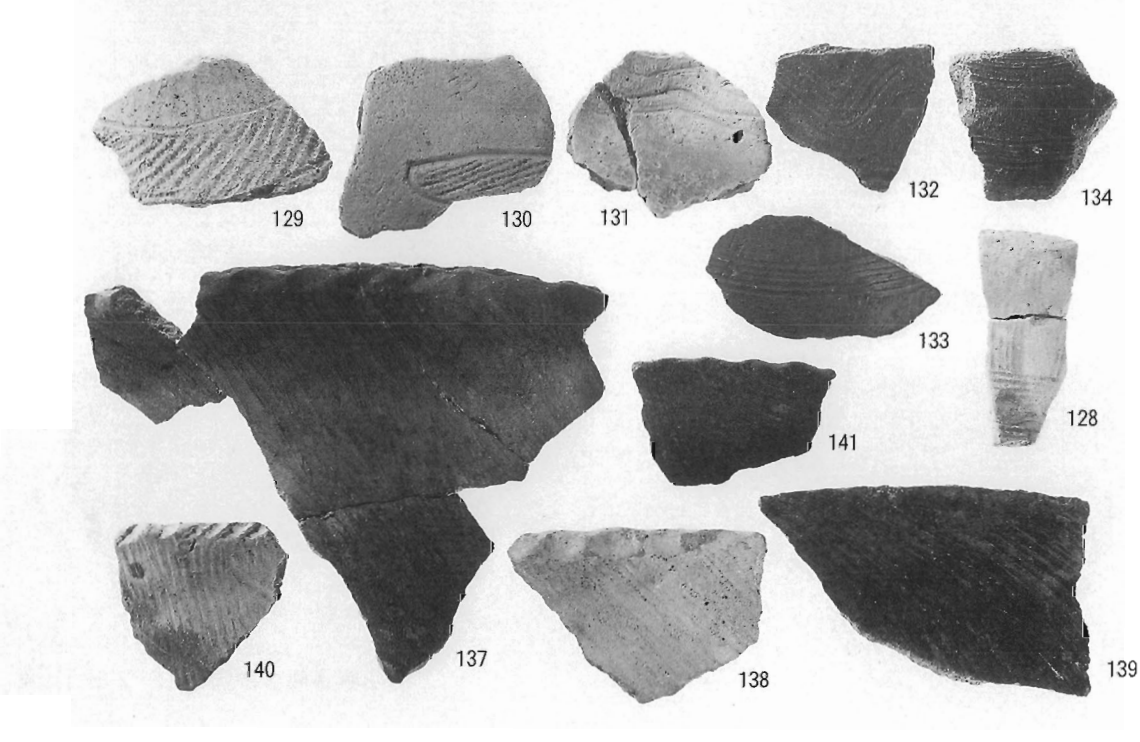
3区遺物集中箇所１・２出土土器

図版 46

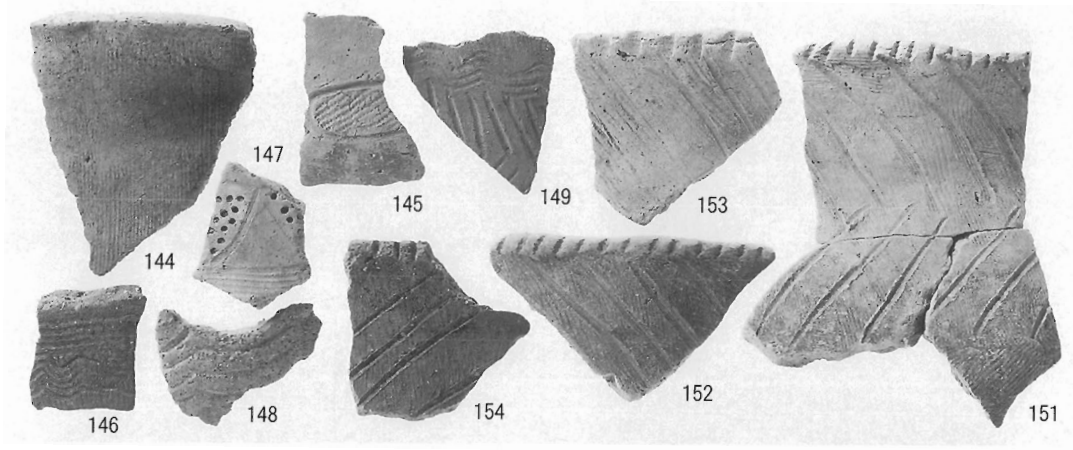
125　３区遺物集中箇所２出土土器

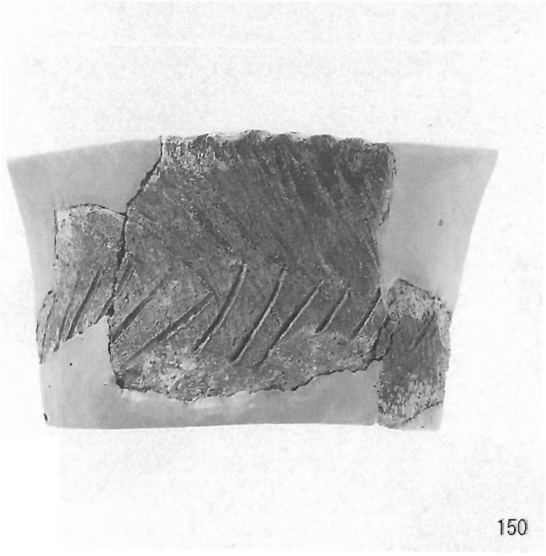


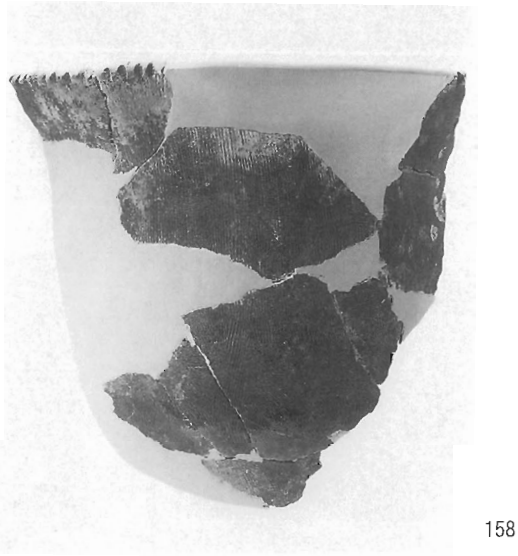
３区遺物集中箇所１出土土器

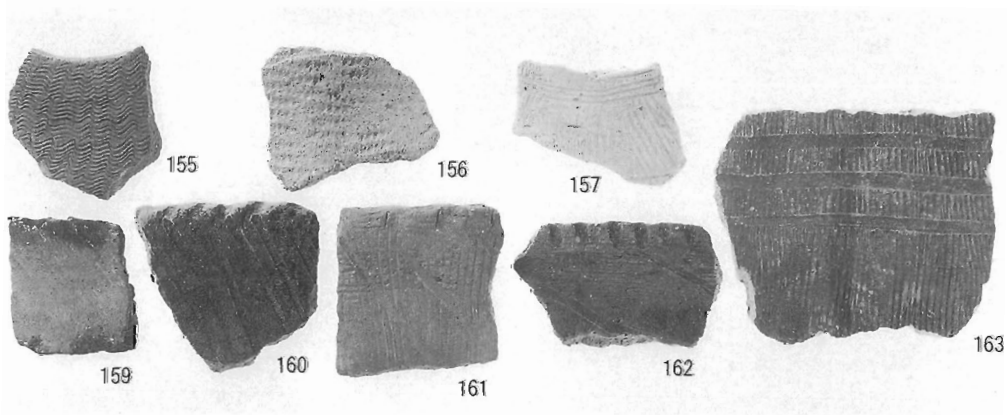


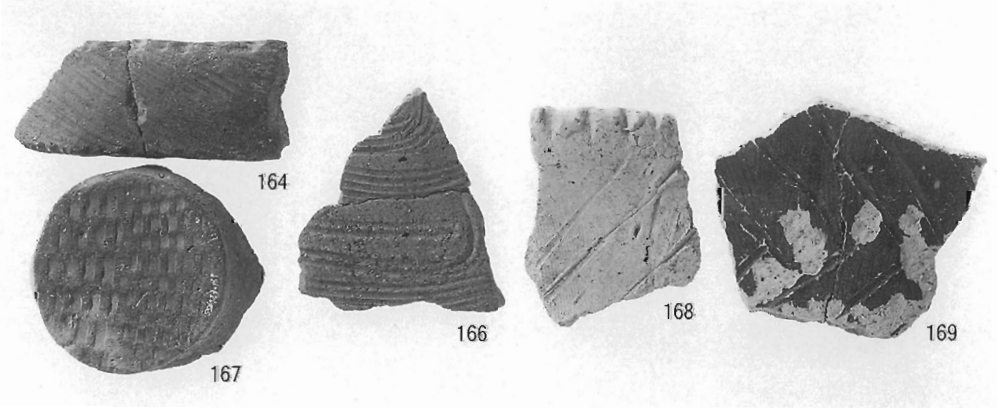
３区SD307直上層出土土器





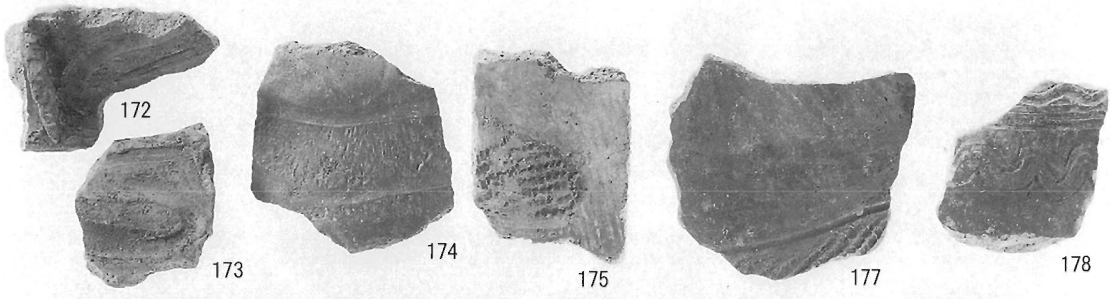


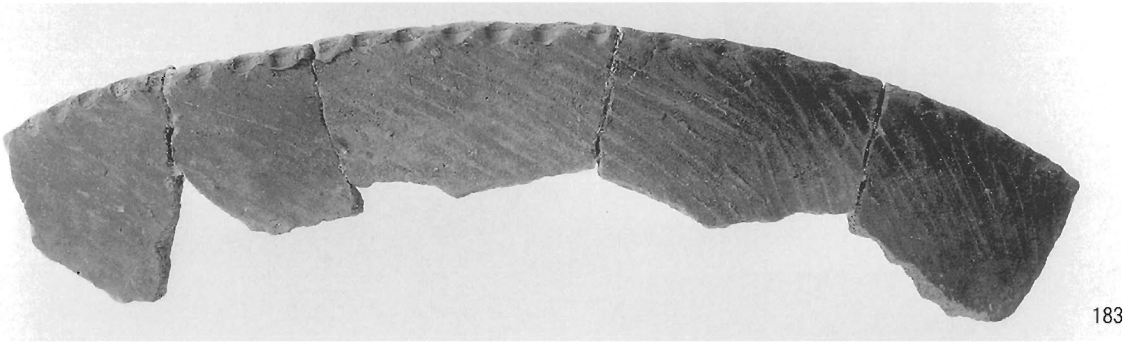


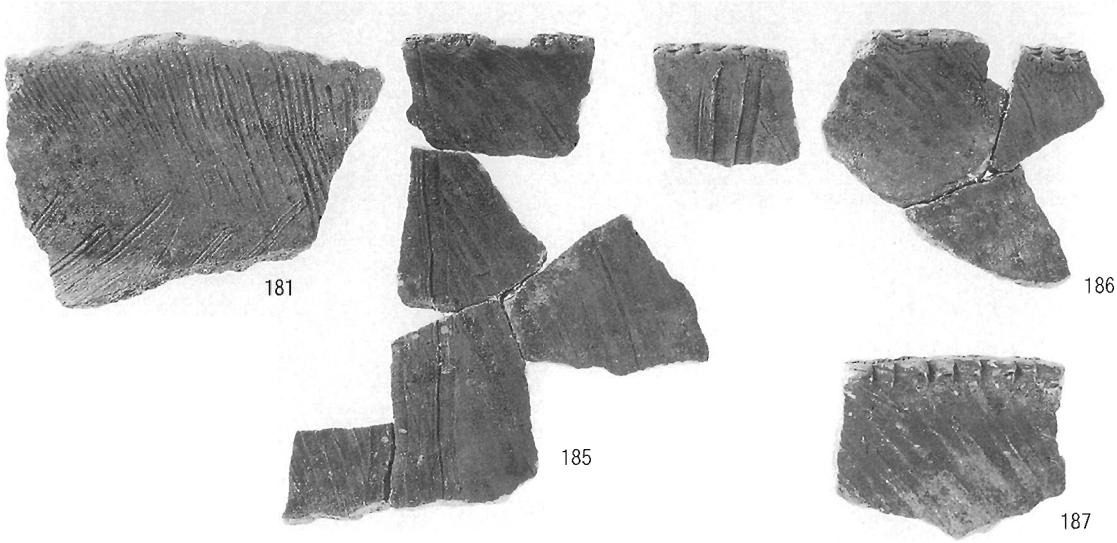


3区13～14層・SD305・306出土土器

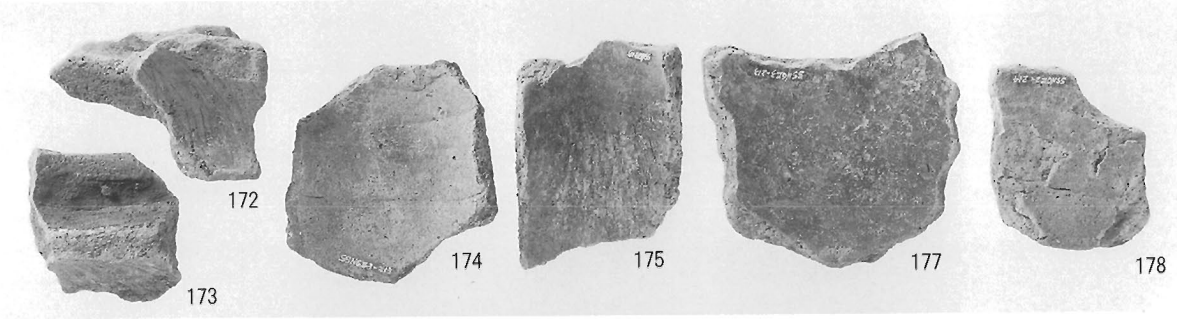
図版 48

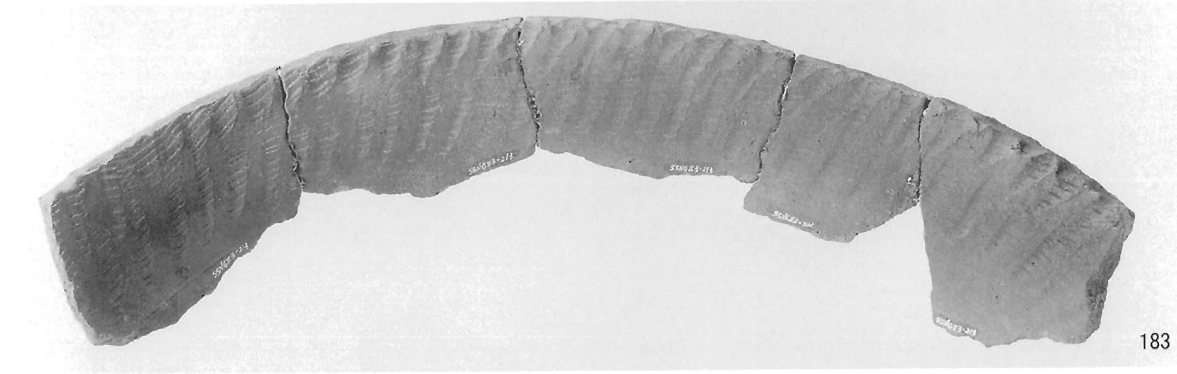


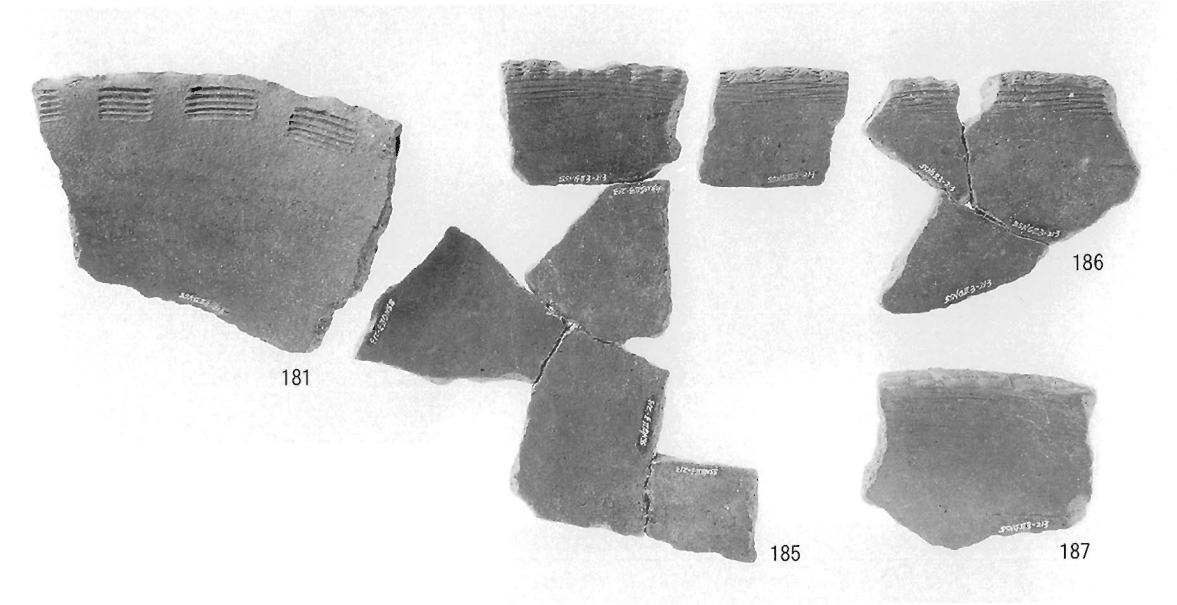


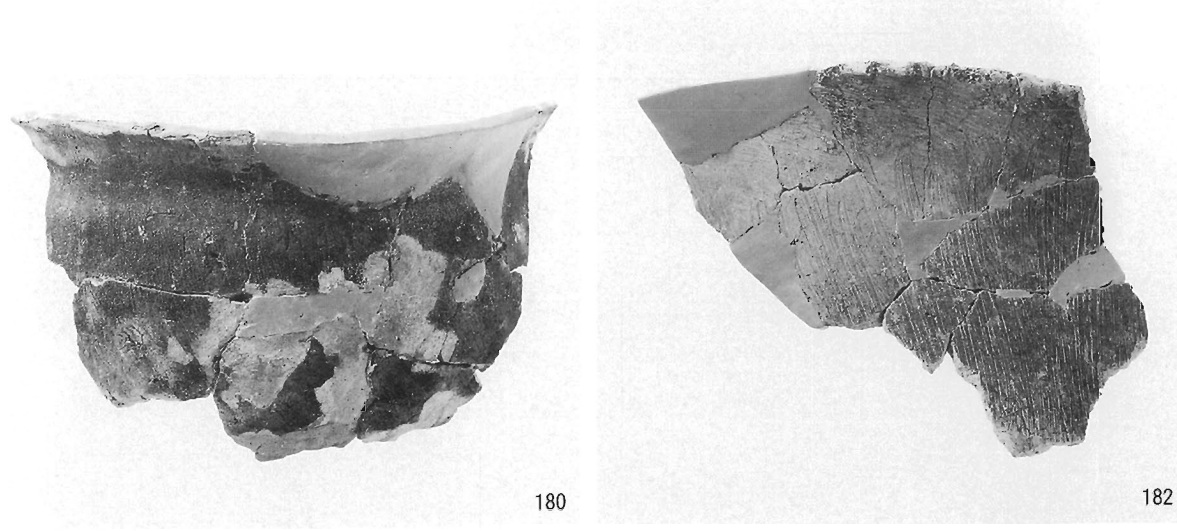


3区SD307出土土器①



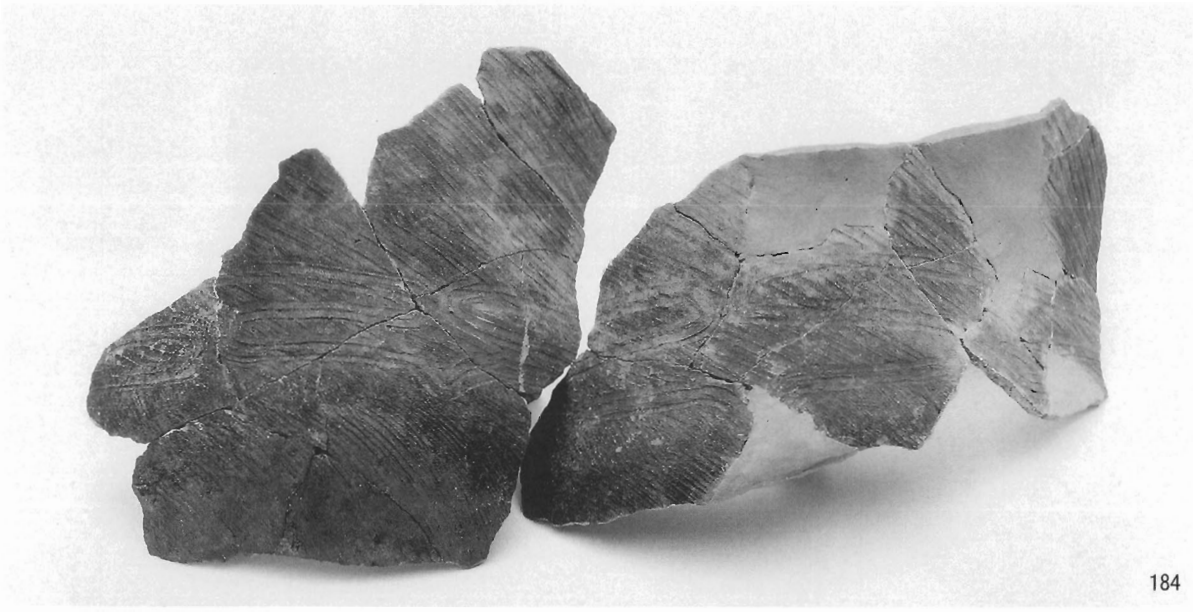




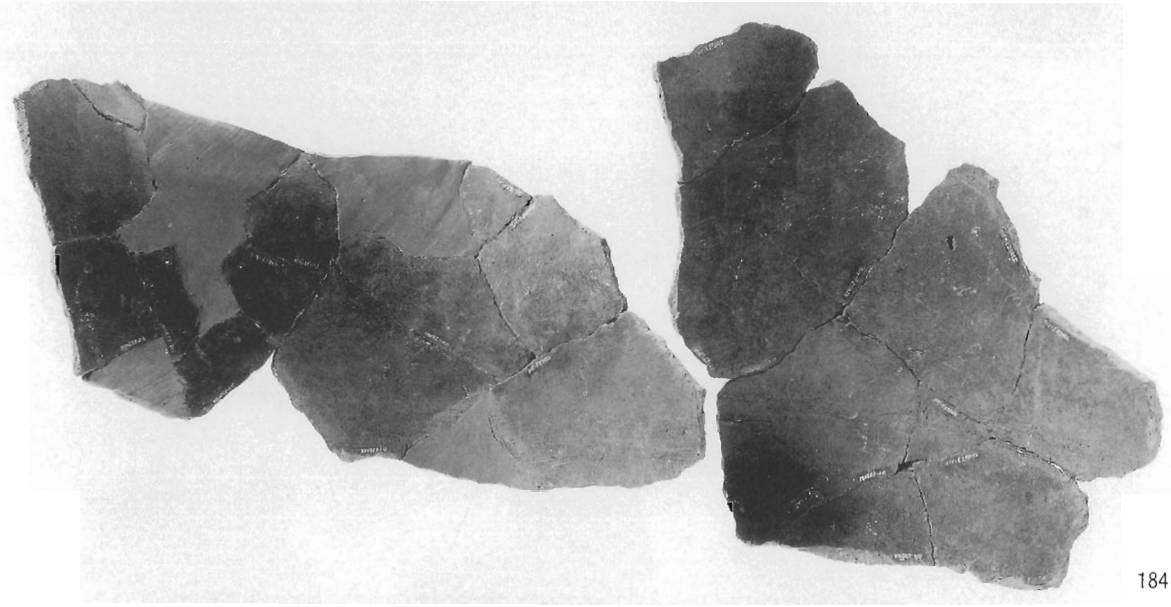


3区SD307出土土器②

図版 50



184



184

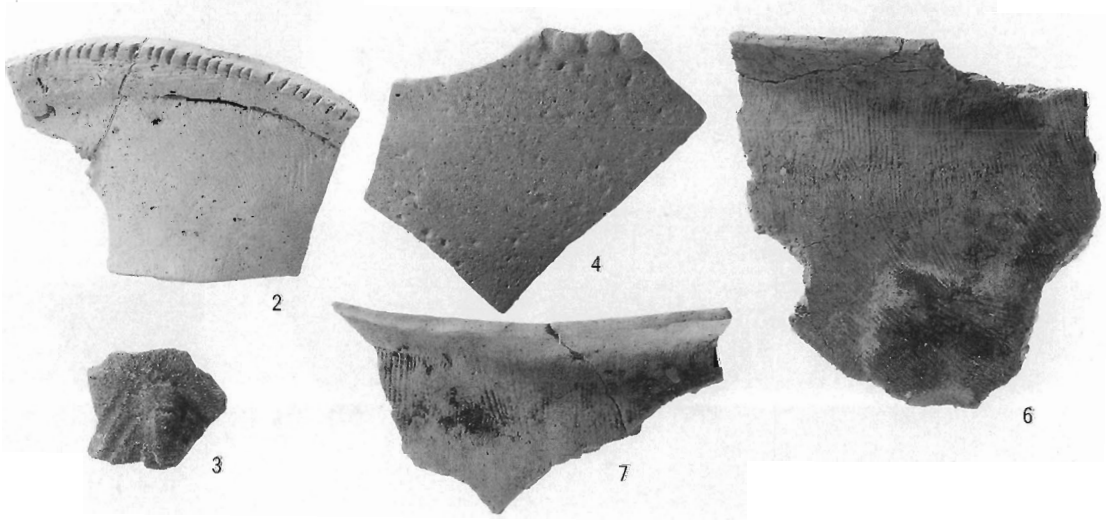
3区SD307出土土器③

19

23

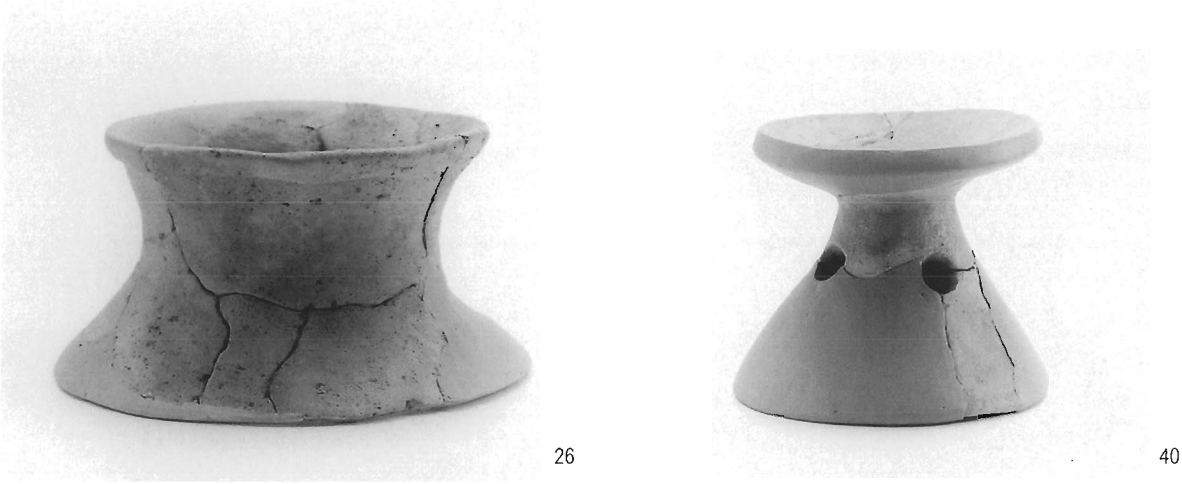
22

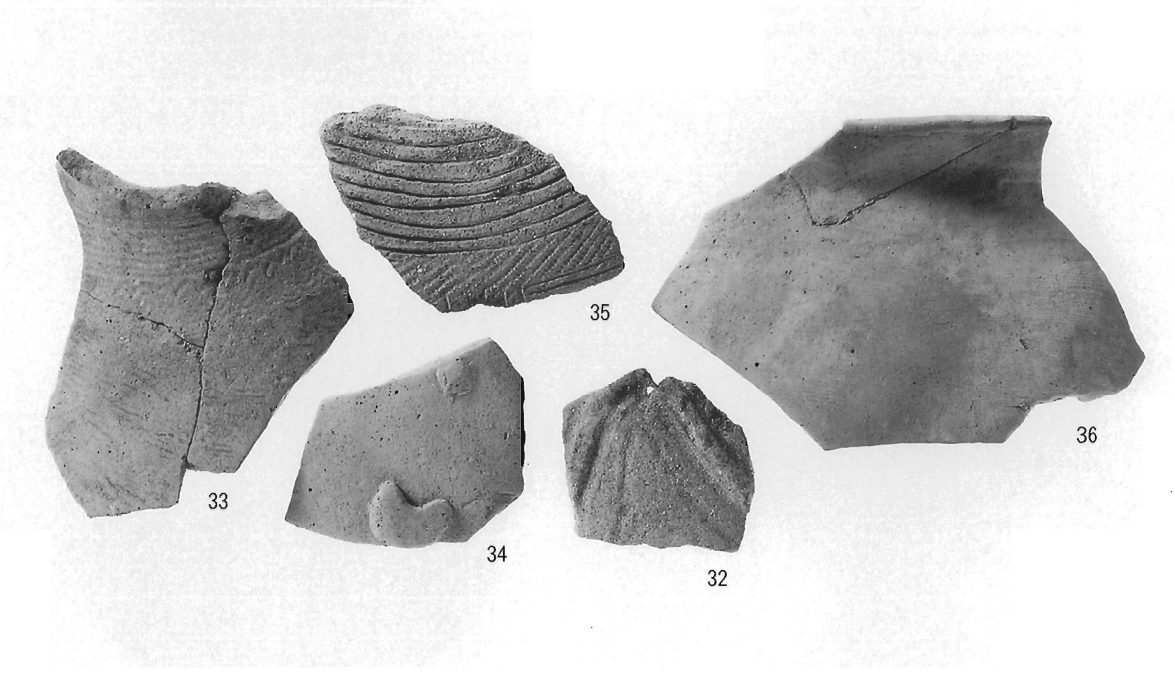
24

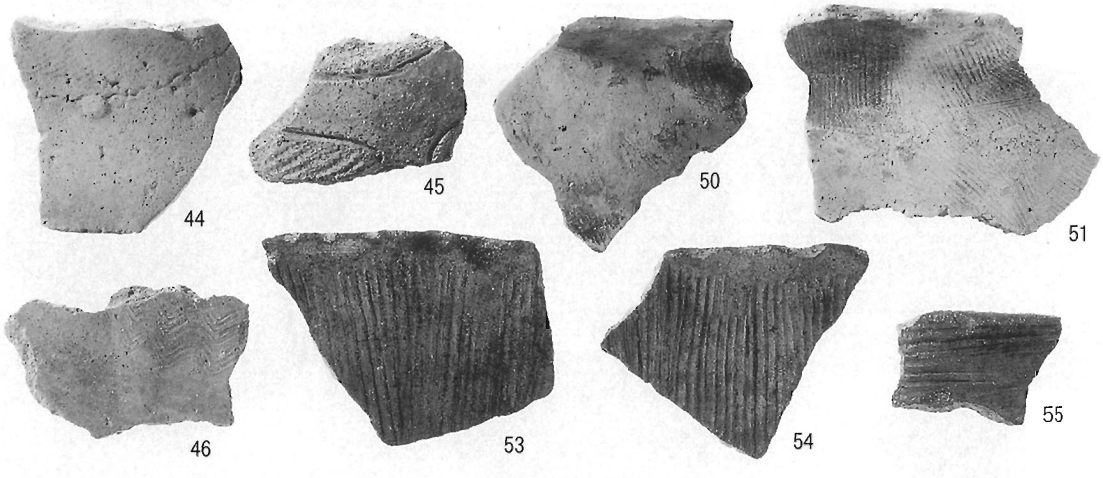


5－1区砂利層・15～17層出土土器

図版 52

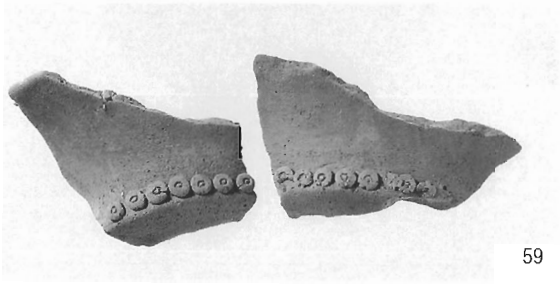






５－１区17層上層・下層出土土器

58



59

64

63

67

5－1区SD501・502・SP501出土土器

図版 54

2

4

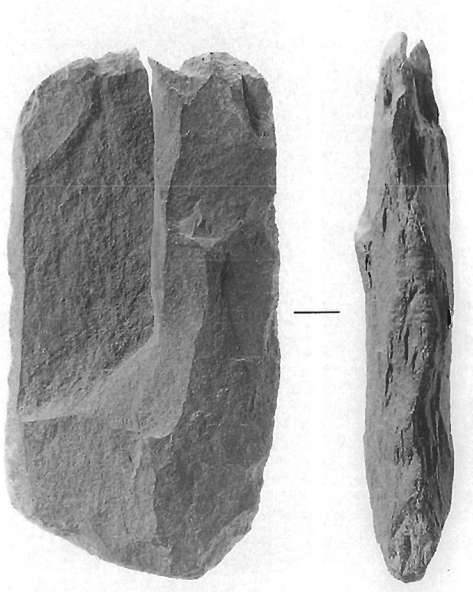
6

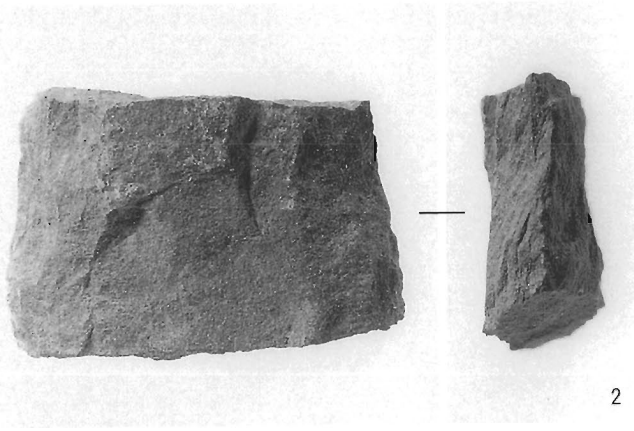
13

10

16

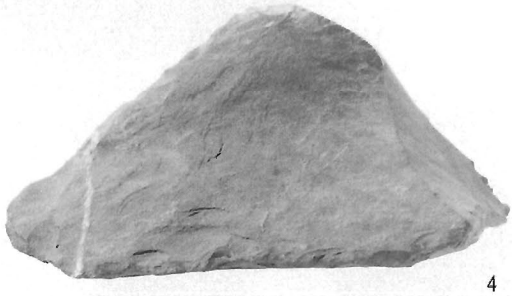
５－２区出土土器



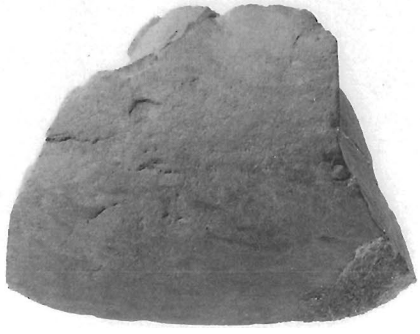


1　打製石斧

3



4

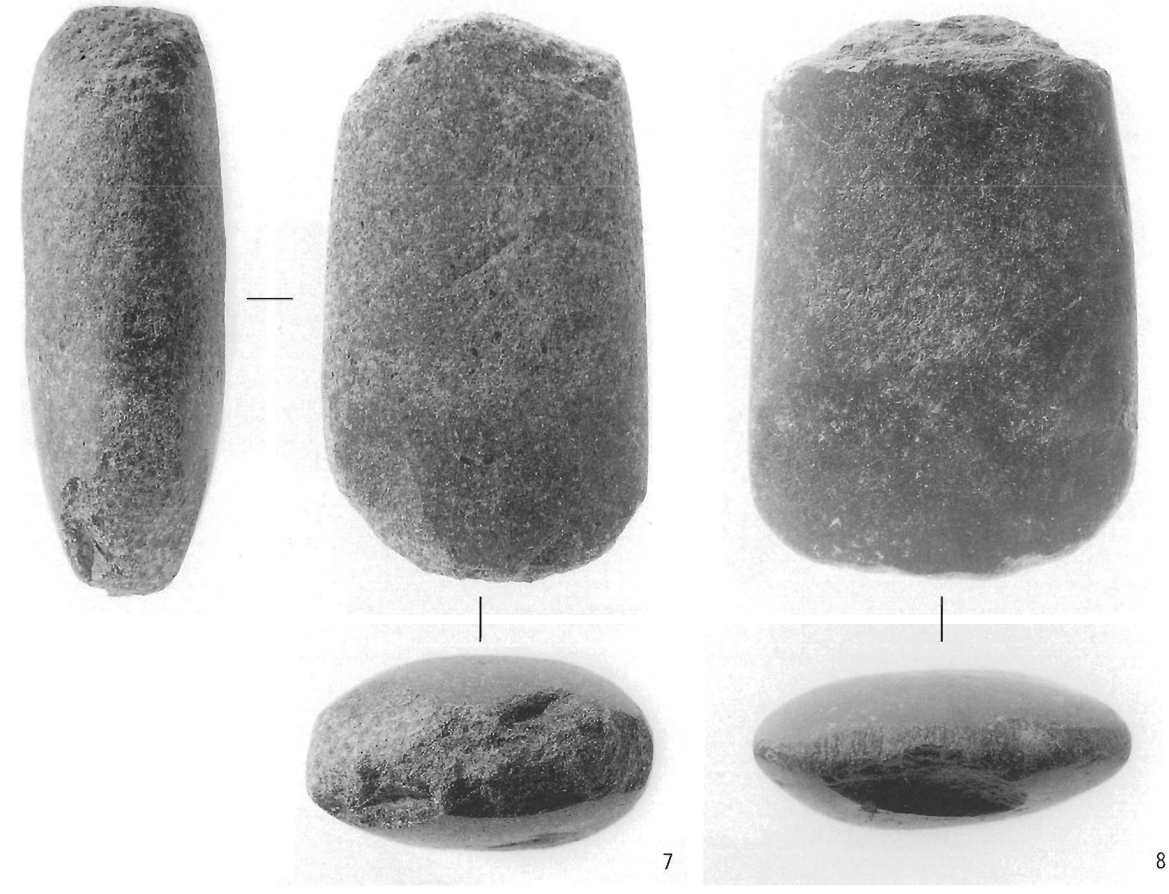


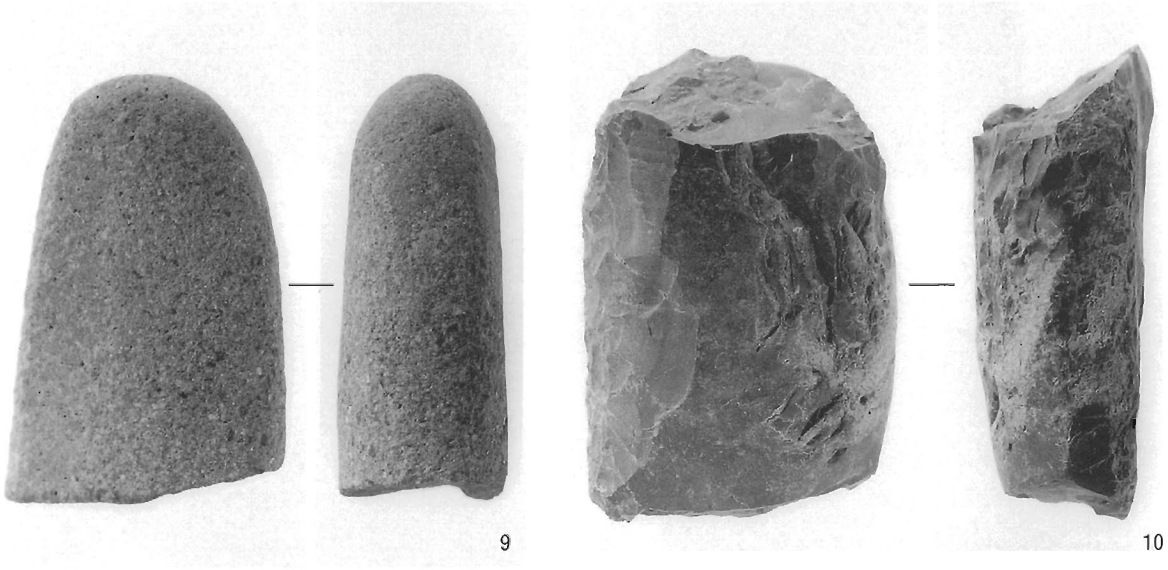
5

6

打製刃器

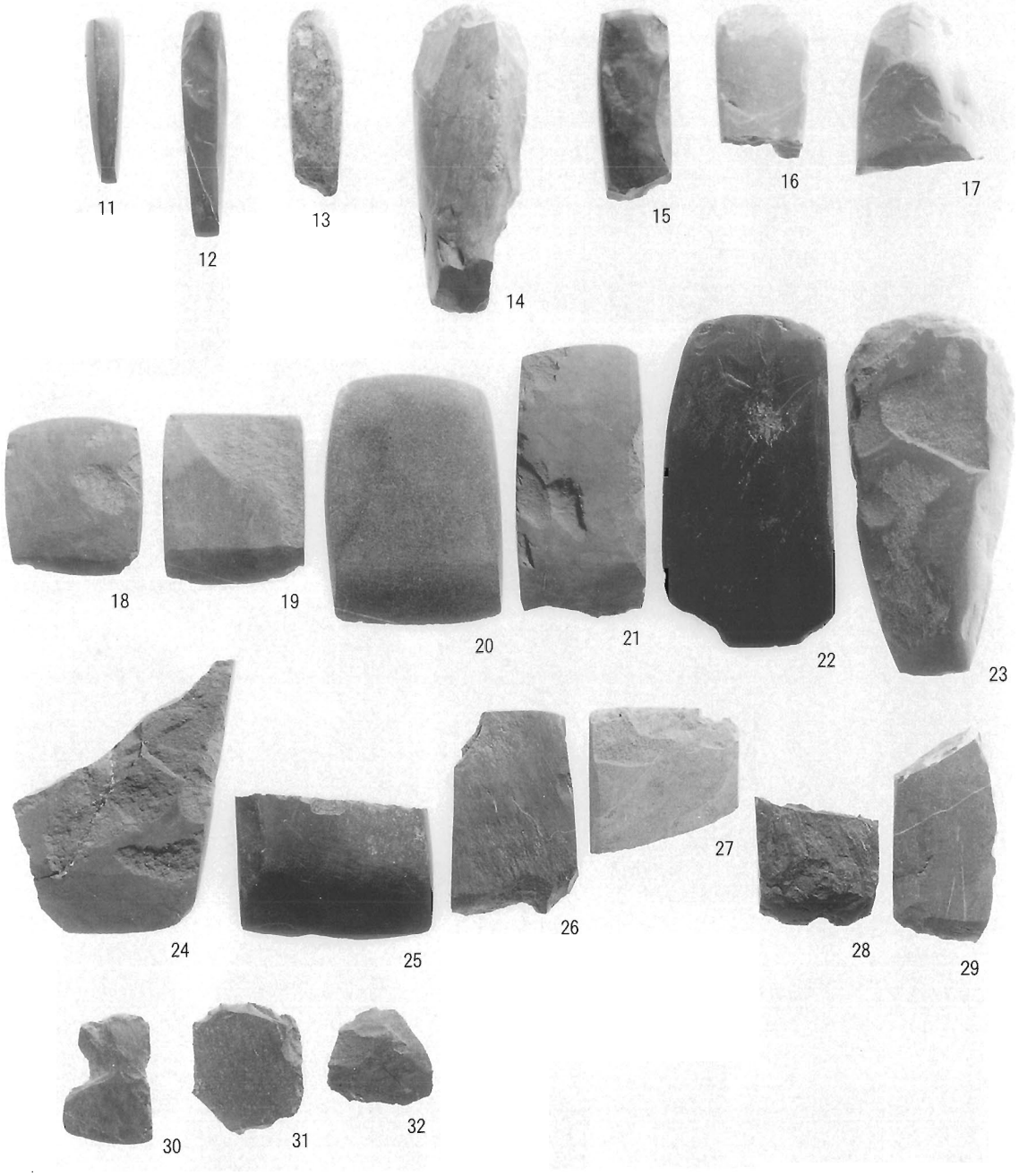
図版 56

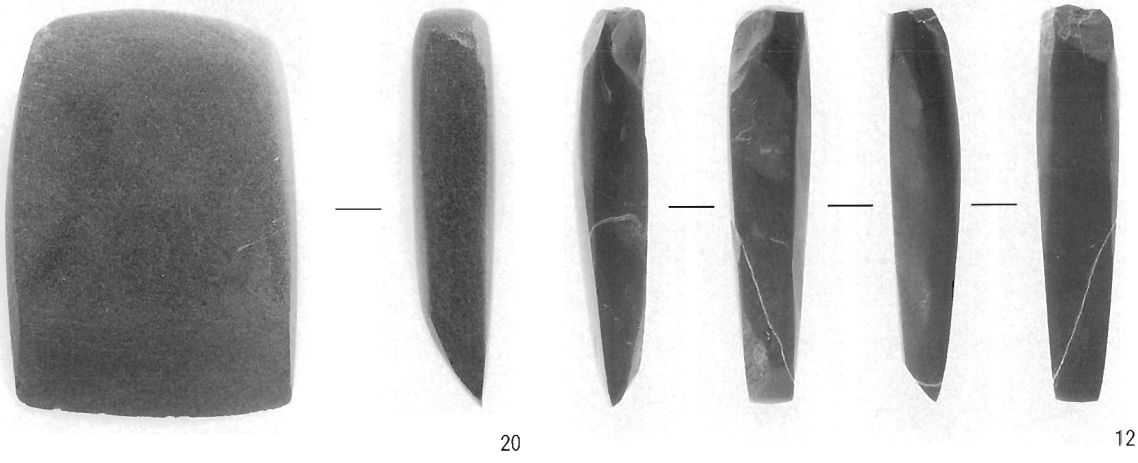




両刃石斧

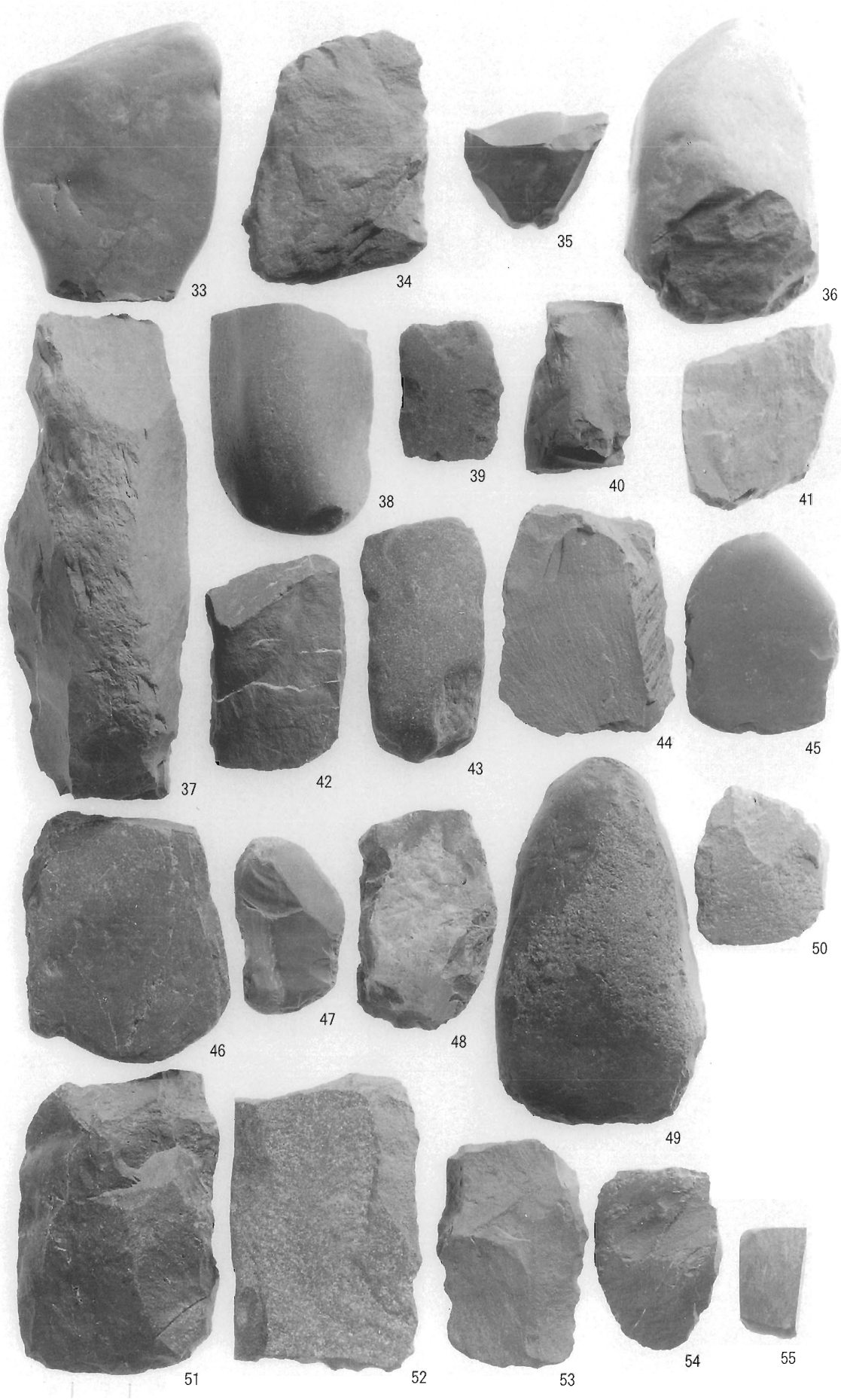
3-116　磨製石鏃



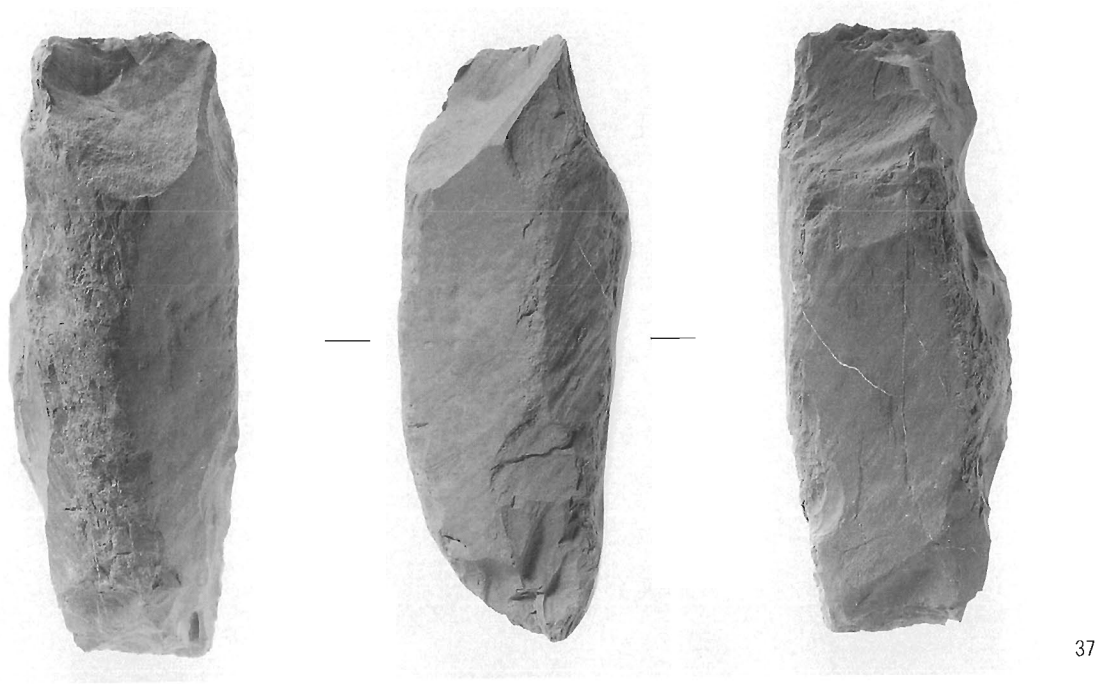


片刃石斧

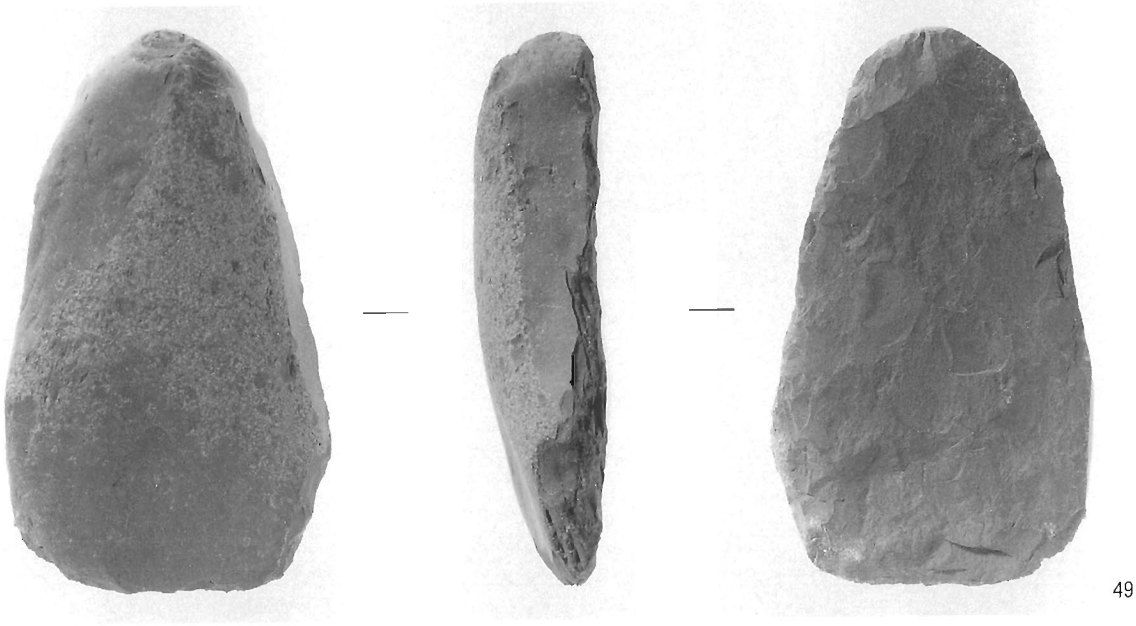
図版 58



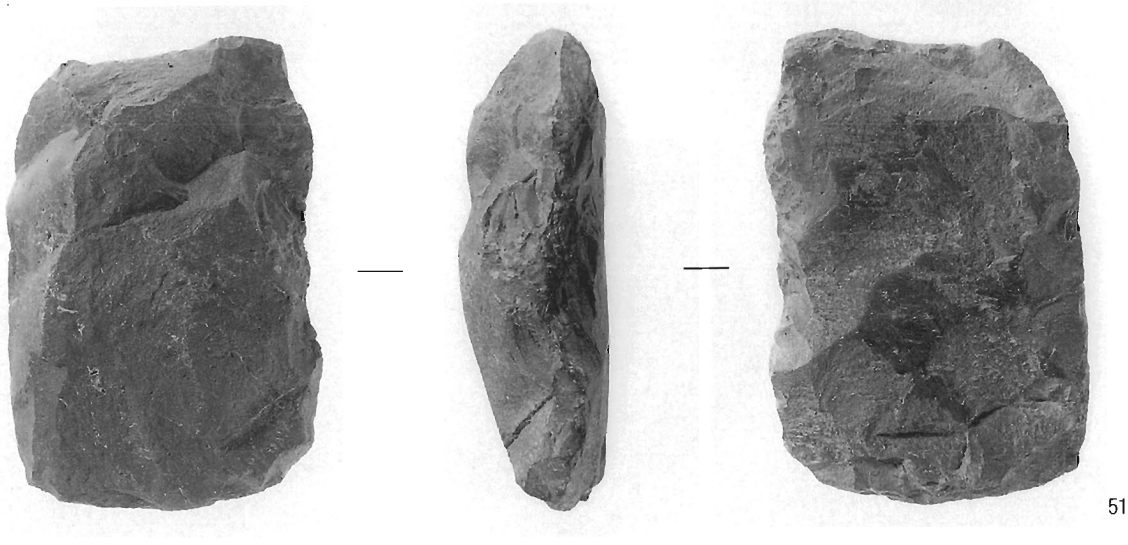
片刃石斧（未製品①）



37



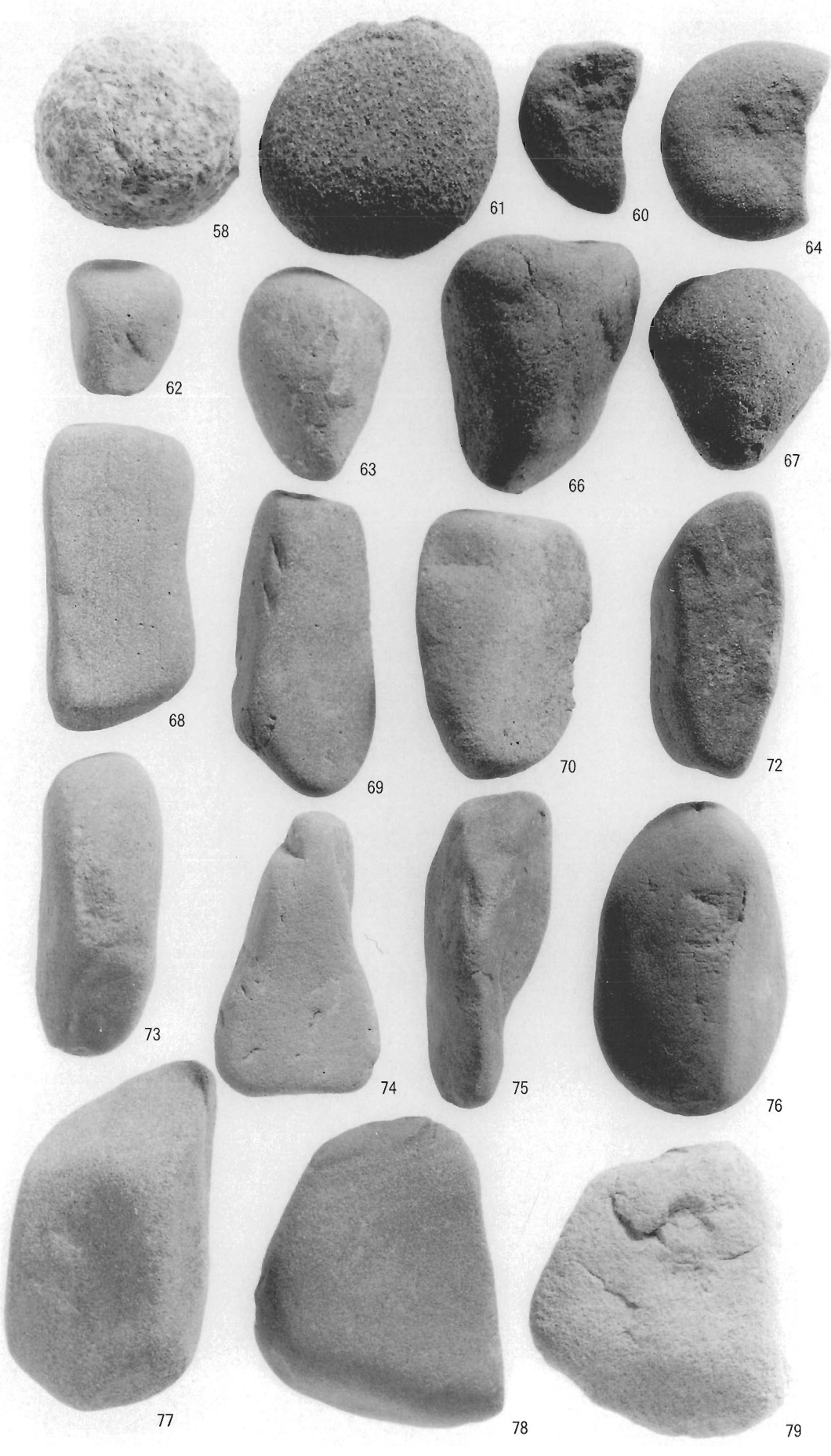
49



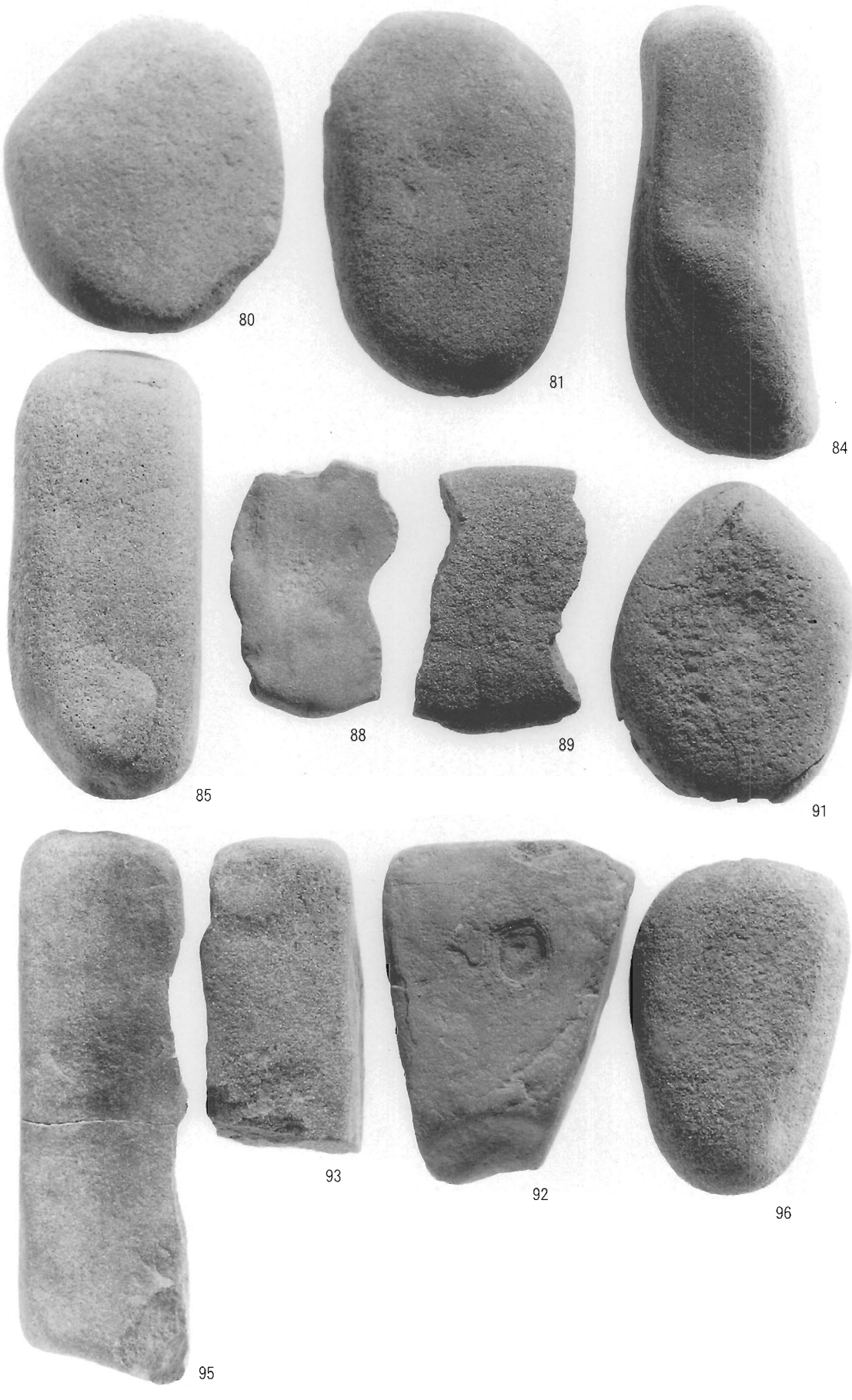
51

片刃石斧（未製品②）

図版 60

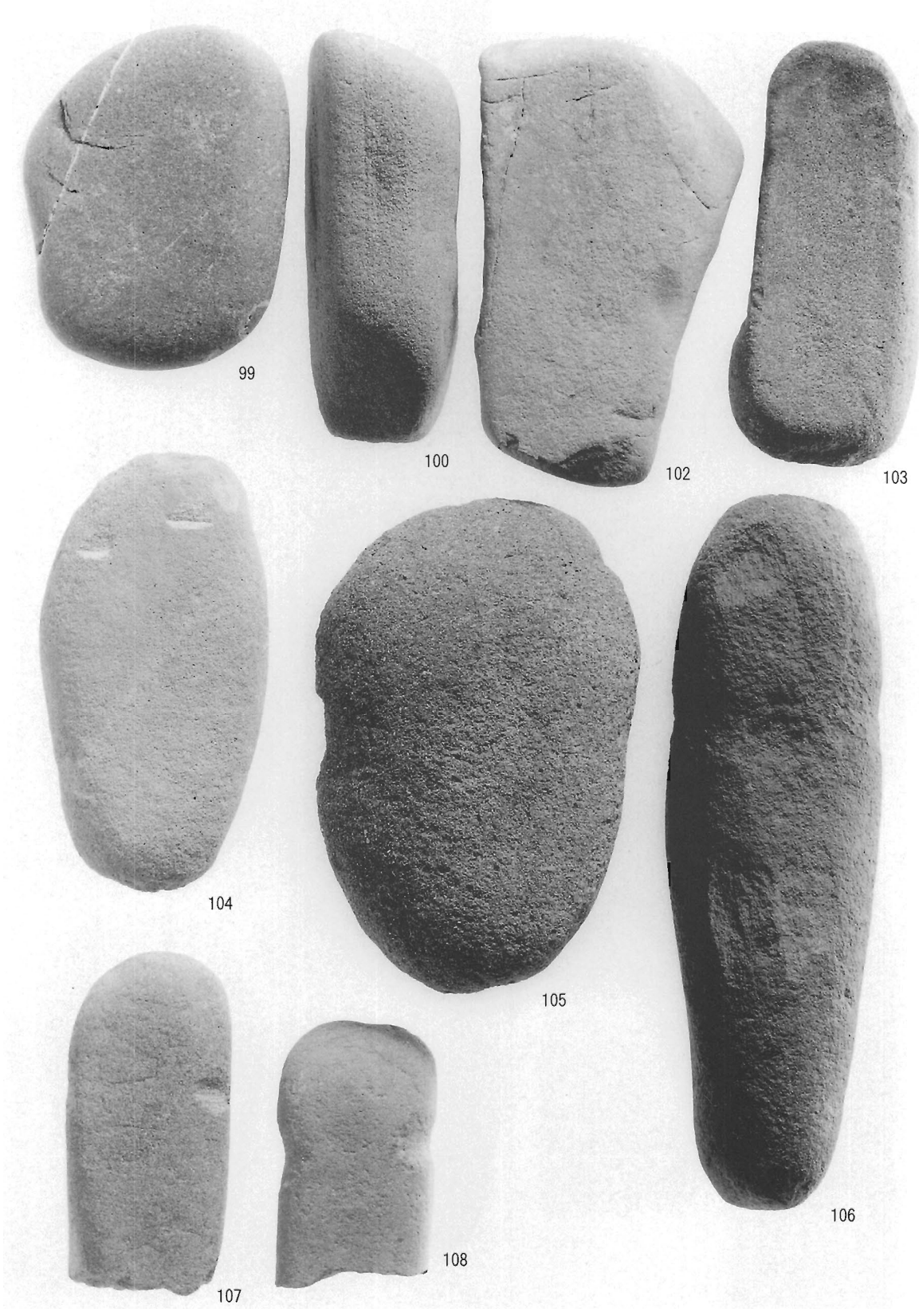


敲打石①

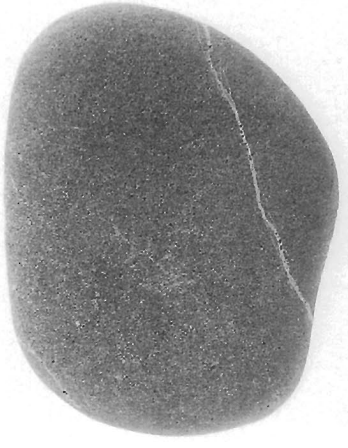


敲打石②

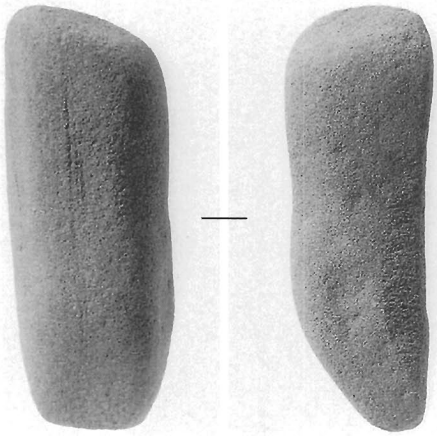
図版 62



敲打石③



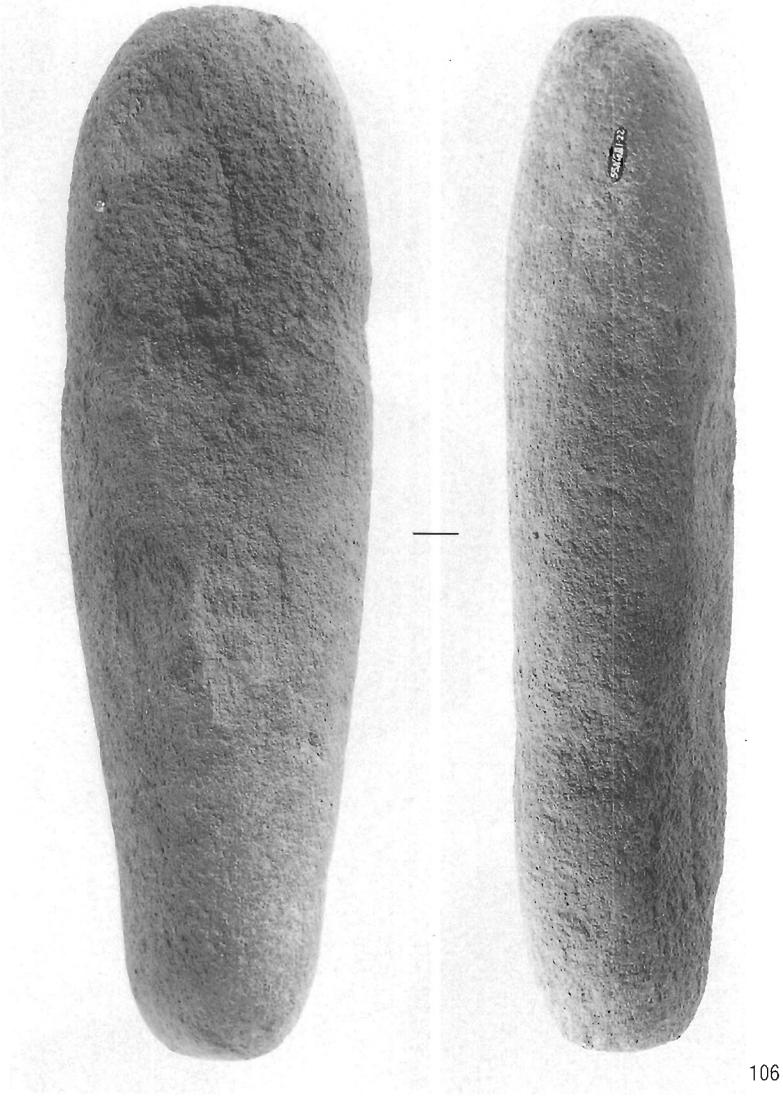
99



100

102

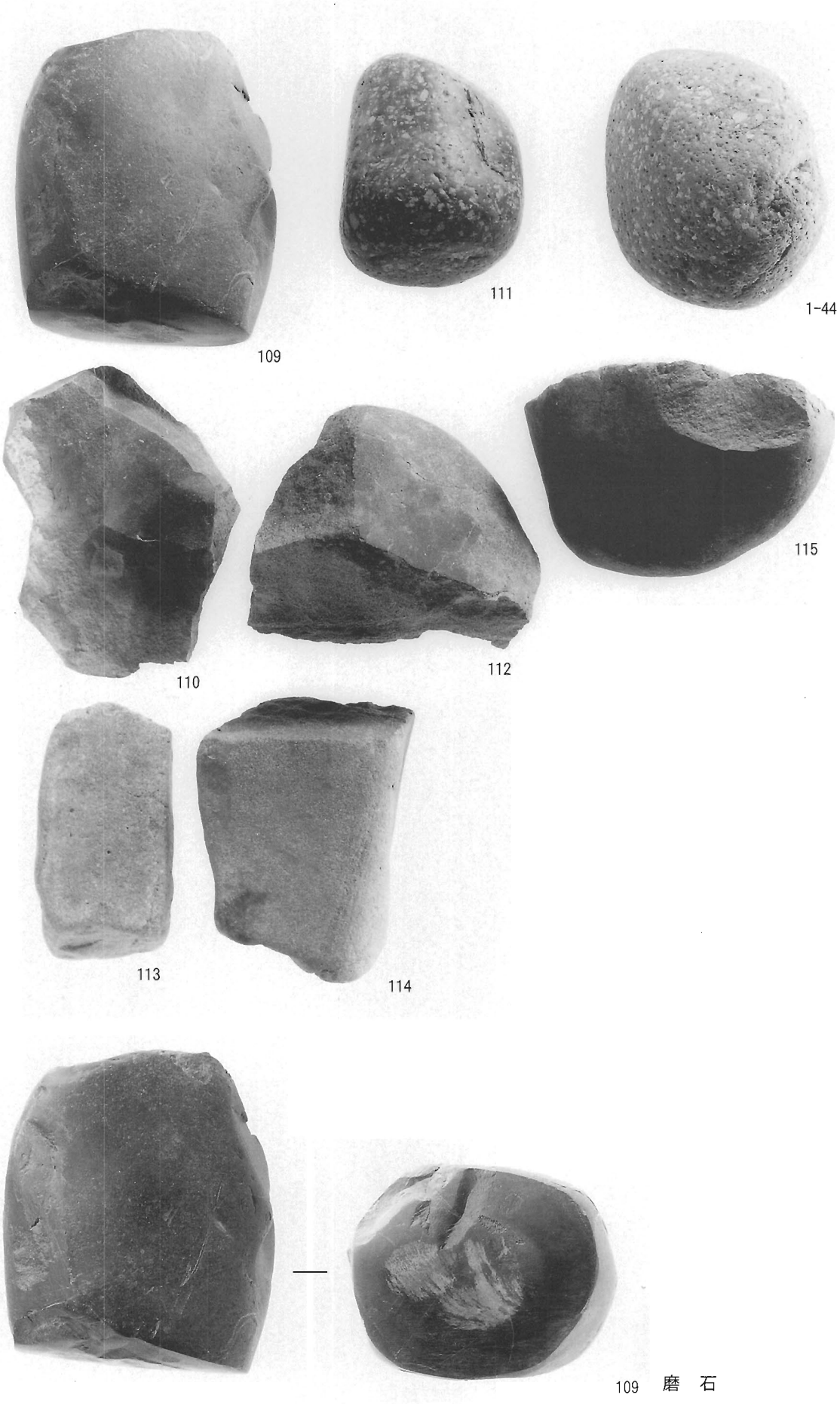
103



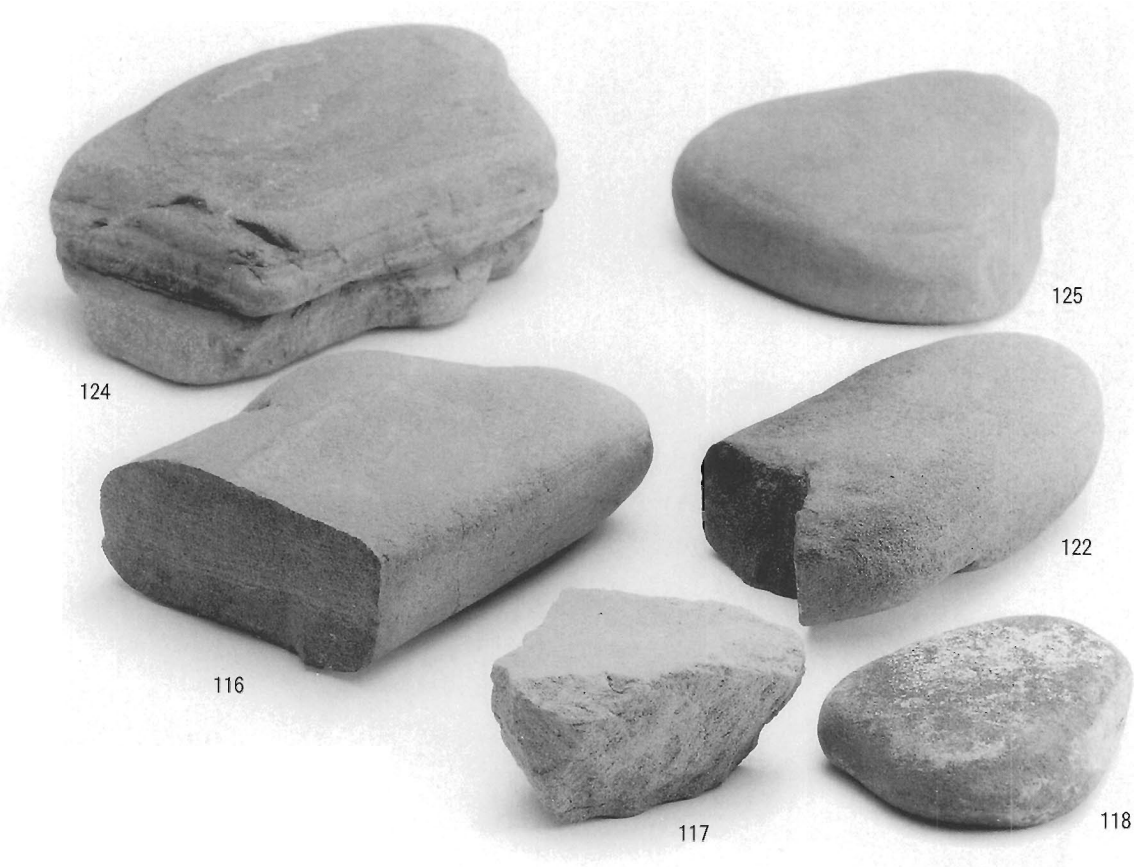
106

敲打石④

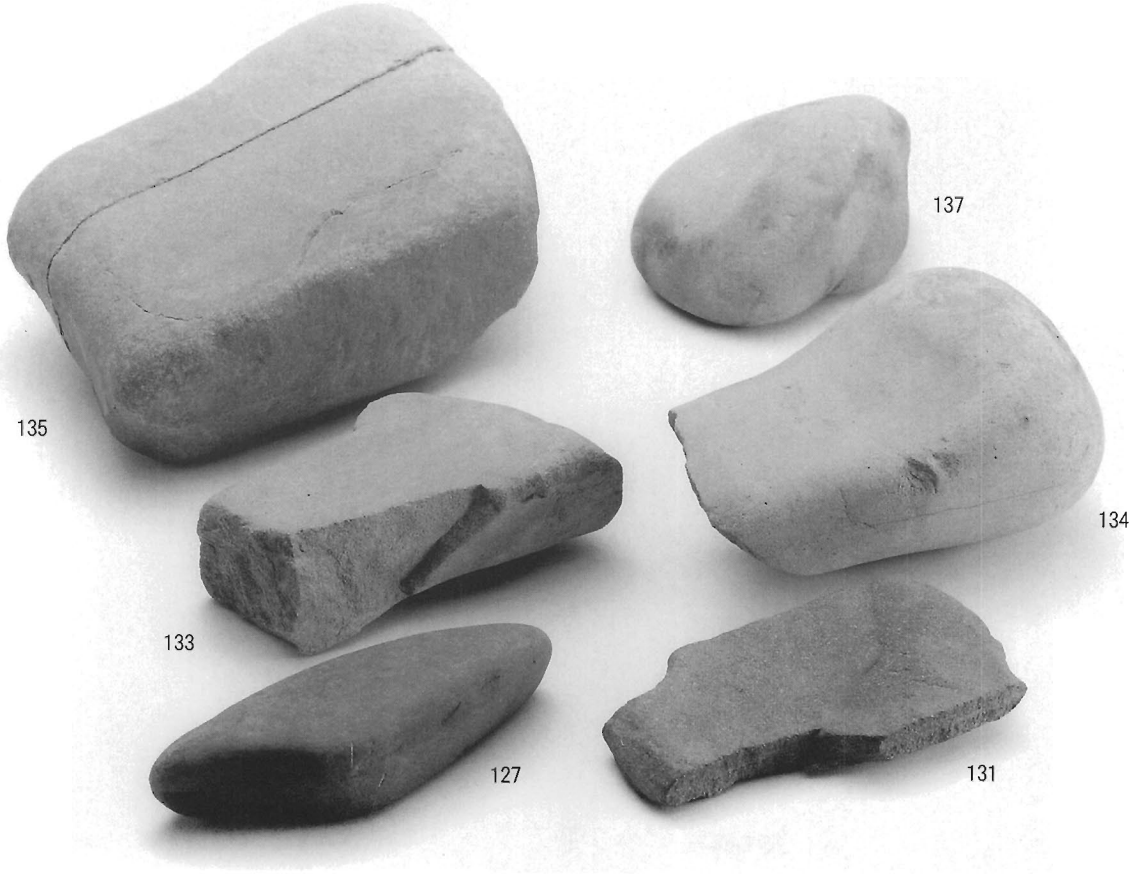
図版 64



109　磨　石

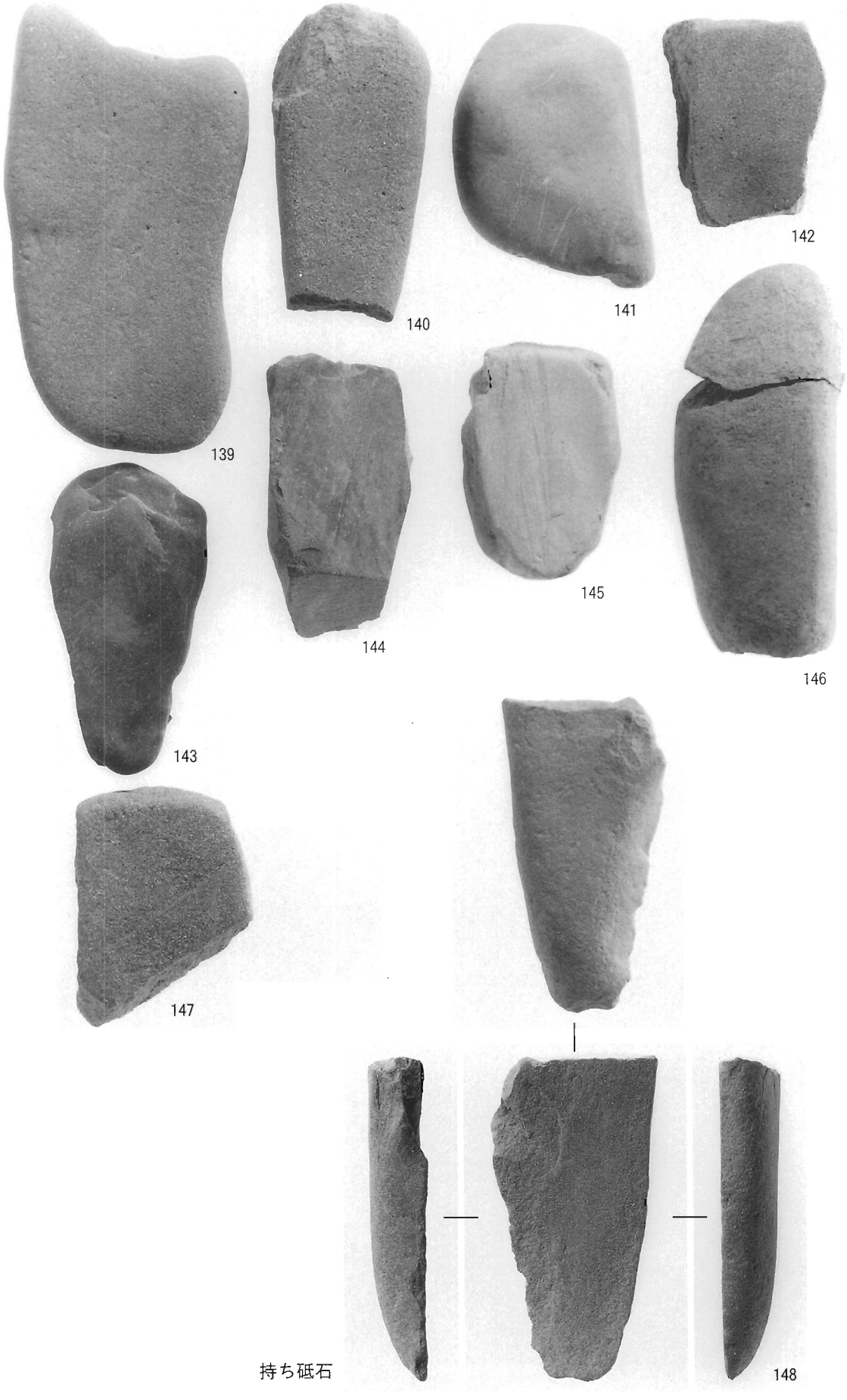


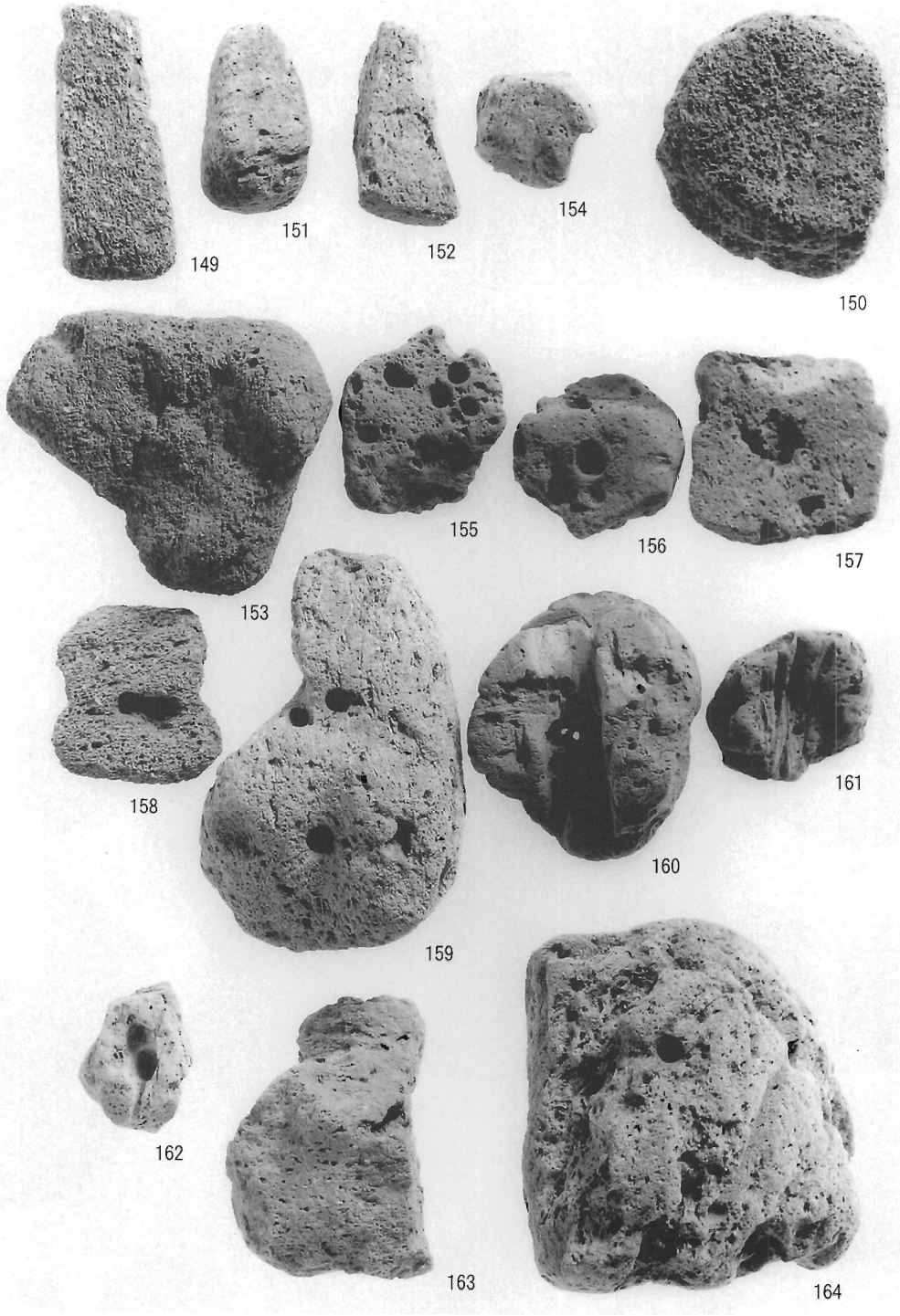
石皿・台石



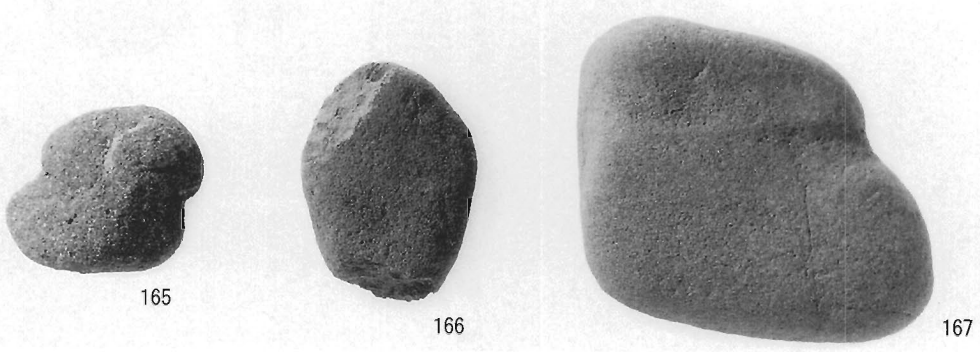
置砥石

図版 66



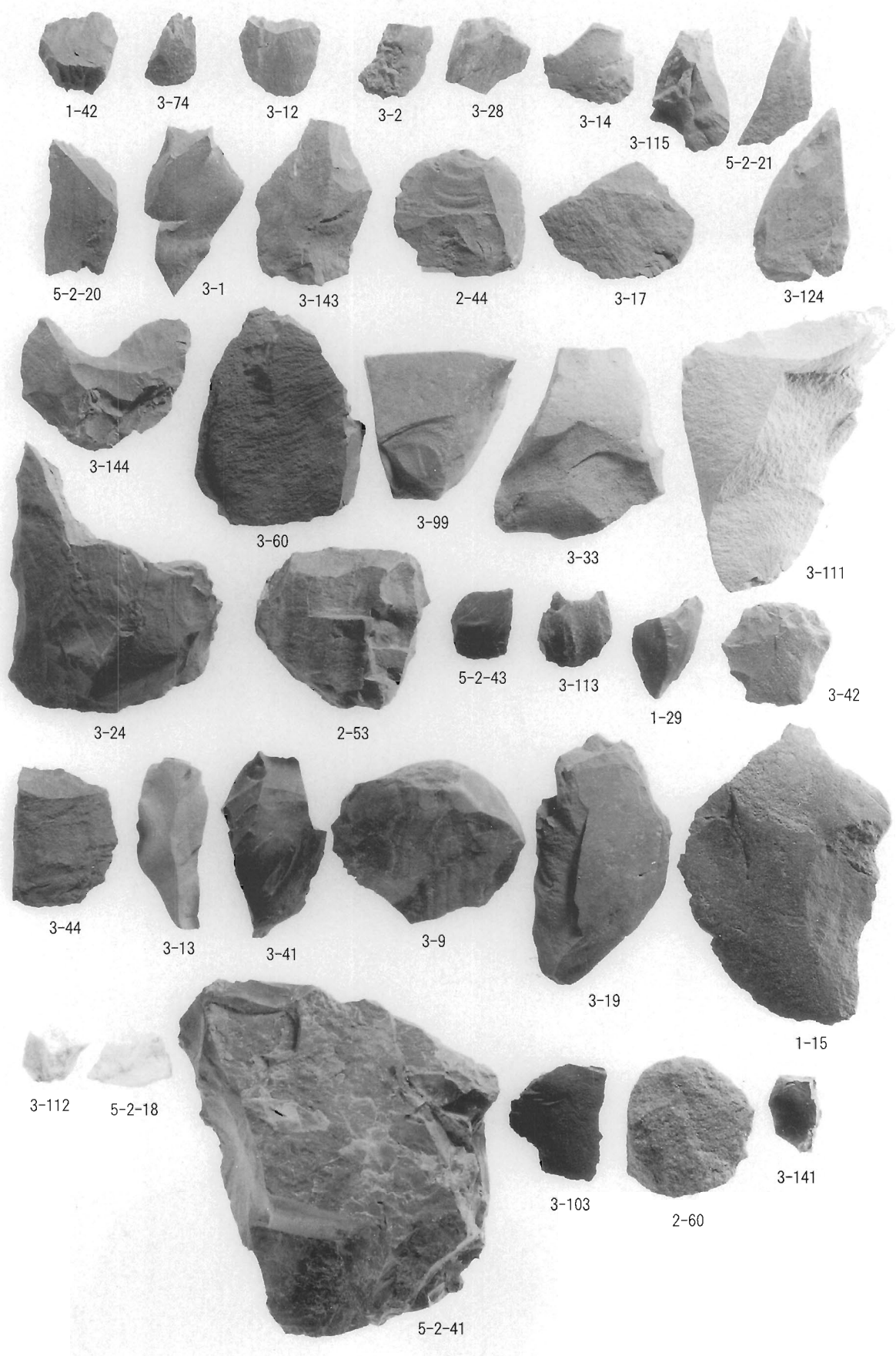

149
151
152
154
150
155
156
157
153
158
159
160
161
162
163
164

軽石製砥石


165
166
167

石　錘

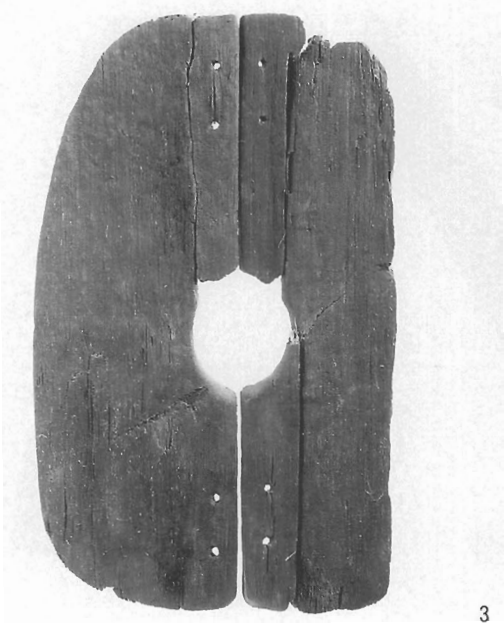
図版 68

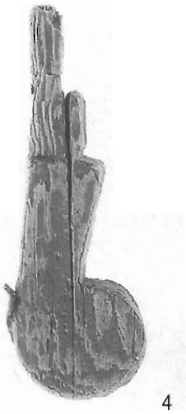

1-42
3-74
3-12
3-2
3-28
3-14
3-115
5-2-21
5-2-20
3-1
3-143
2-44
3-17
3-124
3-144
3-60
3-99
3-33
3-111
3-24
2-53
5-2-43
3-113
1-29
3-42
3-44
3-13
3-41
3-9
3-19
1-15
3-112
5-2-18
5-2-41
3-103
2-60
3-141

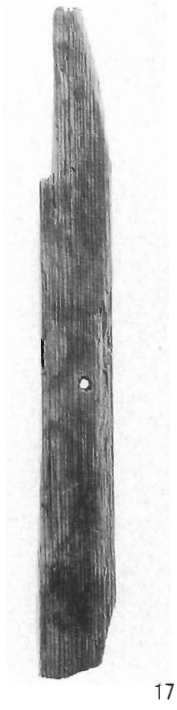
剥片・石核

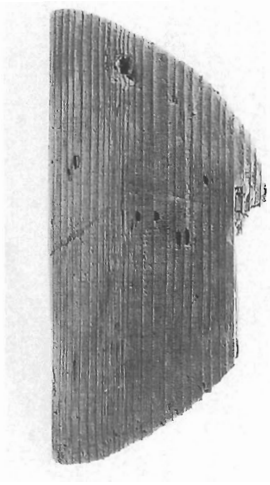
1

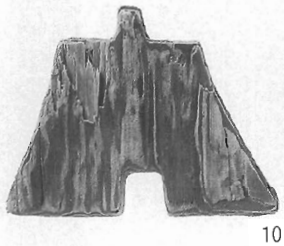
2


3


4

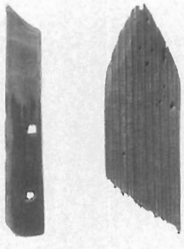

17


5


10

8

16

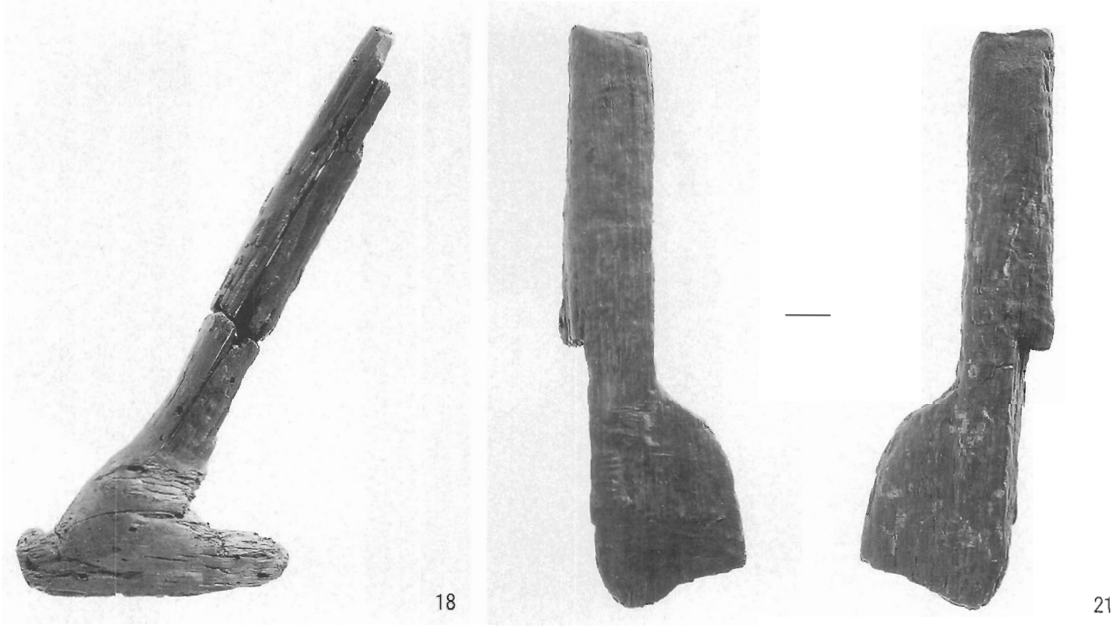

12 15

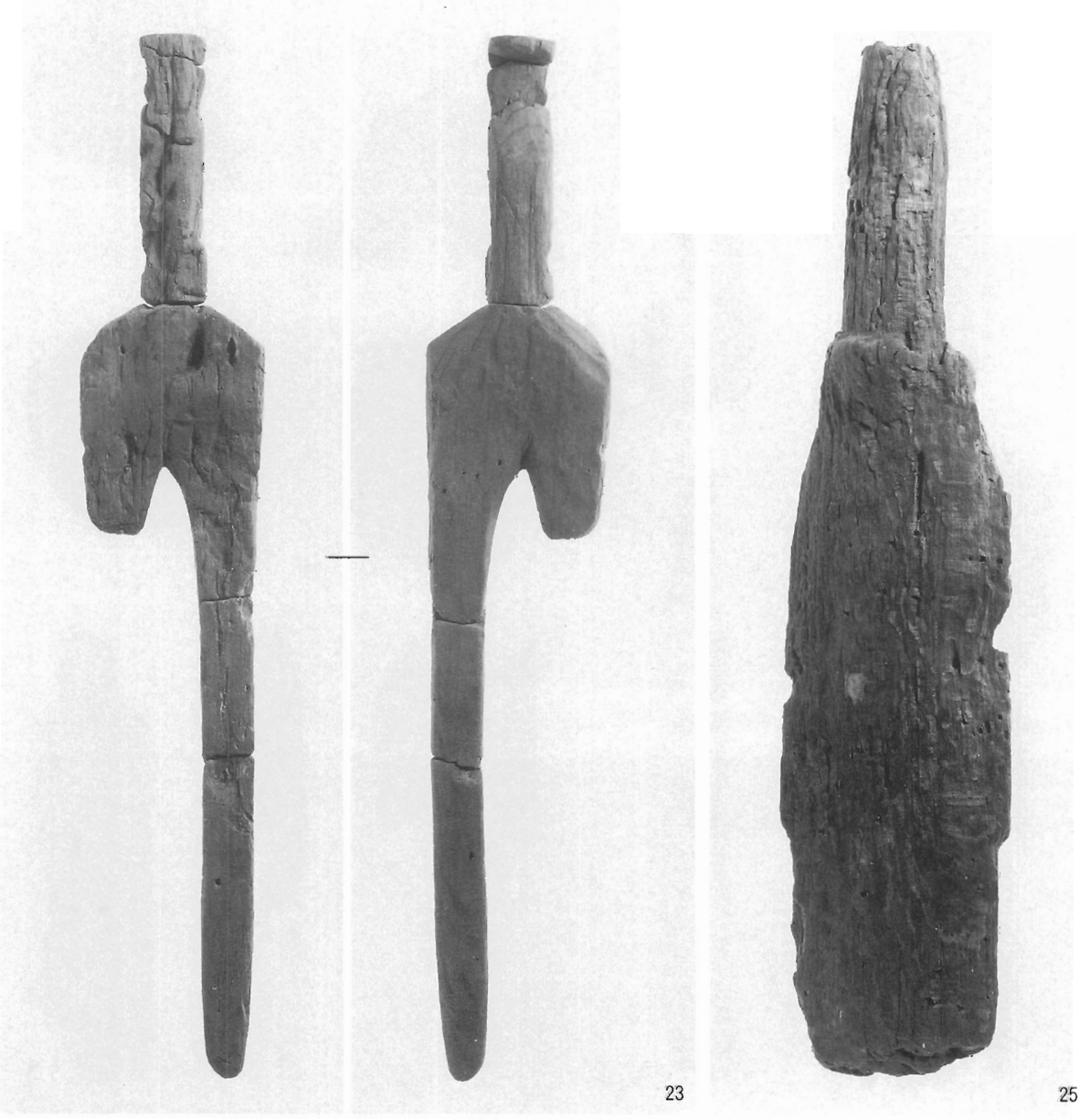
13

14

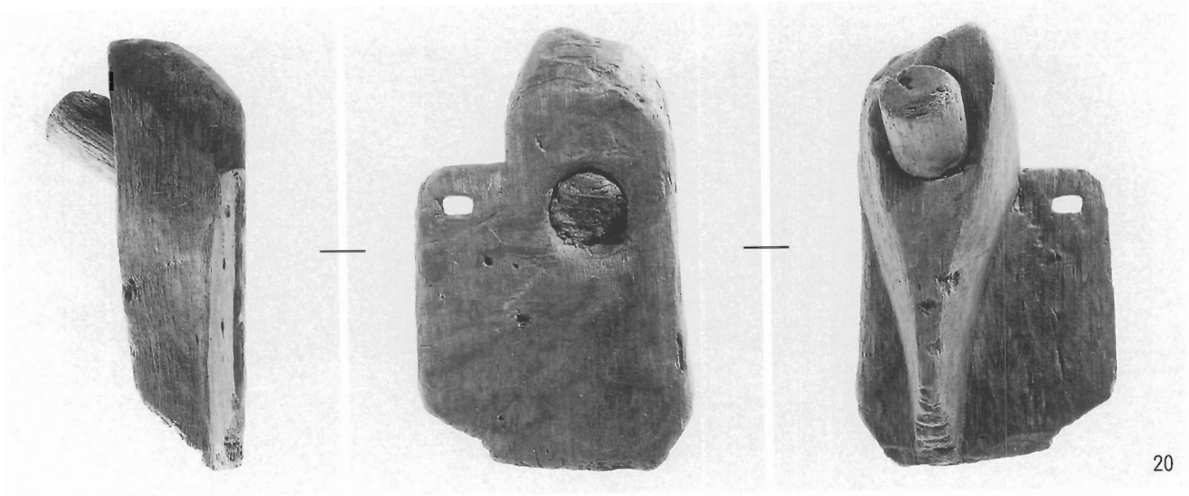
律令期以降木製品

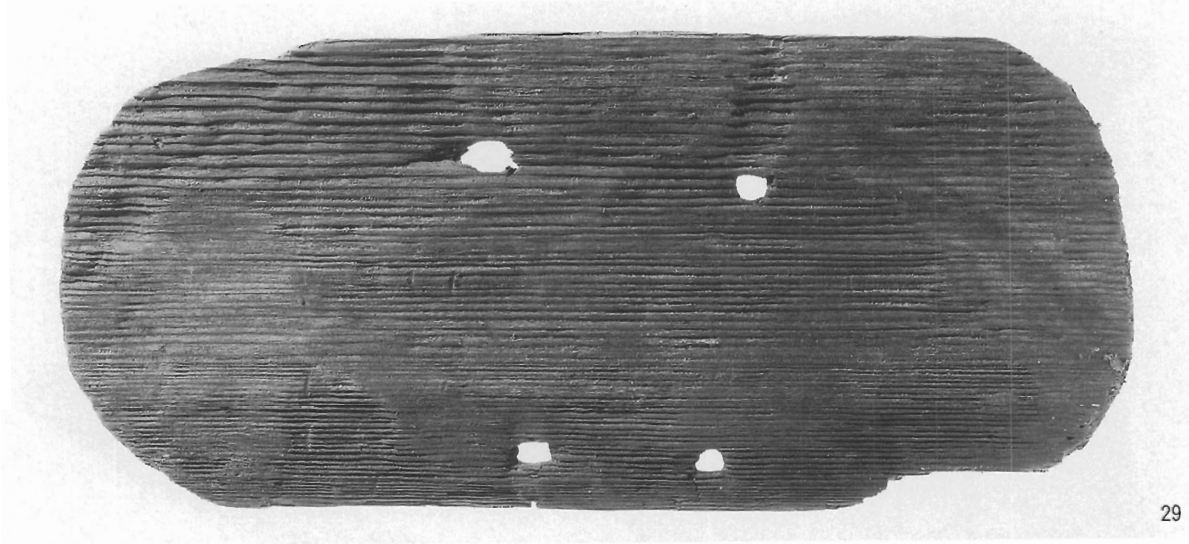
図版 70

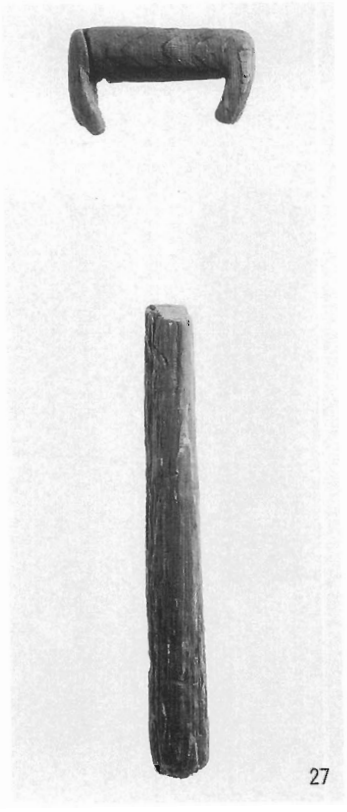


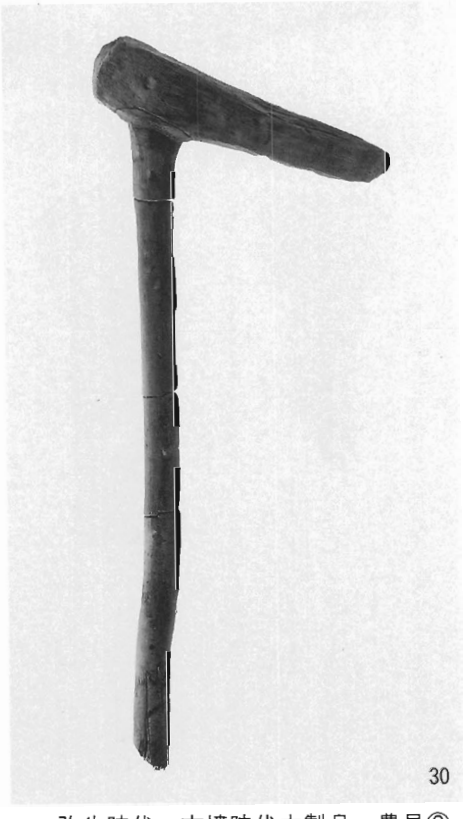


弥生時代～古墳時代木製品　農具①



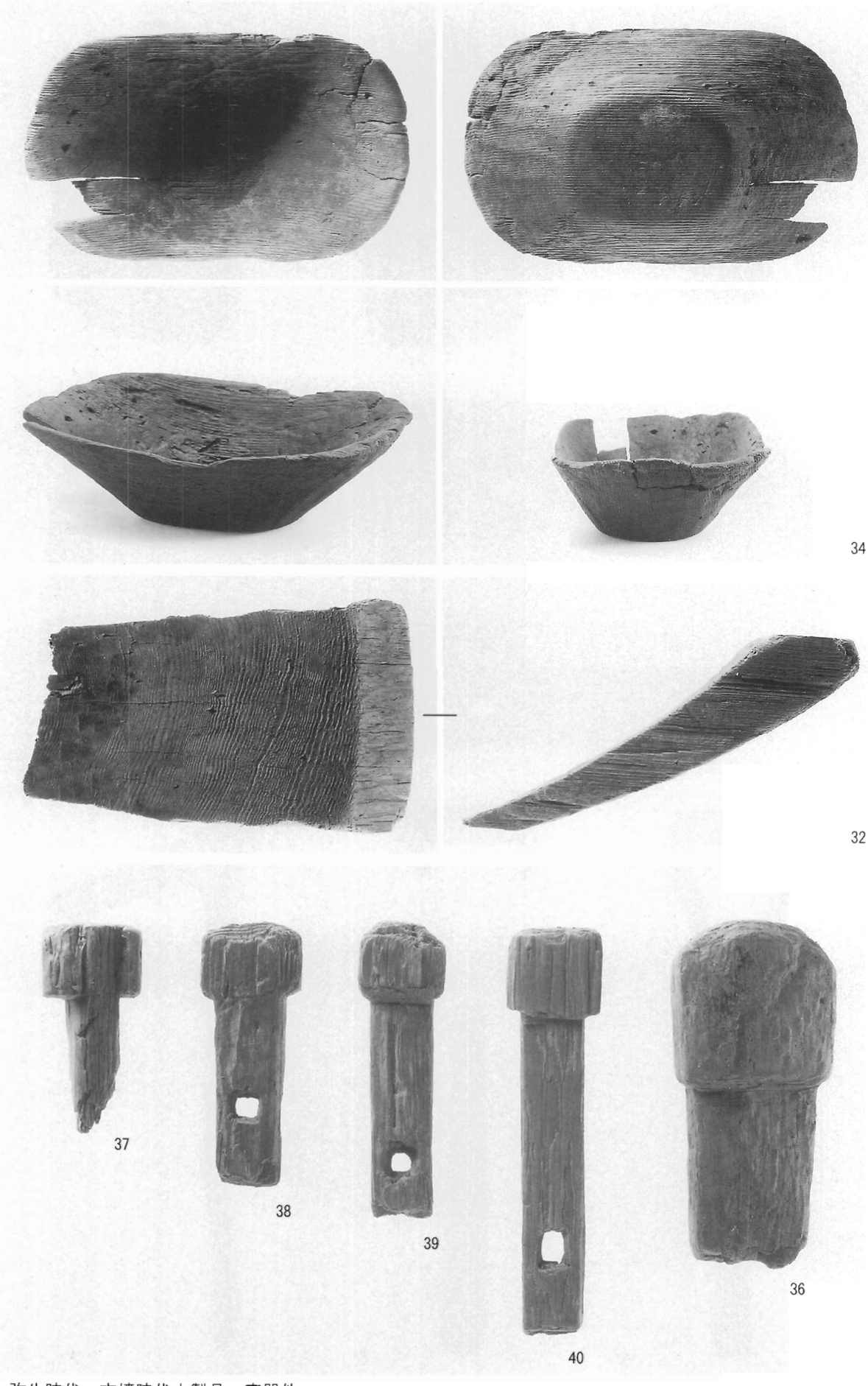




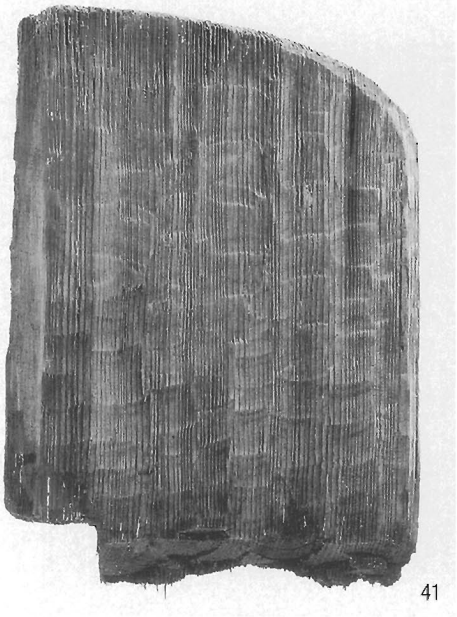


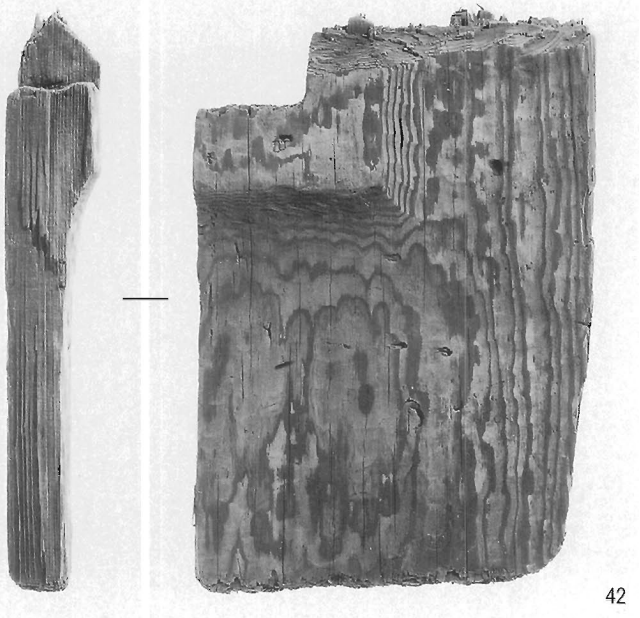
弥生時代～古墳時代木製品　農具②

図版 72

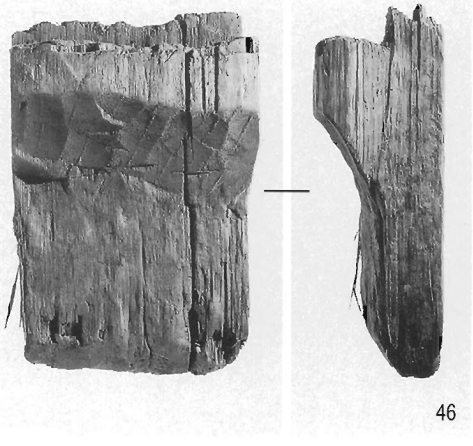


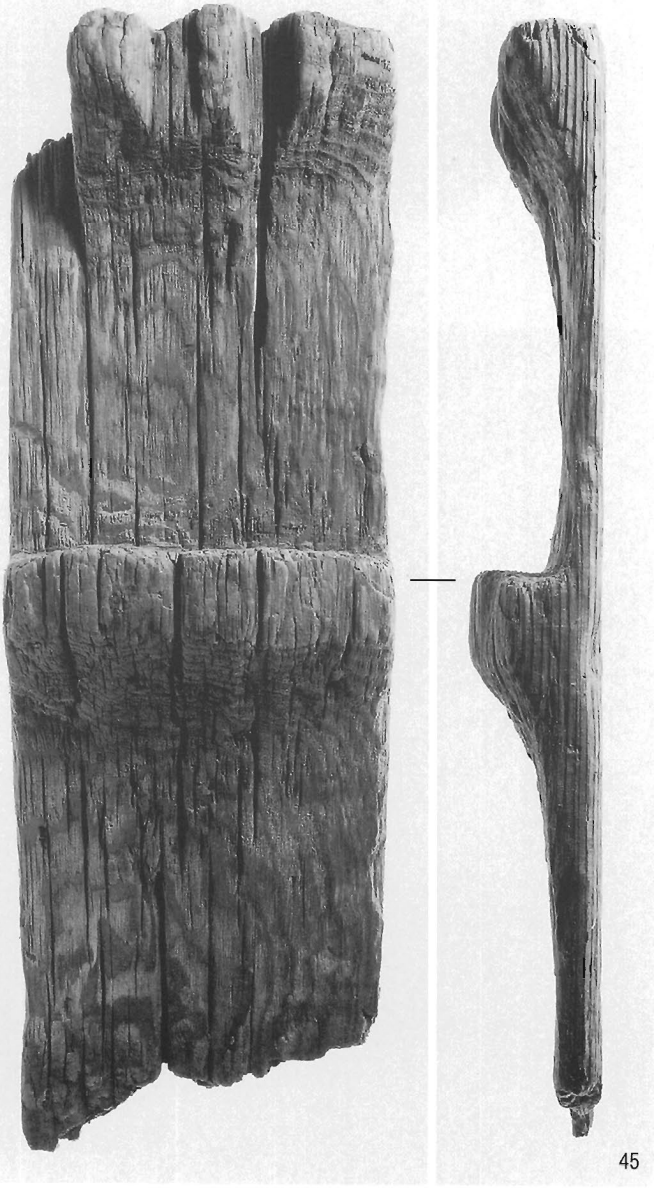
弥生時代～古墳時代木製品　容器他


41


42

43


46


45

弥生時代～古墳時代木製品　ネズミ返し・梯子

図版 74

44

弥生時代～古墳時代木製品　扉①

44

弥生時代～古墳時代木製品　扉②

図版 76

47

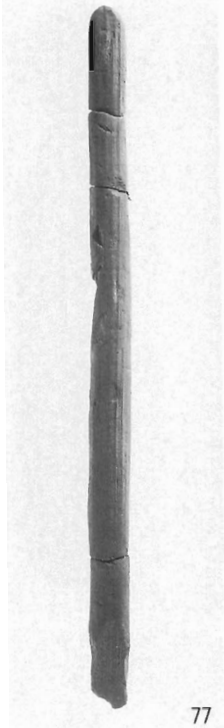
48

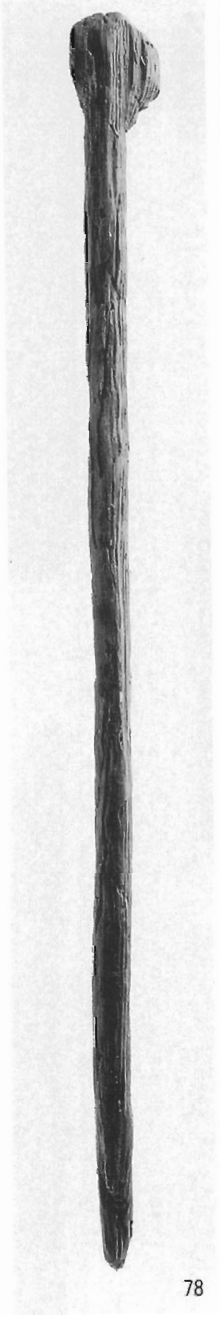
49

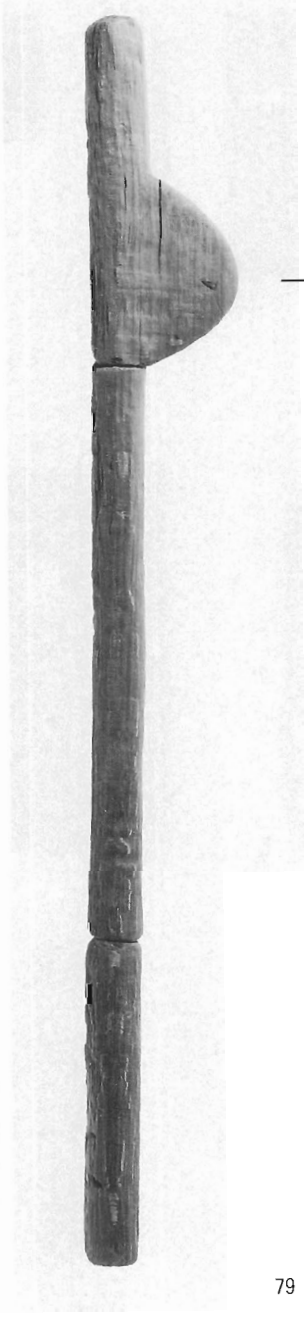
50

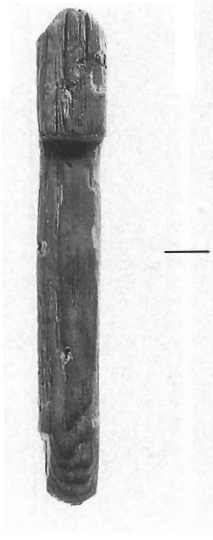
弥生時代～古墳時代木製品　用途不明①

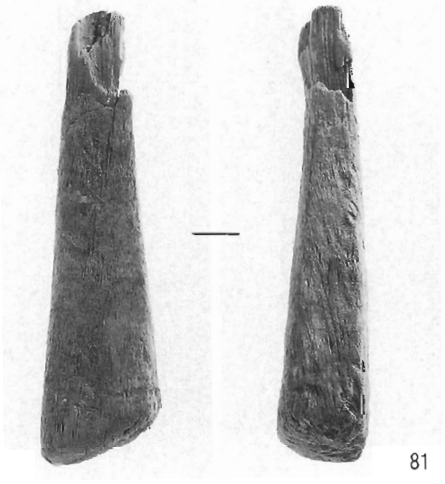
72

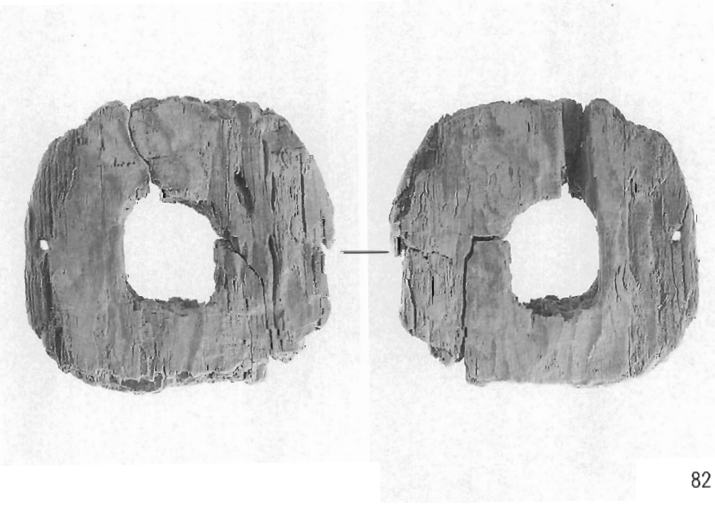

77


78


79

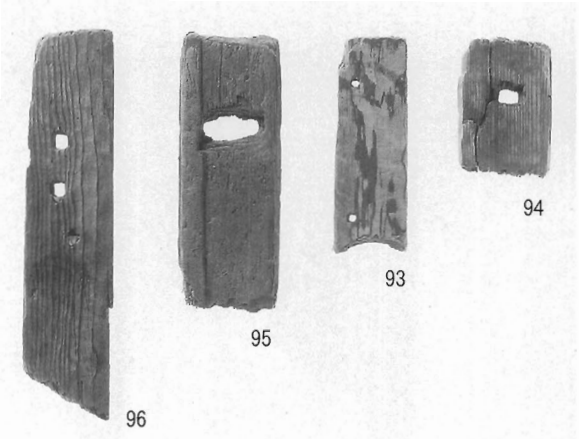

73

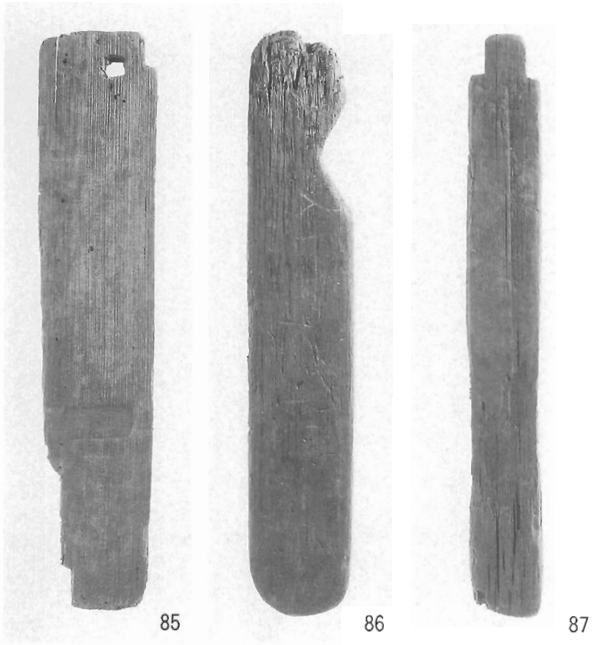

81

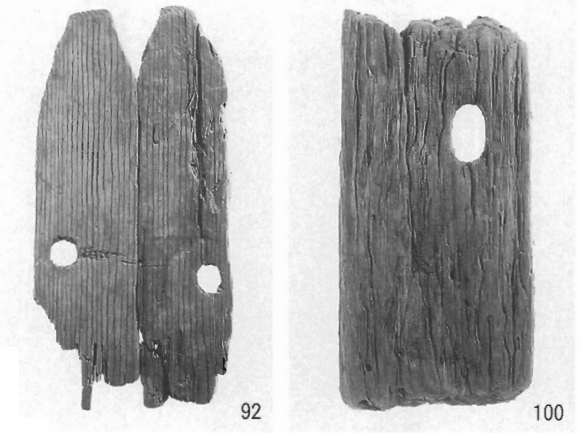

82

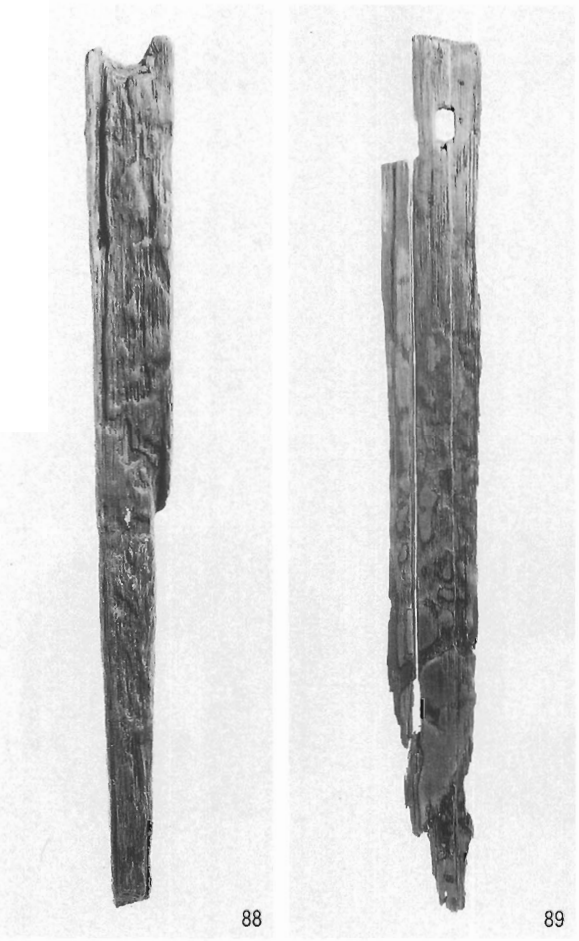
弥生時代～古墳時代木製品　用途不明②

図版 78

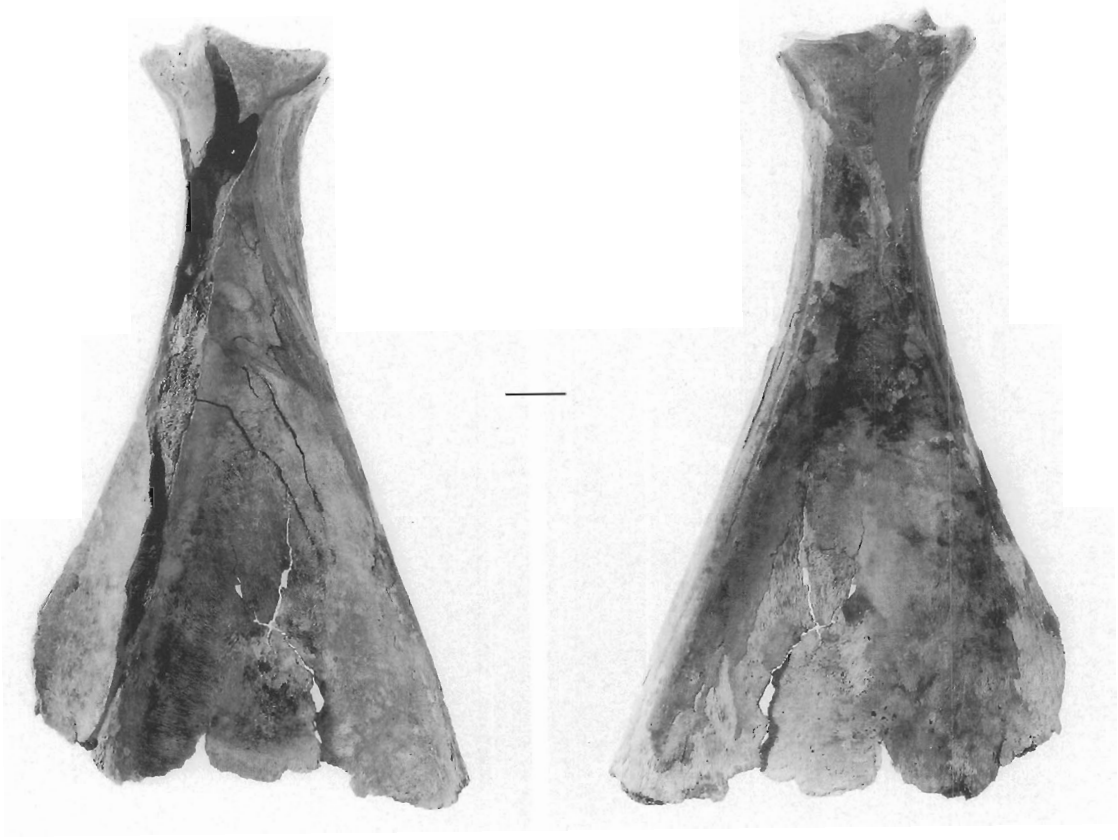








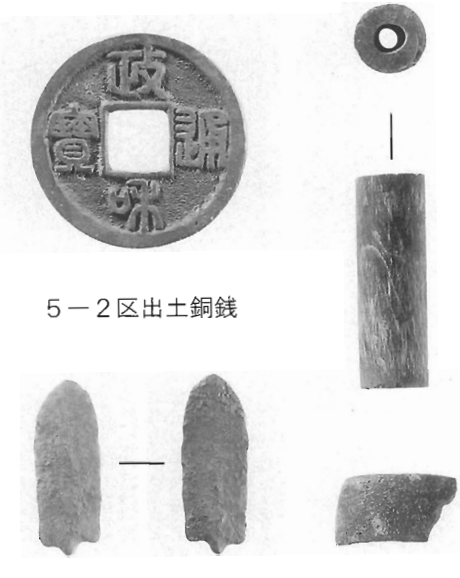
弥生時代～古墳時代木製品　用途不明③他



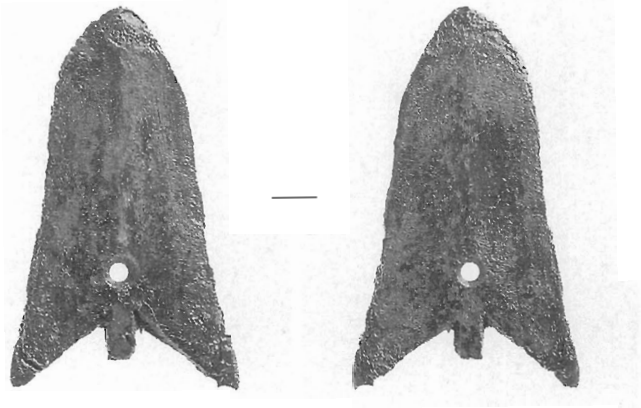
2区出土鹿肩甲骨

2区出土管玉

2区出土犬下顎骨



5－2区出土銅銭



2区出土銅鏃

1区出土銅鏃・小銅環

1区出土銅釧

報告書抄録

ふりがな	せながわいせき
書名	瀬名川遺跡Ⅱ
副書名	（都）北街道線緊急地方道路整備事業（街路Ｂ）に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第155集
編著者名	勝又直人　中川律子　新家和彦
編集機関	財団法人静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市谷田23-20　TEL 054-262-4261(代)
発行年月日	西暦2004年12月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
せながわいせき 瀬名川遺跡	しずおかけんしずおかし 静岡県静岡市 せながわ　ちょうめ 瀬名川１丁目・ みなみせなちょう 南瀬名町	22201		35° 0′ 15″	138° 25′ 28″	20010701 ～ 20031031	3951.8㎡	北街道線 関連事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
瀬名川遺跡	集落	弥生時代中期	溝状遺構10 自然流路１ 柱穴８	弥生土器・打製石斧 打製刃器・磨製石斧 磨製石鏃・敲打石・ 砥石・磨石・鋤柄・ 工具柄・鉢・栓・ 礎板	弥生中期の土器群が出土。
	集落 生産遺跡	弥生時代後期 ～ 古墳時代前期	水田跡 建物跡６ 溝状遺構14 自然流路１	弥生土器・砥石・ 磨石・平鍬・田下駄 田舟・片口・鉢・ 栓・ネズミ返し・扉 梯子・礎板・銅鏃 銅釧・小銅環	
	生産遺跡	奈良時代以降	水田跡 自然流路１	土師器・泥除け具	条里水田か。
	散布地	平安時代以降	自然流路１	灰釉陶器・山茶椀・銅銭	

＊緯度・経度は世界測地系に基づく数値。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第155集

瀬名川遺跡Ⅱ

平成13～16年度(都)北街道線緊急地方道路整備事業
(街路Ｂ)に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日　平成16年12月31日

編集発行　財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
〒422-8002　静岡県静岡市谷田23-20
TEL 054-262-4261㈹

印 刷 所　みどり美術印刷株式会社
〒410-0058　沼津市沼北町２丁目16番19号
TEL 055-921-1839